魔法少女リリカルなのはStrikerS～紅闇の少年と機人の少女～

Kの２乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～紅闇の少年と機人の少女～

【Ｎコード】
Ｎ５０５３Ｊ

【作者名】
Ｋの２乗

【あらすじ】
追われていた少年・草薙烈は崖から落ち光に包まれた。そして、突然空港の火災現場へと飛ばされる。そこで出会った紫の髪の少女。彼女との出会い、しだいに彼は自分の力を奮う意味を見つけ、自分の過去と向き合ってゆく……。魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～紅闇の少年と機人の少女～始まります。
≪※この作品は主人公が『戯言シリーズ（西尾維新　著）』の世界の人間であるという設定です。

ですが戯言よりも圧倒的になのはとしての要素が多いですし、『殺し名』のキャラが特別な力を使う予定です。

戯言ファンの方々は不快感を抱くかもしれません。ご注意下さい》

※この作品についての注意事項（前書き）

１１／２９に追加

※この作品についての注意事項

タイトル通り、この作品を読む際の注意事項となります。
この作品の設定対する指摘を頂いたために追加いたしました。

まず第一に、この作品はリリなの×戯言のクロスとなっていますが、タグやあらすじにもありますように、戯言としての要素がかなり少ないです。
戯言の主人公こと、いーちゃんのような言葉遊びのようなものもありませんし、ＳｔＳのナンバーズ登場辺りまで進まない限りまともに『殺し名』も登場しません。

第二に、この作品に登場するオリキャラ主人公&副主人公は『殺し名』という設定ではありますが、魔法や特殊な力を使いますので『殺し名』って言うよりも普通のオリキャラみたいな感じです。

第三に、この注意事項を投稿した際、まだこの作品は原作でギンガが六課出向してから公開意見陳述会の間のオリジナルストーリーを展開中であり、『殺し名』はまともに登場していません。
ですが、この作品はなのはとしての要素がかなり多い為、登場する『殺し名』全員が戯言には無い魔法やＩＳのような特殊な力を使用する予定です。

以上、３つの要素が含まれています。

このことに関して

「これ普通のオリキャラなんじゃね？」
「戯言クロスである意味無いんじゃね？」

というような意見があり、根本的な設定を変更しようかと最近読者様にアンケートを取ったのですが、アンケートに答えてくれた方々全員が変更無しでよいと答えて下さった為、設定変更は無しとなりました。

と言う訳で、以上の３つの要素が嫌だという方、戯言原作のイメージが崩壊してしまうのが嫌な方々は、ブラウザバックをするなりしてこの作品を読まないことをお勧めします。

この場で注意事項を挙げている為、これらの要素に関する指摘は無しでお願いいたします。
アンケート取った時期ならともかく、現在はもう修正できませんので。

これらの要素があっても問題無いという方々は次話へとお進み下さい。

それでは始まります。

第1話　プロローグ（＋前書き）（前書き）

どうも作者のKの2乗と申します。

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

自分は文章を書くのはあまり上手くありませんが、つい書いてみたくなりました。

間違いがあったり、つまらなかったりするかもしれませんが、読んでくれたら自分はうれしいです。

初投稿の作品ですが、頑張りたいと思います。

第1話　プロローグ（＋前書き）

第1話　プロローグ

～？？？～

空が黒い深夜、森の中を中学生くらいの少年と少女二人が走っていた。

二人は必死に走っている。まるで誰かに追われているかのように。

事実、彼等は追われている。

彼等の後ろから、彼等を追い掛ける足音が聞こえている。

「……蒼（そう）」

少年が少女に話しかける。

「何？烈（れつ）兄さん？」

「俺が奴らを引き付けるから、蒼は逃げて」

「なっ？！そんなこと…」

「二人だったらいずれ追い付かれる！！　それにこんなところで能力を使ったら奴らに感づかれる！！」

「でも！！」

「いいから行って！！」

「……絶対に死ぬなよ」

「…うん。絶対に。」

蒼という少女は一人で走り暗闇のなかに消えてしまった。

同時に烈という名の少年は追っ手に追い付かれる。

「っつ！！もう追い付かれた！！」

追っ手は五人。全員手に死神をイメージしそうなほどの大鎌（デスサイズ）を持っている。

烈の後ろは崖。逃げ場はない。

「終わりだな。」

追っ手の一人が言う。

「……。」

烈はこの状況をどうくぐり抜けるか考えているが、よい方法は浮かばない。

「「「「「死ね。」」」」」

その言葉の後、五人全員が同時に大鎌を烈に向かって振るう。

「っつ?!うわぁぁぁぁぁぁ!!!」

烈は大鎌を避けようとしたが、そのまま足を滑らせ、崖から落ちていった。

「「「「「なっ?!」」」」」

五人は驚いた。崖から落ちた烈を光りが包み、そのまま烈は見えなくなった。

烈は消えてしまった。

第2話　出会い

第2話　出会い

ミッドチルダ北部臨海第八空港

現在この場所では大きな炎が上がっている。

かなり炎であり空港全体が包まれといる。

これほどのことは余程のことがなければ起こらないだろう。

だが、それは起こっている。

収まるのかわからないほどに。

陸上部隊、航空部隊が出動しているが、あまりにも炎が大きくほとんど手が出せていない状況である。

まだ空港内部には取り残されている人もいるようだ。

取り残されている人々を救出するために、黒いバリアジャケットを着たツインテールの女の子が飛んでいる。

時空管理局、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンである。

『航空魔導士、本局０２応答願います。』

オペレーターからフェイトに通信が入る。

「はい。本局０２、テスタロッサ・ハラオウンです。」

『８番ゲート付近に要救助者の反応が出たんですが、局員が進めないんです。お願いできますか？』

「８番ゲート……。バルディッシュ。」

『ルート検索終了。２分以内に到着します。』

「すぐ向かいます。」

フェイトはスピードを上げ、８番ゲートに向かった。

～空港内部通路～

「スバルどこ？スバルーー！！」

紫の髪の少女が叫んでいる。

どうやら誰か探しているようだ。

ガラ

「えっ？」

ガラララララ！！

火災の影響で脆くなったが天井が崩れ、少女に降り懸かる。

「っっ！！！」

少女は目を閉じる。

少女を瓦礫が襲うと思った瞬間――

誰かが少女を抱え、少女は瓦礫に潰されることなく助かった。

少女は目を開けると、誰かの腕に抱えられているのに気付いた。

「えっ?!あれ?」

「君、大丈夫?」

少女を助けた人物。草薙烈がそこにいた。

これが紅い闇を持つ少年と機人の少女の出会い。

第3話　状況把握

第3話　情況把握

空港の通路にて一人の少年が倒れていた。

崖から落ちた少年である。

気絶していたようだが、今気が付いたようである。

～烈Ｓｉｄｅ～

ここは何処だろう？

俺は崖から落ちたはず。

とりあえず落ち着くために、確認&現状を把握しよう。

１・俺は誰？

草薙烈。１３歳。身長１５９？。血液型Ａ。

特徴は赤い髪の毛と、額まで覆うほどの眼帯（左目）、左手の指先から肘の部分まで巻かれた包帯。

2・ここは何処？

不明。何かの施設の中ではないかと思う。

3・何故そこに？

不明。俺はあいつらに追われて、蒼を逃がしたら追い付かれて、俺が崖から落ちたと思ったら光に包まれて現在に至る。何が何だかわからない。

……なんでさ。

いやべつに某正義の味方に成りたいわけじゃないけど。

とりあえず情況把握終了。

このままじっとしておくのもなんなので、動こう。

～１０分後～

「……災害現場なのかここ？」

目の前に広がる炎。視界に入るもの全てが燃えている。

「しっかしどうする？《機能（ツール）》を使って脱出するか？」

と考えていると……

「……バル！……ス…ル！」

「……女の子の声？取り残されたか？」

烈は声のする方へ、走っていった。

少し行くと、自分と同じくらいの歳の女の子がいた。

だが、彼女の上から瓦礫が崩れ降り懸かかろうとしている。

「っつ！！危ない！！」

烈は一瞬にして少女の所まで駆け寄り、目を潰っている少女を抱え、瓦礫から少女を助けた。

ガララ、と少女がいた場所に瓦礫の山ができる。

少女突然のことに困惑しているようだ。

「えっ?!あれ?」

「君、大丈夫?」

第４話　《機能》の力

第４話　機能の力

「えっと…あの、ありがとうございます。」

「気にしなくていいよ。ところで君は何をしているの？此処は危険だからすぐに逃げないと。」

「妹を……」

「えっ？」

「妹を探しているんです！まだ１１歳で途中で離れてしまったんです！」

「妹か……。」

烈は自分の妹・蒼のことを考えていた。

ちゃんと逃げきれただろうか、アリスと合流できただろうか、無事に生きているだろうか。

考えてもわからない。

「えっと…あの大丈夫ですか？」

考えていたら少女を不安にさせていたようだ。

「え？！ああゴメン。んで妹を探しているんだったね。一人じゃ危ないし、手伝うよ。」

「本当ですか？！ありがとうございます」

「いいよ、気にしなくて。それで妹さんの名前は？」

「スバル。スバル・ナカジマです。私はギンガ。ギンガ・ナカジマです」

「（中島？日本人？）俺の名は、姓は草薙、名は烈。よろしく中島さん」

「あ・ギンガでいいです。同じくらいの歳ですし」

「わかった。じゃ、俺のことも名前でいいよ」

「わかりました烈さん。じゃあ行きましょう」

二人はスバルを探し始めた。

～２０分後～

「スバル？！」

「スバルさーん！！」

現在二人は非常階段を登っている。

が、爆発が起きる。

ギ「きゃあ！！」

「くっ！」

「スバル返事して。お姉ちゃんが、すぐに、助けに、行くから。」

バゴーン。と再び爆発。

しかし、その爆発して開いた穴からフェイトが出てきた。

「そこの子達。じっとしてて。今助けに行くから。」

その言葉に烈とギンガは振り返る。

が、その時。

ビシッガラララララ

「なっ？！」

「きゃあ？！」

通路にひび割れが入り、通路が崩れた。

二人は重力に従い落下してゆく。

「きゃあーーーー！！」

「（まずい。二人同時には助けられない。）」

と、その時。

「そこの人ーー！！」

「え？」

烈がギンガの腕を掴んでいる。

「この子を！！」

と烈が自身の体を回転させ、ギンガをフェイトに向かって投げた。

「きゃーーー？！」

「くっ……」

『ソニックムーブ』

フェイトはソニックムーブを使いギンガをキャッチする。

「あっ……。」

フェイトはギンガをキャッチしたこと直後、烈が落ちているままのことに気付く。

「君！！」

「烈さん！！」

二人は叫ぶが、階段の最下層からは瓦礫による土煙りが上がっている。

「うそ……。烈さーん！！」

「そんな……。」

二人が思った瞬間ーーー

瓦礫の中心から赤い光が見えた。

「「えっ？なに…？」」

赤い光はだんだん近付いてくる。

二人の目の前までその赤い光は現れた。

「ふう。死ぬかと思った。大夫だった？ギンガさん？」

そこには炎の靴を履き、炎の翼を羽ばたかせる烈がそこにいた。

第４話　《機能》の力（後書き）

とりあえず第４話まで投稿しました。

更新は続きが完成しだい投稿していくつもりです。

更新は、テスト期間の時は不定期になるかもしれませんが、今のところはだいたい構成を練っているので、文章が長かったり短かかったりするかもしれませんがちゃんと更新していくつもりです。

第5話　《炎》

第5話　《炎》

「烈さん！！」

「炎熱の魔力変換資質？！」

「魔力変換資質？なんですかそれ？」

「えっと……魔力変換資質っていうのは、魔法によるプロセスを踏まず、魔力を別のエネルギーに変換する事が出来る能力のことです」

「……魔法？魔力？」

「君、まさか次元漂流者？」

「次元漂流者？すいません、さっきからわけがわからないんですけど」

「……やっぱり」

「？？？」

烈の頭には？マークが浮かんでいる。

ドォーン！！

再び爆発が起きる。

「ここは危険ね。詳しいことは後で聞かせてもらいます。今は脱出を」

「……わかりました」

そして、フェイトは飛び上がり、烈は炎の靴から炎を噴き出し、炎の翼を羽ばたかせ飛び上がった。

二人は非常階段から出て通路を飛行している。

するとフェイトがギンガに尋ねた。

「妹さん名前は？どっちに行ったかとかわかる？」

「あの、エントランスホールの方ではぐれてしまって、名前はスバル・ナカジマ。１１歳です」

と突然通信が入る。

『こちら通信本部。スバル・ナカジマ、１１歳の女の子、既に救出されてます』

オペレーターの通信にギンガが驚く。

『救出者は高町教導官です。怪我もありません』

なのはがスバルを救出した映像が出る。

「スバル、よかった…」
ギンガに安堵の表情がやどる。

「よかったですね、ギンガさん」

「はい！！」

「了解」

フェイトが通信を返す。

「こっちは今お姉さんを保護。お名前は？」

フェイトが再びギンガに尋ねる。

「あっ……ギンガ、ギンガ・ナカジマ。陸士候補生１３歳です」

「候補生か…未来の同僚だ」

「きょ、恐縮です」

「それから、次元漂流者と思われる少年を発見。現在同行してもらっています。えっと……名前は……？」

「姓は草薙、名は烈です」

『了解しました。このまま同行をお願いします』

「わかりました」

「よし。このまま……」

ーー突然ーー

ドゴーン！！ズドーン！！

「「「えっ？！」」」

左右の通路の壁から爆発が起こり、辺り一帯が炎に包まれる。

そして通路の前方と後方の天井が崩れ、完全に塞がれてしまった。

「っつ！！しまった……」

「閉じ込められた……？」

「……」

「なにか脱出する方法は……」

「……脱出行ができればいいですか？」

「「えっ？」」

烈は両手を自身の心臓の前に持ってゆき、右手を上、左手を下にして球を作るようにする。

「『紅鏡の核　（ソレイユ・コア）』」

烈の声に応じて、手と手の間に小さな炎の球ができる。

「なに…？これ…？」

烈は両手を上に上げる。

「集え、炎よ！！」

すると、烈の声に応えるかのように周囲の炎が両手に集まってゆく。

球が炎を吸収しているようだ。

「……すごい」

気が付くと周囲一帯の炎全てを炎の球は吸収しており、ソフトボールくらいの大きさになっていた。

「離れて下さい！！」

フェイトはギンガを抱えたまま烈から距離を取る。

「灼熱剛球！！フレア・キャノン！！」

烈は炎の球を天井に向かって投げ付けた。

炎の球は天井に直撃した。

だが、爆発せず、そのまま天井を貫いた。

ドォーン！！

貫いた時の激しい音がする。

砕けた天井の破片が降ってくるが、烈は全く気にしない。

ドォーン！！ドォーーン！！ドォーーーン！！

炎の球は二枚、三枚と天井を破壊し続け、その結果空が見えた。

フェイトとギンガは驚いている。

「……なんて無茶苦茶な」

「空まで届いた……」

「…あっ！」

バァーン！！

空に出て、炎の球は爆発を起こした。

「よし。脱出しましょう」

「えっ？ああ、うん」

そして二人は烈が開けた穴からの脱出に成功した。

～映画公開＆ＰＶ５０００アクセス記念～（前書き）

早くもＰＶ５０００ヒットです。

本当にありがとうございます。

～映画公開＆ＰＶ５０００アクセス記念～

・魔法少女リリカルなのはＡ's　ＰＯＲＴＡＢＬＥ－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ発売

・なのはＴｈｅ　Ｍｏｖｉｅ　１ｓｔ公開

・ウ〝ァイスシュバルツエキストラパック・なのはＴｈｅ　Ｍｏｖｉｅ　１ｓｔ発売

なのは祭だーー（笑）

というわけで映画公開＆発売です!!おめでとうございます!!

烈／蒼「「わーーぱちぱちぱちぱち。」」

さらに、この作品のＰＶヒット５０００回突破です!!

烈「早いなおい!!」

蒼「ま・なのはってことで読んでくれている人がいるんだろ。」

手厳しい!!

烈「それはともかく、なんで蒼がいるんだ?」

えー……それはですね。まだ蒼はプロローグでしか出てきてませんよね。

蒼「そうだ。出番寄越せよ作者。」

現在の予定だと、空港の事件後の４年を書いてからＳｔｒｉｋｅｒＳ本編に入るのですが……。

とりあえずＳｔｒｉｋｅｒＳ本編が始まらない限り蒼＆アリスの出番はないんです。

蒼「なっ！！そりゃないよ！！出番くれよ！！」

ア「まだプロローグで出たんだからいいじゃないですか。」

烈／蒼「「えっ？アリス？」」

ア「私なんてまだ名前しか出てきてないですし、作者なんて私の設定まだ悩んでるんですよ。」

烈「マジか作者？」

ちょっ！！烈、炎向けないで！！熱い！！マジ熱いから！！

ア「しかもそのせいでアオちゃんの能力も決まってないんですから。」

蒼「『大辞典』。」

ちょっ！！それまだ検討中の能力だろ？！

蒼「こう使うんだよ！！」

ゴン！！ごふぁ！！バタ。

烈「辞典の角は痛いよな。」

ア「作者死にましたか？」

死んでたまるか！！

蒼「ちっ。」

舌打ちしないで！！

烈「惨めだな。」

ア「それに私はそんな重要な役ではないんです。元々私は作者がはやてをヒロインにした話を書こうとして考えたものですから。アオちゃんについては検討中らしいですが。」

烈「作者本当に設定とかはっきりしつないな。」

すいません。いきあたりばったりです。能力も矛盾があったりして、修正したらキャラも修正しなきゃなんねーってなったりしているんです。善処します。

蒼「もっとしっかりやれ作者。そして早く出番を！！」

烈「他のオリキャラが二人よりも先に出るけどな。」

蒼「作者ーー！！」

やられるか！！俺は逃げる！！

蒼「待てこのやろー！！」

烈「行っちまったな。」

ア「行っちゃいましたねぇ。」

烈「じゃあ俺らもこの辺で。」

ア「さよーならー。」

～映画公開＆ＰＶ５０００アクセス記念～（後書き）

とりあえずですが、あと２話分書いたら烈の設定を載せるつもりです。

蒼＆アリスは本当にまだ検討中です。

こうしたらああしなきゃならない、ってかんじで中々決まらないんです。

まあ登場は先なので、その時までにははっきりさせます。

余談ですが、作者はなのはエキストラを買いました。

ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳは明日取りに行くつもりです。（予約引取最終日だから。）

第6話　脱出後

第6話　脱出後

「来よ、凍結の息吹。『アーテムデスアイセス』！！」

はやてが凍結魔法を使い、空港の一部を凍結させ、炎を凍らせる。

「よし。次は……」

――瞬間――

バァーン！！

「なんや？！」

『8番ゲートのあるブロックの上空で爆発が起こりました』

はやての疑問にオペレーターが答える。

確かに、空で爆発が起きている。

爆発の範囲は半径約50メートル。

爆発による周囲への被害はないみたいだ。

「上空で？……って８番ゲートの方向にはフェイトちゃんが！！」

はやてはフェイトの安否を心配する。

直後、爆風の中から金の閃光と深紅の閃光が出て来た。

「はやてーー！！」

「フェイトちゃん！！無事やったんやな！！」

「うん。要救助者も助けたよ」

フェイトは抱えているギンガをはやてに見せる。

「さよか。なら早く安全なところへ……ってうお？！あんた誰や？！」

はやてが烈の存在に気付く。

「中にいた次元漂流者でね、この娘と一緒にいたの」

「ふ～ん…ってフェイトちゃん。この人見てなんとも思わへんのか

？」

「？なんで？」

「いや普通眼帯した人おったら驚くやろ？」

「はやて……いくらなんでもそれは失礼だよ」

「いえ、普通の人は大概驚くんですけど……」

「そうなんですか？」

「うん」

「まあええ。とにかくフェイトちゃんは二人を安全な場所へ連れてってくれるか？」

「いいえ。俺は手伝いますよ」

「はいぃ？！」

「見たところ人手不足みたいじゃないですか。それに俺、炎の扱いは得意ですよ」

確かに、人手が少ない。
現在空を飛んでいる魔導士の数ははやてを含めて二十～三十人である。
しかし、凍結魔法で消火しているのははやてだけである。
それ以外の魔導士は、地上の部隊に火災の情況を通達しているだけ

である。

「（ん～どないしよ。確かに人手不足やけど、誰かもわからん人に手伝わせるのは……）」

「大丈夫だよはやて。私達は彼のお陰で脱出できたんだから」

「フェイトちゃんがそう言うなら……。じゃ、よろしくお願いします」

「わかりました」

「じゃあはやて。私はこの娘を」

「うん。気いつけてな」

「あ・あの、烈さんも気をつけて」

「ありがとうギンガさん」

「それじゃ……」

「さて、頼むで……え～と……」

「烈です。草薙烈」

フェイトは地上の部隊が集まっている所に向かって飛んでいった。

「わかった。よろしく頼むで草薙君」

「はい。『紅鏡の核』！！」

「『アーテムデスアイセス』！！」

二人は消火作業を始めた。

2時間後、火災は全て鎮火され、部隊は撤収した。

烈は管理局に保護されたが、時間も遅いということで事情聴取は明日になった。

第6話　脱出後（後書き）

この話の次の後にキャラ紹介を入れるつもりでしたが、7話が予想外に長く、二つに分けました。

そのためキャラ紹介は遅れることになります。

ほんと先のこと考えてなくてすいません。

～100000アクセス記念雑談～（前書き）

予想外にも早いです。

まだ4日しかたってないに、こんなに読んでくれてありがとうございます。

～１００００アクセス記念雑談～

ひゃほーー！！ＰＶ１００００ヒット突破だぜ！！

蒼「轟け雷よ、ライトニングパニッシャー！！」

なっ？ってギャーッス！！

ア「凍てつく氷の刃よ、彼の者を撃ち抜け、アイシクルスナイプ！！」

イタッ！！イダダダ刺さってる！！刺さってる！！

蒼／ア「「黙れ（黙りなさい）！！こんなことしてる暇があったら、続きを書け（書きなさい）！！」」

恐ぇ～よ烈。Ｈｅｌｐ　ｍｅ.

烈「自業自得って知ってる？」

チョッ！！マジ助けて！！

烈「はぁ～。二人ともその辺で。」

蒼／ア「「チッ。」」

烈「アリス。キャラ変わってるよ。」

ア「失礼しました。」

蒼「んで、本編はやっと空港事件終了か。」

はい。やっと終わりました。６話もかかるとは思ってもいませんでした。

烈「全く。このままじゃ二人の出番もいつになることやら。」

そーですね。

蒼「そーですね、じゃない！！」

ア「まだ最初なんですよね？Ｓｔｒｉｋｅｒｓになるのは、あと何話くらい先なんですか？」

え～っと……正直わかりません。

蒼「……もう一辺殺るか？」

マジで勘弁してください。

烈「じゃあ今のとこどうなってんの？」

はい。あとがきでも書いたように、７～８話で事情聴取。その後１～２話くらい日常物。そして訓練校編数話。って予定です。

ア「数話って、まだ細かい話まで決まってないんですね。」

そうです。ただし、その中でも書くのが決まっている話が二つあります。

烈「どんな話？」

ネタバレになるので、何をするかといいますと、一つは模擬戦。もう一つはあることが起こります。

蒼「あることってのは兄さんに関わることか。」

当然です。

ア「んで、内容は秘密と。」

はい。ですが、その話を書くにあたって、この小説を「残酷描写有」にしなければならないかもしれません。

烈「……俺どうなるの。」

大丈夫。死にやしませんから。

蒼「それに元々ＳｔｒｉｋｅｒＳの模擬戦でも、残酷描写になるかもしれないんだろ。」

ア「スターズの模擬戦のところですか。」

はい。というわけで、そこら辺については話を投稿した時に決めます。

烈「また後回しか。」

それを言わないで。

蒼「それじゃ、この雑談もこの辺で。」

ア「そうですね。」

烈「じゃあ、また次の話で。」

コメント・感想・誤字脱字がありましたら、ぜひ送ってください。

烈「それではみなさん。」

蒼／ア「「また次回。」」

第7話　事情聴取　前編　並行世界？（前書き）

先に言っておきます。

烈「ん？なんか言いたいことがあるの？」

作者は正直、説明が苦手です。

烈「……今回説明の話だよね。」

はい。わかりにくい点もあるかもしれません。

烈「もしわからなかったらコメント等で質問してください。」

説明下手ですいません。

第7話　事情聴取　前編　並行世界？

第7話　事情聴取　前編

～聖王病院～

「検査って面倒ですよね。怪我してないってわかってるのに」

「まぁしかたないですよ。安全を考えているんですから」

「めどうくさいよ～ギン姉」

「は～いめんどうですけど、ちゃんと検査は受けてくださいね～。あと草薙さんは魔力測定もありますから」

「マジですか？」

「マジです～。でも大丈夫です。リンカーコアの有無の確認程度ですから」

「そうですか」

現在ここにいるのは、烈、ギンガ、ギンガの妹のスバル、そしてリインフォース・ツウ〝ァイである。

災害において怪我がなかったかどうかの詳しい検査をしているのである。

ちなみにリインがいるのは、はやてに検査が終わったら、烈達の事情聴取をするので連れて来てほしいと言われたからしい。

「じゃあ、さっさと終わらせましょう」

「そうですね」

「ああ！ギン姉待ってよ！」

「病院で騒いではいけません～」

～2時間後～

時空管理局のとある部屋

「お？来たみたいやな」

「はやてちゃん～。草薙さんとナカジマ姉妹を連れて来たです～」

リインが烈&ナカジマ姉妹と一緒にドアを開けて入って来る。

「ご苦労様。リイン」

「おう、来たな」

「「お父さん！！」」

「は？お父さん？」

そこには４０代くらいの男性がいた。白髪がそれなりにあるが、まだそんなに歳を取っていない雰囲気である。

「俺はゲンヤ・ナカジマ。階級は三等陸佐だ。ギンガとスバルの父親でもある」

「草薙烈です」

「まぁ三人とも突っ立ってないで座れ」

「「「はい」」」

三人ははやてとゲンヤの前の三人掛けの椅子に座る。ちなみに左から烈・ギンガ・スバルの順だ。

「で、さっそく事情聴取ですか？」

「ちょっと待ってえな。あと二人来るから。」

烈の問いにはやてが応えたところで、部屋に2人の少女が入ってきた。

「はやてちゃん入るよ」

「遅くなってごめんね、はやて」

高町なのはとフェイトが部屋に入ってきた。

二人の登場にギンガ・スバルは驚く。

「……ここが軍なのかどうかは知りませんけど、仕事中でそんな話し方はどうだかと思うのですが」

「坊主に同感だな」

「にゃはは……ごめんなさい」

「す、すいません」

「まあまあ、勘弁したってや。それじゃ全員揃ったことやし、始めよか」

てなわけで、事情聴取が始まった。

最初はスバル。

ギンガとはぐれてしまい像が倒れてきたところをなのはに助けられた。と説明した。緊張してガチガチだったけど。

次はギンガ。

スバルとはぐれ、烈に助けられ、その後現れたフェイトと共に脱出した。と言ってだいたい起こったことを全部説明してしまった。

「最後は草薙君やな」

「だいたい内容はギンガさんと同じですよ」

「君に聞きたいのはそのことじゃないよ」

フェイトが真面目な表情で言う。

「……俺がどうしてあそこにいたか。そして俺が使った力は何なのか。そういったことですか？」

「そや。でも消火活動への協力は感謝しとるで。じゃあ先ず、なんで君はあんなところにおったん？」

「わかりません。気が付いたらあそこにいました」

「気が付いたらって……」

「それより前のことは何か覚えとるか？」

「……あー」

「なにか覚えてるの？」

「崖から……」

「崖から？」

「崖から落ちたんです」

「「「「「ええっ？！」」」」」

ゲンヤを除く全員が叫ぶ。

石凪に追われていたことは伏せておいた。石凪について聞かれたらマズイと思ったから。

「で、その時に何かの光に包まれて……んで気が付くと空港の通路にいたんです」

「……不思議なこともあるもんやな」

「次元移動型のロストロギアでもあったのかな？それとも誰かの転送魔法なのかな？」

「わからないね～。……そういえば草薙って苗字は日本人だよね？地球出身なのかな？」

「はい。地球出身の日本人です。今はたしか２０１０年の２月末でした」

「「「２０１０年？」」」

３人が信じられないといったような声をあげる。

「？、そうですけど」

「あのね。地球は今、２０１１年だよ」

「……はい？」

今度は烈が信じられないといった声をあげる。

「だからね、今は２０１０年の２月じゃないの。２０１１年の４月３０日なの」

なのはがフェイトの説明を補足する。

「……ちょっと待って下さい。じゃあ俺は次元と時間を飛んだってことですか？」

「そういうことになるかめしれへん。じゃあ君のいた地球で最近起こったことはなんかあるか？」

「えっと……２００９年に○○○がアメリカ大統領に就任して……」

「えっ？△△△大統領だよ」

フェイトが烈の言葉を否定する。

「はっ？えっとじゃあ、２０１０年の始めに日本の有名な航空会社が大変なことになったんですが……」

「そんなことなかったよ」

今度はなのはが烈の言葉を否定する。

「……まさかやと思うけど、私達の地球とは違う並行世界から来たのかもしれへんな」

「「「並行世界？！」」」

は「可能性としてはそれしかありえへん。草薙君は嘘を言っているようには思えへんのや」

「そうですか……。それで、元の地球に戻る方法はあるんですか？」

「残念だけど、並行世界に行く方法はないんだ」

「っつ！！じゃあ、妹達はどうなるんですか！！」

烈が叫ぶ。

「ちったあ落ち着いてくれや。娘が怯えてる」

今まで黙っていたゲンヤが言った。

隣を見るとスバルが震えていた。

「……すいません」

「妹さんがいるの？それ以外に家族は？」

「いません。俺と妹が……2人。3人だけで過ごしてきました」

なのははしまったという顔になり、空気が重くなる。

「あっ、気にしないでください。三人だけでも充分幸せでしたから」

「……そうなんだ」

「でもこれからどうしようか。元の世界には戻れない、か……」

「……だったらよう」

「「「??」」」

全員がゲンヤを見る。

「ウチに来ないか?」

「「「はい?」」」

「「「ちょっ、お父さん?!」」」

「行くあてがないんだろ?ならウチに来なよ」

「えっと?えっ?」

「俺は娘の命を助けてくれた相手に感謝したいんだ」

「……本当にいいんですか?」

烈はナカジマ家のみんなを見る。

「かまわんさ。むしろこちらとしてはそうしたい」

「私も……いいです」

「ギン姉がいいなら、私もいい！！」

「ありがとうございます！」

ってことで烈はナカジマ家に引き取られることが決まった。

第7話　事情聴取　前編　並行世界？（後書き）

長いので分けました。

次回は能力の説明についてです。

第8話　事情聴取　後編　烈の能力（前書き）

今回は烈の能力がどういうものか、という話です。

過去についてはいずれ書きます。

第8話　事情聴取　後編　烈の能力

第8話　事情聴取　後編　烈の能力

「じゃあ次は君の能力について説明してくれるかな？」

「凄かったなぁ。周りの炎を集めて球にして、海に放り込んどったなぁ」

「でもあれは魔力変換資質とは違うよね。いったいなんなの？」

「その前に魔力変換資質ってのがなにかよくわからないんで、詳しく教えてくれますか？」

「魔法はね簡単に言うと、コンピュータのプログラムみたいなものなの」

フェイトが説明を始める。

「それで、本来魔力を別のエネルギーに変えるには魔法を使って組み替えをしなきゃならないの」

「「へえ～」」

烈とスバルは感心して聞いている。

「だけどね、魔力変換資質を持っている人は魔法で魔力を組み替えなくても、発電や発火といったエネルギーを発生させることができるの。ちなみに私は『電気』の資質を持ってるよ」

「成る程。わかりました」

「えぇ～っと??」

烈は理解したようだが、スバルは理解できなかったようである。

「つまり自分の魔力を炎や電気に変えることができるってことだよ。わかった?スバル?」

「うん。なんとなく」

「ふむふむ。んじゃ、こんどは俺の《機能》についてですね」

「うん。頼むで」

「あなた達の言い方なら、『魔力作用資質』とでも言えばいいですかね」

「『作用』ですか?」

今まで空気だったリインが尋ねる。（忘れてたわけじゃないよ。）

「はい。簡単に言うと、周囲の物質に精神エネルギーを流し込み、操る能力です」

「そないな能力があるんか。」

「はい。俺は基本、氣の力を使ってこの力を使ってます」

「えっ？でも……」

「どうしたの？フェイトちゃん？」

「うん。草薙君が空港で能力を使った時にね、魔力反応があったんだ」

『はい。ありました。』

フェイトの言葉にバルディッシュも答える。

「「えっ？」」

「つまり草薙君にはリンカーコアがある。つまり魔力を使っているはずなんだ」

「魔力？そんなもの俺にあるんですか？使ったつもりもないんですけど……」

「ありましたよ。」

「「「あったの?!」」」

リィンの言葉に全員驚く。

「はいです。病院での検査の結果、リンカーコア有り。魔力保有量だけならＡ－（エーマイナス）です」

「マジですか?」

「マジなのです」

「じゃあ俺は無意識に魔力を使っていた。そういうことなんでしょうか?」

「その可能性は充分あるね」

「でもなんでやろなぁ。普段は氣の力で能力を使っとったんやろ?別にリンカーコアがあるのは不思議やない、私やなのはちゃんも地球出身やけどリンカーコア持っとるし」

「俺んところの祖先も地球出身だな。まぁ俺は魔力ゼロだが」

「草薙君、心当たりはある?」

「……ないですね」

「小さい時のことでもええんよ」

「俺9歳以前の記憶がないんで、小さい時のことはわからないんです」

こんどははやてがしまったというような顔になる。

「9歳の時には既に眼帯やこの力があって、妹は何か知っていたみたいだけど、教えてくれなかったんです。
だから何かあったかどうかはわからないんです」

「……そう、なんだ」

「……はい。でも気にしてないですよ」

「そう……」

空気がまた重くなる。

「リンカーコアについてはこれまでにしましょう。他に何か聞きたいことはありますか？」

「んー……じゃあ能力についてもうちょっと詳しく説明してくれへん？操るってのがよーわからんのよ」

「そーですね……みなさん水は何で出来ているか知ってますよね？」

「水素と酸素だよ。」

なのはが答え、スバル以外が頷く。

「そうですね。例えるなら、俺はその水素と酸素に氣を流し、外部から作用して結合させ水にする。そしてその水を操る。そんな感じです。ちなみに俺は水は操れませんよ。基本は炎です」

「成る程なぁ～。シグナムとは相性が悪そうな能力やな」

「そのシグナムって人は炎を使うんですか？」

「せや。炎熱の変換資質を持っとるで」

「ふ～ん。…じゃ他に何かあります？」

「いや、もう充分や。ありがとうな」

「いえ。こちらこそ」

「んじゃ、これで終いとするか。娘達と坊主は連れていくが……いいか？八神一等陸尉？」

「はい。よろしくお願いします。ナカジマ三佐」

「ああ。なら行くぞお前等」

「「は～い」」

「は、はい！」

てなわけで、４人は部屋を出ていった。

残った３人（＋リイン）はというと……。

「しっかし、ナカジマ三佐が引き取るなんて言うとは思わへんかったなぁ」

「でもよかったんじゃないかな。草薙君、ギンガとは仲悪そうじゃなかったし」

「あ～確かに、消火活動に残るときもギンガは草薙君のこと心配しとったなぁ」

「へ～そうなんだ」

「ま、なんとかなると思うよ。ナカジマ三佐も良い人やし」

「そうですね～」

「じゃあはやて。私達このあと本局に呼ばれてるから」

「うん。頑張ってな」

「はやてちゃんもね」

そして二人は部屋を出ていった。

残る二人は……

「はやてちゃん」

「わかっとる。私達もお仕事の続きや」

「はいです～！！」

ってなわけで、事情聴取も終了し烈はめでたくナカジマ家に引き取られることになった。

烈の新しい生活が始まったのであった。

第8話　事情聴取　後編　烈の能力（後書き）

とりあえず、ここまでで一段落です。

次はナカジマ家に引き取られてからの日常編になります。

いや日常編というよりは訓練校前の準備編って感じになるかもしれません。

あと第1話ですが、烈の話し方が違ったので修正しました。

でもちょっと変かな？

まぁ第1話自体内容に変化はありませんので、あまり気にしないでもらえるとありがたいです。

～第1回オリキャラ紹介&用語解説～

今回は主人公の烈の紹介です

烈「まともな設定だよね？」

まあそれは見てのお楽しみってことで。

それではどうぞ。

オリキャラ紹介

主人公　草薙　烈

・年齢　１３歳

・身長　１５９ｃｍ

・体重　４９ｋｇ

・血液型　Ａ

・容姿　中性的だが眼帯で女とは思われない

・髪型　少し長いため、後ろで先を縛っている

・髪色　赤→？

・眼色　黒（右目）→？

・性格　温厚→？

・魔力光　真紅→？

・ランク　Ａ－→？

・特徴

左目に眼帯（モデルは『未来日記』の雨流みねね）

左腕の指先から肘まで巻かれた包帯（というより左腕を隠している）

・能力
《機能（ツール）》

烈と蒼の所有する特殊能力。基本は氣の力を用いるが、現在二人は魔力を使い能力を使っている。

烈と蒼、共にアリスとの出会いの後にリンカーコアができた。

『魔力作用資質』

烈の《機能》をなのはの世界で表現した能力。
精神エネルギーを利用し、自然に干渉することで自然の力を操ることができる。

《炎》《？》《？》の三つの属性を扱える。

魔力変換資質との違いは、自身の魔力を直接変換させるのではなく、魔力で周りの自然の力に作用し、自身のものとして使うということである。

例えば、大気中の水素と酸素に干渉することで水の力を使役する。

第５話で使った『紅鏡の核』は、周囲の炎に干渉し、集めて凝縮したもの。

もっとも得意としているのは《炎》であり、他の二つと違って媒体（例：水素・酸素）がなくとも炎を作りだせる。

・概要
双子の妹・蒼と一緒に石凪に追われていたが、蒼を逃がしたことで自身は石凪に追い付かれる。
その後崖から落ち、光に包まれてなのはの世界の空港の災害の場所へ飛ばされた。

そこでギンガと出会い、脱出。
そして消火作業に協力した。
元の地球となのはの地球は別のものであり、並行世界にあたるため元の地球には戻れなくなったところナカジマ一家に引き取られた。
４年前からの記憶しかなく、９歳以前のことを覚えていない。

烈「《?》多いよ!!」

ごめんなさい。ネタバレになるんです。

烈「目や魔導士ランクの矢印?ってのはなに?」

ある条件で色やランクが変化するんです。

烈「その条件ってのは?」

禁則事項です。

烈「どこの未来人だよ。」

禁則事項が禁則事項で、禁則事項なんです。

烈「もういいよ。じゃあ眼帯と包帯はなんなの？」

下にあるものが隠されているのですよ。何が隠されているのかは、またいずれってことで。

まぁ設定についてはこんなところです。

ＳｔｒｉｋｅｒＳ本編になったら再び書きますが、成長した状態で載せます。

烈「その時も矢印は？のままなのか？」

さあ？んじゃ、次は《戯言シリーズ》を知らない人のための用語解説です。

『石凪』

・『殺し名七序列』において、七位の存在。

・『殺し名七序列』とは殺しの世界において、圧倒的な殺人能力を誇るＴｏｐ７のこと。

・石凪は別名『石凪調査室』と呼ばれることもある。

・主な理由として、生きているべきでない者、運命に背く者を殺す。

・『殺し名』の中において、唯一、大鎌（デスサイズ）を使用する。

こんなところかな？

烈「まぁ原作の『戯言シリーズ』じゃほとんど出番がなかったからね。」

萌太君が『ネコソギラジカル』で登場したくらいだっけ？

烈「『人間シリーズ』でも登場してるけどね。」

だいたい『殺し名七序列』っていっても４～６位は名前しか出てこなかったからねぇ。

烈「だからそこら辺をオリジナル設定にして出す予定なんだろ？」

うん。『呪い名　（まじないな）』の方もそんな感じ。

烈「んじゃ、紹介もこの辺で。」

ではでは次の話で。

第9話　一ヶ月後　朝の風景

～ナカジマ家～

5月30日　朝7：00

烈がナカジマ家に引き取られてちょうど一ヶ月がたった。

烈も大分ナカジマ家での生活に慣れてきた。

今烈がは何をしているのかというと……

「♪～～♪～～♪」

鼻歌歌いながらフライパンとフライ返しを握り、朝食を作っている。

ちなみに、本日の朝食はトースト、スクランブルエッグ、焼きソーセージ&焼きベーコン、といった洋食の朝食風景である。

眼帯とエプロンの組み合わせがシュールな気がするが、気にしたら負けだ。

「烈兄。おはよう……」

スバルが目を擦りながら、烈のいるキッチンまでやってきた。。
まだ目が覚めたばかりのようである。
ちなみに、スバルは烈に懐いており、烈兄と呼んでいる。

「おはよう、スバル。先に顔洗っておいで」

「ふぁ～い」

「おはようさん」

スバルが洗面所に向かったところで、ゲンヤがキッチンに入ってきた。

「ゲンヤさん。おはようございます」

「すまんな。毎日」

「いえいえ。これくらい気にしないでください」

何故烈が朝食を作っているか、それはナカジマ家の家族構成が関わってくる。

ナカジマ家には母親がいない。

ゲンヤ曰く、昔、任務中の事故で亡くなったようだ。
故に基本家事をするのはギンガとスバルだった。

しかし、ギンガは陸士候補生であり、現在は訓練校の寮にて生活しているので、帰って来るのは休日のみ。

ゲンヤも基本管理局の仕事で帰りが遅い。たまに帰ってこない時もある。

スバルはまだ１１歳。料理はできるが、不器用だったり、力仕事も厳しいものがある。さらには学校にも通っている。

そんな訳で、烈が大概の家事をしているのである。

妹達と暮らしてた時、料理や洗濯、掃除なども協力してやっていたので、普通以上には家事ができるのである。

以上説明終了。

「そういえばスバル」

「ん？何、お父さん？」

スバルも顔を洗い、現在は3人で食事しているところである。

「お前、訓練校に入学したいって話だが……」

「うん」

「条件がある」

スバルはなのはに助けられたことからなのはに憧れを抱いており、魔導師を目指そうとしている。
故に、陸士訓練校に入ることを望んでいるのだ。

「条…件？」

「烈と一緒に魔法を学び、一緒に入学することだ」

「えっ！？」

「ゲンヤさん。俺は魔法を学ぶことは構わないんですが、一緒に入学するんですか？」

「そうだ。それが条件だ。なにより、烈。お前は自分の力の扱いを知ったほうがいい」

「烈兄……」

烈がイエスと言わなければ自分も入ることはできないのだ。
スバルが不安げな顔で烈を見る。

「……訓練校を卒業すれば、管理局で働くことになりますよね？」

「そうなるが、嫌か？」

「いえ。管理局で働けは恩も返せるかなって」

「家事やってくれるだけで充分だかねぇ」

「いえ、そういう訳にはいきませんから。じゃあ、その条件引き受けます」

「ありがとう！！烈兄！！」

「どういたしまして」

「おっしっ、決まりだな。スバル、ちゃんと勉強しろよ」

「うん！！頑張る」

「一緒に頑張ろうね、スバル」

「うん！！」

それは魔法を学びことが決まったある朝の出来事。

～～あとがきコーナー～～

蒼「草薙蒼と。」

ア「名前が決まりました。アリステラことアリスの。」

蒼／ア「「あとがきコーナ～～～。」」

蒼「はい。本編では未だに出番が全くないのであとがきを乗っ取りました。」

ア「作者にも許可を取りましたし。」

あれは脅はｋ……。

蒼／ア「「なにか言った（言いました）？」」

いえ、なんでもございません。

ア「まぁ作者はほって置きまして、今回はゲストを呼んでいます。この作品のメインヒロインのギンガさんです。」

ギ「えっとどうも、ギンガ・ナカジマです。え…烈の妹さん?」

蒼「あとがきのコーナーなので時系列とかいろいろ細かいことは気にしない気にしない。」

ギ「は・はぁ……。」

ア「では質問にまいりましょうか。ギンガさん、烈兄様のことをどう思っていますか?」

ギ「えっ?!烈ですか?うーん……。私を助けてくれたり、家のこととかスバルのことを見ててくれたりして、優しい人かな?」

蒼「ほうほう。じゃ、異性としては?」

ギ「なっ、なんでそんなこと聞くんですか!!」

ア「理由はメインヒロインである、それ以外にあると思いますか。」

ギ「……嫌いじゃないと言うか、むしろ優しいからいいって言うか……。」

蒼／ア「「兄さん（烈兄様）フラグ立てたな（ましたね）。」」

ギ「いやえっと……その……」

蒼「いや、無理しないでいいよ。」

ア「……烈兄様はフラグを立てすぎたりすんですかねえ。」

……。

蒼「作者。まさかとは思うが……。」

ノーコメント。

ア／ギ「「それ言ってるようなものです。」」

あーそうですよ。立てる予定ですよ。

蒼「ヤケになったか。んじゃ聞くが、誰に立てるんだ?」

この場に烈がいないから少しだけ言うけどさ、ツンツンっ子に立てます。

蒼／ア／ギ「「「あー……。」」」

今のところの話ですけどね。元々烈はフラグメーカー的なキャラにするつもりはなかったんですが、続きを考える内にフラグが立つキャラがいるよなーって。

蒼「メインヒロインも大変かもな。」

ギ「ええっ?!」

ア「頑張って下さい。」

ギ「私はその……別に……。」

蒼「はい。それではこのあとがきコーナーもこの辺で。」

ア「コメント・感想お待ちしております。」

ギ「あ・誤字脱字がありましたらお願いします。」

蒼「それではみなさん。」

蒼／ア／ギ「「「また次回。」」」

第１０話　デバイス作成（前書き）

デバイスについてですが、アニメ版では詳しい説明がなかったので、ｗｉｋｉで調べたりしました。

それでも間違っている部分があるかもしれません。

あまり気にしないでいただけるとありがたいです。

また、今回出てきた公園はＶｉＶｉｄに出てきたものをそのまま使用しました。

第１０話　デバイス作成

第１０話　デバイス作成

「えっとここがこうで、これがこうで」

「烈兄～。助けて～」

「ちょっと待ってね、スバル。えっと……」

烈は現在片手に『簡単にできる自作デバイス！！』という本を持って、目の前のデバイスを組み立てている。

訓練校に入学するにあたって、各自の魔法形態に合わせたデバイスは支給されるようになっている。

しかし、スバルはギンガから『シューティングアーツ』という格闘技術を学んでおり、それを使うにはローラーブレードが必要になる。故に、スバルはローラーブレード型のデバイスを作成することになったのだが、一人では無理。

烈も杖型のデバイスを使う気はなかったらしく、自分で作ろうと考えていたため一緒に作ることになった。

しかし、烈も考えいろいろ試しながら作成しているが難しく、スバ

ルは頭から煙りを上げており、烈が手伝っているのでなかなか作業が進まない。

「えっと……。この冷却装置をここに付けて……あっ、これじゃサイズが大きくなるからここをこうして……」

「ごめんね。烈兄。私には難しくて……」

「まぁ、簡単にできるものじゃないでしょ。頑張ろうスバル」

「うん！！」

ってなわけで、数日が過ぎていった。

～～2週間後～～

「できたーー！！」

「いやーできたねー本当に」

「あ・できたんだ。見せて見せて」

「うん」

「オッケー」

ギンガに言われ、2人とも作ったデバイスを取り出す。

「「じゃーん！！」」

「二人とも凄いよ」

そこには二種類のデバイスがあった。

一つはローラーブレード形のデバイスが両足分。

もう一つは、日本の鎧を連想させるような一対の篭手だった。

「スバルはともかく、烈は……篭手かな？」

「うん。地球の日本って国の鎧を元にしたよ」

「篭手なら私達と同じだね」

「そうなるね」

ギンガのデバイスは左腕用の篭手・リボルバーナックル。

元々は両手一組なんだけど、両手装備じゃ重いらしく、右腕用はスバルが使うらしい。

「じゃあ使って試してみよう」

「「うん」」

～市民公園　公共魔法練習場～

「はぁ！！」

「やぁ！！」

現在、二人がローラーブレードを履いてシューティングアーツの練習を行っている。

「せいやぁ！！」

「スバル、大振りになりすぎ。烈にも言われたことなかった？」

「言ったことあるよ～ギンガ。突撃ばっかりじゃ当たらないって」

「烈兄ひど～い」

「はい、隙あり」

「うわっ？！」

ギンガの打撃にスバルは吹き飛ばされる。

「はーい、ギンガの勝ち」

「あいててて……」

「「もっと精進しないとね」」

「はーい」

「じゃ、今度は烈の番だね」

「よし」

烈は篭手を両腕に装備する。

「はぁ！！」

烈の声とともに、掌に真紅の魔力が纏う。
まるで、ボクシンググローブのように。
しかし、すぐに真紅の光は消えてしまった。

「あれ？消えたよ？」

「消えてないよ」

「えっ？」

スバルはニヤニヤしてギンガを見てる。
どうやらどうなってるか知っているようだ。

「こう……するの！！」

烈が腕を振るう。すると……。

「わっ！！」

「上出来かな？」

「それ……なに？」

烈の指先から魔力が糸のように伸びていた。
両指の数。合計１０本の魔力糸が指先から出ている。

「魔力で作った糸かな。長さや大きさも自由に調節できるよ」

「でもそれどうやって戦うの？」

「試してみる？」

「うん！！」

ってなわけで、烈ＶＳギンガ。

ギンガはローラーブレードと左腕のリボルバーナックルを装備している。

「行くよ！！」

「オッケー」

「よ～い……始め！！」

どうやらスバルが審判らしい。

「はぁ！！」

ギンガが烈に突っ込む。

「あまいよ！！」

烈が腕を振り、魔力糸が動く。

「ええっ？！何これ？！」

ギンガが叫ぶのも当然である。
１０本の糸が腕を振っただけなのに、まるで意思を持っているかのように迫ってくるのだ。

「そこだっ！！」

「えっ？……きゃあ！！」

烈の糸により、ギンガは縛られていた。
糸は思ったよりも頑丈で、切れない。

「は～い。烈兄の勝ち～」

「ズルイよ～」

「あははは。ゴメンねギンガ」

「でも凄かった。まるで糸が意思を持っているかのようだったよ」

「腕を振っただけじゃなくてね、指先で動かしてるの」

「へ～。凄いね」

「ありがとう。さて、そろそろ夕飯の時間だし、練習もこれくらいにして、夕飯の買い物に行こうか」

「「さんせ～い」」

「じゃ、行こう。夕飯何がいい？」

「えっとね……お肉がいい！」

「私は地球の料理を食べてみたいなぁ」

こうして、烈は自分のデバイスを手に入れたのであった。

～～あとがきコーナー～～

ア「あとがきコーナー始まります。」

蒼「アリスと蒼のあとがきだけに、有りそうなあとがき……」

ア「アオちゃんギャグが作者以下です。」

蒼「……ごめんなさい。」

ア「気を取り直して今回登場した烈兄様のデバイスの説明です。」

～～デバイス説明～～

名前　『鋼閃』

篭手型・ストレージデバイス

烈が自作したデバイス。一見、形状を見ればアームドデバイスに見えるが、ストレージデバイスである。アームドデバイスにストレージデバイスの記録メディアを付けたものと言えばいいかもしれない。待機モードは存在しない。そこまで技術がなかったとのこと。

元々烈は能力と魔法を併用して使うつもりであったため、接近戦主

体のアームドデバイスにするか、中距離戦主体のストレージデバイスにするか悩んだ。

結果的に両方できるようにしようということになり、このような形を取った。

まだ烈自身が魔法を使えないため、機能としては魔力の集束・形状化しかない。

記録メディアには全く魔法が記録されていないので、烈は後から徐々に入れるつもりでいる。

メインカラーは鉄色。淵の部分は黒色。

スバルやギンガのリボルバーナックルのような形状ではなく、日本の鎧の篭手の形状に近い。

主に指先から発生させた魔力糸による中距離戦闘が主体。接近戦は格闘、魔力で作った剣による剣術を行う。

また、糸による戦闘を行う者を『曲絃師』と言う。

～～用語解説～～

『曲絃師』

曲絃糸を用いた戦闘術。糸遣いの最高峰。

基本的には鉄線・ワイヤーを用いる。ただし、熟練者にもなればビニールテープで人を輪切りにできるとのこと。

使う糸の硬さは、針金くらいまでなら可能。

射程はその人の実力しだい。５ｍが限界の人もいれば、半径５ｋｍの範囲に糸を張り巡らすことのできる人もいる。

※烈の場合

最大射程は１００ｍ。

魔力による糸は、非殺傷設定にしてあるので、基本的に殺傷能力は低い。

ただし、非殺傷設定にしても糸を細く鋭くすれば非殺傷設定の意味はない。

主に烈は多角攻撃や捕縛をメインとするので、人を殺傷する可能性は低い。

魔力糸の大きさ・硬さは少し頑丈なロープ程度にしてある。

ア「以上が説明になります。」

蒼「自作にしては凄いんじゃないか？」

ア「インテリジェントデバイスにしなかったのは、作れたら左腕がどーのこーのと言ってました。」

蒼「ああ。成る程、ってそれでもストレージデバイス作ったのは凄いと思うぞ。」

ア「でもアームドに記憶メディア付けただけですから。待機モードもありませんし。」

蒼「それもそうか。」

ア「では今回はこの辺で。」

蒼「そうそう。言い忘れてたが更新スピードが遅くなるかもしれん。」

ア「どうしてです？」

蒼「作者が今月2回テストがあるんだと。」

ア「あー……センター模試に似せたテストと期末テストですね。」

蒼「作者はこのままじゃ、物理の評定が１ｏｒ２になる可能性があるらしい。」

ア「２学期期末で３０点にも届いてませんでしたからね。」

蒼「ってな訳で、テスト勉強しなきゃマズイんだと。」

ア「留年だけはしないで欲しいですね。」

蒼「努力はすると言っていたぞ。」

ア「頑張ってくださいね。では本当にそろそろこの辺で。」

蒼／ア「「また次回！！」」

第１０話　デバイス作成（後書き）

はい。本文でも書きましたが、更新が遅くなります。

期末が２２日くらいで終わるので、それまでは週１ｏｒ２回になると思います。

第１１話　烈とスバルの日常（前書き）

日常編最後の話です。

第11話　烈とスバルの日常

第11話　烈とスバルの1日

AM10：00

ナカジマ家リビングにて、烈とスバルがテーブルの傍に座って本を読んでいる。

テーブルの上には数冊の本があり、全て魔法に関するものである。

「フムフム。成る程」

スバルはどんどん本のページをめくっている。

しかもちゃんと理解しているようだ。

「……思うんだけどねスバル」

「なに？烈兄？」

「正直俺はスバルは頭悪い子だって思ってた」

「酷っ！！」

「いや事情聴取の時、俺の話の内容が分かってないのを見たらそうなのかなって」

「あれは魔法について全く知らなかっただけだよ！！」

「じゃあ酸素と水素は？」

「あれはまだ学校で習ってなかったの」

「成る程ね～」

さて、何故スバルが学校に行かず烈と魔法の勉強をしているのか。

答えは単純。魔法の勉強のため、スバルは学校を辞めたのだ。

えっ？義務教育？陸士訓練校を目指す人は免除されることになっているのだ。

正確に言うと、魔法学校に通っておらず普通校に通っていて陸士訓練校を目指す人のみが適合される。

そうなる制度を作ったのは管理局。人材不足のためであろう。

「うんまぁ勘違いしててゴメンね」

「うん。判ればいいよ」

「でもシューティングアーツや格闘の練習の時はあまり考えて攻撃

していないような」

「うっ……。そ、そんなことより今は勉強だよ、勉強」

「クスクス。はいはい」

そんな感じの午前中。

ＰＭ１：００

～～ナカジマ家・庭～～

「せいっ！！」

スバルが烈にパンチを繰り出す。

「甘いよ、スバル」

しかし烈は難無く避ける。

「もっと脇を絞めて、大振りになったら当たらないよ」

「うりゃ！！」

「そうそう。そんな感じ」

現在、二人は組み合って格闘訓練をしている。

ギンガはスバルにシューティングアーツを教えているが、訓練校があるので休日しか教えることができない。

そこで格闘の基礎を烈が教えることになったのだ。

烈は格闘・剣術・居合ができるのである。

スバルが何故できるのかと聞いたら、記憶が無くなる前からやっていた。と妹に言われていたらしい。

「せいやぁ！！」

スバルが再び烈に殴り掛かる。

が、しかし

「足元ががら空きだよ。」

「えっ？うわっ！！」

烈は横に避け、スバルに足掃いを喰らわせた。

「っててて」

「大丈夫、スバル？今日はこれくらいにしようか」

「は～い」

そんな昼間の出来事。

ＰＭ４：００

とあるスーパーにて。

「むーー……」

「アイスは一個だけだよスバル」

「わかってる。迷うなぁ～」

「じゃ、食材探してくるから戻ってくるまでには決めてね」

「は～い」

ってなわけで１０分後、食材集め終わって戻ってきた。

「決まった？スバル」

「う～ん。決まったよ、烈兄」

「じゃ、会計済ませて帰ろうか」

「は～い」

ＰＭ１０：００

食事も終わり、風呂にも入り終わった時間。

「ふぁ～～ぁ」

「早く寝なよ、スバル。明日も勉強や訓練するからね」

「ふぁ～い。おやすみ烈兄」

「おやすみ」

そう言って、スバルは自分の部屋に上がっていった。

「さてと、俺も寝るとしようかな」

烈は家の電気を全て消し、自分の部屋に上がって行った。

こんな二人の日常風景。

第１１話　烈とスバルの日常（後書き）

次回から訓練校編に入ります。

更新は一週間以内に行います。

第１２話　新たな出会い（前書き）

この話を書いている時なんですが、自分はアニメだけで漫画版Ｓｔｒｉｋｅｒｓを読んでいませんでした。

んで、書き終えた後買って読んでみると……

……全然ちゃうやん。

ってなわけで修正＆予定変更しました。

ですが基本は考えていた内容は漫画版＋オリジナル設定ってことにしようと思っています。

まぁ元々二次創作なのであまり気にしないでいただけるとありがたいです。（この発言も多い気もしますが……）

第１２話　新たな出会い

新歴７２年　６月

一年という月日はあっという間に過ぎ、烈とスバルは第四陸士訓練校に入学した。

「……試験をクリアし志を持って本校に……」

現在は入学式が行われており、教官と思しき人物が喋っている。

烈とスバルは候補生の後ろあたりに並んでいる。

「……話……長いねぇ」

「しかたないよ」

「いやー判る判る。こういった長い話ってのはかったるいぜ」

烈とスバルが振り返ると、そこには茶髪で長身の男がいた。

「えっと……」

「あ、悪ぃ悪ぃ。俺の名前はジュレイス・ホーネット。ジュレスって呼んでくれ」

「スバル・ナカジマです。スバルでいいです」

「草薙・烈。俺も烈でいいよ」

「よろしくな。スバル、烈」

「こちらこそ」

「よろしくね」

「俺昔っからこんな話が苦手でな、いっつも寝てたんだ」

「あ・あたしも」

「だろ?運動会の時とかさ、話するくらいなら早く競技させろって感じだよな」

「うんうん。わかるわかる」

「って二人共、その長い話は終りそうだよ」

「「本当（／か）?!」」

「嬉しそうだね…」

教官の話は最後になってきていた。

「……以上！解散！1時間後より訓練に入る」

「「「はいっ！！」」」

候補生全員は敬礼をしている。
烈やスバル達も慌てて敬礼をする。

「各員仮割り当ての部屋へ移動！」

教導官の言葉に従い、講堂内の候補生はぞろぞろと外に出てゆく。

「俺達も行こうぜ。女の子と同室だったらいいのによ」

「無理だよ。男女別々の寮なんだから」

「誰と一緒になるんだろうね」

そんなこんなで三人も講堂から出て、自分達の部屋を確認しに行った。

～～講堂前～～

「えっと……あ・あった。３０号室だ」

「マジか?!俺もだ」

「え?本当?」

どうやら2人は同室になったようだ。

「ああ、本当だ。んじゃ、あらためてよろしくな、烈」

「こちらこそ、ジュレス」

「あ・二人は一緒の部屋なんだ」

「スバルは?」

「あたしは３２号室」

「ルームメイトと仲良くなれるといいね」

「うん!!」

「じゃ、俺らは部屋に行こうぜ」

「オッケー。またねスバル」

「またね烈兄、ジュレス」

「おう」

これから始まる訓練校生活。烈の身にはどんなことが起こるのか……。

それはまた次のお話。

～～あとがきコーナー～～

ア「あとがきコ～ナ～始まります。」

蒼「あとがきコーナーってのもそのまんまだから、何か名前付けようか？」

ア「それはネーミングセンスの無い作者が考えなければなりませんよ。」

蒼「……そうだった。」

ア「気を取り直しまして、今回のゲストが来ています。それではど

うぞ。」

ジ「よっ、ジュレイス・ホーネットだ。お招きありがとう。折角だから一緒にお茶でも……。」

蒼「だが断る。」

ア「身の程を知ってください。」

ジ「ヒデェ！！」

蒼「さて、それはさておき今回のゲストはオリキャラのジュレスだ。」

ア「私より先に出るなんて……。」

ジ「あ・成る程ね。二人より先に出るから怒ってるわけね。だが次話でさらに二人のオリキャラが出るらしいが……。」

蒼「アリス準備はいいか？」

ア「はい。作者を眠らせてあげましょう。」

ジ「ちょっ？！お二人さん何処へ？！」

蒼／ア「「ちょっと作者をシバいてくる（きます）。」」

ジ「っておい！！あ～あ、行っちまった。俺ゲストなのに……。しかたない俺一人でやるか。」

頑張れ、ジュレス。

ジ「ああ。……ってうぉ?!作者ぁ?!何故此処に?!」

二人から逃げて来た。

ジ「お前なぁ……。あの二人ってまだ本編には出してやらないのか?」

蒼は烈の夢の中で出るかもしれないけど、アリスはＳｔｒｉｋｅｒＳ本編が始まらない限り無理かな。

ジ「せめて設定だけでも出してやったらどうだ?」

ふむ。基本的部分ならいいかもしれないな。

ジ「なら二人のスリーサイズを!!」

蒼に殺されるぞお前。それに俺は何ｃｍが大きくて何ｃｍが小さいのか判らん。

ジ「ちぇっ。使えねぇ作者だな。」

悪かったな。あとお前は女好きな設定だが、ナンパしても成功しないからな。

ジ「ヒデェ!!」

元々『ＢｌａｃｋＣａｔ』のジェノスを元にしたからな。

ジ「何でだよ！！」

使いやすそうだと思ったからだ。だけどまぁ安心しろ。そんなに酷い扱いにはならない予定だからさ。

ジ「そうかい。ならまともか。」

さぁ？飽くまで予定だからな。

ジ「お前本当に後のこと考えてねぇな！！……あ。」

？どうした？

ジ「作者ー。後ろ後ろ。」

俺は志村じゃ……

蒼「こんなところにいたか。」

ア「ずいぶん探しましたよ。」

ゲェッ！！蒼にアリス！！

ジ「今銅鑼の音が聞こえたような……。」

ア「気のせいです。さてと、眠らせに来ましたよ作者さん。」

アリスさん、笑顔だけど目が笑ってませんよ。（汗）

蒼「さぁ、お前の罪を数えろ。」

何処の二人で一人の仮面ライダー！！

ってツッコミしてる場合じゃない！！俺は逃げる！！

ア「あ・待ちなさい！！」

蒼「待て作者！！微塵切りにしてやるから！！」

逃げるに決まってるだろうが！！

ジ「あ～あ、三人とも行っちまった。しかたねぇ、今回はこれまで。
次回もよろしく頼むぜ！！」

第１２話　新たな出会い（後書き）

テストの一つが終わりました。

来週期末テストなので、次話はテストが終わってから投稿します。

２３もしくは２４あたりになると思います。

第１３話　第四陸士訓練校（前書き）

烈「期末テストはどうしたんだ作者。」

作者「ふっ……数学3とライティング（という名の暗記）で初日がもう死んだから、ヤケになったので投稿した。」

烈「……赤点？」

作者「ライティングは十中八九。」

烈「……とまぁそれでは本編をどうぞ。」

第１３話　第四陸士訓練校

この第四陸士訓練校は毎年多くの候補生が入学してくる。
男女共に多いため、他の訓練校では男女同室であったりするのに対し、ここでは男女別々の寮である。
むしろ男女別々の寮だから毎年候補生が多いのかもしれないが……。

とまぁそんな説明は置いといて

～～１時間後～～

ｉｎ訓練用デバイス倉庫

「では１番から順番に訓練用デバイスを選択。
ミッド式は片手杖か長杖。近代ベルカ式はポールスピアのみだ」

前で教官が説明を行い、部屋番号１番（男子）から順にデバイスを撰び始める。

「お前どっち選ぶんだ、烈」

「デバイスは持ち込みで自前だから選ぶ必要はないんだ」

「おっ？お前もか？俺も持ち込みさ」

「へぇ！？」

「訓練用デバイスが支給されるってのは知ってたけどよ、やっぱ自分やりたいように戦いたいって思ったからな」

「自分のなり戦闘スタイルってことか……。いいんじゃない？」

「ところで、お前のデバイスはなんなんだ？」

「篭手だよ」

「それじゃベルカ式ってことか」

「いやミッド式。篭手だけど格闘や接近戦主体じゃないんだよ」

「ほぉ？それならどんな風に戦うのか見てみたいぜ」

「いずれ見れるよ。そろそろ並んどこうよ。お互い倉庫（ここ）にいると邪魔になるだろうし」

「そーだな」

～～陸戦訓練場～～

教官Ａ「Ａグループ、ラン＆シフト！」

現在は訓練も始まり、基礎訓練が行われている。

Ａグループは男子全員を、Ｂグループは女子全員ということで分け

られている。

「次、３０番！」

「うっしゃ、行くぜ烈」

「オーケー。先行は任せるよ」

「３０番セット！」

「「レディー……ゴー！！」」

ジュレスが少し早く出るが、烈がそれに合わせるように走る。

二人は順調に立てられたコーンを曲がって行く。

「「はいっ！！」」

二人はタイミングを合わせ、陣形を展開しフラッグポイントを確保する。

「よし、３０番オーケーだ」

「ナイス、ジュレス」

「お前もやるじゃん」

「ありがと……ん？」

「どした？」

「いや、Ｂグループの方がね」

「ん？……次はスバルの番か」

スバルはオレンジの髪をツインテールにした女の子とペアなようであり、次が自分達の番らしく準備している。

「さて、どうなることやら」

「俺から見たスバルの第１印象から考えて……失敗しそうだな」

「あ、やっぱりそう思う？」

結果、烈やジュレスの思っていたようにスバルが飛び出して失敗。教官に怒られ腕立て伏せをやらされている。

「あっちゃー」

「クスクス。スバルらしいかな」

とまあこんな感じに見ていた二人だが……

「３０番何ボサッとしておるか！！早く次に行かんか！！」

烈／ジ「「す、すみません！！」」

二人も叱られてしまった。

ま、自業自得である。

「次は垂直飛越か……。こんどは俺が押し上げるから、上から引っ張り上げてくれ」

「オッケー。任せて」

「いくぜ……。せーのっ！！」

「はっ！！」

烈はジュレスに押し上げられ、壁の頂上まで飛び上がる。

「うん。届いた届いた。ジュレスーー、ロープ降ろすよーー」

「おーう。頼む！」

烈は肩に掛けたロープを降ろし、ジュレスを引き上げる。
烈が調度引き上げ終えたところ……

「ひゃあああああ！！！」

烈とジュレスは悲鳴を聞き、声のする方を見る。
するとスバルが相方の子を凄く高く押し上げていた。
相方の子はだんだん落ちてゆくが、スバルが地面に落ちる前に抱き留めていた。

「３２番ーッ！！訓練中断！一度引っ込めッ！」

再び二人は叱られていた。

「……あの子大変そうだな」

「あはは……」

～～数時間後～～

男子寮３０号室

訓練も終わり、その後の夕食や座学も終了。
現在は寮の部屋に戻り、各自就寝準備となっている。

「今日一日はこんなところでした」

『そうか。ルームメイトの子も大変だな』

烈は現在、ゲンヤに今日のことを報告している。
元々スバルが入学する条件は烈と一緒に入ること。と言うか烈の御目付き役という条件である。
そんな訳で烈はスバルの行動をゲンヤに定期的に報告することになっている。

「初日から反省掃除なんてやらされていましたから」

『はぁ……。烈、スバルのことしっかり見といてやってくれ』

「はい、わかりました」

「ふぅ、戻ったぜ～」

ちょうどジュースを買いに行っていたジュレスが部屋に入って来る。

「ではこれで失礼します」

『おう』

烈は通信を切った。

とそこにジュレスが話し掛けてくる。

「お？誰と話してたんだ？もしかして女か？」

「ちーがーう。スバルのお父さん」

「なにぃっΣ（ー□ー；）？！お前、スバルとは仲がいいと思っていたがまさかッ！！」

「違っがーーーうッ！！！」

スッパーン！！

ハリセンの音が綺麗に響く。

「あだッ！どっから出したそのハリセン！」

「ん？気が付いたらあった。ていうか何想像してたの」

「将来を誓い合った仲だとか、親が決めた許婚とか……」

「……もう一回叩こうか？」

「冗談だ、冗談。んで、なんでスバルの親父さんなんかと？」

「俺はまぁなんと言うか、スバルの御目付け役なんだよ」

「は？御目付け役？」

「スバルが訓練校（ここ）に入る条件が俺と入るってことだったんだ」

「はーーーそれはまた。てかお前も苦労してんだな」

「まぁそれほどでもないかな。なんて言うかスバルは妹みたいだし」

「ほうほう。んで、そのままスバルにフラグを立てるってことか……」

「いい加減にしろーーー！！！」

スッパーン！！！

ハリセン再び。

「ギャーッス！！」

とまあこんな感じに訓練校初日は過ぎてゆくのであった。

～～あとがきコーナー～～

ア「はい、本日もやってきました。あとがきコーナーです。」

蒼「結局タイトルは決まらずか。」

ア「文句は作者に言ってください。」

蒼「はぁ……。それはさておき、今回は特にやることがないんだが。」

ア「え～となになに……。えっと、今回登場しなかったジュレスのデバイスの説明でもしてくれって書いてあります。」

蒼「カンペあるのかよ。ノリで書くからあとがきで説明しなきゃならなくなるんだ。て言うか今回新たなオリキャラが出るんじゃなかったのか？」

ア「漫画版読んだら無理そうだって言っていました。次回以降になるそうです。」

蒼「でも設定は決まっていると。」

ア「さすがに決まっているようですよ。」

蒼「……また本編での出番が遠くなるな。」

ア「……そうですね。」

蒼「気を取り直してジュレスのデバイス紹介だ。」

名前：グランディス
形状（ｓｅｔ　ｕｐ）：飛刃剣
形状（待機）：チェーンの腕輪
タイプ：ストレージデバイス

補足
Ｓｅｔ　ｕｐした状態の形状はブーメランに刀の柄が付いているようなもの。
刃の部分に魔力を纏い、魔力の刃として打ち出して攻撃する。
ぶっちゃけて言うならば、『ファンタシースターユニバース』に登場するスライサー。

蒼「以上だな。」

ア「最初の設定では普通のブーメランという設定だったらしいですが。」

蒼「ああ。強いて言うならジュレスはベルカ式という設定でもあったんだが、シグナムやウ〝ィータを見ると何だか微妙だなーって思ったらしい。んで、気まぐれでファシスタ（略）やったら、このスライサーで良くね？ってことでジュレスのデバイスが決まったらしい。」

よくよく思い返せばオリキャラ3人は、全員がファシスタ（略）に出て来る武器がデバイスの予定だな。

ア「……居たんですか、作者さん？」

一応。

蒼「じゃー作者も出て来たからこの辺で終わろうか。」

作者に対しての扱いがひどいです。

蒼「出番増やせばもっとマシになるが？」

あとがきコーナーだけで我慢してください。

ア「それではこの辺で～～っと言いたいところですが。」

蒼「んっ？何だ、アリス？」

ア「この作品は皆様の感想をお待ちしております！！」

蒼「……あー。未だに感想０件だっけ？これ投稿した時点で五万ヒットは越えていたけど。」

できれば皆様にこの作品の悪い所でもいいので感想を書いていただきたいです。

蒼「感想来ないからって、挫折だけはするなよ。」

はい。十分承知しています。

ア「それでは皆さん、今回はここまで～～～。」

蒼「次回もよろしく！！」

第１３話　第四陸士訓練校（後書き）

本当に感想・コメントお待ちしております。

次回はテスト後に更新しようかと思います。

第１４話　４人一組（前書き）

感想ありがとうございました。

これからも頑張ります。

第１４話　４人一組

２週間後、ＡＭ５：００

ｉｎ男子寮３０号室

訓練校での生活が始まってから早くも2週間後の朝。
窓から入った太陽の光に、烈は目を覚ました。

「ふぁ～～……。えっと朝か……。」

「あ～眠ぃ……ぜ。グゥ……。」

「それ寝言？それとも起きてるの？」

「寝言だぁ～～……グゥ。」

「あははは……。」

こんな二人の朝。

ＡＭ８：００

ｉｎ食堂

現在二人は朝の訓練を終え、食堂にて朝食を取っている。

ちなみに食堂は男女合同だ。（まあ当然だが。）

「あーやっと目が覚めたぜ。」

「訓練中眠そうだったよね？」

「ああ。昨日あまり眠れなくてな。」

「眠れなかったって、今日が楽しみだったりでもしたの？」

「んな遠足を楽しみにする子供みたいな……。でも、楽しみったら楽しみだぜ！！チームを組む女子３０番の子がどんな子なのか！！」

「……聞いた俺が間違いだったかな。」

第四陸士訓練校では今年新しい教導を取り入れたらしい。
今までは、基礎訓練はルームメイトと共に、魔法の訓練は形態が同じ者同士をグループに分けて行っている。
だが今年取り入れた訓練は４人一組による訓練である。
なんでも武装隊におけるフォワードのポジションの役割を与え、連携・チームプレイの訓練を目的としたらしい。

「ん？お前は興味ないのか？」

「あんまりね。まぁチームを組むんだから仲良くしたいと思うけどね。」

「ふ～ん。女の子と一緒になるってことには興味ねぇのか。もったいねぇ。」

「いいんだよ俺は別に。」

「烈兄～～。おっはよ～～。」

烈が振り返るとスバルとオレンジの髪を二つに結んだ女の子がこっちに来ていた。

「おはようスバル。そっちの子はスバルのルームメイト？」

「うん。ランスターさんって言うの。」

「ティアナ・ランスターよ。貴方は？」

「草薙烈。よろしく。」

「よろしく草薙候補生。」

「そんな堅い呼び方じゃなくて名前でいいのに。」

「何て呼ぶかはあたしの勝手よ。馴れ合う気とかないから。」

「俺はジュレイス・ホーネット。よろしくなティアナ。」

「気安く名前で呼ばないでくれる、ホーネット候補生。」

「きーびしー。」

「まあまあ二人とも。朝食まだなら一緒にどう？」

「遠慮するわ。」

そう言ってティアナは踵を返し、どこかへ行こうとする。

「あぁ、待ってよランスターさん。ゴメン烈兄、また今度。」

スバルはティアナを追い掛けていった。

「……真面目っていうか、刺々しいっていうような人だったね。」

「可愛かったと思うがな、厳しかったぜ。ところで烈、スバルに兄って呼ばれてるんだな。前にスバルのこと妹みたいだと言ってたが。」

「ああ、それはね。俺は元々次元漂流者でね、今はナカジマ一家にお世話になってるんだ。んで、けっこう懐いてくれて兄みたいだってことで烈兄って呼ばれてる。」

「成る程ねぇ……って次元漂流者ぁ？！」

「声が大きい。」

烈の言う通り周りの人々はジュレスの声に驚き、こちらを見ている。
ちなみに二人の回りの席で食事している人はあまりいない。
使っているデバイスが特殊なので奇異の目で見られている。
特に烈が、である。

「っとと……悪ぃ。」

「落ち着いた？。」

「ああ。だが今更次元漂流者ってことで驚くのもアレか。外見でもデバイスでも充分驚かれてるのからな、お前。」

そう言ってジュレスは烈の眼帯と左腕を指差す。

「そう言う割には入学式の時あまり驚いてなかったみたいだけど？」

「親父の友人にいたからな。眼帯付けた叔父さんが。」

「ちなみにその叔父さんの職業は？」

「確か……ストライクアーツのジムをやっていたはず。」

「あ、なんとなく想像できた。」

烈の頭には某ボクシング漫画のトレーナーが浮かんでいた。

「さて、そろそろ行こうぜ。教官にどやされる。」

「そうだね。」

二人はさっさと食事を片付け、訓練場へと向かった。

～～陸戦訓練場～～

「本日より四人一組による訓練を行う！各自同じ部屋番号で組むように！」

前の方で教官が説明を終え、全員組む相手を探し始める。

「俺等と組む３０号室の女子ってどんな娘だろうな。」

「朝も言ったよね、それ。なんかもうジュレスの女好きには呆れてきた。」

二人もチームを組む二人を探す。
二人とも辺りを見回して探していると、

「あなたたちが男子３０番？」

突然後ろから声を掛けられた。

「そうだよ。ってことは君達は女子の３０番でいいのかな。」

「そうだよ～ん。」

振り返るとそこには二人の女の子がいた。
最初に声を掛けたのは深緑色でセミロングの髪に、碧の宝石が付いた指輪をした女の子。
烈の質問に答えたのは桃色でショートの髪型で、Ｔの形をしたペンダントを付けた女の子だった。

「俺は草薙烈。こっちは俺のコンビのジュレイス・ホーネット。」

「ジュレイス・ホーネットだ。ジュレスって呼んでくれ。」

「私はツバキ・ヒメミヤ。」

最初声を掛けた子が名乗る。

「あたしはエルフォニア・ツェンベルグ。エルフィって呼んでね。」

こっちは質問に答えた子である。

「ま、よろしく頼むわね。」

そう言ってツバキは手を差し出す。

「こちらこそ。」

烈も手を差し出し、お互い握手をする。

っとまぁそんないい感じのファーストコンタクトだったのだが。

「ところで、俺は御二人の名前だけじゃなくて個人的なことまで教えｔｅ……」

スッパーン！！

ハリセンの奇麗な音が響く。

「グハッ……ガク。」

「「……。」」

「あぁ、ジュレスはちょっと女の子に対しての興味が多いから、気をつけてね。」

「「……うん。わかった。」」

「……何処からハリセンを……。」

「んーー？魔力を凝縮して作ったよ。」

「どうりで……。」

「……あ、しゃべってると教官にどやされるわよ。」

「み～んな並び始めるみたいだしね～。」

「じゃ、俺達も並ぼうか。」

そう言って3人は行ってしまった。

「ってオイ！！置いていくなよ！！」

ジュレスも復活し、３人を追い掛けていった。

～～あとがきコーナー～～

蒼「皆さん、おはようございます。もしくはこんにちは。もしくはこんばんは。あとがきコーナーのお時間です。」

ア「……ニュースですか？」

蒼「やってみたかった♪」

ア「♪って、感想を書いてくれたＫｙｏ様の影響を受けたようですね。」

蒼「せっかく読んでいただいたのだからな。」

ア「ＲＸ２１ＸＸ様、Ｋｙｏ様、流派西方不敗様、本当に感想ありがとうございます。」

蒼「これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。御指摘があった部分は、作者はまだまだ未熟ですが改善できるようにしていくよう心掛けます。」

ア「さて、感謝はここまでとしまして本日のゲストの紹介です。」

蒼「第３０斑、ツバキ・ヒメミヤとエルフォニア・ツェンベルグことエルフィだ。」

ツ「こんにちは、でいいのかしら？」

エ「じゃあ、あたしはこんばんは～。」

蒼「はじめまして。お二人とも。」

ア「こんにちは～。」

ツ「あ・はじめまして。」

エ「こんにちは～。」

蒼「さて、登場していただいたのは兄さんと同じ斑の女子二人組です。」

ツ「えっ？烈の妹？」

エ「ジュレスの妹って考えはないんだね～ツバキ。でも烈と似てないね～。」

ア「そう言えば似てませんね。アオちゃん、本当に兄様と双子なのですか？」

蒼「さあ？二卵生なんじゃない？。」

ツ「さあ？って……。」

ア「ちなみに次回に第３０斑メンバーと私達の設定を投稿するとのことなので、似てないところとかは一応わかる予定だそうです。」

エ「……予定？」

ア「作者の表現が皆様に伝わるかどうか……」

ツ／蒼「「あぁ、納得。」」

納得するのかよ！！

ア「作者が現れた。」

エ「ツバキと蒼の連携攻撃～。」

ツ「射ぬけ、彗星！！ブレイブ・アロー！！」

蒼「第３章第１８項！！ライトニングパニッシャー！！」

なんですとぉΣ（ー□ー；）！！ってギャーーー！！

ア「作者に４２９７のダメージ。作者を倒した。」

エ「ツバキと蒼は２４の経験値を手に入れた。Ｌｅｖｅｌ～ｕｐ。」

蒼「いやもういいから。」

ツ「作者はポ○モンもドラ○エもやらないでしょ。」

ア「確か、デジ○ン派だったんですよね。」

エ「もう全く聞かないけどね～。」

蒼「っとそろそろ時間だ。」

ア「すっごくグダグダでしたけど。」

ツ「しかたないわ。作者だもの。」

エ「ウンウン。」

ア「それでは皆さんまた次回～～～。」

蒼／ツ／エ「「「次回もよろしくお願いします。」」」

～～余談～～

ジ「ちくしょぉ。なんで俺が女の子だらけのグループに混じれねぇんだ。」

烈「諦めなよ。」

こんな会話があったとかなかったとか。

終わり。

第１４話　４人一組（後書き）

流派西方不敗様、台詞を台本調から変えてみましたがどうでしたか？

御指摘、感想お待ちしています。

～第2回オリキャラ紹介～（前書き）

ｏｒｚ

蒼「いきなりどうした作者。」

ア「なんでも期末テストが現時点４科目赤点だったらしいです。」

蒼「ちなみに何が？」

烈「赤点中点数の高い順から、英語２、古典、地理、ライティングの順だと。」

ア「ちなみに、ライティングの平均点はクラスで４３点だったそうです。」

蒼「自業自得とだけ言っておくか。」

ア「それでは本編、オリキャラ紹介を……。」

烈「その前に、一度投稿する内容を間違えてしまった。」

ア「間違えて１５話の内容を投稿してしまったと。」

烈「一度読んでしまった方には申し訳ない。」

蒼「ほんとダメ作者ですいません。では～第２回オリキャラ紹介～始まります。」

～第2回オリキャラ紹介～

第2回オリキャラ紹介～～～。

「「「わ～～。パチパチパチパチ。」」」

はい。という訳で今回はこの作品の現時点で登場しているオリキャラの紹介（烈を除く）になります。

「私とアリスは本編では登場していないがな。」

「アオちゃん第1話で出てますよね。」

「そうだっけ？」

「一応出ているぞ。俺がすぐ逃がしたけどな。」

「おい烈。口調が変わってるぞ。」

「髪の色と目の色も何時もと違うね～～。」

「なんでなのよ？」

「作者いわく、こういった本編とは関係ない雑談等では俺は本来の口調（記憶を無くす前）にするそうだ。」

「なんでよ？」

「普段の兄さんの話し方は疲れると作者が言っていたな。」

「いいんですかそれで？」

「いずれ本編でも出てくるから問題ないだろう。」

「結局面倒臭いってことね。」

「そういうことだろうね～～。」

「ま・別に問題があるわけでもねぇし、このまま紹介に入ろうぜ。」

「そうだな。では最初はツバキからだ。」

オリキャラその１

名前：ツバキ・ヒメミヤ
性別：女
年齢：１４歳
身長：１５０ｃｍ
血液型：Ｂ
髪：深緑色のセミロング
目：青
性格：クール・真面目
魔法形態：ミッド式
魔力光：萌黄色

デバイス：インテリジェントデバイス『ムゲン（夢幻）』（大弓）
ポジション：センターガード
モデル：『ひぐらしのなく頃に』より『園崎詩音』（ただし、詩音より髪は短い。）

第３０班のリーダー役。
性格やポジション、戦闘スタイルがティアナと被っているためか、ティアナをライバル視しておりティアナもツバキをライバル視している。
ちなみにエルフィとは幼なじみである。

「ランスター……。あいつには負けない！！！」

「ツバキが燃えてる～～。」

「萌えの方がいいけどな。」

「烈、ハリセン貸して。」

「ああ。ほら。」

「ってちょっとまてーーーー！！！」

「問答無用！！」

スッパーン！！

「グフッ……ガク。」

「気絶しましたね。」

「次の紹介この阿保だったよな。」

「蒼、お前ジュレスに対してけっこう酷いよな。」

「ゲストだろうが私より先に本編出たからな。なんかこうイラっと……。」

「私はまだ名前だけなんですけど……」

「ツバキとエルフィは女の子だから許す。」

「ご愁傷様だね～。ジュレス。」

「そろそろ次いくぞ。」

オリキャラその２

名前：ジュレイス・ホーネット
愛称：ジュレス
性別：男
年齢：１６歳

身長：１７０ｃｍ
血液型：ＡＢ
髪：茶髪のショート
目：黒
性格：女好き・面白いことが好き
魔法形態：ミッド式
魔力光：山吹色
デバイス：ストレージデバイス『グランディス』（飛刃剣）
ポジション：ガードウイング
モデル：性格は『Ｂｌａｃｋ　Ｃａｔ』より、『ジェノス・ハザード』。容姿は『ガンダム００』より、『ロックオン・ストラトス（弟）』。

第３０班のムードメーカー。
女好きな性格であり、ちょくちょく女の子に声を掛けナンパしたりするが、成功した試しがない。
ジュレスのボケに烈がツッコミを入れることもしばしばある。
モデルが（弟）なのは、（兄）の方だと合わないと思ったから。

「彼女絶賛募集中！！」

「復活早いな。」

「蒼、あなたの能力に封印系か殲滅できるのってない？」

「え～っと……第７章に確か……。（ぺらぺら）」

「アオちゃん第7章はさすがにマズいです。」
「安心しろ。跡形もなく消してやるから。」
「命ばかりはお助けを。ｏｒｚ」
「この第３０斑、大丈夫なのか？」
「どうだろうね～。」
「じゃ次はエルフィな。」

オリキャラその３

名前：エルフォニア・ツェンベルグ
愛称：エルフィ
性別：女
年齢：１５歳
身長：１５７ｃｍ
血液型：Ｏ
髪：桃色のショート
目：緋色
性格：のんびり
魔法形態：近代ベルカ式
魔力光：薄い桃色

デバイス：アームドデバイス『白虎（バイフー）』（双拳爪）
ポジション：フロントアタッカー
モデル：『戦国ランス』より『鈴女』

のんびりした性格。
性格に似合わないがベルカ式の近接型である。
戦闘時は何故かテンションが高くなり、口調も変わる。

「Ｙａａａａａｈａａａａａ！！」

「エルフィさんが壊れた？！」

「意外と戦闘狂なんだな。」

「蒼！感心してないで止めるの手伝え！！スパイラル・バインド！！」

「烈！縛り方は亀甲縛りで頼む！！」

「あんたは一辺死んできなさい！！」

「グはッ＝○）、Д。）・；……バタ。」

～～しばらくお待ち下さい～～

「あはは～。みんなゴメンね～。」

「やっと治まったわね。」

「まともなのは俺とツバキだけか、この斑。」

「烈、あなただけはそのままでいてね。私がもたないわ。」

「……ジュレスの方は俺が抑えるから。」

「ありがとう。」

「次いくぞー。次は私だ!!」

ドタドタドタ。

「作者が今逃げていったのですが。」

「そのうち解る。」

オリキャラその４

名前：草薙　蒼　（くさなぎ・そう）
愛称：アオ（ちゃん）
性別：女
年齢：１５歳（ＳｔｒｉｋｅｒＳ時）
身長：１５６ｃｍ
血液型：Ａ
髪：藍色のストレート
目：水色
性格：基本は冷静。ただし、ふざけることも多い。
魔力光：コバルトブルー
魔法形態：？
武器：愛槍『蒼月』
《機能》：『魔導書の鍵（クラウ゛ィス＝グリモワール）』
モデル：『コードギアス』より『Ｃ．Ｃ．』

烈の双子の妹。
双子であるのに烈に全く似ていない。
警戒心が強い。
兄である烈と、姉妹のようなアリスを最も信頼している。
基本はアリスと共に行動している。
ちなみに貧乳。

「何処行った作者ーーーー！！！」

ドタドタドタドタ。

「アオちゃん行っちゃいました。」

「ま・しかたないだろ。貧乳という設定にしなければよかったものの。」

「それはさておき兄様。Ｓｔｒｉｋｅｒｓ開始の時点だと兄様は１７歳のはずですよね？ですがアオちゃんは１５歳になっていますが……双子ですよね？」

「言ってしまえば単純なんだが、俺が消えた地球の２年後に蒼とアリスが新歴７５年のミッドチルダに飛ばされることになっているから（ｂｙ作者）らしい。」

「似てないって言うか、そう言えば烈のモデルってなんなんだ？」

「……モデルが浮かばなかったんだと。」

「「「……。」」」

「有力候補は『１１ｅｙｅｓ』より、主人公の『皐月　駆』だとか。ただそれでもイメージが合わないって言ってたな。」

「眼帯繋がり？」

「……わからん。だが作者は『戦国ランス』と『１１ｅｙｅｓ』を『ひ○やぼ』を見て知ったから、詳しいことまでは知らないと言っていた。アニメ版『１１ｅｙｅｓ』は作者の住んでいる地域では放送されなかったしな。」

「『ひな○ぼ』って何人わかっただろうね～。」

「待ってろ。俺がニコ動で検索するぜ。」

「必要ないわ。あんただと別の物検索しそうだし。」

「後、蒼の《機能》については名前だけ書いておいた。」

「実際私達の《機能》って《戯言シリーズ》からかなりズレてる気がするんだが。」

「アオちゃんいつの間に……作者さんは見つかりました?」

「逃げられた。」

「どうせこれが終わったらボコすんだろ。で、《戯言シリーズ》の能力からズレているということだが、ちゃんと理由があるからな。」

「どんな理由よ。」

「判明するのはＪＳ事件終了後らしい。（予定）」

「「「遅っ！！」」」

「基本原作沿いだからな。過去のことは後回しだと。さて、そろそろ最後の紹介にいくぞ。」

オリキャラその５

名前：アリステラ
愛称：アリス
性別：女
年齢：１４～１６歳（外見年齢）
身長：７→３０→１５４ｃｍ
髪：銀髪のストレート＋カチューシャ
目：翡翠色
性格：おしとやか
魔法形態：ベルカ式
魔力光：氷のような水色
モデル：『ＶＯＣＡＬＯＩＤ』より『巡音ルカ』

烈のことを兄様と呼ぶ少女。
とある施設で烈＆蒼に助けられ、その後共に行動するようになる。
烈はアリスのことを本当の妹のように接している。
アリス自体には二人の妹がいるが現在何処にいるかは分からない。

「……外見年齢…だと？」

「って、身長でネタばれになってない？」

「気にしないでほしい（ｂｙ作者）だと。」

「ああ！私の妹達は何処にいるのですか！！」

「ちゃんと出て来るっ～て～。」

「その妹の一人が私達よりも先に出るんだよなぁ。」

「そういう予定だと。さて、そろそろ終わりにしようか。」

「は～い。では３０班の皆さんお疲れ様でした～。」

「兄をよろしく頼む。」

「頼りにさせてもらうわ。（ある意味で）」

「それでは皆さん。」

「「「「「「「「「また次回！！！」」」」」」」」」

～～余談～～

ふぅ。なんとか蒼から逃げきれた。

「誰から逃げきれたって？」

ウゲッ！！

「今なら誰もいないしなぁ。第４章第８項、甕布都神（みかふつのかみ）！！」

広域系?!（サンダーレイジよりも範囲が広い）逃げられねぇ!!

「焼鳥になれ!!」

誰が助けて～～!!

本当に終わり。

～第2回オリキャラ紹介～（後書き）

追試とかになったら更新速度が落ちたり、更新できなくなったりするかもしれません。

もしそうなったらごめんなさい。

～PV7万アクセス&ユニーク1万アクセス記念雑談～

PV7万ヒット&ユニーク1万ヒット記念雑談～！！

「5万はどうした。7万は微妙だろ。」

「しかたないんですよ兄様。テスト期間の時期と5万ヒットの時期が被っていたんですから。」

「ま、別にいいんじゃないか？一ヶ月ちょいでこんなに読んでくれてるんだから。」

「それもそうだな。ところで、スバルとギンガも今回の雑談に呼ばれてるはずだが……。」

「ここにいるぞー！！」

「スバル……ここは三国時代の中国じゃない。」

「ごめんね烈。スバルなんか今回テンション高いみたいで。」

「気にしないでいいからなギンガ。」

「ねえねえ烈兄、目と髪と喋り方が違うけどなんで？」

「ほんとだ。どうして？」

「前回の第2回オリキャラ紹介を読んでくれ。だが…その…変か？」

「いいいや！そんなことないよ！むしろ……カッコイイって言うか……って私何言ってんの！！」

「ギン姉顔が赤～い。」

「ちなみに、兄さんは今髪の色が赤味を帯びた黒で、右目が真紅になっている。」

「アオちゃーん、ネタばれ自重して下さい。」

「予定だと4～5話以降にこの姿になる。」

「何が起きるんですか？」

「それはね～。」

「スバル、ネタばれになること言ったら……焼くよ？」

「えー…でも烈兄なら手加減してくれる……。」

「ご飯抜きにするよ？」

「ごめんなさい！！」

「兄さんそれくらいで。ところで作者ー。今後のこの作品の予定とかはどうなってるんだ？」

えー説明するのがメンドー。

「……カチン。」

「あれ?アオちゃんパソコン取り出して何を……」

タララララーララララーララララ♪タララ、ラーララララー♪

ピギャーーー!!!バタッ…。

「「「……」」」

「…蒼、何をした?」

「んー?作者の恥ずかしい出来事を思い出させてあげた。」

「何があったんですか?」

「学校の授業中に作者さんの携帯が鳴ったんですよ、ギンガさん。」

「「「……」」」

「しかもその時設定していた曲が東邦のでー。」

「「東邦って…何?」」

「ギンガとスバルはわからないか。東邦ってのは地球で流行ってるパソコンのゲームで、女の子がたくさん出てくる弾幕シューティングゲームだ。」

「しかもクラスの大半がその曲を知っていたんです。」

「うっわーー恥ずかしいね。」

「それが昨日の出来事で、今日携帯を返してもらったようだ。作者ザマー。私達の本編での出番を増やさないからだ。」

「えっと…蒼さん?ちょっと勘違いしてますよ。」

「何?ギンガが作者の肩を持つ……ハッ!!兄さん、スバル!ギンガが作者に何かされたみたいだ!」

「私は正常です!!」

「ギンガの言う通りだ。」

「えー兄さんまで作者の肩を持つのー。」

「アオちゃんよく考えて下さい。作者は何でこの話を書いていますか?」

「何ってそりゃ携帯……あ。」

「気付いたか。じゃスバル答えを言ってみろ。」

「あたし?!」

「言わないとこの雑談で空気になるぞ。」

「携帯で書いてるから、没収されると続きが書けない。つまり本編が書けない。イコール、アオの出番が遠くなる。ってことでしょ?」

「正解だ。ナデナデ（スバルの頭を撫でる音）」

「えへへ～～。」

「と言うよりもあとがきでしょっちゅう出るんだからいいだろ？寧ろメインヒロインなのにギンガの出番が少ないのがどうかと思うんだが……。作者、そこんとこどうなっている？」

えーあ、はいはい。今復活しました。
ギンガの出番は訓練校編では休日の話とその後の烈の黒モード（仮）の出番の時にも出てくるよ。
あとは訓練校編終了後。と言うか１０８部隊編から出番が増える。
これでいい？だから炎を向けないで。熱いから。

「だそうだ。よかったなギンガ。」

「うん。」

でもギンガってアニメで出番少なかったから、あまり話し方が把握できてないんだよね。
漫画第１巻だと、初対面のティアナとの会話だったから他人行儀みたいだったし……

「『千紫万紅（せんしばんこう）』」

ヒャンヒュンヒュンヒュン！！

危なっ！！刺さったら風穴が空くぞ！！

「いや作者さんが悪いです。」

「烈兄、バインドでこいつを縛って！！」

ごめんなさいごめんなさい！！
ディバインバスターは勘弁して！！

「烈もスバルも作者さん謝ってるから、許してあげて？」

「「ギンガ（ギン姉）が言うなら……」」

ギンガありがとう！！
いやマジで！！

「さっさとギンガの口調を把握しろよ作者。でないと兄さんとスバルに殺されるぞ。」

はい。精進します。

「それでは皆さん、この雑談もこれくらいにしましょう。」

「そうだな。」

「じゃあ私から。この作品を毎回読んでくれている皆様、ありがとうございます。」

「あたしや烈兄、ギン姉。まだ本編での出番はないけどアオやアリス。みんな頑張るのでこれからも応援よろしくお願いします。」

「また、感想や質問、指摘など受け付けていますのでよろしくお願いします。」

「まだまだ最初の部分で更新速度も遅いが、頑張っていきたいと思っている。」

「作者さん、挫折だけはしないで下さいね。」

はい承知しております。

「それでは皆様、今後もこの作品をよろしくお願いします。」

おわり

第１５話　第３０班初訓練　前編（前書き）

ストーリーの構成は練っているんですけどね、
文章がなかなか浮かんできません。
できるだけ頑張ります。

第１５話　第３０班初訓練　前編

「では訓練を開始する。」

教官が皆の前で説明を始める。

「訓練の内容はここからスタートし、２ｋｍ先のゴールまでたどり着くことだ。ただし、途中には様々な障害物、トラップ、オートスフィアなどがある。」

「障害物競争ってところね。」

「制限時間は１チーム３０分。４人全員ゴールできなければ失格とする。失格したチームは訓練終了後デバイス倉庫の掃除だ。」

「うげっ。メンドー。」

「合格すればいいんだよ～。」

「エルフィの言う通りだよ。」

「何か質問は？」

「「「ありません！！」」」

「では１０分後よりＡルートは１斑から、Ｂルートは２０斑からスタートする。それ以降は５分毎にスタートする。では解散。」

各斑毎に散らばってゆく。

「俺等は大分後だな。」

「そうね。」

「確か全部で３２斑だったっけ？」

「３２号室まであるからそうなんじゃな～い。」

ちなみに、この訓練校は男女ともに部屋が３２号室まであり、１斑から８つの斑ごとに分けた計３２名を１クラスとして座学が行われる。

閑話休題。

「じゃあそれまでの間お互いの……」

「お互いの個人情報について話し合うか！？」

「ジュレス、もういっかい叩くよ。」

「スマンｏｒｚ、勘弁してくれ。」

「お互いのポジションとかのことついてよ。確か模擬戦を行う時のために決めておかなきゃいけないでしょ？」

「ついでにお互いの戦い方とかも確認しておかないといけないしね～。」

元々武装隊のフォワードを元にして行われるようになった訓練である。ポジションは決めておかなければならない。さらにお互いの戦闘スタイルを知らなければ、どのような連携を取れるのか、各自どう動けばよいのかわからなくなる。

「そういうことか。俺は……ガードウイング（以降ＧＷ）ってところか？フロントアタッカー（以降ＦＡ）としては力不足、センターガード（以降ＣＧ）は向いてねぇ。」

「なら私はＣＧね。デバイスも弓で射撃型だし。」

「ってあれ？訓練用デバイスじゃないの？」

「ええ、持ち込みよ。ねっムゲン。」

『はじめましてお二方。ムゲンと言います。どうぞよろしく。』

ツバキの指輪が光って喋り、烈とジュレスに挨拶する。

「あっ、こちらこそ。」

「もしかして……エルフィも持ち込みか？」

「うん？そうだよ。爪拳型でＦＡってところかな？」

「……俺達変則デバイス組ってことで組まされたのか？」

「……有り得るね。」

「ってことはあなたたちも持ち込みなの？」

「ああ。意外と知られてなかったんだな。」

「…成る程ね。」

「ところで、烈はフルバック（以降ＦＢ）でいいのかな？」

「ん？いいよ。と言うより、後方支援に向いてるのは俺とツバキくらいじゃない？俺は前衛でも戦えるけど。」

「大概お前のデバイス見た奴は、ベルカ式の近接型って思うだろうけどな。」

「……どんな戦い方するのよ。」

「アハハ。それをこれから話し合うんでしょ。」

「それもそうね。」

「じゃあ俺から……」

ってな訳で、４人は自身の戦闘スタイルについて話し合った。
ちなみに時間が余ったので詳しい自己紹介もすることになった。
まぁそこらへんはもっぱらジュレスが原因だったが。

～～１時間後～～

「３０斑準備！」

「さて、倉庫の掃除は嫌なんで真面目にやりますか。」

「掃除がなかったら真面目じゃないのね。」

「ジュレスにいちいちツッコミを入れると疲れるよ。」

「烈も苦労してるんだね～。」

そんな会話をしながら４人はデバイスをＳｅｔ　ｕｐした状態でスタートラインに並ぶ。
烈の腕には鉄色の篭手。
ジュレスの手には、刃のない剣の刀身が真ん中で内側にＶの字に曲がっている飛刃剣。
ツバキの手には、黄色と緑のラインが入った１ｍはある大弓。
エルフィの拳には、虎の爪を連想させるような白いナックルに鉤爪が付いている。

「準備はいいか！」

「「「「はい！！」」」」

「では……始め！！」

教官の声と同時に４人は走りだした。

～～５００ｍ地点・残り時間２８分～～

Ｂルートは森の中を駆け抜けるルートである。

今のところ３０班のメンバーは何の問題もなく順調に進んでいる。

「今のところ順調ね。」

「これなら楽勝だな。」

「んなわけないよ。」

「そうだよ～～ッツ！！」

突然エルフィの足元が崩れ、大きな穴が開いた。
落とし穴である。

「エルフィ！！」

ツバキが叫ぶ。

「なんのぉっ～！！」

エルフィは崩れる瞬間、魔法で脚力を強化。高く跳躍し落とし穴を回避した。

みんながエルフィの元に駆け寄る。

「落とし穴たぁなんとも古臭いぜ。」

「大丈夫？エルフィ？」

「問題ない、問題な～い。」

「此処からは罠があるってことね。みんな、気をつけましょう。」

「「「オッケー！！」」」

４人は再び進み始めた。

～～１７００ｍ地点・残り制限時間１０分～～

４人は数々のトラップをくぐり抜け、あとゴールまで３００ｍのところまで来ていた。
ちなみに、森の中でのトラップは木々の間にオートスフィアが設置されていたり、いきなりロープで縛られた丸太が飛んできたり、何処から出てきたのか巨大な岩が転がってきたり、などが多かった。
しかし、４人は今日初めて組んだチームにも関わらず、見事な連携でトラップを全てクリアしていった。

残りの３００ｍは森ではなく高低差が激しい丘陵になっている。

「なんとか間に合いそうだな。」

「まだ油断しちゃいけないわ。トラップやオートスフィアがあるかも。」

「まったくだよ。森の中でのトラップ、全部ジュレスが起動させてたよね。」

「うっ！！……あれは、いや、その……スマン。」

「まあまあこんな所にトラップなんて仕掛けられないだろうし～♪

大丈夫だよ～♪多分♪」

「エルフィ、お前なんかテンション高くないか？」

「そんなことないよ～♪」

「あら？あれって私達の前の斑？」

ツバキが５０ｍくらい先にいる４人組を指差す。

此処からではよく見えないが、４人は丘の元におり、攻撃から逃れているような状況だった。

「何かあったのかな？行ってみようか？」

烈が提案する。

「そうね、何かこの先にあるのかもしれないわ。」

「じゃあ早く行こ～～♪」

「おいエルフィ待てよ！」

エルフィが走って行き、ジュレスが追い掛けていった。

んで、残された2人はというと、烈が疑問に思っていたことをツバ

キに聞いていた。

「……ねぇツバキ。」

「なに？」

「なんでツバキあんなにテンション高いの？」

「……多分、本能で感じているんじゃないかしら。」

「感じる？何を？」

「…ま、わかるわよ。」

「ふーん。」

～～１８００ｍ地点・残り制限時間８分～～

「どうしたんですか？」

ツバキと烈は２人に追い付いて、４人で前の斑の元へ辿り着いた。

「ああ、３０斑の奴らか。」

男子の１人が振り向く。

「どうしたんだお前等。このままだと時間切れになるぞ。」

「それがね……」

ジュレスの質問に女子は口ごもる。

「「「「？」」」」

「この先に狙撃用のオートスフィアが設置されていて近付けないんだ。」

もう１人の男子が答える。

「狙撃用だって？」

「確か……魔導師Ｂランクの試験で使われているやつ…だっけ？」

「なんでそんな物があるのよ！！」

「俺が知るかよ！！」

ジュレスの疑問に烈が答え、それにツバキの疑問に男子が叫ぶ。

「ご・ごめん。」

「ともかくね、その狙撃用スフィアとその周りのオートスフィアが邪魔でゴールに行けないの。」

こんどはもう1人の女子が答えた。

「こんなの合格出来んのかよ。」

「意地悪な教官だね～♪」

「のわりにはお前は楽しそうだな。」

「むふふ～そう?」

「ふ～ん。…よっと。」

ツバキが丘から顔を出し、スフィアの位置を確認しようとした。

だが――

ピュン！

「えっ？」

「ツバキ！！」

烈が飛び出し、ツバキを下へ引っ張った。

その後ツバキの頭のあった場所を魔力弾が通過した。

「……。」

「ツバキ大丈夫？」

「…え、ええ。なんとか。」

「これでわかったか？何で俺等が動けないか。」

8人の中に沈黙が流れる。

一一と突然、烈が沈黙を破った。

「ツバキ、此処から狙撃用スフィアまでどれくらい距離があった？」

「えっ？…えーっと……１００ｍくらいかしら。」

「１００ｍ……ツバキ、君の弓で此処から狙撃用スフィアを狙って、破壊することができる？」

「できるけど……時間が掛かるし、こっちが狙われるわ。」

「成る程。んじゃ、ちょっと作戦タイムといこうか。」

「「「「「？？？」」」」」

その場にいた烈以外全員の頭に？マークが浮かんでいた。

～～あとがきコーナー～～

ア「本日もあとがきコーナーのお時間です。

何故か今日はアオちゃんがいないので、代わりに烈兄様に来ていただきました。」

烈「出番欲しいと文句を言っていたのに、あいつは何処行ったんだ。」

ア「さぁ、私にはわかりませんが、作者の所にでも行ってるんじゃ

ないでしょうか。」

烈「行っても出番は変わらないと思うが……。」

ア「速くＳｔｒｉｋｅｒＳ本編に話を進めろとでも言ってるんじゃないですか。ところで兄様、作者はこんなところで話を切りましたが、どんな作戦を考えているのですか？」

烈「言ったら意味がないだろ。次話投稿を待ってくれ。」

ア「え～少しくらい教えてくれてもいいじゃないですか。」

烈「……そうだな……俺がＦＢとして糸と《機能》でみんなのサポートをする、とだけ言っておこう。」

ア「何するか楽しみですね。」

烈「楽しみって程ではないけどな。」

まったく烈はアリスに甘いな。このシスコン！！

烈「……スパイラル・バインド」

ハハハハハってエエぇぇぇ！

烈「アリス、特大の頼む。」

ア「はい、兄様♪」

ちょっと待てアリス！！

ア「待ちません。兄様のお願いですから。」

こっちはブラコンだったぁ！！

ア「……凍てつく凍土…蒼天の冷気…氷の風…嵐の雪…全ての生命に永き寝りを！！『絶対零度（アイシス・オブ・ゼロ）』！！」

寒っっ！！ ～～（＜＿＞；）～～

ってあれ？なんだか……眠く…なっ……て……きた……よ。

ピシピシカキーン。

烈「作者の氷浸けの出来上がりか。」

ア「気持ち悪いですねぇ。ってあれ？作者がここにいるってことはアオちゃん何処に行ったんでしょう？」

烈「さあな。ま、そのうち帰ってくるだろ。」

ア「それもそうですね。それでは皆さん今回はこれまでです。」

烈／ア「「また次回！！」」

番　外　編　草薙烈追跡日記（前書き）

ア／烈「「本編は?!」」

K２「また次回です。理由はあとがきにて。あと余談ですが、作者は追試を免れました。（ふぅ。）」

ア「……チッ。」

烈／K２「「アリスが黒い!!」」

ア「なんのことでしょう?それでは番外編、どうぞ。」

番外編　草薙烈追跡日記

烈は現在、スバルと一緒に街中を歩いている。
今日は休日。みんな体を休めたり、どこかへ出かけて遊んだり、トレーニングをしたりしている。
それはさておき、後ろから烈とスバルを追い掛ける影が３つ。
言わずとも３０班の３人である。
ちょっと３人に視点を当ててみよう。

「さてさて、烈はスバルと何処に行くんだ♪」
「ジュレス。あんた趣味悪いわよ。」
「でもあたし達も同じだよね～。」
「うっ！！……だって…気になるじゃない！！」
「声が大きいぜツバキ。二人に気付かれる。」

「ご…ごめん。」

さて、マジで何処に行くんだか。
っとなんでこんなことになってるか説明しないといけねぇな。
ってことで回想が入るぜ。

〜〜回想〜〜

朝ー男子寮３０号室

「なぁ烈、今日の休みどうするよ？暇なら街にナンパしにでも行かねぇか？」

ジュレスが烈に今日の休みをどうするかと話し掛ける。

「失敗すると思うよ。あと俺今日用事あるから。」

だが返ってきたのは既に予定があるという言葉。

「ああ？用事？」

俺は寝そべっていたベッドから体を起こした。
見ると烈がベージュのズボンに長袖の黒いシャツという地味な服を着ていた。
てかいっつも左腕隠すよな。
訓練の時もジャージの袖、左腕だけは曲げねぇし。

「何処に行くんだ？」
「あーそれは……」
バンッ！
「烈兄～♪」
いきなりスバルが扉を開け入ってきた。
「スバル準備できた？」
「うん。」
「じゃあ行こうか。ジュレスー出掛けてくるから。」

「バイバイ～。」

バタン

扉を閉めて二人は行ってしまった。

んで取り残された俺はというと……

「……面白そうだな。」

ピッピッピピ

俺はコンソールを叩き、あるやつに通信を繋ぐ。

『はい。ツバキですけど……ってジュレス？どうかしたの？』

繋いだ相手は同じ班のツバキとエルフィの部屋だ。

「おう、お前ら今日暇か？」

『べつに用事はないよ～。』

ツバキの隣からエルフィが割り込んでくる。

「おお？そうか？面白いこと見つけたんだ。ちょっと付き合ってくんねぇか？」

『いいよ～。』

『いいけど……烈は？』

「あいつはいねー。スバルと出掛けたぜ。」

『ふーん……。わかったわ、今から準備する。でも……』

「でも？」

『私やエルフィに変なことしたらぶっ飛ばすからね！！』

「りょ、りょーかーい。（汗）」

ピシュン

俺は通信を切り、ベッドから起き上がる。

「さてと……烈とスバルのデート。どうなるか楽しませてもらうぜ！！」

～回想終わり～

で、二人にいろいろと説明し、現在烈とスバルを尾行しているということになっているってわけだ。

「でもさぁ…」

「どうしたの～ツバキ？」

「烈もスバルもデートに行く、そうでないとしても外出するとしたら服が地味じゃない？」

「そういやぁそうだな。」

「読者の皆さんには申し訳ないですが～作者はファッションについての知識が全くないので～スバルの服装はご想像にお任せしま～す。」

「「誰に話してんの？！」」

「あれ？あの人達誰だろ～？」

「「流された！！」」

とまあそんなことを言いつつも俺とツバキはエルフィが指差した方を見た。

そこでは烈とスバルが、ある二人組と話していた。
一人は紫のロングヘアーを藍色のリボンで結んだ女性、もう一人は
４～５０代くらいで白髪のオッサンだった。

「あれって…もしかしてスバルのお姉さんとお父さん？」

「綺麗な人だね～。なんかスバルにも似てる気がする～。」

言い忘れてたがツバキとエルフィはスバルのことを知っている。
エルフィがベルカ式組の訓練の時に話して仲良くなったとか。
ツバキはその後エルフィから紹介されたらしいぜ。
はい、説明以上。

てか家族との外出か、デートじゃなかったか。つまんねぇなぁ。
だがもうそんなことはどうでもいい！！
俺は今、スバルのお姉さんが綺麗だということにしか興味はない！！

「ちょっと行ってくるぜ。」

「待ちなさい。」

ガシッ、っとツバキに肩を捕まれる。

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！俺はあの人とお近づきになりたいんだ！！」

「どアホーーー！！！」

ゴンッ！！

「ゴハッ！！……ガクッ……」

俺はツバキの取り出した萌黄色の棍棒で叩か……いや殴られた？

「ツバキ～、その棍棒は何処かは出したの～？」

「これ？いざって時のためにって、烈が矢以外の魔力の形態変化の方法を教えてくれたの。ムゲンから出したわ。」

『マスターは矢しか作ったことありませんが、今回はその応用というところですね。』

ムゲンがツバキの説明に補足を入れる。

「……ゴンって鳴ったし、めっちゃ痛いんですけど。」

「私が改良したからよ。…もうちょっと硬くしたほうがいいかしら？」

「勘弁してくれ。ｏｒｚ」

「二人とも～、烈達がどっか行っちゃうよ～。」

エルフィの言う通り、烈とナカジマ一家の四人は話しを止め歩き出していた。

「おお?!見失ったらいかん!追うぜ二人共!!」

そして、俺は走り出した。

「待ちなさいよ!」

「あっ!置いてかないで～!!」

残り二人も走り、俺達はナカジマ一家と烈を追い掛けて行った。

～～１０分後～～

「店の中に入って行ったな。」

再び三人は遠くから烈達を観察している。

周りの人々から変な目で見られているが、三人は気付いていない。

「あそこって……花屋？」

「……花？……そういえば確かこの先には～……。」

「お？出て来たぜ。」

エルフィが何か思い出そうとしているが、ジュレスの言葉で思考の海から引き戻された。

見ると、スバルが花束を抱えながら四人が店から出て来ていた。

そして、そのまま四人は歩き出した。

「おっ？今度は何処へ行くんだ？よし、追うｚ－－」

「あぁぁーーーー！！！」

いきなりエルフィが大声で叫び立ち上げった。

ジュレスとツバキは突然耳元で大声を出され、耳を塞いでいる。
周りの人々も突然の大声に驚いている。

「いきなり大声出すな！！」

「どうしたのよ？！」

ジュレスとツバキは、エルフィの叫びに驚いたが、なんとか持ち直しエルフィに突然の行動を問い詰める。

「帰るよ！！」

「「はぁ？！」」

「いいから！！」

エルフィは二人の襟をガシッと掴み、引っ張ってゆく。

「おいエルフィ、離せって！！」

「苦し……ギブギブ！！」

二人は逆らえず、烈達の行き先を見届けれずエルフィに引きずられ

て帰る羽目となってしまった。

「まさかエルフィが気付いてくれたなんてね。冷静なツバキが気付くかと思ったんだけど。」

「烈、どうかした？」

「なんでもないよギンガ。」

俺達は今、ギンガとスバルのお母さん、クイントさんのお墓に来ている。

ギンガやスバルが物心がついたころ、任務中で亡くなったらしく、今日がその命日らしい。

今はスバルが花束を添えて墓の前で手を合わせている。

「烈。ちょっといいか？」

突然、ゲンヤさんに呼び掛けられた。
見ると手招きしている。
ギンガやスバルには聞かれたくない話なのだろうか？
とにかく俺はゲンヤさんの方へと向かった。

「お前には……話しておこうかと思ってな。」

ゲンヤさんはクイントさんの墓から離れた場所で話を始めた。

「うちの女房はな、特秘匿任務中の事故で死んだことになっている。」

そのことは前にも聞いた。
俺はゲンヤさんの話を黙って聞いている。

「だがな、俺は納得していねぇ。女房はどっかで見ちゃいけねぇ物、踏み込んじゃあいけねぇ物に踏み込んじまったんじゃねぇかって思ってる。」

「……殺されたってことですか？」

俺はゲンヤさんにとっては認めたくない言葉を言う。

「わからねぇ。死亡原因も真相も闇に葬られている。」

「……調べることは……できないんですか？」

「俺も地道に調べてはいる。だが……女房との約束でな……ギンガとスバルをちゃんと育ててやるってな。だから……はっきりした証拠は掴めていねぇ。」

俺は、何も言えなかった。

「だがな。」

「えっ？」

「お前が家に来てからスバルの面倒を見てくれて、少しだけ…ほんの少しだけだが調べる余裕ができた。」

「……ゲンヤさん。」

「それでも、証拠は十分に揃ってはいねぇ。だが――」

「だったら！！」

俺はいつの間にか叫んでいた。
俺の叫びにゲンヤさんは話を止める。
「俺も手伝います。」
これは俺のこの話を聞いての本心だった。
俺は突然来てしまったこの世界で右も左もわからかった。
だけど、この人達は優しくしてくれた。
俺を助けてくれた。
俺がギンガを助けたからって理由だと思っていたけど。
だけどそうじゃなかった。
本当に優しくて本当の家族みたいに接してくれた。
だから俺はこの人達の力になりたい。
そう、心の底から思った。
「いいのか？お前は元の世界に戻る方法を探さなくていいのか？」
ゲンヤさんの言うことは尤もだ。
元の世界には蒼とアリスが……妹達がいる。
だけど…蒼は強いから、アリスと一緒にしっかり生きていると思う。

心配じゃないって言ったら嘘になる。
たった一人の肉親と俺を兄と慕ってくれる女の子。
二人共……大切な家族だ。
だから信じている。きっと二人は俺がいなくても生きているって。
だから今は力になりたい。

「確かに元の世界に居る妹達は心配です。でも、きっと大丈夫です。妹は強いですから。」

「そうか。……ありがとな。」

「いえ。」

「じゃ、戻るか。スバルとギンガのところへ。」

「はい。」

ゲンヤさんは歩き出し、俺もそれについていった。

この日だった。
俺が陸士１０８部隊に入ろうと思ったのは。

～～余談～～

ギンガとゲンヤさんと別れ、訓練校に帰ってきた。

「ただいまー。」

と自室のドアを開けた瞬間

「れぇぇーーーつ!!!」

「うわっ?!」

スッパーン!!

「ゴフッ!!」

いきなりジュレスが飛び掛かってきたので、魔力でハリセンを作っ

ておもいっきり叩いた。

「ジュレス、いきなり何？」

「スバルのお姉さん紹介してくれ！！！」

ハリセンで叩かれたのに、ガバッとジュレスは何事もなかったかのように起き上がり言う。

「……今日尾行してたのが、ばれてないとでも思ってるの？」

「な、なんだってぇーー？（Ｏдｏ；≡；ｏДＯ）！！！何時から気付いてた？！」

「最初から。あと紹介はしないから。危ないし。」

「なんですとぅおぉーーー！！！」

そのままジュレスはガクッと崩れ落ちた。

ジュレスの叫び声は寮全体に響き渡ったとか響き渡らなかったとか。

～～あとがきコーナー番外編～～

K２「はい、今回は番外編でした。時期は訓練校入学から２ヶ月後の休みになります。」

烈「１６話の後にやれよ。」

K２「いや、ね。この話を１７話として書いたら１７・１８話と連続して休日の話になるからね。」

烈「なるほどな。それはさておき、作者謝ることがあるんじゃないか？」

K２「はい。第１回のオリキャラ紹介にて大きな間違いがありました。すいまっせんっしたーーー！！！ｍ（＿＿）ｍ」

烈「間違いの部分はここになる。」

誤）

《機能》

・精神エネルギーを利用し、自然に干渉することで自然の力を操る能力。

烈「で、正しいのはこうなる。」

正）

《機能》

・烈と蒼の所有する特殊能力。基本は氣の力を用いるが、現在二人は魔力を使い能力を使っている。

『魔力作用資質』

・烈の《機能》をなのはの世界で表現した能力。

・精神エネルギーを利用し、自然に干渉することで自然の力を操ることができる。

Ｋ２「本当に申し訳ありません。第２回オリキャラ紹介を見直して気が付きました。第１回の方も修正いたしましたが、ここでお知らせしておきます。」

烈「今後は無いようにな。」

Ｋ２「はい。以後気をつけます。」

烈「それでは今回はここまでだ。」

Ｋ２「感想や意見、指摘や誤字・脱字などお待ちしております。」

烈「では次回、第１６話　第３０班初訓練　後編。よろしく。」

第１６話　第３０班初訓練　後編（前書き）

戦闘描写は難しいです。

それでは本編をどうぞ。

第１６話　第３０班初訓練　後編

「……っとまあこんな感じかな。」

烈がみんなに説明を終える。

作戦の内容を要約するならば、ジュレスとエルフィが突撃しオートスフィアを破壊。
さらに狙撃用スフィアの注意二人にを引き付けさせる。
烈はみんなにブーストを掛けて援護し、ツバキが強力な遠距離射撃で狙撃用スフィアを撃ち抜くというものであった。

「……悪くないわね。」

「いや明らかに俺とエルフィが危険だよな。」

「大丈夫。俺が全員サポートするから。」

「でもよぉ…。」

「ジュレス、あんた倉庫掃除したくないんじゃないの？それにエルフィはやる気マンマンよ。」

「「えっ？」」

ツバキの言葉にこの場にいる全員がエルフィの方を向くと……。

「やっと暴れられるぜ!!あたしの血が騒ぐぅ!!」

「「「「「……」」」」」

キャラが変わっていた。

29班の人達、ジュレスと烈はドン引きである。

「……えっと、エルフィ…さん?」

「なんだジュレス?なんか文句あんのか?あぁ?!」

「……イイエ、アリマセン。」

あまりの変化にジュレスは片言である。

(ねぇツバキ。)

烈が念話でツバキに話し掛ける。

(エルフィのあの変わり様はなに、とでも言いたいんでしょ。)

(うん、まぁ。さっきまでテンションが高かったのは、小規模とはいえ戦闘になるって感じていたってこと?)

（そ。エルフィはね、昔からああなのよ。喧嘩になった時とかによく……ね。）

（苦労してた？）

（……結構。）

「おい、ツバキに烈！何コソコソしてんだよ！さっさとやろうぜ、時間ねぇよ！」

2人が話していることに気が付いたのか、エルフィが叫んだ。

「あ、うん。ゴメン。じゃ作戦通りにね。」

「わかったわ。」

「任せろ！！突っ込めばいいんだろ？」

「狙撃用スフィアとオートスフィアを撹乱してくれればいいんだよ。ツバキが狙われないようにね。」

「うっしゃあ！！やったるぜ！！」

「ジュレス、エルフィの援護頼んだわよ。」

「へいへい。わかったよ、やりゃいいんだろ。」

～～１８００m地点・残り制限時間5分～～

「作戦……開始！！」

ツバキの掛け声とともに、３０班のメンバー全員が丘から飛び出した。

狙撃用スフィアは同時に４人現れたため、誰をターゲットにするか迷っている。

エルフィとジュレスはスフィアに向かって突撃。
ツバキと烈は丘の頂上におり、ツバキは弓を構え矢を構成している。
烈は胸の前で手を地面と垂直にして立て、薬指と小指を曲げ、手で印を結んでいるようである。

ウィィーーン

狙撃用スフィアが向かって来るエルフィに狙いを定めた。
周辺にあるオートスフィアも同時にエルフィとジュレスに狙いを定めている。

「紅の焔よ…汝は矛…汝は盾…汝は空駆ける焔の騎馬！！身に宿り彼の者を武士（もののふ）と化せ！！『紅華緑葉（こうかりょくよう）』！！」

烈の足元に真紅のミッド式魔法陣が現れ、詠唱が響く。

ボオォ！！

烈の詠唱に応えたかのように、エルフィの手足、ジュレスとツバキのデバイスに炎が燈（とも）る。

「うわったった熱っ……くねぇ。」

「力が漲（みなぎ）るぜ！！白虎（バイフー）！！」

『ロードカートリッジ』

「……暖かい。ムゲン！！」

『イエス、マスター。Ｂｒａｖｅ　Ａｒｒｏｗ。』

みんな突然自身に炎が燈ったことには驚いたが、烈のサポートだとわかり自分のすべきことに集中する。
デバイスにも何の問題もないようである。

ピュンピュンピュン！！！

オートスフィアから魔力弾がエルフィに向かって放たれる。

「させっかよ！！ワイドスライサー！！」

『Ｗｉｄｅ　Ｓｌｉｃｅｒ』

ジュレスが飛刃剣からＶ字の魔力の刃を放った。
炎を纏った魔力刃は弧を描き、放たれた魔力弾を全て打ち消した。

「ゲイル……クロー！！」

カートリッジをロードした白虎の爪の部分から桃色の魔力が現れ、
約３０ｃｍ程の魔力爪になった。

「うらぁ！！」

エルフィが両手の爪でオートスフィアを３つ同時に切り裂いた。

残りのオートスフィアがツバキに狙いを定めるが……

「スパイラル・バインド！！」

スフィアの下に現れた真紅の魔法陣から魔力糸が発生し、スフィア
を拘束した。

「もう……一丁！！」

ジュレスが再びワイドスライサーを放ち、拘束された3つのオートスフィアを全て破壊する。

ピシュン！！

狙撃用スフィアがジュレスに向かって魔力弾を放った。
ジュレスはオートスフィアを破壊したことに気を取られて気が付かない。

「ジュレス！！」

エルフィが叫びがエルフィの位置からでは間に合わない。

「させるかーー！！」

烈の叫びとともに、ジュレスが魔力弾を避けた。

いや、ジュレスが避けたのではない。ジュレスの胴体に紅い魔力の糸が巻き付いている。

烈の魔力糸だ。
烈が糸を巻き付けてジュレスを引っ張り、ギリギリのところで回避させることができたのだ。

「助かったぜ烈。」

「ボサッとすんな！！また来る！！」

エルフィの言う通り、狙撃用スフィアは再び魔力弾をチャージしていた。

「うおぉ！！虎虚昇拳（ここしょうけん）！！」

エルフィがスフィアに突撃する。
足に纏った炎のお陰か、かなりのスピードが出ている。
魔力爪を大きな拳に変化させ、狙撃用スフィアに殴り掛かる。

だが――

キィィィン！！

「なっ？！バリア！！」

エルフィの拳はバリアに弾かれてしまった。

ピュイ――ン

スフィアが再び魔力弾を発射しようとしていた。

しかし――

「エルフィ、ジュレス、下がって!!」

ツバキが叫ぶ。

ツバキのデバイス・ムゲンには炎を纏った螺旋状の矢があった。

ジュレスとエルフィは地面を蹴って跳び下がり、スフィアから距離をとる。

「射ぬけ、彗星!!ブレイブ・アロー!!」

二人が距離をとると同時に、ツバキは弓の弦から手を離し、矢を放った。

螺旋状の矢は、炎により加速し、回転し螺旋を描きながらスフィアへと向かう。

矢に気付いたスフィアは魔力弾を矢に向けて撃つが、烈の放った魔力糸によって弾かれた。

そのまま矢はバリアに衝突した。

「いっけーーーっ！！！」

ピキ

ツバキの叫びとともに、バリアにひびが入る。

ピキピキピキ、パリーン！！

螺旋の矢はバリアを突き破り、そのままスフィアに直撃。

矢はスフィアを貫いた。

ドォーン！！

本体を貫かれたスフィアは爆発し、炎が燃え上がる。

「やっ……た？」

「お疲れ様。ツバキ。」

ツバキがその場にペタンとへたり込む。

どうやら緊張がとけてしまったようだ。

「あは、あはははは。」

「大丈夫？」

「ちょっと立てないみたい。」

「お～い！大丈夫か～？」

スフィアの残骸の近くからジュレスはツバキを心配し、エルフィは手を振っている。

「行こうかツバキ。」

「ちょっと待って。私まだ立て……」

「よっと。」

「キャッ！れれれ烈！！おおお降ろして！！」

烈がツバキを両手で抱え上げていた。
というかお姫様抱っこである。
ツバキの顔はあまりの恥ずかしさに、耳まで赤くなっている。

「立てないんでしょ?だったら抱えていくよ。」

「いいいいや、そうじゃなくて!!」

「まあまあ、気にしない。気にしない。」

とそんな会話をしていると既にジュレスとエルフィがいる所まで来ていた。

「おーおー。熱いねぇ。」

「ツバキ顔が真っ赤だよ~。」

二人ともツバキをからかう。
エルフィは元の状態に戻っていた。

「もう自分で立てるから!!」

「わかったわかった。」

烈はツバキを降ろす。

「しっかし、まさか烈が魔力変換資質を持ってるとはな。」

「しかもブースト魔法に利用してたね～。」

「まぁ…ね。（魔力変換資質じゃないんだけど…ま・いっか）」

「みんな、早くしないと時間切れになるわよ。」

「そうだった！みんな早く行こうぜ！掃除やらされる！」

そう言ってジュレスは走って行った。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

「俺達も行こう。」

「そうだね～。」

残りの3人もジュレスを追い掛けて行った。

その後、訓練は終了。
Bルートの狙撃用スフィアは教官が間違って出したものであったため、全員罰掃除は与えられなかった。

だが、狙撃用スフィアを破壊したことに教官達は驚き、今回の訓練での第30班の成績はトップだったという。

～～あとがきコーナー～～

蒼「あとがきコーナーよ、私は帰って来た！！」

ア「ミサイル発射ァ！！」

蒼「あのミサイルを墜とせッ！！プラントをやらせるなァ！！」

ア「作者はイ◯ーク・ジ◯ールは好きなキャラだそうですよ。ガンダムネタはここらへんにしまして、ところで前回は何処へ行ってたんですか？」

蒼「……聞かないで。軽く欝なんだ。」

ア「……まぁほおっておきましょう。では今回のあとがきコーナーは３０班メンバーの使用した技について説明します。」

蒼「出て来た順番に紹介する。では兄さんのから。」

『紅華緑葉（こうかりょくよう）』
・使用者　烈
・烈の《機能》と魔法を併用したブースト魔法
・効果は、身体もしくはデバイスに炎の属性を付加することができる。
腕に付加すれば、腕力向上。
脚に付加すれば、脚力の向上だけでなく、ブースターとしても使える。
背中に付加すれば、翼が生えて飛行が可能。
デバイスに付加すれば、変換資質がなくとも炎属性の攻撃が可能となる。
・空港災害で使用したのはこれに当たる。
・名前の由来は、四字熟語の『紅花緑葉』

『ワイドスライサー』
・使用者　ジュレス
・グランディスの刃に纏った魔力を打ち出す技。
弧を描き、ブーメランのように飛ぶ。

『ゲイルクロー』
・使用者　エルフィ
・白虎に魔力の爪を纏う技。
長さは術者次第である。

『スパイラル・バインド』
・使用者　烈
・魔力の糸が発生するバインド。
　基本は5本糸が螺旋を描いて現れ、対象（人）の四肢を拘束してから体を拘束する。
　基本は設置せず、指定した場所に魔法陣を展開して糸を発生させる。設置することができないわけではない。

『虎虚昇拳（ここしょうけん）』
・使用者　エルフィ
・魔力をナックル状に纏ったアッパー攻撃。
　基本はこの技で相手を打ち上げて追撃の技を繰り出すが今回はバリアにより阻まれてしまった。

『ブレイブ・アロー』
・使用者　ツバキ
・ツバキの使用する技で、最も攻撃力・貫通性が高い技。
　形状は先が螺旋状になった矢

ア「以上になります。」

蒼「一気に出し過ぎだろ。」

ア「まぁ、実質今回が初めての戦闘描写ですから。」

蒼「技の説明に話まるまる1話使う訳にもいかないか。」

ア「ただでさえ、更新速度遅いんですから。」

蒼「はぁ。出番は遠いな。ところで、今回のエルフィの性格変化だが、元になったキャラは何だと思う？（作者は彼女（≠エルフィ）を完全に表現できないがな。）」

ア「『死色の真紅』『砂漠の鷹（デザート・イーグル）』『人類最強の請負人』『赤き征裁（オーバーキルドレッド）』『一騎当千』と言えばよろしいですか？」

蒼「はい、もういいです。戯言シリーズ読者の方は分かりますよね。」

ア「でも、作者は彼女（≠エルフィ）の表現が難しいって言ってましたよ。」

蒼「西尾さんもよく書けるなぁって思うよ。てか西尾さんの描くキャラは殆どが個性的だ。」

ア「自称奇策士さんとか、ハイテンションな蒼色サウ〝ァンとか、保健室登校の女の子とか、吸血鬼のツッコミ役君とか、完全無欠の生徒会長さんとか、ですね。」

蒼「全員わかる人いるのか？」

ア「わかった方には感想やコメントで答えを送ってみて下さい。」

蒼「かと言って何かあるわけではないけどな。」

ア「じゃあ、解答してくれた方の作品の主人公の氷像を作ってプレゼントします。」

蒼「受け取ってくれるのかどうかわかないがな。」

ア「アオちゃんヒドイ！！」

蒼「ちなみに一応次回のあとがきで答えは発表するつもりだ。」

ア「グスン。……そろそろお時間です。」

蒼「それではまた次回～～。」

ア「次回もよろしくお願いします。」

第１６話　第３０班初訓練　後編（後書き）

～～裏あとがきコーナー～～

烈「なんだ裏って。」

ギ「さぁ？」

Ｋ２「どうも～。作者です。（キラッ☆）」

烈「きしょいから止めろ。ところで何だこれは。」

Ｋ２「今回アンケートを取ろうかと思いまして。」

ギ「アンケートですか？」

Ｋ２「はい。この作品今回で１６話ですよね。」
　んで、このままだと訓練校編が終わるのが、番外編含めて２３話くらいになるんです。」

ギ「えっと……３ヶ月後の休日の話、烈の能力で？の部分の話、３０班対３２班の模擬戦を予定していたんですよね？」

Ｋ２「そ。でもやっぱちょっと長いかな？って思うんです。そこで皆さんにアンケートなんです。」

烈「内容は？」

Ｋ２「烈の能力まで書くのは決めています。アンケートの部分は、３０班対３２班の模擬戦を書くか書かないかです。」

ギ「書くなら訓練校編がもうちょっと続いて、書かないなら１０８部隊編になるんですね。」

Ｋ２「最近ちょっと忙しいので、夜にちょっとずつしか本編を書けないというのもあるんですが、皆さんはもう少し訓練校編がいいか、それともさっさと１０８部隊編に進んだ方がよいか、というのを聞きたいんです。」

烈「なるほどな。」

Ｋ２「締め切りは１週間後の１９日までです。アンケートは感想にて答えて下さい。ついでにこの作品の感想も書いてくれるとうれしいです。」

ギ「質問・指摘でも構いませんので感想を書いてくれるとありがたいです。」

烈「それではこのコーナーもこの辺で。」

ギ「次回もよろしくお願いします。」

第17話　休日の出来事（前書き）

Ｋ２「最近、烈の容姿のイメージが変わってきてるんだよね。」

烈「何故だ。」

Ｋ２「黒モードならともかく、普通の状態だと駆君が似合わない気がしてね。」

烈「ちなみに今のイメージは？」

Ｋ２「『ＭＡＲ』のロラン。もしくは『舞一乙ＨＩＭＥ（漫画ｖｅｒ）』のマシロ君。」

烈「そうか。では本編始まるぞ。今回はティアナの視点が多い。」

Ｋ２「元々原作漫画版の話だけど、心情表現のところとか手間取ってしまいました。それでは本編をどうぞ。」

第17話　休日の出来事

～～ティアナＳｉｄｅ～～

あたし、ティアナ・ランスターが陸士訓練校に入学してはや三ヶ月。
日ごろの訓練は順調、現在はミッド式組とベルカ式組に分かれての訓練中。

「次ー―32番。」

「はい！」

あたしの番になり、あたしは指定された位置につく。
今の訓練内容は森の中に設置された的に射撃魔法を当てるというもの。
軽いテストのようなものであり、成績にも影響するみたい。
あたしは自分のデバイスを構えオレンジ色の魔力弾を形成する。

パシュッパシュッ！

デバイスの引き金を引き、２発の魔力弾を撃った。

ビシッビシッ！！

放たれた魔力弾は木々の間を縫っていき、設置された的に２発とも命中した。

「「「おおーっ。」」」

周囲から感嘆の声が上がる。

「よーしいいぞ３２番。」

「ありがとうございますッ！（ギリギリ……）」

なんとか的に当たっけど外れるところだった。

「次ーーっと男子の方が終わってないな。３０番ーークサナギ！！」

「はい！」

次は草薙候補生みたいね。
ま・女子よりも男子の数が多いからしかたない。

あたしは少し離れ、既にテストを終えた人達が射撃魔法の練習している場へ向かう。

自分が終わって他の人のテストを見ている人もいるが、あたしは練習。

そう思い、１０m離れた的の前に立つが隣に嫌な人物がいた。

「はっ！！」

そいつは大きな弓を構え矢で的を射っている。

ツバキ・ヒメミヤ。何かとあたしに突っ掛かってくる奴。
って言うか、あたしと色々と被っている。性格的なところとか、ポジションとか、成績も同じくらいだし。

いやこいつは無視しよう。
気にしてたら練習ができない。

そう思い、あたしは的に向かって魔力弾を撃つ。

ビシッ！

的に弾は命中。あたしはカートリッジを詰め替える。

ビシッビシッビシッ！！！

隣ではヒメミヤが的の真ん中に矢を3本も当てていた。

「フンッ。」

こっちを見て鼻で笑った。

ムッカつく。

あたしは負けじと思い再び魔力弾を撃とうとデバイスを構えるが……

「「「おおっー！！スゲーッ！！」」」

いきなり歓声が聞こえてきたので、気になって振り返ってしまった。

どうやら草薙候補生のテストのようだ。

何があったのだろう？

～～ティアナＳｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～烈Ｓｉｄｅ～～

「次ーーーっと男子の方が終わってないな。３０番ーークサナギ！！」

「はい！」

俺の名前が呼ばれた。

俺は指定された位置に立ち、右手に魔力を集中させる。

「せいやッ！！」

右腕を振り、５本の魔力糸を放つ。

魔力糸はそれぞれが木々の間を通り抜けてゆく。

ガッガッガッガッガッ！！！

５本全て的に命中した。

「「「おおっー！！スゲーッ！！」」」

周りのミッド組の人々が歓声を上げる。

「凄いんだがな…３０番。」

「はい？」

教官が複雑な表情をしている。
何かマズかっただろうか？

「今は射撃魔法のテストだから射撃魔法を使って欲しいんだが……」

「……あっ、すいません。」

なんだそういうことか、なら。
俺は右手を前に突き出す。
そして、魔力でできた真紅の剣とナイフを形成する。

「フォトンブレイド……フォトンダガー……シュート！！」

右手を振り剣とダガーを打ち出す。
剣は一直線に木々の間を針に糸を通すように進み、ダガーは自身が鳥のように木々を縫って進んだ。

ガッガッ！！

２本とも的に命中。しかも真ん中だ。

「「「おおっーー！！」」」

再び歓声。

「ふむ……上出来だな３０番。」

「ありがとうございました。」

そう言って俺は教官の前から離れた。

～～烈Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～ティアナＳｉｄｅ～～

「なんて奴よ。」

「さすが実技成績トップね。」

どうやらヒメミヤの奴も見ていたらしい。

ちなみに、自慢じゃないけど座学の成績はあたしがトップだ。

「よーし訓練終了だ！全員集合！」

教官が集合を掛けている。どうやら全員分テストが終わったらしい。

とりあえずあたしも集合しようか。

「では、今週の訓練はここまで。」

あの後、ミッド組とベルカ組は集まり今日の訓練は終了となった。

今は教官が前で連絡事項を告げている。

「なお、週末の休暇中はグラウンド整備が入るので自主練は禁止だ。

週末練習組もたまには休め。」

「「「「はいっ！！」」」」

自主練禁止か。週末どうしよう。

とりあえずシャワー浴びてから考えよう。

～～女子寮　３２号室～～

「……を希望します……と。」

あたしが部屋に戻ると、ナカジマ候補生が既に居て何か書いていた。
そういえば来週までに卒業後の希望調査アンケート提出だったわね。

「なんだ、アンケートもう書いてるの？」

「あ、ランスターさんおかえりー。」

あたしは荷物を自分のベットに置く。

「提出は来週でしょ？」

「んーーー。なんか早く出したほうが通りやすそうかなーって。」

「……まあどーせ提出するわけだしね。あたしも書いちゃおう。」

そう言ってあたしは自分の机で筆記具と用紙を取り出しアンケートを書こうとするが、そろーっと後ろからナカジマ候補生が近ずいてた。

「なに見ようとしてんのよ!」

あたしはナカジマ候補生の目的に気付き、自分のアンケートをずらし、内容を見せぬようにナカジマ候補生の顔を押した。

「いやあのーー、その……興味があるっていうかーールームメイトとして。」

「あんたには関係ないでしょ。」

この子は仮とはいえコンビってことを気にし過ぎなのよ。

「まったく。……で、そーゆーあんたはナニ希望よ?」

あたしはさっとナカジマ候補生のアンケートを奪う。

「早っ！！」

「なに？備考欄『在校中はティアナ・ランスター訓練生とのコンビ継続を希望します』？やめてよねぞっとしない。」

「みーなーいーでー。」

ナカジマ候補生がアンケートを取り返そうとするが、あたしが片手で頭を押さえているので、腕を振っても届かない。

そんな中あたしは気になる項目があった。

「ん？あんたも災害担当志望なんだ。」

志望先があたしと同じ、か。

「ランスターさんも！？あたしは人助けをできる部署で働きたいんだ。」

「ふーん。」

あたしは軽く流す。まああたしが災害担当志望なのは昇進機会が多いからなんだけど。

「あ、そうだランスターさん。週末のお休みどうする？じつはあたしおねーちゃんとおにーちゃんと遊びに行く約束してるの。それでご飯とおやつおごってくれるって話だから、ランスターさんもよかったら……」

「冗談やめてね。馴れ合う気はないって、何度も言わせないで。」

「でもでも、おねーちゃんもランスターさんにぜひぜひ会ってみたいって。」

「……む……。」

この子にしては考えた誘い方ね。
でもお姉さんもってことは、お兄さんの方は別に会いたいという訳ではないみたいね。

「午前中から夕方まで半日だけだから、ね？」

「あんたのお姉さんには申し訳ないけど……」

でもあたしは興味がない。

「ね？」

再び誘ってくるがあたしはノリ気じゃない。

「お断りするわ。ほっといて。」

そう言ってあたしは話を打ち切った。

～～翌日　ミッドチルダ東部１２区内「パークロード」～～

「あたし思うんだ。あんたのその異様なワガママさと強引さだけは見習うところがあるって！」

「ほめられたー♪」

結局、連れてこられた。
しかたない挨拶くらいして帰ろう。

「あたしは挨拶だけしてすぐ帰るからね！兄妹・姉妹水入らずなんだし、ゆっくりしなさいよ！」

「うん。」

「で、お姉さんとお兄さんどこ？」

「えーとねー……あ！

ナカジマ候補生が目を向けた方向に、紫色の髪の女性が手を振っていた。

「スバル！」

ナカジマ候補生の名前を呼んでいる。
どうやらあの人がお姉さんらしい。

「ギン姉～！」

ナカジマ候補生が犬の様にギン姉という女性に駆け寄る。
って犬は言い過ぎか。

「スーバル～♪」

そのまま2人は手を握りあってぐる～んと1回転。

うん、なんというか、仲がいい姉妹だってことはわかった。

「1ヶ月ぶり～元気だったー♪」

「もちろん。スバルも元気そうね。」

っていきなり殴り合いを始めた!?
殴り合いって言っても、軽いパンチを手の平で防ぐという程度だけど、あたしにとっては十分早い。
てか拳が見えない。

「そうだギン姉、こちらランスターさん」

「ど、どうも……」

「はじめまして――スバルがいつもお世話になってます。スバルの姉のギンガです。」

殴り合いを終え、ナカジマ候補生があたしを紹介する。
なんて反応すればいいのか戸惑ってしまった。
いきなりあんなの見せられたらねぇ。
……ってあれ?

「そういえば、お兄さんの方も来る予定なんじゃ。」

「ああ。烈ならすぐに戻ってきますよ。」

「……烈？」

どこかで聞いた名前のような……

「戻ったよ～。あれ？スバルとランスターさん来てたの？」

後ろから声を掛けられる。
振り返ると、そこにいたのは草薙候補生だった。

しかし、いつものように髪を後ろで縛っておらず解いており、左目の眼帯を前髪で隠していた。

「草薙……候補生？」

「ん？どうかしたランスターさん？」

どうしたもこうしたもない。
何故ここにいる。

「烈兄来てたんだ。」

「はい？烈兄？」

「あれ言ってなかったっけ？あたしのおにいちゃんて烈兄なんだよ。」

「へーー。……ってえええぇ！！？」

「ごめんなさいね。いつもうちのスバルが迷惑かけちゃってるみたいで。」

「ああ、いえ……」

あれから移動して、今は休息中。
ナカジマ候補生と草薙候補生がアイスを買いに行っていて、あたしはギンガさんと話している。

「妹さん優秀ですよ。訓練校でも最年少組ですけどよくやってますし。最初はともかく、今は個人成績も上位グループだと思います。」

「ほんとに？よかった。」

嬉しそうな顔だ。
なんだかナカジマ候補生がうらやましいな。心配してくれている人がいて。

「ランスターさんご家族は……？」

「ああ、ええと……私ひとりです。両親は私が生まれてすぐの頃、育ててくれた兄も3年前……。天涯孤独ってやつですね。」

「ごめんなさい……」

ギンガさんが悲しげな顔になる。

「お気になさらず。寮制の魔法学校から訓練校なんで暮らしに不安もありませんし、兄の残してくれた遺族保証もありますしね。」

「遺族保証……お兄さんも局員？」

「ええ、まあ……」

「憧れだったりした？」

「……今もです。」

そう。あたしは証明しなければならないんだ。

憧れだった兄さんの銃はちゃんと敵を打ち抜けるんだって。

「憧れか……。スバルもあの事故に遭ってからシューティングアーツ（ＳＡ）も魔法も本気でやるようになってね。」

「あの事故？」

「あ、聞いてないんだ。去年の春に起こった空港災害。」

「……空港一個丸ごとダメになったアレですよね。」

「そう。スバルね、アレに巻き込まれちゃったの。まぁ私もなんだけど。」

「え……？」

あたしは耳を疑った。

「空港のかなり奥のほうでひとりぼっちでね。もう絶望的な状況で……」

「それって去年のことですよね？それから半年ちょっとで訓練校に？」

「うん。ケガはわりと軽かったしね。決めちゃったみたいなのね。私と父さんは止めたんだけど、訓練校行って局員になるんだって。大急ぎで魔法覚えてＳＡを練習して。」

「（アレのワガママって身内にも発動するんだ……）」

「で、結局父さんが折れてね、烈と一緒ってのが条件で訓練校入っていいってことになったの。」

「そういえば、なんで草薙候補生がナカ……スバルさんのお兄さんなんですか？」

さっきから疑問に思っていた。
姓も違うし、なんというか雰囲気がこの姉妹と違う。

「烈はね。元々次元漂流者なの。」

「えっ！？」

予想外の答えが返ってきた。
まさか次元漂流者とは思わなかった。

「スバルはね、あの災害で憧れと理想そのままの人に助けてもらったの。」

「……高町なのは教導官。」

「そう。憧れを見つけて、自分を見つめて、スバル泣いてた……弱い自分が嫌いだって。強くなりたいって。」

「……。」

「それで烈はね、あの事故の時私を助けてくれたの。」

「……えっ？」

「スバルとはなればなれになって私がスバルを探している時にね、突然建物が崩れてきたの。死んじゃうんじゃないかって思った。でもね、その時烈が私を助けてくれた。その後もスバルを探すのも手伝ってくれた。

こっちの世界に飛ばされて来たばかりで何もわからない状態だったのに、自分のことよりも会ったばかりの私のことを心配してくれてね、正直嬉しかった。

その後ね、父さんが烈を引き取ってもいいって言ってね。それから今まで一緒に過ごしてきたの。」

「そんなことがあったんですか……」

「そう言われると、こっちとしては恥ずかしいんだけど。」

「「ッ！！」」

「いやそんなに驚かなくても。」

いつのまにか草薙候補生が戻ってきていた。

両手にはアイスが握られている。

「はい。ギンガ、ランスターさん。」

両手のアイスをあたしとギンガさんに渡す。

「あ、ありがとう烈。」

「…ありがとう。」

ギンガさん若干顔が赤い。

……まぁわからなくもない。彼の顔は元々悪くないんじゃないかと思う。

普段は眼帯で台なしだけど、今は前髪で隠れているからそれほどでもないし。

ていうかなんで眼帯外さないんだろう?隠すくらいなら外したほうがいいだろうに。

「スバルは?」

「もうちょっとかかるかな?じっくり選んでたから。」

「そっか。」

「で、なんの話してたの?俺の名前が出てきてたみたいだけど?」

「ん~、スバルのこととか。あ、ごめんなさいランスターさん。こっちの話ばかりで。」

「いえ。」

「あの子のメール、ランスターさんのことばっかり書いてるから。ランスターさんのお話も聞きたいな。」

「はぁ……。といっても別に普通ですよ。魔法もミッド式で射撃しかできない凡人ですし。サポート用に幻術系をちょっと練習してますけど……」

そう言うと、ギンガさんの目が輝いていた。
草薙候補生が、「あらあら」と言っている。
あんたお母さんですか。

「幻術系!?珍しい!渋い!どんなの練習してるの?」

「いやあの基礎的なところから……」

「なにかできるのある?」

「ええと…」

「近代ベルカ式はそっち系ほとんどないしうらやましいな~!」

質問の嵐。
やっぱ姉妹って似るもんだなぁ……。

「お待たせ～。あれ？ギン姉とランスターさんなんか楽しそう～。」

ナカジマ候補生が戻ってきた。
両手にはアイス。しかも片方は５段重ねだ。よく崩れないわね。

「凄いのよスバル。ランスターさん幻術系もできるんだって。」

「いや、まだできませんって。練習中です！」

「あらら、ほほ笑ましいね。」

草薙候補生、笑ってないで止めなさいよ！！

その夜、現在深夜１時。

あたしは眠ることができないでいた。

あのあと食事したりアクセサリーショップに行ったりして、結局フ

ルで付き合ってしまった。

そしてギンガさんと別れる時聞いてしまった。
ナカジマ候補生のリボルバーナックルが母の形見だってこと。
あいつも悲しいことがあったんだってこと。

わかってた。
悲しい思いとか悔しい思いとか。
きっと届かない憧れとか。
もう取り戻せない過去とか。
そんなものを持って必死にがんばってるのはあたしだけじゃないんだってこと。

気付いたらあたしはあいつのリボルバーナックルに手を伸ばしていた。

一一一翌朝一一一

「ランスターさんっ！」

「あによ、知らないわよあんたのナックルのことなんて。」

「あ、やっぱり！」

「しまった……」

あたしはあのあとナックルを磨いていた。

「普段のあんたが泣こうが嫌がろうが知ったこっちゃないけどさ、大切な人の思い出を傷つけたんなら謝らなきゃとは思うわよ。」

頭に浮かぶのは1ヶ月前の朝の自主練。
あの時はナックルのことを何も知らずにひどいことを言ってしまった。

「いつかのアレ……悪かったわ。ごめん。」

「いつかのアレ……？え？……え？ランスターさん何かしたっけ……？」

……プチ

ベシッバシッ

「あいたーっ！？なに？なんで蹴るの？」

「うっさいこの脳天お花畑！」

「やーーー！よくわかんないけどごめんなさいぃ～！」

この子は……本当もう。

「もう来週は一期試験なんだからね。バカやってないできっちり締めてくわよ！」

「うんっ！」

「コンビでいる間はあたしの足引っ張るような真似許さないから。いいわねスバル！」

気付いたらあたしはあいつのことを名前で読んでいた。

「うん……！ティア！」

んなっ！？

「ちょ……なんで知ってんのよその呼び名！」

「ギン姉に話したでしょ？友達とか仲良しの子はそう呼んでたって。」

「あたしとあんたは友達でも仲良しでもないっ！ギンガさんと会っちゃったからなんとなく『ナカジマ』って呼びづらくなっただけよ

っ！！」

「でもいまはコンビだよ。だから呼ばせと、仲間としての呼び方で。」

あたしは顔が赤くなるのがわかった。
なんでこいつはこういうことが言えるのよ！

「も一一なんでも好きにすりゃいいわよ！どーせあんたはワガママで押し通すんでしょっ！？」

「そ……そんなことはないと思うんだけど……。」

あたしは無視して歩き始めた。
スバルも後ろからついてくる。

「ティアーティアー、おこんないでー。」

「うるさいッ！」

この時まだあたしは気付いていなかった。

「ティアってばー♪」

「うっさいっ！」

この変な娘とのコンビが、この先かなり長きに渡って続いてしまうことに。

～～あとがきコーナー～～

蒼「あとがきコ～ナ～。」

ギ「今回は私と蒼と。」

K2「作者でお送りいたします。では最初は技の説明からです。」

『フォトンブレイド』

・使用者　烈

・魔力で製作した剣を打ち出す直射型射撃魔法。

・クロノの「スティンガーブレイド」に似ているが、烈の場合、打ち出さずにそのまま接近戦用の武器としても扱うことができる。

・この技を能力と組み合わせると『千紫万紅』という技になるが、そちらはまたいずれ。

『フォトンダガー』
・使用者　烈
・「フォトンブレイド」のダガーバージョンであり、こちらは直射型ではなく誘導型射撃魔法。
・「フォトンブレイド」と同じく打ち出さずに扱うこともできるが、その場合殆どが投擲用になるため基本は誘導弾としてのみ扱っている。

Ｋ２「以上です。」

蒼「剣を打ち出すって……どこの正義の味方だよ。」

Ｋ２「そんなつもりではなかったんだけどね。余談だけど蒼の能力は初期段階ではとある正義の味方の力と同じという没設定がある。」

ギ「単純に作者さんがＦａｔｅを漫画版でしか読んでいないからですよね？」

Ｋ２「作者はまだ高校生なんです。だから原作なんてできないんですよ。Ｒ指定だから。」

蒼「真・恋姫†無双や１１ｅｙｅｓも同じ理由だ。さてそれでは前回のクイズの解答にいこう。答えは←だ。」

「刀語」より『とがめ』
「戯言シリーズ」より『玖渚友』

「君と僕の壊れた世界」より『病院坂黒猫』
「化物語」より『阿良々木暦』
「めだかボックス」より『黒神めだか』

ギ「解答者はＫｙｏ様だけでした。少し残念です。」

Ｋ２「ネタがわかる人がいなかったのかなぁ。
　そういえば、Ｋｙｏ様のところからオリハルコンの絃が届いているんだけど……」

蒼「ふふふ……これは使わせてもらわないとな……ふふ。」

ギ「蒼？その手に持っている工具箱はなんですか？（汗）」

蒼「ちょっと兄さんの所に行ってくる。」

ギ「烈逃げてぇーーー！！！」

Ｋ２「あっ、そうだアンケートですが、未だ回答が少ないです。今日中いっぱい受け付けていますので、回答よろしくお願いしま～す。」

蒼「なっ！？アンケート！？聞いてないぞ！！」

ギ「（烈の所に行かないでくれてよかった）では次回、第１８話
紅い闇にテイクオフ！！」

蒼「無視！？っていうか初めて次回予告！？」

ギ／K２「「それではみなさんまた次回～。」」

蒼「ってオイッ！！最後まで無視かいっ！！！」

第17話　休日の出来事（後書き）

アンケートは本日深夜0時まで受け付けています。
あと誤字があるとの御指摘がありましたので修正いたしました。

～10万アクセス&ユニーク1万5千アクセス記念～（前書き）

K2「前回の話の誤字についてです。間違えてシューティングアーツをストライクアーツと表記していました。すいませんでした。」

烈「VIVID読みながら書くからだ。それでは～10万ヒット&ユニーク1万5千ヒット記念～どうぞ。」

～10万アクセス&ユニーク1万5千アクセス記念～

10万ヒット&ユニーク1万5千ヒット記念雑談～～。

「「「つい最近7万ヒットやったばっかりだろ（ですよね）！！？」」」

別にいいじゃないか。嬉しいんだし。
ちなみに雑談と言っても本文の内容なので、あとがきのような台本形式ではありません。
そのため作者は地の文で話します。

「まぁ良しとするか。しかし、2ヶ月で10万か。」

「けっこう多いな兄さん。」

「そうですね～。」

こんなにも読んでくれる人がいるなんて。
感謝！感激！雨あられです！！

「とりあえず落ち着け。」

「ま・読んでくれる人の期待を裏切るなよ？私とアリスもまだ出番ないんだから。」

「そーですよ、作者さん。」

はい。重々承知しております。
さて、ここらへんでアンケートの結果発表といきましょ～。

「だからアンケートって何!?」

「初耳です!!」

「俺とギンガしか知らなかったからな。」

その前に謝辞を、アンケートにご協力してくれた方々、ありがとうございました。

「それで結果は?」

「いい加減内容教えろ!!」

「二人で話を進めないでください!!」

あーはいはいわかりました。
だから蒼はそのでかい盾、アリスはそのでっかい大砲?を仕舞ってね?

「これだけの描写で二人が何の技を使おうとしているのかわかる人はいるのだろうか。」

「最低でも高校生以上じゃないとわからないと思う。」

「ポジトロン一一」

ストップ。言うからストップ！！
はぁ。
さてアンケートの内容は今後について、訓練校編継続かさっさと１０８部隊編にいくかということでした。

「はぁ～。そんなアンケートをやっていたのか。」

「アンケートするくらいなら最初から構成考えとけ。って言いたくなりますね。」

グサッ。
う……だって気付いたら訓練校編だけで２４～２５話までいきそうだったんだもん。
ダラダラやる訳にもいかないけど、やっぱ読者様の意見聞きたいじゃん。

「それで結局どっちなんだ。」

烈、なんか冷たいですね。

「さっさと言え。時間の無駄だ。」

冷てーーー。（ー ー；）
まあいいさ。
じゃ結果発表～～～～。

結果は……

１０８部隊編です！！

「間が長い。」

本当に今回冷たいね！！

「１０８部隊編……ってことは訓練校編はどうするんですか？」

あと３話くらいで終わらせます。

ただし、番外編として訓練校編の話を書くこともあるかもしれませ

ん。

「どのみち、ツバキやエルフィの出番が無くなるな。」

烈、ジュレスの名前は出してあげないんだね。コンビなのに。
一応、彼等は地上本部襲撃、ＪＳ事件後に出て来る予定。
それ以外だと番外編のみかな。
まだ1話分しか考えてないけど。

「で、１０８部隊編で兄さんとギンガの絡みが増えると。」

そうですね。
メインヒロインの出番がやっと増えますよ。

「私やアオちゃんはヒロインではないんですか？」

んーーーー。
どっちかって言うと蒼は副主人公？
ＪＳ事件後の最初は蒼の視点から書く予定だし。
アリスは蒼の相方っていう感じかな？

「かなり先のこと言われても嬉しくない。」

まったく文句が多いことで。

「ところで作者さん、１０８部隊編ではオリキャラ登場予定とかはあるんですか？」

1人だけいます。アリスの妹です。

「マイシスター！！！」

テンション高ッ！！

あ、１０８部隊の中でのオリキャラはいません。

「……ってことは、ギンガ、ゲンヤさん、カルタスさん、マリーさん。この４人が主に出るのか。」

そうですね。

でもそれだけじゃ少ないので、はやて、リィン、ザフィーラを出すつもりです。

「八神の１０８部隊での指揮官研修の話か。」

「なのはさん涙目ですね。原作主人公なのに殆ど出番がありません。」

「ディバイーン……」

「蒼、アリスー退避ーー。」

は？烈は何を言って

「バスターーー！！！」

ギャーーー！！！

ガクッ……。

「やれやれ高町のディバインバスターだな。」

「なのは怒ってるんだろ。」

「作者さん気絶してしまいましたね。」

「なら、そろそろ終わりにするか。蒼、アリス。」

「ああ。この作品の感想お待ちしております。」

「これからも魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～紅闇の少年と機人の少女～をよろしくお願いします。」

「それではみなさん。」

「「「また次回～～。」」」

～10万アクセス&ユニーク1万5千アクセス記念～（後書き）

Ｋ２「一つ連絡事項を忘れていました。」

烈「なんだ。」

蒼「くだらないことだったらぶっ飛ばす。」

Ｋ２「次話からこの作品を残酷描写設定にします。」

烈／蒼「「……は？」」

Ｋ２「ついでに一応ですがＲ１５の指定も。」

烈「なんでだ。」

Ｋ２「烈のせいでちょっと危ない描写が入るんです。」

烈「は？」

蒼「次回、兄さんがキレる!?第１８話　紅い闇　テ～イクオフ！！」

烈「まてコラ。」

蒼／Ｋ２「「それではまた次回～～！！」」

烈「（こいつ等……）」

第18話　紅い闇（前書き）

K2「すいません。今回なんか文章が変かもしれません。表現が難しいです。」

蒼「ポキャブラリー増やすことだな。」

第１８話　紅い闇

～烈Ｓｉｄｅ～

「……どうしてこんなことに。」

第４陸士訓練校。
現在その校舎の周辺には陸士部隊が展開しており、校舎を包囲している。

「ごめんなさい。」

「あ、いやギンガを責めている訳じゃないよ。」

「失敗なんてだれでもあるぜ。気にすんなよギンガさん。」

「……うん。」

「（ジュレス。それ逆効果。）」

「（あら？マズかったか？）」

状況を説明しよう。

現在、校舎にはとある犯罪グループが立て篭もっている。

どういった犯罪グループなのかは知らない。

奴らの元々の目的は、軽いテロ行為を起こしその騒動に管理局が注意を引かれている間、今まで逮捕された仲間達を救出しようというものだったらしい。

１０８部隊はその犯罪グループが密輸にも関わっていたため捜査をしていたらしく、今回の奴らの目的を知り待ち構えて全員逮捕しようと試みたようだ。

しかし、逮捕できたのは数人。

残り約３０名の構成員には逃げられてしまい、１０８部隊はそれを追撃していた。

だが、奴らは逃走中に通り掛かった訓練校（ここ）に立て篭もり一部の生徒を人質にした。

運良く、全４クラスの内、２クラスは第３陸士訓練校での合同訓練に行っており、１クラスは座学が早く終わり倉庫にて訓練の準備をしていた。

だが、残りの１クラス。２５～３２斑で構成されたクラスは……

男子は運良かったと言えばいいのか、ある罰として全員反省掃除を言い付けられており、校舎から離れたところにいたため無事。

だけど、女子１６人は普通に座学を受けておりデバイスも持っていなかったため、奴らの侵入に対応できず現在人質となっている。

スバル、ツバキ、エルフィ、ランスターさん。全員人質だ。

「……スバル。」

ギンガがつぶやく。

「大丈夫たぜギンガさん。スバルは絶対無事だって。」

「うん……。ありがとう、ホーネット君。」

ジュレスはああ言ってるものの、状況は良くない。

すでに犯人グループが人質を取って立て篭もってから3時間が経過している。

交渉は現在も行われているが、未だなんの進展もないままである。

気がつくと俺は唇を強く噛み締めていた。

「烈、そんな険しい顔すんなって。」

「あ、ああ。ゴメン。」

正直俺は焦っている。

もちろんみんなのことが心配だからだ。

犯人グループは質量兵器を所持している。

そう犯人グループ側は人質を、銃を使い簡単に殺せるのだ。

さっきから誰かが死んでしまうんじゃないかって、殺されるんじゃないかって考えてしまう。
なんでだろう？誰かが死ぬ、ってことを考えると胸の底から何かが込み上げてくるような感じがする。

この気持ちは何なのだろう。
この暗くて冷たい気持ちは。

そこまで考えたところで、俺の思考は停止した。

パァーン！！！

銃声が一一一響いた。

「「「「ッ！？」」」」

「銃声……？まさか！？」

「冗談……だよな？」

二人は今の銃声を聞いて、最悪の事態を想像していた。

だが、俺は一一一一

「烈！！？」

走り出していた。
ギンガが叫んでいるが、頭に入らなかった。
同時に何も考えられなくなり、さっきからの暗く冷たい感情が全身を走り抜けたような気がした。

～烈Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～

～ギンガＳｉｄｅ～

「烈！！？」

烈が突然走り出した。
まさか……
私は烈が何をしようとしているのかわかってしまった。

「烈待っ……ッ！？」

烈を止めようとした。
だけど、私は信じられないものを見てしまった。

烈の赤い髪が――黒く染まり始めていた。

～ギンガＳｉｄｅ　Ｅｎｄ～

～ティアナＳｉｄｅ～

なんでこんなことになるのよ。
あたしはそう思った。

男子達が罰掃除している間、あたし達は講義を受けていた。
だけど突然、銃で武装した男達が６人入って来た。
デバイスのあたし達じゃ何の抵抗もできず、ただ男達の言うことに従うしかなかった。

「あぁ！？さっきから言ってんだろうが！！俺達の仲間を解放しろってなぁ！！」

リーダー格の男が通信で叫んでいる。
よくわからないが、あいつ等はどうやら自分達の仲間の解放が目的らしい。
おそらく、管理局にでも逮捕されているのだろう。

（ティア。）

スバルが念話で話し掛けてくる。

（なに？スバル。）

（あたし達、どうなっちゃうんだろう？）

（……わからないわよそんなこと。）

スバルはああ言ったが、本当はわかっているはずだ。

良くて無事に解放される。

最悪の場合――この中の誰かが殺される。全員かもしれない。

そう考えると恐くなった。

「そうか……。1人くらい人質が死なねぇとわからねぇか。」

「「「「「ヒッ！？」」」」」

リーダー格の男の声に、女子全員が声を揚げた。

冗談よね？

まさか本当に殺したりはしないはずよね？

「おい、誰か1人選べ。」

「へい。」

リーダー格の男が部下に命令する。

その言葉にあたし達全員は後ずさった。

冗談じゃない。殺されたくなんかない。

中には泣いている子もいる。

「ティア……」

スバルも泣いてはいないが、涙が目に溜っている。

向こう側ではヒメミヤも目に涙を浮かべていた。

どうすればいいのよ。

「お前。」

「えっ？」

「ティア！！」

あたしは胸倉を捕まれて持ち上げられていた。

苦……しい。

「ティアを放せ！！」

スバルが男え殴り掛かる。
だが――――

パァーン！！！

リーダー格の男がスバルに向かって銃を討った。
が、弾丸は外れ、床に当たった。
スバルはそのまま床にへたれ込んでしまった。

「動くんじゃなぇよ。死にてぇならこいつの次に殺してやっからよ。」

リーダー格の男は右手にリボルバーのある銃を持っていた。
そのまま、こちらへ寄って来てあたしへ銃を向けた。

「悪ぃが、俺達の為に死んでくれや。怨むんなら管理局を怨むんだな。」

そう言って、男は引金に指を掛けた。

「ティア！！」

「ランスター！！」

スバルとヒメミヤが叫んでいる。
まだ、なにもしていないのに。
兄さんは無能じゃなかったって証明していないのに。
こんなところで死んじゃうのかなぁ。

「じゃあな嬢ちゃん。」

引金が引かれる。と思った瞬間、あたしは目を閉じた。
だけど――

『頭(かしら)ぁ！！大変でさぁ！！』

犯人達の仲間が通信で連絡してきた。

「あぁ？どうした？」

リーダーの男は引金から指を離した。

『眼帯のガキがみんなをぶっ倒してこっちに……』

ザザァーーーー！

「おい！！どうした！！」

通信画面には砂嵐ができ、通信は途切れてしまった。

「……眼帯。」

「まさか、烈兄？」

「ほお。面白いことを聞いた。おい、下ろしてやれ。」

「へい。」

そう言って部下の男はあたしから手を離した。

「ゲホッゲホッ！！」

首から手を離され呼吸ができるようになり、あたしは咳込む。

「ティア！！大丈夫！？」

「おい。お前等。」

「「「へい！」」」

リーダー格の男の言葉に、銃ー－マシンガンで武装した４人が教室のドアの前に並ぶ。
あたしの首を絞めた男は、まだあたしの側にいる。

「あんた等、何するつもりなのよ！！」

ヒメミヤが叫ぶ。

「簡単なことだ。お前等を助けようとしているナイト様を殺すんだよ。」

「「「「ッ！！」」」」

あたし、スバル、ヒメミヤ、ツェンベルグは息を飲んだ。

「んなことさせっか！！」

パァーン！！

ツェンベルグが男達に飛び掛かろうとするが、スバルの時と同じになった。

「動くなよ。先に死にたいなら話は別だがな。」

「クッ！！」

そう言って男はドアに向き直った。

「くくく。仲間を倒してきてはいるみちいだが、扉を開けた瞬間撃たれとは思うまい。」

そう言っている間に一つの影がドアに近付いていた。

ガララッ！！

ドアが開いた瞬間ーー

「撃て！！」

ダダダダダダダダ！！！

「「「キャアァァーーー！！」」」

４人の男はマシンガンを乱射した。
弾の着弾点から砂埃が上がり、何も見えなくなった。
男達は撃つのを止めると、辺りは静寂に包まれた。

「……嘘。」

それは誰が言ったものかはわからなかった。

「ハッ！！死んじまったなぁ！ナイト様よぉ！！」

「誰が死んだって？」

その声はあたしのすぐ側から聞こえた。

ドガッ！！

「ゲフォ！！」

あたしの側にいた男が蹴りで吹き飛ばされた。
男はそのまま壁に激突し、気を失った。

そしてあたしの隣に立っていたのは――

漆黒の髪に真紅の右目を持った草薙候補生だった。

～ティアナＳｉｄｅ　Ｅｎｄ～

男達は全員烈の方へ向き直り、銃を向けた。

「撃…！！」

リーダーの男が命令しようとするが

「『凍てつく氷像　（フィーリング・スタチュー）』」

烈の方が早かった。

烈が右手を前に翳(かざ)すと、一瞬にして男達の銃が凍り付いた。

「「「「「なっ！！」」」」」

リーダーと他の２人は銃を落としたが、残りの２人は一一

「「か、体が！うあぁぁーー！！」」

銃ごと全身が凍り付いてしまった。

「あと……3人…」

「調子に乗んじゃねぇぞガキが！！」

2人の男が懐からナイフを取り出し烈に襲い掛かった。

「『大地の柱　（アース・トーテム）』」

再び右手を翳す。
するとその言葉通り、床から複数の柱が現れた。

「なっ！？」

柱は片方の男を囲うようにして現れ、動けないよう拘束した。

「死ねやコラァ！！」

「烈兄！！」

もう1人の男は烈のすぐそばにまで近付いており、ナイフを振り下ろした。

だが烈はスバルの声で反応し、左手を掲げでナイフを防いだ。

ガキィィィィン！！

「ヘッ。これで左手は使い物にならな……ッ！！」

男はおかしいことに気がついた。
ナイフで左手を切り付けたというのに、血が一滴も流れていない。
それどころかナイフがボロボロになっていた。
そして切り付けた時の音。あれは人の腕を切った音ではなかった。

「なんッ……ガッ！！」

驚愕している間に、男は顔を烈の左手で掴まれた。
そのまま烈は男を左腕で持ち上げる。

その時、ナイフによって切れた包帯がシュルシュルと解け地面に落ちた。

「「「ッ！！」」」

その場にいた全員が驚いた。

包帯の中から現れたのは、真っ黒な腕。
人間性を全く思わせない義手だった。
スバルですら驚いている。
スバルも烈の左腕を見るのは初めてだったようだ。

ブンッ！！

「ガハッ！！」

烈は男をおもいっきり床にたたき付けた。
男はそのまま気絶した。

「あと……1人。」

そう言って、ティアナの方を振り向いた瞬間ーーー

「動くんじゃねぇ！！」

リーダーの男がティアナの首筋に右手に持ったナイフを押し付けていた。

「ティア！！」

「……」

スバルは叫び、烈は無言である。

「動くなよ。こいつの命が惜しいならな。」

「草薙……」

ティアナが烈の名をつぶやく。
ティアナの目には涙が浮かんでいた。

「……ランスター。」

烈がティアナに呼び掛ける。

「…恐いのなら、目を閉じていろ。」

「……うん。」

ティアナはゆっくり目を閉じた。

「変なマネすんじゃねぇぞ!!こいつが死んでもいいのかぁ!!」

リーダーの男は叫ぶ。
だが、彼は自分のやったことに気がついていなかった。
あの時銃を落とさなければ、もしくはナイフを取り出してからティアナではなく烈に襲い掛かっていればよかったことに。

ザシュッ!!

男の右腕が一一吹き飛んだ。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ!!」

リーダーの男はティアナから離れ、左手で斬られた右腕を押さえた。
男の右腕は肩の辺りから綺麗に切れており、真っ赤な血が濁流のごとくに流れる。

烈は男をまるで虫けらを見るような目で見ていた。

「ヒィッ！！」

リーダーの男は右腕を押さえながら烈から逃げ出そうとする。
しかし――

ヒュンヒュンヒュンヒュン！！

「ガアッ！！」

男は動けなくなった。
まるで何かに縛られたかのように。

「知ってるか？」

烈が男に向かってつぶやく。

「曲絃術ってのは、屋内で真価を発揮することを。」

そう言うと、烈は男に向かって歩き出す。
左手の指先からは、目に見えないほど細い鋼鉄の糸が伸びていて、
男を縛り付けていた。
糸には血がついていた。
先程男の腕を切ったのはこの糸なのだ。

烈は男の前まで来ると、右手に片刃大剣（バスターソード）を魔力で作り出した。
しかし、魔力の色はいつもの真紅ではなく、黒みを帯びた紅だった。

「お、おいまさか……冗談だろ坊主。」

男の声は震えていた。

「五月蝿い。黙って……死ね。」

烈はバスターソードを男に向けて振り下ろした。

「ヒィッ！！」

だが、その刃は男に届くことはなかった。
刃は男の首筋ぎりぎりで止まっていた。
男はショックで気絶していまった。

「……なぜ止めた。スバル、エルフィ。」

刃が止まったのは烈が寸止めしたからではない。
スバルとエルフィが烈の腕を押さえたからだ。

2人が動かなければ、リーダーの男は真っ二つになっていただろう。

「なんでじゃ……ねぇだろうが！！」

エルフィの口調は戦闘時と同じであった。
エルフィの言葉に烈は無言である。

「こんなの……こんなの烈兄じゃないよぉ。」

スバルは泣いていた。
自分の知っている兄は優しい人なのに、今目の前にいる兄は容赦がなく残酷で全くの別人だ。

「スバ……あつッ！！」

烈が左目を押さえ、苦しみ出した。
徐々に髪と右目の色が元に戻ってきている。

「「烈（兄）！！」」

「あれ……俺は……スバ…」

ドサッ

「烈兄！！」

烈の髪と右目は元に戻った。
が、そのまま烈は気絶してしまった。

「スバル！！」

ドアからギンガを先頭に陸士部隊の人々が突入してきた。
部隊の人々は気絶している犯人達をバインドで締め上げている。

「ギン姉！！烈兄が！！」

「烈ッ！！すぐに医務室に！！」

「わかった！！」

こうして第四陸士訓練校で起きた立て篭もり事件は幕を閉じたのであった。

～あとがきコーナー～

ア「兄様恐かったです。（（（（（；゜Д゜））））」

蒼「あーあーよしよし。」

ア「グスン。あれが兄様の黒モードなんですか？」

蒼「そ。あとがきコーナーとかでもあの姿だけどな。というわけで、今回出た兄さんの能力紹介～～と行きたいところなのだが量が多い。」

ア「能力解説＋技説明もありますからね。」

蒼「というわけで、今日中に能力紹介コーナーを投稿するので待っていてほしい。」

ア「じゃあ今回のあとがきでは能力には触れないということで。じゃあ……先生質問です！！」

蒼「なんだいアリス君。」

ア「兄様の左腕はなんで義手なんですか？」

蒼「…過去に……いろいろとあったんだよ。」

ア「えっと…その…ごめんなさい。」

蒼「いやー大変だった。義手を作ったはいいんだけど普通に動かせることを重視したから、人間性のない物になってしまってな。」

ア「へーー。……ってあれ?あの義手アオちゃんが作ったんですか?」

蒼「そうだぞ。９歳の時だったかなぁ。」

ア「９歳!?」

蒼「私は昔から機械とかに興味があったからな。」

ア「それでも充分すごいんですけど。」

蒼「ちなみに私は罪口の人間ではないからな。そこんとこよろしく。」

ア「何言ってるんですかアオちゃん?それでは今回はここらへんで〜〜。」

蒼「次回、第１９話　過去のキオク　へ。」

ア／蒼「「テイクオフ!!」」

第１８話　紅い闇（後書き）

～能力紹介&用語紹介～

K２「能力紹介コ～ナ～～～。」

蒼「はい。というわけで、１８話に出てきた兄さんの能力や技についての紹介です。」

ア「一応あとがきコーナーの延長線上にあるので台本形式になっています。」

K２「まあそれだけじゃなくて紹介の部分と俺が話している部分が被るからなんだけどね。」

蒼「お前が参加しなければいいだけだ。」

K２「ヒデェ！！」

ア「２人はほっといて紹介に行きます。最初は兄様に変化のあったほうです。ちなみに兄様は医務室で寝ているので、この場にはいません。」

『殺戮衝動（バーサークモード）』

・烈が怒りや憎しみといった、負の感情が爆発した姿。

・この状態になることで、口調を含みいくつかの変化が起こる。

性格：温厚→冷酷

髪色：赤→赤みのある黒

目色：黒→真紅（右目）

魔力光：真紅→暗い紅
戦闘スタイル：中距離魔法主体→近距離格闘及び《機能》主体
魔導士ランク：Ａ－→ＡＡＡ相当の戦闘能力
・本来、記憶を失う前までは烈はこの姿（黒髪紅目）であった。
・この姿になるには左目が関係しているが、そこはいずれ。

Ｋ２「以上が烈の黒モードの紹介です。」

蒼「『殺戮衝動』なんて名前が付いてはいるが、実際兄さんはこの姿になっているという自覚がないし、使った時の記憶はあいまいだからな。
合った名前が付いているだけだ。
そもそも今回ので２回目だし。」

ア「えっ？じゃあ１回目は？」

Ｋ２「次回になります。それでは次に《機能》と技の解説にいきましょう。」

『魔力作用資質』《氷》
・周囲の冷気を操ることのできる能力。
・冷気を操作することで、氷の精製や空間の凍結などが行える。
・氷原や空中にて真価を発揮するが、砂漠や火山地帯といった場所では使用することができない。

『凍てつく氷像　（フィーリング・スタチュー）』（技）

・指定した対象を凍結させる技。
・凍結させた対象が何かと接触していた場合、それも凍結させる。
・対象の大きさにより消費する魔力も増加する。

『魔力作用資質』《土》
・土や砂、鉱石等を操ることのできる能力。
・意外と使い所が難しいため、烈はあまりこの能力を単体では多用しない。
魔法と併用したブースト魔法として使うことが多い。
・荒野、砂漠、火山地帯において真価を発揮するが、空中や海上では使用できない。

『大地の柱　（アース・トーテム）』（技）
・地面より複数の柱を発生させる技。
・遠距離攻撃や捕縛、稀に足場として使用する。
・ぶっちゃけるならば『ＭＡＲ』の『サーティーントーテムポール』

Ｋ２「以上、《機能》と技の説明でした。」

ア「土って意外ですね。てっきり風か雷だと思ってました。」

Ｋ２「それは没設定が関係している。」

ア「没設定？」

蒼「私の能力が《雷》《風》《水》という没設定だ。まあ私は好んで雷系の技を使うがな。」

K2「烈と蒼が対立する属性を持つというものだったんだけどね、なんかイマイチだったから烈はそのままにして蒼は変えたんだ。」

ア「へぇ～。」

蒼「しかし、作者。お前は没設定が多いと思うんだが。『殺戮衝動』も元々能力の没設定の名前だろ。確か、『殺し名』をモチーフにした能力だったか？」

K2「あれ？ばれた。いや～2人の能力はけっこう没になったのがあるよ。」

ア「ダメ作者です。」

K2「ごめんなさいm（＿＿）m」

蒼「さて能力紹介は終わったが左腕と罪口についても紹介しておこう。」

烈の左腕

・漆黒で金属整の義手であり、指先の部分にはワイヤーが仕込まれている。

・蒼が9歳の時、烈が左腕を失ったため作った。

しかし、支障や問題が無く左腕を再び動かせるということを意識したため、人間性を思わせないものになってしまった。

・非常に硬く、ナイフ程度では傷一つ付かない。
・また、烈はギンガやスバルやゲンヤには左腕を見せておらず、周囲の人々で左腕のことを知っていたのはジュレスのみであった。

『罪口』
・『呪い名六序列』において序列2位の存在。
・『呪い名』とは『殺し名』が直接的的な殺人能力を誇るのに対し、間接的な殺人能力を誇る。
・別名『罪口商会』とも呼ばれる武器職人達である。

蒼「以上、左腕の義手と罪口についての説明だ。」

ア「はー。やっぱりアオちゃんすごいですね。9歳で作ったなんて信じられませんよ。」

K2「蒼は今後デバイスまで作る予定だからね。」

ア「シャーリーさんと気が合いそうですね。」

蒼「さあ?それは作者が私をどう書くかしだいだからな。」

K2「最初は六課メンバーと仲悪いって予定なんだけどね。(笑)」

蒼「理由は?」

K2「警戒心が強いという設定だからね。」

蒼「ふーん。じゃそろそろ終わりにするか。」

ア「そうですね。」

K2「と、その前に。みなさんの感想待ってます。リクエスト等もありましたら言って下さい。」

蒼「リクエストって、要望に応えれるのかお前。」

K2「まあ来ないかもしれないけどね。一応前回スバルやティアナとの絡みがあってほしいって意見があったから。」

蒼「そうか。じゃ、それではみなさん。」

ア「また次回～～～♪」

～能力紹介&用語紹介～（後書き）

感想やリクエスト、本当にお待ちしております。

第１９話　過去のキオク（前書き）

蒼「前回の話について補足説明をする。兄さんの義手についてだが、モデルはハガ〇ンではなく『零崎曲識の人間人間』で登場した無桐伊織の義手が元になっている。」

ア「それでは本文をどうぞ。あ、あと今回あとがきコーナーにてゲストが登場いたします。」

第19話　過去のキオク

「ここは……どこ？」

烈は暗闇の空間に1人で立っていた。
烈の疑問に答える者はいない。
が、代わりに一筋の赤い光が見えた。

「……光？」

烈は光の方へ向かって歩き出した。

「何…これ…」

烈が光の中に入ると、一瞬にして景色が変わった。
真っ暗闇ではなく、炎が激しく燃え盛る景色へと。

「何なんだこれは！？」

烈は目の前の光景が信じられなかった。
数々の人間の死体が目の前には広がっていた。
首がない者、心臓を貫かれている者、下半身が無い者。
男、女、老人。
ざっと見ただけで２０人分の死体がそこにはあった。
そして全ての死体に共通していることがあった。
傷の部分が焼かれたような痕が残っているのだ。

「それに……ここはどこだ？」

死体にばかり気を取られていて気が付かなかったが、ここは妙な部屋であった。
部屋の中には、薬棚、拘束具の付いたベット、メス、人間の腕のホルマリン漬け、鋸（のこぎり）、人の指の大きさもある針、奇妙な色をした薬が入った注射機。
１部分だけ見れば病院の手術室かと思うかもしれない。
だが、ここは病院にしてはおかしな物が多過ぎるのである。

「ここは……まさか人体実験！？」

そう考えたところまでで、烈の思考は止められた。

その訳は、突然辺りの景色が変わったのだ。
景色が変わったと言っても、炎が燃え上がっていることには変わりはなかった。

ただ先程の死体だらけだった部屋と違い、変化した景色には3人の生きた人間がいた。

1人は白衣を着ており白髪が若干生えている初老の男性。
1人は背中辺りまで届く藍色の髪に水色の目を持った10歳くらいの少女。

そしてもう1人は少女と同じくらいの歳の少年だった。
赤みを帯びた黒い髪。
真紅の右目。
縦の傷のある漆黒の左目。
肘から先に何もない左腕。

「あれは…俺…なのか？それに蒼？でも…あの男はいったい…？」

そう、目の前にいる少年は烈だった。

「う〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ！！」

目の前の烈は叫ぶ。
まるで怒りを顕(あらわ)にするように。
そして血まみれの右腕に炎を纏って白衣の老人へと走り出した。

「お兄ちゃん！！」

蒼が叫ぶが、その声は怒り狂った烈に届かない。

「ふふふ…素晴らしい！素晴らしいぞ！！アーハッハッハッハ！！」

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ！！」

初老の男は狂っているかのように笑っている。
烈はその男に飛び掛かり炎を纏って右腕で――

――心臓を――貫いた――

「うあぁぁ！！」

「烈！？」

何だ今のは。
あれは本当に俺だったのか？
俺は……俺はッ！

「烈！！」

大声で名前を呼ばたれことにやっと気が付く。
声がする方に顔を向けると、ギンガが心配そうな顔でこちらを見ていた。

「あ……ギン…ガ？」

「大丈夫？うなされていたみたいだけど」

「うん……大丈夫、なんともない。そういえばここは？」

「医務室。烈が突然倒れたからここまで運んだの。今までずっと眠ってたよ」

「そうか……ッみんなはどうなった！！」

そうだ銃声が聞こえてそれから……

それから……何も覚えてない。何があったのかわからない。

「大丈夫。みんな無事だよ、烈のお陰で」

「俺の？」

「覚えてないの？」

「……銃声を聞いてからのことが思い出せないんだ」

「そう……（髪の色が変わったのと記憶が無いのは関係あるのかな）」

「ギンガ？」

「あ、ううん。なんでもない。みんなの所に行こう」

「うん、わかった。あ、でも一つ聞かせて」

ギンガが立ち上がろうとしたところを烈が引き止めた。

「ん？何？」

「えっと…さ、俺が眠っている間ずっと側にいてくれたの？」

「えっ！？……えっと…うん」

「ありがとうね、ギンガ」

烈が笑顔でお礼を言うと、ギンガの顔が真っ赤になった。

「ううん！！お礼言われる程じゃないから！！は、早く行こう！！」

「うん」

そう言ってベットから降り、ギンガとともにみんなのいる所へ向かうのだった。

～～食堂～～

食堂にはジュレス、ツバキ、エルフィ、スバル、ティアナが集まっていた。

あのあと、人質だった生徒達は事情聴取を受けた。
今はそれも終わり、今日の講義や訓練は全面的に中止となったので、
みんなここに集まって今日のことを話し合っていたのだ。

「……烈兄…大丈夫かな」

「大丈夫だよ～。烈のことだし～」

烈を心配するスバルをエルフィが宥める。

「ツバキとティアナは怪我とかは？」

ジュレスが2人に尋ねる。

「私は大丈夫」

「あたしも……。でも…あいつが来てくれなかったら死んでたかも」

「烈……か。まだ目覚まさねぇのか？」

「もう覚めてるよ」

「「「「烈（兄）！！」」」」

ジュレスの疑問に答えるように、みんなの後ろから烈が答えた。

「大丈夫かよオイ」

「あーうん。問題ない問題ない」

「あ、あの烈兄」

スバルが怖ず怖ずと尋ねる。

「スバル？」

「さっきのは……何だったの？」

「さっきの？ああ、ごめん。俺、何があったか覚えてないんだ」

「「そうなの！？」」

烈の言葉にツバキとエルフィが叫ぶ。
まあ、信じられないだろう。
何があったのか覚えてないだなんて。
自分達の目の前であっという間に犯人達を倒したというのに。
しかも、その時烈はデバイスを付けていなかったのだ。
まあどちらかというと、覚えてないことよりも単身で３０人を蹴散らした方が信じられないが。

「あ、あの、草…薙」

今まで黙っていたティアナが烈に声を掛けた。

「ランスターさん？どうしたの？」

「あの……その……」

いつものティアナらしくなく口ごもっている。

「その…ありがとう。助けてくれて」

「えっと……どういたしまして、なのかな？何があったのか覚えてないし。でもランスターさんに怪我がなくてよかったよ」

「……ティアナでいい…」

「えっ？」

「だから…名前で呼んでいいって言ってるのよ」

「テ、ティアがデレたぁー！！」

「うっさい、スバル！！」

少し重い雰囲気だったのが、スバルの発言で吹き飛んだ。
烈はよくわからないといった顔をしている。
とりあえず詳しい話を聞いておかないとなぁと思った烈であった。
ちなみに、スバルとティアナのやり取りの間に、ギンガとツバキがティアナを睨んでいたことには誰も気がつかなかった。

「そういえばさ～、烈の左腕ってどうなってるのかな～？」

エルフィがふと思ったことを口にする。
その言葉にこの場にいた女性すべてが反応した。

「そうだ！何なのソレ！？」

「ホントホント。１年と半年くらいいっしょにいたのに、なんで教えてくれなかったの？」

「ギンガさん、サラっととんでもないこと言ってません！？」

順に、ティアナ、ギンガ、ツバキである。

「俺は知ってたぜー。と言ってもつい最近だけどな。いくらなんでもシャワーの時も包帯外さないって変だろ？」

「みんなとりあえず落ち着いてくれないかな？」

烈がみんなを制する。
落ち着いたところで既に包帯で巻かれた左腕を差し出した。

「これはね、義手なんだ」

「「「「いや、知ってるから」」」」

見事にみんなハモる。

「あ、そう？えっと…ギンガとスバルは俺が９歳以前の記憶が無いのは知ってるよね？」

「「「「嘘ォ！？」」」」

ギンガとスバルが頷くのに対し、他の４人は驚く。

「ホント。んで、その時から俺は左腕がなかったから妹が義手を作ってくれたの」

「どんな妹さんよ」

ツバキが呆れたように言う。

まぁ、烈の妹ってことは烈が9歳の時の年齢は同じかそれよりも下。
そんな子が義手を作ったなんて信じられないだろう。

「でも、これ見た目がアレでしょ。知らない人が見たら絶対驚くし。
だから包帯巻いてたんだ」

「なるほど～」

「ほかに聞きたいことある？」

「じゃあ、あいつらを凍らせたのとか、床から柱が出てきたのは？」

ティアナの質問。

「えっと…特殊な魔力変換資質だと思ってくれればいいよ」

「3つも魔力変換資質持ってんのか！？」

まあ驚くのも当然であろう。
ただでさえ魔力変換資質を持っている魔導士は少ない。
3種類も持っているなんて信じられないだろう。

「うん。まあね」

《ねぇ、烈》

ギンガが念話で話し掛けてくる。

《なに？》

《本当のこと言わなくていいの？本当は変換資質じゃないって》

《言ったら混乱すると思うからね。黙っておいたほうがいいと思うんだ》

《そう。わかった》

そう言って、話を切った。

「さてと、ほかには……」

ググゥ～～～

「「「……」」」

「……スバル？」

「アハハ……ごめんなさい」

「そういえばもう飯時か」

ちなみに今時計は6時半を指している。

「ここも食堂だし、このまま夕食済ませようか？」

「「「「「賛～成」」」」」

こんな形で烈への質問も終わり、みんな仲良く夕食を食べることになり、騒がしかった1日は過ぎてゆくのであった。

～～あとがきコーナー～～

ア「あとがきコ～ナ～♪」

蒼「今回は兄さんの過去に触れた話だった」

烈「とはいえ、俺は覚えてないんだがな」

蒼「ま、いずれ兄さんと私の過去は明らかになるさ。

さて、今回は特別ゲストが来ているぞ」

ア「『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ聖痕を携えし魔導騎士』より、主人公の新藤歩さんとパートナーのマリアさんです！」

マ「こーんにっちはー！！マリアでーす！！」

歩「新藤歩だ」

烈「前回はそちらにおじゃましましたが、相変わらずですね」

歩「ああ。ところで烈、ウチに来た時と姿が違うんだが」

マ「可愛いと言うより、クール！カッコイイ～！そして妹さん達可愛い～！えい、ハグしちゃお！」

ア「マ、マリアさん！？苦しいです～」

蒼「アリス、ドンマイ」

歩「マリア、その辺にしろ」

マ「は～い！」

烈「まあ、姿が違うとはいえ問題はありませんから」

歩「そうか」

蒼「姿で思い出したが、今回兄さんの左目について混乱した人がいるだろうと思ったので説明しておこう」

マ「え～っと、確か黒だったわよね？」

歩「だが前回の能力紹介では、元々紅い目だと書かれていたが」

蒼「そうだ。兄さんの目は紅だ。夢に出てきた左目は今もだが義眼なんだ。で、右目は普段義眼の色と同じになっている」

マ「義眼？歩のタブリスみたいに？」

蒼「そう。だがこの義眼が癖物でな、眼帯で封印しなければならない物なんだ」

ア「アオちゃん、サラっと凄いこと言ってません？」

烈「眼帯が外せないのはそういう訳だったのか」

歩「なるほどな。さて、それはさておき烈。俺が言ったこと覚えているか？」

烈「『殺戮衝動』の時の記憶がないからどうしようもないんだが……」

蒼「ククク。兄さんフラグ立ててしまったな」

マ「元からギンガは立ってて、今回ティアナとツバキに立ったみたいね」

ア「強いて言うなら人質なった生徒全員に立っているんですけどね。スバルさんとエルフィさんは違うようですが」

歩「まあ吊橋の原理みたいなものだからな、しかたないと言えばしかたないか」

烈「そう言ってくれるとありがたいです」

蒼「さてさて、私が姉さんと呼ぶ相手は誰になることやら」

マ「それは先のこと考え過ぎじゃないかしら？」

歩「ま、立ったものはしかたない。頑張れ」

烈「はい」

歩「さて、そろそろ時間か」

マ「えーもう終わり！？もっとアリスちゃんハグハグしたーい！」

歩「いい加減にしろ。じゃあな烈頑張れよ」

烈「はい！」

マ「まったね～♪」

ア「行っちゃいましたね」

蒼「だな。んじゃ、作品紹介するか」

烈「ああ。『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ聖痕を携えし魔導騎士」は、

父に母を殺され、聖痕を埋め込められた歩は復讐を望む

蒼「ある時高町と出会い、そして六課のメンバー達と出会う」

ア「六課の人達と過ごす中で大切な人を見つけ、変わってゆくお話です」

烈「こんなところだな」

蒼「さて、今回も終わりにするか」

ア「あ、読者の皆様の中で、このあとがきコーナーで自分の作品を紹介したい。
もしくは自分の作品でこの私達を使いたいといった方々は感想やメッセージにてご連絡下さい」

烈「それでは今回はここまで」

蒼「次回、第２０話　卒業と始まりと　へ」

烈／蒼／ア「「「テイクオフ！！」」」

第２０話　卒業と始まりと

「好きです！！」

「えっと…ごめんなさい」

季節は５月の末。
１年という月日はあっという間に過ぎ、卒業もまじかという時期。
そんな時期に、烈はある女の子から告白を受けていた。

「でも…私あの時から！！」

目の前の女の子の名前は知らないが、確か２８班の子である。
つまり、前に起こった篭城事件で人質になっていた子である。

「ごめんね。あの時のことは覚えてないから。だから、その告白は受けられない」

烈は少女の告白を断った。
すると、少女は泣きながら走って行ってしまった。
１人残された烈はというと

「はぁ……戻ろう」

自身も自分の部屋へと戻るのであった。

～～男子寮　３０号室～～

「おっ帰り～。また告白でもされてたのか？」

部屋に入って早々ジュレスが話し掛けてきた。

「まあ…ね。断ったけど」

そう言いながら、烈は自分の机の椅子に座る。

「なんで！？俺から見りゃうらやましい限りだぜ！！
お前これで１０人目だろうが！！」

ジュレスの言う通り、烈に告白してきたのはさっきの娘だけじゃな

い。
あの事件以降、何人も告白してきたのである。
が、烈はそれを全人断っている。
烈は他人からの好意が嬉しくない訳ではない。
ただ自分が何をしたか記憶がないのに、いきなり告白されても戸惑うだけなのだ。
それに、ゲンヤから聞いた話によれば、自分のやったことはみんなを助かる為だったとはいえ普通は許されるものではないのだ。
ここで、ゲンヤとの会話の回想を入れよう。

――回想――

～～108部隊　隊長室～～

「スマンな。わざわざ来てもらって」

「いえ。俺の事情聴取ですよね？」

部屋にはゲンヤと烈の2人しかいない。
先程ギンガがお茶を持ってきたが、すぐに部屋を出ていってしまった。

「ああ、お前の事情聴取ってことになるんだが……
烈、お前、あの時何をやったか覚えてるか？」

「いいえ。銃声の音を聞いたまでは覚えているんですが、それ以降は……」

「そうか……
だが烈、覚えてないと言ってもお前がやったことは事実だ。幸いにも死者は出なかったがな」

「はい……」

烈がここに来る前に聞かされていたこと。
それは、犯罪グループの構成員の怪我についてだった。
立て篭もった全３０名。
軽いものでは、打撲や軽い凍傷。
重度なものでは、骨折や内臓に損傷。そして右腕切断。
いくら相手が犯罪者とはいえやり過ぎである。
右腕を切断されたリーダーの男は精神的にも問題が出てきているらしい。
右腕は細胞に傷がなかったため接続手術が可能であったが。

「一応お咎め無しってことにはなっている。だが、これだけは言っておく」

ゲンヤは一旦お茶を飲んでから烈に言う。

「お前の過去に何があってその力が付いたのかは知らねぇ。
お前自身も知らねぇみたいだがよ。
だが、その力、誰かを傷つけるためには使うな。
俺が言いたいのはそれだけだ」

「はい…わかりました」

――回想終了――

「おーい、聞いてるかぁ烈?」

烈はゲンヤとの話を思い出していて、ジュレスが話し掛けていることに気が付かなかった。

「え!?……あ、うん何?」

「お前、卒業後の所属とかってどうするんだ?確かいろんなとこからスカウトが来てただろ?」

そうなのだ。
烈が単身であの事件を解決したことを管理局は知っている。
そして有能な人材を欲しがる部署はたくさんある。
故に、烈はいろんな部署や部隊からお誘いが来ているのだ。
武装隊、首都航空隊、災害担当。
他にも「海」の方からの誘いや、教官から士官学校に行ったらどうかとの提案もある。

「俺にツバキやエルフィはみんな武装隊志望だけどさ、お前はどうなってんだよ？アンケート提出したのか？」

「とっくに。アンケート配られた日に提出したよ。」

「はぁ！？じゃどこなんだよ！？」

「俺がどこに行くかは前々から決めていたんだよ」

「だから、どこだっての！？」

「教えない～♪」

「ってオイ！！」

そんな感じに残り数日といった訓練校の日々は過ぎていった。

6月

卒業の日がやってきた。

卒業式は既に終わり、今３０班のメンバーは全員集まっていた。

「あっという間だったね～」

「そうね。なんか最初のころが懐かしいって感じね」

「ま、俺はこの３０班でよかったって思ってるぜ」

「うん。俺も」

みんなそれぞれの思いを口にする。

「でも寂しいな。烈は武装隊じゃないんでしょ？」

「俺達3人は全員同じ部隊みたいだが……」

「329部隊だね～」

「確かに、寂しいかな。でも会えなくなる訳じゃないんだし」

「そうね……」

「みんな、新しい部隊でもがんばって。またいつか会おうよ」

「「うん！！」」

「ああ！！」

そしてみんな、それぞれの場所へと行ってしまった。

数日後、烈は陸士部隊の制服を着て歩いていた。

向かう先は隊長室である。

「失礼します！」

烈は隊長室に入る。
中はゲンヤとギンガがいた。

「来たか」

「はい」

「お前も捜査官の資格を取ったからな、主にギンガと一緒に仕事をしてもやらうことになる。
上司は捜査主任のカルタスだ。」

「はい、わかりました。」

「よろしくね、烈」

「よろしく、ギンガ」

「んじゃ、頼むぞ草薙二等陸士？」

「はい！草薙烈二等陸士、全力でがんばります！！」

これから１０８部隊で何が起こり、それを烈はどうしてゆくのか…
……

それはまた次のお話。

～～あとがきコーナー～～

蒼「やっと訓練校編は終了か」

ア「そうですね」

蒼「……アリス？なんか怒ってない？」

ア「……アオちゃんが本編で2回も出番あったのに……私はまだ1度もないなんて……」

蒼「……いや、その……スマン」

K2「出そうにも出せなくてねぇ」

ア「『氷の巨塊（アイス・ド・アース）』！！」

K2「グホォ！！」

蒼「あーあ、作者死んだ」

K2「死んでたまるか！！」

ア「チッ！！」

蒼「アリスってたまに黒いよな」

ア「気のせいです」

蒼「ところで作者、１０８部隊編はどうするつもりなんだ？」

Ｋ２「えーっと、とりあえず次の話は烈対ギンガの模擬戦。んで、はやてが研修に来てアリスの妹が出る話、はやての研修中の閑話、ＳｔＳ直前の烈の捜査の話が今んとこの予定。アリスの妹の話は３～４話くらい続くけど、それ以外は１話ずつの予定。それからＳｔＳへと進んでゆく」

ア「へーー」

Ｋ２「ただ１つ問題が」

蒼「なんだ？」

Ｋ２「ＳｔＳにて『呪い名』を１人オリジナル設定で出そうかと思ってたんだけど……」

ア「ああ、最近出た『零崎人識の人間関係』で、今まで出てこなかった『呪い名』が登場したんですね」

Ｋ２「そーなんだよ。だからどーしよーかなーって」

蒼「１つは原作無視でオリジナル設定にする。もしくは原作未登場

の『殺し名』をオリジナル設定で登場させるのどちらかだな」

K２「実際、ＳｔＳ終了後の話も『殺し名』『呪い名』をどんな設定で登場させるか悩んでるんだよね」

蒼「といっても１３人中４人は確定してるんだろ？」

K２「その４人は全員『殺し名』だから。そもそもＳｔＳ終了後に『殺し名』のみの７人構成で出すか、『殺し名』と『呪い名』の１３人構成で出すのかすら悩んでるから」

ア「て言うか、ＳｔＳ終了後は途中までしか考えてませんよね？」

K２「うん。烈の過去辺りと、確定した『殺し名』との戦闘しか」

蒼「まあ書いてるうちに決めろ」

K２「そうします。だけど、読者の皆様でこうして欲しいってのがあったら言って下さいね」

ア「それでは今回はこれまで～」

蒼「第２１話　陸士１０８部隊　へ」

ア／蒼「「テイクオフ！！」」

第２０話　卒業と始まりと（後書き）

明日から学校が始まるので更新速度が遅くなるかもしれませんがよろしくお願いします。

第２１話　陸士１０８部隊

～～１０８部隊　屋内訓練場～～

１０８部隊の訓練場にて、烈とギンガは向かい合っていた。

お互いバリアジャケットを展開し、デバイスを装備している。

ギンガのバリアジャケットは、白いタイツ。
腹辺りまである金属の胸当て。
帯に短い紫の腰布が付属している留め具が金色で帯が銀色のベルト。
紫色の半袖のジャケット。
利き腕の左手には白いリボルバーナックル。
そして両足にはローラーブレードを履いている。

それに対して、烈のバリアジャケットはというと。

赤を基調とし、首元から腹の部分までに黒いラインが入ったインナー。
黒を基調としたジーンズ。
ギンガと同じだが、メインカラーが黒で袖の部分が白い半袖のジャケット。
金属整のブーツ。
両手には指先が出た黒いグローブ。
そして両腕には手甲から肘までである鉄色の篭手・鋼閃が装備されている。

「準備はいい？ギンガ」

「ええ。いつでも」

そう言ってギンガは構える。

「それでは…試合…開始！！」

2人の間に立っていた審判役の隊員が勝負の開始を告げる。
その言葉と同時に2人は飛び出した。

「はあぁ！！」

ギンガがリボルバーナックルで烈に殴り掛かる。

「ハッ！！」

が、烈はギンガの腕を下から叩き左腕の軌道を逸らす。

「せいやぁ！！」

ギンガは攻撃が逸らされると、続けて回し蹴りを繰り出した。
烈はそれを上半身を後ろに反らすだけで回避する。

しかし、回避したのは間違いだった。
烈は回避した直後、反撃に出ようとしたが、ギンガが次々と攻撃を繰り出し烈に反撃の暇を与えなかった。

烈は繰り出される拳や蹴りを、時には体を反らすことで回避し、時には鋼閃で防ぎ、時には攻撃を弾いていた。

「草薙二士、防戦一方だな」

ふと、外野で2人の試合を見ていた隊員が呟いた。
言い忘れてたが、2人の試合は周りで何人もの隊員が見ている。
その呟きが烈に聞こえたかどうかはわからないが、烈は突然後ろへと飛び、ギンガから距離を取った。

「フォトンブレイド…シュート!!」

烈は右手を突き出し、3本の魔力刀を作りだし2本をギンガへ向け撃ち出した。

「くッ!!」

ギンガは2本のうち1本を弾き1本を回避した。
だが、その間に烈は撃ち出さなかった魔力刀を左手で腰に添えるように持ち、右手で刀の柄を握りながらギンガに突撃してきていた。
ギンガも同じく烈に突撃する。

「はあぁぁ！！」

ギンガはリボルバーナックルのナックルスピナーを回転させ、烈に殴り掛かる。
が、烈は足を止め、いきなり脱力することでそのまま前に倒れるようなかたちとなり、ギンガの拳を回避した。

「えっ！？」

ギンガから見れば烈が突然倒れたように見える訳であり、驚いてしまった。
だが、それにより隙ができたことを烈は見逃さなかった。

「閃牙（せんが）」

ガッ、っと烈は倒れるかたちから右足に力を入れ、踏み込むことで体勢を取り、腰に添えた魔力刀を下から上へと抜き放った。

「ッ！！？」

「勝負あり…だね」

烈はギンガの首筋に魔力刀を押し付けていた。
ギンガは烈がそのまま倒れると思っていたため、攻撃がくるとは思わず回避が間に合わなかったのだ。

「そこまで！！」

審判役の隊員が試合終了を叫ぶ。
と、同時に周りで2人の試合を見ていた隊員達から拍手が揚がった。

「はぁ…負けちゃった」
「でもすごかったよ。最初は俺、防戦一方だったし」

烈はギンガを褒めながら魔力刀を消す。

「そうだけど……やっぱり悔しいなぁ。烈はミッド式なのに格闘戦で勝てないなんて……」

「伊達にスバルに格闘の基礎を教えてないよ。
それに、元々はこっちが主体だったんだから」

「うう……じゃあもう1回！！次は勝つから！！」

「はいはい。わかっ……」

烈が言おうしたところ、その言葉は遮られた。

ビービービー！！

突如訓練場に警報が鳴り響いた。

「「ッ！！」」

辺りの隊員達もざわめく。

と、設置されているスピーカーからの通信が流れる。

『近隣の市街地にて強盗が発生。
現在本部隊の担当地区を逃走中です。
隊員は急行し、犯人達の逮捕へ向かって下さい！』

「ギンガ！」

「わかった！」

烈とギンガは館内放送を聞くと同時に走り出した。

～～都内高速道路～～

強盗犯達は現在、車で逃走していた。
車は６人乗りのワゴンで、前列に男２人、真ん中の列に男２人が強盗犯達が乗っており、後部座席に奪った金や品物を積んでいる。

「簡単でやっしたねぇ。今回は」

真ん中の列の１人が言う。
手には奪った宝石を持っている。

「安心するのはまだ早い。管理局に追い付かれる前に逃げ切るぞ」

助手席に座っていたリーダー格らしき男が真ん中の男を注意する。

「わかってやすよ」

「だがボス、あれからけっこう時間も経ってますしここまでくれば追い付かれることも……」

ドスン！！！

運転している男が言いかけたところで、車の上に何かが落ちてきたような音がした。

「なんッ…！？」

キイィィーーン！！ガァァァン！！

「「「んなッ！？」」」

機械音とともに機械の腕が車の天井を貫いていた。

「うあぁ！！」

キキイィィ！！ガアーーン！！

運転手の男は突然の衝撃に驚き、思わずブレーキを踏んでしまい、そのままガードレールに激突してしまった。
天井を貫いた人物は男がブレーキを架けた瞬間に、腕を引き抜き車から跳び上がっていた。

「っててて……」

「誰だこんちくしょう！！」

倒れた車から男達は出てきて叫ぶ。

「時空管理局です！！」

「「「「ッ！？」」」」

強盗犯達の前にはギンガが立っいた。

「強盗、暴行、質量兵器所持の容疑であなた達を逮捕します！！」

「女1人で何ができるか！！」

リーダーの男が叫ぶと同時に、男達全員は懐から拳銃やサブマシンガンを取り出す。

が、しかし。

ヒュンヒュンヒュンヒュン！！

風を切るような音とともに、銃は全て切断された。

「「「「なっ！？」」」」

「おとなしくして下さいね」

近くの電柱の上に烈が立っており、指先からは真紅の糸が伸びていた。

「おとなしくしてくれないなら、さっきの銃みたいに真っ二つになりますよ？」

烈は笑顔で言う。

本来なら女の子が顔を赤くしてもおかしくない笑顔なのだが、今の笑顔は恐い。

本気で真っ二つにされかねないと思った強盗犯達はすぐにおとなしくなった。

数分後、他の隊員達が到着し強盗犯達を連れていった。
ちなみに、ガードレールに激突した車からは火があがっていたので、
烈が「紅鏡の核」にて消火した。
まぁ車はもう使い物にならないだろう。

「んーー！！終わったぁ」

ギンガが背伸びをする。

「まーだだよギンガ。報告書の提出が残ってる」

「そうねー」

「報告書の提出が終わったら訓練の続きでもしようか？」

「ありがとう烈。じゃ、戻りましょう」

「うん」

これは烈が１０８部隊に入隊してから１ヶ月後の出来事である。

～～～～あとがきコーナー～～～～

蒼「今回は１０８部隊に於いての仕事編ってところか？」

ア「そうみたいですね。それでは技紹介です」

『閃牙』

・烈の居合の構えから繰り出す、高速抜刀攻撃

・抜刀の向きは技名と関係ないが、今回は左から右へ薙ぐのではなく、下から上へ薙ぐ形をとった

『紅鏡の核（ソレイユ・コア）』

・使用者　烈

・初出　第５話

・周囲の炎を吸収し球状に凝縮する技

・凝縮した後は球のまま攻撃したり、射撃や砲撃に発展させることもできる

・ちなみに、紅鏡とは太陽の意

K２「余談ですが、今回の倒れ込みからの抜刀に移る形は『我間乱』という漫画を参考にしました」

蒼「いたのか作者」

K２「神出鬼没なんで」

ア「嘘だッ！！」

蒼「そのネタはランスターがやるべきだろ。
ところで、何の用だ。用がないなら帰れ」

K２「用ならあるよ。烈のバリアジャケットの説明」

ア「兄様のですか？」

K２「そうだよ。さて烈のバリアジャケットですが、ぶっちゃけスバルのバリアジャケット（ＳｔＳ第１話）のものを露出無し（腹とか太股とか）＋ハチマキ無しにしてカラーチェンジしたものだと思って下さい」

蒼「何故スバルのに似ているんだ？」

K２「一緒にデバイス作った時に一緒にバリアジャケットも考えたからです。
あと３０班メンバーもちゃんとバリアジャケットは考えてますよ。出してませんけど」

ア「番外編で出せばいいじゃないですか」

K２「本編での出番が遠くなるけど……」

ア「全力で本編の執筆を優先して下さい」

K２「と言うより、番外編書く余裕がないんです。
　でも本編は基本的にギャグが無いからなぁ……早く蒼を出さないと」

蒼「待て。私はギャグ要員か」

K２「いやー今んとこネタ要員。ガン○ムやＦ○ｔｅのネタを使う方向で」

蒼「私の扱いって……ｏｒｚ」

K２「じゃ後はだべりましょうか。じゃあ俺のちょっとした悩みでも……」

ア／蒼「「止めろアホ作者」」

K２「いやいや聞いてよ。今年の夏、ウ〝ァイスシュバルツでなのはＡｓが出るんだけど……」

蒼「あ？トライアルデッキはもっと早く出るんだろ。夏発売はブースターで」

K２「そ。んで、同じく夏に真・恋姫†無双が出るの。ＰＳＰで」

ア「よかったじゃないですか。パソコン版はＲ１８指定だからできなかったんですよね？」

K２「そう。でも１つのルートでソフト１本なの。しかも１本六千円そこら」

蒼「……魏・呉・蜀のルートで計３本の約二万円。……原作のパソコン版買った方が安いな」

K２「そう、つまり……お金が足りない。しかも俺今年受験生ｏｒｚ」

蒼「あーはいはい。我慢するか金でも貯めろ」

K２「……実はＰＳＰ版発売を聞いて、この作品の完結後に烈が恋姫の世界に行くというネタを考えていたり考えていなかったり」

ア「そんなことよりもこっちの方を考えて下さい」

K２「わかっています。はぁＡｓか恋姫か……どっち優先しよーかなー」

蒼「もうほおっておこう」

ア「そうですね。では次回、第２２話　白い悪魔の教導　へ」

蒼「あれ？高町出す気なのか？」

ア「１０８部隊編でフェイトさんとはやてさんが出るのに、なのはさんが出ないのはどうかってことらしいですよ」

蒼「そうか。ではまた次回」

第２１話　陸士１０８部隊（後書き）

蒼「ところで、本当に恋姫を書くとしたら兄さんはどのルートなんだ？」

Ｋ２「董卓ルート→魏ルート」

蒼「それって張遼じゃん」

Ｋ２「まぁ本気で書くかどうかは決めてないからね。それ以前にこっちを書かないと」

蒼「そ。んじゃ、読者のみなさんまた次回～～」

第２２話　白い悪魔の教導（前書き）

ＰＶが１６２０００、ユニークが２１０００を突破しました。

今回雑談はありませんが、この場で感謝いたします。

それでは本編をどうぞ。

第２２話　白い悪魔の教導

～～１０８部隊　隊舎　ミーティングルーム～～

「よし。これで朝のミーティングは終了とするが……何かある奴はいるか？」

今話しているのは、ラッド・カルタス二等陸尉。
１０８部隊の捜査主任で、烈とギンガの上官である。

「はい。じゃあ私からいいですか？」

そう言ってギンガが立ち上がった。

「本日より3週間、戦技教導隊の方が教導で来ることになっていますが、
その時に本局第四技術部のマリエル・アテンザ技術官も来るそうで。
みなさんのデバイスや戦闘記録を撮りたいそうです」

「と、いうことだ。各自マリエル技術官には協力するように。では解散！」

２時間後

～～１０８部隊　野外訓練場～～

野外訓練場にて烈やギンガを含む武装捜査員が整列していた。
烈とギンガが訓練を行った屋内訓練場は基本的には格闘技の訓練が主に行われている。
魔法を主にした訓練はこの野外訓練場で行われるようになっているのだ。

閑話休題

そして整列している隊員達の前に１人の少女が出てきた。
その少女が前に出ると同時に、隊員達はビシッと気をつける。

少女の名前は高町なのは。
本局の航空戦技教導隊の教導官であり、不屈のエースオブエースの名を持つ者である。

「本日より3週間、みなさんの教導を受け持つことになりました。
高町なのは一等空尉です。
ちょっとハードな訓練になると思うけど、しっかりついてきてね」

「「「「「はい！」」」」」

「それから…マリエルさん」

「はい」

なのはに言われて、1人の女性が前に出る。

マリエル・アテンザ。
眼鏡を掛けた小柄な女性で、愛称はマリー。
本局第四技術部のメカニックデザイナーである。
リインフォース・ツウ〝ァイの製作にも関わっており、
ゲンヤからの信頼も厚い人物でもある。

「本局第四技術部のマリエル・アテンザです。
今日1日、みなさんの戦闘やデバイスのデータを録らせてもらいます。
よろしくお願いしますね」

「「「「「よろしくお願いします！」」」」」

「それじゃあ、早速訓練始めようか？」

「「「「「はい！！」」」」」

というわけで白いあｋ……じゃなくて、エースオブエースの教導が始まった。

教導は模擬戦形式。
１０名１グループごとに、１対多の戦闘を行う。
現在は３グループ目。
烈とギンガもこのグループであった。

「アクセルシュート！」

なのはが空中で自身のデバイス・レイジングハートを掲げ、桜色のスフィアを形成し撃ち出す。

その数３０。

地上にいる烈とギンガ含む隊員達１０名はそれぞれスフィアを回避しようとするが、

半数の隊員が回避しきれず、そのままスフィアに当たる。

「フォトン・・・ダガー！」

烈はフォトンダガーを１０個形成して撃ち出し、スフィアを相殺した。

「ウイング・・・ロード！！」

ギンガはスフィアを回避した後、左腕で地面を殴り、自身の先天魔法である一魔力の道一ウイングロードを地面からなのはへ向け伸ばす。

「はあああ！！」

そのままギンガはウイングロードを駆け上がり、なのはへ正面から攻撃を仕掛けた。

「アクセル……！？」

なのははアクセルシュートでギンガを迎撃しようとするが、両腕が魔力の糸で縛られておりスフィアを撃ち出せない。

糸の先を見ると、そこには烈がいて指先から真紅の糸を伸ばしていた。

その間にもギンガはなのはに接近し、なのはに拳を打ち込もうとする。

「ふーん……上手いね。でも！！」

「ッ！？」

なのはは烈を糸ごと引っ張り飛び上がった。

烈は空中に引き上げられ、バランスがとれなくなる。

「ッ！！『紅華緑葉』！！」

烈は自身の足に炎を纏い背中に炎の翼を展開した。

烈は翼を羽ばたかせ、足から炎をブースターのように噴出し、ギンガと同様になのはへと接近する。

ギンガはさらにウイングロードをなのはの元へと伸ばしており、既になのはのすぐ側にまで接近していた。

「「はああッ！！」」

２人は同時になのはへと攻撃を放った。
烈は後方から炎の足による旋風脚を。
ギンガは正面からリボルバーナックルのナックルスピナーを回転させ、強力な正拳突きを繰り出した。
が、２人の攻撃は空を切った。

「えっ！？」

「消えた！？」

ギンガの拳と烈の脚の先になのはの姿はなかった。

「クロスファイヤー……」

「ッ！？」

「ギンガ、上！！」

「シューーート！！！」

なのははは２人よりも上にいた。
高速飛行で急上昇し、２人の攻撃を回避したのだ。
そのままなのははスフィアを撃ち出してきた。

「キャアア！！」

「ギンガ！！」

烈はなののはの攻撃に気が付いたが、ギンガは気が付くのが遅れたため、なののはの攻撃を喰らってウイングロードから足を踏み外した。

「くっ！！」

烈は魔力糸をギンガへ伸ばし、糸を巻き付けて引き寄せ地面に着地した。

「ギンガ、大丈夫？」

「きゅ～～ぅ」

ギンガは目を回して気絶していた。

「ディバイーーーン……」

「えっ？」

「バスターーー！！！」

なのははギンガを抱えた烈に向けて砲撃を放った。
流石悪魔。容赦ない。

「くッ！！プロテクション！！」

烈は真紅の防御壁を張り砲撃を防ぐ。
が、砲撃の威力は高くプロテクションに徐々に亀裂が入る。

「ヤバッ！！……鋼の竜よ、汝を覆いし鎧の如き殻の力を！！『金剛不壊（こんごうふえ）』！！」

烈が叫ぶと、プロテクションが薄く輝いた。
すると、亀裂は広がらなくなりなのはの砲撃を防ぎきった。

「ふぅ。危なかった」

「でも、ここまでだね」

烈が砲撃を防ぎきりホッとしていると、なのはから声を掛けられた。
辺りを見回すと、無数のスフィアが烈を包囲していた。

「ギブアップ……してくれるかな？」

「……はい」

さっき容赦なく砲撃を撃ったのだ。
ギブアップしないなんて言ったらギンガごと蜂の巣にされると思い、烈はおとなしく降参したのであった。

ちなみに、あと3人隊員が残っていたはずだが、彼らはギンガに当たらなかったスフィアに当たって撃墜されていた。

遠くから模擬戦を見ていたマリエルはというと

「面白いですねーー彼。デバイスの構造データとか見せてくれないかな♪」

などと言っていたとか。

「はい。じゃあ本日はこれまで」

「「「「「ありがとうございました！！」」」」」

あれから3時間程教導が続いた。
隊員達はヘロヘロである。

「みなさん戦闘データは提出して下さいね♪」

マリエルが楽しそうに言う。
いや、実質楽しみなのかもしれない。

とまぁ全員が戦闘データを提出した後、隊員達は汗を流すために隊舎へと向かって行ったのであった。

～～１０８部隊　食堂～～

「つっ…かれたーー」

訓練終了後、烈はシャワーを浴びてから少し遅めの昼食を1人で採っていた。
何故1人なのかと言うと、マリエルがギンガを連れて行ったからである。
何処行ったんだろうと烈が考えていると

「前、いいかな?」

なのはが前に立っていた。
なのはの手には食事が乗ったトレーがあった。

「あ、はい!お疲れ様です、高町教導官!」

「そんな堅苦しくしなくていいよ。久しぶりだね、烈君」

そう言いながら、なのはは烈の前の席に座る。

「えっと…高町さん」

「名前でいいよ」

「じゃあ…なのはさんで。2年と半年くらいですか?」

「空港災害の時以来だからね。あれからどう？」

「問題ないですよ。ゲンヤさんにもよくしてもらってますし。ただ、記憶とか元の地球に戻る方法とかは未だに……」

「そっか……」

烈の言葉を聞いて、なのはは暗い表情になる。

「でも…確かに妹達のことは心配ですけど、今はゲンヤさんの力になりたいですから」

「そう……じゃあギンガとは？」

「えっ？」

「いや、ギンガとはどういう関係なのかなーーーって」

なんかなのはがニヤニヤしてる。

「どういう関係も何も……仕事上でコンビを組んでいるくらいですよ」

「へーー（付き合ってたりしたらおもしろいのになぁ）」

自分とユーノの関係は全く進展していないというのに。

「？なのはさん？」

「ん？ううん。なんでもない。
まぁこれから3週間、厳しく教導するからそのつもりでね」

「あはは……胆に命じておきます（汗）」

そんな会話をしながらも、2人は昼食を食べてゆくのであった。

～～首都クラナガン　先端技術医療センター～～

『2人ともお疲れ様。定期検診はおしまいだよ』

「「はい。ありがとうございました」」

ギンガとスバルはいつものマリエルからの定期検診を受けていた。
2人は戦闘機人なのだ。
故に、体に不調がないかどうか検診を受ける必要があるのである。

『検診の結界をまとめるから、ちょっと外で待っててね』

「は～い♪」

「……わかりました」

『……ギンガ、どうかした？』

「い、いえ！なんでもないです！」

『そう？ならいいんだけど』

「ギン姉どうしたの？なんか元気ないよ？」

2人は医療センター付近の公園のベンチに座ってマリエルを待って

いる。
スバルはさっきからギンガの様子がおかしいことが気にかかっていた。

「私達は……戦闘機人で……兵器なんだよね」

「兵器なんかじゃないよ！！」

ギンガの言葉をスバルは否定する。

「でも兵器として生み出された。
烈は……私達がそんな風に生まれたって知ったら何て思うんだろう」

スバルもギンガも、自分達の秘密を烈に話してはいなかった。
当然、ゲンヤも話していない。

「それは……」

スバルは答えることができなかった。

「私は知られるのが怖い。
怖がられるかもしれないし、拒絶されるかもしれない」

「ギン姉……」

「……ゴメン。こんなこと話しちゃって」

「ううん。平気だよ」

「そう……ありがとう」

そのまま2人の気分は暗いままだった。

ギンガはまだこの時知らなかった。

そう遠くない内に、烈に自分達の秘密が知られることに。

～～あとがきコーナー～～

K2「サラマンダーブレイク！！」

ア「いきなり何言ってるんですか！？」

烈「ダブルトレンド！！」

蒼「ファイナルエリシオン！！」

な「ギガデス！！」

K2「ちょッ！？お前等…究極体3体同時に攻撃って……ギャーーー！！！」

ア「……なにやら4人でゲームをしているみたいです。
しかたありませんね。私だけであとがきコーナーを進行します。
では、毎回恒例の技紹介です」

『金剛不壊（こんごうふえ）』
・使用者　烈
・《土》を用いた2つの効果を持つ防御型ブースト魔法
・1つはプロテクションの強化
なのはのディバインバスターを防ぐことが可能なレベルの強度を持たせることができる
・もう1つは身体の硬質化
岩を殴っても傷がつかないレベルにまで体を硬い状態を保つ事ができる
ただし、岩より硬いと言っても、岩を砕くことができる訳ではないこちらは「紅華緑葉」との併用で使うことが多い
・《土》は使い所が難しいためこのようなブーストで多用する

ア「『紅華緑葉』と『金剛不易』の併用についてですが、
　『ＭＡＲ』5巻のガロンというキャラクターの戦い型だと思ってください」

烈「『紅華緑葉』で腕力や機動力を上げ、『金剛不壊』で防御を上げる。
　近接戦用の組み合わせだ」

ア「あれ？兄様？ゲームしていたんじゃないんですか？」

烈「抜けてきた。作者と蒼が白熱し過ぎてな。ついていけん」

な「そういう訳で、私も抜けてきたよ」

ア「あ、あｋ……じゃなくて、なのはさん」

な「今悪魔って言わなかった？」

ア「気のせいです（汗）」

な「ふーん。まあいいや。
　ところで、今回のギンガの言葉、本当なの烈君？」

烈「ああ。あの時点でギンガとスバルが戦闘機人だということは知らなかった」

ア「灯台元暗いしとはこのことですかね。
　兄様、戦闘機人事件について調べているのに」

な「まったくだね」

烈「悪かったな」

ア「さて、向こうは……」

K2「ガイアフォース！！」

蒼「グレイクロスフリーザー！！」

ア「いい加減にしなさい！！『絶対零度（アイシス・オブ・ゼロ）！！』」

蒼／K2「「ギャーーー！！！」」

な「作者さんとアオさんの凍り漬け……」

烈「アリスを怒らせると怖いな」

ア「まったくもう！！
　では、次回予告に……ってあれ？」

烈「ん？次話タイトル未定だと？」

な「この作者さんその場のノリで書いてるからね～
　次回確定してあるのは、はやてちゃんが登場するよ」

ア「そろそろ私の妹の出番もあります！！」

烈「それでは、次話のタイトルは未定だが次回もよろしく」

第２３話　八神はやて（前書き）

Ｋ２「前回投稿した日のヒット数が１万を越えていたことに驚いた俺がいる」

烈「こんな駄文でも読んでくれてるんじゃないのか？
　感想は相変わらず少ないが」

Ｋ２「すいません今回は本っと駄文です。知識が乏しいので。
　気にしないでくれるとありがたいです」

烈「今回はタイトルが浮かばなかったそうだ。こちらも気にしないでくれ」

Ｋ２「それでは、駄文ですが始まります」

第２３話　八神はやて

烈が１０８部隊に入隊してから数ヶ月が経った。

犯罪者の検挙や逮捕、ロストロギアや質量兵器の密輸調査。
デスクワークや訓練などをちゃんと熟し、
時には有休を使ってまで６年前の事件を調べたりしていた。

そんな冬の季節のころ

～～１０８部隊　ミーティングルーム～～

ミーティングルームのモニターのある正面の方で、小柄な茶髪の少女と薄い水色の髪で小さな少女。そして１匹の青い狼がいた。

「じゃあ自己紹介頼みます。八神三佐」

カルタスが女性に向けて言う。

「はい。指揮官研修ということで、本日より陸士１０８部隊に出向してきました。

八神はやて三等陸佐です」

「八神三等陸佐の補佐をしています。
リインフォース・ツウ〝ァイ空曹です」

小さな少女も続けて名乗る。

「この子は私の守護獣でザフィーラっていいます」

はやてが隣で礼儀正しく座っている狼を見て言う。

「……ザフィーラだ」

「……しゃべった」

「守護獣……初めて見た」

烈、ギンガとそれぞれザフィーラを見て意見を述べるが

「そこ、無駄口叩くな」

「「すいません！」」

案の定、カルタスに注意される羽目となった。

「八神三佐の指揮官研修はウチの部隊で最後になるということなので、
今ウチが捜査っている事件で部隊の指揮をしてもらうことになった
八神三佐、事件の内容はご存知ですよね？」

「はい。ナカジマ三佐から聞いてます」

「そうですか。ですが一応確認のために説明しますか……烈、頼む」

「はい！」

そう言って烈は立ち上がり、モニターの前に立った。

「現在私達が捜査しているのは、連続傷害事件です」

烈はコンソールを叩き、モニターに事件の発生現場の映像を出す。

「ここ数週間の間での事件の発生数は十数回。
被害者は子供から老人、管理局員など様々です」

烈は再びコンソールを叩き、被害者のデータをモニターに出す。

「幸いなことに、現時点で死者は出ていません。
しかし、重傷を負った被害者も数名います。
そして事件発生現場と被害者の怪我において共通点が１つ」

ここで一旦烈は息を吸い、呼吸を整える。

「それは何らかの獣のような爪痕や歯形の痕跡が残っていたことです。
これらのことから、犯人は生物関連の研究を行っている人物ではないかと推測され、
現在犯人の特定を進めているといったところです」

「よし、ご苦労。戻っていいぞ」

説明を終えた烈はカルタスに言われ、
自分の席であるギンガの隣に座る。

「八神三佐が指揮するのは犯人特定してから逮捕までの間となります。
この事件は生物の違法研究に関する可能性がありますので、
違法研究によって生み出された生物との戦闘になる可能性もありますから」

「わかりました」

「それでは、これで朝のミーティングは終了とする。
この後は警邏(けいら)隊と武装捜査員合同で犯人捜査にあたるように。
では解散!!」

ミーティングが終わって、烈とギンガがミーティングルームから出ようとしたところ

「烈君～ギンガ～～久しぶりやな」

はやてに声を掛けられた。

「「お久しぶりです！八神三佐」」

「いやそないに硬くならんでええよ。あとはやてって呼んでや」

「えっと…じゃあ、はやてさんで」

「うん。ええよ」

なのはさんの時も同じやり取りしたなーなどと思いながら言う。

「リイン空曹もお久しぶりですね」

「はいです～～～。ギンガと烈さん、元気ですか～～？」

「はい。とても」

はやてと烈が話す一方で、ギンガはリインと話していた。

「2人とも、私の指揮官研修の短い間よろしくな」

「はい」

「よろしくお願いします」

「でははやてさん。俺達は警邏隊と捜査に行かないといけませんので」

「うん。がんばってな」

「「はい！」」

そういって、2人はミーティングルームを出て行った。

「……主」

今まで黙っていたザフィーラがはやてに話し掛けた。

「ん？どないしたんザフィーラ？」

「あの少年……烈といいましたか？」

「そやけど……どうかしたん？」

「彼からは……血の臭いがしました」

ザフィーラの言葉に、はやては耳を疑った。
血の臭いがするということは、人を殺しているということだ。
はやてはザフィーラの言うことが信じられなかった。

「烈君に限ってそれはあらへんやろ。
そうでなくても烈君に失礼やで、ザフィーラ」

「申し訳ありません、主」

「わかったならええよ」

しきし、はやての頭からザフィーラの言葉が消えることはなかった。

～～1週間後～～

再びミーティングルームにて

「犯人の割り出しができました」

烈がコンソールを操作してモニターに男性の写真を写す。

「ルノーダ・イムラー、53歳。
数年前まで管理局の技術部だった人物です。
現在は局員を辞め、個人的な研究を行っているそうです」

ギンガが烈の隣でモニターに写った男の説明をする。

「しかし、その個人的な研究というのは管理局側でも把握していないそうです」

「ただ、現役管理局員時代に生態技術の研究を行っているという発言があったため、
断言はできませんが、犯人である可能性は十分高いです。
また、他にも容疑者は揚がっていましたが、そちらのほうは十分な証拠が得られませんでした」

ギンガの発言に続いて烈が説明を加える。

「逮捕状は取れたのか？」

カルタスがギンガに問う。

「いいえ、証拠不十分で。
ですが、家宅捜査状なら取れました」

「よし！！なら今から家宅捜査だ！！
八神三佐、指揮はお願いします」

「わかりました」

「武装捜査員は準備しろ！
気を抜くんじゃないぞ！」

「「「了解！！」」」

ミーティングルームにいた全身が敬礼して答え、各々準備に取り掛かった。

～～あとがきコーナー～～

ア「今回省き過ぎですよね」

K２「サーセン。作者の自宅にはテレビを占領している無能がいるせいで、
ろくにテレビが見れないんです。
そうゆう訳で刑事ドラマとかよくわからないんです
まぁ今時刑事ドラマなんてやってるかどうか知らないけど」

蒼「そうでなくとも、今回もう少し先まで書くんじゃなかったのか？
突入後のアリスの妹登場まで」

K２「その予定でした。ですが……」

ア「ですが…ってなんですか？」

K２「本来書く予定だった突入後の途中のところまで書くより
次の話で一気に突入から最後まで書こうかと思いまして

だって烈がキレるし」

蒼「またか？」

K２「うん、また。でも次キレたら、地上本部襲撃までキレないし」

ア「それ軽ーくネタバレしてますよね」

蒼「まぁギンガがヒロインという時点で、最初から読者の方々は察しているんじゃないか？」

K２「ですよねー」

ア「じゃあそろそろこの辺で」

蒼「作者、次回のタイトルは？」

K２「えーっと、次回、第２４話　キメラ（仮）」

ア「（仮）って…」

K２「つまり決まってません。変わるかもしれませんし、このままキメラでいくかもしれません」

蒼「本当に駄目な作者ですまない。
　次の話も楽しみにしてくれていたらうれしい」

ア「それではみなさん、また次回～～～」

番外編　絃遣い　ＶＳ　絃遣い（前書き）

Ｋ２
「少し烈の鋼閃の補足説明を」

烈（黒）
「何故篭手なのに指先で絃を操っているのかという点だ」

Ｋ２
「はい。鋼閃の手甲の部分には魔力収束機能があり、いつもそこで魔力絃を生成しています。
　そしてそこでできた魔力絃は手甲の先端部分にある５つの指掛の緒（指を通す部分）を通じることで、指先で魔力絃を操っています。
　他作品の絃遣いの方々はデバイスがグローブ型なので、今回この補足説明を入れました」

烈（黒）
「よく今まで質問とか来なかったな」

Ｋ２
「まったくだ。俺も今回の番外編書いてて、説明していなかったなぁって思ったよ」

烈（黒）
「ところで、絃遣いｖｓ絃遣いって……片方は俺として、相手は誰だ？」

Ｋ２「それは本編が始まってからのお楽しみ。

ちなみに時系列はＳｔＳに入っていて烈は１７歳です。
烈の魔導士ランクはＳｔＳでは陸戦ＡＡ＋です」

烈（黒）
「それでは番外編　紘遣いｖｓ紘遣い　始まるぞ」

番外編　絃遣い　ＶＳ　絃遣い

とある港湾埠頭の倉庫にて

倉庫の周辺と中にいるのは１０８部隊の隊員達と数人のガラ悪い男達。

そして男達は真紅の魔力絃で縛り上げられていた。

「ロストロギアの違法所持。及び密輸の容疑で逮捕します」

烈が男達に向けて言う。

「ちくしょぉ……管理局の犬め」

男の１人が烈を睨みながらつぶやく。

「犬…ね。別に俺は管理局を信じてなんかいない。
信じているのは俺の恩人と友人だけ。
っと犯罪者相手に話すことじゃないか」

そう言いながら烈は他の隊員達と一緒に男達の元へ歩いてゆき、連行した。

～～１０８部隊隊舎～～

「ご苦労さん、烈」

「いえ。たいしたことなかったですから」

隊長室には烈、ギンガ、ゲンヤ、マリエルがいる。
烈は片手に木箱を抱えていた。

「それで、押収したロストロギアは？」

マリエルが烈に聞く。

「あ、はい。これです」

烈が木箱を机の上に置き、蓋を開けた。

全員がその中を覗き込む。

「……宝石か？」

「綺麗～～～」

その中にあったのは、握りこぶし程の大きさのピンクの宝石だった。

「レリックではないですね」

「レリックなら六課に連絡を撮ろうかと思ったのですが、違うようです」

「ならマリエル。こいつを本局の方に持って行ってくれ」

「わかりました」

そう言って、マリエルが宝石を手を伸ばすと

「えっ！？」

宝石が光り出した。

「マズい！！離れろ！！」

ゲンヤが叫ぶ。
宝石の光は輝きを増して強くなっていた。

「うわっ！！」

「キャア！！」

隊長室全体が桃色の光に包まれた。

「……ん？治まったか」

ゲンヤは光が治まったのを確認すると立ち上がった。

「な、何が起こったんでしょう」

マリエルも眼鏡をかけ直しながら立ち上がる。

「ん？…あれ？…烈は？」

ギンガが烈がいないことに気がつく。

「なにっ？」

「えっ？」

3人が辺りを見回しても、烈の姿はなかった。

「あ！宝石も無くなってます！！」

「なにぃ！？」

木箱の中にあったはずの宝石は無くなっていた。

「烈が……消えた？」

～～京谷Ｓｉｄｅ～～

ここは俺の部隊「円卓の騎士　（ナイト・オブ・ラウンズ）」執務室

「暇だ」

「珍しいよね。京谷が暇なんて」

「ん？お、アリスか。他のみんなは？」

「カルトは教導。スノウは執務官の仕事。それ以外はみんな孤児院に行ってる」

「私は居るよ～」

「ん？フィオネも居たのか……アリス、訓練でもするか？」

「うん」

「おっし、じゃあ『修練の門』！」

すると床に扉が現れる。

「よ～し……ってあれ？」

部屋の天井が光り輝いていた。

「なに？」

次の瞬間、部屋が光で包まれた。

「うわっ！」

「眩しい」

俺とアリスとフィオネはあまりの眩しさに目を閉じる。

数秒後、光は治まった。

「なんなんだ言っｔ……」

光が治まると、目の前に眼帯を付けた赤い髪の少年がアリスの上で倒れていた。
しかも管理局の制服着てるし。

「う、う～ん？」

あ、目覚ました。

「あ、あれ？ここは？」

「ここはナイト・オブ・ラウンズ部隊の執務室だよ」

フィオネが答える。

「ナイト・オブ・ラウンズ？」

「それより……どいてやってあげて？」

「えっ？」

うん、アリスが下敷きになったままなんだよね。

「あ！す、すいませ～ん！！」

「えっと……すいませんでした」

「……」

アリスに謝っているが、アリスはムスッとしてる。
まあ、でも事故だよなぁ。
それはさておき

「ところで、君は？管理局の制服着てるけど」

「あ、はい！陸士１０８部隊所属、草薙・烈陸曹長です」

「俺はナイト・オブ・ラウンズ部隊の隊長、氷上京谷二等空佐だ」

「二等空佐！！？し、失礼しました！！」

「あーいいよ。だって俺の方が年下だし。
それより…フィオネ。この人のデータある？（まぁ無いとは思うけど）」

「んーー……無いよ。」

「えっ！？」

そりゃ驚くわなぁ。

「ところで君はどうやってここに来たの？」

フィオネが聞く。
そういえばまだ聞いてなかったな。
まぁでも、いつものよくある気がついたら～ってやつだろ。

「えっ……と、密輸品だったロストロギアが突然光り出して……」

「ロストロギア？」

「これのこと？」

アリスが手にピンク色の宝石を持っていた。
いつの間に……

「はい。それです」

「アリス、それちょっと貸してくれ」

「……アリス？」

「ああ、言ってなかった。こっちの青髪の子がアリスで、こっちは俺のユニゾンデバイスで名前はフィオネ」

「よろしく～」

「よ、よろしく…」

アリスって名前に反応したな。
そっちに同じ名前の子がいるのか？
それはさておき、俺は宝石を受け取る。

「あー……どうやら次元跳躍型のロストロギアっぽい」

「次元跳躍型？」

「まぁぶっちゃけ平行世界に飛ぶロストロギアみたいな？」

「また平行世界ｏｒｚ」

えっ？あれ？どしたの？
つーか、また？
転生者じゃないのか。

「あー大丈夫。元の世界には帰れるから」

「本当ですか！？」

「京谷に常識は通用しないからなんでも有りなんだよ」

「うん、フィオネ。後でお仕置きな」

「ごめんなさい！！」

「アハハ……」

「京谷…訓練」

あ、忘れてた。

ん？そうだ。

「烈…でいいか？帰る前にちょっと訓練やっていかないか？」

「訓練ですか？」

「ああ。アリスと手合わせしてみてくれ。いいか？アリス？」

「僕は良いよ」

「まあ、帰れるなら……わかりました」

うっし！なら放置してたけど修練の門へ

～～京谷Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～烈Ｓｉｄｅ～～

「異空間…ですか？」

門の中に入ると、そこは別世界だった。

「うん。さっきも言ったけど、京谷に常識は通用しないから」

京谷君って何者？

俺より年下だよね？

「とりあえず準備してくれ」

「あ、うん」

そう言って、腰に吊していた鋼閃を腕に装着する。
向こうのアリス君もグローブ型のデバイスを装着している。

「エクセリオン」

「鋼閃」

「「セットアップ！！」」

俺とアリス君はバリアジャケットに包まれる。

「（バリアジャケットがスバルのに似てるな。なら近代ベルカ式か？）
じゃあルール説明。魔力によるノックダウンのみの１０分間１本勝負な」

「わかった」

「オーケーです」

「んじゃ試合…開始！！」

京谷君の掛け声と同時に、俺は魔力絃を伸ばして撃ち出す。

が、しかしアリス君も魔力絃を撃ち出してきた。

「なっ！？」

「むッ！？」

２人の真ん中の距離で絃は相殺された。

「アリス君。君も絃遣い？」

「うん」

「そうか……じゃ、遠慮なく行くよ！！」

俺は再び魔力絃をアリス君に向け撃ち出した。

～～烈Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～京谷Ｓｉｄｅ～～

「絃遣いｖｓ絃遣い、か」

「凄いねー京谷。でも同じ絃なのに、アリスは近代ベルカ式で烈君はミッド式だよ？」

そうなんだよなぁ。
どう違うんだよ？
てか烈は見た目どう見てもベルカ式だよなぁ。篭手だし。
今2人の戦いはアリスが押している。
アリスは周辺の柱を絃で切り裂いて、その岩を投げて攻撃している。
そして烈はその岩を絃を絡めて軌道を変えたり投げ返している。

「……キリがない」

そう言ってアリスは柱を裂くのを止め、絃を使い風を起こし始めた。

「風？」

「うん。僕の魔力変換資質」

そんな会話をしながらも、アリスは風を操り小さな竜巻を作り上げた。

「…これでどう？」

アリスが竜巻を撃ち出した。
さて、烈はどう防ぐ？

「くッ！『羅生門』！！」

は？羅生門？芥川龍之介の？それともＮＡＲＵＴＯの？
んな馬鹿なこと考えていると、烈の前に鬼のような顔が描かれた壁が現れた。
竜巻は壁によって防がれる。

「…む？」

「これが俺の魔力変換資質の１つ、『大地』」

「……１つ？」

アリスが頭に？マークが浮かんでいる。
１つってことは他にもあるのか？

「じゃあ残りも見せようか。
フォトンブレイド！エレメンタルシフト！」

エレメンタルシフト？エクスキューションシフトじゃなくて？

叫んだ烈の周りには無数の剣が浮かんでいた。
右側には炎の剣。左側には氷の剣。
炎熱と凍結の変換資質か！！

「千紫・・・万紅ォ！！」

「くっ！」

無数の炎と氷の剣がアリスへ向けて撃ち出される。
アリスは再び風を起こし、剣を打ち落とそうとするが

「えっ！？」

氷の剣は竜巻で打ち落とせた。
しかし、炎の剣は竜巻に吸収され、風の力で炎が増大された。
これはアリスにとってプラスになるのか？

「『紅鏡の核』！！」

烈が再び魔法を唱える。
小さな球が現れて、炎の竜巻を吸収した。

「えっ？」

「「嘘ッ」」

アリスも俺もフィオネも驚いた。
炎を吸収しただと！？

「終わらせる！フレア……バスター！！」

球を烈が殴り、そこから撃ち出されるのは炎を纏った真紅の砲撃。
そしてその砲撃はアリスへと向かい、爆発した。

「た～まや～」

「何言ってんだフィオネ。アリスは……」

爆発によって、炎と砂埃が舞っていた。
アリスがどうなったかわからない。

「やり過ぎたかな？」

烈も心配そうな顔で炎を見つめている。

「……全てを吹き飛ばす轟嵐となれ」

「えっ！？」

「ストーム・パニッシャー！！」

『Ｓｔｏｒｍ　Ｐｕｎｉｓｈｅｒ』

巨大な竜巻が発生し、炎を吹き飛ばした。
炎の勢いは止まらず、そのまま烈へと向かってゆく。

「ッ！！『羅生門』！！」

再び烈は壁を生成するが、竜巻によって壁は削られ破壊された。

「うわあぁぁぁ！！」

守るものが無くなった烈は竜巻に飲み込まれ、空高くへ吹き飛ばされた。
そして、受け身を取れず地面に激突した。
どうやら気絶してるみたいだ。

「そこまで！！」

そして俺は試合終了を宣言した。

～～京谷Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

「いや～強かったね烈君」

「アハハ、負けちゃいましたけどね」

あれから1時間後。
目を覚ましてから『修練の門』って扉から出てきたところ。
そう言えば、蒼も似たようなものが使えたような気がする。

「…でも強かった」

「ありがとうアリス君」

「んじゃ、帰るか？」

「はい。お願いします」

「ほい、座標固定」

そう言うと、京谷の横に黒い穴が現れた。

「そこ通れば元の世界に帰れるから」

「京谷君……君本当に何者？」

「んー…チート」

「アハハ…じゃあね。アリス君楽しかったよ」

「また会ったら訓練しよう」

「うん。それじゃ」

そして俺は黒い穴に入っていった。

～～１０８部隊　隊長室～～

「ギンガ、そんなにオロオロするな」

「でもお父さん…烈が…烈が……」

ゲンヤがギンガを落ち着かせようとしていると、突然部屋は光に包まれた。

「またかっ!?」

「キャッ!」

2人は目を閉じる。

数秒で光は治まった。

2人が目を開けると、部屋の真ん中に烈が立っていた。

「ふぅ、ただ今戻りました。ゲンヤさん、ギン……」

「れつぅぅーーー!!!」

ギンガが抱き着いてきた。

そのまま俺は押し倒される。

「ぎ、ギンガ！？」

「よかった……戻って来た……」

ギンガは目に涙を浮かべていた。
あーー、心配かけちゃったな。

「大丈夫だよ、ギンガ。だから泣かないで」

「……うん」

「しっかし、烈。お前は今まで何処に行ってたんだ？」

ゲンヤさんが安心した顔で言う。
えっとどうしよう。本当のこと言った方がいいかな？

「ちょっと訓練してきました」

「訓練？」

「はい。あ、あとこのロストロギアですが、厳重に封印を掛けておきました」

「ん…そうか。まあ何と言うか、災難だったな烈。
今日はもう休んでいいぞ」

「はい。ありがとうございます」

平行世界の管理局に行って不思議な出来事。
それは新歴７５年。５月の始めのことだった。

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「さて、お送りしました番外編でした～」

烈／蒼「「ちょっと待てぇ！！」」

Ｋ２「な、何？」

烈「いやいやいやいや番外編ってオイ！！」

蒼「なんで有名な作者様の作品のキャラが！？」

Ｋ２「Ｋｙｏ様の許可はちゃんと下りたわ！！」

烈／蒼「「嘘だッ！！」」

K２「ネタが古いわ！！ほら、メッセージ欄見てみ」

蒼「……マジだ」

烈「よく下りたな」

K２「いや正直俺も予想外だったよ？」

蒼「心が広い方だな」

烈「だが、絃ｖｓ絃だったのは最初だけだったが」

K２「すいません！！俺の文才の無いせいです」

烈「まったく。じゃあ技紹介な」

『羅生門』

・使用者　烈

・土を操り、鬼が描かれた壁を作り出す防御魔法

・名前の由来は作中でも出たように、芥川龍之介の「羅生門」というのは嘘で、ＮＡＲＵＴＯの方

『千紫万紅』

・使用者　烈（氷のみならアリスも可）

・フォトンブレイドに炎と氷の属性を付加させて作り上げ撃ち出す技

・剣の着弾した場所は炎が燃え上がるｏｒ凍結する
・このような2属性を用いる技は魔力で片方の属性を、氣でもう片方の属性を発生させる必要があるので、疲れやすい

『フレアバスター』
・使用者　烈
・「紅鏡の核」の発展技
・炎を纏った砲撃を撃つ
・ぶっちゃけ「烈火の炎」の『虚空』

烈「以上だ」

蒼「毎回技出し過ぎじゃないかと思うんだが」

Ｋ２「けっこう悩むんだよ。技考えるのって」

烈「ところで、何故まだＳｔＳに進んでないのに時間軸を六課発足後にしたんだ？」

Ｋ２「えー今回で烈のＳｔＳの設定が少し出てしまいましたが、烈は２３話の時点で魔導士ランクはＡなんです。しかし、アリス君はＡＡＡ。これじゃ敵わないだろうということで、ＳｔＳの時点での魔導士ランクにしました」

蒼「結局負けたけどね」

烈「あの時『大地の柱』でも使って跳び上がれば……」

K2「まぁ過ぎたことはしょうがない。さて、そろそろ終わりにしよう」

蒼「それじゃあ次回の更新は土日になると思うけどよろしく」

烈「この作品に自分の作品のキャラを出して欲しいという方がいたら言ってくれ」

K2「その場合はあとがきコーナー、可能ならば今回のような番外編を書こうかと思いますので」

蒼「それでは」

烈／K2「「次回もよろしく」」

番外編　絃遣い　ＶＳ　絃遣い（後書き）

Ｋｙｏ様どうでしたでしょうか？

感想やリクエスト待ってます。

第２４話　キメラ（前書き）

Ｋ２「本日、先週移転オープンしたアニメニトに行って来た作者です」

烈「なんだ、家でダラけてるのかと思ってたのだが」

Ｋ２「いや最近家に居てばっかりだってのもアレだしね」

烈「で、どうだった？」

Ｋ２「広かったなぁ。移転前の場所は狭かったのに。あとマッハキャリバー（待機モード）のペンダントが売ってた。お金が無くて買えなかったけど（涙）」

烈「そういえばお前の待機モードで１番好きなデバイス、マッハキャリバーだったな」

Ｋ２「ブリッツキャリバーもいいけどね。デバイスか……早く蒼を出さないとな」

烈「どういう意味だ？」

Ｋ２「さあ？では本編始まります」

第２４話　キメラ

～～イムラー宅前～～

烈達はイムラーの自宅の前に来ていた。

「……本当にこんなところで研究やっているんですかね」

烈のイムラー宅を見ての感想。
それもそのはず、イムラーの家は住宅街よりも離れた森の近くにあるのだが、
家の造りはそこらの一般的な2階建ての住宅となんら変わりもないのである。

「せゃなぁ。でも油断したらあかんで」

「わかっています」

烈とはやてが話していると、先に家へ向かわせていた隊員が1人こちらへ戻って来た。

「八神三佐！イムラーは容疑を否定。家宅捜査も拒んでいます！」

「さよか。でも家宅捜査状は取ってある。強制捜査するで！！
武装捜査員は突入の準備してや！！」

「「了解！！」」

～～5分後～～

烈、ギンガ、はやて、リイン、ザフィーラ、ほか隊員9名。
計13名と1匹が準備を終え、はやての指示を待っていた。

「ほんなら…全員突入！」

はやての号令と同時に、玄関から隊員達が次々にイムラー宅へと突入していった。

「本当に一般的な家庭と変わらないね」

「本当。何も怪しいもの無いね」

「というか、イムラーは何処に？」

「いないよねぇ」

烈とギンガ、他数名の隊員で家の中の2階を捜査していると

「全員集まってや！！」

はやてが1階から叫んだ。

「だってさ、ギンガ」

「行こう、烈」

1階へ下りていくと、物置らしき場所に全員集まっていた。

「八神三佐！何かあったんですか！？」

烈達と一緒に2階を捜査していた隊員がはやてに問う。

「これや」

はやてが指差した先には、床に小さな扉があり、そこから地下へと梯が伸びていた。

「……地下ですか」

烈がつぶやく。

「せや。ここから逃げたか、若しくは地下で研究をしているか……とにかく、地下も捜査するで。何人かは地上に残っといてな」

「「「了解！！」」」

6名の隊員を地上に残し、烈達は地下へと下りた。

「これは……」

「どうやって作ったんです～？」

下りた先は通路だった。

が、地下にはまさに研究施設のような空間だった。

「でも……これってつまり……」

「ギンガの言う通り、イムラーは黒やろうな」

「なら…このままイムラーを逮捕しますか？」

「せやなぁ……よし！みんな別れてイムラーを捜すで！」

「「「了解！！」」」

「五つに別れよか。ここがどれだけ広いんかわからへんし。
地上に残ってる隊員達に応援を呼ぶように連絡してや！
あとみんな常時回線は開いとくように
何があるかわからへん。気ぃつけてな！！」

「「「了解！！」」」

監視カメラからのモニターが多数浮かんでいる開けた場所。
巨大な生体ポッドがある所に、1人の初老の男がいた。
ルノーダ・イムラーその人である。

「くそッ!!管理局の奴らめ!!」

イムラーはモニターに映る烈やギンガ達を見て毒づく。

「……まあいい。調度奴らで実験してからでも逃げられるだろう」

そう言って、イムラーは1つのモニターに顔を向ける。

「君は大分役に立ったよ。もはや用済みだがね
ククク……さて私の作品の性能実験といこうか」

モニターの先には巨大な炉。
どうやら発電機のようである。
そしてその炉の中心には、小さな女の子が埋め込まれていた。

「広い……研究者ってどちらかって言うと、狭い個室でぶつぶつと独り言を言いながら研究しているイメージがあるんだけど」

「リインも烈さんと同じ意見ですぅ～～」

烈はリインと2人で研究所内部を探索していた。
2人共バリアジャケット（騎士甲冑）を展開している。
何故リインと2人なのかと言うと、
1つ目は、五つに別れる時13人と1匹しかいなかったこと。
2つ目は、こういった捜査などを烈は既に単身で何度か経験していること。
3つ目は、はやてが後衛型なので一緒にいる前衛型がザフィーラだけでは心許ないからである。
はやてはザフィーラとギンガの前衛型2人（1人と1匹）と組む代わり、烈がリインと組むことになったのだ。

とまあ、そんな訳で烈とリインは2人が走っていると（リインは烈の肩に座っているけど）、飛ばしていたサーチャーに反応があった。

「サーチャーに反応です！」

「位置は！？」

「このままっすぐです！」

「わかった。リイン、気を抜いたらだめだよ」

「了解ですぅ！！」

烈とリインが奥へと進むと、広い部屋に出た。

そしてその部屋は、烈とリインが知るはずもないが、先程イムラーのいた所のモニターに映っていた部屋だった。

「ここは……？」

「自家発電……ですか？」

2人は中心にある巨大な炉を見る。

「烈さん！あれ！」

リインが炉の中心を指差す。
その先にいたのは……

「女……の子？」

烈の目に入ったのは、炉に埋め込まれた小さな金髪の少女だった。

「……痛いよぉ……苦しいよぉ……」

少女から悲痛な声が聞こえた。

「ッ！！リイン！！」

「はいです！！」

2人は炉の近くにあったコンピューターへ向かい、それぞれ別のキーボードを叩く。

「この発電機、あの女の子の魔力を電力に変換してる！！」

烈の方のコンピューターのモニターには炉の状態が映し出されていた。
どうやら烈の言った通り、炉はあの金髪の少女から魔力を吸い出し、それを変換して研究所全体に電力を供給しているようであった。
烈の言葉を聞いたリインは、自身の方のコンピューターは炉を操作するものだったらしく、キーボードを叩いて少女を助け出そうとするが

「ダメです！操作を受け付けないです！」

コンピューターはリインの操作を全く受け付けなかった。

「……リイン、離れてて」

「ふぇ？」

そう言って烈は炉の前に立ち、左足を前にして開き、左手の掌を前にして炉に当て、右手を握り腰の辺りで構える。

「烈さんまさかっ！？ダメです！あれは発電機です！そんなことしたら爆発するです！！」

リインは烈が何をするのか察したのか、烈の行動を止めようとする。

「いいから。離れて」

だが、烈はリインの言うことに聞く耳を持たない。

「ハアアァァァ！！！」

烈は溜めた右拳に魔力を乗せ、力ずくで炉を殴った。

一方、ギンガ、ザフィーラ、はやての3人はというと。

「リボルバー…シュート！！」

「牙獣走破ァ！！」

「ブリューナク！！」

囲まれて戦っていた。
はやて達に襲い掛かっているのは奇妙な生き物達。
牛のような角を生やした山羊。
鳥の翼が生えた蛇。
腕のみが巨大な猿。
全て違法研究によって生み出された、魔法生物―キメラ―である。

「くッ！！数が多い！！」

「だが、引くこともできん！縛れ、鋼の軛！！」

ザフィーラ（人型）は床や壁から無数の柱を発生させ、キメラを貫く。
が、次々と新たなキメラが現れ数が減る様子は一向にない。

「通信も通じん……みんなも戦っとるんかもしれへん。
……このままじゃじり貧や。ギンガ、ザフィーラ！一気に駆け抜けるで！！」

「了解です！」

「承知！」

「いくで……クラウ・ソラス！！」

はやてが白い砲撃を撃つ。
砲撃の着弾点から救状の衝撃波が展開し、周囲のキメラを吹き飛ばす。

「ウイングロード！！」

道が開け、ギンガはウイングロードを伸ばし、３人はウイングロードを翔けることでキメラの包囲から脱出する。

「なんとか逃げだせましたね」

「だが、直ぐに追って来るぞ」

「せやなぁ。でも、このまま行くしかあらへん」

そして３人は広い部屋に出た。
その部屋には複数のモニターと巨大な生体ポッド。
そして……

「ルノーダ・イムラー！！」

今回の事件の犯人であるルノーダ・イムラーがそこにいた。

「騒がしな」

イムラーはめんどくさそうに振り返る。

「傷害罪。及び魔法生物の違法研究等の容疑であなたを逮捕します！！」

ギンガがイムラーの罪状を述べる。

「知ったこっちゃないねぇ、戦闘機人」

「ッ！！？」

「ギンガが……戦闘機人？」

「そう言う君は闇の書の主。そこの使い魔は守護騎士プログラムだろう？」

「使い魔ではない！守護獣だ！！」

「闇の書やない、夜天の書や！！」

「そんな名前などどうでもいいのだよ」

そう言ってイムラーはコンソールを叩く。
すると、壁側の扉が開き先程と同じキメラが出て来た。

「くっ！」

はやて達は険しい表情になる。

「重要なのは君達が非常に貴重なサンプルだということなのだよ。
戦闘機人に闇の書。実に興味深い！！徹底的に調べ上げてあげようじゃないか！！」

イムラーが喋っている間にもキメラははやて達ににじり寄って来る。

たった3人でこの状況はマズい。
何か手はないかとはやてが考えたその瞬間

「『千紫万紅』！！」

はやて達が入って来た場所から無数の炎と氷の剣が降り注いだ。
剣はキメラに直撃し、一部からは炎が燃え上がり、一部は凍り付いている。

そして全てのキメラの戦闘能力を奪ったのだった。

「何だっ！？」

「「烈（君）！？」」

ギンガとはやての２人は攻撃が来た方向へと振り返る。
が、振り向いた瞬間言葉を失った。

「貴様か。いかれた研究者は」

漆黒の髪に真紅の右目。
怒りを現にした烈がそこにいた。

少し時間を戻そう。

「ハアアァァァ！！！」

ガガガガン！！！

烈はおもいっきり炉を殴った。

「ひうっ！！」

リインは爆発すると思って目を閉じた。

「……？」

しかし、爆発音は聞こえない。

恐る恐る目を開けると、少女を右腕に抱えた烈が目に入った。

「爆発……しないです」

「凍らせたよ」

「ふぇ？」

よく見ると、炉全体が凍り付いていた。

「凍らせて機能を停止させた。爆発は起こらないよ」

凍てつく氷像。対象を凍結させる技である。

「よ、よかったですぅ～」

「それよりも……」

烈は自分の右腕で抱えている少女の方を見た。

「ぅ……ん？」

「大丈夫？」

「…ひっ！……い、嫌です！もう痛いのもッ！……苦しいのも嫌です！」

少女は怯え震え出す。

「大丈夫だから。もう痛いのも、苦しいのもないよ」

「……本…当？」

「本当だよ。だから、今はおやすみ」

「……は…い。あ…りが……スースー」

少女は安心して眠ってしまったようだ。

「よかった」

「でも……酷いです。こんなことするなんて」

「ルノーダ……イムラー」

烈は唇を噛み締め、拳を強く握り絞める。

「っ！！烈さんアレ！！」

リインが部屋の入口を指差す。

その先には
尻尾が５本ある猫。
ワニ程の大きさのトカゲ。
その２種類のキメラがたくさんいた。

「気持ち悪いですぅ！！と言うかこんな研究していたですか！？」

リインは魔法生物達を見てテンパっている。

「リイン。この娘を頼む」

「えっ？」

烈は立ち上がり、指先から真紅の魔力絃を作り出していた。
だが、リインは驚いていて魔力絃など目に入らなかった。

「烈さん……髪が……」

烈の髪は漆黒へと変わっていった。
リインが見ているのは後ろ姿なので、顔は見えていないが目も真紅へと変わっていた。

「許さない。ルノーダ・イムラー！！」

そして絃を撃ち出し、一瞬にしてキメラを全て拘束。
そして烈が両拳を握ると、その場のキメラは全て四肢がありえない方向に曲がってしまい、動けなくなった。
そしてイムラーの居場所を探すために走り出した。

これが今から１０分前の出来事。

時と場所は戻り、烈はイムラーを睨みつけていた。

「聞こえなかったのか？いかれた研究者は貴様かと聞いている」

「フフフフ……ハアッハハハハハッ！！！」

イムラーは突然大声で笑い出した。

はやて達は突然のことに驚くが、烈は眉１つ動かさずイムラーを睨みつけている。

「何なんだその魔力は！！実に興味深い！！私は運が良い！！戦闘機人に闇の書。そして奇妙な魔力！！」

戦闘機人という言葉にギンガはビクッとなり、烈の方を恐る恐る見

る。

が、烈はギンガに目もくれなかった。

「戦闘機人？闇の書？　そんなの今の俺には関係ない」

烈はイムラーの言葉を切り捨てる。

「今直ぐに……貴様を解す！！」

烈は叫びと同時にイムラーへと向かって走りだした。

「無駄だ！」

イムラーはコンソールを叩く。

すると……

「「「なっ！？」」」

イムラーの背後にあった生体ポッドから巨大な犬がポッドを割って出て来た。

犬は黒く、顔が3つある。
それは地獄の番犬―ケルベロス―を連想させる生物だった。

「私の研究の最高傑作、ケルベロスさ。さらに……」

ケルベロスは3つの口から雷の球をそれぞれ撃ち出してきた。

「『羅生門』！」

烈は床から現れた鬼の壁で雷球を防ぐ。

「んなアホな!?」

はやてはケルベロスが雷を出したことに目を丸くしている。

「驚いたかね？　融合機からデータを取って、電気の魔力変換資質を魔法生物に埋め込んだ私の技術の結晶は！！」

「変換資質を!?」

「そんな……まさか!?そんなの有り得るはずあらへん！！」

「融合機…だと?」

「……貴様。そんなことのために、あんな小さな子を苦しめたのか！！」

「何がおかしい？不思議なことではないだろう？」

「貴様ァ！！」

烈は今にも殺しそうな剣幕でイムラーに襲い掛かろうとするが、ケルベロスに阻まれる。

「……邪魔だ！！」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン！！！

烈が両手を振り、魔力絃が生き物のように動きケルベロスを完全に拘束する。

「グルルルル！！グルアァ！！」

ケルベロスは絃を振りほどこうとするも、縛りは強く絃を切ることもできない。
また口も縛られているので雷球を発生させることもできない。

「去ね」

そう言って烈は両拳をグッと握り締めた。

ゴキン！ゴキン！！ゴキン！！！

嫌な音がするのと同時に、ケルベロスは崩れ落ちた。
四肢はありえない方向に曲がり、３つの内左右の２つの首も曲がっていた。
が死んではいないようである。

「邪魔物は片付いたな」

「ば、馬鹿な！！私の最高傑作が！！ヒイィィ！！」

イムラーは真紅の紘であっという間に拘束された。

「ま、待て！！待ってくれ！！い、命だけは！！」

「五月蝿い」

そして、烈は拳を握り締め――――

られなかった。

ドスッ！！

「かッ……は……」

「「ザフィーラ！！」」

ザフィーラが烈の腹を殴っていた。

「やり過ぎだ。頭を冷やせ」

「がっ……」

烈はそのまま意識を失った。

同時に魔力紘も消える。

髪と目の色も徐々に戻っていった。

イムラーは既に気絶している。

「烈！！」

ギンガが烈に駆け寄る。

「心配ない。気絶させただけだ」

「ザフィーラ、確かに今のは烈君が悪かった。でも乱暴すぎ――」

「はやてちゃん！！」

はやてがザフィーラの行為を咎めようとしたところで、リインがアウトフレームで少女を抱えて走ってきていた。

「リイン！？なんでアウトフレームに……ってその娘は？」

はやてはリインの手の中の少女に気付く。

「事情は後で説明するです！！それより、部隊の増援が来ましたです！！」

リインが叫ぶと、１０８部隊の増援部隊が次々とはやて達のいる部屋に入ってきた。

「さよか……イムラーは気絶しとる。今すぐ逮捕や！
魔法生物達の処理もや！！」

増援が到着したと聞き、はやては次々と指示を出してゆく。

「ザフィーラとギンガは烈君を連れてってな。あとあの女の子も」

「は、はい！」

「承知」

こうして、連続傷害事件は犯人の逮捕という形で幕を閉じることとなった。

が、しかし。

（烈に……知られてしまった。私が戦闘機人だってこと。私は……どうすれば……）

ギンガの心に傷を作ってしまう結果にもなってしまった。

烈とギンガはどうなるのであろうか……

～～あとがきコーナー～～

ア「マイシスター登場！！」

蒼「兄さんもまたキレたか……殺してないだけまだまともか」

K2「本当は全部殺して血の海になる予定だったんだけどねぇ」

蒼／ア「「お前は兄さん（様）を殺人犯にでもしたいのか！！」」

K2「それはネタバレになるからノーコメントで」

蒼「ったく。ところで、珍しく新技がなかったな」

ア「そう言えば……」

K2「考えてはたんだよ。でも……」

蒼「でも、なんだ？」

Ｋ２「どこぞやの査察官と被るから没にした」

ア「あの人出番あるんですか？」

Ｋ２「多分……ある」

蒼「あるのかよ」

Ｋ２「多分……ね。アグスタの時に……うん」

ア「あ、これは出ないかもしれませんね」

Ｋ２「て言うか、アグスタの時は烈と蒼の別々パートを書く予定だからなぁ」

蒼「へーーー」

Ｋ２「ま、いいや。ウ〝ェロッサだし（笑）」

ア「そうですか。では次回、第２５話　エイジス　にテイクオフ！」

Ｋ２「ちなみに、リクエストの番外編を挟んであと４話で１０８部隊編は終了です」

蒼「では、次回もよろしく」

番外編　眼帯っ子　ＶＳ　半獣人（前書き）

Ｋ２「今回も他の作者様の作品のキャラが登場いたします」

烈「それではどうぞ」

番外編　眼帯っ子　ＶＳ　半獣人

暖かい春の季節。

烈、ギンガ、スバル、ティアナの４人は首都クラナガンを街中を歩いていた。

「久しぶりの休みね～♪」

「そうだねギン姉！」

「烈、あんたのところも仕事大変なの？」

「まあね。最近大きな捜査が終わったところかな」

「へぇ～。やっぱり大変なのね」

今日はみんな休日。

てな訳で、首都クラナガンに羽を伸ばしに来たのである。

全員私服で、烈は髪の結びも解いている。

というより、烈は髪解いて眼帯隠さないと目立つし。仕事中は別として。

「みんなどこか行きたいところある？」

「特には……ない…かな」

「あたしもーー」

「服を買っても着る暇がないからねーー」

「そっかぁー……ん？」

「どうしたの、烈兄？」

烈が見る先には人だかりができていた。

「あそこって確か……」

「セントラルパークよね？」

ティアナの疑問にギンガが応える。

「行ってみる？」

「「「さんせ～い！」」」

「格闘技……」

「……大会？」

幾つもののぼりや旗が立てられており、格闘技の大会が行われることを示していた。

「へ～～。格闘技かぁ～」

「確かギンガさんもシューティングアーツやってましたよね？」

「そうだよ。あたしはギン姉にシューティングアーツを教えてもらったんだ」

とまあそんな会話をしていると。

『参加希望者は受付の方まで来てくれ。まだまだ参加は受け付けてるぜ！』

近くから放送器具からこれから行われる格闘技大会の参加を促す声

が流れる。
しかし、烈とスバルは放送者の声が聞き覚えのある声だったことに耳を疑った。

「……この声…？」

「……ジュレス？」

声の主は訓練校時代の烈のコンビであり、パートナーであったジュレイス・ホーネットであった。

「なんでジュレスが……」

「あっれ～～？烈じゃな～～い？」

ふと後ろから声を掛けられた。
４人とも振り返ると

「おっひさ～～～～♪」

「エルフィ？」

「私もいるわよ」

「ヒメミヤ！？」

そこには訓練校時代、烈と同じ班であった、エルフォニア・ツェンベルグことエルフィと、ツバキ・ヒメミヤがいた。

「久しぶり。ツバキ、エルフィ」

「久しぶりね、烈」

「エルフィ元気～～？」

「元気だよ～～スバル♪」

「ところで、２人はどうしてここに？」

再開を懐かしんでいる烈とスバルに対し、やや空気だったギンガが２人に尋ねる。

「あたしは～この大会に参加しに～」

「私はエルフィの応援よ。ちなみに、さっき放送でジュレスが喋ってたけど、この大会の主催にジュレスの叔父さんが関わっているらしくて、手伝いさせられてるみたいよ」

ツバキがついでにジュレスの説明も入れる。

説明乙。

「ああ、そういえばジュレスの叔父さんはストライクアーツのジムをやってるって前に聞いたことがある」

「そゆこと。ところでスバルとかは参加しないの？」

「いや～あたしはちょっと……」

スバルは断ろうとしたが

「ちなみに～、優勝から3位までの人には賞品があって～、その中に確か有名なアイスの専門店で利用できる特別券が……」

「参加する！！！」

優勝賞品に釣られるのであった。

「えへへ……アイス、アイス♪」

「「「「……」」」」

エルフィ以外は全員スバルに呆れて何も言えない。

「ほかには確か～～～、某ネズミがいるアミューズメントパークの1日フリーパスとか～。しかもペア1組分」

「私も参加する！！！」

ギンガまで賞品に釣られてしまった。
てか某ネズミって。地球ブームの影響か？

「（烈を誘って2人でデートに……キャッ♪）」

「……ギンガ……はぁ」

「……射撃型の自分がこんなに憎いと思ったのは初めてね」

「気が合うわねランスター。私もよ」

烈はため息をついて、ティアナとツバキの2人はグチってます。
2人はキャラ被ってるせいか考えることも似ているみたいです。

「「キャラ被ってるのはお前のせいだ！！」」

「ティ、ティア！？」

「ヒメミヤさん！？」

「ツバキ、ティアナ。なんで2人とも空睨みながら叫んでるの？周りからの視線が痛いよ」

「「…ごめんなさい」」

事実、周囲の人々はこちらを見ている。
ただし、その人々の一部はツバキとティアナの叫びに驚いたからではない。
そちらの方の声を拾ってみると……

「なあ、あの紫の髪の娘かわいいよな」

「俺はオレンジツインテールの娘が好み！」

「俺は……赤髪の娘だなぁ。胸の膨らみが無いのがいい！！」

とまあこんな感じである。
ちなみに烈は髪を解いて黙っていれば女の子に見えるので、休日に街を歩いていて勘違いされることもしばしば。
男の娘だから仕方がない。

「……なんか寒気が」

「烈兄大丈夫？」

「うん。春って言っても、まだ少し寒いからかな」

烈は周囲の視線には気付いても、見られてるのはティアナとツバキが叫んだからと思っている。
それ以外の理由には気付いていない。

「（このままギンガさんが参加して、もしフリーパスを手に入れたら……）」

「（間違いなく烈を誘うはずね。何か、何か邪魔する方法は……）」

ティアナとツバキが何やら黒い。
人の恋路を邪魔したら馬に蹴られると思うけど。

「「（（そうだ！いいこと考えた！！））」」

やはりキャラが被t……
すいません。睨まないでください。

「ねぇ、烈も参加したらどう？」

ティアナが烈に提案する。

「俺も？」

「そうね。烈なら勝てるわよ」

ツバキもそれに乗る。

「えっ…でも…」

「「いいから参加しなさい」」

「うん……わかった」

2人の考えを説明いたしますと

烈が参加→烈は強いのでそこそこ行けるはず→どこかでギンガと当たればギンガが潰れる→ギンガと当たらなくとも、烈が入賞してパスを獲得すれば私（ティアナ／ツバキ）を誘ってくれる可能性があると、以上である

成功するかもわからないのにねぇ。

「「……」」

「ねぇ、なんで2人ともまた空睨んでるの？」

「なんでもないわ」

「そうよ。さ、受け付け済ませちゃいましょ」

「「「おーーー！！」」」

「はぁ。やれやれ」

やる気満々なギンガ、スバル、エルフィに対して、やや呆れ気味の烈であった。

『と言う訳で、この大会も既に準々決勝ォ！！
……って！飛ばし過ぎだろォ！！
しかも俺出番少ねぇぇぇぇ！！！』

「司会進行がツッコミ入れない」

そう言う烈も放送にツッコミ入れない。

はい。時間は飛んで、既に大会は準々決勝まで進んでいます。
興味本意で参加する人も多かったせいか、
それほど強い相手と当たることもなかったため、
烈、ギンガ、スバル、エルフィの４人は順調に準々決勝までは勝ち進んだ。
現在、準々決勝は第３試合まで終了。
第１試合でスバルが。第３試合でエルフィが勝利した。
しかし第２試合でギンガは負けてしまった。

「私なんて……私なんて……」

「いや、ギンガは頑張ったよ」

「そうだよギン姉」

負けたギンガを２人が慰めている。
これを見たティアナとツバキは

「「（計画通り）ニヤリ」」

「２人が黒いよ～～」

そんな都合良く話が進む訳ないと思うけどね。

『準々決勝第４試合を始めるぜ！選手はリングの上に！』

「じゃ、行って来る」

「「頑張って！！」」

「さっきから2人とも変じゃない？」

「「気のせいよ。気のせい」」

「……そう？ならいいけど」

そう言いながら烈は手甲付きのグローブと脚用のプロテクターを装着する。

そしてポケットから髪留めの紐を取り出して髪を結んでからリングに上がる。

既にリング上には対戦相手が待っていた。

対戦相手は烈と同じくグローブとプロテクターを装着していたが、大きな違いがあった。

「えっと……使い魔さん？それとも守護獣さんですか？」

対戦相手は女性で、小柄でふわっとしたセミロングの茶髪に、犬のような耳とキツネのような尻尾をもっていた。

「ん～違うよ～私は半獣人（ハーフウルフ）だよ。名前はシア。シア・グランテ」

「あ、草薙　烈です。よろしくお願いします」

「よろしく～～。君、かわいいね～～♪」

「一応俺、男なんですけど……。と言うか眼帯付けてるのにかわいいって……」

「「「いや、烈はかわいい！！」」」

リングの外からギンガ、ツバキ、ティアナがシアに対して援護射撃をする

「……ギンガ達まで……はぁ」

「（モテてるみたいだねぇ。ん～やっぱりかわいいにゃ～）」

とそんなことをしている間に審判が出てくる。

「準備はいいですか？」

「はい」

カチリ

「いつでもどうぞ」

「（シアさんの雰囲気が変わった？）」

烈はシアの変化に気付く。

「ルールは魔法無しの格闘オンリー。５分間一本勝負。
それでは試合――――――――」

審判の掛け声に烈とシアは構える。

「開始ッ！！！」

「ハァッ！！」

試合開始の掛け声ど同時に、シアは跳び膝蹴りを放った。

約５ｍあった距離をシアは助走なしの恐るべき跳躍力で一瞬で詰めてきた。

「ッ！？」

烈は横にステップを踏み回避し、そのままシアが着地した瞬間に正拳を繰り出す。

しかし、シアは着地した右足を軸にしてそのまま左足で回し蹴りを繰り出すし、烈の攻撃を相殺した。

「くッ！！」

攻撃を相殺された烈はステップでシアと距離を取った。

「ふむ。着地と同時に攻撃を仕掛けてくるなんて、やりますね」

「それはどうも。ところで、さっきとは雰囲気が違うんですが？」

「ああ。私は戦闘中は思考タイプを切り替えて本気で活動するようにしてるんです」

「なるほど。そういう訳ですか」

「ええ。では、おしゃべりはここまでです。余計なことを考えていると怪我します――――よッ！！」

言い終わると同時にシアは地を蹴った。

空中をほぼ水平に跳び、片足を突き出した跳び突き蹴りを繰り出す。
烈は体を左にずらして蹴り躱わす。
烈はそのまま左足を軸にして、右足で回し蹴りを、着地したシアに対して後ろから放つ。
が、シアも再び回し蹴りで烈の回し蹴りを相殺。

「（蹴り技主体か……。リーチに差がでるかな）」

「（顔は女の子に見えますが（眼帯はともかく）…やはり男の子。けっこう力ありますね）」

お互い相手を分析しながら再び攻撃を仕掛ける。

それからは2人の攻撃のラッシュだった。
烈は正拳、裏拳、貫手、掌底、手刀といった手を使った技を主体に繰り出す。
シアは水平蹴り、回し蹴り、ハイキック、横突き蹴り、跳び膝蹴りといった足を使った技を主体に繰り出す。

衝突する拳と脚撃。
攻めては守り、守っては攻めるといった攻防が続く。

が、その攻防にも終わりが近付いてきた。

「ハアァァァッ！！！」

烈が突撃（チャージ）を繰り出す。
が、お互いの技が拮抗している状態では、突撃は隙が大きすぎた。
シアは突撃を回避し、烈の後ろに回り込み、右脚を振り上げた。

「しまっ！！」

「魔法は使用禁止ですが、決め手に名前がないのも淋しいですからね……風刃墜雷脚（ふうじんついらいきゃく）！！」

シアは振り上げた脚を鋭い早さで振り下ろし、踵落としを烈の脳天に見舞った。

風刃墜雷脚。本来この技は風を裂く雷を纏ったが踵落としなのだが、今回魔法の類は使用禁止なので技名のみ使ったようである。

「あぐぁッ！！」

烈は咄嗟に腕を頭上で交差して防ごうとするも、強い衝撃に耐えられず、その場に崩れ落ちた。

「「「「「烈（兄）！！」」」」」

リング外から5人が叫ぶ。

「一本!!そこまで!!」

審判が試合の終了を宣言した。
周囲からは歓声や拍手が起こった。
シアは倒れたままの烈に近付いてゆく。

「大丈夫〜〜?痛かったかな〜〜?」

烈の状態を心配する。
思考も戦闘中から切り替えたようだ。

「大丈夫です。しばらく動けませんけど」

「それはよかったよ〜〜……なら」

「?」

気のせいだろうか?シアの目が光ったような気が

「えいっ!」

シアは烈に抱き着いた。

「し、ししシアさん！！？」

「ん～～烈君かわいいにゃ～～～すりすり」

シアはほお擦りまでする。

「し、シアさん！離れて下さい！！」

「ごめ～ん無理～。私かわいいものには目がないんだ～～すりすり」

「えええぇぇ～～～～！！！」

空に烈の叫びが響くのであった。

ちなみに、外野の人達はと言うと

「私だって……まだ手すら繋いだことないのに！」

「胸!?胸がないのがいけないの!?」

「それとも烈はあんなのが趣味なの!?」

上からギンガ、ティアナ、ツバキの順。

ツバキは酷い言いようである。

「（たま～にあたしも烈兄に抱き着いてるって言ったりしたら……）」

「（間違いなく酷い目に遭わされると思うよ～～。

あたしも次シアさんとだから何か言われそうだな～～はぁ）」

「（頑張ってエルフィ!!）」

結果、エルフィは3人に脅迫と言うなの応援をされたが、敗北。

最終的に、シアが準優勝。スバルが3位、エルフィが4位、という結果で大会は終了した。

大会終了後、スバルが獲得した特別券でみんなでアイスを食べに行ったが、

嫉妬した3人がやけ食いをして特別券だけではお金が足りず、

結果烈が支払う羽目になったという。

「俺のせいじゃないのに」

ちゃんちゃん。

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「はい。今回の対戦相手は暇人様の作品、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～聖痕を携えし魔導騎士～より、シア・グランテさんでした」

烈「最後のほお擦りはともかく、あの踵落としは凄かったよ」

ア「あれ？兄様が黒モードじゃありません」

烈「あれ？ほんとだ」

シ「こんばんは～～～♪」

烈「シアさん！？」

Ｋ２「あ、来たね。じゃ、約束通りに」

烈／ア「「約束？」」

シ「烈君と妹さんを愛でるために……お持ち帰りぃ～～～～♪♪♪」

烈／ア「「えぇぇぇぇ！！！」」

Ｋ２「頑張ってねーーー」

烈「作者ー！怨むぞーー！！」

ア「アオちゃんは何処に行ったんですか！？助けて下さい！！」

シ「んふふ～～～～。それじゃあＫの２乗さん、ありがとうございました」

Ｋ２「ん。暇人様や歩君達によろしく言っといて」

シ「は～い！じゃ転移♪」

烈／ア「「作者ぁぁっ！！」」

ピシュン！

Ｋ２「うん。いっぱい愛でられてこいよ～～～」

パチン！

蒼「で、兄さんとアリスを渡した条件は何だったんだ？」

K２「今まで異空間に隠れてて盗み聞きかい？趣味が悪いよ」

蒼「趣味がいいと言ってくれ。どこぞの蝙蝠ではないが。んで、何だったんだ？」

K２「ん、これ」

蒼「ん？これは賞品のフリーパスか？」

K２「そゆこと」

蒼「つまり、あの３人の中から１人選んで兄さんとデートさせる、と」

K２「ま、いつ書くかはわかんないけどね（笑）」

蒼「ふ～～ん（誰か１人選んだら、あとの２人から嫉妬を受けそうな気もするが）

K２「それでは、今回はここまで」

蒼「（ま、いっか。困るのは兄さんだし）感想や御指摘などお待ちしていま～す」

番外編　眼帯っ子ＶＳ半獣人（後書き）

暇人様どうでしたでしょうか？

感想や御指摘等、待ってます。

第２５話　紫の少女　雷の少女（前書き）

烈「タイトルが変わってるんだが」

Ｋ２「なんか今回の話を書いてたら、前回のあとがきコーナーで書いたのが合わないと思ってね」

烈「そうか。ところで、前回イムラーがギンガと俺の魔力について気付いたのは、俺とギンガをスキャンしたから。
　はやてが夜天の書の主って知ってたのは、元管理局員で闇の書事件を知っていたからだ」

Ｋ２「こんなところで説明してすみません。では始まります」

第２５話　紫の少女　雷の少女

烈が目を覚ますと、ベットの上だった。

「…ん？……あれ？」

「あ、気が付きました？」

近くにいた女性局員が近付いてくる。

「えっと……」

「ここは救護用の仮設テントです」

困惑している烈に、女性局員が説明してくれる。

辺りを見ると、他にも簡易用ベットで寝ている局員がいた。
全員イムラー宅の地下に突入した局員達である。
全員キメラに襲われたのだろう。

「どこか怪我していたりとか、調子が悪いといったところはありませんか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「わかりました。でしたら八神三佐の所に行って指示を仰いで下さい」

「わかりました」

そう言って烈はベットから下り、枕元にあった鋼閃を腰に吊してテントから出ていった。

テントから出てからはやてが見つかるまで、そんなに時間は掛からなかった。

「はや……八神三佐！！」

仕事中に名前で呼ぶ訳にもいかないので、慌てて呼び直す。

「お？　烈君、起きたんか？」

「はい。それで、自分は何をすればよろしいでしょうか？
八神三佐に指示を仰げと言われましたので」

「さよか……」

はやては顎に手を当て少し考える。

「……ギンガのとこに…行ってやってくれへん？」

「ギンガの……ですか？」

はやては歯切れ悪く答える。

「森の方におるはず。その……なんと言うか……とにかく行ってやってな」

「はぁ。わ、わかりました」

「ん、頼むわ。　あ！その後にあの保護した女の子ん所に行ってやってな」

「了解です」

～～ギンガＳｉｄｅ～～

彼にバレてしまった。
私が戦闘機人だってこと。
兵器として生み出されたこと。

私は――――どうすればいい？
今後どうやって彼に接っすればいい？
それどころか彼は私を拒絶するかもしれない。

それだけは――――嫌だ。

彼だけには嫌われたくない。

初めて会った時、３年前の空港災害で助けてもらった時。
あの時は、彼のことを少し気になる異性の子って程度にしか思ってなかった。

でも、段々彼のことを考えることが多くなっていった。
篭城事件でティアナが彼に名前で呼ぶことを許した時、正直イラっとした。

私と彼は訓練校の関係で2年間は一緒にいることは多くはなかったからかな。
多分、彼が他の女の子と仲良くしているのに嫉妬したんだと思う。
特にこの1年間は仕事上でも彼と一緒だったことが多かったから、私の中で彼に対する思いはより強くなっていった。
彼を笑顔を見ると胸が熱くなって、彼が他の女の子と仲良くしていると少しムカムカする。
多分、これは私が彼のことが好きだってことなんだからと思う。
いや、多分なんかじゃない。
好き、なんだ。
だからこそ、彼に私のことを知られるのが恐かった。
もう私を私として見てくれなくなる。
そうなるのが恐かった。
いったい私はどうすればいい？どうすれば――――――
「ギーンガ」
そこまで考えたところで、私の思考は彼の言葉によって止められた。

～～ギンガＳｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～烈Ｓｉｄｅ～～

ギンガを見つけるのには少し時間が掛かった。
ギンガは森の中の大きな木の元でうずくまっていた。

「ギーンガ」

落ち込んだ表明で俯いて座り込んでいるギンガに、俺は声を掛けた。

「あ……烈…」

「隣、いい？」

「……うん」

そう言って俺はギンガの隣に腰を下ろす。

「……」

「ギンガ……さ。どうか…したの？」

ギンガは答えず首を横に振る。

「……ギンガが戦闘機人だってこと気にしてるの？」

「ッ！！！」

「図星…かな？」

「……あ……それは……」

前回、第四陸士訓練校で起こった篭城事件。
その時も俺は今回のように暴走した、らしい。
なぜ‘らしい’なのか。
それは俺はその時に起きたことを覚えていないからだ。
全部聞いただけだった。
でも今回は偶然か、それとも必然か。
俺は自身のしたことを全て覚えていた。

「覚えてるよ。俺がイムラーを殺そうとしたことまで全部。
だから……イムラーがギンガのことを戦闘機人って言ったのも、
はやてさんが夜天の書って物の主って言ってたのも、全部…覚え

てる」

「…そっ……か……」

ギンガの声はとても弱々しかった。

「……1つ聞いていい？　なんでギンガが戦闘機人だってこと黙ってたの？」

「……」

ギンガは答えない。

「……もし言ったら俺がギンガのことを嫌いになるかもしれない。そう考えたから？」

ギンガは今度はゆっくりと頷いた。

「バカ」

そう言って俺はギンガの頭を右手で軽く撫でた。
その時ギンガはビクッと震えたが、そのままおとなしく撫でられ続けた。

「そんなことでギンガを嫌いになるわけなんてないよ」

「で、でも。私は兵器なんだよ。戦うための道具として生み出されたんだよ」

「それがなんだよ。俺が知ってるのは、兵器っていうギンガ・ナカジマなんかじゃなくて、ギンガ・ナカジマっていう一人の女の子なんだから」

「でも……でも！」

「じゃあ逆に聞くよ。ギンガは俺が恐くないの？」

「…えっ？」

ギンガの顔が驚いた表情になる。

まぁいきなりこんなこと言ったら驚くよね。

「ギンガは人を殺したりなんかしていないよね？」

「……うん」

「でも、俺は人を殺しているかもしれない」

「そんなことない！！」

大声でギンガは俺の言葉を否定する。
言うとは思っていたけど。

「本当にそうかな?俺は既に2回、相手が犯罪者とはいえ殺そうとしたんだよ」

「それは……」

篭城事件を起こした犯罪者グループのリーダー。
そして今回の連続傷害事件の犯人である、ルノーダ・イムラー。
エルフィやスバル、ザフィーラが止めてくれなかったら本当に殺していた。

それに、あの時見た夢でも俺は人を殺していた。

「記憶を失う前、俺は人を殺したかもしれない。
犯罪者だったのかもしれない。
殺人鬼だったのかもしれない。
真実はわからない。けれど、否定はできないんだよ」

ギンガは黙って聞いている。
こんなことは言いたくなかった。

「もう一回聞くよ。ギンガは……俺のことが恐い?」

俺の声は震えていた。
俺だって、ギンガに嫌われることが恐かったから。
居場所が無くなるのが恐かったから。

「恐く……ない」

「……どうして？」

「……だって、烈はみんなを助けようとしたんでしょう？
篭城事件の時も、今回の融合機の女の子だって。
だから、恐くない。烈は人殺しなんかじゃないって信じてる」

「そ。……ありがとう、ギンガ」

「うん……私も、ありがとう。烈」

「うん」

そのまましばらく俺達は喋らずに寄り添っていた。

あれから約３０分後。
ギンガも元気を取り戻したみたいで地下の調査に加わっていった。
俺はというと、はやてさんに言われ保護した女の子の所に行って、
ちょうど今その子がいるテントに着いたところだった。

「失礼します」

俺はテントの中に入る。

「お、草薙陸曹」

テントの中の隊員が話し掛けてきた。

「お疲れ様です。ところで、八神三佐に保護した女の子を見てくる
よう言われたのですが……」

「ああ、あの子かい？目は覚ましたんだけど、俺が話し掛けても何も言ってくれなくてねぇ」

「わかりました。俺が話してみますね」

「ああ、頼むよ。だが、眼帯は隠しといたほうがいいぜ」

「アハハ。そうします」

そして俺は髪の結びを解きテントの奥の方へと進んだ。

そこには人形サイズのベットがあって、金髪の小さな女の子がいた。

向こうもこっちに気が付いたようである。

「こんにちは」

「……」

声を掛けるが返事はなし。

警戒しているのかな？

「はじめまして。俺は草薙　烈っていうんだ。君、名前は？」

「……エイジス…です」

あ、答えてくれた。

「エイジスか。良い名前だね」

「……あの」

「ん？」

「…あ、あの私はこれから…ど、どうなっちゃう…の？」

不安なのも当然か。

「んー今のところは何とも言えないけど、君はどうしたいの？」

「……妹とお姉ちゃんを探したい……です」

「妹さんとお姉ちゃん？」

融合機にも姉妹とかっているのだろうか？
あ、製作者が同じだったらそうなるのかな？
融合機なんてどんなものなのかは知らないけど。
でも大きさはべつに驚いたりはしなかったかな。
だってアリスも同じくらいの大きさだし。

「お姉ちゃんとは数年前から。妹とは最近離ればなれになっちゃったんです」

「……どういうこと？」

「数年前まで、私達３姉妹は仲良く過ごしてたんです。
でも当然変な人達が現れてお姉ちゃんを連れていっちゃったんです。
それから私と妹も変な研究所みたいなところに連れていかれて、
毎日変な薬を打たれたりして、変な実験をされて、毎日が苦しかった」

俺は黙ってエイジスの話を聞いている。
話を遮ってはいけないと思ったから。

「そんな日々が続いて、いきなり私は研究所から連れ出されました。
誰かが研究所を襲ったから、研究員は私を連れ出して逃げたんです。
その時、妹とは離ればなれになっちゃって、変なおじさんに捕まって、変な機械に入れられて、それで……それで……！！」

「落ち着いて」

パニックになりだしたエイジスの頭を俺は指で撫でた。
小さいので手で撫でると潰れてしまうからだ。
エイジスは撫でられると、しだいに落ち着いてくれた。

「辛かったんだね」

「……うん」

「大丈夫だよ。もう恐いものはないから」

「……ほんと？」

「本当だよ」

そう言うと、少しだけ笑顔になってくれた。

「そうだ！君のお姉ちゃんと妹さん。俺も探すの手伝うよ」

「本当！？」

この子はかわいそうだと思った。
辛い目にあって、家族を失って、何とかしてあげたい。そう思った。

「うん。お姉ちゃんと妹さん、名前はなんて言うの？」

「お姉ちゃんはアリステラって言って、妹はアギトって言います」

「ッ！アリステラ！？まさか…アリス！？」

信じられない名前が出てきた。
まさかアリスの名前が出てくるとは思わなかった。
ってことはアリスも融合機？

「お姉ちゃんを知ってるのですか？」

「うん。知ってる。でも、今はどうやったら会えるのかわからないんだ」

「そう……ですか」

「でも……いつかきっと会える。絶対に」

「はい……ありがとうございます」

「じゃあまずアギトちゃんから探そう。手伝うから、ね」

「はい！よろしくお願いします！」

ギンガの悩みを受け入れて、俺の悩みをギンガに受け入れてもらって、そしてアリスの妹に出会ったこの日。

何かが前に進んだような気がした1日だった。

～～あとがきコーナー～～

蒼「兄さんとギンガはお互いを受け入れたか……これでもうちょい仲が進展すればいいのに。これじゃまだ恋人同士でもないじゃん」

ア「私って3姉妹だったんですね」

K2「そうだよー古代ベルカの融合機3姉妹ってね」

蒼「……ん？エイジスのロードはこのままだと兄さんだが、アリスのロードは兄さんなのか？私なのか？」

ア「はッ！私も知らないです！どっちなんですか！？」

K2「一応、烈です。ただし、蒼との方が適正が若干高いです」

蒼「なら私がロードでもいいじゃないか」

K2「いや、烈のモデルイメージを考えたら……ね」

ア「？　どういうことですか？」

K２「一応、烈のモデルキャラは『舞一乙ＨＩＭＥ（漫画ｖｅｒ）』のマシロ君ってことになったから」

ア「？？？？？」

蒼「知らない人は読んでみてくれ」

K２「あーあと、エイジスの紹介ですが、２７話を投稿した時に一緒に投稿します。
　理由はＳｔｒｉｋｅｒＳでの烈のステータス紹介もしなければならないからです」

ア「わざわざエイ一人のためだけにキャラ紹介をするわけにはいかないと」

K２「すいません。そういうことです」

蒼「それでは今回はこの辺で～～～っとその前に作者」

K２「あ、はい。お知らせです。ちょっと中間考査が迫ってるので更新が遅くなります。多分次回更新は２１～２３日になると思います」

ア「今月中には私達出番ありますよね？」

K２「今月中には頑張って２人を出せるようにします」

蒼「それでは次回、第２６話　手掛かり　に」

ア／蒼「「テイクオフ！！」」

第２６話　誘い（前書き）

蒼「今回もタイトルが変わっているんだが、２回連続で同じことをするのか貴様は？」

Ｋ２「えーー理由はあとがきコーナーにて。それでは始まります」

第２６話　誘い

新歴７５年の４月

俺が管理局に入ってから既に2年が過ぎた。

いろいろと任務を熟していたせいか、いつの間にか階級も魔導士ランクもギンガより上になっていた。

いや、ギンガとは結構一緒に仕事してたんだけどね。

何かと俺に回される仕事が多くなって。特に密輸業者の逮捕とか。

そのおかげでいったいどれだけ密輸組織を潰したことやら。２桁は潰したはず。

そりゃ密輸組織とか潰すのは悪いことではないと思うけど、

なんで俺ばっかりにその手の仕事が回されるのだろうか。

……ってまぁ分かってるけど。捕縛は俺の専門分野だしね。

閑話休題

ところで、今日ははやてさんに呼ばれたのでとある喫茶店に向かっている。

「はやてさんに呼ばれるなんて、何の用なんだろうね」

「わかんないです。マイロード、心当たりはないんですか？」

「ないんだよねぇ。ホント」

俺の肩に座ったエイが答える。
あ、エイってのはエイジスのことね。そう呼んで欲しいって言われた。
マイロードと呼ばれてるのは、俺がロードになったからね。
なにげに適正も高かったし、けっこう懐かれてるし。

とまあエイと話しながらしばらくして、目的の喫茶店に着いた。

「えっと……」

「お～～い、烈く～ん。こっちやで～～～」

声のする方を向くと、管理局の茶色い制服を着たはやてさんが手を振っていた。
他にも誰かと一緒にいる。
ここからじゃよくみえないが、白いの教導官の制服を着ていた。まさかねぇ。
俺とエイははやてさんのいる方へと近付いていった。

「どうもです。はやてさん」

「ゴメンな。休みなのに呼び出したりして」

「いえ」

「エイちゃ～～～ん！！」

挨拶していると、はやてさんの側にあったバックからリインが飛び出してきた。
お出かけバックだったっけ？

「リインちゃん！！」

「久しぶりですぅ！！」

「リインちゃん元気？」

「はいです！！」

「テンション高いなぁ～～リイン。はあ、可愛ええなぁ」

エイとリインは同じユニゾンデバイスだからか、けっこう仲がいい。
まあ歳（精神年齢がだけど）も同じくらいだし。
エイの外見はスバル同い年くらいなんだけどね。

「烈君、立っとらんで座り」

「ああ、はい」

そう言って俺は教導官の制服を着た人の隣に座り、声を掛けた。

「お久しぶりです。なのはさん」

その人物は、高町なのは一等空尉だった。

「久しぶりー」

なのはさんも挨拶を返す。

「ああ、なのはちゃんは前に１０８部隊で教導したんやったな。
私は指揮官研修中の時に会ったんやけど」

「ところではやてさん。俺を呼び出しはどうしてなんですか？」

いい加減教えてほしいものだ。
なのはさんもなんか笑ってるし。

「あははゴメンなぁ。まあ、どっきりってことで」

どっきりって……

「はやてちゃん。本題に入ろうよ」

「わかった。じゃあ烈君」

はやてさんが真剣な表情になる。

「私達に協力してくれへん？」

「……はい？」

協力？何の？

「いや、あの……どうゆうことでしょうか？」

「あれ？ナカジマ三佐から聞いてへん？
私が新部隊を設立すること」

「ゲンヤさんから……ああ！！」

何か言ってた気がする。
確か……遺失物管理部、機動六課だっけ？
最近調査が忙しいかったから忘れてた。

「確か、機動六課。でしたよね？」

「そや。私が課長、なのはちゃんとフェイトちゃんが部隊長を務めることになっとる。
リインは私の補佐官な」

「はいですぅ！！」

ずっとエイと仲良く話してたリインが元気よく答える。

「それで、なんで俺を？」

はやてさんの言ってることはつまり、勧誘ってことだよね？
前にも「海」の方から勧誘があったなぁ。当然断ったけど。

「前線部隊であるＦＷ（フォワード）陣を指揮してくれる優秀な子がいて欲しいなぁーって。
それに、烈君小隊指揮の資格持っとるやろ？」

「確かに小隊指揮権は持ってますが……」

「ＦＷの子達はもう決まってるんだけど、みんなＢ・Ｃランクレベルだし、
ちょっと危なっかしいから、安定した実力の烈君がいると助かるんだ」

優秀なとか実力のあるって、俺それほどでもないと思うんだけど。

――謙遜しやがって。１０８では上位の実力者なくせに――

……なんか今変な声が聞こえたような。

「それに、スバルとティアナ。知ってるよね？」

「知ってるもなにも……」

「２人共な、なのはちゃんの隊のＦＷ陣なんよ」

「へぇ」

そう言えば前にスバルが、なのはさんの元で働ける～～♪♪　なんて言って喜んでたっけ。

うん。もう一回言うけど、忙しかったら忘れてた。
密輸捜査に、戦闘機人事件、アギト、元の地球へゆく方法。
そして、フェイトさんの言っていたあの男。
することがいっぱいあるんだよ。

「私達隊長陣はリミッターが掛けられてな、よっぽどの事でないと解除申請できへんのよ」

「だけど、ＡＡクラスの烈君ならリミッター掛ける必要もない」

「それに、なのはさんの教導を受けてさらに強くなれるですよ」

別に強くなりたい訳じゃないんだけど。

「……マイロード」

エイが制服の袖を握ってくる。

あーーー。エイは人見知りするし、恥ずかしがり屋だからなぁ。

最近やっと家の部隊の人達に慣れてきたのに、いきなり他の部隊に行くなんてのは嫌だよね。

「烈君どうやろか？」

はやてさんとなのはさんがじっと見てくる。

「……残念ですが、お断りします」

「どうしてかな？」

なのはさんが表情が少し暗くなり尋ねる。

「エイちゃん、一緒に働きたくないですか？」

リインも淋しそうな表情で尋ねる。

「リインちゃんとは一緒にいたいけど……」

「エイは人見知りしますから。家の部隊に慣れたのも最近ですし。それに……」

「「それに？」」

はやてさんとなのはさんが同時に反応する。

「それに俺は調査で余裕がないんです」

「仕事の調査やったら他の人に回してもらえば……」

「そういうことじゃありません。戦闘機人事件のことです。元々俺はゲンヤさんの力になるために管理局に入りました」

2人はハッとした表情になる。

「それに、最近やっと進展があったんです。フェイトさんのお陰で」
「フェイトちゃんの……ってまさか！」
気付いたみたいだね。
「広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ」
なのはさんが答える。
「はい。人造生命技術を扱うスカリエッティなら、戦闘機人事件にも関係しているのではないかと、フェイトさんが。
去年そのことを聞いてからフェイトさんと協力してスカリエッティについて調べています」
「そうだったんだ」
たまたま去年無限書庫で会った時にね。
「ええ。ですからせっかくお誘いですが」
「そっかー残念やなぁ」
「ですが、ゲンヤさんは六課に協力的なようですから、

捜査協力することはあるかもしれませんね」

「ほんならそん時はお願いするわ」

「はい。それではこのあとまた用事があるので」

そう言って俺は席を立つ。

エイも俺の肩に座る。

「ん～本当に残念やなぁ」

「すいません。ではこれで」

「またね、烈君」

「エイちゃんバイバイですぅ」

「リインちゃんもバイバ～イ」

そう言って俺は喫茶店から出て行った。

「ホンマに残念やなぁ」

烈が帰ってからはやてがつぶやく。

「しかたないよはやてちゃん。烈君いろいろ頑張ってるみたいだし」

「う～～～エイちゃんと一緒に働きたかったですぅ」

リインもがっくりしている。

「しゃあないなぁ。六課始動まであと3週間。がんばろ2人とも」

「うん、はやてちゃん」

「は～いです」

烈に協力を断られた六課。

しかし、現時点では知る余地もなかった。

彼の妹達から協力を仰ぐことになることに。

とある森の中

1人の少女が何かから逃げるように、木々の間を走り抜けていた。

少女は藍色の長い髪に水色の目。薄い胸元には、銀の十字架のペンダント。

そして布が巻かれた筒のようなものを背中の腰の部分に付けていた。

「まったく。しつこいな」

彼女は追われていていたのであった。

後ろからは草を掻き分ける2つの足音が聞こえてくる。

『いつものことじゃないですか、アオちゃん』

少女のつぶやきに答える別の少女の声。

その声は信じられないことに、銀の十字架から発っせられていた。

ヒュン！！

２人（１人と１つ？）が話していると、後ろからボウガンの矢が飛んできた。

「チッ！」

アオと呼ばれた少女は、腰の筒を使って矢を弾く。

「咎凪（とがなぎ）の奴……しつこいったらありゃしないな」

再び走り出して毒づく。

『「呪い名」が相手ならアオちゃん倒せるんじゃ……』

「『呪い名』は相手すんのが面倒なんだ。つうか基本『呪い名』と戦おうとする奴なんていないけど――なッ！！」

再び飛んできた矢をこんどは木を盾にして回避して、再び走り出す。

「『あ」』

走り続けた結果、目の前に広がっているのは断崖絶壁だった。

『アオちゃんどうします？』

「逃げ場は……」

そう言った瞬間、背後から裸の人が2人出てきた。

いや、それは人ではない。

それは手にボウガンを持ったマネキン人形だった。

「……ククククク」

『アオちゃん？』

突然笑い出したアオ――名前は蒼（そう）というのだが――に十字架の声は驚く。

笑い出したと思ったら、蒼は崖へ向かって走り出した。

『アオちゃんまさか！？』

マネキン人形も咄嗟にボウガンを構えるが、蒼の行動を阻止することはできなかった。

「アーイキャーンフラァァァァイ！！！」

『キャアァァァァ！！アオちゃんのバカァァァァ！！』

蒼は両手を広げ崖から飛び降りた。
マネキン人形はボウガンを撃つも蒼には当たらない

「そんない怒るなアリス。ってむ？」

十字架の声――アリスと呼ばれた少女の声――を宥めるが、突然蒼の目の前には光が広がっていた。

「なにっ！？　キャアァァァァ！！」

『なんなんですか！？』

蒼とアリスは光に包まれ、そして消えてしまった。
その光は烈が飛ばされた時の光と全く同じ光だった。

～～あとがきコーナー～～

フ「トライデントスマッシャー！！」

K2「ギャーーー！！（黒焦げ）」

フ「今回私が出るんじゃなかったの！？」

蒼「無限書庫でのやり取りのことだな」

作者（黒焦げ）

「いや途中まで書いてたんだけど、正直必要なくねって思って。
自分で書いてても、つまらないよなーーって思ったし。
その代わり、次回はフェイト視点から始まるので勘弁して下さい」

フ「それならいいよ」

蒼「私とアリスは出番が早まったから別にいいがな」

フ「そういえば、烈やアリス、エイジスはいないの？」

蒼「兄さんはO☆HA☆NA☆SHI中だ。ギンガとティアナとツバキからな」

K２「この前、暇人様のところで起きたことでね。アリスとエイジスはオリキャラ紹介の準備中」

フ「頑張れ、烈」

K２「さて、今回はこれまで」

蒼「次回はファーストアラートだ」

フ「次回、第２７話　蒼き少女と銀の少女　へ、テイクオフ」

蒼「私の活躍、見てくれよな」

K２「それでは～～～」

～第3回オリキャラ紹介～（前書き）

最初の烈の設定で変更点を

1：第1回オリキャラ紹介を一部修正。能力が残り2つあると表記していた部分です。
　片方は「殺戮衝動」だったんですが、もう片方は話の進行上矛盾が発生したので、現在検討中です。
　無しになるかもしれません。この場で報告しておきます。

2：番外編　絃遣い　ＶＳ　絃遣い　にて《土》を『岩石』と表記していましたが、『大地』に変更いたしました。

１０／１８（４３話投稿日）
烈の資格に四輪駆動免許、二輪駆動免許を追加

～第3回オリキャラ紹介～

K2「さて、ＳｔｒｉｋｅｒＳ突入前ということで再びオリキャラ紹介です。
　今回の紹介は、約丸々1話分の文字数があるから長いです」

エイ「こ、今回は私の紹介とマイロードのＳｔｒｉｋｅｒＳの時の設定紹介でしゅ！」

ア「噛んじゃうエイ…可愛い」

烈「ではまずエイことエイジスの紹介だ」

オリキャラその7

名前：エイジス
愛称：エイ
性別：女
年齢：１３～１４歳（↑外見年齢。精神年齢は１０歳くらい）
身長：約３０→１４８ｃｍ
髪型：金髪のポニーテール（長さはバカテスの島田美波くらい）
　目：薄い紫色
性格：恥ずかしがり屋

魔力光：強い黄色
魔法形態：古代ベルカ式
能力：魔力変換資質『電気』
コードネーム：『雷霆の宝玉』
モデル：『夜明け前より瑠璃色な』より『シンシア・マルグリット』

古代ベルカの融合機。
アリステラの妹、アギトの姉に当たる。
直接的な戦闘には向いておらず、補助や防御といったサポートの類、多重同時処理（マルチタスク）、高速処理、ハッキングが得意。
烈との相性はそこそこ高い。

ゼストとルーテシアが違法研究施設を潰した時、アギトは2人に助けられたのに対し、エイジスは研究員の手によって連れ出された。
その時、キメラの実験をしていたイムラーに捕まり、変換資質のデータを撮られた後、自家発電の動力炉に埋め込められ、発電のために魔力を吸われる。
烈に助けられてからは、烈のユニゾンデバイスとして行動する。

蒼「以上だな」

ア「私の妹達に手を出した奴等め、見つけ出して氷漬けに！！」

烈「物騒なこと言うもんじゃない。とっくに捕まってる」

エイ「あ、あの。こーどねーむってなんですか？」

Ｋ２「アギトが『烈火の剣精』って自分で言ってたでしょ？あれ、調べたら研究所にいたときの識別コードだったらしいんだよね。だったらエイジスにもないとおかしいってことで」

ア「ちなみに私は？」

Ｋ２「『氷結の鏡』。アギトが剣って聞いた時、三種の神器が頭に浮かんだんだよね」

蒼「剣と鏡と勾玉か」

Ｋ２「そゆこと」

エイ「つ、次はマイロードのステータス紹介です」

ＳｔｒｉｋｅｒＳ時　烈のステータス

名前：草薙　烈
本名：？？　？（４２話にて明らかに）
性別：男
年齢：１７歳
身長：１７０ｃｍ（シグナムよりほんの少し高い）
血液型：Ａ
容姿：中性的だが眼帯のせいで女性とは思われない

しかし髪を解き眼帯を前髪で隠して黙っていれば女の子に見える

眼帯を掛けている左目には縦一閃の傷がある

普段は可愛い印象だが、黒髪紅眼になるとカッコイイ印象になる

モデル：一応『舞一乙ＨＩＭＥ（漫画ｖｅｒ）』より、

『マシロ・ブラン・ド・ヴィントブルーム（男）』

髪型：肩まで掛かる髪を後ろで一つに縛っている

髪色：赤→赤みのある黒（『殺戮衝動』発動時）

右目：黒→真紅（；）

性格：温厚→冷酷（；）

魔力光：真紅→暗い紅（；）

魔法形態：（変則）ミッド式

デバイス：篭手型ストレージデバイス『鋼閃』

古代ベルカ式ユニゾンデバイス『エイジス』

所属：陸上警備隊第１０８部隊

階級：陸曹長

役職：捜査官

資格：捜査官／小隊指揮／危険物第１類（爆発物）取扱／四輪駆動免許／二輪駆動免許

魔導師ランク：陸戦ＡＡ＋→オーバーＳ相当（；）

《機能》：『魔力作用資質』《炎》・《氷》・《土》『？？』：『？？？？』

補足：左腕は義手になっていて指先にワイヤーが仕込まれている。

基本は包帯で左腕が義手だとわからないように隠している（化物語の神原駿河みたいに）

時々、マリエルに頼んでメンテナンスしてもらっている。

左目は義眼になっており“何か”が埋め込まれていて眼帯で封印されている

“何か”と『殺戮衝動』の発動は関連性があるが、現時点で

は不明

並行世界の地球から飛ばされて４年が経過した烈。
様々の任務等を熟し、階級・魔導師ランクはどちらもにギンガを越えてしまった。
戦闘機人事件を追いながらも、エイジスの妹であるアギトの情報や、元の地球へ行く方法を探し続けている。
異性には容姿や性格的にモテるのだが様々な調査等で手一杯であり、精神的に全く余裕がなく、告白等は全て断っている。
ギンガ、ティアナ、ツバキの好意に、薄々気がついているのだが、今の烈は3人の思いには応えないだろう。
現在、ギンガとは仕事上のパートナー。ティアナ、ツバキとは友人という関係であり、
それ以上に発展するとするならば、かなり先のことになるだろう。

※管理局で登録されている烈の魔導師ランク詳細
（実際の詳しいことはＷｉｋｉにも載ってないので勝手に考えたり、
他の作者様のものを参考にしたりいたしました）

魔導ランク　陸戦ＡＡ＋【変換資質持ちによる補正有り】
・魔力ランク　Ａ＋
（氣力保有量　ＡＡ）
・近接技能　Ａ＋
・中距離技能　ＡＡＡ

・遠距離技能　　Ｂ＋
・補助技能　　ＡＡ＋
・先天技能　　『魔力変換資質』《炎熱》《凍結》《大地》

以下の項目は総合で取る場合追加される
・単体戦技能　　Ａ＋
・広域戦技能　　ＡＡ－
・集団戦技能　　ＡＡ－
・対軍戦技能　　ＡＡＡ＋
・空戦技能　　Ｄ
（炎熱使用時　　Ａ－）
・総合　　ＡＡ＋

魔力絃を用いた捕縛、魔力刀による射撃魔法、魔力変換資質を用いたブースト魔法を得意とし、中距離戦闘を主体とする。
１対多の戦闘では、１０８部隊の武装捜査官においてトップクラスの実力の持ち主である。
逆に集団戦においては、絃による戦闘スタイルが逆効果となるため、フルバックやセンターガードとして全体の指揮や補助に回っている。
近接戦闘も行えるのだが、捕縛を主体とした戦闘スタイルであるため、
そちらに比べるとやはり劣ってしまうが、それでも一般の局員以上の近接戦闘技術を持つ。
陸戦、総合共にＡＡ＋ではあるが、限りなくＡＡＡに近い実力を持つ魔導師である。

烈「前回と違って詳しい内容だな。だが本名が?なのはともかく、《機能》の真下の『??』は何だ?」

K2「《機能》の正式名称の略称。で、その右の『????』が烈の本来の能力の名前。
　『????』は現在、眼帯による封印で制限が掛かってて、その結果《炎》《氷》《土》のみが使用可能な状態」

ア「……作者さん。それ後付け設定ですか?」

K2「実は烈の本当の能力は、はっきりと決まってなくて3つくらい保留にしてたんだよね。
　で、2つに絞ってどっちにするか現在検討中。後付け設定という訳じゃない。
　決まった能力によって《》が変わる予定。
　というか、最初にプロットを考えてても変更したりする必要がある部分が出て来るのよ。矛盾とかが出て来るから。
　それに主人公の能力が、炎と氷と土を操るだけってのも微妙だろ?」

烈「お前なあ……」

K2「蒼の『??』は『魔導書の鍵（クラヴィス＝グリモワール）』で変わりないけどね」

蒼「ま、《機能》の正式名称はいずれ登場するさ。
　ただ、その説明の時に作者の自己解釈が入るが」

K2「自己解釈がないと『??』説明できないからね。その時は先

に解釈部分を説明するけど」

エイ「ほぇ～～～」

ア「じゃあ作者さん質問です。何故兄様の遠距離技能はＢなんですか？

曲絃術は、遠距離戦闘や室内戦闘で最高レベルの戦闘能力なはずですよ？」

烈「その質問は俺が答えるべきだな。何故かと言うと、タイムラグだ」

ア「タイムラグ？」

烈「ああ。相手との距離が遠すぎると、指先で絃の操作をしていても絃が指先の動きに追い付かないんだ。だから俺は中距離主体で絃を使っている。

あとは砲撃があまり得意じゃないからだ。

『フレアバスター』はあくまでも『紅鏡の核』の発展技だ。

『紅鏡の核』は周囲に炎がないと使えないからな」

ア「なるほど。そういうことですか」

蒼「ところで、兄さんは陸戦ＡＡ＋か。強すぎでもなければ弱くもない。正直微妙だな」

Ｋ２「何言ってんの？武装局員って基本がＢランク。武装局員の隊長クラスでも普通はＡランクなんだよ」

エイ「マイロードは十分強いってことですか？」

ア「そうねエイ。兄様は強いんですよ。何かと負けてばかりですけど」

烈「それを言われると痛いんだが、まあいい。
小隊指揮が持ちなのもランクが高いからか？」

Ｋ２「そ。実際に指揮していたのは番外編でロストロギアを押収した時ね。烈はけっこう優秀だから
あと危険物第１類ってのは、危険物について調べて（Ｗｉｋｉで）勝手に作った資格です。
なので現実には実在しません。ただし危険物取扱甲種・乙種というのは実在します」

蒼「そちらの方が気になる読者の方はＷｉｋｉで調べてみてくれ」

Ｋ２「じゃあ烈のステータス紹介もここまでにして、
次はオリキャラ７名のＣＶイメージでも紹介しますか」

烈／蒼／ア／エイ「「「「ＣＶ？」」」」

Ｋ２「読者の皆様がどんなイメージを抱いてるのかわかりませんが、
自分としてはこちらのようなイメージになります。
皆様のイメージが崩れたりしてしまったらすいません」

烈　ＣＶ：保志　総一郎

例）ＭＡＲ：アルヴィス
　ガンダムＳＥＥＤ／ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ：キラ・ヤマト
　ひぐらしのなく頃に：前原圭一
　ギアスＲ２：ジノ・ヴァインベルグ
　他：真田幸村やブレラ・スターン等

蒼　ＣＶ：ゆかな
例）コードギアス：Ｃ．Ｃ．
　舞－乙ＨＩＭＥ：マシロ・ブラン・ド・ヴィントブルーム（女）
　ふたりはプリキュア：雪城ほのか
　なのは：リイン／ルキノ

アリス　ＣＶ：田中　理恵
例）ガンダムＳＥＥＤ／ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ：ラクス・クライン
　ハヤテのごとく！：マリア
　ローゼンメイデン：水銀燈

エイジス　ＣＶ：後藤　邑子
例）涼宮ハルヒの憂鬱：朝比奈みくる
　ギアスＲ２：アーニャ・アールストレイム
　真・恋姫†無双：鳳統（雛里）

ジュレス　ＣＶ：三木　眞一郎
例）ガンダム００：ロックオン・ストラトス
　鋼の錬金術師：ロイ・マスタング

ＢＬＥＡＣＨ：浦原喜助

ツバキ　ＣＶ：戸松　遥
例）狂乱家族日記：乱崎千花（姫宮千子）
　刀語：否定姫
　かんなぎ：ナギ

エルフィ　ＣＶ：松岡　由貴
例）涼宮ハルヒの憂鬱：鶴屋さん
　ＢＬＥＡＣＨ：井上織姫
　魔法先生ネギま！：エヴァンジェリン
　なのは：エイミィ

Ｋ２「以上がオリキャラ7名のＣＶイメージとなります。
　自分としては、例の1番上のキャラに近い感じです」

蒼「私とホーネットはモデルになったキャラそのまんまだな」

Ｋ２「あっさり浮かんだのはエイジスとツバキで、
　悩んだのはアリスと烈とエルフィだったりする」

ア「私……ですか？」

烈「俺とエルフィもか？」

K２「烈とエルフィは戦闘時に性格と口調が変わるから……」

蒼／ア／エイ「「「あーーー……納得　（です）」」」

烈「……複雑な気分だ」

K２「んで結局烈は、キレる→暴走→能力上昇→ＳＥＥＤ覚醒って経緯で決まった」

エイ「ほぇ～～そうだったんですか」

K２「エイジスはすんなりと決まった。蒼やアリスよりも妹っぽいし。
　烈はアスラン役の石田　彰さんの方にしようかとも考えたけど、
　やっぱり普段の烈の性格的にキラっぽいかなってことで」

蒼「兄さんはいずれ黒がデｈ……ゲフンゲフン」

ア「アオちゃん？またさらっとネタばれになること言ってません？」

蒼「気にするな。寧ろ、第２回オリキャラ紹介の時の方がネタバレあっただろ？
　あの時アリスが融合機だってことを、読者の皆様が察した可能性は高いだろ？」

K２「えーー。脱線するのもそこら辺にしてね。
　えっと、エルフィは結局普段の性格的に考えて、アリスは……勘」

ア「『撃ち貫く氷柱　（アイシクル・スナイプ）』！！」

Ｋ２「いっつもやられてばっかりでいられるか！！『熾天覆う七つの円環　（ローアイアス）』！！」

烈「Ｆａｔｅネタか」

エイ「もっとましなところで使ってほしいです」

ア「チッ、防がれましたか」

Ｋ２「ハハハハハ！！無駄無駄無駄ァ！！」

蒼「貴様が話を脱線させてるわ！！虚刀流奥義、鏡花水月！！」

Ｋ２「無駄ァ！！」

蒼「ッ！！（カチン）。……オラオラオラオラオラオラオラァ！！！」

Ｋ２「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァ！！！」

エイ「あわわ！！蒼さんと作者さんがスタンド使いみたいな殴り合いを！！」

烈「いい加減にしろ。千紫（氷だけ）……」

ア「千紫（同じく氷だけ）……」

蒼／Ｋ２「「氷漬けだけは勘弁してください！！（土下座）」」

烈「……（氷の刀を消す）」

ア「万紅♪」

蒼／Ｋ２「「アリスゥゥゥ！！！」」

ピッキーン！！

ア「はい♪アオちゃんと作者さんの氷漬けの完成です」

エイ「おねーちゃんが……恐いです」

ア「何か言った？エイ？」

エイ「な、なんでもないでしゅ！！」

烈「長くなってしまったからここらへんで終わりにしよう」

エイ「これからも、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～紅闇の少年と機人の少女～をよろしくお願いします

ア「それではみなさん」

烈／ア／エイ「「「また次回！！」」」

～第3回オリキャラ紹介～（後書き）

魔導師ランクについてですが、一部を他の作者様のものを勝手に参考にしてしまいました。
申し訳ありません。

モデルと表記していますが、あくまでそのキャラの容姿がです。
なので性格やCVイメージが元になったキャラと同じ、ということにはなりません。

なにやら本日からログインしていない方でも感想を書けるようになったらしいです。

感想お待ちしております。

第２７話　蒼き少女と銀の少女（前書き）

Ｋ２「今回はファーストアラートです。ではどうぞ」

第２７話　蒼き少女と銀の少女

～～フェイトＳｉｄｅ～～

機動六課が発足してはや２週間。

今のところ私やなのは達の隊長陣もＦＷ陣も、仕事や訓練は順調に進んでいる。

忙しくてエリオやキャロのことをあんまり見てあげれないけど、なのはが訓練を見ているから安心かな。

そのうち私もエリオやキャロに魔法を教えてあげないとね。

「はやてはもう向こうに着いているころだと思うよ」

『はい。お疲れ様です』

私は今はやてを聖王教会に送って、私の愛車で移動しながらグリフィス君と連絡中。

「私はこのあと、公安地区の捜査部に寄っていこうと思うんだけど、そっちは何か急ぎの用事とかあるかな？」

『いえ、こちらは大丈夫です。副隊長のお二人は交代部隊と一緒に出動中ですが、なのはさんが隊舎にいらっしゃいますので』

「そう」

なら大丈夫だね。

そう思った瞬間、目の前に一級警戒体制の文字が浮かび上がった。

『教会本部から出動要請です』

グリフィス君がアラートの原因を言う。

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて』

はやてが通信に割り込んでくる。

なのはとグリフィス君の名前が出てきたのは、この通信はなのはの所にも繋がっているからだろう。

「状況は？」

『教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった。場所は営利の山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中』

「移動中って！」

『まさか！』

なのはも私も同じ考えにたどり着いたようだ。

『そのまさかや。内部に侵入しかガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる。
リニアレール車内のガジェットは、最低でも３０体。
大型や飛行型の未確認タイプも出とるかもしれへん』

多い。しかもそれで最低の数だ。まだＦＷのみんなにはハード過ぎる。

『いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか？』

「私はいつでも」

『私も』

ＦＷ陣達を私達がフォローしないと。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ！みんなもオッケーか！？』

『『『はい！』』』

みんな元気に返事をするけど、キャロは本当に大丈夫だろうか？心配だな。

『よし、いいお返事や。シフトはＡ－３。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制』

『はい！』

『はい！』

グリフィス君とリインが応える。

『なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮』

『うん！』

なのはと私が現場指揮。なのはとならやれる。

『ほんなら……機動六課ＦＷ部隊出動！！』

『『『『はい！』』』』

「了解！みんなは先行して。私もすぐに追い掛ける」

『うん！』

そして私ははやてと通信を切り、車からサイレンを鳴らし、アクセルを踏む。

前を走る車をくぐり抜け、車を停めるためにパーキングへ向かう。

数分で高速道路を降り、近くのパーキングへたどり着く。

「こちらフェイト。グリフィス君、こっちは今パーキングに到着。車停めて現場に向かうから飛行許可をお願い」

『了解！市街地個人飛行、承認します！』

グリフィス君の承認と同時に車を停めて降りる。

車から離れバルディッシュを取り出す。

『ＧｅｔＳｅｔ』

「うん！」

バルディッシュの掛け声と共に、辺りが金色の光に包まれる。

「バルディッシュアサルト。セットアーップ！！」

『ＳｅｔＵｐ』

バルディッシュが、待機形態の金属板から黒い戦斧へと姿を変える。

『Ｂｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ　Ｉｍｐｕｌｓｅ　Ｆｏｒｍ』

黒のインナー。青みのある黒のジャケットとスカート。黒のソックスに、銀のブーツと、左腕に銀の篭手。そして白いマント。
私のインパルスフォームのジャケットだ。

「いくよ、バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　Ｓｉｒ』

バリアジャケットのセットアップを終えた私は、長年の相棒の返事を聞き飛び上がる。

「ライトニング1。フェイト・テスタロッサ・ハラオウン……行きます！！」

そのまま高速で飛行し、現場の山岳地帯へと向かった。

しばらく行くと現場に到着。
なのはも白いバリアジャケットを展開し、出動していた。

『スターズ1、ライトニング1、エンゲージ』

通信を担当しているロングアーチからの通信が入る。

「こっちの空域は2人で押さえる。新人達の方、フォローお願い」

『了解』

＜おんなじ空は久しぶりだねフェイトちゃん＞

＜うん、なのは＞

なのはから念話での通信。

その直後、飛行型のガジェットが後方から接近してきた。

なのはは飛行型の攻撃の段幕をかわし、得意の砲撃や誘導弾で飛行型を撃墜している。

『Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ』

私はバルディッシュをハーケンフォームに変え、黄金の刃を発生させる。

「はあぁぁぁ！！」

そして黄金の刃を振りかぶり、ハーケンセイバーを撃ち出す。

高速回転した刃は、目の前のガジェットを真っ二つに切り裂く。

そして直ぐさま次のガジェットへ。

高速飛行でガジェットを撹乱し、すれ違う際に切り裂く。

なのはと私が空でガジェットの相手をしている間に、ＦＷ陣はリニアレールに取り付くことができたようだ。

よし。もっとリニアレールからガジェットを引き離さないと。
そう思った時だった。

『えっ！……これ……って…』

通信からルキノの驚愕の声が響く。

「どうしたのルキノ？」

『上空に次元転送反応！？』

私の疑問に答えたのはアルトだった。

＜フェイトちゃん上！！＞

「えっ！？」

なのはの念話を聞き上を向く。
そこには次元の歪みができており、中から光と共に何かが出てきた。

「女の……子？」

歪みから出てきたのは蒼い髪の少女だった。

いけない！あのままだったら落ちてしまう！

私は少女を見た瞬間、飛び出していた。

～～フェイトＳｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～蒼Ｓｉｄｅ（途中から第３者視点）～～

「何だったんだ今の光は……って高あぁぁ！！！」

光が晴れると、真下には山岳と森が広がっていた。

何これ？何で空に？崖から飛び降りはしたけど高すぎないか？

『アオちゃん翼、翼！！このままじゃ地面に真っ赤な花が咲いちゃいますよ！！』

「あ、ああ……っあら？」

翼を広げようとした瞬間、体が落下しなくなった。
と同時に腹の部分に変な感触が……

「大丈夫ですか？」

変な浮遊感がすると思ったら、金髪の女性に片腕で抱えられていた。

「すまない。助かった。だが……その服はコスプレか？」

金髪の女性はゲームのキャラのような服を着て、
右手に斧を持って……って斧!？危なッ!!
って、槍持ってる私が言うことじゃないか。

「違いますッ!!そんなことより、貴女には聞きたいことがありますが、今は……ッ!!」

言いかけたところで女性は突然急旋回する。女性のいた場所にはレーザーが飛んできていた。
高速で動くのでGとか遠心力とかがはたらいて……ウップ。気持ち悪くなってきた（＝＿＝？
自分で飛ぶならともかく、こう振り回されるとな。
てかなんだあれ？なのひらべったい戦闘機みたいなのは？

「なあ、あれって……」

「舌噛みますよ！！」

「おぉぉ！？」

戦闘機がレーザーを撃ってきたので再び急旋回。ヤバ、吐きそう。

戦闘機は１０機ほど追い掛けてくる。

……私邪魔になってじゃんか。さっきから避けるのもぎりぎりだし。

「おい」

「喋らないで下さい。死にますよ！！」

「人の話を聞け。とりあえず私を放せ。邪魔だろ？」

「何を言ってるんですか！！」

「あーー、私飛べるから。ってことであの戦闘機ぶっ壊せばいいんーーーだろッ！！」

「あっ！！」

私は女性の手を振りほどいた。

重力に従い私の体は地面に向かって落ちてゆく。

「行くぞアリス」

私は胸元の十字架を左手で外す。

『了解です』

アリスも返事を返す。

「よし……アリステラ、セットアーップ！！」

十字架から銀の光が輝いた。
光が治まるとそこには、長い銀髪に翡翠の瞳。両端が四角いヘッドフォンのようなカチューシャを着け、蒼いドレスを着た小さな少女ーアリステラーがいた。

「アリス！」

「はい！」

「「ユニゾンイン！！」」

再び銀色の光が輝く。
光は蒼とアリスを包み込んだ。
そして再び光が治まった場所には、髪が水色になり右目が翡翠色になった蒼がいた。

「第１章　２３項　ヴィント・フリューゲル！！」

蒼が叫ぶと、背中に蒼い翼が現れた。
蒼は落下していた状態から翼を羽ばたかせ、空中でバランスを取る。
翼を広げると同時に５機のガジェットが蒼へ向かって行った。

蒼は腰の筒を右手に持ち、布を取り払った。
布の中から現れたのは、十文字槍と呼ばれる穂先の下部に左右の枝がある槍だった。

カシャンカシャン！！

蒼は３０ｃｍ程だった槍の柄を伸ばし、通常サイズの槍にする。

「さて、蒼月で切れるか？あの鉄屑」

『切れなかったら遠慮なく技を使ってくださいね。リリードは私に任せてください』

蒼の中にいるアリスが答える。

「オッ……ケー！！」

そう言うと同時に、蒼は向かって来るガジェット５機に向かって突撃した。

ガジェットは即座にレーザーを撃ち出してくる。
が、蒼はレーザーの嵐を駆け抜ける。
ガジェットとすれ違う瞬間、２体を槍で切り裂いた。
切り裂かれたガジェットは爆発し、残骸が重力に従い落下する。

「良しッ！！」

『また来ます！！』

アリスの言う通り、残った３機のガジェットは反転して再びレーザーを撃ってきた。

「第３章　１８項　雷の矛　（ライトニング・パニッシャー）！！」

蒼は左手を翳し、掌から三筋の雷を撃ち出した。
三つの雷がそれぞれ１本ずつガジェットに当たり爆発する。

「ふぅ。終わったな」

と言ったところで、首に冷たい感触。
首筋には金色の刃が当てられていた。

「武装解除して、ユニゾンを解いてください」

それは残りのガジェット5機を破壊したフェイトだった。

「やれやれ。せっかく手伝ってやったというのに」

「そのことについては感謝します。ですが――」

『フェイト隊長大変です!!地上からリニアレールに向けてガジェットの増援が!!』

フェイトの言葉はシャーリーからの通信で遮られる。

リニアレールの方を見ると、暴走は止まっていたが、かなりの数のガジェットが接近してきていた。

「くッ!!」

ＦＷ陣は疲れ果てている。
なのはがＦＷ陣の近くにいるが、１人であの数を相手にするのは無理だ。

「なんだ？……うわ、多過ぎだろ」

蒼もリニアレールの方を見る。

「ここでじっとしていて下さい！！話は後ーーー」

「まあ待て。あいつ等を助けるんだろ？さっき助けてもらった借りがあるからな。助けてやる」

「えっ？」

そう言うと、蒼は蒼月を腰に直し呟いた。

「発動、『魔導書の鍵（クラヴィス＝グリモワール）』
出ろ、クラヴィス。グリモワール」

瞬間、蒼の右手には銀色の鍵。左手には白いベルトで十字に縛られた黒い本が現れた。
本の表表紙には鍵穴が付いていた。

蒼はクラヴィスと呼ばれた鍵を、グリモワールと呼ばれた本の鍵穴に差し込み、鍵を回した。

「解錠」

蒼い光がグリモワールから発せられ、ページが開かれた。
本が開かれると同時にクラヴィスが大きくなり、銀色の剣になった。

「それは……一体……」

「説明している暇はない」

蒼はフェイトの言葉を切り捨てる。

「アリス、詠唱の補助頼む」

『はい。……剣(つるぎ)よ。天地を撃ち貫く空の剣よ』

アリスが詠唱を始めると同時に、グリモワールの頁が勝手にめくれてゆく。
そして段々空に黒い雲が集まってきた。

『今此処に』

「万物を引き裂く虚空の刃を！！」

蒼もアリスに合わせて呪文を唱える。
黒い雲はさらに大きくなってゆき、リニアレールの上空に広がっていた。

「第４章　８項　甕布都神（みかふつのかみ）！！」

ガラララァァァン！！！

蒼がクラヴィスを空へ向けて掲げ技の名を叫ぶと、雷雲から無数の雷が堕ちリニアレールに接近したガジェットを全て焼き払った。

「……凄い」

「殲滅完了　（さてと、逃げるか）」

「待って下さい」

この場から逃げようとした蒼であったが、逃げる前にフェイトに気付かれた。

「貴女には聞きたいことがあります」

「えーめんどくさ……」

「いいですよ」

蒼の言葉は、ユニゾンを解除したアリスによって止められた。

「ちょっ…アリス！？」

＜ここが何処だかもわからないんです。情報を集める為にも、一先ずこの人の言う通りにした方がいいです＞

アリスが念話で蒼に意見を述べる。

＜だが……いや、そうだな＞

蒼はアリスの意見に納得する。

「わかった。話をすればいいのだろう？」

「ありがとうございます。では着いて来て下さい」

蒼とアリスはフェイトに従って着いて行くのであった。

～～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～～

『刻印ナンバー９、護送体制に入りました』

「ふむ」

とある研究所にて白衣を着た男が秘書のような紫の髪の女性と通信で話していた。

『追撃戦力を送りますか？』

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが撮れただけでも十分さ。それにしても――」

白衣の男が言うと同時に、リニアレールが映っていた目の前のモニターが映り変わる。

「この案件はやはり素晴らしい」

男はモニターに映ったスバル達を見つめる。

「私の研究にとって、興味深い素材が揃っているうえに」

再びモニターの画面が変わり、フェイトと赤い髪の少年が映し出される。
2人を見て男は笑う。

「この子達。生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだからね」

男は再び笑い出す。

「それに」

また画面が変わり蒼とアリスが映し出される。

「彼女の使ったあの鍵と本。実に興味深い」

『あら？貴方もかしら？ジェイル』

突撃モニターが変わり、眼鏡を掛けた女性が映し出される。

「やあ君か。私もということは君もかい？」

ジェイルと呼ばれた男は、いきなり通信してきたことを全く気にせず通信してきた女性に話し掛ける。

『ええ。実に興味深いわ。いろいろとね』

「そうかい。ふふふ……」

『フフフフフ……』

白衣の男と眼鏡の女性の笑う声が研究所に響いていった。

～～あとがきコーナー～～

烈「遂にＳｔｒｉｋｅｒＳ突入だ。２～３話程出番がなくなるので、あとがきは俺と」

エイ「私と」

ギ「私が担当します」

烈「では今回の技の紹介だ」

『ヴィント・フリューゲル』

・使用者　蒼

・ページ　第１章　２３項

・内容　　魔力の翼を背に発生させ飛行を可能にする技

意味はドイツ語で直訳して「風の翼」

『雷の矛　（ライトニング・パニッシャー）』
・使用者　蒼
・ページ　第３章　１８項
・内容　直射状に三筋の雷を撃ち出して攻撃する技

『甕布都神』
・使用者　蒼
・ページ　第４章　８項
・内容　雷雲を集めて操り、広範囲に雷を落とす技
最大範囲は集めた雲によるが、半径５００ｍが最大
・元ネタ　ヤタガラモンというデジモンの必殺技の名前

エイ「以上です」

ギ「後の２つは雷の変換資質を使ったの？」

烈「違うな。蒼の技は全てグリモワールに登録されている技だ。変換資質は必要ない」

エイ「マイロード。グリモワールとクラヴィスって何なんですか？」

烈「蒼の《機能》だ。まあ《機能》は正式名称ではないが。
　ちなみに、グリモワールは『灼眼のシャナ』のマルコシアスが小さくなった物を。
　クラヴィスは『キングダムハーツ』の約束のお守りをイメージしてくれればいい」

ギ「能力の説明はしないの？」

烈「デバイス紹介の時に一緒にするとさ」

エイ「あの、最後に登場した女の人は？」

烈「今後に重要なキャラらしい」

エイ「本編でおねーちゃんと早く会いたいです」

ギ「楽しみね。エイ」

エイ「はい！！」

烈「では次回、第２８話　機動六課　へ」

ギ／エイ「「テイクオフ！！」」

第２７話　蒼き少女と銀の少女（後書き）

クラヴィスとグリモワールについては、本編でも説明が入りますが、詳しい設定は蒼のデバイス紹介と一緒に投稿します。

第２８話　機動六課（前書き）

ミッドの次元世界番号は不明なので、勝手に１番にしました

第２８話　機動六課

～～蒼Ｓｉｄｅ～～

しばらくコスプレ女に付いて行き、飛び続けるとパーキングにたどり着いた。
停まっているあの黒い車はこの女の私物か？

「うん……そう。……うん。今からそっちに連れて来る」

なんかさっきから飛んでいる間もずっと話してるな。上司に連絡か？

「うん。それじゃ」

通信を切った途端、コスプレ女が光に包まれる。
光がおさまると、女の服がコスプレから黒い制服に変わっていた。
……なるほど。これがグリモワールの言っていた騎士甲冑ってやつか。

「とりあえず車で移動しますので、車に乗って下さい。えっと……
…そういえば貴女名前は？」

……そういえば名乗ってなかったな。

「蒼だ。アオでもいい。こっちはアリステラ」

「アリスと呼んで下さい。……ふぁ」

アリスが欠伸をする。

「疲れたかアリス？眠っててていいぞ」

「ごめんなさい。では……」

そう言って、アリスは銀の十字架へと戻った。
私はそれを首に架ける。

「それ、ユニゾンデバイス……だよね？」

「そうらしいな。で、あんたの名前は？」

「あ、フェイト。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

「そうか。んで、ハラオウン。私達をどこに連れて行く気なんだ？」

「私の職場の機動六課です」

「そこで話をしろと？」

「うん。六課の課長と隊長達にね」

「ふーん　（ま、全部話すつもりはないがな）」

そう言って私とハラオウンは車に乗り込む。
ちなみに助手席に乗ったぞ。

「（……どうやらここは地球じゃないみたいだな）」

車から外の景色を見て思ったこと。
今車は高速道路を走っている。
見たところ、ここは地球よりも文明が発達しているようだ。
何より月が２つもある。絶対に地球じゃないな。

《……懐かしいな》

念話ではない凛とした女性の声が、直接頭に響く。

《何がだ?》

響いた声の主、私の中にいるグリモワールに返事を返す。

《……いや。あの時の子がこんなに成長しているとはな》

あの時の子?

《……ハラオウンのことか?》

《ああ》

《なら、お前の元主や守護騎士とやらも近くにいるんじゃないか?》

《そうかもしれん。だが、私は既に消えた存在だ》

消えた存在……か。

《会うべきではないと?》

《そうではない。あの方は私の魔導を継いでくれた。それに、約束を守ってくれているなら私の二代名も側にいるだろう。心残りはもうないんだ》

《……そうか。そういえばお前から魔法を習ってもう3年か》

私は話題を変えた。
本当にコイツの元主が機動六課というところにいるのかどうかもわからないんだし。

《と言っても私はお前に登録されてる技しか使ってないから、実際に魔法を使ってはいないが。
実質、魔力の運用くらいじゃないか？お前に習って使っているのは》

《そうだな。3年前……確かお前達がアリスと会った時からだったな。
お前と烈にリンカーコアができたのもその時だったからな》

《兄さん……か》

あれから、兄さんが囮になって私を逃がしてから2年。
兄さんは今どこで何をしているのだろうか？

と、そう思った時、車が止まった。

「着きました。ここが機動六課」

いつのまにか着いたようだ。ずっと話してたから気がつかなかった。

《私はしばらく黙っておく。また後でな》

《わかった》

私はグリモワールとの脳内会話（笑）を終わらせる。

「ああ。わかった」

「それと、武器は一時預からせていただきます」

蒼月を渡せと。まあクラヴィスがあるから問題ないか。

私は蒼月をハラオウンに渡す。

「それから、あの鍵と本も……」

「無理だ」

ハラオウンがムッとした顔になる。こいつ短気か？

「……どうしてですか？」

平静を装っているが、ちょっと言葉に威圧を掛けてくる。
まぁ、私にとってはたいしたことのない威圧だが。

「あれは私の固有能力だ。渡した瞬間、私の中に戻ってしまう。それでもいいなら渡すが？」

「いえ、わかりました。では行きましょう」

そう言って、ハラオウンは車から降りる。私もそれに続いていった。

「で、向かってるのはここの隊長さんのところでいいのか？」

現在は隊舎の廊下をハラオウンの後ろに付いて歩いている。

「そう。……ん、ここだよ」

と、ハラオウンはある部屋の前で止まる。

「はやてー。入るよ」

そう言ってハラオウンはドアを開けた。

～～蒼Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～はやてＳｉｄｅ～～

「じゃあよろしくな、フェイトちゃん」

『うん。それじゃ』

隊長室で話していた私はフェイトちゃんからの通信を切る。

「主はやて。テスタロッサは何と？」

前に立っていたシグナムが聞いてくる。

「うん。フェイトちゃんが次元漂流者を見つけたらしいんよ」

「それって、映像に映っていた奴か？」

今度はシグナムの隣にいたヴィータが聞いてくる。

「そうみたいやな」

私やヴィータ、シグナムはＦＷ陣達のファーストミッションの状況を映像で見とった。

あ、ヴィータとシグナムは途中からや。交換部隊と一緒に帰ってきてからな。

まあそれはともかく。

あの女の子の使った鍵と本。いったい何なんやろか？

なんやら魔法みたいなものも使っとったけど、魔法陣は出とらんかったし魔法と違うんやろか？

せやけど魔力反応はあったしなあ。

最後の雷は推定Ｓランクの威力やったし。

ホンマ何なんやろ？

「はやてちゃ～～ん！！ただいまですぅ～～！！」

「ただいま～～」

ん？なのはちゃんとリインが帰ってきおったみたいや。

「お帰りなのはちゃん、リイン」

「ＦＷ達は？」

お？ヴィータは教え子達が心配みたいやな。

「み～んなお休み中です！」

「ところではやてちゃん。フェイトちゃんは？
さっきサンダーレイジで助けてくれたのお礼言おうと思ったんだけど」

あ～～なのはちゃん勘違いしとるみたいや。

「なのは。先程のはテスタロッサではない。次元漂流者の者がやったそうだ」

「ええっ！？そうなんですか！？」

「そや。んで、今フェイトちゃんにはその娘を連れて来てもらっとるんやけど……」

「はやてー。入るよ」

ドアの外からフェイトちゃんの声がした。

「噂をすれば……やな。ええよフェイトちゃん。入って来て」

そう言うとドアが開いて、フェイトちゃんと長い藍色の髪の女の子が入ってきた。

……なんや揉みがいがなさそうな胸やなぁ。

～～はやてＳｉｄｅ　Ｅｎｄ～～

～～蒼Ｓｉｄｅ～～

なんか目の前のちび狸にスッゴいムカついたんだが。

とまあさておき。

部屋の中に入ると、女性と少女が5人いた。
茶髪のサイドポニーの女性。
ピンクのポニーテールの侍のような女性。
ショートヘアーの（性格が）狸のような少女。
2つの三編みをした赤毛の少女。
そして水色の髪で、アリスと同じくらいちっちゃな少女だった。

《あの娘が二代目祝福の風……か》

《お前の元主は約束を守ってくれたようだな》

あの狸っぽいのが元主とやらか。

「私は機動六課課長、八神はやて二等陸佐です。任務の協力に感謝します」

狸女ははやてと言う名らしい。

「礼には及ばない。だが、聞きたいことがある。ここは地球ではないようだがどこなんだ？」

「ここは第1管理世界ミッドチルダだよ」

サイドポニーの女性が答える。

「……管理世界？」

「この次元世界にはたくさんの星や世界があって、それを管理したり、他次元世界の漂流者を保護したりするのが、私達管理局の仕事なんです」

今度は浮かんでいるちっちゃい子が答える。

「なるほど（管理……ね）。では私はその次元漂流者ということになるのか」

「そや。んで、私はなんで君がこの世界に飛ばされて来たんか聞きたいんやけどな？」

詳しく話すか？いや、暴力の世界の人間の名前を出す訳にもいかないか。

「さあな。私にも詳しいことはわからん。ちょっと飛び降り……って自殺ではないぞ。
まあ飛び降りたんだ。そしたらいきなり光ってな。気がついたら空の上という訳だ」

「なるほどなぁ。とりあえず君は六課で保護しようかと思っとるん

やけど」

「それはありがたいな。礼を言うぞ八神」

「そういえば、君の名前は？」

「蒼だ。アオと呼んでもいい。んで、こっちが……」

私は十字架を外す。

「アリス、起きろ」

「……は～い」

眠たそうな声で返事をしてから、十字架だったアリスが人型へと変わる。

「ユニゾンデバイス！？」

今度はポニテの女性の声だな。

「はじめまして。アリステラと言います。アリスと呼んで下さい」

「八神はやてや」

「高町なのはです」

「シグナムだ」

「ヴィータだ」

「リインフォース？ですう」

ついでにみんな名乗った。
まあ聞く手間が省けたからいいが。

「んーーとな。次元漂流者はデバイス所持が認められてへんのやけど」

「アリスを渡せと？」

八神の言葉に対して、私は言葉に殺気を込めて言う。

「「「「うッ！」」」」

八神、高町、ハラオウン、リインフォース？は殺気でたじろいだ。
シグナムとヴィータは平然として、逆に殺気を放ってきた。

「アリスは私の家族だ。貴様は家族を引き渡せと言うつもりか？」

「悪かった。悪かったから殺気を止めてくれへん？」

「アオちゃん！」

アリスまで止めるか。

「わかったよ」

私が殺気を出すのを止めると、シグナムとヴィータも出すのを止めた。

「えっと……な。私達に協力してくれたら話は別なんやけど」

「「協力？」」

私とアリスの声が被る。

「そ。蒼さん。機動六課に嘱託として協力してくれへんかな？」

「協力か……」

＜好都合じゃないですかアオちゃん＞

アリスが念話で話し掛ける。

＜保護されて自由に行動できなくなるより、協力すること自由に行動できる方がいいかと＞

＜……確かにな＞

だが、タダで協力するのもな。

「条件を呑むなら協力してもいい」

「条件って？」

「1つ目、衣食住の確保」

私は右手の指を1本立てて言う。

「構わへんよ。寮に空き部屋はあるしな」

「2つ目、給料が貰えるとありがたい」

2本目の指を立てる。

こっちで地球の金は使えないだろうからな。

「それもええよ」

「3つ目、アリスを引き渡さないこと」

「元々管理局は人手不足やからなぁ。
協力してくれるんならオッケーやで」

……随分と条件を呑むな。
私は4本目の指を立てる。

「4つ目、私の能力を調べないこと」

「それはちょう難しいな」

ちッ。流石に能力については聞きたがるか。

「全て教える訳にはいかない。……最低限のことは教えてやる。
それでどうだ？」

「ふむ（最低限……か。烈君の時よりもガードが硬いなぁ）。
……わかった。それでええ」

「なら最後だ」

私は最後の指を立てる。

「私達は人を探している。そのため時折いなくなるかもしれんが……いいか？」

「誰を探してるの？」

ハラオウンが聞いてきた。

「私の双子の兄だ。歳は１５になる」

「お兄さんか……」

「ええよそれも。ただお兄さんがこの世界にいるかどうかはわからんで」

「かまわんさ」

そう言って、私は手を八神に差し出す。

「なら……これからよろしく頼むぞ八神」

「こちらこそよろしくな、蒼」

私と八神はお互い手を握りあった。

夜。

私は女子寮に案内された。
明日ＦＷ陣とやらに私のことを紹介するらしい。
だから今日はゆっくり休めと言われた。

「ふぅ。すっきりした」

シャワーを浴びて浴室から出る。

「すー……すー……」

ベッドの方を見ると、アリスがぐっすり眠っていた。

《最近は逃げてばっかりの生活だったからな。安心してしまったの

だろう》

頭にグリモワールの声が響く。

《そうだな。ユニゾンしたのも久しぶりだったからな》

私は指でアリスの頭を撫でる。

《お前を解錠したのも久しぶりだったから私も疲れたな》

《ゆっくり休め。お前は肉体的にも精神的にも疲労しているだろ》

私の中にいるからよくわかっていることで。

《明日は高町が起こしにくるらしいからな。それまでぐっすり寝かせてもらうとするか》

そう言って、私はベッドに入る。

《ゆっくり休め。おやすみ、蒼》

《ああ、おやすみ――リインフォース》

そして私はゆっくりと目を閉じた。

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「はい。今回は蒼が六課に協力するという話でした」

エイ「おねーちゃんと会えるのはまだ先なんですか？（ウルウル目）」

ギ「（エイ、かわいい！！）ＳｔＳ６話の話までは私達の出番はないみたい」

烈「３０話までお預けだな。で、まさかのリインフォース登場か」

Ｋ２「彼女は蒼のグリモワールの中にいますよ。理由が明らかになるのはかなり先だけど」

ギ「というか、今回伏線が多い気が」

K２「アリスとの出会いは番外編でいずれ書きます。番外編といえば、そのうちアンケートを採ろうかと思いますので」

烈「では今回はこれまで」

エイ「第２９話　蒼銀の剣　です」

ギ「蒼の模擬戦の話になるそうです」

K２「それでは」

烈／ギ／エイ「「「また次回！！」」」

第２９話　蒼銀の剣（前書き）

エイ「ぜ、前回の話に於いて質問がありました」

ギ「『「兄を探している」のなら兄の名前は教えておくべきなのでは？』という質問だったのですが……作者さん？」

Ｋ２「えーと、お答えします。話の進行上に大きな問題が発生するからです」

エイ「問題？」

Ｋ２「うん。もし、あの時蒼が烈の名前を出した場合。もしくは、草薙の苗字を名乗った場合。
　この２つのどちらかがあの時起こったら、六課に保護される必要が無くなるからです」

ギ「六課の隊長の御三方は烈を知っている。それを蒼とアリスに話せば、２人は烈のところに行って烈に保護されるということになってしまい、今後一切本編に登場しなくなってしまう。という訳なんですか？」

Ｋ２「ザッツライ！」

エイ「リインフォースさんの伏線等も全て無駄になっちゃうんですね」

K２「まー後は……蒼がいないと烈は地上本部襲撃前に死んじゃうし　（ボソッ）」

ギ／エイ「「えっ！？」」

K２「おっと！口が滑った。では２９話　蒼銀の剣（つるぎ）

　最初の予定では１対１ではなかったのですが、自分に文才がないため結局１対１になってしまいました。申し訳ありません」

ギ「では始まります」

第２９話　蒼銀の剣

ドアをノックする音と高町の声で目が覚めた。

「蒼さーん。朝ですよーーー」

「ああ……わかった」

私は少し眠いと思いながらも体を起こし返事を返す。
側にあった時計を見ると８時だった。
かなり熟睡したみたいだな。昨日寝たのは１０時くらいだったはずだから。

「服は掛けてある六課の制服を着て下さいね」

制服？　あ、あれか。
私はハンガーに掛かっていた茶色の制服を手に取る。
着てみたが……何故サイズが合っているんだ？

「ん、んーーー」

どうやらアリスが起きたようだな。

「ん……あ。アオちゃんおはようございます」

「おはようアリス。高町が呼んでる。行くぞ」

「ふぁ～～い」

アリスも眠たいみたいだな。
てか１０時間寝ても眠いか。
けっこう疲れてるみたいだな。

「おはよう、２人共」

ドアを開けたら高町が白い制服を着て立っていた。

「おはよう、高町」

「おはようございます、高町さん」

「ニャハハ～～別に名前でいいんだよ？」

「じゃあ、なのはさんで」

アリスはあっさりと受け入れ、高町のことを名前で呼ぶ。

「私は高町と呼ばせてもらう。その方が呼び易い」

「むう。名前の方が良いんだけどなぁ～」

「私の主義だ。例外はあるがな。んで、今からどこに」

「食堂で朝食だね。その時にＦＷメンバーを紹介するよ」

「わかった。ああ、それと私に敬語も“さん”付けもいらんぞ。私はお前よりも年下だからな」

「わかったよ、蒼。じゃあ行こうか」

そう言って歩き出した高町の後ろを私は付いていった。

ちなみにアリスは私の肩に座っていたぞ。

六課食堂にて

「……地球じゃないのに何故日本の料理が？」

適当に朝食を頼んで出てきたのは、ご飯に味噌汁と焼き魚というスタンダードな日本の朝食だった。

「あー。それは私やはやてちゃん達、隊長陣が元々地球に住んでてね。こっちでも故郷の料理が食べたいなぁ～って」

「なるほどな（だがシグナムやヴィータって明らかに日本人の名前じゃないような……）」

《将とヴィータは夜天の書の騎士だからな》

突然リインフォースの声が響く。

《びっくりさせるな。とりあえずおはよう》

《おはよう。蒼》

《それより、騎士ってことは守護騎士ってことか》

私は朝食のトレーを持って高町と一緒に席を探しながら、頭の中でリインフォースと話す。

《ああ。烈火の将シグナム。鉄槌の騎士ヴィータ。盾の守護獣ザフィーラ。湖の騎士シャマル》

《そして祝福の風リインフォース…か》

《ああ。……あの時は嬉しかったな。闇の書の管制人格としか呼ばれていなかった私に、優しい主は名前をくれた》

名前……か。

私や兄さんなんて碌でもない名前しか付けてもらえなかった。

私達は道具だったから。一族の勝手な理由で生み出された道具だったから。

体をいじくられて、いろんな薬を何回も何十回も打たれて、

数々の戦闘技術や人体構造についての知識を叩き込まれて……

あの時まで、6年前まではずっとそうだった。

《あ……す、すまない。お前も昔は……》

《いいさ。私の苦しみなんて生まれてたったの9年だ。

お前の何百年もの苦しみと比べたらたいしたことない》

《……すまない》

《気にするな》

と、話の内容が暗くなったところ。

「なのはさーーーん!!」

前の方のテーブルで、青い髪でボーイッシュな女の子が立ち上がって手を振っていた。
高町がその子の元へ歩いてゆくので私とアリスも付いて行く。

テーブルには立ち上がった子の他に3人の子と1匹がいた。
1人目は私と同じくらいで、オレンジの髪をツインテールにした少女。
2人目は赤い短髪で10歳くらいの少年。
3人目は同じく10歳くらいでピンクの髪の少女。
そしてその子の傍には1匹の白い竜がいた。
……竜ってオイ。

「みんな、ちゃーんと食べてる?」

「「はい!」」

「あんた達は食べ過ぎよ」

青髪少女と赤髪少年が元気良く返事をするのに対し、橙髪少女がツッコミを入れる。

確かに食べ過ぎじゃないか？
２人とも皿のスパゲティーの量が凄いんだが。

「あ、あのなのはさん。その人達は？」

桃髪少女が私とアリスを見ながら言う。

「ああ。六課に協力してもらうことになったんだよ。蒼、この子達が六課のＦＷ陣ね」

みんな子供じゃないか。

《お前が言えることではないな》

リインフォース。心を読むな。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「エリオ・モンディアル三等陸士です」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。この子はフリードです」

「きゅく～～」

青髪、橙髪、赤髪、桃髪＋竜の順番で名乗った。

「蒼だ。アオと呼んでもいい」

「アリステラです。アリスって呼んで下さい」

私とアリスも名乗り返す。
そしてそのまま4人と同じテーブルに座る。

「あの、なのはさん。こんな時期に協力ってどういうことなんですか？」

私がご飯粒をアリスに分けていると、ティアナって子が高町に尋ねた。

「蒼とアリスは次元漂流者で、六課で保護する代わりに協力を頼んだんだ」

「「「「へぇ～～」」」」

「ちなみにあの時カミナリでガジェットを破壊してくれたのも蒼と

アリスなんだよ」

カミナリ？ああ、甕布都神のことか。

「どれくらい強いのよ……」

ティアナが呟く。

「そうだねぇ。午前中の訓練で2人には模擬戦してもらおうか？」

「別にかまわんが……相手は誰が？」

「私がやろう」

後ろから声がしたので全員声のした方を振り返ると、シグナムが朝食のトレーを持って立っていた。

「蒼、お前にどれくらいの実力があるか私が見定めてやろう」

「またシグナムさんの悪い癖が……」

またってオイ高町。いつもなのか？

「ねぇティア。アオと副隊長ってどっちが強いんだろう？」

「わかんないわよそんなの。でもアオって私かあんたと同じくらいなんだからそんなに強いって訳でもないでしょ」

言ってくれるなティアナとやら。

「かまわんさシグナム」

「アオちゃんやる気です」

アリスが魚を頬張りながら言う。かわえぇなあ。

「それじゃあ午前中の訓練の時にシグナムさんと蒼の模擬戦ということで」

高町がそう言ってこの話は終わった。

……さて、どう戦おうか？

2時間後。私とアリス、そしてシグナムは廃都市の中心に立っていた。

にしても凄いな。この廃都市ソリッドビジョンなんだろ？
ちゃんと触れるし、リアルだなぁ。

とまあ、そんなことは置いといて。
私は目の前にいるシグナムの方を向く。

「あれほどの殺気を放てるお前だ。どれほどの実力か試させてもらうぞ。レヴァンティン！セットアップ！！」

『ｊａ（ヤー）』

シグナムが胸の鏃（やじり）のようなペンダントを外し光に包まれると、
チャイナドレスのようなインナーにジャケットとスカートのような
腰布が付いた騎士甲冑を着たシグナムが立っていた。

《将は強いぞ、蒼》

《わかってるさ》

「お前もバリアジャケットを着るなり武器を構えるなりしたらどうだ？」

シグナムは私の準備が整っていないと思って言ってくる。

「騎士甲冑など私にはないからな。軽く体の回りに魔力や氣を纏ってる程度だ」

さてと私も自分の愛槍を……って…あ！

……忘れてた。蒼月はハラオウンに没収されたままだった。

「アオちゃんまさか……」

「ああ。今更気付いた」

アリスが呆れた目で見てくる。

悲しくなるからやめてくれ。

「じゃあアオちゃん。アームドていきましょう」

「あれはお前への負担が大きいだろ」

「大丈夫です。アオちゃんがなんとかしてくれますから♪」

お前なぁ。ま、信頼してくれてるのは嬉しいが。

「わかったよ。……クラヴィス！」

私はクラヴィスを自分の中から取り出し、巨大化させて白銀の剣へと変化させる。

「アリス！」

「はい！」

「「アームド・イン！！」」

クラヴィスとアリスが光に包まれる。

「何なんだ……それは？」

光が治まると、そこにアリスはおらず蒼銀に輝く剣が蒼の手に握られていた。

「アームドユニゾン。アリスとクラヴィスが融合した姿だ」

髪の色が昨日のような水色ではなく、藍色からサファイアに変わった蒼が答えて蒼銀のクラヴィスを構える。

「さて、説明も済んだことだ始めようかシグナム」

「いいだろう。烈火の将シグナム。参る！！」

蒼銀　ＶＳ　烈火

２人の戦いの火ぶたが切って落とされた。

一方なのはやＦＷ陣達はというと、モニターで２人の戦いを見ていた。

「ユニゾンデバイスって魔導師以外ともユニゾンできるんですか？」

クラヴィスとアリスが融合した姿を見てエリオが疑問を口にする。

「う～ん？どう思う、シャーリー」

なのははモニターを操作している眼鏡を掛けた女性に聞いた。
シャリオ・フィニーノ二等陸士。
六課のロングアーチスタッフ兼デバイスマイスターで、ＦＷや隊長達のデバイスを整備をしている人物である。

「わかりません。リイン曹長も八神部隊長や副隊長以外とはユニゾンしたことないらしいですし」

「私のお兄ちゃんにもユニゾンデバイスがいるんですど……あんなことした試しが無いみたいだそうです」

シャーリーに続きスバルが答える。

「そっかぁ」

「アリスさんを調べさせてもらうのは……」

「蒼が絶対に怒るから無理…かな？」

なのはは昨日のことを思い出したのか、一瞬ブルッと震えた。

「あ！副隊長が仕掛けるみたいよ」

その場にいた全員がティアナのティアナの言葉を聞き、モニターに見入った。

シグナムの斬撃が目の前に迫り、剣が振り下ろされる。
私はそれを受けず弾かずに、受け流す。
何故“受け流す”のか。
それはアリスに負担が架かるからだ。

アームドユニゾンはクラヴィスとユニゾンすることで、アリス自身が武器になるものだ。

この利点はアリスが自在にクラヴィスの形状を変化させることができるので、グリモワール第2章の項目が使い易くなること。
逆に難点は2つ。
1つは武器のダメージが直接アリスに伝わるので、最悪アリスが大怪我をする場合があること。
もう1つは、戦闘中にグリモワールのリリード（ｒｅｒｅａｄ）ができないことだ。

ここでグリモワールとリリードについて説明しよう。
ｒｅｒｅａｄとは、英語での意味通り“読み返し”ということである。
グリモワールは様々な技、術、魔法の類の記録が登録されている魔導書だ。
特性は頁の技の発動。及び技の登録だ。
後者は、技のデータを解析してグリモワールにその技を登録することをいう。
そして前者は、登録されている頁の技を私が理解することで発動させることをいう。

ただし、発動した場合問題が起こる。
それは、技の発動直後に私がそれに関する記憶を失うこと。
つまり、１つの頁につき１回しか発動できないということだ。
再び頁の技を発動するには、グリモワールを読み返し（リリード）、再び技を理解する必要がある。
だが、これを戦闘中に行う暇などあるはずがない。
そこで、私はアリスとノーマルのユニゾンしている時にはアリスにリリードしてもらっているのだ。
だが、アームドユニゾンの時はアリスにリリードしてもらうことができないのである。

リインフォースはグリモワールの管制人格だからリリードはできない。
ただし、どの頁を使ったかは教えてくれるから戦闘終了後に消費した頁は読み返しているのだがな。

長くなったがこれがグリモワールやアームドユニゾンについての、大体の説明だ。

と、読者様に説明している間にもシグナムは切り掛かってくる。
受け流す。また受け流す。
受け流されてばっかりで耐え切れなくなったのか、シグナムは一旦距離を取る。

「レヴァンティン！！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』

レヴァンティンの付け根から薬莢らしきものが排出され、刃に炎が纏わり付く。

「紫電一閃！！」

そして私に飛び掛かり、上段の構えでレヴァンティンを振り下ろした。

「第１章　２３項　ヴィント・フリューゲル！！」

クラヴィスで受ける訳にもいかないので、飛び上がって回避する。

『氷の巨塊　（アイス・ド・アース）！！』

「第２章　３８項　爆鳳烈羽（ばくおうれっぱ）！！」

そして空中からクラヴィスをシグナムに向け、そこからアリスは巨大な氷の塊を撃ち出す。
私はヴィント・フリューゲルから、刃となった蒼光の羽を撃ち出した。

シグナムは『氷の巨塊』を飛んで避ける。が、避けた先には刃の羽が迫っていた。

「レヴァンティン！！」

再び薬莢が排出される。

『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ（シュランゲフォルム）』

レヴァンティンの刃が鞭のように伸び、刃の羽を全て打ち落とした。

「チッ、やるなシグナム」

「お前達もな」

シグナムが笑っている。……ああ！つまりこいつはバトルマニアか。

「だが、負けはせんぞ！ハァッ！！」

シグナムは鞭となったレヴァンティンを振りかぶった。
蛇の如き刃が私達に迫る。

「アリス！フォルム・ランス！」

『はい！』

クラヴィスが剣から槍へと姿を変える。

「第２章　２２項　鬼牙（オーガ）……百烈撃！！」

槍の形態から私は高速連続突きを繰り出してレヴァンティンを弾いた。

「何だとっ！？」

「まだまだぁ！第２章　３４項　爆裂大雷蛇ァ（ばくれつだいらいじゃ）！！」

槍に紫電が纏わり、私は蛇を模した稲妻を放つ。
雷の蛇は光輝きながらシグナムに迫る。

「くっ！飛竜…一閃！！」

シグナムは弾かれた刃を素早く戻し、レヴァンティンを振り下ろして巨大な衝撃波を放った。
雷の蛇と衝撃波は相殺され消滅し、辺りが黒煙に包まれる。

「くっ！何も見えん！」

「私は見えてるぞ」

「ッ！？」

「第2章　27項　超傷心蹴撃　（ハートブレイクストライク）！！」

私は黒煙の中から飛び出し、魔力を纏った跳び蹴りを放つ。
跳び蹴りが当たった部分にハートマークが現れ、蹴りの威力が全て伝わりシグナムを地面に叩き付けた。

ズガァァァン！！

シグナムが叩き付けられた場所からは煙が上がり、どうなったかわからない。

「やったか？」

『いえ……来ます！！』

煙が晴れると、そこには弓を構え、魔力の矢を番えたシグナムが立っていた。

「まずい！アリス、フォーム・バレット！！」

私はクラヴィスを拳銃へと変える。間に合うか？

「翔けよ、隼！」

『Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ！！（シュツルムファルケン）』

掛け声と共に炎の矢を撃ち出した。

「第３章　３０項　超電磁銃（レールガン）！！」

私も雷を纏った銃を構え、雷の弾丸を撃ち出した。

雷の弾丸と炎の矢。

それは私とシグナムの間で大爆発を起こした。

「「「「シグナム副隊長!!」」」」

大爆発を見てＦＷ陣がシグナムの安否を心配する。

「シャーリー！」

「映像を切り替えていますが……どれも煙しか映ってなくて……あ！映像出ました!!」

徐々に煙が晴れ、２人の姿が映り出されてゆく。

勝負の結果は……

「私の勝ちだな。シグナム」

蒼は剣に戻したクラヴィスをシグナムの首元に突き付けていた。

ギリギリだったな。体に纏わせる魔力を一気に増やしてダメージを減らさなかったらどうなっていたことやら。

「ああ。私の負けだ」

そう言って、シグナムは騎士甲冑を解いた。

私もアームドユニゾンを解き、クラヴィスを戻す。

「蒼、強いなお前は」

「お前も強かったぞシグナム」

「これほど強いならば背中を預けることもできるかもな」

「それはどうも」

「……一つ聞いていいか？何故お前はそんなに強い」

その問は、肉体的な意味だろうか。それとも心理的な意味だろうか。
いや、この場合は……

「大切な家族を守る為。もう大切な人を傷つけない為」

過去、私のせいで兄さんが傷ついた事実は変わらない。
だから、もう傷つけるようなことはしたくない。そんな思いだった。

「なるほど……それは正しい強さだな。……またいつか模擬戦してくれ」

「ああ。いつでもとは言わんがな」

「すまないな」

蒼銀　ＶＳ　烈火。

勝者は草薙　蒼とアリステラという結果で終わったのであった。

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「どーもー、作者です。土日にマーク模試で更新できませんでした」

ギ「確か今週も英倹受けるから日曜更新が無理なんですよね？」

Ｋ２「うん。でも今週は面談期間だから午前中で学校が終わり余裕があるので、金ｏｒ土曜日までには３０話を投稿できたらいいなと思っています」

エイ「それでは、用語と技紹介です」

アームドユニゾン
・アリスがクラヴィスとユニゾンを行った姿
・剣から槍や銃、杖など自由に武器の形状を変化させることができる
・ただし、武器のダメージは全てアリスのダメージになってしまう
・ユニゾンであることは変わらないので、蒼の髪の色も若干変化する
・クラヴィスとユニゾンを行えるのはアリスのみで、リインやエイジスには不可能である
・形状モデル（剣）はキングダムハーツ２の「アルテマウエポン」

『氷の巨塊　（アイス・ド・アース）』
・使用者　アリス
・内容　　名の通り巨大な氷の塊を打ち出す技
・元ネタ　『ＭＡＲ』のギロムのビック・アイス・ド・アースから

『超電磁銃（レールガン）』
・使用者　蒼
・内容　　電磁力を発生させ、雷を帯びた魔力弾（砲撃に近いが）を撃ち出す技
・元ネタ　「Ｂｌａｃｋ　Ｃａｔ」の『電磁銃』と「とある魔術の超電磁砲」の『超電磁砲』を組み合わせました

エイ「以上です」

烈「む？あと４つあったはずだが？」

ギ「なんで説明しないんですか？」

Ｋ２「え～っとグリモワールの第２章は、ぶっちゃけ他のアニメや漫画の技なんでオリジナルではないからです」

烈「読者様は元ネタを理解してくれるのか？」

Ｋ２「さすがに無理と思うので作品は紹介します。今回使ったのは、『ＳＤガンダム三国伝』と『舞－乙ＨＩＭＥ（漫画ｖｅｒ）』になります」

エイ「これらは本編中での描写の通りの技となっております」

Ｋ２「三国伝は土曜午前１０時１５分からアニメがやってます。そちらを参考にして下さい」

ギ「説明事項も終わりましたので次回予告です」

エイ「次回、第３０話　再開」

烈「しばらく俺達空気だったからな。久しぶりに本編に登場するぞ」

ギ「それでは」

烈／ギ／エイ「「「また次回！！」」」

～～３０万アクセス＋α記念雑談～～（前書き）

遂にアクセス数が３０万を突破しました。

本当にありがとうございます。

～～３０万アクセス＋α記念雑談～～

Ｋ２「総合アクセス３０万人突破！！
ユニーク３４０００人突破！！
総合評価３３０ポイント突破！！
お気に入り登録件数１３０件突破！！
本当にありがとうございます！！！」

烈／蒼／ア／エイ／リ『３ばっかりぃぃ！！！』

Ｋ２「いいじゃん！！嬉しいじゃんこんなに読んでくれる人がいてくれて！！」

烈「まぁそうだけどな」

ア「今回の雑談は草薙一家＋作者でお送りいたします」

蒼「本編中では、過去の兄さんを除いて私以外リインフォースの存在を知らないが、今回は雑談なので気にしないでくれ」

リ「頭に直接話し掛けるのもなんだからな。この場では実体化している」

エイ「リインちゃんにそっくりです」

ア「リインちゃんよりは大人の女性みたいですね」

烈「さてと。作者、この作品って始まってからどれくらいだ？」

K2「えーっと。4ヶ月と半分くらいかな」

リ「随分経ったな。よくもまぁそんなに続けられたものだ」

蒼「昔に比べたらましだろ」

ア／エイ／リ『昔？』

K2「うっ！」

烈「作者はここで連載を始める前に、フォレストで小説を書いていたんだ」

蒼「小説の内容はともかく、まぁアクセス数が少なかったんだなこれが」

エイ「それってつまり……」

ア「途中で書くの止めたんですか？」

K2「……はい、そうです。1日のアクセス数が3人とかだったから、書いてて虚しくなっちゃって」

烈「話はけっこう考えていたのにな」

リ「だから、アクセスが多くてさっきあれほど喜んだのだな」

K2「だって30万だよ。フォレストの方は4桁いかなかったし」

ア「なら、この作品きっちり完結させて下さいね」

K2「更新速度は週1程度ですが、完結させるつもりではいますので」

烈「ならばよし」

蒼「んじゃあ特に話すこともないし……この作品でこ没設定でも暴露していくか」

エイ「没設定ですか？」

リ「かなりありそうだな」

K2「否定できないからなぁ」

ア「じゃあ最初は～～～」

黒い穴から蒼月と白い日本刀が出てくる。

リ「これは？」

ア「蒼月はアオちゃんの愛槍ですが、白い刀は兄様の愛刀の予定だったそうです」

烈「ああ。居合の為か。……意外と軽いな」

エイ「これが没になったのはどうしてなんですか？」

Ｋ２「刀じゃ定番過ぎると思ったからねぇ。意外性を狙って烈は曲絃師にしちゃったからいらないかなって」

蒼「ちなみに、銘は『白月（しろつき）』だった。
　さらに、蒼月と白月は、実はロストロギアだったという没設定もある」

ア／エイ『ええッ！？』

Ｋ２「その時は《機能》を考えてなかったからね。だけど《機能》を考えついてから没にした」

リ「白月は『天叢雲（あまのむらくも）』。蒼月は『伊都尾羽張（イツノヲハバリ）』というロストロギアだったな」

烈「日本神話か」

Ｋ２「２人の苗字が草薙だったからね。じゃあ……次はこれかな」

いきなり天井からライトが現れ、烈を照らす。

烈「……俺？」

Ｋ２「正確に言うと、没になった能力ね」

エイ「それって本来の能力の方ですか？」

リ「『????』のやつだな」

K2「そ。《機能》の正式名称のやつね」

蒼「で、何なんだそれは？」

K2「1つは属性操作。もう1つは天候操作」

烈「前者はありきたりだな」

エイ「後者はウェザーのガイアメモリみたいなものですか？」

K2「そう。前者はありきたりだから没にした。面白みがないからね。
後者は天候なのに土を操るという矛盾が発生したから没」

リ「なら本当の能力は何なのだ？」

K2「それはいずれ本編で」

蒼「没ネタはまだあるが、いつまでも話し続ける訳にもいかんからな」

ア「それでは今回の雑談もこの辺で……」

K2「と言いたいところですが、読者の皆様にお知らせを2つ」

リ「1つではなく2つなのか」

烈「何をするつもりだ？」

K２「ではまず１つ目。番外編についてのアンケートを取りたいと思います。内容はこちら」

アンケート：番外編でどんな話がよいか

？：烈と誰かのデートの話
？：訓練校編での日常話
？：訓練校編での模擬戦話
？：１～３以外の話がいい
？：番外編やらなくていいから本編の更新を優先しろ

？の場合は誰とがいいか
？の場合はどんな話がいいかも書いて下さい
番外編を書くのが決まった場合、７月中の投稿を予定しています

K２「以上１つ目になります」

蒼「……私やアリス出番なくね？」

K２「３話続けて主人公達が空気だったので」

烈「３０班メンバー、特にジュレスに比べたらましだがな」

エイ「あわわ。じゃ、じゃあ。もう１つは何なんですか？」

K２「じゃあ２つ目。この作品のキャラクター人気投票を行おうかと思います！！」

烈／蒼／ア／エイ／リ『人気投票！？』

K２「ある程度出したいキャラクターも出したからここらへんでやろうかなって」

蒼「まぁ、後のオリキャラ登場はそれなりに先の話で、全員敵側だからな」

K２「詳しい内容はこちら」

キャラクター人気投票

・自分の好きなキャラクターに1～3位までの順位を付けて、感想覧か活動報告に書き込んでください
・1位が3点。2位が2点。3位を1点として集計いたします
・オリキャラ7名＋登場した原作キャラが対象になります
・また、何故そのキャラを選んだのか理由も書いて下さい
これからどのようにキャラを描いてゆくか参考にいたしますので理由が無い場合は、真に勝手ですが無効とさせていただきます
・結果発表は7月上旬を予定しています

K２「以上。人気投票の内容となります」

ア「締め切りは？」

Ｋ２「アンケートと人気投票どちらとも、６月２５日金曜日までとさせていただきます。
　両方でなく片方だけでもかまいません。読者様の投票待ってます」

リ「ではお知らせも終わったことだ。終わらせるとしよう」

烈「ああ。読者の皆様、これからも、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～紅闇の少年と機人の少女～、をよろしくお願いいたします」

蒼「この場で読んでくれている読者の皆様に感謝申し上げます」

ア／エイ「「それでは！」」

烈／蒼／ア／エイ／リ『次回もよろしくお願いします！！』

～～30万アクセス＋α記念雑談～～（後書き）

今回書いたアンケートと人気投票については、活動報告の方でも書いておきます。

感想か活動報告のどちらかに書き込んで下さい。

たくさんの書き込み待ってます。

第３０話　再会（前書き）

土曜の夜に投稿するはずだったのが深夜になってしまいました。

申し訳ありません。

第３０話　再会

ピ、ピピッ、ピピピッピ

コンソールを叩く音がデバイスルームに響く。
ウインドウが現れては消え、消えては現れることが続く。

「アオ早いねぇ～～。デバイスについては基本的なことしか教えてないのに」

傍にいるシャリオ――――いや、シャーリーが話し掛ける。

「元々機械工学系の分野は得意だからな」

「エッ！？でもアオってまだ１５でしょ！？」

「なめるなよ。私は９歳の時に義手を造ったんだぞ」

ちなみに今私が何をしているのかというと、蒼月をデバイスへと魔改造中（笑）だ。

この前のシグナムとの模擬戦の後、ハラオウンから蒼月を返してもらったのだ。
ちなみに高町曰く模擬戦の結果によると、私の戦闘能力を魔導師ラ

ンクで現すとSランク相当らしい。
技連発したからか？だが、大技なんてほとんど使ってないぞ。
ほとんどの大技はグリモワールの解錠と詠唱が必要になるからな。
閑話休題。

話は戻すが、何故蒼月を改造しているのかというと、私が自分専用のデバイスを持っていない（アリスは別、というか私はアリスのロードじゃない）からだ。
クラヴィスはあくまで私の《機能》だし、蒼月は単なる槍だ。
アームドユニゾンを行えばクラヴィスはデバイスに近くなるが、アリスの負担を考えると積極的に行いたいものではない。
さらに、六課の存在意義（ちなみに八神とハラオウンから聞いた。不信な部分だらけだったがな）から考えると、戦闘が頻繁に起こることは間違いない。
そんな訳で、蒼月を改造して私なりのいずれ起こる戦闘への準備をしているのだ。

「そういえば、アオの魔法ってミッド式？それともベルカ式？」

ふと、シャーリーが聞いてくる。

「一応ベルカ式みたいだが、ミッド混合のハイブリットらしいぞ？実際、私は魔法なんて使ったことないんだが」

「エエッ！？」

「？　言ってなかったか？グリモワールもクラヴィスも私の固有能力だって」

「聞いてないよぉ～～～！」

《高町なのはやはやて達にくらいにしか言ってないんじゃないか？》

《そうだっけ？》

そんな会話をしながらも、私はコンソールを叩き続ける。
デバイスコアの埋め込みと待機モードの設定は既に終わった。
今、打ち込み続けているのは数種類の武器構造データだ。
レヴァンティンの武装変化を参考にして、多機能可変型のアームドデバイスにする予定だ。

《他にも、グリモワールとの直接リンクもしないとな》

《だが、リンクしたとしても第４章以降は解錠しないと発動できんぞ。第３章の砲撃系も、一部は詠唱破棄不可能だ》

《記憶の方も無理か》

《無理だな》

ま、とりあえず完成させるか。
順調に進めば昼頃にはできるな。
午後の訓練でテストしてみるか。

その頃、アリスはというと――――――

普段の小さな姿とは違い、スバルと同じくらいの身長になった姿で走っていた。

ビシュ！ビシュ！ビシュン！！

「ハッ！」

オートスフィアから高速で撃ち出された魔力弾をバックステップとバク転で回避する。

ビシュン！ビシュン！

回避しても直ぐさま次の魔力弾が放たれる。

アリスは近くの支柱に回り込んで魔力弾を躱す。

だが、支柱の傍に設置されたオートスフィアが機動し魔力弾を撃ち出してきた。

ビシュン！！

「ッ！『雪星の鏡　（ゲフローレンシュピーゲル）』！！」

翳した左手の掌から正六角形の氷の鏡が現れ魔力弾を弾き返し、魔力弾を撃ったオートスフィアを破壊した。

すると同時に、背後から5つのオートスフィアが現れる。

「『撃ち貫く氷柱　（アイシクル・スナイプ）』！！」

オートスフィアに気付き、今度は右手を翳して5つの氷柱（つらら）を撃ち出した。

氷柱で貫かれたオートスフィアは爆発する。

「…アリスさん」

「すごい」

走りながら見ていたエリオとキャロはアリスの戦闘能力に驚く。

ちなみに2人は少し離れたところでアリスと同じ魔力弾回避訓練をしている。ただし、2人の方が魔力弾の速度は遅いが。

「確かに凄い……でも、これは回避の訓練なんだけどなあ」

フェイトがやや困った表情で言う。

元々この訓練はガードウイングのエリオやフルバックのキャロのように、防御ではなく回避を重視した人の為の訓練である。

だが、アリスは回避はしているが防御や反撃も行っている。

ピピーーーーッ!!

「はい！みんな集合!!」

なのはが笛を鳴らし、みんなを呼ぶ。

「なのはが呼んでるね。エリオ、キャロ、アリス。集まろうか？」

「「「はい！」」」

フェイトに言われて3人は訓練を止め、フェイトの元へと走っていった。

ピピーーーーッ！！

「はい、じゃあ午前の訓練終了！

なのはが再び笛を鳴らし訓練終了を告げる。
さっきの呼び出しの後、ＦＷ陣対隊長陣の模擬戦を行ったため、ＦＷ達はみんな息を切らしている。
アリスは模擬戦には参加せず、いつの間にか普段のサイズに戻っていた。

「はいお疲れ。個別スキルに入るとちょっときついでしょ？」

「ちょっと……と言うか……」

「その……かなり」

ティアナとエリオが肩で息をしながら答える。

「フェイト隊長は忙しいから、そうしょっちゅう付き合えねぇけど、あたしは当分お前等に付き合ってやるからな」

「あ…ありがとうございます」

ヴィータの言葉にスバルは苦い顔をしながらも返事を返す。

「それからライトニングの2人は特にだけど、スターズの2人もまだまだ体が成長している最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように」

「体を壊したりでもしたらいけないですからね」

フェイトの言葉にアリスも続ける。

まあアリスはユニゾンデバイスなので体を壊すということはないだろうが。

「「「「はい」」」」

「じゃ、お昼にしよっか？」

「「「「はい！！」」」」

よっぽど疲れたのか、お昼と聞いてＦＷ達は元気に返事をする。

普通は動いて疲れすぎると食欲が起こらないと思うのだが、食べないと午後の訓練もきついのだろう。

座り込んでいたＦＷ陣は立ち上がり、隊長達と一緒に隊舎へ向かっ

て歩きだした。

隊舎の入口の側まで来たところで、入口からはやて、リイン、シャーリーが出て来た。
3人はなのは達戻ってくるのに気付きみんなの方を向く。

「みんなお疲れさんや」

「「「「はい！」」」」

「はやてとリインは外回り？」

はやての労いの言葉にFW達は返事をし、ヴィータははやてとリインに問い掛ける。

「はいです！ヴィータちゃん♪」

「うん。ちょうナカジマ三佐とお話してくるよ」

自分の父の名前が出たことにスバルは少し驚く。

「スバル。お父さんやお姉ちゃん、お兄ちゃんになんか伝言とかあるか？」

「いえ、大丈夫です」

スバルははやてに伝言を頼むのが悪いと思ったのか、手を横に振って遠慮する。

「リインもエイちゃんとお話してくるです！」

「……エイ？…すみません、私も連れていってもらえませんか？迷惑は架けませんので」

アリスはエイジスの名前に反応する。
自分の妹の名前に。

「？　別にええけど」

「ありがとうございます！」

そう言ってアリスははやてとリインと一緒に車に乗り込んだ。

はやては2人が乗り込むのを確認するとエンジンを掛ける。

「じゃあはやてちゃん、リイン。いってらっしゃい」

「ナカジマ三佐やギンガ、烈によろしく伝えてね」

フェイトは烈の名前を出したが、アリスはエイジスのことで頭がいっぱいで烈の名前は耳に入らなかった

「うん」

「行ってきま～す！」

そして車は烈とエンジンのいる１０８部隊の隊舎へと向けて走り出した。

しばらく車は走り続けると、緑の多い１０８部隊の隊舎へとたどり着いた。

リインとは途中で別れ、アリスははやてに付いて行ったので、現在ははやてと一緒に部隊長室にいる。

「新部隊、なかなか調子良いみたいじゃねぇか」

はやてと向かい合って座っているゲンヤが話し出す。

「そうですね。今のところは」

「しかし、今日はどうした？古巣の様子見にわざわざ来るほど暇な身でもねぇだろうに」

「まな弟子から師匠へのちょっとしたお願いです」

「お願いねぇ。ところで、そこの嬢ちゃんは？」

ゲンヤはアリスの方を向いて問う。

「六課で保護してる次元漂流者の子です」

「アリステラと言います。あの、エイがここに居ると聞いたのですが……」

「エイ？　ああ、それなら……」

ビイーーー

言いかけたところで、部屋のブザーが鳴る。
ブザーの音を聞き、アリスとはやては頭を入口の方へと向ける。

「あいよ」

「失礼します」

ドアが開くと、お茶が乗った盆を持ったギンガとその肩に座っているエイジス。そしてリインが入って来た。

「ギンガ!!」

「八神二佐! お久しぶりです」

はやては指揮官研修以来のギンガとの再開に喜ぶ。
それに対して、アリスは――――

「……エイ?」

「ふぇ?……おねーちゃん?」

「エイィーー!!」

「おねーちゃーん！！」

アリスとエイジスはお互いに抱き合う。
他の４人は状況についていけてないようである。
そんな時――――――

「失礼します。ゲンヤさん、ただ今戻り……アリス？」

烈が部隊長室に入って来た。

「に……兄様ーーーー！！」

アリスは烈を見ると同時に烈に抱き着いた。
フルサイズの大きさになって。

「兄様兄様兄様兄様ぁ！！」

「アリス？えっ？ええっ！？」

烈もアリスがいることに驚き混乱している。

「なんでここに居るのーーー！！！」

烈の絶叫が部隊長室に響き渡った。

しばらくしてちょっとした騒動は治まり、現在部隊長室にはゲンヤとはやての2人だけになっていた。

「やっと落ち着いたな。んで、八神。頼み事ってのは」

ゲンヤはギンガが持ってきたお茶を手に取り、話を切り出す。

「お願いしたいんは密輸物のルート捜査なんです」

はやては赤い宝石―レリック―が映ったモニターを出す。

「お前んところで扱っているロストロギアか？」

「それが通る可能性があるルートがいくつかあるんです。詳しくはリインがデータを持って来てますんで後でお渡ししますが」

そこまではやてが話したところで、ゲンヤはお茶を啜る。

「まあウチの捜査部を使ってもらうのは構わねぇし、密輸捜査はウチの本業っちゃあ本業だ。頼まれねぇことはねぇんだが」

「お願いします」

「八神よ。他の機動部隊や本局捜査部じゃなくてウチに来るのは何か理由があるのか？」

「密輸ルートの調査自体は彼等にも依頼してるんですが、地上のことはやっぱり地上部隊が1番良く知ってますから」

「ふん」

ゲンヤははやての理由を聞いてその考えの思惑を考える。

「（可能性としちゃあ戦闘機人絡みになることもあるかもしれねぇってことか）

ま、筋は通ってんな。いいだろう。引き受けた」

「ありがとうございます！」

「捜査主任はカルタスで、烈とギンガはその副官だ。3人共知った顔だし、お前も使いやすいだろ」

「はい！ウチの方はテスタロッサ・ハラオウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと」

そう言ってはやてはお茶を一口飲む。

「お嬢がか。そういや烈も去年からお嬢に情報収集の頼まれ事とかされてたみたいだ」

「なら大丈夫でしょうね」

そう言い会って2人は同時にお茶を飲んだ。

2人が話している間、烈達はというと

「まさかアリスが六課にいただなんてねぇ」

デスクワーク用の机に5人で話していた。
ちなみに余談だが、烈とギンガの机は隣同士である。

「アリスちゃんはエイちゃんのお姉ちゃんなんですね」

「そうですよリインちゃん」

烈とギンガはそれぞれ自分の椅子に座っていて、リインはギンガの机の上に立っている。
エイジスは烈の机にある小さな椅子に座っていて、アリスは烈の肩に座っていた。

「それよりも、兄様がエイのロードになっていたことが意外ですよ」

「んーまぁいろいろあったんだよ」

「アリスさんが烈の妹で、エイはアリスさんの妹かぁ」

ギンガが3人を見比べながら呟く。

「あ！じゃあアオさんが探しているお兄さんって」

「あ、やっぱり蒼も六課にいるんだ」

「はい。いますよ」

「あ、あの蒼さんって？」

エイジスが尋ねる。ギンガも気になるようで烈の方をじっと見てくる。

「俺の双子の妹で、歳は１７……だよねアリス？」

自分がこっちの世界に来た時、時間跳躍と並行世界への移動を行ったためか、自分の思っている通りかわからずやや不安げにアリスに聞く。

「いいえ。１５歳です」

「「「……」」」

「歳の離れた双子になっちゃったですね♪」

「はぁ。ゴメン、ギンガ。今度埋め合わせするから代わりに仕事頼める？」

「いいけど……どこに行くの？」

烈はエイも肩に載せて立ち上がる。

「ちょっと、妹に合いにね」

という訳で

「はい。来ました。機動六課」

アリスとエイジスを連れて烈は六課に来ていた。

「多分、訓練場にいると思いますよ」

「わかった。じゃあ行こうか」

烈はアリスに案内されて、訓練場へ向かって歩き出す。

しばらく海沿いに歩くと、廃都市が見えた。

「あわわ！？海の上に都市があるです！」

「あれ、立体映像なんですよ」

「へぇ～。凄いねぇ」

そのまま、３人は廃都市へと続く道を通って行った。
廃都市へ入ると、爆発音と叫ぶ声が聞こえてきた。

「ヴァリアブルシュート！！」

「アルケミックチェーン！！」

「スバルさん！３体逃げられました！！」

「追うよエリオ！！」

ＦＷ達のガジェット１型との戦闘訓練の声である。

「へぇ。スバルやティアナ、頑張ってるなぁ」

と言っていると

「そこの人危なーい！！」

エリオが烈に叫ぶ。見ると3体のガジェットが烈の方に向かって来ていた。

「えっ！？烈兄！？」

「ヤッホースバル。……スパイラルバインド！！」

烈は3つの魔法陣から魔力絃を発生させガジェットを縛り付ける。ガジェットはＡＭＦを展開し絃を解こうとするが、絃は解けなかった。

「魔力と氣が混ざった絃だからね。そう簡単には破れないよ」

「ウオォォォ！！！」

「ヤアァァァ！！！」

烈の絃に縛り付けられたガジェットはスバルの拳とエリオの斬撃によって破壊された。

「ほぇ～。スバルちゃん凄いです！」

「エリオ君もやりますね」

烈の肩でエイジスとアリスはそれぞれ2人を褒める。

「あ、アリスさん。ありがとうございます」

「久しぶり～エイ～。ところで烈兄。なんでここに？」

「どうしたのスバル？あれ？烈君？」

調度なのはが空から降りて来た。

同時にティアナとキャロもやってくる。

「お久しぶりですなのはさん。それにティアナも」

「あ……うん。久しぶり」

ティアナは烈を見ると、少し頬を赤らめた。

「それで、どうして烈君がここにいるのかな？」

「ああ、それはですね――――」

なのはの質問に答えようとしたところ――

「『突き穿つ（ゲイ）――」

「「「「「ッ！？」」」」」

「――死翔の槍（ボルグ）』！！」

烈目掛けて蒼月が高速回転して飛んできた。

「プロテクション＆『金剛不壊』！！」

烈は防御力を上げた盾で蒼月を防ぐ。

蒼月と障壁はしばらく拮抗していたが、障壁が破壊されると同時に蒼月は飛んで来た方へと戻っていった。

「４年振り……そっちからすれば2年振りの再開なのに、いきなりそれはないんじゃないかな」

烈は蒼月が戻っていった方を向き、蒼月の持ち主であり自分の妹である人物へと問い掛ける。

「……今まで……今まで何処行ってたクソ兄貴いぃ！！！」

烈からすれば４年。蒼からすれば２年。
久しぶりに再開した兄妹であった。

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「遂に再開した兄妹と姉妹！」

ツ「今回のあとがきコーナーは」

ジ「俺達３０班メンバーで」

エ「お送りいたしま～～っす♪」

Ｋ２「おお懐かしい顔触れ」

ツ／ジ／エ「「「誰のせいだ！！」」」

Ｋ２「番外編で出したじゃん」

ジ「俺台詞しかなかっじゃん！！登場してなかったじゃん！！」

K2「それがジュレスの立ち位置なのさ」

ジ「バッキャローーー！！！」

ツ「あ、どっか行っちゃったわ」

エ「ほおっておいていいよね～～～？」

K2「うん。技紹介よろしく」

ツ「はいはい。この2つね」

『雪星の鏡　（ゲフローレンシュピーゲル）』

・使用者　アリス

・内容　正六角形の氷の盾を発生させる。
盾に当たった魔法攻撃は元の方向へ反射される
また、鏡なので設置してダミーや変わり身などにも使える。

読みはドイツ語で直訳して「凍らせた鏡」

『撃ち貫く氷柱　（アイシクル・スナイプ）』

・使用者　アリス
・内容　　複数の氷柱を発生させ撃ち出す技
　　アリスの技の中で最も攻撃速度が速い

エ「以上だよ～ん」

K２「言わずともがな『突き穿つ死翔の槍（ゲイボルグ）』は『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』です。あくまで技のモーションを真似ただけですので、原作レベルの威力はありません」

ツ「にしても、相変わらず技が多いわね」

K２「１番多いのは蒼だけどね。逆にエイジスは１個くらいしかないんだけど」

エ「あたし達も１個しか出てないよ～～～」

K２「本編での登場かアンケートで希望されるかしかないね」

ツ「アンケートと言えば、現時点で４人の方々が投票してくれています」

K２「ありがとうございま～す。逆に人気投票は２人しか投票してくれてないので淋しいです」

エ「約２週間受け付けていますので、どうかよろしくお願いしま～

す」

ツ「それではあとがきコーナーもこの辺で」

エ「次回、第３１話　兄　ＶＳ　妹」

Ｋ２「それでは」

ツ／エ「「まったね～～」」

第３０話　再会（後書き）

一方

ジ「ちくしょーーー！！なんで俺ばっかり損な役割なんだーーー！！」

などと叫んでいたとかいなかったとか。

アンケートと人気投票の投票待ってます。

第３１話　兄　ＶＳ　妹（前書き）

最近伏線というか意味ありげな台詞が多い気が……ちゃんと回収できるようにしないと。

今回烈の本来の能力に触れます。
察しのいい方は気付くかもしれません。

第31話　兄　VS　妹

「つまり烈君の妹ってのは蒼とアリスのことで、蒼が捜してたのは烈君だったんだね」

あのあと殴り掛かってきそうだった蒼を抑えて事情をみんなに説明した。

「そういうことです。なのはさん」

「ったく。兄さんのバカ。いるんだったらいるって言えよな」

「知らなかったんだから無理言わないでね」

アリス、蒼、烈の順に言う。
蒼は文句を言っているが、若干声が嬉しそうである。

「あの……そういえばアオさんそれは？」

キャロが蒼の胸元のペンダントを指差す。
それは、両端が湾曲した金色のリングに蒼い宝石が埋め込まれたものだった。

「これか？さっき完成した私のデバイスだ」

蒼は軽く左手でペンダントを持ち上げる。

「「「「デバイスを造ったぁ！！？」」」」

「アオちゃん速いですね」

「蒼らしいね」

デバイスの知識を得て間もないというのにデバイスを造ったという出来事に、
ＦＷ達は驚き大声を揚げるが、アリスと烈にとってはいつものことのようであっさりと応える。

「ちょうど午後の訓練でテストしようと思ってな。……そうだ。兄さん、相手になってくれ」

「俺？」

「シグナムやハラオウンはいないし、ＦＷ達だと厳しいだろうからな」

「俺はいいけど……なのはさん？」

烈は六課の人間ではないので勝手に決める訳にもいかず、なのはに許可を求める。

「いいよ。ＦＷ達も模擬戦を見るのは良い経験になるからね」

あっさりとなのはは許可を出した。
だが、実際気になるのだろう。烈と蒼のどちらが強いのか。

「助かる。アリスは参加しなくていいからな」

「エイもアリスと一緒にいてね」

「わかりました」

「はいです」

「じゃあみんな、移動するよ」

「「「「はい！！」」」」

なのははＦＷ達とアリスとエイジスを連れて訓練場を出ていった。
訓練場の外からモニターで見るつもりなのだろう。

蒼はなのは達が外に出るのを確認する。

「さて。じゃあ始めようか兄さん」

蒼はペンダントを首から外す。

「わかったよ。お手柔らかに」

烈は腰に提げた鋼閃を両腕に装着する。

「鋼閃！！」

「蒼月改め、八雲！！」

「「セットアップ！！」」

2人はデバイスをセットアップし、光に包まれる。

烈のバリアジャケットは、スバルのものが黒と紅になったようなものを。

蒼のバリアジャケットは、白いハイソックスに白いインナー。指先から肘までである黒い手袋。

そしてインナーの上から黒いチャイナドレスを着た姿だった。

そして右手には蒼月――いや、八雲が握られている。

「壱式『月（げっ）』」

『１ｓｔ　Ｍｏｄｅ　Ｌａｎｃｅ　Ｆｏｒｍ』

八雲から女性の電子音声が響く。

壱式『月』は蒼月とまったく同じ形。つまり十文字槍である。

蒼は『月』の矛先を烈へ向ける。

『それじゃあ始めるよ』

外からなのはの通信。

『５…４…３…２…１…試合開始！！』

なのはの掛け声とともに、２人は駆け出した。

「そういえば、烈さんってどんな人なんですか？」

烈兄とアオの模擬戦が始まったところでエリオが尋ねてきた。

「烈君は元々次元漂流者で、４年前の空港災害の時にこの世界に来たんだよ」

なのはさんがエリオの質問に答える。
そういえばもう４年になるのかぁ。

「訓練校はあたしやスバルと同期で、実技成績トップで卒業したわね」

「その時のポジションはフルバックだったんだけど、実際はどのポジションでも戦えてたんだよ」

ティアの説明にあたしも説明を加える。

「フルバックなんですか！？なのに実技成績トップだなんて、凄いんですね」

同じフルバックだからか、キャロが驚いている。

「今はスバルちゃんのお父さんやお姉ちゃんのいる部隊にいるんです。階級は陸曹長でしゅ」

エイがあたしの頭に座りながら言う。

でも最後噛んじゃったよ。相変わらずカワイイなぁエイは。

「そうなんですか」

エリオも納得したみたいだね。

「でも、烈のランクは陸戦ＡＡ＋。Ｓランク相当のアオには……」

「騎士や魔導師の戦いはランクで決まるものではない」

「「「シグナム副隊長！！」」」

シグナム副隊長いつの間に！！

「おめーら魔法にばっか頼ってっからそんなふうに考えんだ」

「ヴィータちゃん!?」

ヴィータ副隊長も!!

「ふ、副隊長、何故ここに?」

ティアが聞く。エイが副隊長にびっくりして涙目になってる。カワイイなぁ～。あ、アリスが慰めてるよ。

「蒼のデバイスができたと聞いてな。私が相手をしようかと思ったのだが……もう始まっているとはな」

うわーーー。シグナム副隊長らしい理由。

「あたしは交換部隊を連れて帰ってきたところだ」

「お疲れ様。ヴィータちゃん♪」

「ところで、ランクがどうとやらの話だが……」

あ、お説教になるかも。

「あ！アオさんが！！」

キャロの声でその場のみんながモニターを見る。
キャロナイス！！
あたしもそのままモニターを見つめた。
烈兄勝つかなぁ？

「ハアァァァ！！」

蒼が連続で『月』で突き技を繰り出してくる。

「くッ！！」

鋼閃の甲で突きを弾く。一撃はそんなに重くはないけど、回数が多いッ！

くッ、距離が取れない！

自分の得意なレンジを取ろうとするも、突きの猛攻を弾くのに精一杯だ。

けど突然蒼は素早い突きを止め、一瞬で蒼月――いや八雲壱式『月』を下から振り上げるような体制をとった。

「第２章　４８項　――」

『Ｃｈａｐｔｅｒ？　ｐ．４８』

「マズイッ！！」

「――蒼紋猛瀑布（そうもんもうばくふ）！！」

蒼は『月』を下から振り上げ、車輪のように回転しながら走る蒼い衝撃波を放ってきた。

俺は脚力を魔法で強化して跳び上がる。

紅華緑葉は使う暇がないからただの強化魔法だ。

このまま絃で距離を……

「あまい！！弐式『蛇（じゃ）』！！」

『２ｎｄ　Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｉｎｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ』

と思ったところで、蒼は『月』の形状を変化させた。
『月』の柄が短くなり真ん中から2つに分かれ、刃がL字型になる。
そして石突の部分から蒼い魔力鎖が発生し、分かれた『月』を繋ぐ。
『月』と呼ばれた十文字槍から、『蛇』と呼ばれる鎖鎌へと姿を変えた。

「せいやっ!!」

ヒュンッ!!
鎖鎌の片方を投げ付けてきた。
空中では身動きが取れず、魔力鎖が足に絡み付く。

「フォトンブレイド!!ファイヤ!!」

魔力刀を撃ち出して鎖を断ち切る。
そのまま絃を近くのビルに伸ばして、ビルとビルの間の通路らしき場所に着地する。

「参式『砕(さい)』!!」

『３ｒｄ　Ｍｏｄｅ　Ｍｏｒｇｅｎｓｔｅｒｎ(モルゲンシュテルン)Ｆｏｒｍ』

着地直後、蒼が再び攻撃を仕掛けてきた。
今度は2つの鎌が連結し船の碇(いかり)のような形態になる。
魔力鎖は石突の部分から伸びたままだが、その先には刺の付いた鉄球があった。

「ガン○ムハンマーーー!!!」

蒼は鉄球を投げ付けてきた。
だけどその台詞はさすがにどうかと思う。
そんなこと考えてないで避けないと……ってあれ?鉄球が向かってるのは俺じゃなくて……

「ッ!!　紅華緑葉!!」

炎の翼を背に広げ飛び上がる。
飛び上がった瞬間、鉄球はさっきまで俺が立っていた通路を破壊した。

「ロードカートリッジ!!」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』

攻撃を躱したのを見ると、蒼はカートリッジをロードして次の攻撃に備えていた。

「でもこの距離なら……」

「距離を取ったからと言って安心するのは早いぞ兄さん」

「えッ！？」

目の前には両刃の大剣を構えた蒼の姿があった。
あれだけの距離を一瞬で詰めたの！？

「エリオのソニックムーブとやらを使ったのさ。肆式（ししき）『断（だん）』！！」

俺の心を詠んだのか、蒼は疑問に答えてくれた。
直後、『断』と呼ばれた大剣を振り下ろす。

「フォトンブレイド！ザンバー！！」

俺は瞬時に斬馬刀サイズのフォトンブレイドを発生させ大剣を防ぐ。
だが、空中での衝撃を受け流すことはできず、俺は空中から地面へとたたき付けられた。

「「烈（兄）！！」」

草薙という男が叩き付けられた映像を見てスバルとティアナが叫ぶ。
空中では衝撃を逃がす場所がないからな。
しかし……

＜なぁシグナム＞

突然ヴィータから念話が来る。

＜何だ、ヴィータ＞

＜あいつ……草薙だっけ？…どう思う？あいつだろ？ザフィーラが言ってたの＞

ヴィータも私と同じことを考えていたか。

＜戦い方を見てもさぁ、人殺しのようには思えねぇんだよ。でも、ザフィーラが嘘を付くとも思えねぇし＞

＜確かにな。だが、正直何とも言えん。剣を交えれば何かわかるかもしれんがな＞

蒼と戦った時、覇気は感じたが殺意は感じなかった。
槍捌(さば)きも邪道なものは一切なかった。
だが、蒼の兄とやらはどうなのだろうか？
奴の剣は殺すための剣か。それとも違うのか。
本当に人殺しかどうか。いずれ確かめなければならんな。

＜今は様子を見よう。２人の模擬戦の中で何かわかるやもしれん＞

＜わかったよ＞

そう言って、私は再びモニターへと目を向けた。

《やり過ぎたか？》

《烈の身体能力なら問題は無いだろう。それに、烈は魔法を取得しているようだからな》

『断』の柄を肩に担ぎながらリインフォースと話す。

《しかし蒼。何故相手に烈を選んだ？本当の理由は何だ？》

やはりリインフォースはさっきのが建前だと気が付いていたか。

《さっき兄さんはゲイボルグを防いだだろ。だから今の兄さんにどれほどの実力があるか知りたかった。それが理由だ》

あれは結構威力があるんだぞ。
なのに障壁と相打ちだった。
ってこれじゃ私がシグナムみたいなバトルマニアだと思われるな。

《私に嘘をつくな》

ちっ……やっぱりリインフォースはごまかせないか。

《ばれたか。……正確に言うなら、さっきの金剛不壊という技が気になった》

さっきのような嘘ではなくこれは私の本心だ。

《確か……障壁強化の補助魔法だったな。それがどうした？》

《あの技を使う時、わずかだが「機能」の反応があった》

《……待て。烈は本来の「機能」はほとんど使えないはずだ。炎を操るならともかく、それ以外で「機能」が発動するはずがないはずだろう？》

リインフォースの言うのももっともだ。

私は兄さんの義眼に施した封印術を《機能》の核（コア）にも使った。

義眼を封印した結果、兄さんは記憶を失った。

だが《機能》の封印は完全には施せなかった。

それでも大半の能力は封じたんだ。

だから兄さんが使えるのは、副産物である炎の操作だけのはずなんだ。

《……まさか》

《そのまさかかどうかを調べるのがこの模擬戦だ》

そう言って、兄さんが落ちた所を見る。
煙が凄いな。兄さんがどうなったか全くわからな……

「フォトンブレイド！！エレメンタルシフト！！！」

「何ッ！？」

「千紫万紅！！！」

煙の中から無数の炎と氷の刀が飛び出してきた。

《氷……だと？》

「くっ！！やはり封印が！？伍式『崩』！！」

『５ｔｈ　Ｍｏｄｅ　Ｇａｔｌｉｎｇ　Ｆｏｒｍ』

大剣の刃が縦に２つに分かれ脚立になるように折れ曲がり、中からガトリングの砲身が現れる。

「弾幕で……そらっ！！」

ダララララララ！！！

柄の部分に現れたトリガーを引くと、砲身が高速で回転し、小さな魔力弾を1秒に何発も連続で発射する。
魔力弾と炎と氷の魔力刀はそれぞれ衝突し消滅する。

「フォトンダガー！ファイヤ！！」

ッ！？またか！？叩き付けてから押されっぱなしだな。
しかも今度は誘導弾か！？

ダガーの形状の誘導弾の数はおよそ２０。
それに加え左手から魔力絃を撃ち出してきた。
誘導弾と曲絃術の同時使用！？普通は無理だぞ！？
そんなことを考えている間にもダガーと絃は迫ってくる。

「撃ち落とすことは不可能か。……陸式（ろくしき）『劈（へき）』！！」

『６ｔｈ　Ｍｏｄｅ　Ｔｗｉｎｓａｂｅｒ　Ｆｏｒｍ』

『崩』が一旦大剣へと戻り、刃と柄が縦真っ二つに分かれ、一対の双剣へと形を変える。

「第２章　８項　ゴッドスラッシュ・タイフーン！！！」

『Ｃｈａｐｔｅｒ？　ｐ．８』

両手で『劈』を構え、私は高速で回転し竜巻を起こした。
ダガーと絃は全て竜巻に弾かれ霧散する。
だが、回転を止めた時には既に兄さんが炎の翼を広げ、魔力刀を構えて近くまで接近してきていた。

「閃牙ッ！！」

風の如き一閃が繰り出される。
私は『劈』でその居合を防ぐ。

「ザンバーーッ！！」

居合が防がれると兄さんは魔力刀を消し、先程の斬馬刀サイズの魔力剣を作り出す。

「ハアアアアア！！」

まずい！私は『劈』をクロスして魔力斬馬刀を防ぐ。

ガウィィィィン！！！

魔力斬馬刀と『劈』のぶつかり合う音が響く。
クソっ。重いッ！！
だが、兄さんのように叩き付けられたりするつもりはない！！
私は斬撃の勢いを流してからヴィントフリューゲルを展開し、兄さんと距離を取る。

「ロードカートリッジ！！漆式（しちしき）『撃（げき）』！！」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　７ｔｈ　Ｍｏｄｅ　Ｂｕｌｌｅｔ　Ｆｏｒｍ』

八雲が光に包まれると、１丁の黒いリボルバータイプの装飾銃が現れる。

「第１章　４項　アディッション！！スモーク！！」

『Ｃｈａｐｔｅｒ？　ｐ．４．　Ａｄｄｉｔｉｏｎ　ｓｍｏｋｅ　ｔｏ　Ｂｕｌｌｅｔ』

「第３章　１２項　トライデントリボルバー！！」

『Ａｎｄ　Ｃｈａｐｔｅｒ？　ｐ．１２』

ドォン！ドォン！！ドォォンッ！！！

リボルバーが回転し、アディッションで属性を付加した魔力の弾丸を三連続で撃ち出す。
放たれた弾丸は兄さんへと向かう。

「くっ！これで！」

兄さんは魔力斬馬刀を盾のように構えて、刀身で弾丸を防ぐ。
引っ掛かった！！

「何ッ！！」

弾丸が刀身に直撃した瞬間、弾丸から大量の煙が放出された。
兄さんの周辺一帯が白い煙幕に包まれる。

「ッ！何も見えないっ！！」

よし！今のうちに決める！！
私は付近のビルの屋上に降り、八雲の最後の形態に変化させる。

「捌式（はちしき）『閃（せん）』！！」

『８ｔｈ　Ｍｏｄｅ　Ｓｎｉｐｅｒ　Ｆｏｒｍ』

『撃』の砲身が伸び、グリップとスコープが装着される。
私は左手でグリップを握り、右目でスコープを覗き込む。
そして煙幕の中の影を見つけ出す。

「終わらせてもらうぞ兄さん。……狙い撃つぜぇぇ！！！」

『Ｓｔｒｉｋｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

ジャイロ回転を加えた高速のコバルトブルーの魔力弾が『閃』から放たれた。
魔力弾は煙幕の中の影を撃ち抜き、影が消える。
私の勝ちだ。そう思った時――

「キャプチャーバインド！！」

背後から兄さんの声がした。
嘘ッ！！振り向いた瞬間、私に網が覆い被った。

「何だこれ！？網！？」

網から抜け出そうとするけれど、もがけばもがく程抜け出せなくなる。

「俺が所属している部隊で考案した犯罪者逮捕用のバインド。そして――チェックメイトだよ」

兄さんは私の首元に魔力刀を突き付けた。

『そこまで!!勝者、草薙　烈君!!』

高町が試合終了を宣言した。
あ～あ。負けたか。

「大丈夫？　蒼？」

兄さんが魔力刀で網を切ってくれた。
そして左手を差し出す。

「ああ。なんともない」

私は差し出された手を握ろうとした。が、しかし。

ビキッ

「「えっ？」」

ビキビキビキバキーン！！

突然兄さんの左腕の篭手が砕けた。

「え、えぇーーーーっ！！？」

兄さんの絶叫が空に響いた。

「はぁ。鋼閃壊れちゃったな」

今回の模擬戦で無理させすぎちゃったか。

模擬戦終了後、なのはさん達の所に行くとＦＷ達が駆け寄ってきた。

カッコイイだとか凄いだとかいろいろと言われた。

う～ん。さすがに恥ずかしかったなぁ

「まあまあ兄さん。私が新しいデバイス造ってやるから」

蒼が設計図らしきものが映ったウインドウを出してコンソールを叩いている。
もうこっちの世界に馴染んでるよ。
デバイス造ってくれるのは嬉しいんだけどね。
それはともかく。

「ところで、何でひざ枕？」

今現在、俺は蒼にひざ枕しています。
蒼は俺のひざに頭を乗せながらコンソールを叩いている訳です。

「いいじゃないか。久しぶりの兄妹の軽～いスキンシップということで。なんなら抱き着いてやろうか？」

クククと笑いながら言う。
さすがにそれやめてほしいな。
ティアナからの殺気が痛いから。
スバルやエイ、アリスにも羨ましそうな目で見られたし。

「ま、しばらくこのままでいさせてくれ」

「むぅ。わかったよ」

まったく。相変わらずなんだから。でも……いっか。
そして俺はひざ枕を続けるのであった。

《本当にまさかだったな》

《ああ。だが完全に封印が解けた訳ではないようだ》

兄さんのひざ枕で寝てコンソールを叩きながらリインフォースと話す。

《確認できたのは1番と6番か》

《まだ他にもあるかもしれんな。だが、烈は能力が一部解放されていることに気付いてはいないようだ》

《魔法と思い込んでいるか、それとも能力の部分の記憶だけ一部上書きされたか》

《封印弱まっている以上、後者の可能性が高いだろう》

《機能》に掛けた封印と義眼に掛けた封印は同じもの。
同じだからリンクしている可能性もあるな。
片方が弱まれば、もう片方も弱まる。

《どうする。蒼?》

《封印を再び掛けるには、封印そのものが一旦解かれなければならない。そんなことになったら兄さんは暴走するぞ》

《……確かにな。あの義眼はロストロギアだからな。昔も制御できずに暴走したんだ。今の烈が制御できるかどうかわからない》

《それに……また記憶を失わせるのも……な》

《……そうだな》

忘れられてしまったら悲しむからな。
私も、アリスも、エイも。

《とりあえず、しばらく様子を見るとするさ》

《わかった》

……兄さん。優しいままでいてくれよ。
もう昔の兄さんには戻らないでくれよ。
『殺し名』だったあの頃に。
それが、私の望みだから。

そして私は再びコンソールを叩き続けるのであった。

第３１話　兄　ＶＳ　妹（後書き）

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「今回は烈と蒼の模擬戦をお送りいたしました」

ギ「烈が勝った～～♪」

エイ「さすがマイロードです♪」

ア「２人とも凄かったですね」

Ｋ２「それでは技紹介にいきましょう」

『アディッション』

・使用者　蒼

・ページ　第１章　４項

・内容　武器や技に様々な属性を付加することができる技
　今回は煙を付加したが、炎や雷、ＡＭＦの効果等も付加することができる

『ストライクシューター』

・使用者　蒼

・内容　蒼が八雲に登録した直射型射撃魔法
　　ジャイロ回転が加えてある魔力弾で、高い弾速と貫通力を持つ

『キャプチャーバインド』
・使用者　烈／１０８部隊の武装局員
・内容　烈が考案した特殊射撃魔法
　　発射した魔力弾が網の目になって広がり対象を捕縛する。捕まった場合、もがく程体に絡み付くようになっている
　　１０８部隊の武装局員のデバイスは全員にこの魔法が組み込まれており、日々の犯罪者の逮捕に役立っている

Ｋ２「そして今回のネタは、ＳＤガンダム三国伝、ガンダム、Ｇガンダム、デジモンセイバーズ、ガンダム００になっています」

ギ「ガンダムばっかりですね」

ア「完全に趣味ですね」

Ｋ２「ちなみに、ゴットスラッシュ・タイフーンは、Ｇジェネレーションウォーズの設定を使いました」

エイ「えっと……覚醒兵器無効ですか？」

K２「誘導弾がファンネルみたいだったんで。ですが自分の部隊編成にゴッドガンダムはいません（笑）」

ア「ノーベルガンダムはいましたよね」

K２「ノーベルはバーサスでも使っているので」

エイ「そういえば作者さん」

K２「ん？何？」

エイ「蒼さんってみんなにどう呼ばれてるんですか？」

ギ「シャーリーさんはアオって呼んでたし」

ア「シグナムさんは蒼って呼んでますね」

K２「はい。それはこちら

　FW陣＋女性ロングアーチスタッフ→アオ
　隊長陣＋それ以外（エイやギンガやヴァイス等）→蒼

になっています」

エイ「ありがとうございますです」

ア「あとは“さん”を付ける付けないくらいですね」

ギ「そうね～。あ、蒼のデバイス紹介は次回以降になります。烈の新しいデバイスも一緒に紹介しますので」

K２「能力紹介もその時に。あ、まだまだアンケートと人気投票受け付けていますよ。
　では次回予告行ってみましょう。今回は趣向を変えてみました」

「六課の合同捜査主任、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

「よろしくね。ブリッツキャリバー」

「『雷煌！！』」

「貴方は……貴方はまさかっ！？」

次回、第３２話　Ｄｅａｄ　Ｓｔｒｉｋｅｒ

ギ「なんですか今回の予告？」

K２「Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！風にしてみました。まだ３２話は書いていませんが、あんな台詞を使う予定です」

ア「それではまた」

エイ「次回もよろしくお願いしましゅ！！」

～～第1回人気投票結果発表～～（前書き）

今週本編が更新出来そうにないので、結果発表の方を投稿いたします。

ではどうぞ。

～～第1回人気投票結果発表～～

はやて
「第1回人気投票、結果発表や～～～～～！！！」

ドンドンパフパフ！！

リイン
「司会ははやてちゃんとリインでお送りするですぅ～～！！」

K2
「何故なら本編でも出番少ないし、今回の人気投票でもランク外だからだ」

はやて
「フレース・ヴェルグ！！！」

K2
「ァボブベラッ！！！（死亡）」

リイン
「作者は死んじゃいましたので、早速結果発表に移るですぅ」

はやて
「その前に、投票してくれた読者の皆様ほんまにありがとうございます……私にも入れてほしかったで」

リイン
「……リインもです。……気を取り直しまして、第5位からです」

はやて
「第5位は2人。得点は1ポイントや」

リイン
「第5位は!!ダルルル

ジュレス
「可哀相って言わないでくれ！！」

はやて
「（鬱憤晴らしにランクインしたキャラをいじるで！！）」

K2（天の声）
「（だがしかし、それが彼女に悲劇をもたらすとは思いにもよらなかった！！）」

リイン
「では、読者様からの理由をお答えしていくです。まずはティアナ！」

ティアナ
「わ、私！？」

はやて
「何々、『ツンデレっていいよね』、やて？」

ティアナ
「べ、別に……嬉しくなんかないんだからね！！」

ジュレス／はやて
「「ツンデレキターーーーー！！！」」

ティアナ
「うっさい！！」

ジュレス
「グボッ！……なんで俺だけ……ガク」

リイン
「あー、死んじゃったです」

はやて
「ほんまやなぁ。んで、ジュレス君の理由は、『何故か親近感がわく』、やて？」

リイン
「投票してくれた方も苦労してるのかもしれませんですね。では、続いて第４位！！」

ティアナ
「殴っておいてなんだけど……ジュレスはほおっておくのね」

はやて
「そのうち勝手に復活するやろ？気にせんで進めるで。第４位の得点は２ポイント。……また２人やなぁ」

リイン
「第３位までは２人ずついるです」

はやて
「それでは、第４位！！ダルルルルルルルルルルルルルル……
……」

リイン
「ダルルルルルルルルルル……」

リイン
「ダダン！！」

はやて
「シスコンの眼帯主人公、草薙烈君！！
管理局の白い悪魔、なのはちゃんや！！」

烈（黒）／なのは
「「はやて（／ちゃん）。Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」」

はやて
「えっ！？ちょっ！？なのはちゃん？烈君？堪忍！！堪忍してや！！……キャーーー！！！」

リイ／ティ／ジュ
「「「（（（（（；゜Д゜））））ガクガクブルブル」」」

～～～しばらくお待ち下さい～～～

リイン
「気を取り直しまして理由の発表ですぅ！！」

はやて
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ティアナ
「部隊長があの調子なのであたしが。烈の理由は、『主人公ですし、弄られてて面白いです』、だって」

烈（通常）
「むう。そんなもんかな」

ジュレス
「主人公なのに４位とかザマァ！！」

烈（黒）
「死に様は選ばせてやる。１番と１７番、及び２６番解放」

ジュレス
「申し訳ございませんでした！！！（土下座）」

ティアナ
「バカはほおっておきます。じゃあ次はなのはさんです」

なのは
「私だね。どんな理由かな？」

はやて
「……やっと立ち直れたで。え～と、なのはちゃんの理由は、『ＳｔＳの最終回で感動した』、やそうや」

なのは
「こんなコメントが来てるんだから、ゆりかご戦では私も活躍するよね？作者さん？」

リイン
「作者は最初の方で死んじゃったですよ。……あれ？お手紙です」

はやて
「何々、『ゆりかご戦は、烈、蒼、スバルがメインの予定なので、なのはの活躍は……。ｂｙ作者』」

全員
「「「「「……」」」」」

なのは
「ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてくるの」

ヒュン！！（アクセルフィンで飛び上がる）

ティアナ
「あ！なのはさん！……行っちゃいましたね」

はやて
「しゃあないから続けるで」

リイン
「第３位です。得点は３ポイントです」

はやて
「これで２人ずつは最後やで」

リイン
「では第３位！ダルルルルルルルルルルルル……」

リイン
「デデン！！」

はやて
「脳筋巨乳ヒロイン、ギンガ！！
噛み噛みロリ、エイジスや！！」

ギンガ
「脳筋って言わないでください！！」

エイジス
「はわわわわわわ！！？（耳まで顔真っ赤）」

烈（黒　※これ以降全て黒）
「はやて。ふざけ過ぎると……」

はやて
「わかった。わかったからその物騒な大剣仕舞ってな？な！？」

烈

「……チッ」

ギン／ティ／エイ
「（ちょっと怖いけど……カッコイイ／／／／／／）」

ジュレス
「俺と違ってモテやがって。憎たらしいったらありゃしねぇぜ」

リイン
「ケッ。テメェ等顔赤くしてんじゃねぇよこんちくしょーーです」

はやて
「り、リイン？どないしたん！？」

リイン
「ナンデモナイデスヨー（棒読み）」

はやて
「さ、さよか？　ほな、理由にいくで。まず、ギンガ」

ギンガ
「（ドキドキ）」

はやて
「え～、『この作品のギンガがとても好き。個人としても好きなキャラだから』、だそうや」

ギンガ
「ありがとうございます！」

K２（天のｒｙ）
「（家のギンガは純粋に烈に恋している乙女です）」

ティアナ
「（勝てないの！？やっぱりヒロインじゃないあたしはギンガさんに勝てないの！？）」

リイン
「次はエイちゃんです。『恥ずかしがり屋な所、噛んだ所がかわいい』、だそうです」

エイジス
「あ、ありゃがとうございみましゅ！！！」

ギン／はや／ティ
「「「カワイイィィ！！！」」」

烈
「ふふ。愛らしいな」

エイジス
「ふぇぇぇ！！？？（超顔真っ赤）」

ボンッ！！！

エイジス
「きゅ～～ぅ」

リイン
「エイちゃんが恥ずかしすぎて倒れちゃたですぅ！！」

烈
「エイ、しっかりしろ（エイジスの額に氷水を当てながらひざ枕する）」

エイジス
「はうッ！！？　きゅぅ（気絶）」

リイン
「エイちゃーーん！！」

ギンガ／ティアナ
「「（いいなあ、エイ）」」

ジュレス
「とんでもねぇぜ」

はやて
「しゃあない。次いこか。ジュレス君、代わりによろしく」

ジュレス
「女性の頼みなら喜んで！！　第2位、得点は5ポイントだぜ」

はやて
「第2位は！ダルルルルルルルルルルルルルルルル……」

はやて
「ダダン！！」

ジュレス
「銀髪巨乳のお姉様！！初代祝福の風、リインフォースさんだ！！」

リインフォース
「再び実体化しての登場だな」

はやて
「リインフォースーー！！！」

リイン
「おねーちゃーん！！！！」

ジュレス
「いっただきまーす！！（ルパンダイブ）」

烈

「スパイラルバインド」

ギンガ
「ナックルバンカー！！」

ティアナ
「ファントムブレイザー！！」

ジュレス
「アブルベッ！！（死亡）」

リイン
「縛られて、吹き飛ばされて、砲撃に飲まれちゃったです」

リインフォース
「良い連携だな。……はやて、動きずらいので離れてください」

はやて
「ええやんええやん。はぁ、リインフォース胸おっきいなぁ。えいっ！」

モニュ

リインフォース
「は、はやて！？胸を揉まないでください！！」

はやて
「別に減るもんじゃあらへんやろ～？ほれほれ～～」

リインフォース
「そういう問題では……あっ…！」

烈
「……（鼻血を押さえている）」

ギンガ
「（烈にならあんなことされても……って何考えてるの私！！）」

リイン
「（胸なんて脂肪の塊ですぅ！貧乳はステータスです！！希少価値です！！！）」

ティアナ
「部隊長いい加減にしてください！！なのはさんを呼びますよ！！」

はやて
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。調子こきました」

烈
「で、理由は何なんだ？（鼻血は収まっている）」

リイン
「え～とですねぇ。投票したみなさんが殆ど同じような理由です」

烈／ギン／ティ
「「「同じ？」」」

はやて
「『『リインフォースは俺の嫁!!!』』、『好きなキャラだから』」

リインフォース
「それは……うれしいような、うれしくないような……」

リイン
「お姉ちゃん!!嫁だからって理由で票が入るなんてうらやまし過ぎるですよぉ!!」

リインフォース
「そ、そうか?…すまない」

はやて
「さて、遂に第1位の発表や!」

リイン
「得点は7ポイントです。てゆーか、もう誰だかわかりますよね?」

はやて
「それでは第1位!!ダルルルルルルルルルルルル……」

リイン
「ダダンッ！！」

はやて
「貧乳の魔女、草薙蒼や！！」

全員
「「「「「あ」」」」」

はやて
「あ、あれ？わたしマズイこと言ってしもた？（汗）」

蒼
「封縛」

はやて
「ちょっ！？蒼！？えっ解けへん！？このバインド全然解けへん！！！」

蒼
「安心しろ、八神。……跡形もなく消し飛ばしてやるから」

はやて

「ちょっ！？ヘルプ！！誰かヘルーープ！！！」

全員
「「「「「無理　（だ／です）」」」」」

蒼
「咎人達に滅びの光を。星よ、集え。全てを撃ち抜く光となれ」

はやて
「ちょーーー！！！それは……」

蒼
「貫け、閃光」

はやて
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！許してや！！！」

蒼
「スターライトブレイカー」

はやて
「イヤヤァァァーーーーーーーーー！！！」

蒼
「ふぅ。すっきりした」

全員
「「「「「（蒼／アオに貧乳は禁句だ（です））」」」」」

Ｋ２（天ｒｙ）

「（ちなみに胸の大きさは」

大　シグナム＞フェイト　リインフォース＞ギンガ＞なのは　シャマル＞中

中　はやて　エルフィ＞スバル　アリス＞小

小　ティアナ　ツバキ≧エイジス＞＞＞＞＞無

無　蒼≧ヴィータ　キャロ　リイン

といったようになっています。原作キャラは自己解釈です）」

蒼

「今無性に作者を殴りたくなった」

烈

「最初の方で死んだらしい。諦めろ」

リインフォース

「はやては気絶してしまったので、ここからは私とリインが司会をしよう」

リイン

「アオさんの理由はですね、

『クールな感じが好み』

『クールでかっこいい。けど可愛い』

『烈を大切にしている』

『魔女な所』

『いきなり烈にゲイボルグをブチ咬ました所』

だそうです」

蒼
「読者の皆様ありがとう！！よし、この作品のタイトルを『～紅闇の少年と機人の少女～』から『～黒き魔導書を携えし蒼き少女～』に変更しよう」

全員
「「「「「却下　（だ／です）」」」」」

蒼
「む？いいではないか。最近兄さんの視点も少ないし、何より私の方が主人公っぽいと思うのだが？」

烈
「ｏｒｚ」

ティアナ
「だ、大丈夫よ烈！」

ギンガ
「次回の本編は１０８サイドだから！」

リインフォース
「まだ表に出られるだけましだ。私は本編では蒼以外と話せんのだぞ」

リイン
「お姉ちゃんも大変です」

蒼
「とまぁそんな訳で、第1回人気投票は私こと草薙蒼が優勝だ」

リイン
「みなさん本当にご投票ありがとうございました」

リインフォース
「では最後に、人気投票と同時に応募した番外編のアンケートの結果発表だ」

リイン
「アンケートの結果は……」

ギンガ／ティアナ
「「……ゴクリ」」

リイン
「烈さんとティアナのデートに決定いたしましたです！！」

ティアナ
「やったーーーーー！！！」

ギンガ
「ｏｒｚ」

烈
「ギンガ、そんなに落ち込まなくても」

ギンガ
「いいもんいいもん。ティアナと比べたら私の方が烈と一緒にいる時間が長いんだから！！何より一緒に住んでるから！！」

蒼
「少し幼児化してるぞ」

リインフォース
「まあ、そっとしておいてやれ。番外編の投稿は7月中を予定している」

リイン
「ただ、今回採用されなかった番外編の内容はいずれ書くかもしれませんので」

烈
「そういえば、４番で投票してくれた内容で良いネタが浮かんだとか作者が言っていたな」

蒼
「まあそもそも今回の番外編の投票は、本編の硬っ苦しい内容の息抜きのつもりだったらしいからか」

Ｋｒｙ

「（質問やリクエストとか殆ど無いからね。読者の方々はどんな番外編書いてほしいのかわかんなかったんだよ）」

リインフォース
「それでは、この雑談を兼ねた人気投票の発表もこの辺に」

リイン
「約3名の方が被害に遭いましたが気になさらないで下さいね」

烈
「それでは」

蒼
「みなさん」

全員
「「「「「「次回もよろしくお願いします」」」」」」

～～第1回人気投票結果発表～～（後書き）

次回の本編更新は来週以降になります。

来週、期末テストなので。

番外編　草薙烈追跡日記　弐さつめ（前書き）

はい、すみません。更新が遅れました。

期末が終わったのに、進研模試があったんです。

……明日も本来休みなのに模試の数学がありますが（Ｔ－Ｔ）

ではアンケートで取った番外編です。

なんかデートの部分少ないかもしれません。

それではどうぞ。

番　外　編　草薙烈追跡日記　弐さつめ

とある休日の日のこと。

現在の時間は午前８時４５分。

首都クラナガンにある時計台にて烈は人を待っていた。
服装は白いシャツにジーンズ。肌寒い季節だからか黒いパーカーを着ており、髪の結びも解いて左目も隠している。

「約束は９時だけど、女の子は準備に時間が掛かるもんだよね」

自分の左手首に付けた腕時計を見て呟く。
しばらく待っていると

「ゴメン烈、待った？」

私服姿のティアナが走ってきた。
上は白を基調とした斜めに赤いラインが入った長袖のシャツに、袖の無いオレンジのジャケット。下は膝辺りまである紺色のスカートである。
（漫画版Ｓｔｒｉｋｅｒｓ１巻のティアナの私服をイメージしてください。この作品だと１７話の部分の話です）
さらに、髪は普段のツインテールではなくストレートである。

「ううん。待ってないよ。じゃあ行こうか？」

そう言って烈はティアナと一緒に歩き出した。

烈とティアナの後方５０ｍ地点。

建物の陰から２人を覗く顔が４つ。

スバル、エルフィ、ジュレス、エイジスである。

……仕事はどうした。

「今日は休みだよ～ん」

「誰に言ってんだ？」

「2人とも声が大きいよ」

「気付かれちゃうですよ」

2人をスバルとエイジスが咎める。

「悪ぃ悪ぃ。でもあの2人がデートねぇ」

ジュレスが謝りながら意外だと言うようにぼやく。

「なんかティアがテーマパークのチケット手に入れたらしくて、昨日ひっそり烈兄に連絡してたんだよねぇ」

「夜遅かったです。私が寝ようとしていた頃でした」

「なるほど～～。そういえば、スバルは今もティアナと一緒なんだよね～～」

エルフィは何故スバルが2人のデートのことを知っているのか納得する。

「でもよぉ……あの2人にはこのこと知らせない方がよかったんじゃね？」

ジュレスは手を握り、親指で後ろにいる人物を指差す。
その方向にスバルとエルフィとエイジスが顔を向けると――――

「羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい」

「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい」

呪詛のような言葉を呟くギンガ（上）とツバキ（下）がいた。

「あははは……」

「ギン姉が……怖い」

「（（（（（；゜Д゜）））））ガクガクブルブル」

幼なじみを見て乾いた声で笑うエルフィとギンガに怯えるスバル。
エイジスは震えている。

「……あ！追い掛けねぇと見失っちまうぜ！！」

「そ、そうだね～」

「うん。追い掛けよう！！」

「は、はいです～～！！」

4人は2人から逃げるように走り出し（エイジスはスバルの肩に座っている）、烈とティアナを追い掛けていった。

烈とティアナが来たのはとあるテーマパークである。
2人は現在――

「キャーーー！！」

「ワァーーー！！」

絶叫マシンに乗っている最中である。
なんでも、ミッドでもっとも速いジェットコースターだとか。
しばらくしてマシンが止まり2人はアトラクションから出る。

「目が……回ったぁ」

「大丈夫？　ティアナ？」

「うん。……なんとか」

と言いつつも、ティアナは少しふらふらしている。
烈はティアナを近くのベンチに連れていき座らせる。

「なんか飲み物でも買ってくるよ。何がいい？」

「え～と……紅茶で」

「わかった」

そう言うと烈は飲み物を買いに行ってしまった。
残ったティアナはというと

「（烈と2人っきり……やっぱ恥ずかしい）」

ティアナは前日のことを思い出していた。

～～回想～～

陸士３８６部隊　女子寮　スバルとティアナの部屋にて

……どうしよう。

あたしは悩んでいた。
悩みの種は随分前に手に入れたとあるテーマパークのペアチケット。
今年の春にスバル達が参加した格闘技大会。
その準優勝の景品だったチケットだ。

なんで参加していないあたしがこれを持っているのか。

答えは単純。貰ったのだ。準々決勝で烈と戦った人からだ。
なんでも「私よりも貴女が持っていた方がいいと思うから」とのこと。
貰った時は嬉しかった。
でも既に貰ってから半年以上が過ぎてる。

なんでかって？
その……さ、誘うのが恥ずかしかったのよ！！

そこ！！笑うな！！

しかたないじゃない！訓練校卒業してからあまり会う機会がないんだから！
それに……烈はあの時のこと覚えてないみたいだし。

そんな感じに悩んでいたら、あっという間に月日は流れてしまって、気が付いたら貰ったチケットの期限切れが１週間前になっていた。

焦ったわ。ただでさえギンガさんに遅れを取っているのに、せっかくのチャンスをこのまま逃してしまうと思って。
ヒメミヤ？　あいつには負けてないわ。だってあいつ影薄いし。

すぐに予定を確認してみると、運良く明日は休暇になっていた。
だけど、彼の方は休暇なのかどうかもわからないし、誘ってもＯＫしてくれるかわからない。

どうしようか悩んでいると、既に午後１１時。
あーーーもう！　駄目元でもいい！
そう思って、烈に連絡を入れた。

プルルル。プルルル。
コール音が数回鳴る。
5回程鳴った時。

『はい。草薙です』

繋がった。

「あ、烈？　あたし。ティアナよ」

ドキドキしながらもあたしは話し掛ける。

『ティアナ？　どうしたのこんな時間に？』

「ご、ゴメン、こんな遅くに。あ、あのさ……明日空いてる？」

『明日？　特に予定はないよ』

「そう！？　ならさ……ちょっと付き合ってくれない？」

あたしは恐る恐る尋ねた。

『んーー、いいよ』

「ほんと!?」

『うん』

「じゃあ、明日9時にクラナガンの時計台に来て」

『わかった。じゃあおやすみ』

「お、おやすみなさい」

そう言って、あたしは通信を切った。

……よかったぁ～～～。断られなかった。

よし！　明日も早くことだし早く寝よ。

そしてあたしはベッドに入った。

興奮してなかなか寝付けなかったけどね。

～～回想終了～～

「ティアナ。飲み物買ってきたよ」

昨日のことを思い出したところで烈が戻ってきた。
両手に紙コップを持っている。

「はい。紅茶」

「ありがとう」

あたしは差し出された紙コップを貰って飲む。あったかい。
烈も隣に座って買った飲み物を飲んでいた。どうやらコーヒーみたい。

「そういえばさティアナ」

烈が突然聞いてきた。

「なんで俺を誘ったの？　こんなところだったらスバルと行くかと思ったのに」

「えっ!?　それは……その……いつもスバルと一緒だから、たまには他の誰かと出掛けたいなぁ～って」

くっ！　素直に烈と一緒がよかったなんて言えない！　だって恥ずかしいじゃない！

「ふむ……そっか」

そう言うと、烈はコーヒーを飲み干してコップを握り潰した。
納得してくれた。けど間が気になる。

「じゃ、今日1日楽しもうか？　せっかく誘ってくれたことだし」

「あ……うん！」

あたしも紅茶を飲み干し、烈と一緒に歩き出した。

今マイロードとティアナさんはテーマパーク内のゲームセンターに来ているです。

私達は朝からずっと2人を追い掛けています。
スバルちゃんやエルフィさんは楽しそうなんですが、ギンガとツバキさんが怖いです。

「そこっ！！」

「あ！　1機やられた」

今2人はガンシューティングをやっているみたいです。
ティアナさんはデバイスも銃型ですし得意みたいですね。

「そこだ！」

「甘い甘～い」

「これで！」

「ダアァーー！！　また点取られた！！」

こっちではホーネットさん　ＶＳ　スバルちゃん&エルフィさんでホッケーをやっています。
ちなみに――

「ハアアアアア！！！」
「ヤアアアアア！！！」

ギンガはパンチングマシーン。
ツバキさんはモグラ叩きをやっています。
２人共高得点なのですが……やっぱり怖いです。

あれ？　よく見るとマイロードとティアナさんがいない。
見失っちゃうです！

「みなさ～ん！　マイロード達見失っちゃうですよ～！！」

大きな声で言ったつもりなんですけど、ゲームの機械の音が大きくてみんなになかなか聞こえませんでした。
マイロード見失っちゃうですよ～～～（涙）！！

あっという間に時は過ぎてしまいもう夕方になっていた。
今日1日いろんなところを烈と一緒に回ったけど……楽しかったなぁ。

「あ、そうだ」

帰り道、駅に向かう途中、烈が何か思い出しかのように言った。
ポケットからなにやら包みを取り出す。

「はいこれ」

「……これは？」

「今日1日楽しませてもらったお礼」

「えっ！？」

包みを開けてみると、十字架の模様が入ったリボンだった。

「たいしたものじゃないけど、ティアナに似合うかなって思って」

それを聞いた瞬間、顔が真っ赤になった。

「ティアナ？」

「あ！　……な、なんでもない！　その……ありがとう」

「クス。どういたしまして」

その後、駅に着き烈と別れた。

部隊の寮に戻ってから貰ったリボンを付けてみた。

髪型をツインテールにして鏡を見る。

……今度からこれ使おう。

そう思って私はリボンを外してベッドへ潜り込んだ。

今日の嬉しさもあったせいかなかなか眠ることができなかった。

が、次第に興奮も落ち着き、ゆっくりと眠りに就いた。

～～余談～～

駅でティアナと別れた烈はというと……

「さて……いつまで付いてくる気？」

「「「「「「「！！？」」」」」」」

烈は最初から尾行されていることに気付いていた。

「あのこれはそのーーー」

「興味があったと言うか」

「にゃはは～～～」

等と言い訳するスバル、ジュレス、エルフィであるが

「やれやれ。尾行するのが趣味なのかな？」

烈は“良い笑顔”で言う。
だが目は笑っていない。

「れ、烈？」

「ま、マイロード？」

「あの……これはね」

ヤバイと思いギンガは言い訳しようとするが

「ちょっと、“お話”しようか？」

「「「「「い、イヤーーー！！！」」」」」

駅全体に６人の悲鳴が響いたとか。
今回尾行した６人は、烈を怒らせてはいけないという教訓を得たのであった。

番　外　編　草薙烈追跡日記　弐さつめ（後書き）

～～～あとがきコーナー～～～

ア「はい。今回はアンケートの結果のティアナさんとのデートのお話でした」

蒼「兄さんって……鈍感？」

Ｋ２「鈍感じゃないんだけどね。ティアナのことは友達と思っているので」

ア「ギンガさんのことは？」

Ｋ２「本人に聞いてみようか。おーい、烈ーー」

烈「何だ作者。今、情報収集で忙しいんだが」

Ｋ２「いや烈はギンガのことをどう思っているのかと」

烈「そうだな……仕事では信頼できるパートナーで、あと……家族みたいな感じだな」

蒼「私は実の妹なんだが」

烈「だって両親やお前以外の一族は――」

Ｋ２「ストッーーープ！！　ネタバレになるのでそこまで」

ア「兄様達の過去って何があったのか全然知らないんですけど」

蒼「知らない方が良いかもしれんぞ」

ア「それってどういう――」

K2「おっと、今日のあとがきコーナーもここまで！！」

ア「ちょ！　作者さん！？」

烈「次回もよろしく頼む」

蒼「それでは～～」

ア「勝手に終わらせないで下さい！！　あ～も～！　次回もよろしくお願いします！」

番　外　編　草薙蒼の異世界放浪記（前書き）

なんかふとネタが浮かんだので。

蒼のネタ技連発の理由みたいな話ですかね。

あと今回ネタ技も説明していますが、次回からも蒼が使うネタ技は解説を入れた方がいいでしょうか？

番外編　草薙蒼の異世界放浪記

午前中の訓練を終え昼食を取った後、蒼は訓練場近くの芝生にてグリモワールを読んでいた。

「リリード……面倒だなぁ」

《しかたないだろう。訓練中はアリスとはユニゾンしていないのだから。面倒なら最初から使うな》

「手厳しいことを言うな」

そう言いつつグリモワールのページをめくる。
午前の訓練で使った技は５つだったな。

え？　その程度ならさっさと読むことができるだろ、だって？

ところがどっこい。グリモワールに登録されている技のデータは日本語で書かれている訳ではないのだ。
英語、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語、漢文、古文ｅｔｃ……酷いページだとデジモン語だったり、鳥や動物の絵みたいな文字もある。

学校なんか行ったことないから全て独学だ。
その結果、なんとか英語はマスター。ドイツ語はそこそこ。漢文古文も……厳しいがなんとか。あとはデジモン語を少し。

グリモワールは見た目の厚さに対して量が多い。リインフォースも全ての技を把握していないとか。

《お前がなんでもかんでも登録するからだろう。この間も烈の紅華緑葉を登録したではないか》

リインフォースのツッコミはスルー。

まぁもっともなのだが。

基本私は読めるページ且つ興味のあるページしか読まない。

まあ読めないページを読もうとする奴なんていないだろうが。

今回のは2つ英語、2つがドイツ語、最後の1つがデジモン語だ。

面倒だと思いつつも、午後も訓練があるため私はグリモワールをめくり読む。

「あれー？　アオ、何やってんの？」

最後の1つを読み終えたところでスバルがやってきた。

「技の読み直しだ。もう終わったがな」

そう言ってページを適当にぺらぺらとめくる。

……なんか面白い技はないだろうか？

「その本って、なのはさんのディバインバスターとかフェイト隊長のフォトンランサーとかも使えるの？」

「ああ。まあな」

その2つは最初から登録されていたがな。

「じゃあ、あたしのウイングロードやティアのフェイクシルエットは？」

「フェイクシルエットは登録すればできるが、先天的なものやレアスキルだと、登録できる場合とできない場合がある。その違いは私にもわからん」

《登録したまま放置されている技もあるがな》

五月蝿いぞ。リインフォース。

「へぇ～」

「なんだ、使ってみたい技とかあるのか？」

「え～っと……なのはさんのスターライトブレイカーとか」

「……お前にその技が向いているかはともかく、読んでみるか？」

「いいの！？」

「使えるかは別だがな」

そう言って、グリモワールをスバルに渡す。

えっ？　何で消えないのかって？　実は、半径５ｍ以内にあれば誰が持っていようが問題ないんだなこれが。

新しい玩具を与えられた子供のように、スバルはグリモワールを読みページをめくる。

だがめくるにつれて、表情が「うぇ～」とでも言い出しそうなものになっていった。

「……む、難しい」

そう言って、ページを開いたままグリモワールを返してくる。

「……ミッドに近い言語もあるんだが」

私はそれを受け取る。

いったい何のページを読んでいたんだ？

開かれたページを見て読む。

ちなみに英語だった。
……ミッド語って英語に似てるはずだよなぁ。

「何々……第６章９９項『Ｐａｒａｌｌｅｌ　Ｇａｔｅ』？　ほう？」

どうやら異世界に跳ぶとこのできる技らしい。
なにやらおもしろそうだな。

《なんでこんな技があるのかはともかく、蒼、お前まさか》

そのまさかだ。

「スバル、出掛けてくると高町に言っておいてくれ」

「えっ？　アオ？」

まあ兄さんは見つかったが、単独行動の権利は有効なままだからかな。別にかまわんだろう。
私はグリモワールを右手で持ち左手を前に翳して目を閉じる。

「時と次元の狭間よ、過去と未来の因果よ、我が元に扉を開け！
第６章　９９項　パラレルゲート！！」

詠唱を唱えると、目の前に外淵が虹色の黒い穴が現れる。

（ゲートオープン！　魔界へゴー！！）

今変な電波が聞こえたな。

とりあえず、デビチルなんて覚える人はいないと思う。

（ならば……選ばれし子供達、出動！！）

それも古い。デジモンはテイマーズ辺りまではよかった。だが、クロスウォーズは納得いかない。ジョグレスはどうしたジョグレスは。

まあいい。とりあえず――

「レッツゴー！」

私は穴に飛び込んだ。

「たっだいま～～」

「「「何処行っていた（の／んや）！！！」」」

戻ってきて早々、３人娘に怒鳴られる。

えっ？　ホントに何処行ってたって？
いちいち話しているとグダグダになると天の声がな。

代表的な場所を挙げると

「「さあ、お前の罪を数えろ！」」なんて言う、２人で１人の仮面ライダーの世界。

体に火の玉のような痣を持つ１２人の少女が、高次物質化能力と呼ばれる力とチャイルドと呼ばれる召喚獣を使役して戦う世界。

「武装錬金！！」と叫び、六角形の金属を武器に変えてホムンクルスと戦う世界。

紛争根絶を掲げる私設武装組織が世界に喧嘩を売った世界。

最後に行った世界では、額に赤いひし形の宝石が埋め込まれた紫の竜と旅をしたなぁ。
最終的には立派な究極体に成長したぞ。アルファの名を持つ聖騎士へ。

いやはやいろいろな技を集められたから楽しかったぞ。

３ヶ月程行っていたが、こちらでは３日しか経っていないようだな。

「単独行動の権利は一応まだ有効なのでな」

「……まあええ。せやけど、シグナムがずっと模擬戦したがったで」

「なら今から行ってやるとしよう」

そう言って、私は訓練場へと向かう。
さて、新しい技や能力を試させてもらおうか？

1時間後。

訓練場にて、蒼とシグナムはぶっ倒れていた。

ティアナ曰く、

「アオが技を連発して、最後にシグナム副隊長に止めを差そうとしたんですが、攻撃が決まった直後に2人とも倒れました」

とのこと。

《アルファ・イン・フォースは耐えられないだろうに》

蒼の中でリインフォースは呆れたように言ったとか。

どっとはらい。

番外編　草薙蒼の異世界放浪記（後書き）

～～あとがきコーナー～～

K２「どーもー、作者です」

烈「……」

ア「……」

エイ「……」

蒼「……プ」

K２「笑うなぁ！！！」

蒼「ククク……ハッハッハッハッ！！！　いや無理だ！　ツボに入った！！　アハハハハハ！！！」

烈「あれは……なあ」

エイ「痛そうです」

ア「説明いたしますと、作者さんは通学途中に自転車で滑って正面から転んでしまったんです」

K２「５針ほど縫いました」

蒼「だがその部分にガーゼを貼った姿がなｗｗｗ」

烈「ちょび髭が生えているような姿になってしまったという訳なんだ」

Ｋ２「クラスのみんなに大爆笑されましたよええ」

蒼「ああ可笑しい」

Ｋ２「うるせぇ！！　俺だってどうやったら自転車で正面から転ぶのか知りたいわ！！」

ア「さて、作者さんの怪我はどうでもいいので説明にいきましょう」

Ｋ２「え？　酷くｎ――」

エイ「こちらです！！」

「Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ　（アルファ・イン・フォース）」

　他者の戦闘時間（記憶）を巻き戻し自分が何をされているのかわからぬままに攻撃を繰り返すことで、無敵の力を得る事ができる能力。

　そのため他者には攻撃が最後の一撃の一瞬の光景しか見ることができない。

一言でいえばとんでもないチート能力。
ただし、蒼はこれを5秒しか使えず、肉体が耐えられないため使用後は体が全く動かなくなってしまうという難点がある。

蒼「アルファモンというデジモンの能力だ」

烈「代表的な所の世界は、仮面ライダーW、舞－ＨＩＭＥ、武装錬金、ガンダム００、デジモンX、といったものだ」

蒼「他にも行ったがな」

K２「その世界でどんなことをやったか書こうかと思ったのですが、凄くグダグタになると思ったので止めました」

エイ「多分、原作とか見てない人にはわかんなくなっていたと思います」

ア「そうですね。それでは今回もこの辺で」

烈「次回は３２話か？」

K２「一応そのつもりだけど、やっぱり完全オリジナルの話って難しいなぁ」

蒼「まあ兄さんは１０８部隊所属だからな。六課にいない以上、話はオリジナルになるからな」

K2「頑張ります。それでは～～～」

第３２話　Ｄｅａｄ　Ｓｔｒｉｋｅｒ（前書き）

最初の部分が１番苦労しました。む、難しい。

気付いたら約９０００字もありました。オリジナルの話ですからこれくらいがいいんですかね。

今回、原作を一部改編しています。その内容は本編で。

あと、デバイス紹介は明日投稿できればと思っています。

作ったのは蒼なのでツッコミは無しで（笑）

あと今回出て来る一般隊員の名前、ＳＥＥＤやＤｅｓｔｉｎｙを知っている方ならわかると思います（笑）

第32話　Dead Striker

部屋の外から朝を知らせる烈の声が耳に響く。

「ギンガーー。朝だよーー」

「んーーーまだ眠い……」

昨日は遅くまで起きてたからもうちょっと寝てたいな。

「今日は合同捜査の日だよ。フェイトさんも来るし」

さっきよりもちょっと声が近いて聞こえる。

「あと5分だけ……」

「……しょうがないなぁ」

声は更に近いていた。

というよりすぐ傍から声は聞こえた。

「……えっ？」

突然の浮遊感。
うっすらと目を開くとすぐ目の前に烈の顔があり、私は烈にお姫様抱っこされている状態になっていた。

「まったく。何度言っても起きない子は……」

そう言って、烈は顔を近づけてくる。

えっ？　ちょっ？　何この状況！？
まさかキス！？
でも烈なら……むしろ。

そう思い私も顔を近づける。

私と烈の唇が重なりそうになった。

が

ドンッ！！

私は床に落とされた。

「あ痛っ！」

床に落ちた衝撃が体に伝わる。

「いたた……烈！なんで落と……？」

起き上がって私は烈に文句を言おうとするが、烈はいなかった。

「……あれ？烈は？」

「ギンガーー。今何か落ちた音がしたけど、何かあったのーー？」

烈がいないことを疑問に思っていると、下の方から階段を登る音とともに烈の声が聞こえた。

……落ちた音？

そう聞いて、私は辺りをよく見回す。

場所は私の部屋。私は寝間着を着ていて、今ベットの真横の床に座っている。

そして真横には枕が落ちている。

つまりさっきのは

「……夢かぁ」

さっきのは夢だったのかぁ。

……今思い出すと恥ずかしいな。

でも……夢の中でもいいから烈とキスしたかったなぁ。

「ギンガ？大丈夫？」

コンコン、とドアをノックする音がしてドアの外から烈が私に聞いてきた。

「あ……うん。大丈夫。なんともない」

「そう？ならいいけど。朝ごはんもう少しでできるからね」

「うん。わかった」

そう言うと、烈は階段を下りていった。

「う～ん。よしっ」

私は立ち上がりってクローゼットへ向かい、陸士部隊の制服を取り出して着替え始める。

今日はフェイトさんとの合同捜査。頑張ろう！！

時と場所は移り、１０８部隊隊長室。
そこには烈とゲンヤの2人がいた。

「最近の調査の様子は……こんなところですね」

「スマンな」

ゲンヤがモニターに写る報告書を見て言う。

「スカリェッティについての情報はフェイト執務官にも頼んでいるのですが……」

「スカリェッティの野郎は広域指定の犯罪者だ。そう簡単に見つかるたぁ思ってねぇ」

報告書の内容はスカリェッティについてのものであった。
烈は現在戦闘機人事件に深く関わっていると思われるスカリェッティについて調べているのである。

「それと、行方不明になっているゼスト隊の隊員についてですが…
…未だに全く手掛かりが掴めません」

烈はコンソールを叩きモニターを切り替える。

そこには3人の男女が映し出されていた。

「……そうか」

ゼスト隊。それは、ゲンヤさんの奥さんでスバルとギンガのお母さんであるクイントさんが所属していた部隊である。

8年前にゼスト隊はある任務に赴き壊滅した。
何の任務であったのかは管理局の記録にも残ってはいない。
隊員は全員死亡。しかし、3人だけ行方不明と“なっていた”。
“なっていた”と言うのは、既に管理局側からは殉職扱いにされているからだ。
その3人とはモニターに映っている。
隊長のゼスト・グランガイツ。メガーヌ・アルピーノ。そして、クイント・ナカジマ。
ゲンヤさんは墓は建てたが、クイントさんの遺体は発見されていないのに殉職扱いされたことに納得はしていないようだ。

「すいません。お役に立てなくて」

「そんなことねぇさ！　お前は充分やってくれてる。むしろ、お前に頼ってばっかりで悪いくらいだ！！」

事実、大半の情報を集めてくるのは烈である。
ゲンヤも情報収集をしていない訳ではない。
ゲンヤは部隊長を勤めているため仕事も多く、あまり余裕がないの

である。

「そう言ってくれるなら安心です」

と言ったところで

『失礼します』

ギンガから内線による通信が来た。

「おう、どうしたギンガ？」

『フェイト執務官がいらしたのでカルタス二尉がミーティングを行うと』

「そうか。烈、報告書は読んでおく。行ってこい」

「はい、わかりました。知らせてくれてありがとうね、ギンガ」

『ううん。気にしないで。それじゃ』

ギンガは内線を切った。

「ではゲンヤさん。失礼します」

「ああ」

そして、烈は隊長室を出て行った。

「機動六課の合同捜査主任、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

フェイトが敬礼して言う。

それに対して、烈やギンガ達も敬礼を返す。

現在、ミーティングルームにて、１０８部隊の主な捜査官、フェイトと六課の局員が数人集まっている。

「１０８部隊の合同捜査主任、ラッド・カルタス　二等陸尉です」

お互いの主任同士が握手したところで全員席に着き、フェイトが説明を始めた。

「今回の合同捜査は、私達六課が確保を目的としているレリックの密輸ルート捜査です」

フェイトは背後のモニターにレリックの映像を映し出して説明を始める。

レリックについて説明の内容は、以前はやてとフェイトが本局で話したこととだいたい同じであった。

「説明は以上になります」

映像を消してフェイトが言う。

「それで、前回八神部隊長がこちらに訪れた時にお渡ししたデータですが……」

「それなら草薙曹長とエイジスが」

カルタスが烈とエイジスを見て言う。

「調べたのは殆どエイなんですが……エイ、みんなに説明できる？」

「ふぇ！？　え、えぇ～っと……」

ミーティングルームにいるみんなは、全員エイジスを見ている。
その視線にエイジスが耐えられるはずがなく

「む、無理ですぅ～～～！！」

涙目になり烈に抱き着いた。

「ゴメンね。よしよし」

烈は慰めるようにエイジスの頭をゆっくり撫でる。
その光景を見て、その場にいた人全員は

（（（（（（かわいい！！））））））

と思ったとか。

「では俺から説明します」

烈は席を立ち上がって手元のコンソールを叩き、モニターを映し出す。

「リインフォース？空曹長から渡された密輸ルートの候補データの中から可能性が高いルートを照合し、その付近の取引場所、及ぶ近辺の関わりのありそうな組織についてのデータを引き出しました」

モニターには、いかにも怪しげな海岸付近の倉庫や地下通路、廃棄された工場が表示される。

「現時点でレリックに絡んでいる可能性のある組織は３つ。いずれも小規模な組織です。小規模であるからこそ目立ちませんからね」

「なるほど。流石だね」

フェイトが烈を褒める。

「調べてくれたのはエイですよ。俺じゃありません」

「ぅ～～～」

烈がフェイトの賛辞を否定し、ゆっくりエイジスの頭を撫でると、エイジスは目をつむって嬉しそうな顔をしている。

「では、３つ部隊に分けてそれぞれの組織を押さえるという形で」

「そうですね。それが良いでしょう」

カルタスの提案にフェイトは頷く。
他の１０８部隊や六課の局員達も頷いている。

「では部隊を率いるのは、私、ハラオウン執務官、そして草薙曹長の３人で」

「了解」

「わかりました」

烈、フェイトの順に頷く。

「部隊編成は後に知らせる！　では、各員準備に取り掛かるように！！」

「「「「「了解！！」」」」」

ミーティングルームの局員が前回立ち上がって敬礼し、ミーティングは終了した。

「烈、ギンガ。ちょっといいかな？」

烈とギンガがミーティングルームから出ようとしたところ、フェイトに引き止められた。

「どうしました？　フェイトさん？」

「２人に渡すものがあってね」

「「　？　」」

２人が頭に？のマークを浮かべると、フェイトは２つのペンダントを取り出した。

片方は、縦長の六角形で紫色の宝石のペンダント。

もう片方は、両端が湾曲した銀色のリングの中央に真紅の宝石がはめ込まれたペンダントだった。

「これは？」

ギンガは紫色の宝石のペンダントを烈は真紅の宝石のペンダントを取り、ギンガが尋ねる。

「ギンガのはリインが言っていた捜査協力のプレゼントだよ」

「あ、ありがとうございます！」

「どういたしまして。それはスバルのデバイスと同型で、ちゃんとギンガ用に調整してあるからね。名前は、ブリッツキャリバーだよ」

「よろしくね。ブリッツキャリバー」

『よろしくお願いします。相棒』

ギンガの呼び掛けに、女性の電子音声、ブリッツキャリバーが応える。

「烈のは蒼が烈のデバイスを壊しちゃったお詫びだって」

「……蒼？」

聞き慣れない名前を聞き、ギンガは首を傾げる。

「六課にいる俺の妹の名前ね」

烈が説明するとギンガは納得したように頷く。

「その子の名前は、紅月（あかつき）だって。
前のデバイスのデータをフィードバックしてるから、問題無く使えるはずだって。
あとは……壊れないように特殊な金属を使ったとか言ってたよ？
確か……クロンデジゾイドだとかオリハルコンとか言ってたけど」

「そんな金属をどこから持ってきたんだか。
……わかりました。ありがとうございますフェイトさん」

「お礼は蒼に言っておいてね」

「はい。わかりました。よろしく、紅月」

『よろしくお願いいたします。主』

ブリッツキャリバーとは違い、紅月の声は落ち着いた男性の声だった。

「……意外」

『何がです？』

「蒼ならふざけた性格のＡＩを搭載するんじゃないかなって思ったから」

『……否定できませんな』

お互い蒼の性格を考えたのだろう。

普段は冷静なのに、相手をからかったり、ふざけたりすることが多いのである。

特に戦闘中にふざけることが多い。いろいろとネタを連発しているとことかが。

だが、それでも蒼は未だに六課に於いて、烈以外との模擬戦では負け無しである。

シグナムやフェイトなら引き分けることもあるが、２人は未だ蒼に勝ったことは無い。

余談だが、なのはの場合はあっという間に懐に入られて撃墜され、ＦＷ陣の場合は各個撃破されている。

閑話休題。

「仲良くやっていけそうだね」

フェイトがクスクスと笑いながら言う。

「じゃあ、また後で。多分ギンガは私の部隊に配属されると思うか

ら」

「はい！　よろしくお願いします！！」

「うん。烈も頑張ってね」

「はい。ありがとうございます」

そう言って、フェイトはミーティングルームを出て行った。

「じゃ、ギンガ。俺達も準備しようか」

「うん。わかった」

烈とギンガもミーティングルームを出て、組織制圧の準備を始めるのだった。

「ここだね」

烈を含めた２０名の隊員は廃棄倉庫にやって来ていた。
２０名中、１３名が１０８部隊で７名が六課の交換部隊の魔導師である。

「俺、ショーン、デイル、ハイネ、ミゲル、ラスティは倉庫に侵入。他のみんなは半分が表口、もう半分は裏口に回って」

「「「「「了解！！」」」」」

烈の指示に従い、隊員達はバリアジャケットをセットアップして指摘された配置へ移動する。

「マイロード。私達も」

「そうだね」

烈は首に架けた紅月を外す。

「紅月！　セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｌａｄｙ』

紅月の宝石が光り輝き烈を包み込む。
光が晴れると、鋼閃のものと変わらないバリアジャケットを着た烈がいた。
しかし、両腕の篭手は鋼色ではなく真紅であった。

「エイ」

「はい！」

「「ユニゾンイン！！」」

エイジスとユニゾンすると烈に変化が現れる。
バリアジャケットの紅い部分はオレンジになり髪の色は金髪へと変化する。

「全員、バインド弾を装填しておくように」

「「「「了解！」」」」

「それじゃ、行くよ」

烈とエイジスと5人の隊員達は行動を開始する。

近くの窓ガラスを内部にいる人に気付かれないように割って倉庫に

侵入する。
倉庫内部には多くのコンテナや木箱が存在していたため、7人は背中をコンテナに張り付けて奥へと進む。

「ッ！　全員ストップ」

烈は手を翳して隊員達を静止させる。

「どうしたよ烈？　ターゲットでもいたか？」

隊員の1人、ハイネが聞いてくる。
ハイネ・ヴェステンフルス陸曹。
男性にしてはちょっと長めのオレンジの髪型で、飾らない性格の好青年である。
性別や階級を気にせずに相手と接するので、部隊でも管理局でも人気の高い人物である。

小さな声で言うハイネに対し、烈は手招きをして先程見た場所を指差す。

全員それにつられてコンテナの影から烈の指差した場所を覗く。

そこには5人の男女がいた。
正確に言えば、右側に男女1組。左側に男3人である。
左側の男達は全員運送業者のような服装をしている。恐らく組織側

の人間であろう。
右側の男女は奇妙な組み合わせである。
女、というより小柄な体型の少女は銀髪に右目に眼帯をしてコートを着ている。
男は少女に対して大柄な巨体で、大きなフード付きのコートを着ているため表情を伺うことはできない。また、右腕にはデバイスらしき槍が握られている。

「これが……」

「……確かに」

組織側の男の1人が少女に灰色の四角いケースを渡す。
少女はそれを開け、中身を確認する。中には赤く輝くレリックが入っていた。

「おいおい」

「ビンゴだな」

ハイネ、ミゲルの順に言う。
ちなみに、ミゲルは少しツリ目の金髪の男子である。

「で、どうする小隊長さん？」

朱色の髪で、軽い性格なラスティが烈に尋ねる。

「バインド弾で奇襲を掛ける。失敗して倉庫から逃げられても、外で待機しているみんなが捕まえれるように連絡して」

「「了解」」

ショーンとデイルが指示に従い、外に待機している隊員達に念話で連絡する。

余談だが、今回の突入メンバーの内、ハイネとミゲルを除いて全員同い年である。

ハイネは18、ミゲルは19である。

「レリックを持っている女の子の確保を最優先。大男は俺が押さえる。ハイネ、ミゲルは女の子を。ラスティ、ショーン、デイルは組織側の3人の確保。いいね？」

「「「「「了解」」」」」

返事と共に、全員デバイスを構え、烈の合図を待つ。

「では、これで……」

少女と大男が帰ろうとした瞬間

「今！！」

烈が合図を出し、一斉に飛び出す。

「なっ……！」

「「「「「キャプチャーバインド！！」」」」」

相手は全員驚いているが、烈達は構わずにバインド弾を発射する。

「逃げろ！！」

組織側の男の1人が叫ぶと、全員ハッとなり走って逃げ始める。

男女と男2人はバインド弾を避けたが、男1人はバインドに掛かってしまいもがいている。

捕まらなかった4人は捕まった男に構わず逃げだそうとする。

「全員指示通りに！！　ハイネとミゲルはレリック確保を最優先！！」

指示に従い、ハイネとミゲルは少女を追い掛けようとしたが、大男が立ち塞がった。
そのまま大男はデバイスの槍を振り下ろそうとする。

「マズイ！！　エイ、ブーストいくよ！！」

『はい！！』

「『雷煌（らいこう）！！』」

烈とエイジスが叫ぶと、烈の全身を薄く雷が覆う。
そして足には密度の濃い雷が纏い付いた。

烈はそのまま駆け抜け、大男の放った槍を両腕の篭手【紅月】で防いだ。

「何ッ！」

「ハイネ、ミゲル！　早く行って！！」

「サンキュー！」

「ちゃんと押さえてろよ！」

少女は既に部屋の入口まで行っていた。
2人はそれを追い掛けていった。

「良い判断だ。だが、1人で俺を押さえるつもりか？」

大男が尋ねる。

「レリックの確保が目的ですから。時間を稼げればいいんです。できればご同行をお願いしたいのですが」

烈も目の前の男の実力は感じていた。
ただならぬ覇気。先程の槍の一撃。ただ者ではない。

「無理だなッ！！」

大男は槍を横薙に奮う。
烈はバックステップで槍を回避し、左手から魔力絃を放つ。
指先で巧みに絃を操り、5本の絃それぞれで四肢と首を狙う。

「ふんッ！！」

だが5本の絃は全て叩き斬られてしまった。

「フォトンブレイド!!　ファイヤ!!」

『十連魔力刀!』

足元に展開したミッド式の魔法陣から十本の魔力刀が現れ、大男を襲う。

「はあぁ!!」

だが、連続突きにより全ての魔力刀は打ち落とされてしまった。

「くっ!!」

「いい腕だ。なるほど。お前が『真紅の閃光』か」

「なんですかその名前?」

「ミッド式で篭手型のデバイス。そして魔力絃と魔力刀で戦う戦闘スタイル。管理局の魔導師の裏世界で呼ばれる異名だ」

自分の知らぬところで、痛い異名を付けられていたことがショックらしい。

烈はその場でうなだれそうになる。

『だ、大丈夫ですマイロード！　カッコイイです！』

「ありがとうエイ。でもフォローになってない――」

と言いかけたところで、大男は袈裟掛けに槍を振り下ろしてきた。
両腕をクロスして槍を防ぐ。
距離をとろうとするも、槍の猛攻により防御で精一杯で距離をとることができない。

「（だったら……1分しかもたないけど）
ブースト！！　紅華緑葉！！　金剛不壊！！」

『紅華緑葉、金剛不壊』

2つのブーストを掛けると、両腕に炎が纏わり付き、肌の色が若干黒くなる。黒くなるのは身体に金剛不壊を掛けたからだ。

紅華緑葉、金剛不壊、雷煌の三段ブースト。
それは、烈の超近接戦闘特化形態。
紅華緑葉で攻撃力。金剛不壊で防御力。雷煌でスピードを引き上げた形態である。
その力はオーバーSランクの魔導師に匹敵するほどである。
ただし、ブーストの負荷と烈の魔力保有量の関係上、1分しか使えないのが弱点である。

「ハアァ！！」

烈は防いだ槍を跳ね上げて、掌底を繰り出す。

「何ッ！？」

大男はなんとかぎりぎり掌底を槍の柄で防ぐが、強化された攻撃を受け止められず吹き飛ばされる。
直ぐさま烈は雷煌で強化した脚力で接近。打撃のラッシュを打ち込む。
正拳、掌底、膝蹴り、フックなどを連続で打ち込むが、大男の巧みな槍術で全て防がれる。

『＜あと３０秒です＞』

念話でエイジスから三段ブーストの限界時間が告げられる。

「（一気に決めないと）ハアアァァ！！！」

正拳を顔面へ向けて繰り出す。
大男は首を捻って正拳を避けたが、フードが破けてしまった。

フードが破れたため大男の顔が現わになる。

「えっ？」

烈は信じられない表情になり、咄嗟に大男から距離をとってしまった。

「どうした？」

大男は不可解な表情を浮かべる。
ところどころが撥ねた茶髪に鋭い目。厳つい顔をした男性。
それは、今朝も映像で見た男性だった。

「貴方は――貴方はまさか！！」

烈は目の前にいる人物が本人だと信じることができなかった。
だが、それでも自分が思った人物の名前を言う。

「ゼスト……グランガイツ隊長？」

そう。目の前の人物は行方不明のはずのゼストだった。

「俺を知っているか。だが、俺は君を知らないが」

「やはり……グランガイツ隊長なんですね」

「もはや隊長ではないがな」

「俺が貴方を知っているのは8年前のことについて調べているからです」

事件の言葉にゼストは――表情変えてはいないが――反応する。

「8年前、貴方が率いる部隊は秘匿任務に赴き全滅。隊員ほとんどが死亡。3名が行方不明」

烈は一旦言葉を切る。

「行方不明者は、ゼスト・グランガイツ。メガーヌ・アルピーノ。そしてクイント・ナカジマ。
……貴方は現に生きている。ですが……あとの御二人はどうしたんですか！！！」

若干怒りが篭った声で烈は叫ぶ。
だが、ゼストは全く表情を変えずに答えた。

「答える義理はないな」

「なら……力ずくで聞かせてもらいます！！　ゲンヤさんの為にも！！」

烈は駆け出そうとした。しかし――

『『マイロード／主！！　限界時間です！！』』

「ッ！　しまった！！」

エイジスと紅月の言葉と同時に、３つのブーストが解除される。
それを好機と見たゼストは烈の懐に飛び込み、烈を吹き飛ばした。

「ガアッ！！」

烈は近くのコンテナへと叩き付けられ、ユニゾンも解除される。

「マイロード！！」

『主、しっかりしてください！！』

エイジスと紅月が烈を心配し叫ぶ。

「感情的になりすぎだな。そんなことでは俺は倒せん」

そう言ってゼストは烈に背を向ける。

「……1つだけ……聞かせて下さい」

ふらつきながらも烈は立ち上がる。
ゼストは首だけを烈へ向ける。

「クイントさんは……生きているんですか？」

「……」

ゼストは前に向き直り、倉庫から出て行こうとした。
だが、扉から出る直前――

「……生きている」

それはとても小さな声だった。

「そう…ですか」

が烈には聞こえたようであった。
そしてそのままゼストは姿を消した。
同時に烈もその場に倒れかける。

「マイロード！！」

だが、フルサイズになったエイジスによって支えられ、倒れ込むことはなかった。

「ありがとう。エイ」

「大丈夫……ですか？」

「しばらくは動けそうにないかな」

そう言ったところで、ハイネから念話で通信が入る。

＜こちらハイネ。スマン、レリックを持った少女には逃げられた＞

＜……わかった。隊舎に連絡して。後……ゴメン、俺、ダメージを喰らって動けないんだ。変わりに指揮お願い＞

＜無茶したんじゃないだろうな？　わかった。医療班にも連絡しておく。しばらく休んでろ＞

＜ゴメン。ありがと＞

烈は念話を切り、背中をコンテナに預ける。

（グランガイツ隊長は生きていた。そして、クイントさんも生きている）

烈の頭にあるのはさっきのゼストの言葉。
その言葉が頭から離れない。

（一体どういうことなんだろう。８年前、何があったんだろう）

烈の疑問は増えるばかりである。

（ゲンヤさんに……報告しないとな……）

最後にそう思い、烈は気を失った。

第32話　Ｄｅａｄ　Ｓｔｒｉｋｅｒ（後書き）

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「今回はオリジナルの話。そして一部原作を改編しました」

ギ／ス「「お母さんが生きてるの！？」」

Ｋ２「うん。他の作者様の作品を読んでたらクイントさん出したいなぁ～～って思って。あと……」

ギ「あと？」

Ｋ２「大分先だけど、烈がクイントさんをお義母さんって呼ぶのがやりたくなって」

ギ「／／／

『雷煌（らいこう）』
使用者：エイジス
内　容：エイジスとユニゾン中のみに使える雷属性のブースト魔法
　脚に烈の魔力にエイジスの雷の変換資質の魔力を纏って雷を付加することで高速移動を可能にする
　脚に魔力は集中するが、スピードに肉体が耐えられるように魔力を全身に纏うので、全身が雷で光り輝いてみえる
　そのスピードは一瞬で１０ｍの間合いを詰めることができるほどである
　ただし、烈の扱うブースト魔法の中で1番負荷が強く、長時間の使用もできない

Ｋ２「以上です」

ス「烈兄凄いねぇ。あたしじゃ勝てないよ」

Ｋ２「まあ烈の格闘技術はギンガよりも上だしね。伊達に１０８部隊のエースとか言われてないよ」

ス「烈兄にそんな設定もあったの！？」

Ｋ２「一応、１０８部隊にはＡＡランクが烈含めて3人いることになっています。まあその2人が出て来る予定はありませんが」

ス「あれ？　今回名前が出た5人の局員の人は？」

K２「あの５人の内、２人はＡランク。３人はＢランクという設定だから」

ス「へぇ～～～」

K２「それよりスバル。真っ赤になって暴走してるギンガを連れ戻してくれる？」

ス「へ？」

ギ「そんな……まだ付き合ってないし……告白すらしてないのに……」

ス「ギン姉～～。戻ってきて～～」

ギ「はっ！！　私ったら何を？」

K２「ギンガも戻ってきたところで次回予告にいきましょう。スバル、よろしく」

ス「蒼が六課に来て数週間。私達はなのはさんやヴィータ副隊長、蒼による厳しい訓練を受けていた。そんなころに私達に新たな任務が告げられる」

ギ「次回、第３３話　ホテルアグスタ」

K２「それではみなさん」

ス／ギ「「次回もよろしくお願いします」」

～～デバイス紹介／能力紹介Ｐａｒｔ２～～（前書き）

多分前回の隊員ネタ、ハイネとミゲルはわかったと思いますが、残り３人は「誰？」って思った方もいると思いますのでこの場で説明

ラスティ・マッケンジー
登場：ガンダムＳＥＥＤ
説明：クルーゼ隊所属の隊員。第１話にてストライクを強奪しようとしたところ、銃撃戦にて死亡。スペシャルエンディション版だと、グラフィックや台詞があったりする。

ショーン／デイル
登場：ガンダムＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ
説明：ミネルバ所属、ゲイツＲのパイロット。４～５話辺り？（多分）のデブリ戦でショーンはカオスに、デイルはアビスによって撃墜された。またキャラクターグラフィック等は一切登場せず、名前のみの登場だった。

つまり、全員ザフトで戦死しちゃったキャラクターなんです（笑）

一応彼等は再び登場する予定です。

ハイネは好きでした。ミゲルは……ミゲル専用ジンが修理中でなければ生きていたかもなぁ。なんて思います。

それでは、説明もこの辺で（ってこのあとも説明ですが）デバイス、
能力紹介をどうぞ

～～デバイス紹介／能力紹介Ｐａｒｔ２～～

Ｋ２「はい。前回言った通りデバイスと能力の紹介です」

烈「紅月と八雲だな」

蒼「それと私の『魔導書の鍵』な」

Ｋ２「それでは、烈の紅月から」

『紅月』

・蒼が作った烈用のインテリジェントデバイス
「鋼閃」が壊れたための後継機である

・二度と壊れないように、異世界から持ってきた特殊な金属（オリハルコンやクロンデジゾイド）で作られている

・ＡＩは落ち着いた口調の男性

・形状は日本の鎧をイメージする真紅の篭手

・バリアジャケットは「鋼閃」の時のものと変化なし

・主だった機能は、手甲部分の魔力精製機関で、魔力（氣力）による魔力絃や刀、ダガー、網の形勢
及び、属性魔法、属性補助魔法のサポートである
「鋼閃」に比べ大幅に性能が上がっている。

・待機モードは八雲と同じだが、宝石の色は紅、リングの色は銀である

・また、まだ発揮されていないが、烈の本来の能力を制御するため

のデータも打ち込まれている
・予想外にも蒼が素材以外に魔改造をしていないデバイスである
・余談ですが、紅月と暁を掛けています。ヤタノカガミはありません（笑）

烈「本当は何か細工してるんじゃないだろうな？」

蒼「酷いよお兄ちゃん！！　いくら私でもそんなことしないよ！！」

K2「蒼ーーー。素に戻ってる」

蒼「え？　……ゴホン。すまない、取り乱した」

ア「今普段のアオちゃんとは思えない声が……」

烈「いたのか？　アリス？」

ア「いましたよ」

K2「最近アリスは本編の方で出番が少なくなってきたなあ。まあちゃんと次回は出番あるけど」

ア「ならいいです。では、次はアオちゃんの八雲です」

『八雲』

・蒼が愛槍である「蒼月」を改良した、六連リボルバー式カートリッジシステム搭載の可変型アームドデバイス
・わざわざクラヴィスとアリスがユニゾンしなくてもいいようにと思い作った
・人格は一応有り。しかし、簡単な応答のみしかしない。ちなみに声は女性
・バリアジャケットはギアスR2のC．C．のチャイナドレス
・グリモワールと直接リンクすることで、グリモワールの登録データを八雲から直接使用することが可能
ただし、その際使えるのは詠唱破棄が可能な1～3章のみである
・名の通り8つの形態に変形可能である
壱式『月』十文字槍
弐式『蛇』鎖鎌
参式『砕』モーニングスター
肆式『断』大剣
伍式『崩』ガトリング
陸式『劈』双剣
漆式『撃』装飾銃
捌式『閃』狙撃銃
・これ以上に形態を追加することもできるが、シャーリーとアリスにダメ出しされたので8つで止めた
・壱～参、肆～陸、漆～捌の間では自由に形態変形できるが、形態変化の範囲を越える場合（下参照）、カートリッジロードが必要

壱一参↑↓肆一陸↑↓漆一捌
→――――――――――→

・壱式の形状モデルは、戦国無双の真田幸村の十文字槍（ブルーカラー）
伍・陸式モデルは、ガンダムＳＥＥＤ　ＡＳＴＲＡＹより、ブルーフレームセカンドＬの武装『タクティカル・アームズ』
漆式のモデルはＢｌａｃｋ　Ｃａｔの『ハーディス』
・待機モードは両端が湾曲した金のリングの中心に蒼い宝石があるペンダント。ぶっちゃけ、舞一乙ＨＩＭＥの『蒼天の星玉』

蒼「参式『砕』のモーニングスターという武器がわからないという人は、
『舞一乙ＨＩＭＥ（アニメｖｅｒ）』のハルカ・アーミテージ准将のエレメントだと思ってくれ」

烈「にしても形態多くないか？」

ア「私とシャーリーさんが止めなければどうなっていたやら」

Ｋ２「２・３章を使うならこれくらい多いほうがいいかなってね。没になったのもいくつかあるよ」

烈「ちなみに何が没になったんだ？」

Ｋ２「双拳銃、盾、ハルバート、トンファー、ナックル、マシンガン、ショットガン、薙刀、
ダブルセイバー＋連結刃（舞一乙のシズルのエレメント）、三折棍、鞭、あとは……」

烈／蒼／ア「「「もういい（です）」」」

K２「あ、そう？」

ア「ですが、八雲ができたなら今後私とクラヴィスのユニゾンは無いのですか？」

K２「あるよ。クラヴィスとユニゾンするからこそ、できる事があるからね」

烈「ネタバレになるからこれ以上は言うなよ」

蒼「なに、私が白髪美少女になるだけだ。どこぞの奇策士ではないが」

K２「まな板のくせに（ボソッ）」

蒼「八雲、ロードカートリッジ」

八『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

蒼「漆式『撃』！！　『超電磁銃（レールガン）』！！」

K２「ギャアアァァァ！！！（感電）」

蒼「貧乳はステータスだ！希少価値だ！！」

ア「アオちゃん言ってて悲しくなりません？」

蒼「うっさい！！アリスのバーカ！！」

烈「あ、蒼！　行ってしまった」

Ｋ２「各キャラの胸の大きさは、人気投票結果発表を参照してください」

ア「こういう時だけ復活が早いのやめてくれません？」

Ｋ２「酷いｏｒｚ」

烈「では最後に能力紹介だ」

『魔導書の鍵（クラヴィス＝グリモワール）』
（クラヴィス＝鍵の意）

・グリモワールの形状は黒い本が、金色の鍵穴がついた白いベルトで十字に縛られている。
クラヴィスの形状は最初は通常サイズの鍵。
大きくすることで鍵の形をした剣になる。（形状モデルはキングダムハーツ２の『約束のお守り』）

・グリモワールにはさまざまな技や魔法の記録が登録されている
ただし、記録の文章は英語だったりドイツ語だったりと様々である

・新たに見たり会得した技を登録することも可能
ただし、登録可能不可能の基準は蒼自身把握していない

・あくまで“記録”が入っているだけなので、蒼以外でも記録された技を使うことは可能
（A-sでシャマルが破壊の雷を使ったみたいに）
ただし、蒼の固有能力なのでグリモワールそのものは蒼以外扱えない

・基本は技の発動に詠唱が必要になるが、1~2章と3章の一部のみグリモワールの未解錠による発動と、詠唱破棄が行える

・技を使用すると術者が技の記憶をなくす
しかし、本を読むことで技の知識を得、再び技を使うことができる
つまり、戦闘においては一つの技は一回のみしか使えない。
また、剣術や槍術などの武器専用の技（主に第2章）は対応した武器がなければ使えない

・蒼はこの2つのデメリットをアリスとユニゾンすることで解決している
2章以外はアリスと通常のユニゾンを行い、戦闘中に消費した技をアリスの並列処理によって技を戦闘中でも読み直し（リリード）している
2章についてはアリスがクラヴィスとユニゾンすることで形状を剣から槍や銃といったものへと変形させている（ただ、この問題は八雲を作ったことで解決した）

・本の章について
第1章　サポート系
第2章　戦闘技術系
第3章　射撃・砲撃系
第4章　広域系・召喚系

第５章　治療系
第６章　空間操作系
第７章　封印系・禁術系・秘術系

烈「なんともまぁ……チートだな」

ア「チートですね」

Ｋ２「ちなみに、アルファ・イン・フォースは７章に登録されています。７章は滅多に使いません」

烈「そういう問題じゃないだろ」

ア「リリードが必要とはいえ、ほとんどの技が使えますからね」

Ｋ２「登録可能不可能の基準は一応こちら」

可　能：ウイングロード
　　紅華緑葉
不可能：ＩＳ
　　《機能》
　　預言者の著書

烈「つまり、レアスキルや先天資質は基本不可能と」

Ｋ２「まあ、そんな感じかな？（《機能》は先天資質じゃないけど）

」

ア「それではみなさんこの辺で」

K2「次回の32話では蒼、33話では烈に視点が当たる予定です」

烈「それでは」

～～デバイス紹介／能力紹介Ｐａｒｔ2～～（後書き）

そういえば

ＰＶ４０万。ユニーク４万。総合評価４４４（不吉だな（笑））を突破しました。

ありがとうございます。

雑談は５０万の時を予定しています。

あと質問やリクエスト等も受け付けていますので、ありましたら気軽に感想等にお願いします。

第３３話　ホテルアグスタ　前編（前書き）

長くなりそうだったので前後編に分けました。

後編は構成は未だ迷っている部分があるとはいえ、だいたい固まっているのですが、やはり夏期補習が午後まであるので更新速度は夏休みといえど変わらないと思います。

一応今年受験生ですからねぇ。

それでは本編をどうぞ

第３３話　ホテルアグスタ　前編

「クロスファイヤーー……シューート！！！」

廃都市に設定された訓練場。その中のビルの屋上からティアナはキャロのブーストで強化された誘導弾を放つ。
目標は空中で蒼い翼を広げている蒼である。

「伍式『崩』！！」

蒼は八雲をガトリングに変形させ、トリガーを引き無数の小さな魔力弾を撃ち出す。
オレンジの誘導弾は半分がガトリング弾によって相殺されるが、残りの半分はティアナのコントロールにより相殺を免れ、そのまま蒼へと向かう。

「陸式『劈』！！」

弾丸を回避して迫ってくる誘導弾に対し、蒼は慌てずにガトリングを双剣に変形させ、誘導弾を切り裂く。

「「でりゃあぁぁぁぁ！！！」」

蒼がクロスファイヤーに気を取られている間に、スバルとエリオが左右から迫る。
スバルは蒼の右側から、ウイングロードの先端を伸ばしてマッハキャリバーで駆ける。
エリオは左側から、キャロのブーストを掛けられたストラーダで突撃する。

「肆式『断』！！　プロテクション！！」

蒼は両手の双剣を峰の部分で連結して大剣に変形させ、大剣を右手で盾のように構えスバルの攻撃を防ぐ。
そして左手で蒼いベルカ式魔法陣のプロテクションを展開し、エリオの突撃を防いだ。

「「ウオオォォォォ！！！」」

2人は攻撃を防がれると、よりいっそう自身のデバイスに力を込める。

ガキイィィィン！！
パリイィィィン！！

その結果、スバルは八雲をたたき落とし、エリオはプロテクション

を破壊した。

「「やった！？」」

「この戯けが！」

スバルとエリオは蒼の攻撃手段を奪ったことで安心して油断していた。

蒼は油断した2人にまとめて旋風脚を喰らわせ、ティアナとキャロのいるビルへと蹴り飛ばした。

「スバルさん！　エリオ君！！」

キャロは悲痛な叫びを上げ、ティアナはスバルを、キャロはエリオを抱き留めた。

「第3章　69項　偽（カラド）――」

蒼は左手に魔力で弓を形成し、同じく魔力でできた螺旋を描く剣を番えて追撃を仕掛けていた。

それに気付いたキャロはフリードに迎撃の指示を出す。

「フリード、ブラストフレア！　ファイヤ！！」

「キュク～～！！」

「――――螺旋剣（ボルグ）！！」

フリードから放たれた炎弾と螺旋の剣は二人の間で衝突する。
だがフリードの炎は螺旋剣によりあっという間に掻き消された。

「「「「うわぁぁあ！？」」」」

そのまま剣は屋上の４人に直撃し全員気絶。
蒼　ｖｓ　ＦＷ達の模擬戦は終了となった。

「全員不合格」

蒼が目覚めた４人に言った言葉である。

「えっと……みんな頑張ったんだし……ちょっと厳しいんじゃないかな？」

なのはがＦＷ達のフォローを入れようとするが

「厳しくて当然だ。全くなっちゃいないからな」

蒼は呆気なく一蹴する。

「まず、スバルとエリオ」

「「は、はい！」」

「デバイスを叩き落としたり、プロテクションを割ったからって油断し過ぎだ」

「「うっ……」」

「あとスバルはウイングロードの使い方を考えろ。あれじゃ、何処から攻撃を仕掛けて来るか丸わかりだ」

「うぅ……は～い」

「（へぇ）」

具体的な方法を教えず、自分自身で考えさせるように仕向けたことに、教導官のなのはは関心した。

「次、ティアナ」

「……」

蒼はティアナを見るも、ティアナは無言。それどころか蒼を軽く睨んでいる。

「誘導弾を真正面から撃つか普通？　何の為の誘導弾だ。一直線に飛ばすなら誘導弾の意味が無い」

蒼は睨みを無視しティアナの問題点を挙げる。

「……わかったわよ」

嫌そうな顔で渋々とティアナは答える。

「最後、キャロとフリード」

「は、はい！？」

「キュク～？」

「お前はフルバックだ。基本は回避が重視。どうしても避けられない時以外は、防御と迎撃はするな」

「わ、わかりました！」

「キュクー！」

他の3人に対してキャロとフリードは噛みかけながらも返事を返す。

「あと全員に一言。他人の良い部分や技は盗め」

そう言って、蒼は先程の魔力の弓を左手首に形成する。
恐らく、烈の魔力形成を真似たのであろう

「私の言いたいのはこれくらいだ」

「じゃあ、午前中の訓練はここまで。みんな反省のレポート忘れないようにね」

「「「はい！」」」

「……はい」

訓練終了を告げられ元気な声で返事をする3人に対し、ティアナだけは不満そうな顔をしていたが誰も気付かなかった。

《似合っていたぞ。教導官のまね事》

《五月蝿い。余計だ》

蒼はシャワーを浴びながらリインフォースと話す。

蒼のスレンダーな体、もとい女性的な曲線が皆無に近い体。つまり胸がない体にシャワーから出るお湯が当たり、水滴が体に沿って流

れ落ちてゆく。

だが、その体には右肩から胸の中心辺りにかけて大きな傷痕があった。

《だが様になっていたぞ》

《私には向いてないさ。だが――》

《……だが？》

《あんな戦い方じゃ、いずれあいつ等は死ぬ。そう思ったから、未熟なあいつ等に戦い方を教えるべきか……とな》

《……高町なのはやフェイト・テスタロッサもか？》

《非殺傷設定とやらに頼りきっている奴等だぞ？　それに、魔法――つまり自分の力が絶対的なものだと思って慢心している》

非殺傷設定

それはデバイスによる魔法攻撃を、物理破壊を伴わない魔力衝撃という設定にするものであり、この設定により相手に魔法が当たっても、死傷させることなく内部にダメージを与えるだけで済むというものである。

しかし、この設定をしていても魔力ダメージによるショック死が起きることもあれば、人体の柔らかい器官、例えば眼球のようなもの

を傷付けてしまうこともある。
また、魔導師達に自分達が持っている魔法が人を殺せる力を持っていることを忘れさせてしまう難点がある。

《そういう奴はいずれ足元を掬われるさ。昔の私みたいにな》

そう言ってシャワーを止めバスタオルを取り、体を拭いて裸体を隠す。

《……蒼》

《そう。私のせいで兄さんの腕と目は……》

《……悔やんでも過去は変わらないぞ》

《……そうだな》

リインフォースの言葉に納得しても、蒼の表情は暗いままだった。

数日後

私達はミッドのホテルアグスタという場所に来ていた。

今回の任務は、行われる取引可能なロストロギアのオークションの会場警備と人員警護。

なんでも、出展されるロストロギアをレリックと勘違いしてガジェットが襲ってくる可能性があるとか。

そうそう。ガジェットと言えば、ガジェット製作者――と言うかレリックを収集している人物が判明したらしい。

広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。

その変態野郎についてはハラオウンが調査していると言っていたが、何故か兄さんの名前も出てきた。

……まさかハラオウンは兄さんを利用しているんじゃないだろうか？

と思ったが、兄さんは兄さんでスカリエッティを捜している理由があるらしい。

兄さんが捜す理由……一体何だ？　仕事上の関係か？　それともスバルの家に世話になっていることと関係があるのか？

……考えてもしかたないか。

まあ、変態については置いておいて。

現在３人娘はホテル内部の警護。

ＦＷ陣や副隊長達は外の警護に周っている。

《しかしオークションか。密輸品……面白いものでもあったら奪うか？》

《何を言ってるんだお前は》

私は裏の搬入口の警護だ。
アリスはシャマルと一緒にいるから問題なくリインフォースと話せる。
だが暇なのでグリモワールを解錠して読みあさっている。

《しかしガジェットは本当に来るのだろうか？》

《来ようが来なかろうが私にとってはどうでもいいさ。だが来るなら、ＦＷのガキどもにとって実戦経験を積むには調度いいだろうよ》

《ガキって……お前もまだ１５だろ》

《気にするな》

少なくとも精神年齢はあいつ等より上だ。

「さて。何が起こるのやら」

私は横目で搬入口に入ってゆくトラックを見てグリモワールに目を落とした。

一方

＜でも今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合かあ＞

＜そうね。あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長とか副隊長達のこと＞

あたしは念話でホテル内部にいるスバルと話していた。

＜うん。父さんやギン姉、烈兄から聞いたことくらいだけど。八神部隊長の使っているデバイスが魔導書型で、それの名前が「夜天の書」ってこと。
副隊長達とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だってこと。
で、それにリイン曹長合わせて６人揃えば無敵の戦力ってこと＞

スバルがいろいろと説明してくれる。そういえば、八神部隊長って

１０８部隊で一時期指揮官研修を受けていたらしいわね。

＜まあ、八神部隊長の詳しい必事とか能力の詳細は特秘事項だからあたしも詳しくは知らないけど＞

＜……レアスキル持ちの人はみんなそうよね＞

＜ティア、なんか気になるの？＞

＜別に＞

＜そ。じゃまた後でね＞

そう言って、あいつは念話を切った。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。
八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバーS。副隊長でもニアSランク。他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばっかり。

あの歳でもうBランクを採ってるエリオとレアで竜召喚師のキャロは、２人共フェイトさんの秘蔵っ子。
危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップがあるスバル。
あいつの妹で、推定オーバーSランク。あらゆる技をコピーできる魔導書型のレアスキルを持つアオ。

やっぱり、家の部隊で凡人は私だけか。

だけど、そんなの関係ない。
あたしは立ち止まる訳にはいかないんだ。

その頃、ホテルアグスタ屋上にて

「ガジェットは来るんでしょうか？」

「今のところはクラールヴィントのセンサーに反応はないけど（やっと……やっと出番が来たわ！！）」

「シャマルさん？」

「あ！　な、なんでもないわアリスちゃん！」

と言ったところでシャマルの指輪―クラールヴィントが光った。

「っ！　クラールヴィントのセンサーに反応!?　シャーリー！」

シャマルは六課のロングアーチへ通信を繋ぐ。

『はい！　来た来た……来ましたよ！　ガジェットドローン陸戦１型。機影６０、６５！』

『陸戦３型。６、７、８！　多い！』

『なんでこんなに！』

シャーリーとルキノがガジェットの反応を全員に通信で知らせる。だが、その数はあまりにも多く、アルトが悲痛の声で叫ぶ。

「……来ましたね」

「そうね。……前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ１の総合回線と合わせて、私、シャマルが現場指揮を行います」

ホテルの内外部で警戒していた前線メンバーは、蒼を除いて全員シャマルに反応を示す。

『シャマル先生！　あたしも状況を見たいんです！　前線のモニタ

ー貰えませんか！？』

ティアナがシャマルへ通信を繋いだ。
どうやらアンカーガンでホテル付近まで登ってきたようだ。

「了解。クロスミラージュに直結するわ。クラールヴィントお願いね」

『ｊａ（了解）』

そしてシャマルはクラールヴィントにキスし、黄緑色の騎士甲冑を身に纏う。

「では私も」

アリスが一瞬輝くと、フルサイズになり黒いドレスのような騎士甲冑を纏ったアリスがいた。

「私はＦＷ達の援護に周ります。アオちゃんにも救援を要請してください」

「わかったわ」

アリスは屋上から飛び降りＦＷ陣と合流しに向かった。

その頃、ホテルから1~2ｋｍ程離れた森の中に3つの人影があった。

1人は茶髪の大男、以前烈と戦ったゼスト・グランガイツ。
1人は民族衣装のようなコートを着た、薄紫の髪の少女。
そして、赤い髪を4ヶ所縛り、露出の高い服を着たリインやアリス達と同じくらいの大きさの少女だった。

突然、その3人の前にモニターが現れる。

『ごきげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア。それにアギト』

モニターで話している人員は、ジェイル・スカリエッティその人だった。

「ごきげんよう」

「何の用だ?」

ルーテシアと呼ばれた少女は返事を返すが、ゼストは話を手っ取り早く済ませようと思ったのか、直ぐさま本題に入ろうとする。

『冷たいね。近くで状況を見ているんだろう？　あのホテルにレリックはなさそうなんだが、密輸品の中に1つ興味深いロストロギアがあるんだ。少し協力してはくれないかね。君達なら、実に造作もないことの筈なんだが』

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めた筈だ」

『ルーテシアはどうだい？　頼まれてくれないかな？』

スカリエッティはゼストが断ると直ぐさまルーテシアに尋ねた。一応尋ねてはみたものの、ゼストの性格から断わられると思っていたのだろう。

「いいよ」

『優しいなぁ。ありがとう。今度是非お茶とお菓子でも奢らせてくれ』

わざとらしくスカリェッティは言う。
わかってて言っているのでゼストは不愉快になる。

『君のデバイス、アスクレピオス。私が欲しい物のデータを送ったよ』

「うん。じゃあごきげんようドクター」

『ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ』

そう言って、スカリェッティは通信を切った。
それと同時に、ルーテシアは準備に取り掛かる為にコートを脱ぐ。
コートの下は黒いゴスロリ衣装だった。
……誰が着せたのであろうか？

「いいのか？」

ゼストはルーテシアのコートを預かり尋ねる。

「ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのことそんなに嫌いじゃないから」

「……そうか」

ゼストは諦めたように話を切った。
ルーテシアは両手を広げ、足元に紫色のベルカ式魔法陣を展開する。

「我は請う、小さき者、羽ばたく者、言の葉に応え、我が命を果たせ」

魔法陣からゼリーのような触手が現れる。

「召喚。インゼクトツーク」

触手から小さな虫が呼び掛けに応え飛び出した。

「ミッション、オブジェクトコントロール。いってらっしゃい。気をつけてね」

インゼクトツークと呼ばれた昆虫達は、光ってルーテシアの言葉に応え、羽ばたいていった。

「物体移動。オブジェクト２２機。転送移動」

ルーテシアは再び両手を広げる。
どうやらガジェットを転送したらしい。
ガジェットを転送した直後、インゼクトから連絡が入る。

「ドクターの探し物見つけた。ガリュー、ちょっとお願いしていい？」

ルーテシアは手の甲の宝石に向け尋ねる。
宝石は同意を示すように光り輝く。

「邪魔な子はインゼクト達が引き付けてくれてる。荷物を確保して。気をつけてね、いってらっしゃい」

ルーテシアが左手を前に翳すと、黒い光がホテルへと向けて飛んでいった。

一通りすべきことが終わった為か、一旦息を吐く。
そして時間をどう潰そうかと考えていると、あることに気が付いた。

「アギト、さっきから黙ってるけどどうしたの？」

スカリェッティが連絡して来てから一言も喋らない赤髪の少女へと尋ねる。
ゼストも気になったのかアギトの方に顔を向ける。

「別にたいしたことじゃねぇよ、ルールー。ただ……」

「ただ？」

ルーテシアは首を傾げる。

「……懐かしい感じがするんだ。なんて言うか……家族みたいな」

「……そう（…家族……か）」

ルーテシアは家族という言葉を聞いて、自分の母親のことを考えるのであった。

第３３話　ホテルアグスタ　前編（後書き）

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「思ったよりも長い……もっと削ったほうがいいかな？」

蒼「それだとアリスやＦＷ、守護騎士の出番が無くなるだろう」

Ｋ２「そーなんだよね。……戦闘は次回からです。そしてガジェットの数が原作の倍あるのは……」

蒼「あるのは？」

Ｋ２「気分です」

蒼「『刺し穿つ＜ゲイ＞――――」（八雲を構える）

Ｋ２「冗談！　冗談！！　次回使おうか悩んでるネタの為です！！」

蒼「ネタ？　何のだ？」（八雲を下ろす）

Ｋ２「言ったらばれるでしょ。ただ、目には目を。ってとこかな」

蒼「ふーん。あ、あとネタと言えば、今回のネタはＦａｔｅな」

Ｋ２「一応注意しておきますが、Ｆａｔｅやデジモンの技等は原作通りの威力がある訳ではありません。あったら死ぬし」

蒼「確か、デジモンの技は天変地異を起こしたり、原子を分解するものとかあったよな？」

K２「うん。デジモンはとんでもないからね。合体は認めないけど」

蒼「お前、結構それしつこいな」

K２「でもクロスウォーズがデジモンファンをがっかりさせたのは本当だからね。そして人気のあるポケモンに対して、人気が下がっていくんじゃないかなー、って思う」

蒼「ああ、作者はポケモン派ではなくデジモン派だったな」

K２「そうだよ。別にポケモンが嫌いな訳じゃないけど、進化はデジモンの方がいいからね。でもデジモンの元になったたまごっちとかはやったことないけどね」

※デジモンはたまごっち同士を戦わるために生まれたとかという話があります。

蒼「さて、ここらへんで終わるか」

K２「次回、第３４話　ホテルアグスタ　後編」

蒼「よし。次回も暴れるか」

K２「ホテルは破壊しないでね（汗）」

蒼「それでは」

第３４話　ホテルアグスタ　後編（前書き）

前回のあとがき、デジモンについては個人的な意見ですのであまり気にしないでください。

そして今回、蒼が自重しないｗｗｗ

どうしてこうなったｏｒｚ

そういえば、マイページに小説に課金することができるとかどうのって広告があったのですが、
私や他の作者様の中で、二次創作を書いている方が課金の設定をしたらマズイですよね。
最悪、リリなのや他の作品の原作者様に訴えられるかもしれませんし。

すいません。長くなりました。では本編をどうぞ。
（今回あとがきコーナーは無しです。理由はあとがきの部分で説明いたします）

第３４話　ホテルアグスタ　後編

「スバルさん、ティアナさん！」

私は屋上から飛び降りて２人と合流しました。
スバルさんが私に気付いたようでこっちを向きます。
ですが、ティアナさんは何かモニターを見ています。何が映っているのでしょう？

「アリス！」

「援護に来ました。直にエリオ君とキャロちゃんも来ると思いますよ」

「オッケー。今、副隊長達がガジェットを叩いてる」

スバルさんがモニターを指して言います。
なるほど。ティアナさんが見ていたのは副隊長達の戦闘中継の映像ですか。

「…これで……能力リミッター付き……」

ん？　今ティアナさんが何か言ったような……

「スバルさん、ティアさん！」

「アリスさんも！」

「キュクー！」

あ、エリオ君、キャロちゃん、フリードが来ました。
これでＦＷ陣は全員集合ですね。
後はアオちゃんが来てくれれば……

『みんな聞こえる？』

突然モニターが現れ、シャマルさんが映し出される。

「どうしたんですか？」

『アオちゃんから伝言。救援には行けない』

「「「「「えっ！？」」」」」

アオちゃん何言ってるんですか！？

『だけど増援は送る、だって。アリスちゃん、どういうことかわかる？』

救援は来ない。だけど増援は来る？

つまり、“アオちゃんは”救援に来ない。ただし、“何かが増援”に来る。ってことでしょうか？

「ッ！　遠隔召喚……来ます！！」

と考えたところで、キャロちゃんが叫びました。

全員キャロちゃんの方を見ると、前方に紫のベルカ式魔法陣が複数現れ、ガジェットが転送されて来ました。

……楕円状の１型が２０機。球状の３型が２機。多いですね。

「あれって……召喚魔法陣？」

「召喚ってこんなこともできるの？」

「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです」

エリオ君とスバルさんの疑問にキャロちゃんが答える。

ん……召喚？

「なんでもいいわ。迎撃行くわよ！」

ティアナさんは既にクロスミラージュを構えていました。

「「「おう！！」」」

そうですね。うだうだ考えてる余裕はありません。

私は右手を翳し、氷色のベルカ式魔法陣を展開する。

「集え、研ぎ澄まされし氷の刃。我が剣は雪原の息吹！！」

魔法陣から複数の氷の剣のスフィアを作り出す。

お借りします、兄様の必殺技。

炎の変換資質はありませんが、氷だけでも十分な威力です。

「千紫万紅！！　Ｖｅｒｓｉｏｎ　Ｉｃｅ！！」

「クロスファイヤー…シュート！！」

アリスの放った氷の剣とティアナの撃ち出した橙色の魔力弾。

それらがまるで雨のようにガジェット達に襲い掛かる。

だが、半分以上のガジェット達が攻撃を回避した。

それでも、氷の剣にはＡＭＦが効かないため３型を２機共貫いた。

しかし、他に攻撃が当たったのは1型2機だけだった。

「クッ……！」

『有人操作されてるわ！！　みんな気をつけて！！』

ティアナさんが悔し気な声を上げると、同時にシャマルさんから通信で叫ぶ。

そういうことは早めに言って下さい！

ビヒュンビヒュンビヒュン！！

「「「「「「　！？　」」」」」」

残り18機となったのガジェット1型が一斉にビームを発射してきました。

私とスバルさん、ティアナさんが前に出て障壁を張る。

エリオ君とキャロちゃんじゃ防御力が足りませんから、障壁を張っても直ぐに破られるでしょうから。

「ぐうぅぅぅ……」

「いくらなんでも……」

「この数は……耐えきれません」

3人程度じゃ防ぎきれません。
あと少しで障壁が壊れる。
そう思った時でした。

バクン！　ガキガキッ！　ガシュコン！！　ドゴォォン！！！

何かを装填するような音が聞こえた直後、上空からガジェットに向けて砲撃が放たれた。

突然の攻撃に一部のガジェットは反応できず、3機が砲撃の奔流に巻き込まれ爆発する。

「一体……何が……」

全員の疑問を代表するかのようにエリオ君が呟きます。
それに応えるかのように、砲撃の主は私達の目の前に現れました。

白銀に輝く装甲。鋭利な爪のある4本の足。そして2本の砲身を背に乗せた、銀色の狼がそこにいた。

ああ。やっと意味がわかりました。

「何なのよ…コイツ」

「召喚…獣？」

みなさん驚いていますね。

「キャロちゃん正解です。アオちゃんの呼び出した召喚獣。“増援”ですね」

「「「ええっ！？」」」

「アオってなんでもありだね」

スバルちゃん。それは今更ですよ。

目には目を。歯には歯を。召喚には召喚を。ってところですね。アオちゃんらしい。

でもせっかくアオちゃんが送ってきてくれた増援です。頑張ってもらいましょうか。

「デュラン！！　ロード＝シルバーカートリッジ！！」

ガコン！　ガキッ！　ガシュコン！

デュランと呼ばれた狼は、アリスの命令に従いカートリッジを砲身に装填する。

「撃てぇ！！」

ドゴォォォン！！

２本の砲門から弾丸が放たれる。
弾丸の発射とともに氷と冷気が撃ち出され、ガジェット３機を凍結させる。

「……スゴ」

「カッコイイ！」

「ふふふ。さて、みなさん反撃といきましょう！」

残りのガジェットは１２機。
一気に片付けましょう！

5分程前。

「……！」

《どうした？》

私はグリモワールから顔を上げた。
周囲の魔力の流れが変わったな。

「転送……か？」

と呟いたところで

『アオちゃん聞こえる！？』

シャマルの顔が目の前に現れた。
いや、モニターでだぞ。

「何かあったのか？　シャマル？」

『召喚師がどこかにいるみたいで、ガジェットが転送されて来たわ。

有人操作されてて、数も多過ぎてシグナム達でも手が回らないの。
今すぐ援護に回って！』

私の勘は当たったようだな。
しかし、有人操作。シグナム達でもてこずるか。

「わかった。援護に……む？」

『どうしたの？』

「どうやら何かがこっちに向かっているようだ。目的は……オークションの品物か、それとも密輸品か」

『嘘っ！？　クラールヴィントに反応は無いのよ！？』

「ステルスか何かだろう。だが気配を感じる。どうやら援護には行けそうにない」

『そんな……』

「だが増援は送ってやる。ＦＷ達にも副隊長達にもな」

『それってどういう……』

「そのうち判る。切るぞ」

私は無理矢理通信を切った。

《「気配を感じる」か……ファン○ルでも使うか？》

《クイ○マンサにでも乗る気かお前は》

リインフォース、ネタ分かったのか。

ま、とりあえず増援を呼び出すか。

私がグリモワールを左手で持ち上げと、本は青く輝き、頁は勝手にめくれだす。

「我乞うは吹雪の獣。願うは鋼鉄の剣角。媛たる赤輝の星より来たれ。　氷雪の白狼！　鋼の牙！

第４章　１６項及び１８項！　狼機召喚！　突機召喚！　来い、デュラン！！　いでよ、愕天王！！」

私の詠唱に応え、２体の召喚獣が姿を現す。

右側からは、巨大な氷の結晶が現れ、それを砕いて白銀の狼が現れる。

左側からは、地面に皹が入り、地下から黒と赤い装甲を持った犀が現れた。

デュラン

出　典：舞－ＨＩＭＥ（ア／漫）／舞－乙ＨＩＭＥ（漫）

使用者：玖我なつき

種　族：チャイルド

説　明

玖我なつきのチャイルド。姿は背に2本の砲身を持った銀色の狼である。

リロードしたカートリッジによる砲撃や俊敏な動きを得意とする。

実体弾のクロームカートリッジ。凍結の弾丸のシルバーカートリッジが存在する。

さらに、アニメ版には巨大化することのできるクリスタルカートリッジ。

漫画版だと絶対零度のダイヤモンドカートリッジというものが存在する。

愕天王

出　典：舞－ＨＩＭＥ（ア／漫）／舞－乙ＨＩＭＥ（ア／漫）

使用者：杉浦碧／ミドリ

種　族：チャイルド／スレイブ

説　明

姿は黒と赤の装甲で、後ろ脚に二輪戦車を持った犀（サイ）。

頭にある角を用いた突撃を得意とする。

媛、乙の両作品に登場するがそれぞれ微妙に設定が違う。

媛（漫）…愕天大王という巨大ロボに変形できる。

乙（ア）…車輪を無くした飛行形態に変形できる。

乙（漫）…ミドリと合体して愕天神という鎧になる。

今回召喚したのは、特殊変形等が無い、媛：ア　に該当する。

ちなみに、名前の呼びは、アニメ版だと“ガクテンオー”、漫画版だと“ガッテンオー”となる。

《……今初代デジ○ンのような説明が入ったような。というか少し

は自重しろ》

「私の辞書に『自重』の文字は無い！」

《……はぁ》

リインフォースがため息を吐くが無視だ。
私は首に掛けた八雲を外す。

「いくぞ八雲。マテリアライズ！」

《八雲に限ってネタにはノってはくれな……》

『Ｃｏｎｎｅｃｔ　Ｓｏ　Ｋｕｓａｎａｇｉ　Ｍａｔｅｒｉａｌｉｓｅ』

《ノリノリ……だと》

私は蒼天のマイスターローブ……じゃなくて黒いチャイナドレス型のバリアジャケットを装着する。
しかし八雲。まさかノってくれるとは思わなかった（笑）

《……ティアナか烈にツッコミに来て欲しい。私じゃ押さえれん》

ふむ……確かにリインフォース弄ってばっかりじゃ楽しくないな。

今度はティアナでも弄るか。

「デュランはＦＷの、愕天王はシグナム達の援護に行け」

デュランと愕天王は頷くと、それぞれ私の命令に従い、みんなの元へ向かった。

「さて。私も行くとするか」

私はグリモワールを直し、『月』を構えて搬入口へと入って行った。

「ぶち抜けーーーー！！」

ヴィータがグラーフアイゼンで鉄球を叩き、ガジェットへ向け放つ

が、全て避けられる。

「でりゃあぁぁぁ！！」

ザフィーラも鋼の軛で攻撃するが、ぎりぎりのところで回避される。

「紫電…一閃！！」

私も3型に切り掛かるが、ベルトのようなアームによって紫電一閃は防がれる。

「くっ！」

私はレーザーポインターを当てられ、反撃されそうになったので、3型から離れヴィータやザフィーラと合流する。

「くそ！　こいつら！　ちょこまかと！」

「落ち着け、ヴィータ」

「早く新人達の援護に回らなきゃなんねぇってのに！」

ザフィーラがヴィータを落ち着かせようとするも、ヴィータはいっそう焦るばかり。

『みんな聞こえる?』

「どうした、シャマル」

「何があった?」

私とザフィーラの順に尋ねる。

『アオちゃんがそっちに増援を送ったらしいから、ヴィータちゃんは防衛ラインまで下がって新人達と合流して!』

……増援だと?　蒼はこっちには来れないのではなかったのか?

と思った瞬間、それは突然現れた。

目の前に赤黒い体に、兵車と呼ばれる二輪戦車が付いた犀が現れ、大型である3型を角で貫いた。

胴体を貫かれたガジェットは爆発を起こす。

「なんだ……アレ」

『どうやらアオちゃんも召喚をしたみたいなの』

「はあぁぁ！？」

召喚まで行えるだと……。
蒼、お前は一体何者だ？

「ヴィータ、今は蒼が召喚を行ったことを気にしている暇はない。早く新人達の援護に回れ」

「……わかったよザフィーラ」

渋々頷くとヴィータはホテルの方へと飛んでいった。
それと同時に、3型が破壊されたのに気付いた1型が4機現れ、レーザーを私達に向け発射する。
だか、召喚獣が私達を庇いレーザーを弾いた。

「ふ……助けて貰うばかりにもいかんなな」

私はレヴァンティンを構え召喚獣の戦車に飛び乗り、左手で手綱を握る。
すると召喚獣はガジェットに向けて突撃した。
ガジェットは迎撃しようと再びレーザーを撃つが、先程のように全て弾かれる。
攻撃が効かないとわかったガジェットは突撃を回避しようとするが、間に合わず4機の内2機は胴体を貫かれ爆発する。

「逃がさん！　レヴァンティン！」

『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ（シュランゲフォルム）！』

私はレヴァンティンを連結刃に換え、突撃を避けた残り2機を切り裂く。

「よし、このままガジェット達を叩くぞ！」

「心得た！」

私の指示にザフィーラと召喚獣は頷き、他のガジェットの殲滅に向かった。

ちょうど愕天王が1型を貫いた時

「スパイラルゥ……ダッシャーーー！！」

『ま、マスター！？　いきなりどうなさったのですか？』

「なんか叫ばなきゃいけないって思ったの」

というやり取りがホテル内部であったとか。

ホテル裏側。トラック搬入口

地下駐車場になっている為か辺りは暗い。

ベキ！　ギシギシ！　ガシャン！

そんな場所で何かを破るような音が聞こえる。
周辺に待機していたホテルの警備員は音に気付き、音源へと足を向ける。

「誰かいるんですか？　ここは危険ですよ」

警備員が懐中電灯を点けて、光を音源へと向ける。
そこには扉を無理矢理破壊され、積まれていた木箱が無造作に荒らされたトラックがあった。

「これはっ！？　本部に連絡しないｔ……ガハッ！」

警備員は通信機を取り出そうとしたが、影から現れた何者かによって背後から攻撃を喰らい、警備員は気絶してしまった。

影から現れた者。それは人型の虫だった。
全身は黒く、鎧のような上半身に竜のような尻尾。暗闇に輝く４つ目は紅く、首には背中まで届くくらいの赤いマフラーをしていた。
ガリュー。それがこの人型昆虫の名前だった。

ガリューは左手に小さな木箱を持っていた。どうやらスカリェッティの目的の品のようである。
ガリューは目的は達したと思い、この場から離脱しようとした。

が、その時

ジャラララララララ！！！

「　！　」

ガキィィィィン！！

ガリューは突如飛来した刺の付いた鉄球を空いてる右手で防ぐ。
完全に鉄球の勢いを殺した。が、しかし――――

「――第2章　第3項　壊れた幻想＜ブロークンファンタズム＞！！」

突如、鉄球と鎖が爆発する。
ガリューは爆発する瞬間後ろへ跳び、ダメージを軽減した。

「何故だろうな？　『砕』を使うと、『必殺！！　グラビトンハンマー！！！』とか、『環境を考えろーーー！！』とか、『撃滅！！』とか、『メェェアァァルイィィィィィ！！！』等と叫びたくなる」

《そんなもの知らん。というか、最後のは何だ！？》

「中華武〇祭でググれ」

（※〇に1字入ります）

ガリューの目の前の暗闇から、突然、蒼が現れた。
ガリューは敵の登場に対すること、独り言を言っているイタイ奴だなー、ということの二重の意味で蒼を警戒する。

「シャマルのセンサーに引っ掛からなかったのはお前か。だが、残念。気配は感じたぞ」

蒼は喋りながら、先程爆発させた鎖を再構成する。
八雲弐式『蛇』の鎖、参式『砕』の鎖と鉄球は、蒼の魔力から形成されているため再構成が可能なのである。

「その木箱。何が入っているか……調べさせてもらう！　弐式『蛇』！！」

『２ｎｄ　Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｉｎｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ』

「　！？　」

蒼は手斧を二つに分け、魔力鎖で繋いだ鎖鎌へと変形させ、片方を投擲する。

ジャラララララ！！

鎖の音が地下駐車場に響きながら、鎌はガリューへと向かいガリューの右腕に絡み付く。

「ロードカートリッジ！　陸式『劈』！！」

『６ｔｈ　Ｍｏｄｅ　Ｔｗｉｎｓａｂｅｒ　Ｆｏｒｍ．　Ｏｎｅ　Ｈａｎｄ　Ｍｏｄｅ』

その状態のまま、蒼は鎖を切り、もう片方の鎌だけ剣に変形させ、左手で鎖を握り右手で剣を持って、鎖を引っ張ってガリューを引き寄せる。

ガリューはその場で踏ん張ろうとしたが、思いの外に蒼の力は強く、徐々にに蒼の方へと引きずられてゆく。

２人の距離はあと５ｍ。
その瞬間、蒼はガリューに切り込んだ。

「ハアアアア！！」

蒼は剣を袈裟掛けに振り下ろす。
ガリューは、左手に木箱。右手に鎖鎌。剣を防ぐ術（すべ）がない。
剣撃がガリューに当たる――――筈だった。

ボン！！　ピキィィィンーーーー！！

突如、何が爆発し、辺りに音と光をばらまいた。

「な！？　スタングレネード！？　くそッ！！」

ヒュンヒュン！！

蒼は辺り構わずに剣を振る。

だが、光で何も見えず、その攻撃はほとんど当たることはなかった。

「ちッ。逃げられたか」

光は収まったが、どうやらガリューには逃げられてしまったようである。

その証拠に、ガリューがいた場所には投げ付けた鎌が落ちていた。

蒼は鎌を拾い上げ、八雲を『月』へと戻す。

「ん？」

《どうした？》

蒼は鎌があった場所に木箱の破片が散らばっていることに気付いた。
そして、破片の中止に黒い宝石があった。
蒼は宝石を手に取る。

《それが、あの木箱に入っていた品物のようだな》

「ああ、そうらしい」

宝石の大きさは、レイジングハートの待機モードよりも少し大きい。
大きめのビー玉、もしくは眼球くらいの大きさである。

「（なんだこの宝石から発っせられている感じは？　以前……どこかで……）」

《蒼。奴も逃げてしまったことだ。新人達の援護に向かおう》

「あ、ああ。そうだな」

蒼は疑問を残しながらも宝石を八雲の内部に収納し、ＦＷ達の元へ向かった。

ダンダンダン！！

ティアナはクロスミラージュのトリガーを引き魔力弾を放つが、ガジェットはあっさりと回避する。

直後、ミサイルポットを搭載した1型がティアナへ向けミサイルを撃ち出した。

再びティアナはトリガーを引いて魔力弾を放ち、ミサイルを相殺する。

「ティアさん！！」

キャロがティアナの背後に1型がいることに気付き叫ぶ。

ティアナはジャンプで1型の攻撃ん回避し、反撃するがＡＭＦで防がれる。

「ちっ！」

『防衛ライン、もう少し持ちこたえててね。ヴィータ副隊長が直ぐに戻ってきるから』

「守ってばっかじゃ行き詰まります！　ちゃんと全機墜とします！」

ティアナはシャマルの指示に反論し、反撃にでようとする。

『ちょっ！　ティアナ大丈夫？　無茶しないで！』

「大丈夫です。毎日朝晩、練習してきてるんですから」

シャーリーが止めようとするも、ティアナは止める気配を見せない。

「みんな、センターに下がって。あたしとスバルのツートップでいく！」

「「は、はい！」」

「ティアナさん無理しないで下さいね。何かあったら援護します」

「グルル……」

アリスはそう言い残してエリオ、キャロ、デュランと共に後ろへ下がる。

「ありがと。　スバル！　クロスシフトA！　行くわよ！！」

「おぉう！！」

スバルは答えると、ウイングロードを更に伸ばし、その上を駆ける。
それにより1型はスバルに意識は集中し、ティアナは攻撃へと取り掛かる。

「（証明するんだ）」

ガシュガシュ！！

「（特定の才能や凄い魔力がなくったって、一流の隊長の部隊でだって、どんな危険な戦いだって！）」

カートリッジをロードし、ティアナの足元にはオレンジのミッド式魔法陣が現れ、さらにオレンジの魔力弾が次々と現れる。

「あたしは…ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

あまりの魔力負荷で電流が走るクロスミラージュを正面に構える。
前方ではスバルが1型の攻撃を交わしたり防御したりしながら注意

を引き付けている。

『ティアナ！？　４発ロードなんて無茶だよ！　それじゃティアナのクロスミラージュも！！』

「撃てます！」

『Ｙｅｓ』

シャーリーが再び止めようとするも、ティアナは自分に負荷が掛かるのも構わず止めようとしない。

「クロスファイヤー…シュート！！」

一斉に浮遊させている魔力弾を撃つ。
スバルに気を取られていてティアナの攻撃に反応が遅れたガジェット達は、次々と胴体を撃ち抜かれる。

「やあああああああ！！！」

さらにティアナはクロスミラージュのトリガーを引いて魔力弾を乱射する。

だが、１発の弾丸が逸れた。

ガジェットを逸れた弾丸はスバルへと向かう。

「はっ！」

スバルは弾丸に気付くが回避も防御も間に合わない。

弾丸が当たると思われた瞬間――

ダンッ！！

蒼い魔力弾が橙の魔力弾を弾いた。

弾かれた弾丸はそれぞれ逆方向の森の中へと落ちてゆく。

地面に激突した弾丸は爆発を起こした。

「あ……」

もう少しで自分の相棒に攻撃が直撃するところだった。

ティアナはそのショックで軽い放心状態になっている。

「ティアナ！　この馬鹿！！」

ちょうどその時、ヴィータが駆け付けた。
どうやらさっきの出来事を目撃していたようである。

「無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！」

「……あ」

「あ、あの、ヴィータ副隊長。今のも、その、コンビネーションの内で……」

スバルは必死に弁解しようとするが

「ふざけろタコ！　直撃コースだよ今のは！！」

逆にヴィータの怒りを買ってしまった。

「違うんです！　今のはあたしがいけないんで……」

「うるせぇ！　馬鹿ども！　もういい、後はアタシがやる。二人まとめてすっこんでろ！！」

二人ともショックを受け、しばらく何も考えることができなかった。

「なんとか直撃は免れたか」

蒼は捌式『閃』のスコープから目を離す。

「ほんと？　新人達に怪我はない？」

「ああ、大丈夫だ。だが、二人は無茶し過ぎだな」

隣のシャマルと話しながら再びスコープを覗くと、スバルとティアナが怒鳴られていた。

「シャマル。残りのガジェットは？」

「えっと……大分減ってきたわ。後はシグナム達だけでも大丈夫」

「そうか。一応私もシグナム達のサポートに回る。ＦＷ達は下がるように言っておけ」

「わかったわ」

そう言って、蒼は屋上から飛び降りガジェットの掃討へと向かった。

その後、全体的に見ていくつか問題もあったが、ホテルアグスタにおける戦闘は全て終了したのであった。

第３４話　ホテルアグスタ　後編（後書き）

今回は前書きでもちょっと書いたように、あとがきコーナーは無しで少し真面目な話を。

前回の投稿で以下のようなコメントが感想板に書き込まれました。

一話が吃驚するほど短いですね。プロローグだけかと思ったら以降も短かった。フェイトに助けられたあたりで読むの止めましたからあとは知りませんけど。まあ、これだけ話数があってもアグスタまでしか進んでいないなら大して文量がないのは確定でしょう。

これに対して「評価する場合の注意事項」に次のような項目があります。

▽小説の文字数に関する評価はご遠慮ください。
小説家になろうは文字数制限はしていません。文字数に対する評価はご遠慮ください。

とあります。明らかにルールを守っていません。

確かに私が最初の方に投稿した話は短いです。確認してみたら、１～２話は６００字。３～４話は１０００字程度でした。
ですが、矛盾があったとか展開がおかしいといった指摘等ではなく、文字数が少ないからといって、たいした作品じゃないと判断するの

は勝手すぎるのではないかと。

「嫌なら読むな！」とまで言うつもりはありませんが、せめてマナーを守って感想を書いてもらいたいです。

まあ、このことについてはここまでとしまして、一応皆様に２～８話の部分について判断を仰ぎたいと思います。

２～８話を結合修正した方がよろしいでしょうか？

その場合、２～４話、５～６話、７～８話を結合して、新たに２・３・４話としたいと思います。

そうすると、新たな２・３話は約２５００字。新４話は４５００字程度になります。

また最新話が３４話から３０話辺りになると思います。

修正した方がよいかか、修正しなくてもよいか、感想板にて書き込んでくれるようお願いいたします。

長々と不愉快だと思われることを書いて申し訳ありませんでした。

次回は修正するかによって第何話か変わるのでタイトルだけ紹介を。

次回、真紅の閃光　ｖｓ　疾風の機人

それでは、次回もよろしくお願いいたします。

第３５話　真紅の閃光　ＶＳ　疾風の機人（前書き）

ライ様、九尾様、暇人様、不知火仁様、Ｋｙｏ様。励ましの言葉と意見、ありがとうございました。

結合修正は無しの方向でいきたいと思います。

これからも頑張っていきたいと思います。
更新速度は遅いですが、これからもよろしくお願いします。

さて、本編前に二言。

１つ、一般局員はガンダムネタでいこうかと思います。

もう１つ、戯言シリーズを読んだことがある方は、今回の話で烈と蒼の本名がわかるかもしれません。
まあ実際に二人の本名を出すのは少し先ですが。

では本編をどうぞ。

第３５話　真紅の閃光　ＶＳ　疾風の機人

六課メンバーがホテルアグスタにて戦闘中の頃、烈はギンガを含む十数名の１０８部隊の隊員を連れ、森の中のとある研究所の前にいた。

「……でかいな」

「よく今まで気付かれませんでしたね」

ハイネとギンガが研究所を見上げて呟く。

「ったく！　また、いかれたマッドでも関わってるのか！？」

「最近は密輸の裏側に違法研究者がいる場合が多いからな。毎回毎回、捕まえるのが面倒だぜ」

「愚痴を言っても変わらないぞ。イザーク、ディアッカ」

「うるさいアスラン！　そんなことはわかっている！！」

「はいはい。落ち着いてね。とりあえず部隊分けの指示するから」

２人の傍らでは烈と３人の局員が話している。

１人はイザークと呼ばれた銀髪に近い白髪で、いらいらしている青

年。
１人はディアッカと呼ばれた薄く黒い肌に金髪の青年。
そしてもう１人はおとなしそうな黒髪で、アスランという名前の青年だった。

ちなみに、烈・アスラン・ハイネの３人は、管理局内の男性局員ランキングＴｏｐ１０に入っていて、女性からの人気が高い。
ランキングには他にもユーノやクロノの名前もあるが、この２人は登場するかすら危ういのでどうでもいい。

さて、何故烈達がこのような所にいるのか。
時間は２時間程遡る。

１０８部隊　食堂

午前中の書類整理が終わり、烈は隊の仲間達と昼食を採っていた。

「しかし、六課との合同捜査。あまり進展が無いな」

そんな中、ハイネが冷し中華を食べながら話題を出す。

「そうだな。確か最初の捜査の時に、烈とハイネ達の班がレリックを見つけたくらいか」

「だけど逃げられたからねぇ。捕まえた密輸組織側の人間もなかなか吐かないみたいだし」

ハイネの話題に、アスランは麻婆豆腐を、烈は唐揚げ定食を食べながら答える。

１０８部隊では地球ブームの影響で、食堂に地球の食べ物のメニューがいくつか存在する。

ちなみに、メニューの作成に協力したのは烈とはやてである。

この３人、先程も述べたように人気が高いだけでなく、顔立ちが良い（烈は眼帯とかあるが）且つ性格も良いので、回りからの視線（特に女性）を集めやすいのだが、３人は全くそれらを気にせずに話を進めてゆく。

「アスラン……あまり思い出させないでくれ。軽くショックだぜ？女の子相手に逃げられるって」

「す、すまない」

確かに、9人の男で追い掛けたのに女の子一人捕まえられないのはショックだろう。

「女の子……ねぇ」

「ん？　そういえば、烈。お前、ギンガとはどうなんだ？」

いきなり話題を変えるハイネ。
さっきまで軽くショックを受けていた様子から、もう立ち直っている。

「どうなんだって……どういうこと？」

「だってお前ってギンガと仲いいじゃん？」

「まあ4年も居候している訳だし。……居候っていえばアスランもだよね？」

「ああ、まあ…な」

「話逸らすなよ。で、付き合ったりしてないのか？」

「今の俺にそんな余裕はないからね。それに、眼帯してる人と付き合いたがる人なんていないと思うけど」

「外見じゃ女の子は判断しないと思うぜ。てかそんなこと言うんだ

ったら眼帯外せよ」

「外せないんだよ。なんでか知らないけど」

「そりゃまた奇妙な眼帯なことで」

ハイネは「やれやれ」と言い、冷し中華を食べ尽くす。
と、ちょうどその時。

「お、いたいた」

「カルタス二尉！　お疲れ様です」

カルタスがざる蕎麦が乗ったトレーを持ってやって来た。
アスランが気付いて敬礼し、それに続いて烈とハイネも敬礼する。

「お前達3人が揃っていると目立つからな」

「は？」

「ああ。なるほど」

「……眼帯、外せないなら常に前髪で隠した方がいいですか？」

アスランは意味がわからないようで、烈は目立つ理由を勘違いして

おり、カルタスの言った意味がわかったのはハイネだけだった。

「いや、そのままでいいと思う」

そう言って、カルタスは3人に混じるようにして座る。

「で、何か御用ですか？　俺達を探してたみたいですが？」

既に昼食を食べ終えているハイネが尋ねる。

「ああ。ちょっと行ってもらいたい所があってな」

「行ってもらいたい所？」

「……違法研究所でも見つかったんですか？」

「察しがいいなアスラン。その通りだ」

カルタスは蕎麦をズルズルと啜ってから言う。

「2日前に密輸品の移動経路を調べていたら、その先にとある廃棄研究所があったんだ。管理局に登録されていないから恐らく違法研究所だろう」

「廃棄研究所……ですか？」

烈が少し考えながら言う。

「ああ。廃棄されてからまだそんなに日も経っていないみたいだから、お前達に調査に行ってもらいたい。あ、３人共合同捜査の案件を持っているが、そっちは後回しにしていい」

「構いませんが、どれほど隊員を連れていってよろしいですか？」

アスランが尋ねる。

「１０～１５人程度だな。それ以上は回せないな」

「了解しました」

そう言って、烈はトレーを持って立ち上がる。
アスランとハイネも、烈同様立ち上がる。

「では、草薙烈陸曹長、及びハイネ・ヴェステンフルス陸曹、アスラン・ザラ陸曹。これより任務へと向かいます」

烈の敬礼に合わせ、ハイネとアスランも敬礼する。

「頼む。気をつけてな」

「「「了解」」」

とまあこのような理由で、烈達はこの廃棄研究所にやって来た訳である。

「しっかし、広いな」

現在、烈、ハイネ、アスランの3班に分かれて研究所内部を探索中。
烈の班は、烈、ギンガ、エイジス、ミゲル、最後にトールという茶髪の少年という五人編成。

全員バリアジャケットを展開していて、今呟いたのはミゲルである。

「ホントですね。一体どうやってこれほどの研究所を建てたんでしょう？」

ギンガもそれに応え、自身の感想を述べる。

「（これほどの建物なら相当な資金が必要な筈。でも……その資金は一体何処から？　研究者が資産家だったり富豪の人間だったら説明はできる。でも、そうでなかったら？　資金の無い研究者達は何を頼る？）」

逆に烈はこの研究所に違和感を持っていた。
みんなの先頭で通路を歩きながら考え込む。

「……マイロード？　どうかしましたか？」

考え込んでいる姿に不安になったのか、エイジスが心配そうな顔で烈の顔を覗き込む。

「えっ？　……だ、大丈夫だよ、エイ。ちょっと考え事してただけ」

「そうですか。……あまり一人が抱え込んだりしないでほしいです」

「その気持ちで十分だよ、ありがと」

烈はエイジスを心配させぬように笑顔を向ける。

「トール、アスラン達に連絡とってくれる？　何か見つけたりしてないか聞きたいから」

「了解～」

トールは烈に頼まれ、通信用のモニターを出して連絡をとろうとするが

「あれ？」

モニターには砂嵐が走っているだけだった。

「あっれ、故障かな？」

「どうしたんですか？」

「いや、連絡がとれ……」

ギンガがトールに近付こうとしたその時

――――――殺気――――――

「ッ！？　全員回避！！」

「「「　！！？　」」」

「グガッ！！」

「トール！！」

烈の悲痛の叫びが通路に響く。

烈は前方からの殺気に素早く気付き反応したが、トールは高速で通り過ぎた“何か”からの攻撃の餌食になった。

トールは通路の壁に叩き付けられ気絶している。

そして、“何か”は背後から再び殺気を放ちながらこちらへ高速で迫る。

「こんのぉ！！　いくら速くてもッ！！」

ミゲルは両刃剣型のアームドデバイスを抜き、高速で迫る“何か”に切り掛かろうとするが、逆にデバイスをへし折られ、トール同様壁に叩き付けられる。

「ゴハッ！！」

「ミゲルさんッ！！」

“何か”はミゲルを倒して再び烈達へ迫る。
“何か”は烈目掛けて拳を振りかぶるが

「（見えた！）そこォッ！！」

烈は少しだけ相手の速さに慣れたのか、高速の拳に反応し拳を繰り出す。
烈の拳と“何か”の拳は激突し、お互いの威力を相殺する。
烈は続けてローキックを繰り出したが、“何か”はバックステップで蹴りを回避した。

そこでやっと烈達は“何か”の姿を確認することができた。

睨むような金の目つきに、濃い紫のショートヘアの女性。
服装は首と胸の間にナンバー?のプレートがある灰と青のボディスーツで、豊満な胸やヒップや体のラインが強調されていた。
さらに、両手足首には虫の羽のようなブレードが付いている。

「戦闘……機人?」

ギンガが恐る恐る呟く。

「チッ！　今のでタイプゼロ以外は倒すつもりだったが……流石に簡単にはやられないか、真紅の閃光」

「「　!?　」」

「……」

タイプゼロ。それはギンガとスバルのことである。
本来、2人は戦闘機人の実験体として生み出された。
つまり、2人は戦闘機人の初期起動型ということになる。

その事実を知る者は極僅かしか知らない。
逆に、そのことについて知っているということは、戦闘機人に深く関わっている人物ということになる。

「……ギンガ、エイ。ミゲルとトールを連れて撤退しろ。そしてハ

イネやアスラン達と合流して、部隊から応援を呼べ」

「えっ……ッ！？」

ギンガは烈を見て驚いた。
なぜなら、烈の髪の色が一部黒くなっていたからだ。

「（これって……あの時と……）」

「逃がすと思うか！！」

戦闘機人の女性は逃がすまいとギンガに飛び掛かろうとするが

ヒュンヒュンヒュン！！

「ッ！」

何かを避けるためか、突然動きを止め後ろへ跳ぶ。
さっきまで女性がいた場所には、無数の傷跡のようなものができていた。
烈の魔力絃による攻撃である。

「さっさと逃げろ、ギンガ、エイ」

「で、でもッ！」

「マイロード！」

「上官命令だ！！」

「「ッ！？」」

烈の一喝に二人は信じられないような表情を浮かべる。
烈は基本、階級等の権力を盾にするようなことはしない。
小隊を指揮する時には指示を出すが、それは命令とは別である。

「でも、烈だけを置いていけない！！」

ギンガは烈が絶対にやらないようなことをしても動こうとしなかった。
相手の目的がギンガだと既にわかっていて、烈はギンガを逃がそうとしているのに、ギンガはそれに気付いていなかった。

「……羅生門」

『羅生門』

突如、烈とギンガの間に土の壁が現れる。
それは徐々に通路を塞いでゆく。

「ッ！　れ……」

「マイロー……」

ドシン！！

二人の叫びが届く前に、土の壁は通路を塞いだ。

「済まないな、紅月」

『いいえ、主。私は正しい判断だったと思いますよ』

「ありがとう。さて――――」

烈は２０ｍ程距離を取り、烈を睨み付けている女性を見る。

「いろいろと話を聞かせてもらおうか。君の後ろにいる人とかについて」

「フンッ！　話すとでも？」

「無理にでも話してもらう。捕まえて……尋問なり拷問なりしてでも……なッ！！」

烈は魔力絃を伸ばし、多角攻撃を仕掛けた。
烈の絃による攻撃範囲は最大１００ｍ。さらに、この場所は室内の狭い通路。
圧倒的に曲絃術に有利な領域（テリトリー）だった。

「ＩＳ発動！　ライドインパルス！！」

女性は足元に幾何学模様のテンプレートを展開する。
そして、迫り来る絃に高速で突っ込んだ。

「くッ！」

烈は急いで絃の機動を変えようとするが、女性のスピードが速過ぎて絃が追い付かない。
絃が届かないスピードで攻撃する。これが女性の考えた戦法だろう。
これでは地形で烈が有利だとしても、曲絃術はまともには使えない。

「ハアアア！！」

「紅月！」

『障壁！！』

烈は女性の拳を紅月が展開したプロテクションで防ぐ。
そして、魔力紘を切り離し近接戦闘を仕掛けた。

「ハアッ！！」

水平蹴りで足元を崩そうとするが避けられる。

「セイッ！！」

お返しとばかりに、女性は手首のブレードで切り掛かる。
烈はブレードを篭手で防ぐ。

ギギギギギギギ！！！

ブレードと篭手が鍔ぜり合いのように火花を散らす。

「うらぁッ！！」

「ガッ！！」

烈は空きだらけだった女性の胴体に膝蹴りを打ち込む。
本来の烈ならば女性相手に加減をするのだが、髪や口調の変化の影響か、女性相手であろうと容赦していない。

そのまま烈は怯んだ女性に打撃のラッシュを放ち続ける。
女性は腹部のダメージを堪えながらラッシュを防ぐ。
だが、徐々に防ぎきれなくなってゆく。

「ハァッ！！」

「ぐッ！　……ライドインパルス！」

なんとか攻撃を防いでいた女性だが、遂に烈の掌底が腹部に直撃した。
直後、女性は高速移動で距離を取る。

「（クソッ！　こいつ……強…）」

そう、思い掛けた時だった。

――――ドクン！

「がッ！　ガハッ！」

突然、女性は腹部を押さえ血を吐いた。

「ガハッ！　ガハッ！（何故……血が……さっきの掌底はそれほどたいしたダメージではなかったはず）」

「内臓を直接攻撃した」

「　！　」

烈は女性の心を読んだかのように答える。

「さっきの膝蹴りのダメージが残ってたからな。今の掌底程度でも内臓にダメージを与えるには十分だった」

コツコツ、と烈は女性に向かってゆっくりと歩いて行く。

「（駄目だ……動けない……）」

烈は既にあと５ｍという所まで辿り着いていた。

「動けないように足１本でも貰うか」

そう言って烈は魔力刀を形成し、女性に向けて振り下ろそうとした。

――だが、しかし――――

ドゴオォォォォン！！！

突如、通路の天井が爆発した。
天井の瓦礫が烈へ向けて襲い掛かる。

「――――なッ！！」

烈は瓦礫を回避したが、瓦礫は烈と女性の間に積み重なって壁となった。
通路は瓦礫により完全に塞がれてしまった。

「……クソ！！」

烈はおもいっきり通路の壁を殴る。
せっかく何か情報を手に入れられると思ったのに、思わぬ事態が起きた。
多分、女性には逃げられただろう。

『……主』

「クッソオォォォ！！」

瓦礫と土の壁に挟まれた通路の中に、烈の叫びが響いた。

一方、女性側では

「一体……何が……？」

「トーレ！！」

女性―トーレが振り返ると、小柄で銀髪。右目に眼帯を付け、トーレと同じボディスーツとコートを着た少女、チンクがこちらにやってきていた。

「チンク……か」

「トーレ、何があった？」

「タイプゼロを発見したが、『真紅の閃光』と戦闘になって逃げられた」

「ッ！　……そうか」

「ところで、天井を爆発させてくれたみたいだな。助かった」

チンクの所有するＩＳ―インヒューレントスキルは、自身の触れた金属を好きなタイミングで爆発させるもの。
だからトーレはチンクのＩＳで天井を爆発させてくれたと思った。

「何のことだ？　私はドクターの命令通り、ここに残っていたデータを破壊して、ちょうど今お前の所に来たんだが」

「何？　なら、さっきの爆発は……一体誰が？」

「わからん。だが、早く撤退して治療を受けた方がいい」

「……ああ、そうだな」

トーレの中に疑問は残ったが、トーレはチンクと共に研究所から脱出した。

数時間後

１０８部隊　部隊長室

「失礼します」

烈が部隊長室に入って来た。既に髪の色は元に戻っている。
部屋の中にはゲンヤがいてお茶を飲んでいた。

「おう、聞いたぞ。ギンガにおもいっきり叩(はた)かれたってな」

ゲンヤの言う通り、烈の右頬は赤く腫れていた。
あのあと、ギンガが応援を連れて来た直後、烈はおもいっきりギンガに叩かれた。
その時ギンガは、「もっと自分のこと考えて！！」と叫んだ。

ギンガは烈のことを心配して言ったのだが、烈が４年間必死でゲンヤの為に情報収集をしていることに気付いてはいなかった。

「叩かれたことなんて気にしていませんよ」

「そうかい。で、どうした？　カルタスからあの廃棄研究所についての報告は上がってるが？」

応援が来た後、再び襲撃されないかと警戒しながら研究所の調査は行われた。
その結果、研究所は人造魔導師の研究所だということがわかったのである。
ただ、残っていたのは破棄された生体ポッド程度で、研究データは殆ど削除。又はコンピュータごと破壊されていた。

烈は懐から1枚のデータディスクを取り出す。

「それは？」

「研究所で偶然破壊されていなかったハードディスクのデータを抜き取ったものです」

「……何でカルタスに渡さなかった？」

「……データを見て下さい」

烈はディスクをゲンヤに渡す。
ゲンヤはディスクを机のコンピュータに入れ、データを開く。

「こいつは……」

「あの研究所に保管されていた、人造魔導師研究の素体にされている人々のデータです」

「なんでこんなもんを…」

「よく見て下さい」

「……なん…だと？」

烈に言われ、ゲンヤは表情されるデータを下へスクロールしていくと、信じられない名前が見つかった。

「……クイント」

そう、その名前とはゲンヤの妻でスバルとギンガの母、クイント・ナカジマの名前だった。

「……ギンガには見せる訳にはいかないと思いましたので」

「……そうか」

「ですが、これでグランガイツ隊長の言った言葉の意味がわかりました」

烈が頭に浮かべるのは数日前の六課との合同捜査。
あの時ゼストは、クイントは生きていると言った。
そして今回見つかったこのデータにクイントの名前があった。

「つまり、クイントは違法研究者の研究材料にされてるって訳か？
クソッ！！」

ドンッ！！　と、ゲンヤは怒りを込めて机を叩く。
怒るのも当然だろう。自分の妻が研究材料にされてるとなれば。

「恐らく、メガーヌさんも同じ状況にある可能性が高いかと」

「ありえるな。……ありがとな烈。お陰で一歩進んだぜ」

「いえ、それほどでも」

「頼ってばっかりでスマン」

「俺に出来るのはこれくらいですから。では、また何かわかったら」

「ああ、頼む」

「はい。失礼します」

そう言って烈は部隊長室を出ていった。
残されたゲンヤはというと

「クイント……生きてんだな」

そう呟く声には、喜びと新たな決意が含まれていた。

ある広く薄暗い部屋に、一人の女性が立っていた。
女性の年齢は約２０代後半といったところで、セミロングの茶髪に、

眼鏡を掛けていた。
そう、以前スカリェッティと通信で話していた女性である。
女性は目の前に映る2つのモニターを見ている。
右側のモニターには、蒼とガリューの戦闘が。
左側のモニターには、烈とトーレの戦闘が映っていた。

「流石にやるわね」

女性は戦闘状況を眺め続ける。
すると、右側のモニターでガリューがやられそうになった。

「あらあら大変ね。でも、ジェイルに貸しが作れるわ」

女性は手元のコンソールを叩く。
すると、右側のモニターは一瞬光った後に砂嵐が走り、何も映らなくなった。

「確か、あっちの監視ロボについてたのはスタングレネードだったわね」

そう言って、今度は左側のモニターを見る。
烈がトーレに近付いていくところだった。

「あら？　ラッキーね。これで貸し2つ目だわ」

再びコンソールを叩くと、映る影像は爆発し、モニターに砂嵐が走った。

「あっちはただのグレネードだったわ」

そう言って砂嵐の走るモニターを消す。

コツコツ

その直後、女性の背後から足音がした。

「あら？　ずいぶんと早いお目覚めね、《死神》」

女性が足音に声を掛けると、足音の主は姿を現した。

年齢は17～8くらいで、銀の髪に碧い瞳の少年だった。

「仮にも貴方に施したのは人工心臓の移植手術。3ヶ月は絶対安静なのよ。無理して動くと死ぬわよ」

「……奴は？」

「あの坊や？　大丈夫よ、今ジェイルのところの戦闘機人を圧倒したくらいよ。簡単に死んだりなんかしないわ」

「そうか。ならいい」

《死神》と呼ばれた少年は、再び闇の中へと戻って行った。

「ふぅ。面倒な子ねぇ」

少年がいなくなったのを確認すると女性はため息を付く。

「まあいいわ。全て私の思う通りに物語は進んでいる。せいぜい私の手の平の上で踊ってちょうだいね――――」

「――――実験体の坊やと、研究体のお嬢ちゃん」

その呟きは闇の中へと消えていった。

第３５話　真紅の閃光　ＶＳ　疾風の機人（後書き）

～～あとがきコーナー～～

Ｋ２「はい。お送りしました。烈　ＶＳ　トーレでした」

は「それはいいんやけど」

フェ「何で私達がこの場に？」

Ｋ２「出番がいらないなら帰ってよろしいですけど？」

フェ「……ごめんなさい」

は「作者さん！　なんで私達の出番少ないんや！！　なのはちゃんでさえ、“中の人”のネタがあったんやで！！」

Ｋ２「だってこの作品、メインヒロインはギンガ。サブヒロイン兼副主人公が蒼だから」

は「ｏｒｚ」

フェ「ｏｒｚ」

Ｋ２「ちなみに、はやては烈と蒼の模擬戦以降、『その日、機動六課』のところの話までホント出番無しの予定だったから」

は「なんやてーーー！！　酷い！！　横暴や！！」

K２「作者ですから。一応、コラボ依頼の話で出番あるから」

は「ホンマか！？」

K２「はいはいホンマです。じゃ、フェイト。これ読んで」

フェ「えっ？　え、えっと……次回、第３６話　タイトル未定？」

は「タイトルぐらい考えりぃ」

K２「浮かばなかったんだからしかたないでしょ。あ、３６話の前に多分コラボ話と５０万記念が入ると思います」

フェ「私……出番あるよね？」

K２「３６話には出る」

フェ「ほっ。よかった」

K２「それでは、次回もよろしくお願いします」

番外編　獣の人再び（前書き）

今回は、暇人様とのコラボ話になります。

それではどうぞ。

番外編　獣の人再び

いきなり八神に呼び出されたと思った矢先にこれだ。

「地上部隊合同演習？」

「そや」

「それがどうしたんだ？」

「いや、な。この演習、参加せんと地上本部から睨まれるんよ」

……つまり面倒事を押し付ける気まんまんと。

「最低3名、各部隊から参加させなあかんのよ」

「私に行けと？　別に他にもいるだろう？　高町やハラオウンに行かせればいい」

「なのはちゃんは参加決定しとる。フェイトちゃんは執務官仕事で忙しいし、ヴィータとシグナムは交換部隊の世話とかで忙しいんよ」

「ならお前が行け」

「私はやらなきゃあかん事務仕事があるんよ～」

「……《リインフォース。この狸、一回、殺っていいか？》」

《『殺し名』のお前だと本気で殺しかねないから止めてくれ。所属から考えても、間違いなく死に方が碌なことにならないから尚更な》

ツッコミ入れるとこそこか？　『殺し名』じゃなきゃ殺っていいのか！？　仮にもお前の元主だろ！？

《……はやては変な方向に育ってしまったみたいだから（遠くを見つめながら）》

あ～～～。納得。

あれだろ？　シグナムの胸を揉んだりとか、シャマルの胸を揉んだりとか、高町の胸を揉んだりとか、ハラオウンの胸を揉んだりとか。

……何か軽く殺意が沸いて来たな。

「あとナカジマ三佐が言っとったんやけど……」

八神は私やリインフォースが考え事をしているのに全く気付かず話を進める。

ってナカジマ三佐って誰だ？　スバルの親か？

「ああ、ナカジマ三佐ってのはスバルの父親で、烈君のいる部隊の隊長な」

「説明乙。で、スバルの親父がなんだって？」

「烈君も合同演習に参加させるってな」

「なん……だと…？　……ならしかたない。協力してやろう」

《……蒼》

五月蝿い。あんまり兄さんに会えてないんだからいいだろ。

「ホンマ！？　ありがとな。詳しいことはなのはちゃんから聞いてな」

「ああ、わかった。なら私は部屋に戻る」

そう言って、蒼は部隊長室を出て行った。

「……それにしても、烈君の名前を出すだけでＯＫやなんて……」

一人残されたはやてはというと

「……蒼ってブラコンやったんやな」

本人の前で言ったらぶっ飛ばされそうなことを呟くのであった。

数日後

「流石に人が多いな」

私達は地上本部の特別演習場に来ていた。

「ホントだねーー。烈兄もいるっぽいけど」

「そうらしいな」

ちなみに、私は今スバルといる。
高町はどっかに呼び出された。
今回アリスは連れて来てはいない。
融合騎は目立つからな。

「あれ？」

「どうした？」

「あれって烈兄じゃない？」

「何！？」

スバルの指差した方を向くと、確かに兄さんが2人の男性隊員と一緒にいた。

「本当だ。スバル、行くか」

「うん！」

という訳で、私とスバルは兄さんのいる方へと歩き出した。

「流石に地上の全部隊からの参加となると人が多いね」

一方、烈は流石双子と言うべきか、演習場にいる人々を見て、蒼と同じ感想を述べた。

「そうだな。確か予定だと参加者を2組に分けて模擬戦をするらしいぜ」

「その場合、総大将を倒したら勝ちってルールだろうな」

烈と同じく、１０８部隊の隊員として参加者していたハイネとミゲルもそれに答える。

「ってなると……マネキン一佐やスミルノフ一佐が副将。クシュリナーダ少将、ブレックス准将辺りが総大将に選ばれそうだな」

「あ、わかるわかる」

そんな風に3人は喋っているが、3人は周りの隊員達、特に女性からの視線を向けられていることに気付かない。
そっちの方の声を拾ってみると……

「ねぇ、あれってヴェステンフルス陸曹と草薙曹長よね？」

「ホントに!?　男性局員ランキング3位と7位の人よね!?」

「声掛けてみない？」

「そうね、何人かで行けば……何とかなるかも」

なんて会話が行われている。
だが、彼女達の思惑はある局員によって破られた。

「れーーつーーーくーーーん!!」

一人の女性局員が走ってきて烈に飛び付いたのだ。
犬のような耳に、狐のような尻尾の付いた女性である。

「し、し、シアさん！！？」

「ひっさしぶり～～～～！！！」

みなさん覚えているでしょうか？

彼女の名前はシア・グランテ。

以前、格闘技大会で烈やエルフィと戦った半獣人（ハーフウルフ）の女性である。

ちなみに彼女、ギンガ、ティアナ、ツバキの３人から睨まれている。

理由は、まあ、自分達ができないこと（烈に抱き着くとかほお擦りするとか）を平然とやってのけるからである。

（※他にも、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～聖痕を携えし魔導騎士～』や『リリカルなのはＬＯＶＥＲＳ～愛が織り成す奇跡～』にて、あとがきにゲスト登場した時に起こった事を含みます）

「前に会ったのはいつだったっけ～？」

「えっと……３ヶ月前でしたっけ。……あとシアさん。離れて下さい。その、周りからの視線が……」

事実、周りからの視線は更に増え烈に集まっている。

ミゲルはポカンとしていて、ハイネは苦笑している。

ちなみに、再び声を拾ってみると……

「キィィーー！！　せっかくのチャンスを……何なのよあの女！？」

「なんてうらやま……じゃなくて、はしたない！！」

という感じです。……醜いですねぇ（笑）

視点を戻します。

「え～～～～～！？」

「え～～、じゃなくてですね！」

烈はなんとかシアに離れてもらおうとするが、シアはなかなか離れようとはしない。

烈がどうすればよいかと迷っているが、その時。

「唸れ八雲！！　参式『砕』！！」

ゴウン！！　ジャラララララ！！！

鉄球が飛んできた。

「おっと！」

シアは咄嗟に烈から離れ、鉄球を回避する。

「（やっと離れてくれた……って今のシアさんが離れてくれなかったら、俺にも当たってたよね！！）」

「誰です？　私の邪魔をするのは？」

シアは戦闘モードになって、鉄球が戻ってゆく方に問い掛ける。
シアは普段時と戦闘時に思考タイプを切り替えるのである。
普段はマイペース。戦闘時は冷静な性格である。

シアの問いに答えるように、人込みの中から八雲肆式『断』を構えた蒼が飛び出てきた。

「人の兄貴に、色目使ってんじゃねぇ！！！」

蒼は『断』を振り下ろす。

「っ！」

シアはジャンプで後退。
『断』はシアのいた地面を少しを割る。

「兄貴？　なるほど。烈君の妹ですか。でも……私の至福の時を邪魔するなんて許せません！！」

「上等！　実力行使でいかせてもらうぞ！　獣女！！」

「掛かってきなさい！　まな板娘！！」

ここに、蒼　ＶＳ　シアの戦いが始まった。

「なあ、烈。今のって……お前の妹ってマジか？」

今までずっと呆然としていて、やっと立ち直ったミゲルが尋ねる。

「……恥ずかしながら、俺の妹だよ」

「烈兄～～～！！」

ちょうどその時、スバルが人込みの中からやってきた。

「あ、スバル」

「お！　ギンガの妹か」

「ヤッホー、烈兄。それにハイネさんも」

ちなみに、スバルはハイネと面識がある。

「つーかさ。烈は知ってるみたいだが、あの獣の人って誰なんだ？」

ミゲルが再び尋ねる。すると……

「それは俺が答えまｓｙ……」

「「五月蝿い」」

ゴン！　ゴン！！

「グハッ！」

「「……」」

突如ジュレスが現れた。
しかし、烈とスバルによって叩き伏せられた。
ミゲルとハイネはア然としている。

「何でドラクエみたいな解説？」

「さあ？　天の意思…かな？」

「スバルーー。頭に花咲いてない？」

「咲いてないよ！」

「って！　お前等無視すんな！　てか久しぶりだってのにその仕打ちは無いんじゃねえか！？」

復活したジュレスが叫ぶ。
実際、前は放送の声だけの登場だったからねぇ。

「だってツバキもエルフィもいないみたいだから、俺がツッコミ入れないと」

「全くだよ！」

「酷い（ノ―・。）」

落ち込む体制（ｏｒｚ）を取るジュレス。

「そう落ち込むなよ。説明してやってくれ」

「流石ロゼッタ陸曹……噂通りいい人だ……っと、グランテ三等陸尉についてですね！」

ジュレスはあっさり立ち直り、どこからともなく手帳を取り出し、あるページを開いた。

「シア・グランテ三等陸尉。地上本部武装隊所属。半獣人（ハーフウルフ）の女性で、『本能開放（ビーストドライブ）』ってレアスキル持ち。さらにランクはオーバーＳ」

「すげぇな」

ミゲル達は空中で戦っている2人を見る。
蒼はいつの間にか蒼い翼を広げ、八雲を陸式『劈』の双剣に変形させ、斬撃のラッシュで攻めている。
だがシアは斬撃を、空中にまるで足場が有るかのように空を蹴って躱す。

「ちなみに彼女はあの犬耳に狐の尻尾という萌え要素から一部の男性局員から人気があり、モフモフされたいという声が……」

「えいッ！！」

「がふぉ！……バタ」

ジュレスはスバルの拳によって気絶させられた。

「えっちなことは言っちゃダメだよ！」

「スバル、聞こえてないって」

烈はスバルを咎めつつも、ジュレスのことは気にしていない。

「蒼とシアさんか。……どっちが強いかな？」

烈はそう呟いて、みんなと一緒に空中で戦っている2人を見上げるのであった。

一方、上空にて。

「ハッ！！」

蒼は右手に持った剣を横薙ぎに払う。
だか、シアは空中を蹴って後退し、剣を躱す。

「ちっ！　縮地ってやつか！」

「その通りです。……舞え、散りゆく花の如く……桜華・乱舞脚！！」

シアは後退した直後蒼に突撃。
連続の蹴りを蒼へ放つ。

蒼は剣の腹の部分で蹴りを防ぎ、蹴りを横に逸らす。

「（くッ！）」

「（ふむ。先程のような大剣ではなく、双剣で防ぐなんて……やりますね）」

蒼は後ろに下がり、双剣を刃の向きを逆にして根の部分で連結する。

「ハアァ！！」

蒼は連結した双剣を高速回転させて投げ付けた。
草刈り用の鋸のように回転する双剣はシアに高速で迫る。
だが、シアはその攻撃を逆に利用した。
彼女は、回転する双剣の中心部分、つまり連結部分を踏み台にして高く跳び上がったのだ。
そしてそのまま右足を振り上げ、空高くから蒼へ向け己の得意とする攻撃を繰り出す。

「風刃墜雷脚！！」

重力を利用することで更に威力を上げた踵落としを繰り出す。

「掛かった！」

「なッ！！」

蒼が叫ぶと、シアの真下にベルカ式魔法陣が現れ、魔法陣から伸びた魔力紘がシアを拘束する。
さらに蒼は左腕を勢いよく後ろに引く。
彼女の手に握られているのは細い紘。

その絃の先にあるのは投げ付けた八雲。
絃に引かれ、八雲は回転を維持したまま戻ってきた。

「第３章　１８項　雷の矛＜ライトニング・パニッシャー＞！！」

蒼は空いてる右手で雷を放ち、バイントに掛かって動けないシアを雷と八雲でシアを挟撃する。

「貰った！！」

「（本能開放（ビーストドライブ）……発動！）」

ドォォォォン！！

雷の矛がシアに直撃し、シアの周辺は煙りに包まれる。
下で２人の戦いを観戦している局員からも「おお！」と感嘆の声が漏れる。
だが、蒼の表情は険しかった。

「（おかしい。『雷の矛』は直撃したのに、八雲が当たった手応えがない。いったいどういうことだ？）」

＜単純なことです＞

「　！　」

煙りの中から、八雲が投げ付けられた。
蒼はなんとか八雲を受け止める。

＜単に受け止めただけです＞

「……冗談だろ？」

蒼は煙りの晴れた場所を見る。
そこには３ｍほどの大きさの白銀の人狼がいた。

＜冗談ではありませんよ。ちなみに、さっきから念話で話しているのはこの姿では喋れないからです＞

「ユ○ゴかお前は」

蒼はツッコミながら八雲を壱式『月』に戻す。

＜そのネタはわかりませんが……少し本気でいかせてもらいます！！＞

シアは空気を蹴って、蒼に飛び掛かった。

「くっ！」

蒼はカウンター狙いで槍を突き出すが、呆気なく避けられる。

＜破ッ！！＞

蒼の懐に入ったシアは、膝蹴りで腹部を狙う。
蒼は咄嗟に後ろに下がって躱す。

膝蹴りを躱されたシアは逃がすまいと再び懐に入り、回し蹴りを放つ。
蒼は顔を後ろに反らすことで回し蹴りを躱したが、完全には避けきれず、頬に傷ができてツーっと血が流れる。

蒼は再び距離を取ろうとするが、シアはそうさせるつもりはないようで、距離を詰めてくる。

「（距離を取らせるつもりはない……か。なら！！）弐式『蛇』！！」

『２ｎｄ　Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｉｎｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ』

八雲を鎖鎌に変え、シアに投げ付ける。

魔力の鎖はシアの腕に絡み付き、蒼自身ももう片方の鎌に付いている鎖を自分の左腕に絡み付ける。
いわゆる、チェーンデスマッチの状態である。

「……剛拳の類は『薄野(すすきの)』の専門だが……お望み通り、肉弾戦でやってやるよ！！」

蒼は逆にシアに飛び込み、跳び蹴りを放つ。
シアは驚きながらも蹴りを躱し、自身も右足でハイキックを放つ。
蒼は左腕でハイキックを防ぐと、掌底、正拳、回し蹴り等のラッシュで攻める。
シアも負けじと、蹴り技を繰り出して攻める。

お互いの攻撃のラッシュ。
殴っては躱し、蹴っては躱す。
たが、この攻防は次第に2人の体力を削ってゆく。

長く続く攻防、蒼が蹴りを受け流しきれず、一瞬体制を崩した。

＜貰った！　彷徨える魂よ、地獄の劫火に焼かれ朽ちるがいい……＞

シアはそのチャンスを見逃さず、炎を纏った踵落としを放つ。

「チッ！　第1章　4項及び36項　アディッション　フリーズ！

！　紅華緑葉！！」

蒼は右足に炎と冷気を纏い、少し無茶な体制から垂直蹴り上げを放つ。

＜火炎断魂脚！！＞

「蒼紅・破天蹴撃！！」

2つの蹴り技が衝突しようとした。

――その時だった

「2人共やり過ぎなの♪」

「へ？」

＜え？＞

『ＳｔａｒｌｉｇｈｔＢｒａｋｅｒ』

２人が攻撃を中断し空を見上げると、そこには高町なのは（しろいあくま）と巨大な桜色の魔力球が。
地上で２人の戦いを見ていた人々達も、巨大な集束砲撃のチャージを見て逃げ出していた。

「全力全開！！　スターライト……ブレイカーーー！！！」

「「キャアアアアアア！！！」」

白い悪魔によって放たれた砲撃（Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ）により、２人は桜色の奔流に包まれた。

「もう、２人共ダメだよ。勝手に模擬戦なんかしちゃ」

「「すみませんでした（土下座）」」

現在、なのはがお説教をしていて、蒼とシアが土下座していて謝っているという状態である。

「演習が始まるまで大人しくしててね」

そう言って、なのはは去っていった。

「……あの砲撃はないよ～」

「同感だ」

「2人共、自業自得だよ」

砲撃から避難していた烈が2人の元へ歩いてきた。

「あ、烈君だぁ！　慰めてよ～～」

「貴様！　ふざけたこと言ってると心臓をえぐるぞ」

「む！　やる気!?」

「そっちこそ！」

「2人共、止めはしないけど……またなのはさんの砲撃くらいたいの？」

「「うっ！」」

さっきの砲撃を思い出したのか2人はドキッとする。

烈はそんな姿を見て「やれやれ」と言っている。

『全局員は本部前に集合してください』

そんな中で全体放送が流れ、集合を知らせる。

「2人共、集合掛かったから行こう」

そう言って烈は本部に向け歩き出した。

「……しかたないね。私達も行こうか」

シアも歩き出そうとするが。

「おい」

蒼に呼び止められる。
シアがゆっくりと振り返ると、蒼がニヤリと笑った表情を向けていた。

「次やる時は決着付けようじゃないか」

「……そうだね」

「……ふふ」

「……フフフ」

「「ハッハハハハハ！！」」

2人はお互いを見て笑ってから、烈を追い掛けてゆくのであった。

番外編　獣の人再び（後書き）

～～～あとがきコーナー～～～

Ｋ２「今回のゲストは、暇人様の作品より、シア・グランテさんでした。
　話の都合上、彼女は『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～聖痕を携えし魔導騎士～』の設定で登場しています」

シア「やっほーー！！　シア・グランテだよーーー！！　ねえ作者さん？　烈君は？　今回の話じゃあまり愛でることができなかったからハグハグしたいんだけど？」

Ｋ２「残念ながらギンガ、ティアナ、ツバキの３人に怒られているのでいません。代わりにエイジスでも愛でて下さい」

シア「わーい！　むぎゅー！　ハグハグ」

エイ「にゃわわわわ！？　く、苦しいですぅ～～～～！！」

シア「ああ、可愛いよぉ～～！！」

Ｋ２「さて、シアさんが愛でている間に技紹介です」

『蒼紅・破天蹴撃』（そうぐ・はてんしゅうげき）
・使用者　蒼／烈
・内容
脚に炎と冷気の両方を纏って繰り出す蹴り技の総称。
どちらかというと、物質、特に金属の破壊に有効な技である。
炎で対象の温度を上げ、冷気で急激に冷やし、蹴りの威力で破壊する。
特に扉の破壊、又はバリアブレイクに用いる。
人体に攻撃した場合は、人体の内部構造にダメージを与えやすく、内臓破裂をおこすことも可能な技。
２人の所属から考えれば後者の方を得意とするのだが、
烈は前者のような目的で、蒼は後者の目的でこの技を使う。

Ｋ２「以上になります。２人の所属は、３５話の烈の台詞で気付いた方もいるかもしれませんが、明かすのはもうちょっと先です。
ただし、戯言シリーズにて名前しか登場していない『殺し名』はオリジナル設定になります」

シア「凄い技だね～～。なのはちゃんに途中で止められたからどれくらいの威力かわかんないけど」

Ｋ２「でしょうねーー。ってシアさん？　すっげー顔がツヤツヤしてるんですが」

シア「いーーっぱい愛でさせてもらったよ！！」

エイ「あわわわ……むみゅう」

K２「（ごめん、エイジス）あ、シアさん。これどうぞ。烈が作ったアップルパイだそうです」

シア「ありがと～～。烈君にも御礼言っておいてね」

K２「了解です」

シア「それじゃあさよなら～～」

シュン！（↑転移する音）

K２「さよーなら」

エイ「……ん、あれ？　帰っちゃったんですか？」

K２「うん。まだいて欲しかった？」

エイ「い、い、い、いえ！　大丈夫でしゅ！！」

K２「あ、そう？　あ、読者の皆様へ。コラボとかの依頼とかありましたら構いませんよ
　ネタが浮かべばコラボの番外編とか書きますし、浮かばなければあとがきコーナーへの出演になりますが」

エイ「だそうですよ。では、次回予告です！」

K２「次回は５０万記念なので雑談……ではなく番外編を書きます」

エイ「流石に５０万ですからね～」

Ｋ２「どんな内容かはお楽しみに！！　それでは！！」

エイ「次回もよろしくお願いしま～～しゅ！！」

～５０万ＰＶ記念番外編　女顔の男キャラって大概こんな目に遭うよね（笑）～

さて、５０万記念です。

今回はオリキャラでも影が薄い彼女の視点です。

何が起こるかは……タイトル通りです（笑）

それではどうぞ。

それは週末の休日で私が実家に帰っている時のことだった。

「ツバキ、ちょっといいか？」

弓道場から母屋に戻って来たところ、父に話し掛けられた。
父は少し白髪が混じった黒髪をオールバックにして、仕事用の灰色のスーツと黒いネクタイ姿だった。
仕事から帰って来たってところかしら？

「何？　お父さん。私シャワーを浴びに行きたいんだけど」

ちなみに今の私の服装は袴の色が藍色の弓道着だ。
私のバリアジャケットも弓道着なのだが、今はそんなことは関係ない。
さっきまで弓の練習していて集中してたから少し疲れちゃって、シャワー浴びて休憩したいんだけど。

「いや、な。会社の新製品の試作品があるんだが、ちょっと使ってみてくれないか？」

私の父はミッドの大手企業の重役で、たまに新製品のモニターになってくれと頼んでくることがある。

「別にいいけど……何の商品なのこれ？」

父から渡されたのは銀色のブレスレットに金色の宝石が埋め込まれたものだった。

「変身魔法とバリアジャケットを応用したおもちゃだ」

「どういうこと？」

「子供向けのおもちゃでな。簡単な変身魔法を使って髪の毛を変えたり、バリアジャケットを利用して服装を変えて楽しむ商品だ」

「へぇーー」

私はブレスレットをマジマジと見つめる。手の込んだ商品ね。つまり使った人が着せ替え人形になるってことね。

「どうだ？　頼まれてくれんか？」

「ん～～～」

私はもう15だし。こういう子供っぽいのはちょっとねぇ。
……ちょっと待って。別に私が使わなくても……そう、例えば烈とか……アリね。

「わかったわ、お父さん」

「おお引き受けてくれるか！　頼むぞツバキ！」

「はいは～い♪」

ウフフ♪　明日が楽しみ♪

翌日、訓練校。

「「「試作品！？」」」

午前の訓練終了後の食堂にて、私は班のみんなに昨日のことを話した。

「そ。お父さんの会社のね。使ってみてくれって頼まれたの」

「まさかツバキが金持ちのお嬢様だったとは……意外だぜ」

「あたしは知ってたけどね～～」

「そういえばツバキとエルフィって幼なじみだったんだっけ？」

「そうだよ～～～」

現在私達は昼食時であるため、３０班メンバーみんなで食事中。
他の陸士候補生達も食事を摂ってるわ。

「一応私は試したんだけど、みんなにも試してほしいなって」

「おお！　マジで！？」

「いいの？」

「いいのいいの！（フフフフ……）」

「（……なんか裏があるよね～～。ツバキのことだし）」

「じゃあ、ジュレスから」

私はブレスレットをジュレスに渡す。

「おうよ！」

ジュレスは左手首にブレスレットを嵌める。

「じゃあ、いくわよ。ムゲン、データ通りに操作してね」

『了解ですマスター』

私がコンソールを叩いてデータを入力すると、ブレスレットが輝きジュレスの服装が変わる。

「「「おお～～！」」」

ジュレスの服装は、黄緑のシャツに革ジャンとジーンズという姿になっていた。

※ガンダム００のロックオン・ストラトス（ニール・ディランディ）の服装

「スゲェ！！」

「これで魔法の応用ってのが凄いよね」

「そ～だね～。……でもな～んかジュレスには合わない気がするなぁ」

「エルフィの言う通りかも。なんか、こう……外見はともかく、へタレな人には合わないって言うか」

まあいいわ。次行きましょ。
再びコンソールを操作する。

ブレスレットが輝き、再び服が変わる。

今度は、青い軍服に六望星のマークが入った白い手袋という姿だった。
※ハガレンのロイ・マスタング大佐の軍服

「これは……軍服か？」

「第９７管理外世界の漫画を参考にしたわ」

「鋼の錬〇術師だね～」

「わかるんだ、エルフィ」

たわいもなく話していると、回りのみんなも気付いたのか、ガヤガヤと騒ぎ始めた。

「何やってんだ？」とか、「あれ、ホーネットか？」なんて声が聞こえる。

「何やってんのよ、あんた達」

「うわっ！　ジュレス何それ！？　コスプレ！？」

ちっ！　ランスターとスバルね。

スバルはともかく、ランスターまで来るなんて。

あんたが来ると私とキャラ被ってんのよ！！

「ヒメミヤ、あんた今あたしの悪口言わなかった」

「言ってないわよランスター」

無駄に鋭いわね。

……まあ仕方ないわ。

「烈兄、ジュレスの服はどうなってるの？」

「実は、かくかくじかじかで」

「まるまるうまうま、と。なるほど～」

「「いや、今ので伝わったの！？」」

私とランスターが同時にツッコミを入れる。

こんなんだから、キャラ被ってるとか言われるのよ！！

っと、それよりもそろそろ計画を実行しましょう。

「はぁ。次は烈にお願いするわ。ジュレス、ブレスレットを」

「あいよ」

私が設定を解除すると、ジュレスはブレスレット外してを烈に渡す。

烈はそれを受け取って、右手首に付けた。

……そういえば左腕義手だったわよね。

あの時は、ちょっと恐かったけど、かっこよかったなぁ（顔を赤らめる）

「ツバキ、準備できたよ」

「あ、うん。わかったわ」

私はコンソールに向き直り設定を入力し始まる。
その間に、念話でムゲンに話し掛ける。

＜ムゲン。カメラの準備よろしくね♪＞

＜マスター……いえ、なんでもありません。了解しました＞

なんか呆れる声だったけど気にしない。
うん。調度入力も完了。

「それじゃいくわよ」

「オッケー」

「（計画通り。ニヤリ）」

私はエンターを押した。

烈が光に包まれる。

数秒で光は晴れた。

烈の姿は……

「な、何これーーーー！！！」

髪は腰まで届く銀髪になり、声も女の子っぽくなる。
そして服装は、丈が膝より少し上の朱色のワンピースに、肩の部分にフリルの付いた白いエプロン風の前垂れが組み合わさった服だった。
※舞乙ーＨＩＭＥ嵐より、マシロ姫のガルデローベの制服ｖｅｒ

「「「キャアァァァーーー！！！　カワイイィィィ！！！」」」

「「「男の娘、キターーーー！！！（ﾟ∀ﾟ）！！」」」

外野が大声で騒ぎだす。
いや、わかる。わかるわ。
これほどの威力なんて。は、鼻血が……

「男の娘……だと？」

「「「かわいい～～～！」」」

ジュレス、エルフィ、スバルの反応。
くっ！　眼帯がなかったら絶対に気絶していたわ。
……ん？　そういえば、ランスターの反応がないわね……

「ハァ、ハァ、かあいぃよ、かあいぃよぉ。お、お持ち帰りぃ～」

危なっ！！　１番危ないわよ、その反応は！！

「ちょっと、ツバキ！　一体これはどういうこと！？」

あ、流石に烈も怒るかな？

「えっ？　いや、烈って女の子の服似合うかな～～って」

「俺は男だよ！！」

「いいじゃん別に～～」

「エルフィ！？」

エルフィナイス援護！

「かあいぃ。もっといろいろ見たい」

「アタシも！」

「ティアナ！？　スバルまで！？」

うふふ。これで烈に味方はいないわよ。

「じゃ、次いきましょーー！！」

「「「ウォォォォォオ！！！」」」

「なんでみんなノリノリなのーーー（涙）」

残念。ここにいるみんなが私の味方よ。

さて、いろいろ着せるわよ～～～。

1着目。

「「「巫女さんキターーー！！」」」

巫女服。

2着目。

「「「診察してくれぇぇぇ！！！」」」

看護服。

3着目。

「「「逮捕して下さい！！！」」」

女性警官制服。

4着目。

「「「ヤンデレでもオッケぇぇーーー！！！」」」

某鉈女のセーラー服。

5着目。

「「「メイドさんキターーー！！！」」」

時を止める瀟洒なメイドさんのメイド服。

ちなみに、フォトンダガーと銀の懐中時計を持ってもらいました（笑）

「ううう……俺、男なのに……」

涙目で落ち込んでるわ。

これでもし上目遣いだったら……

く！　いけない！　考え（妄想し）たら出血多量で気絶するわね。

「次は何にしようかしら？」

「勘弁してよツバキ～（涙）」

「チャイナドレス！！」

「スク水の上からネコミミセーラー！！」

「ゴスロリで～～♪」

「体操着！　下はブルマで！！」

フフフ、どれも魅力的ね。
ってあら？　今誰かいないはずの人の声が。
ちょっと時間を巻き戻し。

「次は何にしようかしら？」（↑私）

「勘弁してよツバキ～（涙）」（↑烈）

「チャイナドレス！！」（↑スバル）

「スク水の上からネコミミセーラー！！」（↑ランスター）

「ゴスロリで～～♪」（↑エルフィ）

「体操着！　下はブルマで！！」（↑ギンガさん）

って！！

「なんでギンガさんがいるんですか！！」

みんな気付きなさいよ！

「え？　スバルの忘れ物届けに来たんだけど、おもしろいことになってるなって……テヘ☆」

「ギンガ！　助けて！！」

烈がギンガさんに助けを求めるけど……

「うん。それ無理☆」

「ｏｒｚ」

フッ。ギンガさんも味方になったわ。

「さあ！　まだまだたくさん着せ替えましょう！！」

「「「「オーー！！」」」」

「「「「ウォォォォオ！！！」」」」

「本当に勘弁してよぉぉぉぉ！！」

烈の叫びは教官が来るまで誰にも届きませんでした。

おしまい。

余談

「ねぇ、ツバキさん。もしかして、烈の写真、撮ってる？」

「ええ。もちろんですよ、ギンガさん。差し上げましょうか？」

「ホント！？」

「でも、タダではありませんよ」

「……いくら？」

「ふふふ。それは写真によりますね」

と、このようなやり取りをギンガさんとした私でした。

本当におしまい。

～５０万ＰＶ記念番外編　女顔の男キャラって大概こんな目に遭うよね（笑）～

～～５０万記念雑談コーナー～～

ア「ＰＶ５０万、ユニーク５万、総合評価５００点、お気に入り登録２００件を突破しました。ありがとうございます！！！」

リ「まさかの５０万とはな」

蒼「予想外だな」

エイ「本当です。あ、マイロードは今回落ち込んでていないです」

蒼「メイド服や巫女服の兄さん……萌える」

ア「私も鼻血が……」

エイ「私もですぅ」

リ「た、たしかにアレは……（顔を赤らめる）」

蒼「作者にしては珍しくいい仕事したな」

ア「あれ？　その作者さんは？」

Ｋ２「はいはーい。読んだ？」

リ「テンション低いな。普通ならば喜んでテンション高い筈だろ？」

Ｋ２「あ、いや、嬉しいことには嬉しいよ。ただ――」

全員『ただ？』

Ｋ２「最近、アクセス数減ってるから」

全員『……』

Ｋ２「正確に言うならアグスタ辺りからね」

リ「お前な、そういうことを言うものではないだろう」

エイ「原因はなんなんですか？」

蒼「……（汗）」

Ｋ２「わかんない。可能性があるとすれば、ポケモンよりデジモンが好きだって書いたこと。蒼に自重させなかったこと。この２つかな」

蒼「私の所為かｏｒｚ」

Ｋ２「あ、でも書き続けるつもりなので、ご心配なく。受験生なので更新速度は遅いですが」

ア「て言うか、肝心な所が全く明らかになっていませんからね」

エイ「マイロードと蒼さんの本名とか、能力とか、３５話の最後に

出てきた人達でしゅね」

リ「私も登場したいのだが」

ア「アギトとも再開していませんし」

エイ「そうです！」

蒼「まだ3人娘を締め上げてないし……」

全員『違うだろ（でしょ）』

蒼「ちっ」

K2「まあとりあえずJS事件終了までは書き上げるつもりだし、構想も浮かんでるから。それ以降は半分くらいしか構想が浮かんでないけど」

ア「だそうです」

リ「読者の皆様、こんな作者で申し訳ないが、これからもこの作品を見捨てないでやってくれ」

エイ「と、いう訳で、今回はこれまでです！」

K2「次回の今回のような番外編や雑談は、１００万記念の時を予定しています。……１００万までいけばいいですが」

リ「だからそういうことは言うな。あ、番外編のリクエスト等あったら受け付けているぞ。気軽に感想に書いてくれるとありがたい」

ア「感想もお待ちしていますね」

蒼「駄文ではあるが、これからもこの作品をよろしく頼む」

エイ「それでは！」

全員『次回もよろしくお願いします！！』

第３６話　願い、ふたりで（前書き）

はい、すいません。更新遅れました。

蒼の心情表現が難しくて。

って言い訳ですね。

今回は心情表現とかが多いです。そしてシリアスです。

その代わり、あとがきではっちゃけますので（笑）

それでは、本編をどうぞ。

（※今回貰い物を使用しています）

第３６話　願い、ふたりで

あのあと、私は副隊長達のサポートに回り、ガジェットを殲滅に掛かった。

私はシグナムとヴィータの実力がどれほどのものなのか期待していた。

いつもは六課の訓練による模擬戦での戦闘しか見たことがなかったからな。

私がシグナムと模擬戦した時は、『模擬戦だから“全力”ではあっても“本気”ではない』と思っていた。

だから、“本気”を。彼女達の“本当の意味での力”がどれほどなのか見てみたかった。

が、その期待は裏切られた。

反射神経、状況判断速度、３人の連携。

確かに、それらは訓練でも見たように十分だった。

だが、戦いにおける“恐怖”“覚悟”“殺意”は一切感じられなかった。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ全員だ。

相手がたかが機械だから“死ぬ覚悟”“殺す覚悟”なんて必要ないと思っているのか？

自分が“死ぬ”なんてありえない、“殺される”ことなんてないと思っているのか？

“死への恐怖”のかけらもあったもんじゃなかった。

デバイスは非殺傷設定。“殺意”なんて以っての外。
私はあの虫男と戦った時は非殺傷設定は解除していたぞ。
あいつ等にとって今回の出来事も遊びに等しいなんじゃないか？
“戦争ごっこ”でもやってるつもりか？

なんて愚かだ。正直失望した。

こんな奴等が、夜天の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）か。
リインフォースから戦争の時代も生き抜いたと聞いたのに、とんだ期待外れだ。

勘違いしないでほしいのは、私は彼女達が“こっち側の世界”――――つまり、“暴力の世界”の人間に分類されるような人物であってほしかったのではない、ということだ。

強い力を持つのなら、その力を使いこなす意志。
戦うなら、相手を殺す、相手に殺されることがあるという覚悟。
魔法という強大な力を持つにあたって、それらをちゃんと持っているのか私は確かめたかった。

だが、結局あいつ等は誰ひとりそんなものを持ってはいなかった訳だ。
ま、守護騎士が“暴力の世界”の人間と戦っても絶対に勝てないな。
守護騎士どころか、管理局の人間じゃ誰も勝てずに殺されるな。
いやそれどころか、まだ“殺す覚悟”のある犯罪者の方がマシなん

じゃないか？。

“暴力の世界”では、身内が死ぬなんて当たり前。

実力があったやつがひょんなことで死んでしまうなんて日常茶飯事。

共闘しては裏切り、裏切っては協力するなんてどこにでもある。

気が付けば死んでいた奴なんていくらでもいる。

9歳の時まで、そんな世界で私と兄さんは生きてきたのだから。

《……あまりそういうことを考えるな》

「うおぉぉ！！？」

グラ！　ドスン！！

《……大丈夫か？》

「驚かすな！！　そんで人の心を読むな！！」

椅子から落ちただろうが。

というか、部屋にアリスがいなくてよかった。いたら「一人で何やってるんですか？」なんて言われてただろうな。

《お前の中にいるのだから心は読める》

「プライバシーの引ったくれもないな」

《まあ、それはさておき。……蒼。お前達はもう“暴力の世界”の人間じゃない。“暴力の世界”の物差しで将達を測らないでくれ》

《“暴力の世界”の基準という以前の問題だと思うぞ》

隣の部屋の人に声が聞こえたらマズイので、リインフォースとの普段の会話方法に切り替える。

《あいつ等は魔法の力が人を殺せるような力だと思ってない。非殺傷設定の所為でな。お前だって分かっているだろ？　魔法の力がどれほどのものか》

《……ああ》

夜天の書の管制人格として数百年を生き、夜天の書が闇の書に改悪されてからは、歴代の主を含め、改悪されたプログラムという呪いにより、暴走と魔法の力で何千何万と人々を殺し続けた。

だから、リインフォースは魔法の力がどれほどのものなのか一番よく知っている。

《魔法の力を理解していないのは守護騎士だけじゃなくて高町達もだろう。
持っている力に慢心し、力の意味を理解してない。いずれどこかで足元を掬われるだろうな》

以前の私――グリモワールの力に溺れ慢心していた私のようにな。

《もうやめよう、蒼。こんな話は》

《……そうだな。……よし！》

私は立ち上がって、少し崩れた服を直す。

「晩飯でも食べに行くとするか」

部屋から出て、私は食堂のある隊舎へ向け歩いていた。
その途中――――

「ん？」

グランセニックを見つけた。
向こうもこっちに気付いたらしく、こっちに来る。

「蒼か。何してんだ？」

「晩飯を食いに行こうと思っていたのだが、お前こそ何してたんだ？」

「俺はその……あいつの、ティアナのことが気になって様子を見に行ってさたんだ」

「あいつ、まだ自主練してるのか？　もう4時間は経つぞ」

アグスタから帰って来た後、午後の訓練は中止となって全員休むように言われたのに、ティアナだけは自主練すると言っていたが……
…まだやっていたとはな。

「俺も言って来たんだが、止めようともしねぇし」

「ふむ……わかった。私も行ってみよう」

「すまねぇな。頼むぜ」

そう言って、グランセニックは男子寮の方向へ歩いて行った。

《止めさせるつもりか？》

黙っていたリインフォースが話し掛けてくる。

《あいつ次第だ》

私はそう言って、ティアナが自主練してると思われる森へ向かった。

５分程歩くと、周囲に浮かんだ光球に次々とクロスミラージュの銃口を向けたトレーニングをしているティアナを見つけた。
疲れが襲ってきたのか、ティアナはその場に膝を付く。

「無茶やった上に、更に無理をするつもりか？」

私は皮肉を込めて言い放つ。

「アオ……あんたには関係ないでしょ」

私に気付いたティアナは苛々した声で言い返してくる。

「関係ない？　誰かさんのミスショットをフォローしてやったのは私だぞ」

「ッ！　う、うるさい！！」

「やれやれ。そんなんじゃ、またミスショットするだろうな」

「うるさい……うるさい！！　レアスキルも持ってて……なんでもできて！

……力の有るあんたなんかに凡人の私の何がわかるのよ！！！」

その一言で、私は静寂に包まれたような気がしてならなかった。

そして、心の底から怒りが沸いて来た。

私はティアナに近付き胸倉を掴む。

「今の言葉、そっくりそのまま返してやる」

私はティアナを睨みながら、言葉に殺気を込めて言い放つ。

「お前に私達の何がわかる。普通に生きてきたお前達に何が判る！！
邪魔者扱いされて、親からの愛情すら貰えなくて、体をいじくられて、道具としか思われなかった私達の何が判る！！！」

私は怒りを込めて叫んだ。
昔の私なら、こんなことは言わなかっただろう。
なぜなら、昔の私は今私が言ったことに全く気付いてなかったからだ。

兄さんがいたから、自分は邪魔者扱いされてるなんて思わなかった。
親は私達のことを見てくれなかったけど、私は兄さんに甘えて、兄さんは私に甘えさせてくれたから、親の愛情なんてどうでもいいと思っていた。

数々の肉体改造も、自分より強い敵を殺す為に必要なことだと思っていた。

命令に従って人を殺すことが当たり前だったから、自分が道具として扱われていることに全く気付かなかった。

――――でも、そう思っていたのは私だけだった。

それが普通だけど普通じゃない、異常だけど異常じゃないと私はずっと気付けなかった。

私は兄さんに守ってもらってばかりなのに、兄さんは誰からも守られていないことに気付かなくて。

兄さんが拷問を受けて傷ついて、誰からも支えてもらえなくて苦しんでいるのにも気付かなくて。

私はずっと兄さんを傷付け続けていたことに気付いてなかったんだ。

「なんでもできる？　できなきゃ死ぬ環境で生きてきたんだよ！！」

「ッ！？」

ティアナは私の殺気で怯えながらも驚愕の表情を浮かべる。

驚くのも当たり前か。今まで平和な環境で生きてきたんだから。

「私はお前がうらやましいよ！　死に懸けるようなこともなく、のうのうと生きていける環境で育ってきたんだからな！！」

私が“暴力の世界”が異常だと気付いたのは、暴走した兄さんが全てを焼き払って一族から逃げ出した後。

だから“表世界”を見て、「なんでこうも違うんだ。同じ人間なのに」と思ったさ。

「お前は――――ッ！！」

《蒼！！》

「ッ！！」

リインフォースの叫びで、私はハッとなり胸倉から手を離す。

「ゲホッ！　コホッ！」

胸倉を掴まれて苦しかったのか、ティアナは膝を付いて咳込む。

「……一言だけ言っておく。高町の訓練が納得いかないのは判るが、これ以上無理をしても無駄だ。それでも無理をすれば――――」

感情的になってしまっていたことに、リインフォースに言われるまで気付かなかった。

これ以上ボロを出さないように、無理矢理にでも会話を締める為に私は言い放つ。

「お前はスバルを殺すことになるぞ」

そう言って、私は逃げるようにその場から去っていった。

その場に残されたティアナは。

「……何なのよ、あいつ。死ぬような世界で生きてきたって、どういうことよ」

膝を付いて倒れたまま、ティアナは呟く。

「それに、私がスバルを殺すって……どうすればいいのよ」

ティアナの問いに答える者はいなかった。

数日後、六課訓練場のシュミレーターで作られたビルの屋上に私、ヴィータ、エリオ、キャロは立っていた。

午後の訓練の締めとして２ｏｎ１の模擬戦をするらしく、今は高町とスバル＆ティアナの模擬戦の最中だ。

ちなみに、あれからティアナとは話していない。というより気まずくて話し掛けずらい。

しかも感情的になりすぎて、いろいろと黙っておかなければならないことも言ってしまったしな。

《まったく。普段は冷静な癖に、意外と感情的に成りやすいからなお前は》

《ぐっ……反省しているさ》

《しかし、ティアナは結局自主練を止めなかったみたいだな。それどころかスバルまで一緒に特訓をしていたみたいだからな》

《あーはいはい、自主練を止めさせられなかったのは私の所為ですよー》

意外とリインフォースがしつこい。言い付けて逃げるようにした後もねちっこく言ってきたからな。

てゆーか、基礎しか教えない所為でティアナを不安にさせてる高町も悪いだろ！

《お前が直に教えたらよかったのでは？》

《私が教えれるのは“戦う技術”ではなく“殺す技術”になってしまうだろ？》

《それはお前が望んでることでもあるのでは？　非殺傷設定に頼り過ぎて、殺す覚悟、殺される覚悟が無いと言っていたのはお前だろ？》

それもそうなんだけどな。

だが、だからと言ってあいつ等を“裏世界”に引き込む訳にもいかないだろ。

“表世界”で生きてきた人間が“裏世界”に適合できることなんて滅多に無いんだぞ。

それ以前に、プロのプレイヤーが銃で戦うことは基本無い。

弾丸を躱すのは『殺し名』の必須スキルだし、そもそも戦闘中に銃の弾丸を込めたりするとか、余計な手間でしかないことを率先してするプレイヤーなんかいないのだから。

（※『零崎軋識の人間ノック』や『零崎人識の人間関係　匂宮出夢の関係』には、銃を使うプレイヤーが登場しますが、それには理由

があります。詳しくは書籍にて）

そこ、「お前、装飾銃にガトリングや狙撃銃使ってるだろ」って思った奴。

あれは私の使う『技』の媒体でしかない。『超電磁銃』とか特にな。

元々私は槍がメインだからな。まあ、兄さんと違って私は薙刀や棍、弓、鎖術等々他にもいろいろと仕込まれたがな。

まあつまり、基本近接戦闘特化型の私がどうやってティアナに射撃を教えれるのか、ってことだ。

まったく、どうすればいいものか。

「アオちゃんどうしたんですか？　ため息なんてついて」

リインフォースとの話に集中する為に目を閉じていたが、目を開けるとアリスが私の顔を覗き込んでいた。

「悩み事でもあるんですか？」

「あ、ああ、いや……その……」

「あ、わかりました。ティアナさんと喧嘩したことですね。ダメですよ早く仲直りしないと」

にっこり笑ってからアリスは離れる。

ちなみに、今のアリスはフルサイズの姿だ。

え？「燃費はどうした？」だって？
この間、異世界に行ってアーマゲモンと戦った後、帰る前に特別なプログラムを貰ってな。
そのプログラムのお陰で燃費がよくなったから、常時フルサイズでも問題無いんだと。
（詳しくは、ライ様の作品『魔法少女リリカルなのは～黒い聖騎士～』にて）

「あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

ハラオウンが屋上に繋がる階段のドアを開け現れた。

「フェイトさん！」

「私も手伝おうと思ったんだけど」

「今はスターズの番」

ハラオウンはヴィータの側に寄り、ヴィータはハラオウンに現在の状況を説明する。

「ホントはスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ。なのはも訓練密度ここんとこ濃いからな。少し休ませねぇ

と」

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ」

ハラオウンは空中の高町を見上げながら語り始める。

「訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり」

「なのはさん。訓練中も、いつも僕たちのことを見ててくれるんですよね」

「ホントに…ずっと」

エリオとキャロは話を聞いて、嬉しそうな表情になって高町を見上げる。

「……本当に見ているのか？」

『えっ？』

「蒼、テメェ、どういう意味だ！」

私の呟きが聞こえたのか、ライトニング達は驚き、ヴィータは高町の教導を否定されたことに怒りを覚えたのか、声を荒くして怒鳴る。

「アオちゃん？」

「どういう意味もなにも、そのまんまの意味だ。本当は全て見ているつもりでも、肝心な部分は全く見ていないだろ」

「テメェ……！！」

「じゃあ聞くが、私とアリス、グランセニック以外で、ティアナとスバルがここ数日ずっと自主練をしていたことを知っているか？」

『……』

全員無言。

「ハッ！　それでいつもずっと見てるだなんてよく言えるな」

「でも！　なのははみんなの為に頑張って……」

「頑張っている？　なら何で高町の訓練は基礎しかやらない。基礎ばっかりじゃ実戦で役に立たない。
　実戦を訓練と勘違いしてるんじゃないのか？　それとも実戦を“戦争ごっこ”だとでも思ってるのか？」

「それは……」

「よくアグスタの時、死人が出なかったな。普通ガジェットのレー

ザーを腹にでも喰らえば、内臓を焼かれて死んでるぞ」

『ッ！！』

気付いてなかったのか。
遠くから見てても判ったぞ。
やはり“殺される覚悟”が無いという推測は当たってたか。

と、考えたその時。

ドゴォォォォン！！！

『ッ！！』

突如、爆発が起こり、このビルの屋上まで爆風が飛んで来る。

「一体、何が起こったんですか！？」

アリスがみんなの疑問を叫ぶが、爆発の中心部では煙が舞っていて何が起こったかわからない。

次第に煙が晴れてゆく。

そして、そこには、ティアナの魔力刃とスバルのリボルバーナック

ルを、素手で受け止めている高町の姿があった。

あたしの作戦通りに模擬戦は進んでいった。

スバルがなのはさんを引き付けて、私が砲撃を撃とうとしていると幻術を使って思わせる。

でも、本命はスバルの攻撃を防いでいる間に、バリアを切り裂いてフィールドを突き抜くこと。

近接戦闘用に編み出したダガーを使って、なのはさんの背後から奇襲。

全部作戦通りにいった。

上手くいったと思った。

強くなるための努力が認められると思った。

でも――――――

「おかしいなぁ。２人共、どうしちゃったのかな」

「あ……あ……」

「えっ……」

なのはさんは、とても冷めた声で言った。
右手であたしのダガーを受け止めて血を流しながら。

「頑張ってるのは判るけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ。練習の時だけ言うこと聞いてるだけで、本番でこんな危険な無知するんじゃ、練習の意味無いじゃない」

「あ……」

「ちゃんとさ、練習通りやろうよ。ねぇ、私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる？」

なのはさんは冷たい目つきを私に向けたまま問い掛ける。

「はっ……」

『Ｂｌａｄｅ　Ｒｅｌｅａｓｅ』

あたしは怖くなって、クロスミラージュの魔力刃を消し後ろへ跳ぶ。

「あたしは！」

ガシュンガシュン！！

「もう誰も傷つけたくないから！！　なくしたくないから！！」

もう、力がなくて大切な仲間を傷つけたくないから！！

カートリッジをロードし、砲撃を撃とうとする。

「だから……強くなりたいんです！！！」

私が必死に思いを言っても、なのはさんの目つきは冷たいままで、冷酷な表情で私を見ていた。

「少し、頭冷やそうか」

そう言い、なのはさんは指先を私に向けた。

「クロスファイヤー……」

「うわあああ！！　ファントムブレ……！！」

「シュート」

容赦なく、魔力弾は放たれた。

「はっ！！」

ドオォォォォン！！！

私は躱すことができず、直撃を喰らう。

痛い……痛い……。

「ティア！！」

スバルがあたしの名前を呼んでいるような気がするけど、フラフラして頭が回らない。

「じっとして、よく見てなさい」

「ッ！！　なのはさんッ！！！」

無慈悲にも、二撃目が放たれる。

あ、避けれ……ない。

桜色の砲撃は、私に直撃した――――――

――――――はずだった。

「プロテクション。金剛不壊」

桜色の砲撃は真紅の盾に防がれた。砲撃は魔力素に分解され周囲に霧散する。

そして、いつの間にか私は抱え上げられていた。

閉じかけていた目を開けると、そこには髪やバリアジャケットの色は違うけれど、あたしの好きな彼がいた。

「あ……れ……つ？」

「無理し過ぎだよティアナ。休んでて」

金髪の姿の彼は笑顔を向け、ゆっくり頭を撫でてくれた。

安心してしまったあたしは、そこで意識を失った。

眠っちゃったか。さて

「エイ」

『は、はい！』

「『ユニゾン・アウト」』

俺はエイとのユニゾンを解く。
髪もバリアジャケットも元の真紅へと戻る。

「エイ、大変かもしれないけど、ティアナを医務室に連れていってあげて」

「は、はい！　わ、わかりました！！」

そう言って、エイはフルサイズになり自分より大きなティアナを抱える。

「あ、あの、マイロードもお気をつけて」

「うん。わかった」

エイはウイングロードから降りてティアナを運んでいった。

「さてと」

俺はなのはさんの方を見る。
なのはさんは冷たい目つきで俺を見ているけど、そんなのは関係ない。

「とりあえず、何をしていたんですか？　高町一等空尉」

敢えて階級付けで呼ぶ。
怒りの矛先をティアナとスバルから逸らさないと。

「何って、教導だよ。烈君こそ、何でこんなところにいるのかな？」

「合同捜査の経過報告、及びハラオウン執務官に依頼されていた情報収集の結果報告をしに来たのですが、何か問題でも？」

これは事実。フェイトさんの居場所を聞いたら訓練場にいると言われたからここに来た。
着いた途端に、ティアナに向けて砲撃が放たれたから、エイとユニゾンして『雷煌』で高速移動してティアナを庇って砲撃を防いだんだ。

「じゃあ、フェイトちゃんのところに行けばいいだけだよね？　何で私の教導の邪魔をするのかな？」

「教導？　戦闘不可能になった部下に容赦なく砲撃を撃つのが貴女の教導ですか？
　悪魔らしいやり方ですね。伊達に『管理局の白い悪魔』だなんて呼ばれてないですね」

なのはさんの目つきが更に冷たくなっていく。
ま、実際俺が教導受けた時も容赦なかったし、悪魔だったし。
今の表情も本当に悪魔みたいな顔になってるよ。

「私の言うことを聞かなかったティアナが悪いんだよ」

「貴女の教導は基礎ばかりで実戦に向いてない。ランスター二士が不満に思うのもおかしくありません」

「私が悪いって言うの？」

「それ以外何だって言うんですか？」

売り言葉に買い言葉。
一触即発の状態である。

これでなのはさんの怒りが俺に向けば……

と思った。

が、しかし――――

「ウォォォォオ！！！」

動いたのは、なのはさんでも俺でもなくスバルだった。

スバルは掛けられていたバインドを破り、なのはさんへと突撃していた。

その表情は怒りに染まっていて、瞳の色は金色へと変化していた。

「マズイ！！」

くっ！　間に合え！！

俺はスバルを止める為に飛び出した。

なのはさんは容赦なくティアに魔力弾を撃った。

あたしは信じられなかった。優しいなのはさんが冷たい目つきでティアナを見ているのが。

更に砲撃に近い魔力弾をくらってフラフラしてるティアに、砲撃を撃った。

その砲撃は、何でいるのかわかんないけど烈兄が防いでくれた。

でも、あんなのが当たってたらティアはどうなってただろう。

ずっとティアは強くなりたくて努力しているのに、何で認めてくれないの。

頑張っているのに、どうして間違ってるって決めつけるの。

そう思って、心の奥底から沸いてきたのは――――怒り。

「ウォォォォオ！！！」

気付いたらなのはさんに向かって走りだしていた。
許せなかった。ティアが頑張ってるって知りもしないで、頑張りを否定するのが許せなかった。

「レイジングハート」

『……All right』

なのはさんがレイジングハートを構えるけど、そんなの関係ない！！

「ハァァァァ！！！」

「ディバイン……」

「ハァ！！！！！」

「バスター」

あたしが拳を振ると同時に、なのはさんは砲撃を放った。

ドゴォォォォン！！！！！

大爆発が起きる。

――あれ？
何かに、腕を掴まれてる感じがした。
なのはさんはレイジングハートを握っているからありえない。
じゃあ、誰が？
爆発の煙が晴れ、目の前にいるのが誰だかわかるようになる。
あたしの目に入ったのは――

「あ、あ、烈…兄？」

「スバ……ル……この……バカ」

全身血まみれで、壊れかけた左腕の義手と輝の入った紅月で、あたしの腕を掴んでいる烈兄だった。

「烈……君……？」

なのはさんも目の前の出来事が信じられないようだった。
なんで？　なんでこんなことに！？

「あ……ああ！」

あたしはようやく気がついた。
紅月の装甲に反射して写ったあたしの目が、金色に――戦闘機人モードになっていることに。

「ス……バ……ル」

烈兄は壊れかけの義手で、あたしの頭を撫でようとする。
でも、その動きはぎこちなくて、目は虚ろで、体はボロボロだった。
あたしが……あたしが『振動破砕』を使っちゃったから……こんな…こんなことに！

「あ……あ……烈兄……ごめん…なさい！　ごめんなさい！！」

あたしは唯、謝ることしかできない。
怖かった。烈兄をこんなに傷つけて、もう烈兄にあたしのことを見てもらえなくなるんじゃないかって。

「目……戻った……ね。……落ち着いた……み…た……い。……よかっ……た」

烈兄はそこまで言うと気絶して、ウイングロードから足を踏み外して落ちてしまった。

「烈兄！！」

「烈君！！」

烈兄は重力に逆らうことなく落ちていく。

あたし達じゃ間に合わない！！

でも

「兄さん！！！」

アリスとユニゾンして、三対六枚の白い翼を生やしたアオが落ちていく烈兄を抱き留めた。

アオはあたしとなのはさんを睨み付ける。

だけど直ぐに無視して、近くのビルに降り立った。

「第５章　１４項！！　エンジェルシフト！！」

アオは何かの技を使い、六枚の翼で烈兄を包み込む。

そして、再び翼を広げ、あたし達には目もくれず六課の隊舎へと飛んで行った。

あたしとなのはさんは、ただ、立ち尽くすことしかできなかった。

模擬戦は、烈の重傷という最悪の結果を出して終結したのであった。

第３６話　願い、ふたりで（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

アリステラ
「みなさんこんにちは、アリステラです。
あとがきコーナーの名前が遂に決まりました。『草薙一家の団欒』です。
今回は家族みんなでお茶しています」

蒼
「えっ？　本編シリアスで大変なことになってるのに暢気にお茶飲んでていいの？　って？
ここはあとがきコーナー。つまり舞台裏だから問題無い。
というかシリアスばっかりなのもアレだから、あとがきでは気楽にやりたいのだと。
それにしても、このお茶美味いな」

エイジス
「本当ですぅ～」

リインフォース
「……なぁ。流石にアレはかわいそうじゃないか？」
（※リインフォースは八神家ではなく、草薙家扱いです）

蒼
「せっかくの貰い物だ。捨てる訳にもいかんだろ？　あ、兄さんお茶お代わり」

烈
「……」

→無言でお茶をつぐ
……ネコ耳メイド服で
髪も銀髪モードです（笑）

アリステラ
「可愛いですよ、兄様♪」

蒼
「ちなみにこのネコ耳メイド服は、ライ様からの贈り物だ。本編でのアリスのフルサイズ用プログラムも同じくライ様から。コラボ話の時にお土産で貰った」

リインフォース
「ついこの間、女装させられたばっかりなのにな」

エイジス
「男の娘のマイロード、男の娘のマイロード……ポッ」

リインフォース
「……烈、気を落とすなよ」

烈（通常）
「ありがとう、リインフォース。俺の味方でいてくれて」

蒼
「大丈夫。兄さん可愛いから」

アリステラ
「そうですね～。……ってあれ？　アオちゃん、なんか異次元の穴からファ○ネルみたいなのが飛んできてるんですが」

エイジス
「で、ディバインビットって聞こえたです！」

蒼
「異世界の高町か。面倒だ。フィン○ァンネル！！」

シャラララララ！！

ピュン！　ピュピュン！！

～～～～～～～～～

シ○ア
「私、シャア・ア○ナブルが粛正しようというのだ！！！」

ア○ロ
「エゴだよそれは！！」

ピュン！　ピュン！
ティティーン！！

アム〇
「νガンダムは伊達じゃない！！！」

ピュン！！　シャキーン！　シャキキキーン！！　バシュウン！！

～～～～～～～～～

ディバインビット殲滅

蒼
「ふう。終わったな」

リインフォース
「途中、変な会話が入ってたが」

烈（ネコ耳メイド）
「蒼のやることだから、気にしたら負けだよ、リインフォース」

アリステラ
「アオちゃんって、からかい過ぎで怨みを買うことがありますからね」

蒼
「他人の不幸は蜜の味（笑）」

リインフォース
「……はぁ」

烈（黒）
「昔と比べたら性格が大違いだ」

リインフォース
「全く。しかも、今の方がタチが悪い」

エイジス
「蒼さんの昔の性格ってどんなんだったんですか？」

アリステラ
「あ、私も聞きたいです」

烈／リインフォース
「「聞きたいか？」」

アリステラ／エイジス
「「はい！　是非！！」」

烈（黒）

「甘えん坊」

リインフォース
「純粋故に残酷でブラコン」

アリステラ／エイジス
「「そ、想像できない……（蒼を横目で見ながら）」」

蒼
「ハ、ハ、ハ……。あーあーお茶が旨い（目を逸らしながら）」

リインフォース
「ま、過去編は大分先の話だ」

烈（通常）
「詳しいことはネタバレになるから言えないけどね」

アリステラ
「（兄様、人格がころころ変わってるんですが）」

エイジス
「（はわわわわわ…）」

蒼
「うむ。じゃあ今回はこれまで！」

4人
『逃げたな（ましたね）』

蒼

「え～、感想や意見など待っている」

4人
『スルー?!』

蒼
「それでは次回、第37話　力の意味」

4人
『次回もよろしくお願いします!!（最後までスルーしたよこの人）』

第３７話　力の意味（前書き）

今回なかなか文章が浮かびませんでした。
タイトル通りじゃない気もします。
アップしたのはいいんですが、正直微妙です。

いろいろ省いてますが、そこは申し訳ありません。

そして今回重要なキーワードのオンパレード。

『戯言シリーズ／人間シリーズ』の読者の方は、烈と蒼の所属がわかります。
ただし、オリジナル設定になっていますのでご注意下さい。

第37話　力の意味

目を覚ますと、知らない天井が目に入った。
……言いたくてネタを言った訳じゃないわよ。

「あら、ティアナ起きた？」

シャマル先生が自動ドアを開けて入って来る。

「シャマル先生……えっと」

「ここは医務室ね。昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる？」

言われてあたしは思い出す。
無知やって、怒られたことを。

「……はい」

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージはないと思うんだけど」

そう言いながら、シャマル先生は自分のデスクに何かを取りに行く。
そういえば下半身が涼しいような……って、あたし下に下着しか着てないじゃない！！

「どこか痛いところとかある？」

「いえ……大丈夫です」

シャマル先生はあたしのジャージを手渡す。
あたしはそれを受け取り、ふと時計を見た。

「えっ！？　９時過ぎ！？　えぇっ、夜ぅ！？」

模擬戦を始めたのが１１時過ぎだったから、９時間は寝てたってこと！？

「凄く熟睡してたわよ。死んでるんじゃないかって思うくらい。
最近、ほとんど寝てなかったでしょ。貯まってた疲れがまとめて来たのよ」

そっ……か。毎朝４時から自主練してたから……。
……あれ？　あたし、何か大事なこと忘れてるような気が……
あ！！

「あ、あの、シャマル先生！
烈は……烈は今どこに！？」

思い出した。あの時、烈に庇ってもらったこと。謝っておかないと。

「えっと、草薙曹長のこと……よね。アオちゃんのお兄さんの」

烈の名前を出した途端、シャマル先生の口調が重くなった。
……何か……あっ…た？

「草薙曹長はね……意識不明の重傷なの」

その言葉を聞いた瞬間、背筋が凍った。

女子寮・蒼の部屋

部屋の結界の張られたベットの中で、烈は死んでいるかのように眠っていた。
上半身に服は着ておらず、代わりに頭や胸、右腕に包帯が巻かれている。
そして、左腕の肘から先はなくなっていた。

ベットの傍らには、アリステラ、エイジスが目に涙を浮かべて心配そうに烈を見守っている。
蒼は結界の中に入り、診察するかのように烈の体に手を翳していた。

「…アオちゃん。兄様の容態は？」

アリスが恐る恐る尋ねてくる。
エイジスも気になるようで、兄さんを見ながらも私を横目で見る。

「なんとか大丈夫ってところだ。……本来なら死んでてもおかしくはない。シャマルだったら助けられなかったろうな」

兄さんが助からなかった場合のことを考えたみたいだな。
２人の顔が真っ青になってる。

私も間に合わなかったことなんか考えたくない。

実際にスバルの攻撃を食らった兄さんの体は、筋肉断裂や内臓破裂。更には骨格に皹が入るといった、再起不能どころか死んでもおかしくない重傷だった。

また、高町の砲撃もほぼ零距離で食らった為、かなりの魔力ダメージが残っている。本当にあの砲撃は訓練用だったのか？

だが、攻撃を食らう直前に兄さんは『金剛不壊』って技で肉体強化していたみたいだし、私の治療も間に合った。

なんとか一命を取り留めることはできた。

「しばらくは目覚めない。が、５章の技で自己回復速度を上げて、結界内部の時間の流れを変えてはいる。目覚めるのに一週間は掛かるだろう」

「い、一週間経てばマイロードは目を覚ますんですよね！？」

「兄様の意識が二度と戻らないなんてことはないですよね！？」

目覚めない可能性を考えて怖くなったのか、２人は叫びながら尋ねる。

「病人の前で大声を出すな。まったく、私を信用できないか？　大丈夫だ。兄さんは絶対目覚める」

それを聞いて安心したのか、2人はホッと安堵の表情を浮かべる。
エイジスは会って間もないからともかく、アリスは少しくらい私のこと信用しろっての。
「やれやれ」と言って、私は結界から出て机に向かい、備え付けの椅子に座る。

《とりあえず、一安心といったところか》

《なんとかな。だが、まだやらなきゃならないことはあるさ》

リインフォースが話し掛けてきたので返事を返すが、私も長時間、兄さんの治療で流石に疲れが襲ってきたのか、少しリインフォースとの脳内会話は辛い。

《スバルが何を使ったのかはわかったのか？》

《さあ？　詳しいことはスバルに聞いてみないとわからない。だが――》

《だが？》

《――私達の能力に近いものかもしれないな》

《そうか……ん？　能力といえば『機能（ツール）』、いや『ＡＳ（エーエス）』の「核（コア）」になってる人工心臓は無事なのか？》

リインフォースが普通の人が聞いたら信じられない単語を口にする。
私以外には聞こえないからよいものの、誰かが聞いていたら大変なことになっていただろう。

人工心臓。
それは、“表世界”の医療技術では未だ届かぬ領域にある存在なのだから。
ミッドでは医療技術のレベルがどれほど高いかわからないが、例え人工骨格のレベルまで到達しているとしても、人工心臓までは創り出されていないだろう。
本来、私のいた地球の医療技術でさえ実現不可能の領域にあるが、私と兄さんの生まれた一族は例外だ。

私達が生まれた一族。それは、『殺し名七序列』に名を冠し、『殺し名』の内で最も拷問を得意とする一族。
相手を殺さずにどれだけ苦しみを与えられるか。それが私達の生まれた一族の理念だった。
拷問の研究の為に人体構造の研究も行っている為、“表世界”の比にならない程の高い医療技術を所有している。
人を苦しめる為に人を助ける研究をするなんて、なんとも皮肉な話だがな。
しかし、それでも一部の人工臓器ならともかく、人工心臓を創り上げるまでには達っしてはいなかった。
人工心臓が完成したのは、一族の技術と“あの男”の協力によるものらしい。

最近いろいろと調べたいモノがあるからな。六課のこととか管理局のこととか。
“あの男”は死んだが、ついでに“あの男”についての情報がないか調べるか。

ミッドの医療技術がかなり高度なものなら、“あの男”はミッド出身の可能性もある。
なら、ミッドの技術レベルも調べないとならないな。

《信じられないことに、人工心臓は無傷だった。運が良いとしか言わざるを得ないな》

《本当に運がよかったな》

《ああ》

ふぅ、と深く息を吐き、私は椅子の背もたれに背中を預け、深く体重を掛ける。

「紅月は自己修復プログラムをフル稼動させてるからいいとして、問題は……兄さんの新しい義手を作らないとなぁ」

私は傍らの小さな座布団の上に置いてある紅月を見る。
紅月は宝石の部分に燁が入っており、時たま光ったりしている。
しばらくその光景を眺めて目を逸らし、「義手……か」と、呟いた時。

コンコン！

「ん？」

「「　？　」」

ドアをノックする音がした。

部屋にいる私達全員はドアの方を向く。

「……誰だ？　面会謝絶って張り紙をしていた筈だが」

ゆっくり椅子から立ち上がり、ドアへと向かう。

「ティアナやスバルはともかく、高町なら絶対入れるつもりはないがな」

《お前、高町なのはが嫌いなのか？》

《残念。六課の隊長３人娘全員嫌いだ》

ガチャリ！

そんなことを言いつつ、私は扉を開けた。

「すみません、ナカジマ三佐」

六課の部隊長室。私はナカジマ三佐と通信で話しとった。
午前中の模擬戦による烈君の件について。

『俺に謝っても何にもならんだろうが。謝るなら高町の嬢ちゃんが烈に謝るこったな』

「……はい」

『で、烈はどうなんだ？』

「烈君の妹さんが直接治療しています。まだ、どうなったかはわからんのですが」

……まだ、蒼は何も言ってきてへん。烈君の容態がどうなっとるのとか。

『そうか……スバルと高町の嬢ちゃんは？』

「なのは隊長は軽くショックを受けたみたいですけど、今は立ち直ってます。
スバルは……あれからずっと寝込んでるみたいです」

シャマルから聞いた話、スバルも医務室に運ばれたんやけど、ずっと「ごめんなさい」って謝り続けとったらしい。
今はもう部屋に戻っとるらしいけど、部屋でも泣いて寝込んどるみたいや。

『八神よ、今回のこと黙ってはおくが、もし他の地上部隊や地上本部にこのことがばれたら、六課は強制的に解散させられる可能性がある』

本局と地上の仲はただでさえ悪い。
特に地上なんかは本局を怨みをもっとるし、レジアス中将も六課設立には断固反対やった。
もし、今回の件が公になれば、地上はこれを好機とみて六課に介入してくるやろう。

ナカジマ三佐に感謝やな。この件は六課内部で揉み消しにせなな。

『だが、勘違いすんなよ八神』

「へ？」

『俺にとっちゃあ烈は息子みてぇなものだ。俺だって頭にキテんだよ』

通信越しでもナカジマ三佐が怒っとるのがわかる。

『今回は師弟の誼(よし)みだから黙っといてやるだけだ。
だが、黙っといてやるからって調子に乗るんなら――』

あかん。冷や汗が止まらへん。

『俺は六課を潰す。それだけは忘れんな』

ナカジマ三佐はドスの効いた声で言い放ち、通信を切った。

……今の、マジやったな。

「戦闘機人にインヒューレントスキル…か」

カチャリ、と飲んでいた紅茶のカップを置く。
私は今まで部屋を訪ねてきた人物の話を聞いていた。
“私”ってのは、アリスとエイジスがいつの間にか眠っていたからだ。
あ、でもリインフォースを入れれば“私達”か。
それはさておき。

「つまり、兄さんが重傷なのはスバルがＩＳを使ってしまったから。で、いいんだな？　……ギンガ」

「……うん」

私の目の前にいるのは、兄さんと同じくらいの歳で、紫っぽい青髪の少女。
名前はギンガ・ナカジマというらしく、スバルの姉で兄さんの同僚らしい。
というか初めて知ったんだが、兄さんはスバルの家で４年間ずっと居候していたらしい。

「あの……何とも思わないの？」

突然、ギンガは呟いた。あ、ナカジマって呼ぶと面倒だから名前で呼ぶようにしたぞ。

「何がだ？」

「私もスバルも、元々は人を殺す為に生み出された兵器で、烈が重傷を負ったのもそれが原因なんだよ」

お前な、それを言ったら私と兄さんはどうなる――――って叫びたかったが、またボロを出す羽目になるのでなんとか引き留めた。

「じゃあ聞くが、お前達は兵器でいたいのか？」

「……ううん」

「兄さんはお前とスバルが戦闘機人だってことを知っているんだろ？　兄さんはそれを知って、お前達を否定したのか？　拒絶したのか？」

「……否定も拒絶もしなかった。烈は私達が戦闘機人だって言っても受け入れてくれた」

「ならいいじゃないか」

私は再び紅茶を飲む。

「高町達がお前達のことを知っているのかどうかは知らないが、兄さんは知っている。お前達の生まれ方も、能力も。
だから、兄さんは他の誰かにお前達のことを知られないようにするために、あの時スバルを止めたんじゃないか？　自分が傷つくことになったとしてもだ」

「……わかってるんだ。烈のこと」

「そりゃ双子の妹だしな。……ま、兄さんは一週間もすれば目覚めるだろう。
今後どうなるかはスバルやティアナ次第だな。兄さんのことだからあっさり許すだろうが」

そこまで言って、私は紅茶を飲み干す。
喋り過ぎると喉が渇くな。

「そっか。……ねぇ、烈のことといろいろと教えてくれない？」

いきなり何を……まさかとは思うが、こいつ……

「……何故だ？　お前は兄さんと４年間も過ごしてきたんだからい

ろいろ知ってるんじゃないか？」

「えっと……実はあんまり。料理作るのも烈がやってくれてたから、好きな食べ物とかも……知ら……ない」

徐々に声が小さくなっていく。

呆れた。

「兄さんに惚れてるのにそれはないだろ」

「ほ、惚れ！！？」

顔真っ赤。図星じゃないか。

と思った時。

ヴーー！！　ヴーー！！

ヴーー！！　ヴーー！！

部屋全体。いや、隊舎全体にだろう。アラートが鳴り響き、赤いランプが光る。

タイミングがいいな。ガジェットも空気が読めるのか？　って、それはないな（笑）

「出撃かもしれん。私は行ってくるから兄さん診っててくれ。ああ、結界には入るなよ」

「えっ？　あ、うん」

私は椅子から立ち上がり、部屋を出ようとする。
が、重要なことを忘れてたので一旦振り返る。

「あ、あと、兄さんの左腕をメンテしてくれてた人っているか？」

いきなり聞かれてギンガは「へっ？」って顔になってる。
……いつまで動揺してんだか。

「あ、っと、本局のマリエルさんって人が……」

「んじゃ、その人に連絡しといてくれ。新しい義手作るから」

そう言って、私は部屋を出ていった。

《まったく、お前も趣味が悪いな》

ヘリポートへ向かう途中、リインフォースが話し掛ける。

《あまりからかえなくて残念だったな》

《……別に。本当はどうでもいいんだよ、そんなこと》

《む？　どういうことだ？》

《ギンガは“兄さん”に惚れてる訳だ。“お兄ちゃん”に惚れてる訳じゃない》

元々“兄さん”記憶は封じられているから、ギンガが“お兄ちゃん”のことを知ることはない。

だけど、もし“兄さん”の記憶が戻って“お兄ちゃん”に戻ったら？

そうなれば、みんな“お兄ちゃん”を拒絶する。殺す覚悟の無い潔癖症の人間だらけの機動六課。『人殺し』が自分達の傍にいたなんて知ったら、否定して、拒絶して、排除するだろうからな。

《……否定するとは限らないだろう》

《“表世界”で生きてきた人間が“裏世界”の『人』を受け入れるとでも？》

《それは……》

ほら、何も言えない。

《どうせギンガは“お兄ちゃん”を否定するさ。

……アリスやエイジスは……どうだろうな》

2人共、家族として受け入れるのか。

もしくは、主として受け入れるのか。

それとも、否定して拒絶するのか。

《実質、今考えても無駄だな。“お兄ちゃん”を知ってるのは私とお前くらいだからな》

《……私は“烈”を……いや、“験”否定するつもりはない》

《そう…か。ありがとな》

調度階段を上り終え、ヘリポートのある屋上まであとちょっとと

うところ。
しかし、屋上の入口で誰かがヘリポートを覗き込んでいるのが見えた。
あの髪は……シャーリーか？

「何やってるんだシャー……」

「シーー」

声を掛けようとしたら、唇を人差し指で押さえられた。
なんなんだと思いつつ、私もシャーリーの下から屋上に顔を覗き込まさせる。

ヘリポートには、隊長陣、ＦＷ陣が既に全員揃っていた。

「言うことを聞かない奴は使えないってことですか」

「自分で言っててわからない？　当たり前のことだよ、それ」

ティアナはいつの間にか目を覚ましたみたいだな。隣にいるスバル同様、表情は暗いみたいだが。
だが、高町の奴はなんだ。普通に平然としてやがる。……兄さんに容赦なく砲撃を撃ったこと、なんとも思ってないんだな。
……一度墜として同じ…いや、それ以上の痛みを味あわせてやろうか？

《昔、高町なのはがフェイト・テスタロッサにやったようにＳＬＢを使うのか？》

それはいい案だな。だが、１発だけじゃ足りないな。
連射で撃つのは二重の意味で不可能だからな。どうする？

っと、気付いたらティアナが何か叫んでいた。
自分が凡人だとか、強くなるのに無茶してはいけないのか、と。
自分の思いを叫んだティアナに対し、シグナムがティアナの左頬を殴った。

「うわっ…」

シャーリーもシグナムが殴ったのを見て思わず声を上げる。

「駄々をこねるだけの馬鹿は、なまじ付き合ってやるから付け上がる」

シグナムはティアナに向け、吐き捨てるように言う。
付け上がる、ね。シグナム、貴様も人のことは言えんな。

「はぁ。なんでみんな不器用なのかなぁ」

「全員馬鹿なんだろ」

シャーリーがため息を吐きながら呟く。

「で、いつまでこうしている？」

「タイミング計って割り込むかな」

私とシャーリーがそんな話をしていると、今度はスバルがシグナムに叫んでいた。
強くなる為の努力とかをしてはいけないのか、と。

タイミングがよかったので、私達は頷き合い屋上までの短い階段を上った。

「自主練習はいいことだし、強くなる為の努力も凄くいいことだよ」

「私からすれば、力に溺れている隊長達より、努力しようとするティアナやスバルの方がよっぽどマシだが」

私とシャーリーの登場に全員驚く。

「シャーリーさん」

「持ち場はどうした」

「メインオペレートはリイン曹長がいてくれますから」

「ふむ。……蒼、お前は兄の傍にいてやらなくていいのか？」

シグナムはシャーリーに聞いた直後、私にも聞いてくる。
さっき私の言った言葉が聞き捨てならないのか、若干声に殺気が篭っていた。
ま、殺意なき殺気なんてちっともたいしたことないがな。

「治療は終わったし、今はスバルの姉が傍にいる」

「ギン姉が？」

「ああ。で、シャーリー。みんなに言いたいことがあるんじゃないか？」

私が言うと、全員シャーリーに視線を向ける。
視線が集まると、シャーリーは一度ため息をつき話し始める。

「なんかもう、みんな不器用で、見てられなくて」

俯きがちでシャーリーは話す。
そしてキッとした表情になる。

「みんな、ちょっとロビーに集まって。私が説明するから。なのはさんことと、なのはさんの教導の意味」

「ふぅ」

バタン、と私は自分の部屋の扉を閉じる。
……ギンガは帰ったみたいだな。
アリスとエイジスは……寝たままか。

あれから、ロビーで高町の過去の話を聞いていた。

才能に恵まれ正義感に駆られ、力の意味も知らずに力に依存し奮い続けた、正義の味方気取りの馬鹿の末路。

私にはそういう風にしか見えなかったな。

FW達はどう感じたかわからんがな。

コンコン！

「ん？」

ドアをノックする音。

ギンガは帰ったよな？

ガチャリ、とドアを開ける。

ドアの前にいたのはスバルとティアナだった。

「お前達か」

「「……ごめんなさい」」

私が声を掛けた直後、２人は深く頭を下げた。

言いたいことはわかるがな。

「謝るのは私じゃなくて兄さんにだろ。ま、入れ」

私は2人を部屋の中に入れる。2人共全身を包帯で巻かれた兄さんを見てショックを受けていた。ま、予想はしていたが。

「スバル。ギンガから聞いたぞ。お前達姉妹の生まれのこととかな」

それを聞いて、2人はビクッと反応する。
ティアナも知ってたのか。スバルのこと。

「別に私はお前の生まれ方とか、生まれた理由とかは気にしない」

私達とは違うが似たようなものだからな。

「……ありがとう、アオ」

スバルは礼を言った後、ベットの傍の椅子に座って、兄さんを心配そうに見つめていた。

「ま、兄さんが起きたら謝れよ。療養場所は私の部屋からお前の家に移すけどな」

「……うん」

六課に置いたままだと、スバルやティアナが仕事や訓練に身が入らなくなるだろうし。

「あの……アオ」

私はティアナに声を掛けられた。何か話したいようなので、スバルから離れた位置にティアナを連れていく。

「んで、何だ？」

「その……この間はゴメン。何も知らないのに勝手なこと言って」

あの時のことか。

「別に。気にしてはいない。私こそ悪かったな。で、高町とは話したのか？」

「うん。なのはさんは私達のことをちゃんと考えてくれてるってわかった。でも――」

ん？　納得しなかったのか？　子供だから納得して、高町の言葉をそのまま受け入れて終わりかと思ったんだが。

「でも、アオは前に言ってたわよね。『死ぬような環境で生きてきた』って。

そのことを思い出して、なのはさんとアオが生きてきた環境は違うんだって思って。

なのはさんの言ってたことは正しいけど、アオの言ってたことも正しいんじゃないかって」

……意外だったな。流石にこんな反応は予想してなかったぞ。

「さあな。どっちが正しいなんてのは、誰にもわからん。高町は自分が正しいと思ってるし、私も自分が正しいと思っているからな」

「なら、教えて。貴女の過去、生きてきた環境のことについて」

またまた予想外なことを言ってきたな。だが――

「あ…ごめん。言いたくなんかないわよね」

試してみるのもいいかもしれない。

「……覚悟」

「えっ？」

「お前に覚悟はあるか？　私の生きてきた環境は、お前からすれば否定したいこと。認めたくないこと。信じられないこと。日常では絶対に有り得ないこと」

“裏世界”は“表世界”に出てくる犯罪者や暴力団なんてものの比じゃない世界。
目的の為なら人を殺すことを何とも思わぬ者達の住む世界。
『匂宮（におうのみや）』のように、人殺しを仕事とする者。
『零崎（ぜろざき）』のように、人殺し生き様とする者。
“表世界”で普通に生活してかた者なら、即座に拒絶反応を起こしてもおかしくないことだらけの世界。

「誰もが否定したくなる世界を、お前は見る覚悟があるか？」

私はティアナの目をしっかりと見つめながら言う。
試したくなった。さっきまで私は「“表世界”の人間が、“裏世界”の人を受け入れる筈が無い」と思っていた。
まだ断定はできないが、少なからずいるのかもしれないかもな。“裏世界”の人を受け入れる人間が。
ま、興味本意なら教えるつもりはないし、聞いたとしても後でどうなっても責任は取らん。

「覚悟……やってやろうじゃない」

ティアナはニヤリと笑う。ずいぶん強気だな。

「なら、まず覚悟から見せてもらうとしようか。
2週間、お前が夜に自主練をやってた時間に私と1対1で近接戦闘の訓練をしてもらう」

「そんなんでいいの？」

「言っておくが、非殺傷設定は使わん。訓練というより“殺し合い”だ。私達の生きてきた環境がどんなものか、“殺し合い”で教えてやる」

「ッ！！」

流石に驚くか。まあ、驚かない方が有り得んが。

「なんだ？　怖いのやら止めてもいいぞ」

「……やってやる」

「む？」

「やってやるわ！　良い機会よ！　執務官になったら、“殺し合い”をすることだって有り得るんだから！
そんなことで怖がってたらお兄ちゃんが目指した執務官になんかなれやしない！
見せてやるわよアオ！　あたしの覚悟！！」

多分、私は鳩が豆鉄砲を喰らった顔になっているだろう。
ほんと、私の予想を裏切ってくれるな。

「くくく。なら見せてもらおうじゃないか。
ま、兄さんの義手の作製もしなければならないから、訓練は兄さんが目覚めてからな。
ああ、その間にやっぱり止めたくなったら言いにこいよ」

「上等よ！！　諦めたり、挫折なんてしないから！！」

「くくく。結構結構」

さて、おもしろいことになってきたな。
だがまあとりあえず――――――

――――義手の作製から始めるか。

第３７話　力の意味（後書き）

～草薙一家の団欒～

アリステラ
「人工心臓、ＡＳ、拷問、医療技術。伏線だらけな今回のお話でした」

エイジス
「マイロードは……人殺しなの？」

Ｋの２乗
「それが２人の設定ですから。……って蒼！　フィンガーソードは止めて！！　・。・（ノД`）・。・。」

蒼
「胴ォーーーー！！」

リインフォース
「呑気なものだな。ガンダムＶＳガンダムＮｅｘｔＰＬＵＳか」
（お茶を飲みながら（　－＿－）旦～）

アリステラ
「アオちゃんと作者さんって、ゲームやる時だけは仲がいいですよね」

エイジス
「ですね。……そういえば、おねぇちゃん。貰い物にこんなものが」

アリステラ
「えっ？　ライ様から……兄様の写真集!?」

エイジス
「おねーちゃん早く見よう!!」

アリステラ
「ええ!　……ワンピースかわいい／／／」

エイジス
「学校の制服も／／／」

リインフォース
「プラグスーツ（赤）か。流石にエロいな」

アリステラ
「兄様の腹出し／／／／／／」

エイジス
「マイロードのバニー／／／／／／」

リインフォース
「最後の服、もはやこれは布だな」

アリステラ
「鼻血が…止まらない……ハァハァ」

リインフォース
「そういえば、貰い物にもう一つ、マナケミアというものの堕天使

のレオタードもあるが」
」

アリステラ／エイジス
「「是非、兄様／マイロードに！！」」

リインフォース
「残念ながら作者が元ネタがわからないのと、烈の不在により不可能と」

アリステラ／エイジス
「「ｏｒｚ」」

リインフォース
「（まあ烈も女装なんて御免だろうがな）
では、今回初出の戯言用語紹介だ」

『匂宮』
・“殺し名”序列一位。別名『匂宮雑技団』
・対極の“呪い名”は『時宮（ときのみや）』
・相手が誰であっても頼まれれば殺す《殺し屋》
・『匂宮』を本家とし、分家が五十三家存在し、苗字は全て『源氏物語』からきている
例）『早蕨（さわらび）』『澪標（みおつくし）』『総角（あげまき）』

『零崎』
・“殺し名”序列三位。別名『零崎一族』
・唯一“呪い名”に対極を持たない
・“殺し名”の中で最も忌み嫌われる殺人鬼集団であり、唯一血による繋がりがなく、流血による一族である
・故に、全体の人数は２０名程度と小規模。
・だが、結束は固く、家族に仇なしたものには、老若男女容赦なく復讐しに行く

アリステラ
「以上になります。恐ろしいですね」

リインフォース
「まあ、蒼も烈も会ったことはないが、“裏世界”の常識だからな。ところで蒼と作者は……」

蒼
「スタンのサブ射撃に、追尾のアシスト強っ！！」

Kの２乗
「ビギナ・ギナはネタ機体じゃないんだよ！！」

はやて
「おもしろいことやっとるなぁ。私も混ぜてくれへん？」

蒼
「貴様が悪だ！！（ナタク使用）」

Kの2乗
「貴様は歪んでいる!!（エクシア使用）」

はやて
「ゆうてくれるやないか。……行くでなのはちゃん!!（DX使用）」

なのは
「万死に値するの！　遊んであげるわ。おいで、まな板娘（ヴァーチェ使用）」

『3…2…1…GO!!』

リインフォース
「ずっとゲームをやっているようだからこっちは終わらせるか」

アリステラ
「そうですね。では次回予告!」

エイジス
「次回、第38話　機動六課のある休日　レリックを持つ少女」

リインフォース
「では、また次回な」

試合結果

勝者　蒼・Kの2乗チーム
敗者　はやて・なのはチーム

蒼　　撃墜0回
Kの2乗　撃墜1回
はやて　撃墜1回
なのは　撃墜2回

蒼／Kの2乗
「「ツインサテライトキャノンやGNバズーカ・バーストモードを撃たせるとでも？」」

なのは／はやて
「「orz」」

第３８話　機動六課のある休日　レリックを持つ少女（前書き）

すみません！！　前回、次回予告のタイトル間違ってましたｍ（＿）ｍ

「その日、機動六課」じゃすっ飛ばし過ぎでした！
前回の次回予告は修正しました。

そして更新が遅れて申し訳ありません。
なんか書いていると長くなってしまったりして、時間が掛かるんですよね。
それに夏休みも終わって、受験もありますので。

それでは、本編をどうぞ。

第３８話　機動六課のある休日　レリックを持つ少女

目を覚ますと、馴染みの深い見慣れた天井が目に入った。

「ん……俺の……部屋？」

首だけ動かして辺りを見回すと、確かに俺の部屋だった。
陸士部隊の制服や私服の入ったクローゼット。
最近は主に集めた情報の整理に使うデスク。
訓練校に入る為の勉強に使った本やデバイス関連の本、他にも料理本や文庫小説の入った本棚。
あとは今自分が寝ているベット。
いたってシンプルな部屋だ。

……いや、なのはさん達みたいにワーカホリックだったりする訳じゃないからね。
ただ物を買う量が少ないだけだからね。もう一つ、誰かの食費にお金を使うことが多いのもあるんだけど、それは気にしない。

さて、何で俺は自分の部屋で寝てるんだっけ？
……とりあえず起き上がろう。
そう思って、左腕に体重を掛けて起き上がろうとしたが……

「あーー……そっか思い出した」

起き上がれなかったので左腕を見たところ、肘から先の部分、つまり義手の部分がなかった。

スバルの『振動破砕』を『金剛不壊』で強化してたとはいえ直接防いだからなぁ。義手が壊れてもしょうがないか。

……ってちょっと待って。何で俺生きてるの？　『振動破砕』をモロに喰らっちゃったんだよ！？　普通なら死んでてもおかしくないよね！？　いや直接防いだ俺も馬鹿だったけど！！

そんな感じに混乱していると――

ガチャリ！

誰かがドアを開けて部屋に入ってきた。

俺は首をドアの方へ向ける。

目に入ったのは、タオルと水の入ったタライを持った金髪の少女。

ってつまり、エイ。さすがにタライが普段の大きさだと重いのか、フルサイズ姿だった。

「……エイ」

「ま、マイロード！？」

エイは俺が目覚めてるのに驚くと同時に、目から涙を流し始める。

心配かけちゃったなぁ、と思うと同時に嫌な予感がしてならないんだけど（汗）

「マイロードーーー！！！」

案の定、エイは俺に跳びついてきた。

……タライを放り投げて。

「ちょっとエイ！！　タライ！！　……って冷たぁ！！」

放り投げられたタライの水が俺の上半身に直撃し、俺はずぶ濡れになる羽目となった。

「ごめんなさいです、マイロード」

「ううん。大丈夫だから」

あれから数分。とりあえずびしょ濡れになった服を脱ぎ、体を拭いて着替えた。

……左手使えないので手伝ってもらったけど。

下着は濡れてなかったから、着替えたのは上だけだらかね！　エイやアリスに下着の着替えを手伝わせたなんて想像しないように！！

「でも、烈が目覚めてくれてよかったぁ」

「本当です。この一週間、兄様が目覚めないんじゃないかってずっと心配だったんですから！」

ちなみに今はエイだけじゃなく、ギンガとアリスもいる。

アリスは一週間前からナカジマ宅に泊まり込みで俺の看病をしていたらしく、ギンガはゲンヤさんに許可をもらって仕事を抜けてきたらしい。

「みんなごめんね。心配かけて」

俺はみんなに謝り頭を下げる。

謝ることぐらいしかできないからなぁ。

「（チャーンス！）……本当に心配したんだから。この一週間仕事も身に入らないし、食事も喉を通らなかったんだから」

突然ギンガが泣き出す。
えっと、どうしよう！？

「ご、ごめんギンガ。お詫びに何でもするから！」

「（計画通り！）じゃあ今度デートして！！」

何でもすると言うと、あっさり泣き止んだ。
まさか……狙ったねギンガ。
でもやっぱり駄目とか言ったらまた泣き出したりするんだろうなぁ。

「あ、なら私も！」

「わ、私もマイロードとデートしたいです！」

あろうことにか、アリスとエイも言ってくる。まったく、この子達は……はぁ。

「わかった。いいよ」

『やったーーー！！』

3人共喜んでハイタッチまでしている。

「でも、その前に」

『？』

「左腕どうにかしないとなぁ」

義手は壊れてしまったから、新しく作ってもらうなりなんなりしないと。

「無問題（モーマンタイ）だぜマイブラザー！！」

バタンッ！　と、ドアを開けて部屋に入ってきたのは、キラッ☆と「銀河のはちぇまれぇ！！」で有名な某歌姫のキメポーズをした蒼。
そしてアタッシュケースを持ったマリーさんだった。
蒼、テンションおかしくない？

「ちなみに徹夜でテンション上がってます。キラッ☆」

心を読まない。あとキャラ崩壊がひどい。

「マリーさんそれは？」

ギンガが蒼を無視して尋ねる。
アリスとエイも無視することにしたらしく、マリーさんのアタッシュケースを見ている。

「私と蒼の２人で作った烈君の新しい義手だよ」

「ええっ！？」

いつの間に！？

「腕だけに、アームドデバイスだ！」

「アオちゃん面白く無いです。あといい加減そのテンション止めて下さい」

『うんうん』

蒼以外全員がアリスの言葉に頷く。

「酷くない？」

『酷くない』

「ちぇー。……まあふざけるのはこの辺にして。マリエルが言った通り、これは兄さん専用の新しい義手な」

いきなり普通のテンション戻ったね。いや戻るのはいいんだけど、何て言うか……ねぇ。

それはさておき、蒼が目でマリーさんに合図すると、マリーさんがアタッシュケースを開ける。

中に入っていたのは、以前のような鉄色の義手ではなく、限りなく人間の肌に近い色の義手だった。

「作製にはデバイス技術を利用した。さっきも言ったようにアームドデバイスでもある」

「じゃあ、魔法の登録もできるんですか？」

エイが疑問に思ったことを口にする。

「できなくはない。だがセンサー機能を応用して触覚を感じれるようにするデータがメモリを食ってるからな。残りの空きが少ないから軽い魔法しか登録できん」

さりげなく凄いこと言ってるよね。普通の義手だと触覚を感じられないから、デバイス技術を使ってくれたんだ。

「だが代わりに腕をドリル等に変形させるデータを組み込むこともできるが……兄さんやっていい？」

前言撤回。蒼は面白くなりそうだからやってるだけだ！
他のみんなもドン引きしてるし。

「勘弁してね、蒼」

「……チッ」

『（今舌打ちしたよね！？）』

「気の所為だ。で、とりあえず義手付けるには左腕の神経と筋肉を正確に接続しなければならないからな。接続手術は明日でいいか？」

「わかった」

「んじゃまーー……寝る」

そう言って、蒼はベッドに倒れ込んで来た。
俺は右腕で蒼の体を抱き留める。

「蒼！？　って……」

「……ＺＺＺ」

もう寝てるし。

「しかたないよ。蒼はこの一週間ずっと徹夜してたんだから」

「マリーさん……そうだったんですか」

「だから、今は寝かせてあげよう」

「……そうですね」

俺は蒼の髪をゆっくり撫でる。

本当に心配かけてごめんね。

そしてありがとう、蒼。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それからさらに一週間後

機動六課訓練場

「はい。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！」

なのはさんがあたし達を集合させて訓練終了を告げる。午前練も疲れたたなぁ。

「でね、実はなにげに今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど」

『ええっ！？』

そんなの聞いてないよ～。……まさか不合格とか？

「どうでした？」

「合格」

「「早ッ！！」」

あたしとティアが一緒にツッコム。いくらなんでも早過ぎだよ。

「ま、こんだけみっちりやってて問題あるようなら大変だってことだ」

う〃、確かに。ホントにみっちりでヴィータ副隊長に何回も吹っ飛ばされたしなぁ。

「私もみんないい線いってると思うし、じゃあこれにて二段階終了！」

「ヤッターー！！」

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーのところに行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本にして訓練すっからな」

『はい！！』

ってあれ？　今ヴィータ副隊長なんて？

「えっ？　明日？」

そう！　そこだよ！　明日ってどういうこと？

「ああ。訓練再開は明日からだ」

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「みんな入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

えっと、それってつまり？

「ま、そんな訳で」

「今日はみんな一日お休みです。街にでも出かけて遊んでくるといいよ」

「「はーーいッ！！」」

エリオとキャロが元気に返事をする。遊ぶ……か。あたしは烈兄のお見舞いに行こうかな。

「ほう？　午後の訓練は休みなのか。調度いい」

「そうですね、アオちゃん」

『　！？　』

アオとアリスがこっちに歩いて来た。あたしの家で烈兄の看病してたんじゃ……

「スバル、ティアナ。お前達クラナガンに行ってこい」

「「えっ？」」

何で？　クラナガンに行っても……

「兄さんの治療とか全部終わったからな。今日兄さんはエイジスと一緒にクラナガンに行ってる。だから、会いに行って謝ってこい」

じゃあ烈兄はもう大丈夫なんだ。

「ありがと、アオ。行こうティア！」

あたしはお礼を言ってからティアの腕を引っ張る。

「ちょっとスバル！　そんなに引っ張らないで！！　……キャア！！」

あたしは全力で部屋に向かった。

あたしが引っ張りすぎてティアが浮かんでるのも気にならなかった。

……部屋に着いてから怒られたけど。

ミッド首都クラナガン

その中心部辺りにある噴水場の傍のベンチに俺とエイは腰掛けていた。ちなみにエイはフルサイズ姿。

「いやしかし……傷も全部癒えたし、義手も動かせるようになったのに休んじゃっていいんだろうか？」

「たまにはいいんじゃないですか？　それに、マイロードは約束したじゃないですか！」

「はいはい。わかってるよ」

一週間前の約束通り、デートという形。でも、エイって妹って感じだからなぁ。デートと言うか、兄妹でお出かけみたいな感じかな。

ちなみに、俺の服装はジーンズに白い半袖Tシャツと夏用の紅い半袖の上着。左腕は新たな義手が付けられていて、限りなく肌色に近いから包帯で隠す必要もない。
エイの服装はフリル付きの黒いワンピースと黒いハイソックス。髪はポニーテールじゃなくてストレートにして、雷の形のペンダントをしている。

それはさておき、誰もが疑問に思うんじゃないかな。
一週間程度で新たな義手を繋いで自由に動かせるようになるのかって。

説明すると、まず6日前に接続手術をしたんだよ。左腕の傷を開いて、義手と神経を繋いだらしい。
らしいってのは、手術中ずっと眠らされていたから、実際に繋いだところを見てないんだ。
何故か知らないけど、麻酔じゃなくて蒼がグリモワールを使って眠らせた。「何で？」って聞いたけど、理由は教えてくれなかった。

で、その翌日から。
蒼が『修練の門』ってどこかの異世界から借りて来た物を使って、時間の流れが違う異空間でリハビリを行った。
京谷君も使ってたよね。一体どこから借りて来たんだか。

そして昨日、異空間で長時間のリハビリの結果、義手を自由に動かせるようになった。
うん、長かった。異空間では何ヶ月も経過したのに、現実世界ではたった5日しか経ってないんだよね。

以上、説明終了！

『主、マイスター殿からメールが来ています』

「蒼から？」

俺は紅月に言われてメールを開く。エイも横から覗き込んでくる。
エイ、人のメールを勝手に覗いちゃだめだよ。

「えっと…『今日ＦＷ達は休みらしいから、スバルとティアナがそっちに行かせたのでよろしく』ってはい？」

と、俺とエイが首を傾げ首を上げたところ

「本当に来てる」

遠くにスバルとティアナの姿が見えた。
向こうもこっちに気付いたらしく、小走りで駆け寄ってくる。
何でこうタイミングよくメールが届くんだろうか？

「「烈／烈兄！！」」

「やっほ、スバル、ティアナ」

俺は軽く手を振る。二人共、左腕を見て驚いてる。ま、そりゃそうか。

「烈兄……あの……その……」

「スバル」

スバルが言いかけようとするのを俺は遮り、右手をスバルの頭に伸ばしてゆっくり撫でる。
スバルはビクッとなったが、気にせず俺は頭を撫で続ける。

「烈…兄？」

「怒ってないからね、スバル。この間のこと」

「でも……」

「反省したんでしょ？　蒼から聞いたよ」

「だけど……」

まったく。いつものスバルらしくない。こうなったら……

「てい」

「あう！」

ビシッ！　と右手で頭をチョップ。

「烈兄、何を……」

スバルはちょっと涙目になって頭を摩ってる。そんなに痛かった？

「殴ったの」

「へっ？」

「この間殴ったの、今のでチャラ」

「へっ？　えっ？」

「さっき言ったでしょ。怒ってないって。俺は反省してくれたならそれでいいの」

未だにスバルは混乱してる。

何でこの子は頭良いのにこうなのかなぁ。

「はい。もうこの間のことについてはおしまい！　終わり！！　も

う気にしない！！　オーケー！？」

「えっ、あっと、うん！」

「うん。それでよし」

よし、問題解決っと。んじゃ――――

「2人共、今日は休みなんだって？」

「えっ、あ、うん」

ティアナが答える。ゴメンね、俺の所為でさっきまで空気だったの。

「俺も休みなことだし、このままどこかに遊びに行かない？」

「そうね…いいわよねスバル？」

「うん！」

「エイもいい？」

「は、はい！」

「じゃ、まずはアイス屋にでも行きますか」

「わーーい！！」

さっきまで暗かったのに、もう元気になってる。うん、スバルは元気でないとね。
さて、エイにはちょっと悪い気もするけど、４人で休日を楽しむとしようか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一方、蒼はというと

ピピピピッ！　ピピピピッ！

自分部屋のデスクでモニターを開き、高速でコンソールを叩いていた。
ウインドウが現れては消え、消えては現れる。

「戻りました～。アオちゃ～ん、何やってるんですか？」

昼食から戻って来たアリスが私の方にやってくる。
最近はほとんどフルサイズ姿だな。ちっこかったのが懐かしい。
それはさておき。

「何やってるかって？　ハッキングだ」

「ああハッキングですか……ってええっ！！？」

んな驚かんでも。ま、驚いても気にせずに私はコンソールを叩き続けるが。

「ハッキングって、マズイですよ！　犯罪ですよ！！」

「声が大きい。それにアリス。犯罪はバレなければ犯罪ではないんだぞ」

「そういう問題じゃありません！」とアリスが叫んでいるが無視。

「はぁ。それで、ハッキングしてまで何を調べてるんですか？」

私に何を言っても無駄だと思い諦めたのか、アリスは聞いてくる。

「管理局、及び機動六課についてな」

「何でです？」

「まず一つ目。この世界に来てから全くこの世界について調べてい

なかったこと」

ぶっちゃけ管理局について調べよう、と思った時に今まで何も調べてなかったことに気付いた。

「今更ですね」

「うっさい。で、二つ目。『次元の平和を守るのが管理局』と八神やハラオウンは言っていたが、胡散臭くてな」

「胡散臭い……ですか」

「だってそうだろ？　自分の世界だけ守りさえすればいいのに、何故無数にある次元の世界を守る必要がある？」

「……確かに」

「あと、私は政治や経済についてはよくわからないが、管理局には立法・司法権が存在する。　つまり、好き勝手に法律を作ったり、犯罪者を必ず有罪判決にすることができる」

日本は確か、立法・司法・行政の権利をそれぞれ独立させた三権分立だったか？

確か……権利の乱用や横暴を防ぐ為か？　合ってる自信は無いが。

ってか私と兄さんは小学校にすら行ってないんだから全て独学だ。

閑話休題。

「また、魔法を絶対として銃等は質量兵器だと言い、自分達の作った法律で管理世界の自衛手段を奪って縛り付ける。
さて、これは他の世界を支配して管理しようとしているのと同じなのではないか？　『管理』局の名の通りな」

「……」

アリスは黙り込む。もうちょっと奥深くまで調べないとわからないが、管理局には必ず何か裏がある。
ま、魔法至上主義みたいだから、純粋なコンピュータ技術はたいしたことないな。
セキュリティやファイヤーウォールなんてあっさり突破できてるし。
ハッカー系の犯罪者とか現れたら対処できないんじゃないか、ってくらいな。

「もしそれが本当なら？」

「管理局は最低最悪の組織ってことだ。多分、一般の局員はそのことに気付いてはいないだろうがな」

「そうですか。……なら私は何も言いません。アオちゃんの判断に従います」

「ありがとな。さて、もっと奥深くまで調べるか……」

と言ったところで

『こちらライトニング４。緊急事態につき現場状況を報告します！』

キャロからの全体通信。タイミング良いのやら悪いのやら。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『サードアベニューＦ－２３の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見。ケースを持ってたらしい小さな女の子が一人』

『女の子は意識不明です。指示をお願いします』

突然のキャロとエリオからの全体通信。
あたし達はゲームセンターで遊んでいたところだ。
ちなみに、あたしと烈でガンシューティング中だった。

「何かあったの？」

「　？　」

烈とエイには通信が回ってこないので、キャロからの通信内容はわからない。

「レリックよ。お休みは一端中断」

「俺も行こうか？」

「大丈夫なの？」

烈は病み上がりだし、それにレリックは六課の担当だから烈に手伝わせるわけには……

「傷は完治してるから大丈夫。それに、戦闘になる可能性もあるんでしょ。戦力が多いにこしたことはないよ」

「……わかった。ありがとう」

あたし達４人はゲームセンターから出て、エリオとキャロのいる場所へと向かう。

エイはミニサイズになって烈の服の胸ポケットに入っていた。

３０分くらい走ってようやくキャロ達のいる場所へとたどり着く。

「エリオ、キャロ！」

「スバルさん、ティアさん！　それに……草薙曹長！」

「名前でいいよ。で、その子かな？　レリックを持ってたってのは？」

烈がキャロを見て尋ねる。キャロはボロボロの服を着た5歳くらいの金髪の女の子に膝枕していた。

「はい。地下水路を通ってかなり長い距離を歩いて来たんだと思います」

「まだこんなに小さいのに……」

「地下水路……傷とかはなかった？　もしあったら破傷風に罹るかも」

「大丈夫です。傷はありませんでした」

「その子の脈拍や呼吸は？」

「衰弱しているみたいですが、大丈夫です」

女の子の容態を確認する烈の質問に、キャロは次々に答えていく。

にしても、烈って応急手当とかに詳しかったっけ？

おっと、女の子の方も重要だけど

「ケースの封印処理は？」

レリックの方も重要。

「キャロがしてくれました。ガジェットが見付ける心配は無いと思います。それから――」

エリオがケースを持ち上げる。よく見ると、繋がれている鎖が切れていた。

「ケースがもう一個あった？」

「今、ロングアーチに調べてもらってます」

「隊長達とシャマル先生。リイン曹長にアオ、アリスがこっちに向かってくれてるそうだし、とりあえず現状を確保しつつ周辺警戒ね」

「「うん！」」

「「「はい！」」」

その後、隊長達がやって来た。

今シャマル先生が女の子を看てる。

なのはさんと烈は離れたところで話していた。

「ごめんね」と聞こえるあたり、なのはさんもこの間のことを謝っているのだろう。

「バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ」

「よかった～」

スバルがホッと息を吐く。

「ごめんねみんな。お休みの最中だったのに」

「いえ」

「平気です」

二人とも素直ねぇ。

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するから、みんなはこっち

で現場調査お願いね」

「俺も協力するからね」

いつの間にか話し終えたのか、烈となのはさんはこっちの会話に入っていた。

『はい！！』

任務は地下のレリック確保になるわね。頑張らないと！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「兄さんちょっといいか？」

私はティアナ達と一緒に行こうとした兄さんを呼び止める。

「どしたの？」

「アリスを連れていけ」

「「「えっ？」」」

兄さん、アリス、エイジス全員が驚く。

「地下水路での戦闘になるなら雷を使うエイジスより、氷を使うアリスの方がいい」

「それはわかりますけど……アオちゃんはどうすんです？」

「私？　私はサボ……じゃなくてヘリの護衛だ」

「今サボりって言おうとしませんでした？」

「気の所為だ」

ったく、アリスは無駄に耳がいいんだから。

「そん代わりエイジス連れてくぞ」

「はぁ……エイ、それでいい？」

「はい…わかりました」

そこまで残念そうに言わんでも。

「ああ、あと兄さんとアリスはユニゾンしても問題ないだろうからな」

そう言い残して、私はヘリへと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『ガジェット来ました！　地下水路に数機ずつのグループで、総数16…20！』

『海上方面、12機単位が5グループ』

ロングアーチの通信を紅月にも届くようにしてもらったので、状況がわかる。
それにしても、レリック確保する為だけには数が多いような。
隊長達もいるから用心してるのだろうか？

『スターズ2からロングアーチへ。こちらスターズ2』

スターズ2……確か、ヴィータ三尉だったっけ？

『海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かってる。それからもう一人』

もう一人…誰？　シグナム二尉辺り？

『１０８部隊、ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですが、そちら事例とも関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？』

まさかのギンガかぁ。でも、こっちに合流してくれたらやりやすいかな。

『うん、お願いや。ほんなら、ヴィータはリインと合流。協力して海上の南西方向を制圧』

『南西方向了解です』

『なのは隊長とフェイト隊長は北西部から』

『『了解！』』

『ヘリの方はヴァイス君とシャマル。蒼に任せてええか？』

『お任せあれ』

『しっかり守ります』

『守るつもりなら防護服くらい着ろ戯け』

蒼、毒舌だなぁ。

『ギンガは地下でスバルや烈君達と合流。道々別件の方の話も聞かせてな』

『はい！　……って烈がいるんですか！？　まだ病み上がりなんですよ！！』

突然ギンガが焦り出す。

「病み上がりって言っても怪我は完治してるし、前衛じゃなくて後方支援に回るから大丈夫だよ」

通信に割り込んでギンガに話し掛ける。

『でも……』

「ギンガは俺が信用できない？」

『……わかった。無茶しないでね』

「わかってる」

そう言って通信を切る。

「さて、みんな短い休みは堪能したわね？」

「お仕事モード切り替えて、しっかり気合いいれていこう！！」

「「はい！！」」

ＦＷのみんなは気合い十分か。さて

「アリス、紅月。俺達もやるよ」

「はい！」

『承知！』

俺はそう言って、紅月を首から外す。みんなもデバイスを取り出していた。

『『『『Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ』』』』

「「「「「セーット、アープ！！」」」」」

全員同時にバリアジャケットを展開する。
うん。２週間ぶりだけど問題ない。
あとは――

「じゃ、アリス」

「イエス、マイロード」

あれ？　エイのロードではあるけど、俺ってアリスのロードでもあったっけ？

「説明は後ほどに」

アリスまで俺の心を読むの。まあいいか。

「じゃ、いくよ」

「はい！」

「「ユニゾン・イン！！」」

俺とアリスは銀色の光に包まれる。
光が晴れるとユニゾンが終わると、俺の姿はバリアジャケットの紅い部分は白になり、髪の色は紅銀になっていた。

『兄様とのユニゾンは本当に久しぶりですぅ～』

「あれ？　やったことあったっけ？」

『あ……詳しくはまた今度説明します』

そ。んじゃ、戦闘のリハビリを兼ねて頑張るとしましょうか！

第３８話　機動六課のある休日　レリックを持つ少女（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

蒼
「今回の管理局の部分についてだが、あれは完全に作者の自己解釈だ。特に立法・司法権とかな」

アリステラ
「微妙にアンチ要素が入ってきてますが、管理局壊滅なんてことにはなりませんので」

リインフォース
「というか、烈のリハビリについては書かなくていいのか？　簡単な説明だけだったが」

エイジス
「『話が進まない、且つおもしろい話でもない』ｂｙ作者、って言ってました！」

烈（黒）
「つまりは面倒なんだろ」

蒼
「だろうな」

リインフォース
「今回は貰い物も無く、特に話すこともないのでこれまでだ」

アリステラ
「次回、第３９話　機動六課のある休日　再開する炎と氷の姉妹」

エイジス
「次回もよろしくお願いします！！」

第３９話　機動六課のある休日　再開する炎と氷の姉妹（前書き）

ちょこちょこ出て来るスカリェッティと話してる女性。

イメージは、ひぐらしのなく頃により、鷹野三四さんでお願いします。

第３９話　機動六課のある休日　再開する炎と氷の姉妹

とあるビルの屋上。さらにそこに建っているポールの先端にルーテシアは目を閉じて立っていた。

彼女の横のモニターには、薄い紫の髪に秘書のような服を着た女性、ナンバーズＮＯ．？　―　ウーノ　―　が映っていた。

『ヘリに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下の方に』

「うん」

ルーテシアはうっすら目を開け頷く。

『騎士ゼストとアギト様は？』

ウーノはいつもルーテシアの側にいる２人がいないことを疑問に思い尋ねる。

「別行動」

『お一人ですか？』

流石に一人だけだと心配に思ったのか、ウーノはガジェットでも警護に付けさせようかと思案しながら尋ねる。

「一人じゃない」

そう言って、ルーテシアは手を伸ばす。
すると、彼女のデバイス ― アスクレピオスの上に、小さな楕円型の黒い物体が現れる。

「私にはガリューがいる」

『失礼しました。協力が必要でしたらお申し付け下さい。最優先で実行します』

ウーノのは納得するが、それでも心配なことには代わりないので、もしもの時の為に何かあったら連絡するようにと言葉を付け加える。

「うん」

ウーノはルーテシアが頷くのを確認すると、通信を切った。

「行こうか、ガリュー」

ルーテシアは黒い物体に呼び掛け、それに呼応するかのように物体はうっすら光る。

「探し物を見つけるために」

そう言って彼女は足元に紫のベルカ式魔法陣を展開するとどこかへと消えた。

『ドクター。トーレ、セイン、ディエチ、全員配置に就きました。ルーテシアお嬢様も地下に向かっています。クアットロはＩＳで局の魔導師を撹乱中です』

スカリェッティのラボにて、ウーノは自身の妹達の準備完了と現状を報告した。

「ありがとう、ウーノ」

『ですがドクター』

「ん？　なんだい？」

『地下に向かった局の魔導師達の中に、先日トーレを負傷させた魔導師がいます』

「ほう？」

スカリェッティはウーノの報告に興味が沸いたのか、ニヤリと気味悪い表情を浮かべる。

「それは興味深い。是非データを録ってみたいが……追加で戦力を出せるかね？」

『他の妹達は武装や体の調整中、若しくは任務中の者達ばかりなのでこれ以上は……』

「ふむ……そうだ！」

スカリェッティは何か思い付いたのか、手元のコンソールを操作する。
しばらくすると、ウーノが映るモニターの横に別のモニターが現れた。

『突然連絡を入れるなんて……何か用かしら、ジェイル？』

モニターに映し出されたのは、眼鏡にセミロングの茶髪の女性だった。
そこ、髪を降ろしたクアットロと被ってるとか言わない。
六課の初出動の時もスカリェッティと話していた女性である

「君に協力して欲しくてね。『真紅の閃光』絡みだ」

『……へぇ』

女性はお気に入りの玩具を見つけたかのように笑みを浮かべる。

「“貸し”扱いで構わない。何時ものように“貸し”は私の医療知識の提供でいいだろう？」

『それは嬉しいけれど、私の手持ちの戦力はまだ不安定で完璧じゃないわ』

「戦闘に関しては私の玩具（ガジェット）と娘達が行うよ。君は『真紅の閃光』の

データ収集と非常時に備えてくれればいい」

『それなら問題ないわ。彼のデータは事が終わった後に送る。それでいいかしら？』

「ああ、構わない」

『フフフ……じゃあ』

女性は笑いながら通信を切った。

『よろしいのですかドクター？』

2人の会話を邪魔せぬようずっと黙っていたウーノは少し不満げな声で尋ねる

『私は彼女を信用できないのですが』

「大丈夫だよ、ウーノ。彼女は私の友人の娘だからね」

『……そうですか』

ウーノは不満だったが、スカリェッティの決定であるので反対するのを諦めた。

「さて、楽しませてくれたまえ。局の魔導師諸君！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

『私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と壊れた生体ポットなんです』

俺とスバル達が地下水路を走るなか、ギンガの報告がデバイスを通じて聞こえてくる。

『ちょうど5、6歳の子供が入るくらいの。近くに何か重い物を引きずって歩いたような跡があって、それを辿っていこうとした最中連絡を受けた次第です』

生体ポット？　以前、どこかで……

『それから、この生体ポット少し前の捜査でよく似たようなものを

見た覚えがあるんです』

『私も……な』

……そうだ！　思い出した！！

「俺もです。ギンガと一緒に違法研究施設の捜査をした時でした」

あの時だ。以前、戦闘機人と交戦したあの研究所。あそこは――――

『人造魔導師計画の素体培養機。これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素材として創り出された子供ではないかと』

そう、あそこは人造魔導師研究の違法施設だった。

そして、あの研究所のデータにもあった。クイントさんは素体にされているって。

「人造魔導師って？」

人造魔導師について知らないのか、キャロが尋ねてくる。

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬とか機械

部品の埋め込みで後天的に強力な魔力や能力を持たせる。それが人造魔導師」

キャロの疑問に、スバルが普段のスバルにはありえないような難しい単語を使って説明する。
戦闘機人であるスバルやギンガは、人造魔導師と似ている部分が多いから詳しく知っているんだ。

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたっていろんな部分で無理が生じる。コストも合わない。
だから、よっぽどどうかしてる連中でもない限り手を出したりしない技術のはずなんだけど」

「ティアナの言う通りだけど、実際によっぽどな連中達は存在する。だけど、納得できないんだ」

「「「？」」」

俺の言葉を疑問に思ったのか、みんなが頭を傾げる。俺はその続きを言葉にする。

「俺とギンガが最近捜査した違法研究施設は機材もデータもほとんどが破壊されてたけど、施設の構造や機材は新しい物だったり立派な物ばっかりだった」

『……君は何が言いたいんだ？』

通信で聞いてたのか、ハラオウン提督が聞いてくる。
本局の人間だし、傍にグラシア少将もいるみたいだから……本音を言ったらまずいかな。

「一研究者程度が扱える物じゃないってことです」

俺は遠回しに答える。本音を気付かなければいいけれどと思った。

しかし――

『つまり、金の無いただの研究者が用意できるような代物じゃないってことだ。
資産家、若しくは巨大な組織といったスポンサーがバックにでもついていない限りな』

蒼が通信に割り込んで俺の本音を口にした。
馬鹿ッ！　そんなこと言ったら！！

『君はッ！！　管理局が人造魔導師計画に関わっているとでも言うのか！！！』

『『「ッ！！？』』」

『いますぐその発言を取り消しなさい！！！』

案の定、ハラオウン提督が食らい付いて叫んだ。グラシア少将もハラオウン提督に続けて叫ぶ。
通信を聞いていた他のみんなは管理局が違法研究に関わってると聞いて驚いている。
まずい、俺の発言が原因でこうなっちゃったんだ。
どうにかしないとと思った途端、キャロのデバイス　―　ケリュケイオンにに反応があった。

『動体反応確認、ガジェットドローンです』

「来ます！！　小型ガジェット６機！！」

「「「ッ！！」」」

前を見ると、ガジェット１型６機が目視できるところまで接近してきていた。
向こうのことも気になるけど、戦闘に集中しないと。
俺はしかたなく回線を切る。それに気付いたのかティアナも回線を切って呼び掛けた。

「みんな、アオの言ったことは気になるけど、今はガジェットに集中するのよ！！」

「う、うん！」

「「は、はい！」」

スバル、エリオ、キャロはハッとなりデバイスを構える。
……後でティアナにお礼言っとかないとね。

「烈はガジェットを牽制して！　キャロはスバルとエリオにブースト魔法！
スバルとエリオは散開したガジェットを各個撃破！
あたしは2人を援護するわ！！」

「「「了解！」」」

ティアナが指示を出す。
なのはさんやフェイトさんよりも指揮能力が高いんじゃないだろうか？

「了解！　いくよ！　アリス！！」

＜はい！！　周囲の水分を冷却凍結、氷弾生成！！＞

「氷の巨塊＜アイス・ド・アース＞！！　連弾！！」

アリスのサポートで俺は握りこぶしサイズの氷の塊を複数作り出しガジェットへ放った。

『いますぐその発言を取り消しなさい！！！』

ヘリの中、モニターに映る金髪の女が叫ぶ。
……美人に分類されるだろうが、婚期逃しそうな女だ。

「取り消す？　私は巨大な組織と言ったが、管理局とは言ってない。なのに何故管理局の名が挙がる？　貴様等、本当に手を出してるんじゃないのか？」

『ふざけるな！！　正義と法を司る管理局がそんなことをするはずがないだろう！！』

ＫＹっぽい男がドンッ！、っとテーブルを叩いて叫ぶ姿が映る。

感情だけでものを言うとは餓鬼だな。

「“自称”正義だろ？　私はギンガのように事実を元に仮説を立てただけだが、貴様の言ってることには明確な事実も根拠も無い」

『根拠はある！　本局が正義だと言っているのだから！！』

駄目だこいつ。言葉が理解できてない。管理局がやってることが絶対正しいと思ってやがる。

シャマルやエイジスがオロオロとしているが、無視して私は言葉を続ける。

「だからそれは“自称”だと言っている。自称“正義と法を司る組織”なんて怪し過ぎるにも程があるな」

『貴様ッ！！』

『クロノ君も蒼もええかげんにせぇ！！！』

私とＫＹの会話に割り込んで八神が怒鳴った。

『今はそんなことで言い争いしとる暇なんてない！！　重要なのはレリックの回収とその女の子を安全に保護することや！！』

『……』

『クロノ君、なのはちゃんとフェイトちゃんの方に、実機と幻影の混成編隊が出てきおった。私が遠距離広域魔法で片付けるから私の限定解除を』

『……わかった』

『蒼はヘリの護衛。ええな！』

「……ふん。言われなくとも」

私は通信を切る。

「提督相手に喧嘩売るなんてな。ハハハ、笑いが止まらねぇ」

「いくらなんでも言い過ぎよ」

切った途端、笑っているグランセニックと女の子を看ていたシャマルが話し掛けてくる。

「言い過ぎ？　知るか」

「管理局は違法研究なんてしないわ。憶測で勝手なこと言わないで」

「エイジスを研究材料にして道具として扱ったのは、元本局の管理局員だったと兄さんから聞いたが」

「ッ！！　エイジスちゃん……それ本当？」

「……はい」

エイジスはその時のことを思い出したのか、カタカタと震え出す。
私は頭を撫でてやってエイジスを落ち着かせる。

ルノーダ・イムラーという男がエイジスから変換資質のデータを撮った後、発電用の動力炉に埋め込んでいたらしい。
アリスが兄さんからこの話を聞いた時、本気で怒ってたな。

「その元管理局員は合成獣（キメラ）の実験と研究を行っていたと聞いた。
憶測？　ふざけるなよ。命を弄ぶ最低なことをやってるじゃないか。“元”であろうが関係無い」

「……」

シャマルは返す言葉が見つからないらしく黙り込んだ。

「貴様等が何を信じようが勝手だがな、その信じてるモノが正しいと言ったことが絶対に正しいというのは間違っている。
貴様等は物事の表面だけじゃなく、本質を見極めるべきだ。後で後悔しても遅いのだからな」

「お前さん、ホントに１５歳か？　ホントは何百年も生きた魔女だ

ったｒ……「グランセニック、死にたいか？」　すいませんっしたーー！！」

私が『月』の刃を首元に向けると、グランセニックはあっさり黙った。

……今ので微妙な空気になってしまったな。
まあいい。私は私の出番でも待つとするか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、地下水路方面。

ダン！　ダン！！　ダンッ！！！

ティアナの放った多重殻形成した魔力弾がガジェットのＡＭＦを貫く。
ＡＭＦを貫かれたガジェットは爆散し、燃えた残骸が水路に落ち炎が消える。

「上の方はなんだか大変みたいね」
「文字通りの意味と別の意味で、だけどね」
「あはは……」
俺が自虐的に言うと、スバルが渇いた声で笑った。
提督に喧嘩売るなんて誰も想像できなかったしね。
「ケースの推定位置までもうすぐです」
「うん。はやく確保に……」
とスバルが言いかけたところで
ドゴォォォォン！！！
スバルの後方の通路の壁が爆発した。
「敵か？」と思い、全員デバイスを爆発した場所へと向ける。
だけど、その必要はなかった。だって壁を突き破って現れたのは――
「ギンガ！」
「ギン姉！」
「ギンガさん！」

バリアジャケットを身に纏ったギンガだった。
壁の破壊時にカートリッジを使ったのか、左腕のリボルバーナックルのスピナーが回転し、ナックルを廃熱していた。

「一緒にケースを探しましょう。ここまでのガジェットは殆ど叩いてきたと思うから」

「うん！」

「で、烈は無知してない？」

「心配しなくてもしてないよ」

使ったのは氷の巨塊、紅華緑葉。あとはスパイラルバインドくらいだし。

＜私もついてますから、無知なんてさせません＞

それにアリスとユニゾンもしてるからね。

「そう、よかった」

「じゃ、行くわよみんな！」

「「はい！」」

「「了解！」」

ティアナの掛け声と同時にみんな走り出した。

走ってから数分。ケースの位置まであと少しというところで、ガジェットの群が現れた。

１型が１２機、３型が１機。

３型にはスバルとギンガが、１型には俺と他のみんなが迎え撃つ。

「スパイラルバインド！！　ｗｉｔｈアイス！！」

俺がアリスの補助によってできた氷の魔力絃で、全体の半数の１型を拘束し――

「クロスファイヤーシューートッ！！」

ティアナがそれを誘導弾で撃ち抜く。

「でやぁぁぁぁあ！！」

エリオが残りの1型の群を駆け抜けて注意を逸らし――

「フリードーー！！」

キャロが飛竜のフリードに攻撃させて、ガジェットを焼き払う。

この時間、約３０秒。

「一撃いぃ！！　必到おぉ！！！」

1型を壊滅させてギンガ達の方を見ると、スバルが3型のＡＭＦを貫いていたところだった。

「ディバイーーン……バスタァァァア！！！」

スバルはそのまま、スバルにとって憧れであるなのはさんのディバインバスターを元に、自分なりにアレンジした必殺技を叩き込んだ。

スバルが右腕を3型から引き抜き、距離を取ると同時に3型は爆発する。

「ガジェット全滅を確認。増援、ありません」

「ケースは近いわ。急ぐわよ」

ティアナの言葉に全員頷き、俺達はケースが落ちている水路の合流点に向かった。

＜ねぇ、烈＞

＜何？＞

＜烈は、どう思う？　蒼の言ってた管理局が裏で違法研究をやってるってこと＞

今俺達は分かれてケースを探している。

ギンガとはいる場所が逆方向なので、念話で話してきた。

＜蒼の言ったことは、俺の本音でもあるんだけど……＞

＜＜えっ！？＞＞

アリスにも話が聞こえていたのか、頭にギンガとアリス、２人の驚く声が響く。

＜でも、確実な証拠がある訳じゃないから、管理局がやってるって断言はできない＞

＜烈は管理局のこと信じてないの？＞

ギンガが恐る恐る尋ねてくる。

＜信じてない＞

俺はキッパリと言い放つ。

＜だけど、ゲンヤさんやギンガのことは信じてるから＞

＜あ、ありがとう……＞

＜（ギンガさん、兄様に信用されてますね。羨ましいです）＞

＜さて、お喋りはこのくらいにしてケースケースっと＞

と言ったところで。

「ありましたーー！！」

どうやらキャロがケースを見つけたらしい。後は持ち帰るだけだね。

ダンッ！

「ん？」

なんの音？　それに……これは……殺気？

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

徐々に音は大きくなり近付いてくる。

「何この音」

ダダダンッ！　ダダダンッ！！

音は次第に早くなり移動している。移動する先は……ッ！！

「キャロ！！　危ない！！」

「へっ？」

俺が叫ぶと同時に、音源から黒い魔力弾が放たれた。

「きゃあ！！」

直撃こそしなかったものの、キャロは魔力弾が着弾した時の爆風で吹き飛ばされ、同時にケースを落としてしまう。

「でやあぁぁぁぁッ！！」

エリオが音源へと飛び込み、見えない襲撃者へと切り掛かる。

ガキィィィン！！

エリオは襲撃者と交差した直後、キャロを守るために傍に着地する。

「ぐっ！」

「エリオ君！！」

どうやら襲撃者の攻撃を喰らったみたいだ。

ピチャ、とエリオの前方から音がした。

直後、何もない筈の空間が歪み襲撃者が姿を現す。

多分、ステルスか何かを使っていたんだと思う。

襲撃者は人間ではなかった。

紅く輝く４つの目、鎧のような体に赤いマフラー、そして竜のような尻尾を持った蟲人間だった。

「あっ！」

みんなが蟲男（男？）を警戒していると、キャロが叫び声を上げた。

見ると、薄紫の髪に黒いゴスロリ衣装を着た女の子がケースを抱えていた。

っ！　そうか、さっきの攻撃でキャロがケースを落としたから！

あの女の子の目的はレリックなのだろうか？　キャロやエリオと同じくらいの歳みたいだけど……何で？

それにあの子……以前何かで見たような……

「キャアーーー！！」

「キャロッ！！　うわっ！！」

キャロがケースを奪い返そうとすると、女の子は砲撃放ち二人を吹き飛ばした。
エリオはキャロを庇って、柱に叩き付けられる。

「うおぉぉぉぉお！！」

スバルが蟲男に攻撃を仕掛け、マッハキャリバーで蹴り掛かるが、体を反らされて躱される。

「やあぁぁぁぁあ！！」

直後、蟲男の背後からギンガが攻撃を仕掛ける。
蟲男は咄嗟に振り返り、両腕を十字にしてギンガの拳を防ぐ。

「紅月！」

『承知。紅華緑葉！』

パチンッ！　と俺が右手の指を鳴らすと、ギンガの左腕に炎が纏う。
ギンガの攻撃が弾かれそうだったから、腕力を強化したんだ。

「ハアッ！！！」

ギンガは炎で強化された左腕のリボルバーナックルで蟲男を遠くに吹き飛ばす。
クッ！　吹き飛んだだけか！　多分ダメージは入ってない！

「こら！　そこの女の子！　それ危険な物なんだよ！　触っちゃダメ。こっちに渡して」

スバルは女の子に駆け寄ってケースを渡すように呼び掛けるが、女の子は無視して立ち去ろうとする。
まあ、レリックが目的な筈だから渡す訳ないとは思ってたけど。
それよりも、あの子どこかで見たことあるような気がするのに思い出せない。
何で見たんだっけ？　確か調べてたデータに……

「ごめんね、乱暴で。でもね、これ本当に危ない物なんだよ」

ティアナの言葉で俺の意識は思考の海から引きずり戻された。
見ると、ティアナが女の子の首筋に魔力刃を突き付けていた。
こうなれば蟲男は手を出せないか。こういう人質取るみたなやり方

は嫌いなんだけど。
と考えていると
キイィィィーーー……
何かを集束するような音が聞こえてきた。
＜……音？＞
＜アリスも聞こえる？＞
＜はい。……昔、何度も聞いたような音です＞
＜何度も？＞
それってどういう……
「スターレンゲホイル！！」
「「「　！？　」」」
突如、上から女の子の声が響いた。ッ、増援！？
同時に何かが爆発し、辺りに光と高い音をばらまく。これ、スタン

グレネード！？

光と音に堪えられず、俺達は目と耳を塞いでしまう。
このままじゃ逃げられる！！

「うわあぁぁぁぁあ！！」

「ティアナ！？」

突然、ティアナの叫びが聞こえた。目を開けると、ティアナが蟲男に蹴り飛ばされていた。

吹き飛ばされたティアナは、直ぐさまクロスミラージュの銃口を向け女の子に攻撃するが……

「げっ！」

蟲男が庇ったため、女の子に攻撃は当たらなかった。
てかティアナ、年頃の女の子が「げっ！」とか言わない。

「たっくもーー、アタシ達に黙って勝手に出掛けちゃったりするからだぞ。ルールーもガリューも」

再び上から女の子の声が響いた。……ルールー？　あの女の子の

名前？

＜この声……まさか！＞

＜アリス？＞

＜兄様すいません！　ユニゾンアウト！＞

＜ちょっ、アリス！？＞

上から降りてきた女の子の声を聞くと、強制的にアリスがユニゾンを解除した。
俺は降りて来た女の子を見上げる。

その子は、ユニゾンデバイスであると示すような小さな体に、悪魔のような翼。そして露出の高い服を着た赤髪の女の子だった。

「……アギト」

「おう！　ホントに心配したんだからな」

ちょっと待って。アギト？　今あの子アギトって！　ってことはあの子がエイとアリスの！？

「ま、もう大丈夫だぞルールー。何しろこのアタシ、烈火の～剣精

！　アギト様が来たからなぁ！！」

やっぱり、あの子がエイとアリスの妹。

「おらおら！　お前等まとめて掛かってこいやあ！！」

……二人と随分違って元気な女の子だね。
俺やギンガ、ＦＷ達は一カ所に集まる。
……あれ？　アリスは？

「『撃ち貫く氷柱＜アイシクル・スナイプ＞』！！」

いきなりアギトちゃんに向けてツララで攻撃してた。
無数に放たれるツララはガリューと呼ばれた蟲男によって弾かれる。

「……昔から悪戯は多かったし、やんちゃな子だったけど、一体何してるのかな？　アギト？」

「その声……まさかアリス姉！？」

アギトちゃんはアリスの登場に驚く。
こっちでもギンガ達が驚いてるけどね。

「何で……何で管理局のヤツ等なんかと一緒にいるんだよ！！」

アギトちゃんが怒りを込めて叫ぶ。……彼女も管理局を信用していないのかな？

「理由は単純。大切な主や家族がいるから。兄様、アオちゃん、そしてエイが…ね」

「エイ姉まで！？」

エイの名前まで出てきたのでさらに驚いている。

「アギト、こっちに来なさい。エイも待ってる！」

アリスは必死でアギトちゃんを説得しようとするが……

「アタシは……ぜってールールーや旦那を裏切らねぇ！！　相手がアリス姉だったとしても！！」

「アギト！！」

「うりゃあぁぁぁあ！！」

アギトちゃんは両腕から炎を発生させ、アリスへと投げ付けた。

第３９話　機動六課のある休日　再開する炎と氷の姉妹（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

蒼
「なんか微妙なところで終わったな」

リインフォース
「地下水路戦メインと言ってたのにな」

烈（通常）
「まあ、しかたないんじゃない？　作者だし」

エイジス
「（コクコク）」

アリステラ
「せっかくアギトと会えたのに……（涙）」

蒼
「まあ元気出せ。さて、今回は海人様より、最高級フルーツの盛り合わせを頂いた。兄さんの完治祝いだと。せっかくだから食べよう」

烈（通常）
「じゃあ林檎を貰おうかな」

リインフォース
「私は葡萄を」

エイジス
「えぇ～っと、グレープフルーツが欲しいです！」

アリステラ
「グスン。私は……メロンで」

蒼
「じゃあ私はピザを」

全員
「「「ちょっと待て（待って下さい）」」」

蒼
「ん？　何だ？」

烈（通常）
「いや『何だ？』じゃなくて、何でピザ！？」

リインフォース
「それに……はむ……その服装はどうした。……拘束着？」（葡萄を食べながら）

エイジス
「ごっくん。髪も黄緑色……カツラですか？」（グレープフルーツを食べながら）

アリステラ
「そしてなにより……んぐ。何故チ○ズ君人形を抱きしめてるんですか？」（メロンを食べながら）

烈（通常）
「3人共、食べるか話すかどっちかにしなさい」

3人
「「「はーい」」」

蒼
「お父さんかい。いや、前回の『キラッ☆』がどうも不評でな。ならこのコスプレでもした方がいいと思ってな」

リインフォース
「ブリ〇ニアの皇子とギ〇スの契約でもするつもりか」

蒼
「いや、ル〇ーシュの金を使ってピザを注文しまくりたい」

アリステラ／エイジス
「「酷ッ！！」」

烈（通常）
「（こんな性格で彼氏とかできるのかなぁ）」

リインフォース
「（ドMなら……いや、ダメだ。蒼の中にいる私が堪えたれない）」

蒼
「兄さん、リインフォース、なんか失礼なこと考えてないか？」

烈（通常）

「気の所為だよ」

リインフォース
「気の所為だ」

蒼
「む……。まあいい、そろそろ終わりにするか。エイジス、次回予告」

エイジス
「はわっ！！　えっと、次回は地下水路戦終了？　タイトルは未定でしゅ！！」

アリステラ
「次回で六課の休日の話が終わるかどうか微妙だそうです」

烈（通常）
「だってさ。読者のみなさん、次回もよろしくお願いしますね」

リインフォース
「それでは、また次回な」

蒼
「さて、ピザ食べよ」

全員
「「「いい加減にしろ（しなさい）！！」」」

第４０話　機動六課のある休日　地下水路脱出（前書き）

今回は短いです。

……受験勉強嫌だなぁ。

と言っても意味ないのですが。

ではどうぞ。

第４０話　機動六課のある休日　地下水路脱出

『アタシは……ぜってールールーや旦那を裏切らねぇ！！　相手がアリス姉だったとしても！！』

『アギト！！』

『うりゃあぁぁぁあ！！』

モニターに映し出されるアリステラとアギトのやり取りを、彼女は偵察用のロボットを通して見ていた。
いや、２人のやり取りだけではない。彼女は最初の方からずっと見ていたのだ。烈やギンガ、ＦＷ達の戦闘を。

「古代ベルカの融合機なんて……別にどうでもいいわ」

彼女はつまらないというような表情を浮かべる。

「私が見たいのはあの２人。お父様の創った『ＡＳ（アクワイヤードスキル）』の組み込みに唯一成功した《虐殺師》の兄妹」

彼女の見つめるのは、モニターの端に映る烈の姿。

「もっと、もっと見せてちょうだい。貴方達の力。
死んだお父様の研究を完全なものにするために！！」

彼女の声は部屋の中で響き続けるのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「はあぁぁぁ……はあッ！！」

アギトちゃんが両腕に紫色の炎を纏い、俺達に向けて放つ。

「アギトッ！」

「アリス！！」

俺は動こうとしないアリスを紘で縛って引っ張り、炎を回避するためにみんなと一緒に跳ぶ。

ドドドドォォォンッ！！！

「クッ！」

「くぅぅぅ！！」

全員後ろに跳んで炎を躱した。
着地と同時に一カ所に集まり、俺達は炎の着弾でできた煙幕の先を睨み付ける。

「兄様、あの……」

「アリス、説得したい気持ちはわかるけど、向こうはやる気なんだ」

「……はい」

「話をするのは捕まえてから。いいね？」

「は、はい！」

「じゃ、ユニゾン、いくよ！」

「はい！！」

アリスはしっかりと頷いて、俺の胸の前に立つ。

「「ユニゾン・イン！！」」

アリスと再びユニゾンすることで、髪とバリアジャケットの色が変化する。

ユニゾンすると同時に蟲男　―　ガリューが背中に紫色の羽を広げ煙幕から飛び出してきた。さらに右腕から紫色の魔力を纏った爪を伸ばす。

「クッ！！」

ギンガがガリューに反応し駆け出す。

「ハアッ！！！」

ギンガが左腕で正拳突きを繰り出し、拳と爪が激突すると、２つの力はスパークを放ちながら拮抗する。
拮抗した２つの力が爆発すると同時に、ギンガとガリューは後ろへ跳び爆発の衝撃を躱す。

「（ユニゾンしてる！　ってことはアイツがアリス姉のロード……でも！！）うおぉりゃぁぁあ！！！」

今度はアギトちゃんが赤い炎を投げ付けてきた。
さっきは油断したけど……

「炎は効かない！　『紅鏡の核＜ソレイユ・コア＞』！！」

俺は右手を突き翳し、アギトちゃんの放った炎を右手に集めて凝縮し、バレーボールくらいの炎の球を作り出す。

「何ッ！！」

アギトちゃんは自分の攻撃を吸収されて驚いてる。
地下水路が崩れるから砲撃は駄目か……なら！！

「フレア……シューター！！」

左手でおもいっきり炎球を殴り、複数の炎の魔力弾に拡散させて放った。

「んなのありかぁ！！？？」

アギトちゃんやルールーに炎弾が襲い掛かる。

「！」

が、ガリューが魔力弾を放ったため、炎弾は全て相殺されてしまった。

炎弾と魔力弾の衝突による爆発で、再び辺りが煙で覆われ視界が遮られる。

俺は絃を張り巡らして、ギンガリボルバーナックルを構えて、先程のようなガリューの襲撃に備える。

「ティア、どうする？」

背後ではスバルとティアナが作戦を練っていた。２人だけで話しているのは、多分エリオやキャロは作戦の立案に向いてないからだと思う。……今キャロは気絶しているけどね。

「任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引き付ける」

確かに。俺もこの状況だと撤退が最善だと思う。逃げれるかどうかは別だけどね。

「こっちに向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長にうまく合流で

きれば、あの子達も止められるかも。だよね？」

「そう」

スバル達はああ言ってるけど、実際に撤退したり彼女達を止められるかは、あの子の……ルールーって子の実力次第だ。
多分、ガリューは召喚蟲。そしてルールーは召喚師。子供だからって嘗めちゃいけない。
例えこっちの数が増えたとしても、あっちは召喚で更に増援を呼ぶことも可能な訳だ。
だから、ヴィータ三尉やリインと合流したからっていって必ず止められるって訳じゃない。
彼女の力がどれほどなのかわからないけど、彼女の魔力量や契約した召喚蟲達の質によって戦況が変わることだって充分ありえるんだ。

＜よし、なかなか良いぞスバルにティアナ＞

2人の話を聞いていると、突然頭に念話が響いた。
確かこの声は――

＜＜ヴィータ副隊長!?＞＞

＜私も一緒です＞

ヴィータ三尉とリインの声だった。

同時に、上から2つの魔力反応……こっちに向かって来てる。
片方は前に感じたことがあるからわかる。リインだ。
なら、もう一つの反応がヴィータ三尉だろう。

＜2人共、状況を呼んだナイス判断ですよ＞

恐らく彼女達は2人が近付いてきていることに気付いていないから、確かに現在のヴィータ三尉とリインの立場から見たらいい判断だとは思う。
でも……なんか言い方が気に食わない。まるで、『自分達が来たら状況を打開できる』って言ってるみたいで。
……やっぱり本局側の人間ってことか。無意識であろうが、『陸』の魔導師を見下してるんじゃないだろうか？

＜副隊長、リイン曹長、今どちらに？＞

エリオの発言からして、FW達は2人の魔力を感知できていない。

「ッ！　ルールー、なんか近付いてきてる！」

彼女達も気付いたのかアギトちゃんが声をあげる。……魔力感知ができる分、FW達より優秀なんじゃないだろうか？

「魔力反応は……デケェ！！」

と叫ぶと同時に

ドゴォォォォオン！！！

俺とギンガがガリューと対峙している場所、その真ん中の部分の天井が突き破られた。天井の瓦礫が崩れて煙が舞い、辺りが見えなくなる。

直後、煙の中からリインが飛び出す。

「捕らえよ、凍てつく足枷！　フリーレンフェッセルン！！！」

リインが白いベルカ式魔法陣を展開して、ルールーとアギトちゃんを氷の牢に閉じ込める。

「ぶっ飛べーーー！！！」

そしてヴィータ三尉が煙を吹き飛ばして、氷の牢の側に駆け寄ったガリューに巨大なハンマーで殴り掛かる。

「でりゃ！！」

ガリューは攻撃を防いだが、ヴィータ三尉が更に力を篭めたため、力負けして吹き飛ばされた。

「おう、待たせたな」

と、ヴィータ三尉はデバイスの形態を元に戻しＦＷ達に声を掛ける。

「みーんな無事でよかったですぅ」

リインもそれに続くけど……貴女達、気を抜きすぎ。あれくらいで倒せたとでも思ってるんですか？

「あ、あはは……」

「ふ、副隊長達やっぱ強い……」

驚き半分呆れ半分の声が聞こえるが、俺は気にせずガリューが吹き飛ばされて破壊された壁に向かう。

「おい、あの蟲ヤローは吹っ飛ばしたから問題ねーー……」

「何言ってるんですか？　逃げられてますよ」

「何っ！？」

俺は壁を確認したが、そこにガリューはいなかった。それどころか天井に穴が空いていた。多分、天井を破壊して脱出したんだろう。ヴィータ三尉もこっちに来てそれを確認すると、悔しそうに舌打ちする。

「こっちもです！」

向こう側でも声が聞こえたので見てみると、ギンガがリインの側に駆け寄っていて、リインが氷の牢を消していた。
牢の中にはルールーもアギトちゃんも居らず、地面に穴が空いていた。
……主従揃って穴を空けるのがお好きなことで。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

ＦＷ達がギンガの元に集まると、突如地震が起こった。

「何だ！？」

「……大型召喚の気配があります。多分それが原因で」

目を覚ましたのか、キャロが説明する。
召喚……ってことはルールー達はもう地上に脱出したか。

「一先ず脱出だ！　スバル！！」

「はい！　ウイングロード！！」

スバルが地面を殴り、螺旋状にウイングロードを発生させる。

「スバルとギンガが先に行け！　アタシは最後に飛んでいく！」

「「はい！」」

2人は頷き、ウイングロードを登っていく。直後にエリオが続く。
ティアナとキャロは……と辺りを探すと、2人は何か話していた。

「ティアナ、キャロ、脱出を！」

「ちょっと待って烈。こうして……こう！」

駆け寄って見てみると、ティアナがレリックを花の付いたカチュー

シャにしてキャロに付けていた。

「幻術の応用？」

「そ。これでケースを奪われても問題ない」

「なるほど」

「お前等、早く脱出しろ！！」

ヴィータ三尉が叫ぶ。潰されたくないし（二重の意味で）さっさと脱出しますか。

「ウイングロードを登る時間はない。一気に地上に出るとしようか」

「あの、どうやって？」

「聞くより見る方が早い。フリード、キャロに捕まって」

「キュクー」

フリードが捕まるのを確認すりと、俺はおもいっきり地面を踏んだ。

「『大地の柱＜アーストーテム＞』！！」

すると、俺達の回りの地面が盛り上がった。

「きゃっ！」

ティアナがバランスを崩しそうになったので抱き留める。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう……」

ティアナの顔が赤くなってるけど……気にしないことにしよう。

土はどんどん盛り上がって柱になり、ヴィータ三尉が空けた穴を通り抜ける。

＜エレベーターみたいですね＞

アリスの感想はティアナやキャロも考えたと思う。

……ま、早く地上に戻ろうか。

第４０話　機動六課のある休日　地下水路脱出（後書き）

～草薙一家の団欒～

蒼
「今回は全て兄さん視点……って短いな」

烈（黒）
「最近週一で更新できないから、短くても切りが良いところで投稿したらしい」

アリステラ
「さて、貰い物がいくつか来ています！」

リインフォース
「ライ様より、フルメタの大佐の服を。
海人様より、シーフードピザを。
暇人様より、極辛セサミピザを頂いた」

蒼
「という訳で、早速着てみた」（↑テレサ・テスタロッサの軍服姿）

エイジス
「わぁ～。ギンガとも、はやてさんとも違う軍服でしぇね。……
あわわ、噛んじゃた／／／」

アリステラ
「何故その服なんでしょう？」

蒼
「中の人繋がりだろ。さて、シーフードピザ……ふむ、美味いな。海老とチーズが良い味してる。で、こっちのピザは……」

烈（黒）
「……ものすっごく真っ赤なんだが」

蒼
「いっただきま～す。ぱく……」

リインフォース
「……蒼？」

ガタン！　ダダダダダ！　バタン！！　ゴクゴクゴクゴ…！！

蒼
「ってこれ炭酸だったあーーー！！！　ゴホアッ！！」

バタン（↑蒼が倒れる音）

エイジス
「だ、大丈夫ですか！！」

烈（黒）
「音だけじゃわからないと思うので説明だ。
蒼がイスから立ち上がる→冷蔵庫へ向け走る→冷蔵庫を開け炭酸

飲料を取り出す→おもいっきり飲む→炭酸だったことに気付きむせて倒れた、だ」

アリステラ
「馬鹿ですね」

リインフォース
「それはさておき、技紹介だ」

『フレア・シューター』
『紅鏡の核』でできた炎球を殴り付け、複数の炎の魔法弾に変化させ打ち出す技。
言ってしまえば『烈火の炎』の『崩』

烈（黒）
「以上だ。とは言え、『紅鏡の核』はあまり多用しないからな」

リインフォース
「ちなみに余談だが、最近コラボを依頼したため蒼の使った技を纏めたらしいんだが、烈の技の倍はあったらしい」

アリステラ
「半分以上がネタですけどね」

烈（黒）
「まあな。では今回もこの辺で」

リインフォース
「次回は……休日を最後まで書くか、ヘリの狙撃辺りまでか微妙だとさ」

アリステラ
「はっきりして欲しいですね。次回もよろしくお願いします！！」

第４１話　機動六課のある休日　推測と真実（前書き）

Ｋの２乗
「突然ですが、烈の周りの人々との友好関係一覧です」

烈の友好関係
「親密／信頼」
蒼・アリステラ・エイジス・ゲンヤ・ギンガ・スバル・マリエル
「友人／仲間」
ティアナ・ツバキ・エルフィ・ジュレス・カルタス・ハイネやアスラン等の１０８部隊の隊員達

「知人」
なのは・フェイト・はやて・リイン・ザフィーラ・他六課の隊員達

「嫌悪」
本局や他の部隊から勧誘に来る人々・本局や『海』の魔法至上主義の人々・聖王教会

ティアナ／ツバキ
「「ま、負けた……ｏｒｚ」」

なのは
「私達って……」

フェイト
「仲間って思われてないんだ……」

はやて
「なんや私等の扱い酷くあらへん？」

クロノ
「……君達は『嫌悪』の中に入ってないだけマシなんじゃないか？」

Ｋの２乗
「烈は地上部隊の人間なんで、地上の予算や人材を引き抜く本局や、騎士団という戦力を保有しているにも拘わらず何もしない聖王教会が嫌いです。
　フェイトとのスカリエッティに関する情報交換だって、烈は一定以上の情報は教えていませんし。トーレと交戦したこともフェイトに言ってません」

はやて
「じゃあ、六課への誘いを蹴ったのも……本局嫌いやから？」

Ｋの２乗
「うん。六課って地上に無理矢理介入してきた本局の部隊だから。もちろん、情報収集に専念したいってのもあるけどね」

ティアナ
「じゃあ、勧誘に来る人ってのは？」

Kの２乗
「烈ってけっこう優秀なんだよね。
戦闘分野では全てのポジションを熟せるオールラウンダー。
単体で対軍戦もできて小隊指揮能力もある。
そして３種類の変換資質持ち（※烈の能力は変換資質として登録されています）
本局や他の部隊が欲しがるのも当然なんだよね。だからちょくちょく勧誘が来てるんだ。全部断ってるけど」

クロノ
「何故だ？　優秀な魔導師ならそれなりの場所で働くべきだ」

Kの２乗
「ＫＹ、そんなこと言うから『陸』と『海』の仲が悪いんだってわかってる？」

ツバキ
「ＫＹ提督、最っ低！」

エルフィ／ジュレス／ティアナ
「「「ツバキ（ヒメミヤ）に同感」」」

ＫＹ
「ｏｒｚ」

Kの２乗

「さて、長い前書きになりましたが本編スタートです」

第４１話　機動六課のある休日　推測と真実

その頃、地上では

「ダメだよルールー！　これはマズイって！」

アギトが必死にルーテシアを止めようとしている。
ルーテシアの見下ろす先には、金色の角をもった巨大な黒い蛍のような昆虫がおり、電磁波を発生させていた。
恐らく、これが地震の原因であろう。

「埋まった中からどうやってケースを探す！？　アイツ等だって局員とはいえ、潰れて死んじゃうかもなんだぞ！　それに、姉貴だって……！」

彼女はどうやら地下のみんなの心配をしているようである。心配するということは、局員を憎んでる訳ではないのだろうか？

「あのレベルなら多分これくらいじゃ死なない。ケースはクアットロとセインに頼んで探してもらう」

「よくねーよ、ルールー！！」

アギトはさっきよりも強く反発する。

「あの変態医師とかナンバーズ連中なんかと関わっちゃダメだって！　ゼストの旦那も言ってたろ？
　アイツ等口ばっか上手いけど、実際のところアタシ達のことなんてせいぜい実験動物くらいにしか……」

と言いかけたところで

ズシィィィン！

アギトが音のした方を見ると、巨大昆虫の周辺が陥没していた。
恐らく、地下が崩壊して昆虫を支えられなくなったのだろう。

「やっちまった……」

「……ガリュー、怪我、大丈夫？」

「……（コクリ）」

ルーテシアは心配そうに、傍で紫の翼を広げ飛んでいたガリューに呼び掛ける。
怪我というのは、先程ルーテシアをティアナの攻撃から庇った時にできたものだろう。

「戻っていいよ。アギトがいてくれるから」

ルーテシアの言葉に再び頷くと、ガリューは足元に魔法陣を展開して消えた。

「地雷王も……」

彼女は黒い蛍　―　地雷王も休ませるために帰らせようとするが……

キィィーーーーン！！

高い音が鳴り響くと共に、地雷王の下にピンクのミッド式魔法陣が現れる。

そして魔法陣から無数の鎖が現れて地雷王を縛り付けた。

地雷王は再び電磁波を発生させて鎖を切り払おうとするが、なかなか上手くいかない。

「な、なんだ！？」

アギトは突然の出来事に驚くがそんな余裕はなかった。

地雷王が鎖で縛られた直後、青と水色の道が2人に向けて伸びて来る。

アギトとルーテシアは目を上げると、ギンガとスバルがそれぞれのウイングロードを走り、ヴィータが2つのウイングロードの間を飛んで迫ってくる姿が目に入った。

逃げだそうと思ったが、直ぐさま近くのビルの屋上からオレンジ色の魔力弾と真紅の魔力刀が飛んでくる。ティアナの魔力弾と烈の魔力刀である。

「こんのぉッ！！」

2人は弾丸と刀を躱し、アギトは炎を烈とティアナに、ルーテシアは苦無（クナイ）のような形のダガーをギンガ達の方へ放ち、移動しながら反撃する。

だが、炎は烈の障壁で防がれ苦無は回避されて当たらなかった。

そのままルーテシアは近くの道路に降り立つが、高速で接近してきたエリオがストラーダを胸元に突き付けたことにより動けなくなる。

アギトはルーテシアを助けに行こうとするが、いつの間にか氷のダガーで囲まれていて身動きが取れなくなった。

「ここまでです」

動けなくなった2人に、リインがバインドを掛ける。

「クソッ！」

アギトは悔しそうにしながら飛行魔法を解き、ゆっくりと地面に降りる。
ちょうどその時、ヴィータが2人の元へやって来た。左手には拘束具らしきものを持っている。

「子供虐めてるみてーでいい気分はしねーが、市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

そう言って、腕を使えなくするようにベルトのようなもので2人を拘束した。

「……ヴィータ三尉が言うと、子供の喧嘩やってるみたいだけどね」

炎の翼を広げ、ティアナとキャロを抱えてヴィータ達の近くに降り立った烈はそのように呟いたが、ティアナとキャロ、アリステラ以外には聞こえなかった。
……ちなみに、3人はそれを聞いて笑っていたという。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、ヘリから１ｋｍ程離れた廃ビルの屋上。

そこには、２人の少女がいた。

１人は茶髪のツインテールに丸眼鏡を掛け、青と灰のタイツスーツの上から白いマントを着た少女。ナンバーズＮＯ．４　―　クアットロ。

もう１人は、同じく茶髪だが彼女は長い髪を黄色いリボンで纏めており、茶色いマントを着て、右手に茶色の布に包まれ長筒を持った少女。ナンバーズＮＯ．１０　―　ディエチ。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

ふと、クアットロが呼び掛ける。

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる……よく見える……」

彼女、ディエチの見るのは蒼やエイジス、シャマルやヴァイス。そして保護した少女が乗っているヘリ。

「でもいいのかクアットロ？　撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる」

「んふふふ♪　ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ」

「……ふーん」

ディエチはつまらなそうに呟き、自身のマントを脱ぎ長筒の布を取る。

布の中にあったのは、ディエチの身長くらいの長さのカノン砲　―　イノーメスカノンだった。

ディエチが狙撃の準備を始めると、ウーノから連絡が入りモニターがクアットロの側に現れる。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ』

「あ～、そういえば例のチビ騎士に捕まってましたねぇ～」

『今はセインが様子を伺っているけど……どうやらルーテシアお嬢様が局の魔導師と話し込んでるみたい』

「あらあらそれはいけませんね～～。ではさっさとヘリを撃っちゃいますので～、セインちゃんには局員が動揺した隙にルーお嬢様達を連れ出すようにと」

『わかったわ』

ウーノは通信を切りモニターを消す。

「じゃあディエチちゃん、さっさと撃っちゃって」

「わかった」

ディエチはイノーメスカノンを構え、エネルギーチャージを始める。

「インヒューレントスキル、ヘヴィバレル、発動」

ディエチの呟きと共に、足元にオレンジ色をした幾何学模様の円環型のテンプレートが現れ、イノーメスカノンの銃口に桃色の光が集束し始める。

「あと12秒、11……10……」

ディエチがカウントを始めると、徐々に銃口に集まる光は大きくなる。

「……3……2……1……発射！」

ディエチはトリガーを引き砲撃を放った。

――――無防備なヘリコプターへ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

砲撃が放たれる少し前

烈達の方にて

『アギトアギトアギトアギトアギトぉ！！！』

「だあーッもう、うっせぇよエイ姉！！　あと画面に顔が近ぇ！！」

「ア～ギ～ト～、お姉ちゃん達に向かって生意気よ。うりうり～～」

「アリス姉もッ！　抱き着くな！　ほお擦りすんな！！」

『お姉ちゃん、私もアギトをハグしたい！』

「アタシに味方はいねーのかぁぁぁあ！！？」

「フフフ、仲がいいね」

「うるせーぞ、肉欲獣！！」

「肉欲獣って……」（ｏｒｚ）

融合機三姉妹と烈がギンガ達とは少し離れた場所で話し込んでいた。
エイジスはヘリからモニターを通じて話している。
ちなみにギンガ達の方は、みんなでルーテシアを取り囲んでヴィータが犯罪者を捕まえた時のお決まり文句を言っている。
端から見たら小さな女の子を集団で問い詰めているようにしか見えない。

あとアギトが言った肉欲獣というのは、烈がアリステラとエイジスの２人のロードだということを知って言った言葉である。
（元ネタは漫画版の舞－ＨＩＭＥや舞乙－ＨＩＭＥを参照してください）

「それはそうとエイ」

『んみゅ？　何ですか、マイロード？』

「あの子、ルールルーって子なんだけど、どこかで見たことあるような気がするんだ。エイは何か思い当たることない？」

『ん～、えっと、え～っとですねぇ……』

モニターの先でエイジスは目を閉じて腕を組みながら考える仕草をする。

「（エイ姉って相変わらずっつーか、何て言うか……）」

「（ああ！　エイ、可愛い！）」

エイジスの仕草を見てそれぞれ思う姉と妹。

『あ、思い出しましたー！　メガーヌ・アルピーノさんにそっくりなんですぅ！』

「……あッ！」

烈もそれを聞いて思い出したようである。壊滅したゼスト隊のデータに載っていたことを。
ゼスト隊副隊長、蟲遣いの召喚師、メガーヌ・アルピーノ准陸尉のことを。

「……どうしてお母さんのことを知っているの？」

『ッ！？』

いままでずっと黙っていたルーテシアが突然喋った。どうやら烈達の会話が聞こえていたようである。

「おい、テメェ、それはどういう意味だ！」

「……答えて」

ヴィータがルーテシアに問い掛けるも、ルーテシアは無視して烈を見つめる。

烈はどうするかと１０秒程考え込んだが、何か思い付いたのかルーテシアに歩み寄る。

「君は何で俺が君のお母さんについて知っているのか気になるのかな？」

烈はルーテシアと目の高さを合わせるために屈んで尋ねる。

「……（コクリ）」

ルーテシアはゆっくり頷く。

「俺も君に聞きたいことがあるんだ。だからね、お互いに質問しない？　君が俺の質問に答えたら、俺も君の質問に答える。どうかな？」

「……いいよ」

「ちょ！　ルールルー！？」

「アギト、黙ってて」

アギトが反対しようとするが、ルーテシアの言われて黙るしかなかった。

「おしっ！！　おい、こいつの仲間のこととか聞き……」

「質問の前に自己紹介しようか。俺は草薙烈。君の名前は？」

烈はヴィータの言うことを無視し、ルーテシアと2人で話を進める。

「……ルーテシア。ルーテシア・アルピーノ」

「そう、ルーテシアちゃんか。じゃあ、早速質問していいかな？」

「うん」

「待てコラ、テメェはアタシ等の聞きてぇ事だけそいつに聞けばい

い」

無視されていたヴィータが無理矢理話に割り込むでくるが……

「黙ってろ。暴力幼女」

「んだとッ！」

「ヴィータ副隊長落ち着いて！　烈兄怒らせると大変なんです！！」

烈はヴィータを睨んで発言を切り捨てる。ヴィータは烈につかみ掛かろうとするが、スバルに羽交い締めにされる。
この時、烈の右目の色が真紅だからことには誰も気付かなかった。

「スバル、放せコラッ！！」

「ダメですヴィータ副隊長！　烈兄に任せてあげてください！！」

「話をしてくれるだけマシじゃないですか！！」

スバルやティアナが必死にヴィータを落ち着かせようとしているのを余所に、烈は質問を始める。

「じゃあ最初に……その娘、アギトちゃんの事だけど」

「えっ？　アタシ？」

突然名前を出されてアギトは驚く。アリステラは答えが気になるようで、話に耳を傾けている。

「何処で会ったの？」

「森の奥にあった違法研究所」

「『「ッ！？」』」

烈以外のこの場にいた全員が驚く。

「管理局に保護されても、実験動物扱いされるから連れていったの」

「ふざけんな！！　管理局がんなことするはずがッ！！」

「ヴィータさん、少し黙ってくれます？」

「…ぅッ」

アリステラはとても冷たい目付きでヴィータを睨みつけていた。冷たい言葉に含まれる殺気に、ヴィータはたじろぐ。

殺気を当てられた程度で怖じけづくとは、歴戦のベルカの騎士＜エ

ターナルロリータ＞も情けないものだ。

「ルーテシアちゃん、妹を助けてくれてありがとうございます」

『ありがとうです！』

アリステラ、エイジス共にルーテシアに御礼を言い頭を下げた。

「御礼なんて……いい。今度はこっちが聞いてもいい？」

「俺がわかることであれば」

「どうしてお母さんを知ってるの？」

ルーテシアはさっきと同じ言葉を口にする。

「俺は戦闘機人事件ってのを調べているんだけど、それよりも前にゼスト隊っていう部隊がその事件のことを調べていたらしいんだ。でも、８年前にゼスト隊は壊滅。部隊長のゼスト・グランガイツ一佐、副隊長のメガーヌ・アルピーノ准尉、クイント・ナカジマ准尉が行方不明。と言っても３人共殉職扱いにされてるんだけど」

ギンガとスバルは自分の母親の名前が出ると悲しげな表情になる。

「他の隊員達は全員殉職したのに、３人だけ行方不明。だけど、グランガイツ隊長は生きていた」

「「「えっ！？」」」

ＦＷやヴィータ達は再び驚きの声を上げるが、烈は無視して話を進める。

「だから不自然に思ってね、ゼスト隊について調べてたんだ。だから君のお母さん、メガーヌ准尉について記録に残ってる範囲であれば知ってる。直接会った訳じゃない。これでいいかな？」

「いい。ありがとう」

「じゃあ次の質問、どうしてレリックを集めてるのかな？」

この質問にルーテシアは少し困ったような表情になった。が、ゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「……お母さんとお母さんのお友達の為に、１１番と１５番のレリックが必要だから」

「ちょっと待って、貴女のお母さんって殉職――」

「ティアナ、口を挟まない。それに公式記録とはいえ、遺体は発見

されてないから死んだって証拠はない。グランガイツ隊長も生きてたし」

「あ、ご、ゴメン」

「……こっちの質問、いい？」

ルーテシアはあまりはっきりと答えたくないのか、次の質問に進めようとする。

「待て、テメェの母親に必要ってどういう――」

「いいよ、ルーテシアちゃん」

再びヴィータを無視。

「お前、無視すんのもいい加減にッ！！」

「ヴィータ三尉、烈の邪魔をしないでもらえますか？」

「さっきから五月蝿いですよ？」

ギンガがリボルバーナックルをヴィータに突き付け、アリステラが氷の剣を作り出し剣先をヴィータへ向ける。

アリステラはともかくギンガがヴィータの邪魔をするのは、恐らく

2人の話が気になるからであろう。

「お前等、命令違反も大概にしろよ！！」

ヴィータは三尉という階級を盾に叫ぶが

「私と烈は貴女の部下ではありませんし、階級が上であろうと貴女は他の部隊の隊員に対して命令できる権限をもっていません」

呆気なく否定される。

「（ギン姉が……恐い）」

「（まあ、でもその通りよね。烈とギンガさんは一時的な協力だけだし）」

補足すると、烈はなのはとフェイトに頼まれたが、協力したのはティアナやスバルの為であって2人に頼まれたからではない。さらに、2人は烈に対し六課の指揮下に入れとは言っていない。
ギンガもＦＷ達と合流するようにとはやてに言われた訳だが、同じく六課の指揮下に入れと命令されている訳ではない。
故に、2人はヴィータの命令に従う謂れはないのである。

「暴力幼女の所為で話が逸れたね。ルーテシアちゃん、質問どうぞ」

「お前、今度覚えとけよ」

正直、烈は「事実を言っただけなのに何か問題でも？」と言いたくなったが、話が進まないので無視した。

「……ゼストと会ったことあるの？」

「前に1度だけね。レリックを取り争ったんだ。まあレリックは取られたし、逃げられたんだけどね」

「そんな話聞いてないですよ！」

リインが叫ぶ。

「ウチの隊の隊長、ナカジマ三佐を通じて六課に報告した。聞いてないんじゃなくて、ちゃんとこっちの報告を聞いてないんでしょう？　リイン曹長？」

「……あぅ」

ガビーン、と明らかにリインは落ち込む。

＜烈さん……＞

＜恐いです……＞

＜エリオ、キャロ、烈兄は普段は優しい人だからね！　勘違いしないでね！＞

エリオとキャロの中で烈の評価が下がっていくのにスバルがフォローを入れる。

「じゃあ、最後の質問。いいかな？」

烈が優しく問い掛けると、ルーテシアは素直に頷く。

「この質問はあくまで俺の推測だけど……ルーテシアちゃん、メガーヌ准尉とクイント准尉は生きているんじゃない？」

「んなッ！」

「お母さんが……」

「生きてる……？」

スバルとギンガは信じられないという表情を浮かべる。

烈は以前ゼストと交戦した時、ゼストに尋ねた。クイントは生きているのか、と。
ルーテシアにその同じ質問をしたのは確信を持ちたいからだ。ゼストの話を信じなかった訳ではないが、純粋な子供の証言の方が確信が持てると思ったからである。

だが烈は推測の内容全ては言わなかった。何故なら、スバルとギンガが酷いショックを受けると思ったからだ。
……いくら彼女達でも、自分の母親が人造魔導師研究の実験台にされている。なんて知りたくないだろうから。

この場にいる全員がルーテシアの答えを待つ。

「……生きてる。お母さんも、お母さんのお友達のクイントって人も」

「「「ッ！！？？」」」

「……やっぱり」

みんなが驚愕するのに対し、烈は納得し冷静になっている。

「ねぇ、どういうことお母さんが生きてるって！！」

スバルがそう叫んでルーテシアに問い詰めようとした途端

『市街地にエネルギー反応！　大きい！！』

エイジスの映るモニターを通じて、ロングアーチの通信が響く。

『砲撃のチャージ確認！　物理破壊型、推定Ｓランク！！　目標は……ヘリ！！？』

「「「なッ！！？」」」

突然の出来事に烈以外がうろたえて叫ぶ。

「エイ！！」

「エイ姉！！」

『お姉ちゃん！　アギ――』

ドゴォォォォォォン！！！

モニターからの爆発音と同時に、エイジスは映らなくなり、モニターには砂嵐が走るだけだった。

第４１話　機動六課のある休日　推測と真実（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

Ｋの２乗
「今回の命令違反がどーのこーのということに関しては、ツッコミは一切無しでお願いします。
　というか、実際の軍隊や自衛隊でどうなっているのか知りませんし。
　全て自己解釈です。てか自己解釈に対してはツッコミ無しでお願いします」

リインフォース
「あとがきの冒頭部分から言い訳か」

Ｋの２乗
「サーセン」

リインフォース
「ところで、この場に私とお前以外誰もいないのだが……蒼や烈はどうした？」

Ｋの２乗
「みんな幼児化した烈を見て鼻血吹き出して医務室に運ばれました」

リインフォース
「……は？」

Ｋの２乗

「詳しくは、暇人様の作品『～聖痕を携えし魔導騎士～超番外編：歩とマリアの放浪記』（「此処で会ったが……何年目？」以降）をご覧下さい」

リインフォース
「……まあそれはいいとして、２人だけであとがきか？」

Ｋの２乗
「それだと寂しいのでゲストを、？？く～ん」

？？
「どうも、？？　？？です」

リインフォース
「いや、？だらけで誰だかさっぱりわからないのだが」

？？
「でしょうね。ですが、僕の名前を出したらネタバレになってしまうんですよ。ＪＳ事件終了後のストーリーのね」

リインフォース
「作者、次回新たなオリキャラ登場なのに、それよりも先のキャラを出していいのか？」

Ｋの２乗
「大丈夫……多分」

？？
「僕のことなんかよりも、本編が大変なことになっちゃってるじゃないですか。けー姉死んじゃったり？」

リインフォース
「……けー姉？」

Ｋの２乗
「蒼のことです。“けー”は私のことではありません」

リインフォース
「それは当たり前だ。だが何故蒼のことを姉と？」

Ｋの２乗／？？
「「禁則事項です」」

リインフォース
「？？は美少年だからともかく、作者は気色悪い」

Ｋの２乗
「ですよねーー」

？？
「では、次回予告にいきます。次回、第４２話　機動六課のある休日　《死神》の名を持つ者。ってことは……」

Ｋの２乗
「遂に戯言勢のキャラ登場です。オリキャラですが。
あと、烈と蒼の２人の苗字も判明します」

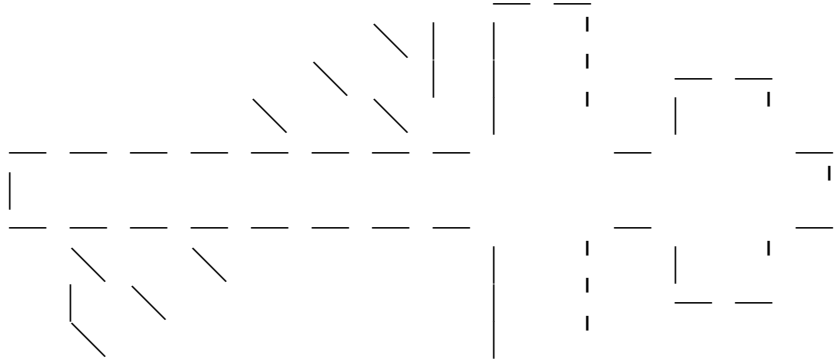
リインフォース
「私は知っているがな。では、次回もよろしく頼む」

第４２話　機動六課のある休日　《死神》の名を持つ者（前書き）

今回の烈の口調は仕様です。

あと今更ですが、“紅闇”の読みは“こうあん”です。“あかやみ”じゃありません。

そして出て来る十字架の形ですが、下のような感じです。



わからない、という方は『聖痕のクエイサー』を読むか、電子辞書等で調べてみて下さい。

では、始まります。

第４２話　機動六課のある休日　《死神》の名を持つ者

『砲撃……ヘリに直撃？　……そんなはずない！　状況確認！！』

ロングアーチからの通信が聞こえる。確か、フィニーノ二士だったっか？

『ジャミングが酷い！　データが来ません！！』

「そんな……」

「ヴァイス陸曹やシャマル先生が……」

「アオちゃん……エイ！！」

みんな動揺しているがこの状況はマズイな。今レリックを狙われたりしたら確実に奪われるだろう。

……いや、それが向こう側の目的か？　ヘリを撃ってこちらを動揺させ、その隙にレリックを奪う。

ま、レリックはティアナが奇策を練ったから大丈夫だが……さて、向こう側はどこから来る？

――この時、烈は気付いていなかった。自身の目つきと色が変わっていること。そして、考えていることとはいえ、自分の口調が変わっていることに。

「てめぇぇぇ！！！」

暴力幼女がルーテシアの胸倉を掴み上げる。

「副隊長、落ち着いて！」

「うるせぇ！！」

スバルが落ち着かせようとするが、暴力幼女は頭に血が昇っていて話を聞かない。よくもまぁそんなんで副隊長なんてできるものだ。

「おい！　仲間がいんのか！　どこにいる！　言えッ！！」

ルーテシアが答える訳ないだろうが。

しかし砲撃した奴等とルーテシアが仲間なら、向こう側の目的はレリックの確保だけではなく、言い方は悪くなるがルーテシアの回収ってところだろう。

「エリオ君！！　足元に何か！！」

ちょうどその時、ギンガが叫ぶ。

直後に、コンクリートの道路にできることは有り得ないはずの水の

波紋が現れ、タイツスーツに水色の髪の少女が飛び出してきた。
物質透過能力？　さすがに下から来るとは予想外だったな。

「ぐあっ！」

「いただき」

少女はエリオからケースを奪うと、再び地面に潜る。
ティアナが魔力弾を撃つが、空しくも当たらなかった。

「くそっ！」

そう言って、暴力幼女は少女が消えた方に向かう。ティアナもそれに続くが、誰か1人くらいはルーテシアを見張れよ。

さて、逃げられる前に――

俺はポケットから取り出した物をルーテシアに投げる。
それはルーテシアの服――いや、バリアジャケットなのか？――に張り付いた。

張り付いた直後に、さっきの少女がルーテシアの前に現れ、ルーテシアとアギトをしっかり抱きしめる。

「あっ！　コイツ！！」

暴力幼女が気付くが遅い。
少女は地面にルーテシア達ごと潜っていった。

「……反応……ロストです」

リインが悔しそうに言う。

「糞ッ！」

暴力幼女が地面を殴る。

「おい、ロングアーチ、ヘリは無事か？　あいつ等、墜ちてねぇよな！！？」

ヘリ、か。ま、蒼がいるから墜ちるなんてことはないだろうが、蒼の兄としてエイのロードとしても心配しないのもな。
生存を確認してからルーテシア達を追跡するとするか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うっふふのふ～。どう？　ディエチちゃん。ちゃ～んと墜ちてる～？」

「黙って。今命中確認中」

私は左目のスコープで煙で覆われているヘリを見る。

……撃ったのはいいけど、落ちたケースとマテリアルの回収がめんどくさいなぁ。

そう思っていると、段々煙が晴れてきた。私の目に入ったのは――

「……あれ？　まだ飛んでる」

――無傷で飛ぶヘリだった。

「あら？」

クアットロも首を傾げてる。

やがて煙が完全に晴れた。
……ヘリの前に誰かいる？
私は右目のスコープで誰なのか見た。
右目に映ったのは――――

「やれやれ。せっかくのんびりできると思ってたのにな」

――――マゼンタの六角形のシールドを張った、銀色の鍵と黒い本を持った女の子だった。

「あらぁ……」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで？」

信じられない。あんな小さなシールド６～７枚だけで私の砲撃を防ぐなんて。どれだけ硬いんだ？

と、ちょっとショックと受けていると、突然金色の魔力弾が私達のいる場所に降ってきた。

私はイノーメスカノンを捨ててクアットロと一緒に近くの低いビルに跳ぶ。
イノーメスカノンを置いてきちゃったけど、またドクターに作ってもらえばいいや。

「見つけた」

「「ッ！？」」

後ろから声！？

局の魔導師！？

私は再び跳んで、クアットロと一緒に逃げ出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「絶対守護領域解除」

私は目の前に展開したマゼンタのシールドを解除する。

……弓兵の盾を使うかと思った読者の方、正直スマン。

Ｆａｔｅネタ使い過ぎるとつまらないと思ってな。

《……お前は誰に話し掛けているんだ？》

《……世界の意思と言っておこう》

《……》

ええい！　そんなイタイ奴を見るように（実際に姿は見えないが）無言になるな！！

というか、あのタイツスーツの痴女が撃ってこなければこんなことにはならなかったんだ！！

《責任転化……と言うか逆恨みだな》

「五月蝿い。……グリモワール」

名を呼ぶとグリモワールのページが勝手にめくれ、あるページで止まる。

《……何をするつもりだ？》

「一発かます」

あの痴女共に一発くらい仕返ししないと気が済まない！

《……はぁ、好きにしろ》

「当たり前だ。……第４章　１項」

《　！　その技は……》

何の技が気付いたか。

「光は闇へ、有は無へ、生は死となりし時――」

私は詠唱を始める。

『はやて！』

『位置確認。詠唱完了。発動まであと４秒！！』

痴女を追っているハラオウンの声と、固定砲台をやっていた八神の声が響く。

あの狸も広域殲滅魔法を使うつもりか。

「闇は全てを覆い尽くす」

遠くを見るとハラオウンが追撃を止めるのと、２つの黒い球体が見えた。

……ああ、リインフォースの技だから狸が使ってもおかしくはないのか。

『遠き地に――闇に沈め』

「光よ、闇に――染まれ」

２人同時に詠唱を終える。そして――

「『デアボリックエミッション！！！』」

私と八神の声が重なった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

私ははやての広域魔法の効果範囲から離れるために、謎の２人の追

撃を止め反転した。
そしてなのはと共にはやての魔法の発動を待っていたんだけど……

「フェイトちゃん、あれ！」

なのはが上空を指差した。私はなのはの指の先にあるものを見た。
そこにあったのは――――

「……2つ？」

真っ黒な球体が2つ上空に浮いていた。
1つははやてのだ。ならもう1つのは誰が？　何ではやてと同じ魔法を？

『闇は全てを覆い尽くす』

通信で蒼が呪文を唱えているのが聞こえた。
……じゃああれは蒼が？　どうやって？　あの技は、はやてしか使えない筈なのに！？

『遠き地に――闇に沈め』

『光よ、闇に――染まれ』

はやてと蒼が同時に詠唱を終える。そして――

『『デアボリックエミッション！！！』』

詠唱は違うけれど、まったく同じ魔法が同時に発動した。
２つの闇の球体は一旦小さくなったかと思うと爆発するかのように広がり、辺りの廃ビルを覆い尽くしてゆく。

辺りが闇に呑まれ、あの２人をやっつけれたかな？、と思ったら、闇の中から眼鏡を掛けた方の子がもう１人を抱えて飛び出してきた。

『投降の意志なし・・・逃走の危険ありと認定』

バルディッシュが言う。何ではやての技が使えるのかは後で蒼に聞こう。
今はあの２人。逃がさない、絶対に捕まえる！

「フェイトちゃん！！」

「うん、なのは！！」

私となのはは移動し２人を挟む。

ガシュンガシュンガシュン！！
カートリッジをロードする。砲撃で昏倒させる！！

「トライデント・・・」

「エクセリオン・・・」

私達は同時に砲撃を放つ。

「スマッシャーーーー！！！」

「バスターーー！！！」

ドゴォォォォォン！！！

黄金の三つ又の砲撃と桜色の砲撃が衝突し、大爆発を起こす。
だけど……外した！！

『ビンゴォ！！』

「じゃない！　避けられた！！」

なのはも気付いてたみたい。あの2人に砲撃は当たってない。

「直前で救援が入った」

砲撃が直撃する瞬間に、速くてよく見えなかったけど、紫色の何があの2人を助けていた。

「アルト、追って！！」

『は、はい！！』

なのはに言われてアルトがセンサーで追跡するけど……

『反応、ロスト。異常反応も・・・消滅』

『く、逃がしたかぁ』

はやての悔しそうな声が聞こえた。逃げられた。

くっ！　せっかくのスカリエッティに関わる情報が手に入ると思ったのに。

と思っていたら……

『こちらスターズ2』

ヴィータから全体通信。どうしたんだろ？

『レリックは無事だったけど召喚師一見には逃げられた』

向こうも逃げられちゃったか。
でも、レリックを確保できたからいいのかな？

『でも……』

『「「　？　』」」

私やなのは、はやてとロングアーチ全員が首を傾げる。
まだ何か報告があるのかな？

『どんな方法使ったのかか知んねぇけど、草薙って奴が召喚師達を追跡してるんだ』

「「『ええっ！？」」』

烈が？　どうやって！？　反応は完全にロストしたのに！？

『方法はともあれ、なのはちゃん、フェイトちゃん。まだチャンスはある。烈君と一緒に追撃してや！！』

「「り、了解！！」」

烈のお陰で捕まえれるチャンスができたんだ。逃す訳にはいかない！

私となのはは烈の魔力反応のある場所へと飛んで行った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『アオがヘリの防衛に成功！！』

『危なかったぁ。ぎりぎりや』

フィニーノ二士と八神はやての声がヘリの安全を告げる。

「よ、よかった……」

暴力幼女が安心してヘナヘナと地面に手をつく。

さて、俺は――――

「紅月、発信機の位置は？」

さっきルーテシアに付けたのは発信機。紅月のマップデータとリンクしている物だ。

『現在地より北西に約７００ｍです。ですが、地中に潜っている可能性もあります』

この発信機は地上部隊の捜査官全員が持っている。

一般的に犯罪者の追跡にはリインがやったように反応をサーチするが、犯罪者の中には魔導師も少なくない訳で探査魔法の対抗策を練ってくる者もいる。

そういった犯罪者を捕まえる為に、逃走した犯罪者用の発信機と位置が映る携帯端末が支給されたのだ。

俺の場合、位置表示のデータを紅月に組み込んでいるから別の端末は必要ない。ギンガはデータをブリッツキャリバーに組み込まずに端末の方を持っているが。

ちなみに、この案は３ヶ月程前にレジアス中将が考案して導入したものであり、本局の人間や基本犯罪者と対峙しない部隊には支給されておらず存在も知らされていない。

機動六課は本局所属であり、遺失物捜査担当であるため知る筈がない。

「わかった。脚力強化を」

『承知。紅華緑葉』

俺は脚に炎を纏う。

「烈兄？　何をしてるの？」

炎を出したことにスバルが気付いたらしく聞いてくる。

「ルーテシア達を追跡する」

「「「えっ？」」」

「「はぁ？」」

アリス、ギンガ、スバル、ティアナは首を傾げ、リインと暴力幼女は「何言ってんだこいつ？」というような顔をする。

「聞こえなかったのか？　追跡すると言っている」

「馬鹿かオメェ！　反応はロストしちまったんだよ！！」

「そうです！　スキャンしても見つからないんですよ！！」

幼女２人が吠える。

「魔法にしか頼れない本局の魔導師には絶対にわからんさ」

「んだと！　もう一回言ってみろ！！」

「魔法にしか頼れない本局の魔導師には絶対にわからんさ」

あえて全く同じことを言って、暴力幼女を馬鹿にする。思った通り、顔が真っ赤だ。

＜アオが提督に喧嘩を売って、今度は烈がヴィータ副隊長に喧嘩を売る、かぁ＞

＜流石双子、なのかしら？＞

＜ティア～、ギン姉～、烈兄が恐いよ～＞

＜烈さんって、ヴィータ副隊長が嫌いなんでしょうか？＞

＜違うと思いますけど……＞

＜それよりも、魔法以外の方法って一体…？＞

上から順に、ティアナ、ギンガ、スバル、エリオ、アリステラ、キャロである。
と言うかギンガ、君はキャロの疑問に気付くべきなんだけど……

「ああ、一つだけ勘違いするなよ。俺は六課の尻拭いをしている訳じゃない。あくまで俺個人の目的だ」

「何の目的だ！！」

「答えるとでも思っているのか」

俺が殺気を放ちながら暴力幼女を睨む。

「（こいつ……なんて殺気してやがる）」

「（こんなの……烈さんじゃないですぅ！　恐過ぎるですぅ！！）」

「どうせレリックはティアナの奇策のお陰で無事だ。ここからは勝手にやらせてもらう」

俺はティアナとキャロの方を一瞥してから、地面を蹴って反応のある場所へと跳んで行った。

◇◇◇◇◇

「あの、ギンガさん」

ティアナがヴィータ三尉にレリックについて説明した後、ティアナに話し掛けられた。
今ヴィータ三尉は八神部隊長に指示を仰いでいる。

「何？　ティアナ？」

「烈についてなんですが……口調っていうか、雰囲気がいつもと違いましたよね？」

「……ティアナも気付いたんだ。……でも、それだけじゃなかった」

「えっ？」

口調だけじゃない。他にもあったんだ。

「目の色も変わってた。……訓練校の篭城事件やエイを助けた時みたいに」

「それって、マズいんじゃないですか！？」

ティアナはエイのことについては知らないけど、篭城事件の時は当事者だったからよく覚えてると思う。烈の髪と目の色が変わり、性格まで変わった姿を。

エイのことも1年くらい前のことだけど、私ははっきり覚えてる。

そして、つい最近、研究施設の捜査の時も烈はあの姿になっていた。

段々、あの姿になる期間が短くなっている。

もしもあの姿になり続けたら……いずれ烈は烈じゃなくなっちゃうんだろうか？

「……一応、アオに連絡します」

「蒼に？」

「烈のあの姿について、何か知ってるかもしれませんから」

「そう……だね」

蒼なら知っている…か。よく考えてみたら、４年も一緒だけど、烈って私のことどう思ってるんだろう。

私の疑問に答えてくれる者はいなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ヘリから数ｋｍ程離れた場所に、ディエチとクアットロを抱えたトーレは降り立った。

「ふぅ～、トーレ姉様ぁ、助かりましたぁ」

「感謝ぁ」

「ぼーっとするな。さっさと立て」

トーレは鋭い目つきを妹達に向けながら言う。

「馬鹿者共め。監視目的だったが来ていてよかった。セインはもうお嬢とケースの確保を完遂したそうだ」

任務失敗どころか、捕まりそうになった2人を叱責する。

「合流して戻るぞ」

と、トーレが言うと同時に、3人の近くの地面に水の波紋が現れ、ルーテシアとアギトとケースを抱えた水色の髪の少女、ナンバーズNO.6 ― セインが現れた。

「あ、セイン」

「お嬢様も一緒か。ちょうどいい、集団転移魔法を……」

トーレはアジトへ戻るためにルーテシアに転移魔法を頼もうとしたが

「んなこと言ってる場合じゃない!!　みんな逃げろ!!」

「「「えっ?」」」

3人が戸惑うのと、ディエチとクアットロの足元に紅闇のミッド式魔法陣が現れたのは同時だった。

「クアットロ！　ディエチ！！」

「えっ？　……キャッ！」

「うわっ！？」

トーレは魔法陣に気付いたがクアットロとディエチは反応が遅れ、
魔法陣から現れた魔力紘で地面に縛り付けられる。

そしてさらに、空中から紅闇の網が降ってきた。

「うわっ！？」

「……ッ！？」

「セイン！　お嬢様！？」

「何これ！？　絡まって……動けねぇ！！」

セイン達は網に掛かってしまい動けなくなる。

「糞ッ！　一体どこから…」

「ここだ」

「なッ！？」

突如、背後から声が聞こえトーレは振り返ろうとしたが、声の主はその暇を与えずトーレを叩き伏せ、直ぐさま絃で両手足を縛り上げる。

「貴様……『真紅の閃光』！！」

「また会ったな、３番」

トーレは顔を上げて自分を押さえ付けている人物、黒髪紅眼となった“草薙　烈”を睨みつける。
トーレは必死に絃を引きちぎろうとするも、強化されている絃を引き裂くのは困難であろう。

「３番に４番、６番に１０番か。最低でも１０人は戦闘機人がいるということか」

“草薙　烈”は絃で動けない４人を見渡して呟く。

「貴様……どうやって…」

「どうやって追い掛けてきた、か？　ルーテシアに発信機を付けさ

せてもらった。悪いな、ルーテシア」

「あ、ホントだ」

セインはルーテシアに付いた発信機に気付き、アギトが器用に動いてそれを外す。

「テメェ…卑怯だぞ！！」

「まあ確かにルーテシアを利用したことは悪い気もするが、相手が魔法だけしか使わないと考えるのは間違いだったな」

「うぐっ！」

正論を言われ、アギトは言い返せなくなる。

「ああ、それとアギト」

「……んだよ」

「ヘリに乗ってたエイは無事だ」

「ッ！　……そっか」

自分の姉の無事を聞き、アギトはホッとした表情になった。

「さて、ルーテシアとアギトは別として、お前達４人は連行させてもらおうか」

そう言われ、動けないトーレ、セイン、ディエチは悔しそうな顔をするが

「……くふ。……クフフフ！」

「４番、何がおかしい」

クアットロだけは笑っていた。
ニヤニヤと余裕の表情を浮かべて。

「……うふふ。連行なんてムリですよ～」

「……何だと？」

不利の状況なのに余裕な表情を浮かべるクアットロを“草薙　烈”は不自然に思う。

「少しは後ろを気にしたらどうですか～？」

“草薙　烈”はクアットロの言った意味がよくわからなかった。
だが、直後――――

――――――殺気！！――――――

「ッ！？」

“草薙　烈”は背後からの殺気と共に振るわれる斬撃に気付き、その場から跳んで攻撃を躱す。
だが完全に躱すことはできず、切られた髪が中を舞う。

「チッ！」

着地と同時に“襲撃者”は再び斬撃を放ってきた。
“草薙　烈”は咄嗟に右手にダガーを形成して防ぐ。

「ぐぅ！！」

しかしダガーで受けるにはその斬撃は重く、“草薙　烈”は弾き飛ばされる。
“草薙　烈”は空中で体制を整え着地し、ダガーを構えて“襲撃者”を睨み付ける。

「貴様は……」

“襲撃者”は見覚えのある人物だった。
銀髪のショートヘアーに碧い瞳。服は黒いオーバーコート。
そして黒い手袋を嵌めた手には、ラテン型の十字架に短い横棒と右斜めの棒が付いた形――――　ロシア型の十字架模様が刃に刻まれた、身の丈以上もの大鎌（デスサイズ）を構えた少年だった。

４年前、烈を殺そうとした者。
『殺し名』序列七位に属す者。
――《死神》の名を持つ一族。

「……石凪」

“草薙　烈”は唇を噛み締めながら相手の名を呟く。
それを聞いて、石凪はため息を吐いて呟く。

「まったく、せっかく殺せるチャンスだったというのに、そこの糞眼鏡の所為で台なしだ」

「だ、誰が糞眼鏡ですって!!」

「てめぇだ、このブス」

「ぶ、ブス!?」

クアットロは顔を真っ赤にして怒るが、絃で縛られている為何もできない。
そんなクアットロを無視して石凪は“草薙　烈”の方を向く。

「さて……お前は４年前と比べて随分姿が変わったようだな」

「……石凪、貴様、何故ここに？」

疑問に思うのも当然である。“草薙　烈”と石凪のいた地球は、この世界の地球とは違い並行世界である。
烈や蒼はたまたまこの世界に飛ばされたが、同じ世界の人間が全く同じ並行世界に飛ばされることが何度も有り得るのだろうか？
“たまたま”が何回も続くことが有り得るのだろうか？

「さあ？　答える義理はないな」

そう言って石凪は大鎌を振るい、トーレ、セインやルーテシア、ディエチを拘束している紘を切り裂く。

「……何者かは知らぬが、礼を言う」

拘束から解き放たれたトーレは石凪に礼を言って構える。

「ちょっと！　私は！？」

「黙れブス」

唯一、紘を切ってもらえなかったクアットロは叫ぶが、石凪は殺気を放ってクアットロを黙らせる。

「（チッ！　まずいな。石凪が奴等の味方！？　……流石に全員同時に相手するのは厳しい）」

有利な状況からあっという間に不利な状況に追い込まれ、どうするか考えるが。

石凪は“草薙　烈”にとって予想外の行動をとる。

「おい、そこの女。さっさと転移魔法とやらを使え」

石凪はルーテシアに逃げるようにと命令した。

「……俺を殺したいんじゃないのか、石凪」

「今回は挨拶だ。それに――――」

2人はお互い睨み合う。
その間にルーテシアが魔法陣を展開し、集団転送を行おうとする。

「――――厄介な奴等も近付いてきてるみたいだからな」

石凪が空を見上げると、飛行魔法を使って空を飛び、こちらに接近してくる蒼、なのは、フェイトの3人の姿が目に入った。

「じゃあな。次会った時は殺してやるよ――――墓森」

「……えっ？」

最後の石凪の呟きを“草薙　烈”は理解できなかった。
問い返そうとするも、ルーテシアの転送魔法が発動して石凪達は姿を消してしまった。

「……墓……森？　あ、アグッ！！」

『墓森』、その名を口にした途端、頭に激痛が走りその場に倒れこんでしまう。

「兄さん！！」

「烈君！！」

烈の異常に気付き、３人が空から降りて来て駆け寄る。

「シャーリー、反応を追って！！」

『はい！！』

フェイトはロングアーチに指示を出して転送の反応を追跡しようとするが、恐らく逃げられるだろう。

「兄さん！　しっかりしろ！！」

『主！！』

「あぐっ！　グゥゥ！！」

蒼と紅月が必死に呼び掛けるが、頭の痛みによる苦しさで返事ができない。

“草薙　烈”苦しむ中、髪と目の色は段々元の色へと戻ってゆく。

「グぁ……」

「……兄さん？　オイ！！」

蒼が必死に叫ぶ中“草薙　烈”、いや“墓森　験”は意識を失った。

長いようで短かった六課の休日は幕を閉じたのであった。

第４２話　機動六課のある休日　《死神》の名を持つ者（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

リインフォース
「蒼のデアボリックエミッションの詠唱についてだが、あれははやての詠唱ではなく私の詠唱を元にしてオリジナルになっている」

Ｋの２乗
「実際、Ａｓでは『闇に染まれ』になってます」

エイジス
「こ、今回は海人様より、オートバジンを頂きまみた！！　……あぅ／／／」

蒼
「兄さんって免許は？」

Ｋの２乗
「四輪免許を追加する予定ではありましたが、ついでに二輪免許も追加しようかと思います」

アリステラ
「１７歳で車ってオーケーなんですか？」

Ｋの２乗
「メガミマガジンの『リリカル歳時記』って漫画にて

ミッドの免許取得年齢

二輪：１５歳以上
四輪：１６歳以上

とあったので問題はないかと」

リインフォース
「それはさておき、石凪（イメージは『聖痕のクエイサー』のサーシャ君で）の登場に烈の本名が出てきたな」

Kの２乗
「墓森の説明はこちら」

『墓森』
・“殺し名”序列五位。別名『墓森司令塔』
・対極の“呪い名”は『拭森（ぬくもり）』
・みんなのために殺す《虐殺師》
・拷問を得意とする

Kの２乗
「あくまで上の説明は原作設定です」

アリステラ

「と言うより、墓森は原作で名前しか出てきませんでしたよね」

エイジス
「薄野も天吹も名前だけだったよ」

Kの2乗
「ええ、だからオリジナル設定が追加されます。それと――」

全員
「「「それと？」」」

Kの2乗
「――戯言勢キャラは全て烈や蒼と同じ類の能力を持って登場します」

リインフォース
「……原作ファンの方々に文句を言われるのでは？」

Kの2乗
「うん、わかってる。でもそうしないと、烈や蒼の能力の説明が一切できなくなるから。
戯言っぽくないと思われるかもしれませんが、申し訳ありません」

蒼
「できればそこの部分は大目に見て欲しい」

アリステラ
「という訳で、その点についてはできる限り批判や苦情無しでお願いします。……最悪、話が成立しなくなりますので」

エイジス
「では、今回はこの辺で！！」

Kの2乗
「え～っと、受験もありますし、模試も多くなるので更新速度が落ちると思いますが、これからもこの作品をよろしくお願いします」

リインフォース
「では、また次回。タイトルは未定だ」

蒼
「次回もよろしく頼むな」

第４３話　毒舌&批判タイム？（前書き）

第３回オリキャラ紹介にて、烈の資格に四輪駆動免許、二輪駆動免許を追加いたしました。

今回区切りが微妙です。

また、バルディッシュ様と海人様からの貰い物を使用しています。

第４３話　毒舌&批判タイム？

「で、説明してもらおうやないか、蒼」

ＦＷ達の休みが台なしになった日の翌日、私はチビ狸の部屋に呼び出されていた。
部屋にはチビ狸、露出犬、暴力幼女、バッテンチビの４人がいる。
ちなみに悪魔とニート侍がいないのは病院に行っているからしい。

「誰が狸や！！」

「私は露出魔なんかじゃない！！」

「暴力幼女って言うな！！」

「ペッタンコに言われたくないですぅ！！」

おっと、口に出ていたか。
とそれはさておき

「バッテンチビ、全身を蜂の巣にされたいか？」

《そっちなのか！？　胸のことを言われた方が重要なのか！？》

煩い！　胸の大きいお前にはわからないんだ！！

「サーー！　すみませんでしたーー！！」

チビを脅すと敬礼したので、私は八雲を伍式『崩』から待機モードへ戻す。

「まあふざけるのもそこら辺にしてな。んで、蒼」

「なんだ狸？」

狸が珍しく真剣な目つきをして私を見ている。

狸が真面目？　正直気色悪い。

「気色悪くて悪かったな」

チッ、また口に出ていたか。

《お前、わざとだろ》

《む、バレたか》

リインフォースとやり取りをしていると、いつの間にか3人が睨んでいたので、とりあえず話だけは聞いておくことにする。

「聞きたいことは1つだけや。どうしてあんたがデアボリックエミッションを使えたんや？」

ふむ、やはりそのことか。
今更だが別の技を使えばよかったな。『熾天使の裁き（セブンズヘブンズ）』とか。もう手遅れだが。
とは言え――

「質問に答える義理はない」

「なんやてッ！？」

そう、狸が叫ぶのと同時に、露出犬と暴力幼女が己のデバイスを起動して私に突き付けていた。

「何のつもりだ？　ハラオウン、ヴィータ？」

「貴女がはやての質問に答えないから」

「力ずくでも聞かせてもらう！　あれははやてしか使えねぇんだ！！　何でオメェが使える！？　言え！！」

フ、どうやら暴力幼女は昨日散々兄さんに虚仮にされたことで、まだ腹が立ってるみたいだな。

……え？　何で兄さんと暴力幼女のやり取りを知ってるのかって？紅月の会話記録を見たからだ。私は紅月のマイスターだからアクセス権限は強いんだぞ。

まあ後、エイジスの通信を横から聞いていたのもあるが。

閑話休題

「力ずく？　私に勝ったことすら無いくせにか？」

「ウッ！」

ちなみに、私は六課の隊長４人を同時に相手しても勝てる。自分の力に驕っている奴を倒すのは簡単だからな。

・・・スマン、また話が逸れたな。

「それに、私の能力について聞くのは契約違反だ」

六課に協力するための条件の１つ。それは私の能力について調べたり聞いたりしないこと。

「どんな理由があれ、最低限しか話さないという契約だ。既に最低限の内容は話した。これ以上、説明するつもりなど無い」

「どうしても話さないの？」

ハラオウンがバルディッシュを握る手に力を込める。

「話さん。無理にでも聞き出すというのなら、契約違反で六課への協力は取り消しだ」

「か、勝手過ぎるですよそんなの！！」

「勝手？　契約ってのは法で認められた約束事だ。それを破るというのは違法であり、もし破られた場合、契約は解除できる。つまり勝手でもなんでもない」

契約というのは、当事者の意思が一致することで成立する。
この場合の当事者は私と六課、正確にいうと私と六課の責任者である八神だ。
まあ、私と八神の契約は口約束なので法で守られているか定かではないが、契約は契約。破るというのなら契約は破棄して構わないのだ。

「……わかった。話さんでええ」

「「「はやて（ちゃん）！！？」」」

八神の発言に痴女&チビーズが叫ぶ。
八神の奴、法と言われて弱気になったか。
……ま、こいつ等頭悪い且つ硬そうだしな。法と言われたら手も足も出ないか。

《相変わらず容赦無いな》

《当たり前だ。私は八神達が嫌いだからな。そうでなくとも、奴等を甘やかしたら付け上がるだけだ》

ハッキングでわかったことだが、八神達は魔力保有量が多い高ランク魔導師ということでかなり優遇されている。
つまりずっと甘やかされてきたってことだ。魔力が多いというだけで。八神が19歳で佐官なのもそのお陰だろう。

ぶっちゃけ、コイツが佐官で大部隊の指揮官とか絶対ありえないだろ。
高町もハラオウンもだがホントに分隊長か？　今まで小隊の指揮官らしいとこ1ッつも見てないんだが。
アグスタの時とか何だ？　ドレス着て内部警備？　ホテルの中で広域魔法や砲撃をぶっ放すつもりだったのか？
さらに隊長4人はほとんど個人戦しか行わずに、指揮はティアナに任せっきり。そのくせ、良いとこ取りしようとして指揮権を横取りする。昨日のヴィータとリインとかその通りだろ。しかも、蟲男―　ガリューって奴（アグスタの時のだな）をぶっ飛ばして結局逃げられてるし。

更に隊長達全員がそれを無自覚でやってるから尚更タチが悪い。

私から見て、機動六課でまともなのはティアナだけだ。
隊長達や守護騎士は言うまでもなく、エリオとキャロはハラオウンの言いなり。
スバルは……兄さん寄りの考えを持ってるから比較的マシだが、高町にべったりだからな。兄さんと高町が対立した時どっちに付くかによるな。あ、この間の模擬戦はノーカンだぞ。
他にマシなのは……グランセニック、か？　ティアナを心配してた分、高町達以上に新人達を見ていたからな。

と言うか、身内と友人だけで構成された部隊って何だ。友達ごっこするなら別の場所でやれ。仕事場は遊び場じゃないっての。

《蒼のスーパー毒舌タイムだな。しかも、また口に出してるぞ》

そう言われて八神達を見ると八神は机で、ハラオウン達はテーブルで突っ伏してすっごく凹んでる姿が見えた。

《ちなみにどの辺りから？》

《ぶっちゃけ～、辺りからだ》

《まだ言い足りないんだが？》

《そろそろ終わりにしろ。……ハッキングの続きをするんじゃなかったのか？》

《フム……そうだな。管理局や六課の黒い情報でも捜すか》

《（ほんと、イイ性格してる奴だ）》

「ではな。話はこれまでとさせてもらう」

「……わかった、戻ってええ。……私はダメなんかなぁ。部隊長失格なんかなぁ」

「私が指揮に回れないのは執務官の仕事が忙しいからなんだもん。……指揮官資格もちゃんと持ってるのに……」

ぶつぶつと独り言を言ってる狸達を無視して私は部屋を出た。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、１０８部隊のオフィス

「む～～」

『主、本当に覚えていらっしゃらないのですか？』

「うん。紅月の見せてくれた映像は本物なんだろうけど……何て言うか、実感が湧かないって言うか」

俺は昨日の出来事の報告書の作成を行っていた。
ちなみにギンガは現場調査に行っているからいない。

昨日俺は気絶しちゃったらしいから今作ってるんだけど、昨日の記憶が途中から曖昧だから紅月に映像記憶を見せてもらっていたんだ。
映像に映ってたルーテシアちゃんに逃げられたところ辺りまでは覚えてるんだけど、それ以降の映像　―　戦闘機人と思われる４人の少女との戦闘については全く思い出せなかった。

と言うか、映像に映ってるのホントに俺？　別人じゃないの？

『いえ、別人などではありません。主です』

「いつの間に読心術なんて身につけたの！？」

『主の顔から判断いたしました』

流石、蒼の作ったデバイスと言うべきなのだろうか・・・

「提出期限は昼までだし、ともかく紅月の記憶映像通りに書くとし

ようか」

と言ったところで

ピーンポーンパーンポーン！

館内放送のアナウンスが流れ始める。

『草薙曹長、部隊長がお呼びです。至急、部隊長室へ行って下さい』

この声・・・受付担当のメイリンか。メイリンは赤毛をツインテールにした女の子で、アスランに好意を持っている子だ。・・・まあ、それはどうでもよくて。

「ゲンヤさ……じゃなくて、部隊長からかぁ。多分、昨日の件だよね」

『おそらくは』

報告書ことかなぁ？　・・・何だろう？　まあ、行ってみたらわかるかな。

そして俺は立ち上がり、部隊長室へと向かった。

◇◇◇◇◇

部隊長室の前に着いた俺はブザーを鳴らし、部屋の中に入った。

「失礼します」

部屋の中にはゲンヤさんとマリーさんがいた。

「おう、来たか」

「おはよう、烈君。義手の調子はどうかな？」

「おはようございます、マリーさん。何の問題も無いですよ」

「よかった～。義手型のデバイスなんて作ったことないから不安だったんだ。何か問題があったら言ってね」

「はい！」

マリーさんと軽く挨拶してからゲンヤさんに向き直る。

「それでゲンヤさん、呼び出した理由は？　報告書ならもう少し掛

かりますが……」

「ああ、報告書ならもう出さなくていいぞ」

「……はい？」

思考がフリーズ。今なんて言った？　提出しなくていいって何で？

「あ、あの、それってどうしてですか？」

「・・・ハァ～」

マリーさんの質問に対し、ゲンヤさんが不機嫌そうに溜息を吐く。
マリーさんと顔を見合わせるけど、マリーさんも俺もわからなので
2人揃って首を傾る。
俺とマリーさんはゲンヤさんが話すのを待つ。

「・・・あのチビ狸がな、烈がレリックを狙った嬢ちゃん達を追撃
したって事実を揉み消したんだよ」

「ええっ！？」

「……成る程。そういう訳ですか」

マリーさんが驚くのに対し、俺は冷静だった。揉み消した理由は十

中八九……

「烈の思ってることで間違いねぇだろう」

「えっ？　えっ、どういうこと？」

「マリーさん、六課はどこの部隊でしたっけ」

マリーさんがわかっていないようなので、順を追って説明してゆく。

「それは・・・地上に試験的に作った本局の部隊だよ」

「その通りですね。ですが、地上部隊は六課の存在を快く思っていません。何故でしょうか？」

「地上と本局の仲が悪いから？」

「はい。それ故、六課に協力する地上の部隊はほとんどありません」

「ウチの隊は例外みたいなもんだ」

ゲンヤさんも説明に加わる。

「まあぶっちゃけますと、『陸』から見れば六課の存在は邪魔で潰してしまいたいんですね」

「確かにそうかもしれないけど、それが烈君の事が揉み消しにされたのと何の関係があるの？」

「結論だけを言いますと、地上の部隊や地上本部が六課へ介入するのを防ぐ為です」

まあ、今回のことが地上本部に報告されなかったとしても、いずれ地上本部は六課を査察するだろうけどね。

「さっきも言いましたように、地上の部隊は六課を潰したがっています」

「だが、理由も無しには潰すことなんてできねぇ。だから必死に六課の失態を粗探ししてる奴等もいる」

「……あっ！　それってつまり、今回の事がその理由になるってことですか？」

ようやくわかったみたい。

「その通りだ。マリエル技官」

「もし今回の事が上、つまり本局や地上の上層部に報告書を通じたりして知られた場合、他の部隊からの六課に対して批判ができます。１つは、俺が発信器で追跡したのに対し、六課は探索魔法でロス

トしただけで追跡を諦めた点。
もう1つは、俺が追跡しているとわかった途端、追跡を再開したくせに逃げられた点。
つまり地上部隊の局員を利用したくせに、犯罪者達の逮捕に失敗したと言える訳です」

俺は喋り続けて息が苦しくなったので一旦言葉を区切る。

「地上の対応が遅い　―　まあそれは元々『海』の所為なんですが　―　それを理由に六課は編成されました。
今回の件は、六課は小数精鋭の部隊であるのに1人の地上の局員に遅れを取った。
自分で言うのも何ですが、俺、つまり地上の局員が六課よりも優位性があることを示したって訳です」

「地上の局員に劣るんだったら六課はミッドに必要ねぇ。そうやって六課の存在を批判することができるって訳だ」

「な、なるほど。でも、ナカジマ三佐や烈君が上に報告すればはやてちゃんの揉み消しなんて意味無いんじゃ……」

「そうすればあの狸は『六課はその件について一切関係あらへん』なんて言って、こっちに全部責任なすりつけて知らねぇ顔するに決まってる」

「六課設立に関わった本局の人々も八神二佐の主張を擁護するでしょう。六課を潰させたくないから。その理由はわかりませんけどね」

俺は両手を挙げて「やれやれ」と呟く。

「ま、そんな訳で烈が報告書を提出しても無駄って訳だ」

「ですが、八神二佐は紅月の映像記録を寄越せって絶対言ってくるでしょうね」

「俺はあの狸を甘やかすつもりは無ぇ。烈、映像記録は個人的に俺に回してくれ」

「了解しました」

『六課にいるマイスターが私の映像記録を見ているでしょうが、マイスターの性格から言って映像記録を八神二佐達に話すことはないでしょう』

紅月が付け加える。確かに、蒼の性格だと八神二佐に話したりはしないだろうから大丈夫たね。

「う～ん、はやてちゃん達のことは昔から知ってるけど、今回は流石に勝手すぎるなぁ」

「マリーさん、もし六課のデータと紅月やブリッツキャリバーの映像記録を照らし合わせることになったりしたら、八神二佐が紅月の映像記録のこと口に出しても黙っててもらえますか？」

「……うん、わかった。それは地上部隊と六課の協力なんかじゃない。一方的に従えって言ってるようなものだもんね。はやてちゃん、正直見損なったよ」

（烈、ゲンヤ、マリエルの八神はやてに対する好感度が下がったｗｗｗ）

・・・今なんか変な声が聞こえたような・・・気の所為かな。

「はぁ、呼び出した目的と話が大分ズレちまったな」

……あ、忘れてた。

「す、すみません」

「いや、別に謝ることはねぇ。で、烈。お前を呼んだのはな、マリエル技官を昨日の現場に連れていってほしいからだ」

「構いませんけど、マリーさん車の免許持ってませんでしたっけ？」

「私の車は修理中なんだ」

「生憎、ウチの隊の車も全部出払っててな。だが、バイクが残ってる筈だ」

バイク・・・ああ、アレか。

「悪いが、お前さんバイクでマリエル技官と一緒に現場に行って、現場調査に加わってくれ」

「了解しました。マリーさんすみません、長い話をしてしまって」

「ううん。気にしないでいいよ」

そう言われると有り難いかな。

「じゃマリーさん、行きましょう。ゲンヤさん、失礼します」

「ナカジマ三佐、失礼いたします」

「おう」

そう言って、俺とマリーさんは部隊長室から出ていった。

◇◇◇◇◇

俺とマリーさんは準備を終え隊舎の外の駐車場に向かう。

そこには5台のバイクが並んでいた。

前輪の部分が黒く後輪の部分が緑色のバイク（ハードボイルダー）
黒を基調として黄色いラインが入った、同じカラーのサイドカーの付いたバイク（サイドバッシャー）
黒にマゼンタのストライプが入ったバイク（マシンディケイダー）
シルバーカラーのバイク（オートバジン）
白を基調として横に赤いラインが入ったバイク（トライチェイサー２０００）

これらのバイク、実は蒼が持って来たものなんだ。
曰く、この前グリモワールを開けた途端にこの5台含めたバイクが全部で7台も出てきたらしい。
その時は訓練中だったらしく、蒼も空を飛んで参加していたため、いきなり空からバイクがＦＷ達に落ちてきて大変だったとか。
こんなにあっても仕方がないということで、2つだけ貰って残りをウチの部隊に持ってきてくれた。
……意外とこのバイク、ウチの隊のみんなに好評だったりする。

ちなみに蒼が貰ったバイクの1つは、何故か自動販売機に変形するバイク（ライドベンダー）
もう1つはティアナにあげたらしいけど、それは赤色と金色バイクだったみたい（マシントルネイダー）

ティアナはすっごく目をキラキラさせていたらしい。
……ティアナ、バイク好きだもんなぁ。

閑話休題。

今回はマリエルさんもいるので、サイドカー付きのバイクを使う。
・・・あ、言い忘れてたけど俺は四輪車と二輪車の免許両方持ってるから。
とまあそれは置いといて、俺とマリーさんはバイクに乗る。

「マリーさん、ヘルメットとゴーグルはして下さいね」

「うん、わかった」

そう言いつつ、俺もヘルメットを被ってゴーグルを掛ける終えると俺はエンジンを掛けた。

ドルゥウゥン！　ドルゥウゥン！！

バイクのエンジン音が鳴り響く。

「烈君、準備いいよ」

マリーさんの方を見ると、ヘルメットとゴーグルを着け終えていた。

「安全運転でお願いね」

「ええ、わかってます」

そう言って俺はしっかりハンドルを握って出発し現場へと向かった。
さて、現場調査、頑張るとしますか。

第４３話　毒舌&批判タイム？（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

リインフォース
「今回は時間が全然進まなかったな」

蒼
「まあ、説明が長かったしな。ところで、『熾天使の裁き』がデジモンの技だと気付いた方はどれだけいるだろうか？」

烈（黒）
「知ってる人は知ってるだろ。さて、今回は前書きの通り前話と前々話の感想での貰い物を使用した」

エイジス
「バルディッシュ様から、ライドベンダー、ハードボイルダー、マシンディケイダー、マシントルネイダー、トライチェイサー２０００を。海人様から、サイドバッシャーを頂きまみた！！　……あぅ、また噛んじゃいました／／／」

アリステラ
「上から順に、０００、Ｗ、ディケイド、アギト、クウガ、５５５です。今回は前々回の感想で貰った５５５のバイクの名前も出てきましたが」

リインフォース
「ちなみにウチの作者は平成仮面ライダーをアギト、クウガ、龍騎、５５５まで小学生の時見て、ディケイドの５５５の世界から最後ま

で、W、０００は見ている。映画版は全て見ていない」

蒼
「それはどうでもいいが……何故バイクはグリモワールから出て来たんだ？」

アリステラ
「パラレルゲートの影響なんじゃないでしょうか？」

エイジス
「パラレルゲートってなんですか？」

リインフォース
「パラレルゲートとはな……」

烈（黒）
「リインフォースが説明し始めたか」

アリステラ
「じゃあ、次回予告にでも」

蒼
「第４４話　預言。……ああ、あの若作りのか」

烈（通常）
「噂によると化粧で２０代後半ってのをごまかそうとしているとか」
（※カリムの年齢は作者の勝手な推測です）

アリステラ
（兄妹揃って容赦ないですね・・・（汗））

蒼

「では、次回もよろしく頼む」

番外編　αの聖騎士召喚、怠惰の魔王現る！！（前書き）

はい、更新が遅くなったのに本編じゃなくてすみませんｍ（＿＿）ｍ

今回はライ様とのコラボになります。

ライ様の方ではＳｔＳ編は終了していますが、今回の話はＳｔＳ中の話です。

……一真の口調が合っているか不安ですが。

てか、今までで一番文字数が多いです

それではどうぞ。

番外編　αの聖騎士召喚、怠惰の魔王現る！！

六課の訓練場にて

「アクセルシュート！！」

「フォトンランサー、ファイア！！」

「シュワルベフリーゲン！！」

誘導弾と魔力の槍、そして鉄球が同時に私に襲い掛かる。
だが、その程度の弾幕などたいしたことはない。

「陸式『劈』！」

『６ｔｈ　Ｍｏｄｅ　Ｔｗｉｎｓａｂｅｒ　Ｆｏｒｍ』

私は双剣を使い、最も速く迫ってきた高町の誘導弾をハラオウンの魔力槍に向けて弾き相殺させる。
残り８つの鉄球は刃に氣を流して切れ味を上げ、全て真っ二つに切り裂く。

「紫電・・・」

「むっ！」

「・・・一閃ッ！！」

いつの間にか背後に迫っていたシグナムが炎を纏った剣撃を振り下ろす。

学習しない奴らだ。その程度・・・

「お見通しに決まってるだろ！！」

瞬時に双剣で私の真上に衝撃波を放ち、炎を掻き消して剣の振り下ろされる勢いを弱める。

「くッ！！」

シグナムはレヴァンティンに衝撃波が当たったことで一瞬怯むが、直ぐに気を取り直して剣を振り下ろす。

だが・・・その一瞬が命取りだ！！

「蒼紅・破天蹴撃！！」

私は一瞬の隙で冷気付加（アディッション）と紅華緑葉を使い、シグナムを地面へ蹴り飛ばす。

「ぐあぁぁ！！」

「シグナム！？」

ハラオウンが注意を逸らす。全く、戦場だったら死んでるな。
仲間がやられたことにいちいち反応している暇があるのか？
隙だらけのハラオウンを落とそうとした途端――――

「この！　ディバインバスター！！」

――――高町が砲撃を放ってきた。

「む！　シールド！！」

咄嗟にシールドを張って桜色の砲撃を防いだ。・・・シグナムが落とされた動揺からの立ち直りが早いな。
しかし、防いだのはいいものの煙りで回りが見えんな。・・・いや、これが狙いか。何ともありきたりな手だ。

「ギガントハンマーー！！」

そう思った瞬間、ハンマーを振りかぶったヴィータが煙りの中から飛び出て来た。
……まあ、予測はしていたから何とも思わんが。
私は軽く体を逸らしてハンマーを回避。そしてシグナムと同じように蹴り飛ばす。

「うわぁぁぁぁあ！！」

「ヴィータちゃん！！」

高町もヴィータに注意を逸らし無防備になる。
……はぁ、よくこいつ等こんなんで戦えてきたな。

《まあ、高町なのはの場合だと完全に魔力量によるごり押しだからな》

《全く。何度も落とされてるんだから少しは学習してから挑めっての》

未だにシグナムを心配しているハラオウンと、ヴィータを心配している高町をほおっておいてリインフォースと話す。

この模擬戦、隊長４人　ＶＳ　私　だが、今回が初めてではない。
今まで何回か行っているものだ。

そしてそれは全て私が勝っていて、奴等は未だ私に勝ったことがない。
何故って？　奴等は自分の力　―　魔法の力を過信しすぎているからだ。それに加え、４対１という戦いなので負ける筈がないと油断している。

自分の力に驕っている奴は馬鹿だ。絶対に負ける筈がないと、自分の力は絶対だと思う奴は決して強くなどないのだ。
なにより、そういう奴等に限って今まで自分より強い者と戦った経験が少ない。
自分より弱い者としか戦ったことがない奴が強くなれるはずなどないのだ。
こいつ等、隊長の４人はそれに該当すると言っても過言ではないな。

・・・まあ、昔の私もその力に驕る馬鹿だったのだがな。それ故、後悔もした。
だが、後悔したからこそ今の私は力に驕ることも無くなったし、特訓して強くもなったのだがな。

「しかし、それに気付かない奴等はやっぱアホだろうな」

私はグリモワールを取り出して、適当にページをめくる。４章のとあるページが開かれた瞬間

「捕まえた！！」

前方２０m先程にいる高町によってバインドを掛けられていた。
・・・いや、お前何自信満々に「勝った！」て顔してんだ。態と隙作ってやったんだぞ。
辺りを見回すと左右にはヴィータとシグナムが。高町の隣にはハラオウンもいた。

「ようやく勝てるの」

「いままで散々やられてきたからなぁ。借はきっちり返してやる！！」

「勝って……二度と私を痴女なんて言わせない！！」

「お前に何度も負けていれば、隊長としてのメンツが立たんのでな。スマンが今回は勝たせてもらう」

なんかそれぞれ勝手なことを言っているな。ま、どうでもいいが。
隊長達は私からある程距離を取り、カートリッジをロードしていた。

「全力全開！　スターライト・・・」

「雷光一閃！　プラズマザンバー・・・」

「轟天爆砕！！」

「翔けよ、隼！！」

ふむ、一気に必殺技で潰すつもりか。普通に考えてオーバーキルだな。ま、いつもの仕返しのつもりだろう。
バインドを破ることもできるが、愕天王でも呼んで愕天大王にでもなってもらった方がおもしろいか。
そう思うと、愕天王を喚びだすために私は直ぐに詠唱を始める。

「我願うは鋼鉄の剣角。媛“の”赤輝の星より来たれ。鋼の牙!!」

《……あ》

《……どした?》

詠唱がほとんど終わったところで、いきなりリインフォースが変な声を出す。何だ突然?

《お前、詠唱間違ってる》

《な、何だってーーー!!?》

私はさすがに驚いた。いや、もう魔法陣現れてるぞ!!
詠唱間違ったなら一体何が出てくるんだ!!
と、私の疑問に答えてくれる者はおらず

「「ブレイカーーー！！！」」

「ギガントシュラーク！！！」

「シュツルムファルケン！！！」

奴等の必殺技が放たれた。

ドゴォォォォォォォォォン！！！！！

蒼の周辺は爆発による煙で覆われる。

「勝った、勝ったよフェイトちゃん！！」

「うん！　なのは！　これでもう痴女なんて言わせない！！」

声を上げて2人は喜ぶが、ヴィータだけは違った。

「……嘘だ」

「ヴィータ？　どうした？」

「アイツ、防ぎやがった！！」

「「「ッ！？」」」

それを聞き全員が驚愕の表情を浮かべ、爆発の中心地を見る。

徐々に晴れてゆく煙。その中から現れたのは――――

「ったく、何処だここは？」

ところどころが丸い重厚な黒い鎧で覆われた騎士だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

少し時間を遡る。

とある平行世界の管理外世界にある違法研究所。

「これで最後か」

俺は手に持った大剣 ― ＺＥＲＯＡＲＭＺ－カムイ（見た目：終わクロのＶ－Ｓｗ）で目の前にいた生物 ― 体や頭にボルトが埋め込まれて大きなトマホークを持った、上半身裸で肌が緑色の大男の姿をしたデジモン ― ボルトモンを切り伏せた。

「後は研究所を消すだけか。メンドイな」

『いつもの事だろう』

俺のデバイス、ゼロことゼロデヴァイスが話し掛けてくる。

「それもそうなんだけどな」

と言ったところで

「カズ君～！」

「一真！」

後ろから声がしたので振り返ると、別行動を取っていたなのはとシグナムがこっちに向かって来ていた。

「なのは、シグナム、そっちは済んだか？」

「ああ。大して強い奴はいなかったからな」

「数は多かったけど、機械化された青い恐竜がそこそこ強かったくらいかな」

機械化された青い恐竜……メタルグレイモン（ウィルス種）か？
それとも、メイルバードラモンとグレイモンがデジクロスした方か？

（※後者です。公式サイトに後者の紹介しかなかったことに嘆いた私です。……あれはメタルグレイモンなんかじゃない！！）

……今の誰の声だ？　まあ、その意見には俺も同意するが。

「じゃ、２人共、帰るぞ」

と言ったところで

『一真、転移魔法の反応だ』

ゼロが魔法を感知して俺に知らせる。

……また異世界の奴等でもくるのか？

「何処だ？　誰が転移してきたんだ？」

面倒な奴だったら帰らせるか。

と思っていたが、ゼロの言ったことはまるっきり逆のことだった。

『いや誰かが来たんじゃなくて……お前が転送されるんだ』

「……は？」

「んなっ！？」

「一真！？」

「カズ君！！」

と、その瞬間、足元に蒼い魔法陣が現れる。

なのはとシグナムが俺に手を伸ばしてくるが、手が届く前に俺は光に包まれどこかへ転送された。

◇◇◇◇◇

光が収まってから俺の目に入ったのは

「「ブレイカーーー！！！」」

「ギガントシュラーク！！！」

「シュツルムファルケン！！！」

3方向から襲い掛かる桜と金の砲撃、巨大な鎚、そして炎の矢だった。……いきなりかよ。

「ゼロ、テンセグレートシールド、セット」

『了解、テンセグレートシールド、セット』

俺は手首に銀色のブレスレット　を装備し、発生させた球状のバリア　―　テンセグレートシールドで全ての攻撃を防いだ。

攻撃を防いだことにより辺りが煙で包まれるが、次第に煙は晴れてゆく。

晴れた先に写ったのは、驚愕の表情を浮かべたなのは、フェイト、シグナム、ヴィータだった。

あいつ等が俺を見て驚いているってことは……ここ、俺のいた世界じゃないよなぁ。

「ったく、何処だここは？」

一体何処だかわからない俺はそう呟くしかなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

まったく、また煙か。何も見えないな。
いつの間にかバインドが解けているが……一体何が召喚されたんだ？
私の疑問に答えるように徐々に煙が晴れてゆく。私の前にいた者は……
「……って！　アルファモン！？」
全身を覆う黒い鎧にマントを靡かせたデジモン、ロイヤルナイツの１体、アルファモンがそこにいた。
アルファモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／デジタライズ・オブ・ソウル、聖剣グレイダルファー
デジタルワールドの聖なる守護者と呼ばれる『ロイヤルナイツ』の一体であり、オメガモンと対をなす蒼いマントを翻す聖騎士型デジモン。
過ぎた戦闘時間を瞬間的に戻す究極の力『Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ（アルファインフォース）』を持つ。（※番　外　編　草薙蒼の異世界放浪記を参照）
１３体の『ロイヤルナイツ』の中でも特殊な存在で、決して姿を現すことの無い“孤高の隠士”や、“空白の席”の主と呼ばれ、自らも『ロイヤルナイツ』の一員ながら、彼らを抑止する役割を持つといわれていた。
両手からは『デジモン文字』の刻まれた魔法陣を展開して多彩な攻撃と防御を行うことができる。
必殺技は魔法陣の中心に突き刺さった光の収束を抜き、敵を貫く『

聖剣グレイダルファー』と、背中の翼を広げて飛翔し、上空より巨大な魔方陣を展開して、異次元より伝説上のモンスターを召喚する『デジタライズ・オブ・ソウル』

画像：ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ１０．ｃｈａｎｎｅｌ．ｏｒ．ｊｐ／ｄｉｇｉｍｏｎ／ａｃｃｅｌ／ｅｖｏ／ｐｉｃ．ｐｈｐ３？ｔｙｐｅ＝ａ＆ａｍｐ；ｉｄ＝４＿３８１

（ＰＣサイトですので、携帯電話の方はご注意下さい。
何故か画像がデジモン公式サイトになかった）

上、説明乙。……だが、またアルファモンか？　一真の時もそうだったが……

なんて考えていると。

「その声……蒼か？」

アルファモンが振り返って私の方を見た。てかこの声って……

「お前ッ……か、一真！？」

一真の時と同じどころか本人だった。

一真は以前、パラレルゲートを使って行ったこの世界の並行世界の

住人だ。
バリアジャケットがアルファモンの姿そのもので、ほぼ全てのデジモンの技を使えるというとんでもないチートだ。

《お前も十分チートだろう》

《一真や歩とマリアに比べたらマシだろ!?》

（そう言う人に限ってマシじゃない人なんだけどね）

……作者、後でシメる。

「やっぱお前か。ってことは、ここはお前の世界か」

一真がテンセグレートシールドを解除してこっちに向き直る。
アルフォースブイドラモンのだな……ぎりぎりコピーが間に合った。使えるかどうかはともかく。

「で、なんで俺はお前の世界にいるんだ?」

「ああ、それは……」

私が一真の質問に答えようとしたところで

「ディバイン、バスター！！！」

高町が砲撃を咬ましてきた。・・・空気読め。

「ゼロ、イージスセット」

『了解、イージスセット』

一真がゼロに指示を出すと、一真の手に大きな円上に赤い逆三角形の模様が入った西洋風の盾『イージス』を装備して高町の砲撃を防いだ。

「ディバインバスターがこの程度。……この世界のなのははたいしたことないな。てか模擬戦でもしてたのか？」

一真は涼しい表情をしたまま私に聞く。

……この世界のって。お前のところの高町はどんだけなんだ。

「ま、そんなところだ。詳しい説明は……あいつ等を潰してからでいいか？」

前の方を向くと、隊長４人がいつの間にか一箇所に集まっており、

ハラオウン、シグナム、ヴィータが突撃してきていた。

「なら、一瞬で潰すか」

そう一真は呟くと、イージスを前に向け魔力を籠め始める。

「ハーケン…ッ！」

「飛竜…ッ！」

「ラケーテン…ッ！」

3人がそれぞれ必殺技を放とうとした瞬間に魔力のチャージが終わる。

「ファイナルエリシオン」

イージスの三角形模様が全て光り、一真は魔力の奔流を解き放つ。
ハラオウンとシグナムの攻撃は魔力に飲まれて掻き消されるが、一真の放った攻撃は衰えず3人は魔力の渦に飲み込まれる。

「「「うわぁぁぁぁぁぁあ！！！」」」

「フェイトちゃん！　ヴィータちゃ……キャアァァァ！！！」

ファイナルエリシオンは射線上にいた高町も巻き込み、４人全員を撃墜したのだった。

◇◇◇◇◇

「つまり、召喚魔法の詠唱間違って偶然俺が喚びだされたってことか？」

「まあそういうこt……ってイタタタタ！　アイアンクローは止めてくれ！！」

「一真さん、その辺に……」

「…チッ」

私達は模擬戦を終え、食堂で昼食を摂りながら一真に事情を説明していた。

ちなみに、ＦＷや他の局員達は一真が気になるようで、チラチラとこっち側を見ながら食事を摂っている。
隊長４人（負け犬達）はテーブルにつっぷしていながら何かぶつぶつと呟いていたが気にしない。

それはともかく、さっきの台詞のように、一真が呼び出された理由を詳しく説明した結果、アイアンクローを食らう羽目になった訳だ。
握力強いっての。

「痛っ～……まあ、間違いとはいえ召喚だからそのうち帰れるぞ」

「んなことしなくても、俺の世界の座標はわかってるから今すぐにでも帰れるんだけどな」

「どんだけチートなんだよ」

《「お前が言うな》」

「アオちゃんが言わないでください」

「ｏｒｚ」

リインフォースだけでなく一真やアリスにまでチートと言われた。
……さすがに面と向かって言われると傷つく。

『Ｄｏｎ't　ｗｏｒｒｙ　ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ. Ｅｖｅｎ　ａ　ｔｒａｎｓｍｉｇｒａｔｉｏｎ　ｐｅｒｓｏｎ　ｈａｖｉｎｇ　ｔ

ｈｅ　ｃｈｅａｔ　ａｂｉｌｉｔｙ　ｅｘｉｓｔｓ　ａ　ｌｏｔ』
【気にしないでください、マスター。チート能力を持った転生者だって数多く存在するのですから】

八雲……慰めてくれるのは嬉しいが、メタな発言は控えろよ。

『Ｉ　ｔａｋｅ　ｐｒｏｐｅｒ　ｍｅａｓｕｒｅｓ』
【善処します】

「ん。ならいい」

そう言って私は食事を再開する。ちなみに私は醤油ラーメン。アリスはうどん。一真は焼きそばだ。
……そこ、麺類ばっかりじゃんとか言わない。

『次のニュースです。今朝ミッドチルダ郊外に現れた謎の生物ですが、未だ眠り続けている様子です』

食事を終えた頃、食堂の壁に映し出されていたモニターからとあるニュースが流れてきた。

「謎の生物？」

「眠ってる？」

一真も私も首を傾げる。

「あ。朝、ニュースで言ってました。時計を持った変な生き物が現れたって」

アリスが説明してくれる。そんなことが今朝あったのか。……って

「時計？」

「はい、時計です」

……なんか嫌な予感がしてならないんだが。

『では、現場に繋ぎます。現場のアッシュフォードさん？』

『は～い。こちら現場のミレイ・アッシュフォードで～す』

モニターには金髪の女性アナウンサーと現場の様子が映し出されていた。

……あのアナウンサーどっかで見たことあるような気がするんだが。

（コード〇アスで調べて下さい）

『現在、地上の陸士部隊の方々が監視している謎の生物ですが、かわいらしい表情でぐっすりと眠って……』

と言いかけた時

『ジリリリリリリリリリ！！！』

『えっ？』

「「「　？　」」」

画面から突然、目覚まし時計の鳴る音が響く。全員突然のことに驚いて首を傾げているが、私と一真は顔を見合わせる。

「なあ、一真。まさかとは思うが……」

「そのまさか。だろうな」

私と一真の考えは同じだったようだ。

「あ、あの、２人共何を言ってるんですか？」

アリスが尋ねるが私はそれに答えず、空になった器が乗ったトレーを持って立ち上がる。
同時に一真もトレーを持って立ち上がり、食器を返却しに向かう。

『た、大変です！　謎の生物が突然目覚め、姿を変えて暴れだｓ…
…ザーーーーーーー！！！』

アナウンサーが最後まで言い終える前に、モニターは砂嵐に覆われ何も映らなくなった。
映らなくなる直前に謎の生物の姿が見えたが予想通りだったな。

「んじゃ、一真、アリス、行くか」

「面倒なんだけどな。……並行世界とは言え、地上には知り合いがいるからな」

何気なく言ったのだが、一真も来てくれるのか。「メンドイ」とか言われて断られるかと思ったのだが。

「あ、あの行くってまさかあそこに！？　何しに行くっていうんですか！？」

何をしに、か。一言で言えば――――――

「――――魔王退治だな」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、現場の方では

「でぇえええええい！！！」

「こんのぉおおおお！！！」

イザークがハルバート型のアームドデバイス『デュエル』を振るい、ハイネが右腕のガントレット型デバイス『イグナイテッド』に装備されている４つのバルカンを連射する。

それにより、２人は自分に向かってきた謎の生物の鎖による攻撃を弾く。

「撃て！！　撃ち続けろ！！」

「「了解！！」」

黒髪の青年指示に従い赤髪の男勝りの女性とドレッドヘアーの男性が、青年と共に１８０ｍｍキャノン砲やマシンガン・ミサイルランチャーの形状のデバイスを用いて魔力弾（デバイスの見た目はアレですが実弾ではありません）を放ち続け、イザークやハイネのように鎖を弾く。

他にも周りでは数多くの地上部隊の隊員達が射撃魔法や斬撃、打撃攻撃を用いて謎の生物から一斉に放たれた鎖を弾いている。

「全員、足を狙って！　バランスを崩させるんだ！！」

そんな中でエイジスとユニゾンした烈は全体の指揮を執っていた。
現在この場に展開している部隊は2部隊いるのだが、運悪く謎の生物が目覚めた時に指揮官や部隊長達は会議中であったり地上本部への報告や放送局への対応に回っていたため、部隊の指揮官が不足しているのである。
そのため、小隊指揮権を持つ烈と黒髪の青年　―　シロー・アマダ三尉の2人が臨時で全体の指揮を執っているのである。

「フォトンブレイド、エクスキューションシフト！！」

『雷撃付加です！』

烈は指揮を執りながら自身も攻撃に加わる。

「ファイヤ！！」

烈はエイジスによる雷が付加された無数の魔力刀を謎の生物の左足目掛けて発射する。
全ての魔力刀は左足に命中するが、謎の生物は全く効いていないようで動じていない。

『はわわ！　全然効いてないです！！』

「くっ！　やっぱり非殺傷を解除しないと無理だ！！」

「今隊長が本部に掛け合っている！　それまで耐えるんだ！！」

烈の悔しそうな言葉にアスランが答え、２人とも謎の生物を睨み付ける。

謎の生物の姿、全身は何本もの鎖が巻かれた真っ黒な巨体、金色の角が生えたヤギのような顔、鋭利な爪の生えた両手足に悪魔のような翼。
それはデシタルワールドの七大魔王の１体、ベルフェモンだった。

ベルフェモン　レイジモード、世代／究極体、属性／ウイルス種、種族／魔王型、必殺技／ランブランツス、ギフトオブタークネス
千年に一度の周期で眠りから目覚める“怠惰”な魔王型デジモン。
七第魔王の１体。
“怒りの権化”であるこのデジモンは、視界に入るもの全てを破壊し、葬られたデジモンのデータはデジタマに還元されることなくダークエリアの中心に送られ、魔王デジモンの餌となる。
その咆哮ひとつで完全体以下のデジモンは跡形もなくデータ分解され即死し、たとえ究極体デジモンであっても致命的なダメージを受けるという。
（※さすがに咆哮の設定そのものだと酷いことになるので、ＡＡＡランク以下の魔導師が気絶するくらいだと思って下さい）
必殺技は、体に巻きついた鎖から発する黒い炎で攻撃する『ランプランツス』と、地獄の炎をまとった爪から繰り出す『ギフトオブダークネス』

画像：ｈｔｔｐ：／／ｉｍｇｓｅａｒｃｈ．ｍｏｂｉｌｅ．ｙａｈ

ｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｄｅｔａｉｌ？ｐ＝％８３ｘ％８３％８Ｂ％８３ｔ％８３Ｆ％８３％８２％８３％９３＆ａｍｐ；ｉｂ＝０

（同じくＰＣです。何故か画像が……以下略）

「草薙曹長！　全員で奴を足止めする！　片方の足を狙うように君の隊の隊員達に指示を！！」

「了解です！　アマダ三尉！！　みんな、一斉に――――ッ」

烈が指示を出そうとしたその時だった。

「■■■■■■■■■■ーーー！！！！！！」

突如ベルフェモンが吠えた。

「ぐぁっ！」

「なんだ……これは……」

「が……ぁ……」

ベルフェモンの声にならない咆哮を聞いて、応戦している隊員達は

苦しそうにして次々に倒れ気絶してゆく。

『ぁ……』

エイジスも恐怖で気を失ってしまい、強制的にユニゾンが解除される。

「グゥゥ！！　……エイ……アスラン……ハイネ……みんな！」

烈は気絶こそしなかったもののかなり苦しんでいる。
呼吸は荒く、息苦しそうに胸を押さえてその場に膝を着いてしまっている。

「■■■■■■■■■■！！！」

そんな状態の烈にベルフェモンは叫びながら炎を纏った爪を振り下ろす。

「（避けきれない……死ぬ……？）」

ギフトオブダークネスを繰り出され、烈が自分の死を感じた。

その時だった。

「「ガイアッ！　フォース！！」」

烈の後方から一組の男女の叫びと共に、巨大な炎の球体と赤黒いエネルギー球が飛来しベルフェモンの顔面に直撃する。

「■■■■■■■ーーー！！！？」

ズドォォォォォォォォン！！！

２つの球体を喰らったベルフェモンは苦しみの叫び声を上げながら

仰向けに倒れる。

烈は後ろを振り返りベルフェモンに攻撃した人物を見上げる。

見上げた先にいたのは――――

「2人揃ってガイアフォースか」

「ガイアフォースだが、お前のはウォーグレイモンので、私のはブラックウォーグレイモンのだぞ」

アルファモンの姿のバリアジャケットを纏った一真と、アリステラとユニゾンした蒼だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「しっかし、何でベルフェモンがいるんだよ」

「さあな。可能性を挙げるとすれば、本局の奴等が違法研究で生み出したんじゃないのか？」

一真の疑問に私は素直に思ったことを答える。

「この世界の管理局も腐ってんのか？」

「まだ深いところまで調べ終えていないから、何とも言えないな。……ま、内容次第にもよるが、腐っていたら……潰すとするか」

そう言って、私はクラヴィスとグリモワールを私の内から取り出す。八雲はバリアジャケットの展開だけだ。前にアーマゲモンと戦った時はデバイス攻撃が効かなかったからな。

私がグリモワールを解錠するのとベルフェモンが起き上がるのは同時だった。

「■■■■■■■■ーーー！！！！！！」

ベルフェモンは私達に怒り狂った叫びを放ってくる。

「なるほど。そこら辺の局員はベルフェモンの咆哮を喰らったから倒れてるのか。1人だけは倒れてないみたいだが」

「1人だけ？」

それを聞いて下の方を見ると、エイジスを抱えた兄さんがこっちを見上げていた。

「ああ、兄さんか。ま、兄さんには精神干渉があまり効かないからな。

兄さんの実力もあるけど、気絶してないのはそれが理由だろうな」

「は？　それってどういうことだ？」

おっと。つい口が滑った。

「説明してる暇は無い。来るぞ！！」

ベルフェモンは空中に浮かぶ私達に鎖を飛ばしてきた。私は右に一真は左に散開して鎖を躱す。

「アリス！　高速詠唱、6の7番！！」

『はい！　集え、熾天使（しきてんし）の光。悪を夢に帰（き）す7つの光よ！』

「第6章　7項　『熾天使の裁き＜セブンズヘブンズ＞』！！」

アリスの高速詠唱により通常よりも速く技を発動させる。

私の背後に現れた7つの高熱光球がベルフェモンに降り注ぐ。

「■■■■■！！！」

『熾天使の裁き＜セブンズヘブンズ＞』が全て直撃し、ベルフェモンはうめき声を挙げ苦しむ。

「ゼロ、ゲイルクロー、セット」

『了解、ゲイルクロー、セット』

一方、一真は両腕に蒼いクローを装備してベルフェモンの背後から攻撃を仕掛けていた。

「ダブルクレセントミラージュ！！」

一真は両腕のクローから三日月型の衝撃波を放ち、ベルフェモンの

左の翼をボロボロに裂く。ミラージュガオガモンの技か。
翼を切られたベルフェモンは一真の方を向き、鎖に黒い炎を纏う。

「■■■■■■■（ランブランツス）！！！」

黒い炎をベルフェモンは放つが、一真はゲイルクローを消し、難無く黒い炎を避けながらベルフェモンの目の前に迫る。

「フラッシュバンチョーパンチ！！」

一真は全力を篭めた拳を振りかぶってベルフェモンの顔面を殴る。
拳がモロに入ったベルフェモンはふらついてバランスを崩しかける。
チャンス！

「放れろ一真！！」

私は左手を翳して魔法陣を展開し、八雲を起動して右手に漆式『撃』を持つ。
アームドユニゾンに切り替えてる暇はないからな。威力は劣るかもしれないが、八雲で撃つ！

一真は私の言葉を聞いてベルフェモンから放れ、右腕に銀色のブラ

スターを装備する。

お。今度は本当に同じ技だな。

『解き放なて、闇の一撃。その力は暴食の魔王！』

アリスが詠唱を唱え終えると魔法陣が光輝き、私と一真は同時に破壊の波動を放つ。

「第３章　１３項　『爆ぜる暴食＜カオスフレア＞！！』」

「カオスフレア！！」

放たれた紫色の魔力の波動は一真の方がベルフェモンの腹部に当たり、私のが左腕に当たる。

「■■■■■■■■！！？」

ドシィィィィィィィン！！！

今の攻撃でベルフェモンは完全に体制を崩し俯せに倒れる。

ある程度ダメージは与えた。そろそろトドメを挿すか。

「一真、そろそろキメるぞ。ってそういえばお前、シャイングレイモン　バーストモードの力使えるのか？」

「バーストモードに成るって意味だったら、俺のフルドライブと大差ないから意味がない。
技のことを言ってるなら使えるが……ってまさかお前」

「ああ。原作通りに倒そうと思ってな」

原作って何？　と思った読者の方はデジモンセイバーズを見てくれ。

「わかった。さっさとキメるぞ」

「オーケー」

私は倒れているベルフェモンの右側に一真は左側に移動し、最後の一撃を放つために胸の前で両手を合わせる。

「■■ッ！　■■■■ーーッ！！」

ベルフェモンは悲鳴のような叫び声を挙げながら立ち上がる。

……今楽にしてやる。

「輝く太陽の光よ、全てを焼き消す焔(ほむら)となりて、闇の楔を断ち切る剣(つるぎ)となれ」

この一撃はアリスに高速詠唱は頼まず私が詠唱を唱える。
この技3章なのに詠唱が長いけどな。

「限界を超えし光竜の力よ、魔王を滅ぼす一撃を!!」

詠唱を唱え終えると、私の手の間には高密度の炎のエネルギー球が出来ていた。
一真の手にもそれはできており、私達は互いに頷くと手を一旦腰の辺りまで引き、一気に両手を前に突き出して最後の一撃を撃ち放つ。

「「ファイナルシャイニングバースト!!!」」

放たれた2つの一撃はベルフェモンに直撃すると大爆発を起こし、ベルフェモンを灼熱の炎で包みこんだ。

「■■■■■■■ーーーー!!!!」

炎に包まれた断末魔の叫びを上げ消滅した。

◇◇◇◇◇

「じゃ、ベルフェモンのデジタマのこと頼むぞ」

「ああ、わかった」

消滅したベルフェモンはデジタマに還っていた。ああ、デジタマってのはデジモンが生まれるタマゴのことな。デジモンは死ぬとデジタマに還り再び生まれてくりのである。
つまり再びベルフェモンが生まれてくることも有り得る訳で、管理局がベルフェモンを利用しようとする可能性も無い訳ではないのである。
という訳で、ベルフェモンのデジタマは一真に任せることにしたのだ。

「管理局の奴等が来ると面倒だ。兄さんには告げ口しないように頼

んでおく」

「ありがとな。また機会があったらまた会えるかもな」

「ああ、そうだな」

「また会いましょうね一真さん、ゼロさん」

『ああ。そうだな』

「じゃあな、蒼、アリス。ゼロ、座標設定、転移」

そう言って、一真とゼロは元の世界へと帰っていった。

「さて、面倒な奴等が来る前に私達も帰るとするか」

「ですね」

私はアリスを肩に乗せ、蒼い翼を広げて六課へと飛ぶのであった。

番　外　編　αの聖騎士召喚、怠惰の魔王現る！！（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

烈（通常）
「最初からですがデバイスの補足説明です」

イザークのデバイス
名称：『デュエル』
武装：ハルバート・仕込みビームサーベル×２
Ｔｙｐｅ：アームド
形状：Ｄｅｓｔｉｎｙのスラッシュザクファントムのビームアックス

ハイネのデバイス
名称：『イグナイテッド』
武装：ガントレッド・バルカン・ウィップ
Ｔｙｐｅ：ストレージ
形状：Ｄｅｓｔｉｎｙのグフイグナイテッドの右腕（鞭のスレイヤーウィップとバルカンのドラウプニル）

烈（通常）
「他に出てきたアマダ三尉達は０８小隊ネタです」

蒼
「そして今回はゲストがいる。今回のコラボの相手、ライ様の作品『魔法少女リリカルなのは～黒い聖騎士～』より、御剣一真だ」

一真
「御剣一真だ。……召喚に失敗して俺を呼び出すって何でだよ」

蒼
「わからん!!」

烈（通常）／一真
「「威張って言うな!!」」

蒼
「だが断る！　今回はバルディッシュ様より、メダシャリバー、タカカンドロイド×５０、タコカンドロイド×５０、バッタカンドロイド×５０を頂いた」

烈（通常）
「仮面ライダー０００のかぁ」

一真
「ふっ、その程度か。ウチなんて惑星が贈られて来たことがあるぞ。今はその惑星に住んでいる」

烈（通常）
「惑星って……」

蒼
「ウチの作者はデジビートルとか贈っていたな」

一真
「前に貰った惑星を調査した時に使った。貰い物のゾイドがたくさ

んいるからな」

烈（通常）
「凄い物が贈られ過ぎなような（汗」

蒼
「そんな一真に今回はこれを贈る」

（　。　ω　。）つ『別荘増築の設計図&その素材』

一真
「設計図って、まあ家族が増えたから増築はしなきゃならないって思ってたが」

烈（通常）
「一真の家って大家族なの？」

一真
「２０人くらいか？」

蒼
「多過ぎだろ」

一真
「俺は気にしてない。じゃそろそろ帰るわ」

蒼
「ああ、またな」

一真がログアウトしました

烈（通常）
「じゃあこの辺で終わりにしようか。次回は本編更新です。……また更新が遅れるかもしれませんが。『受験勉強したくねぇ』って作者が呟いてた」

蒼
「作者はどうでもいいがな。では読者の方々、次回もよろしく頼む」

第４４話　預言（前書き）

先日『不可思議探偵団！！』という番組を見ていたら、人工心臓の話が出てきていたので補足説明を。

その番組で出てきたのは『細胞シート』というものが複数重ねられていて、それが心臓の鼓動のように動くことから人工心臓が創れるのではないかと研究されているものでした。

それに対し、この作品での人工心臓とは“一部分、若しくは半分が機械で創られたモノが組み込まれた心臓”のことをいいます。

まあ、詳しく話すとネタバレなのでここらへんにしておきますが。

それにしても、医学の発展は凄いですね。

第４４話　預言

烈とマリエルが現場調査に出発した頃。

蒼にぼろくそ言われたはやてとフェイト、そしてなのはは聖王教会の騎士　―　カリム・グラシアの執務室に来ていた。

現在この部屋には六課の隊長三人とカリム、そしてフェイトの兄であり本局提督のクロノ・ハラオウンが揃っていた。

「さて、昨日の動きについてのまとめと、あらためて機動六課設立の裏表について。それから、今後の話や」

そんな中ではやてが口を切る。

今回この五人がこの部屋に集まったのは、カリムへの昨日の件の報告。そしてなのはとフェイトに機動六課設立の理由の真実を話すためであった。

カリムはリモコンを操作してカーテンを閉め、外から部屋の中が見えないようにする。

カーテンが閉まるのを確認するとクロノが話し始めた。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア『レリック』の対策と独立性の高い小数部隊の実験例」

話しながらクロノはコンソールを操作し、3枚の映像写真を写し出す。

「知っての通り、六課の後継人は僕と騎士カリム。それから僕とフェイトの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

映像写真は左から順に、シスコンKY、味覚が異常の甘党提督、若作りの年増である。

「……今すごく不愉快な気持ちになったのですが」

「騎士カリムもですか？　僕もです」

二人は天井を睨みつけるが、そんなことをやっても無駄であるｗｗｗ

はやて達に冷たい視線で見られたため、ゴホンと咳ばらいをしてクロノは話を再開する。

「それに加えて非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め協力の約束をしてくれている」

三人の映像写真が裏返り三人の老人老女の写真が写し出される。

左から順に、長く白い髭を蓄えた老人、武装隊栄誉元帥　―　ラルゴ・キール。

薄い金髪で黒の執務官制服を着た老人、法務顧問相談役　―　レオーネ・フィルス。
最後に首元に黄色のリボンを付けた老婆、本局統幕議長　―　ミゼット・クローベル。
管理局黎明期の功績者として「伝説の三提督」と呼ばれている三人である。

意外な人物の名前が挙がりなのはとフェイトは驚く。

「その理由は私の能力と関係があります」

そう言ってカリムは立ち上がって席から離れ、古びた色の札の束を取り出す。

「私の能力、『預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）』」

カリムが呟くと札の束が光り出し、札の一枚一枚が束から浮き上がってカリムを中心にして回り始める。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来。それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます。
２つの月の魔力が上手く揃わないと発動できませんから、頁（ページ）の作成は年に一度しかできません」

そう説明すると、光る札の2枚がなのはとフェイトの元へと飛んでゆき、光の中から黒い文字が表れる。

「預言の中味も古代ベルカ語で解釈によって意味が変わることもある難解な文章」

そう言われなのはとフェイトは表れた古代ベルカ文字を読んでみるが、さっぱり解らず二人共首を横に振る。
その後、2枚の札は元の場所に戻り再びカリムの周囲を回り始める。

「世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度。つまりはあまり便利な能力ではないのですが」

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの預言には目を通す。信用するかどうかは別にして有識者による予想情報の一つとしてな」

クロノが説明を付け加える。

「ちなみに地上部隊はこの預言がお嫌いや。実質のトップがこの手のレアスキルがお嫌いやからな」

はやてが「やれやれ」といった表情でぼやく。

「レジアス・ゲイズ中将、だね」

なのはも不満げに呟く。

だがよく考えれば、これは預言が嫌いだという以前の問題である。

組織はそれぞれ設立した目的や理念がありそれを元に行動する。地上部隊は地上、つまりミッドを護るための部隊である。

だが、聖王教会は古代ベルカを崇める宗教組織。地上部隊とはまったくの別組織である。

地上部隊は別組織である聖王教会に従う謂われは無く、根拠も無い預言を信じる必要性はまったく言っていいほど無い。

なにより組織の宗教的なものを関わらせれば、組織の理念を狂わせることが起きてもおかしくはない。

故に組織は普通ならば、宗教団体と密接な関係を持つべきではないのである。

だが、本局はカリムの預言に影響され、カリム自身も管理局内部で少将の階級を持っている。

仮にも司法や立法に関わる組織だというのに、宗教組織と癒着を持つのは大問題だ。

実際にレジアス中将が預言を――嫌、聖王教会を信用しない理由。

それは、預言そのものが不確かなものであること。本局と聖王教会が深い癒着を持っていること。この2つが大きいであろう。

嫌いだという理由ははやての独断と偏見にすぎないのである。しかしそれはこの場にいる全員が判っていない。なぜなら、全員が地上

の事情を知ろうとしない本局側の人間だからである。
知ろうともしない癖に文句しか言わず予算を無理矢理吸い上げて使っているはやて達機動六課や本局は、前回の烈の説明にもあったように地上部隊から嫌われているのである。

「そんな騎士カリムの預言能力に数年前から少しずつある事件が書き出されている」

クロノがそう言ってカリムを見ると、カリムは軽く頷き1枚の札に書かれた文字を読み上げる。

「旧い結晶と無限の欲望が集い交わる地
死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る
使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち
それを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け落ちる」

「ッ！　それって」

「ま、まさか！？」

静かに預言の内容を聞いていたなのはやフェイトは詩文の最後の部分を聞き驚き声を挙げる。

「ロストロギアをきっかけに始まる管理局地上本部壊滅。そして……管理局システムの崩壊」

「「ッ！？」」

カリムから告げられた言葉は二人の思っていた最悪の内容だった。

「……ですが、預言はそれだけではないんです」

「「「えっ？」」」

「どういうことですか、騎士カリム？　以前知らされた預言の内容は今読み上げたものだけだったはずですが」

「ええ。預言書の作成は年に一度だけなはずなのですが、今朝突然新たな預言が表れたのです」

クロノの疑問にカリムは険しい表情で別の札を読み始める。

「法の塔の崩れし時、失われし風は吹き抜け、森羅の紅闇は蘇る

四つの意志は一つに交わり、虐殺の堕天使は舞い降りる

紅闇と死神は互いの魂を刈り、地獄の処女は人形の魂を喰らう

彼の翼が墜ちる時、法の船は地へ堕ちゆく」

ゆっくりと詩文を述べるカリムの声をみんな集中して聞いた。
新たな預言を聞き終えた四人は一斉に首を傾げる。

「……森羅の紅闇？」

「四つの意志？」

「堕天使？」

クロノ、なのは、フェイトはそれぞれ気になったキーワードを挙げカリムに視線を向けるが、カリムもわからないという様子で首を横に振る。

「おそらく地上本部壊滅と同時に何かが起きる、ということではないかと思います。何が起きるのかはまったく検討も尽きませんが」

それを聞いて三人はがっかりして肩を落とす。しかし、はやてだけは黙って考え込んでいた。

「（失われし風……まさかっ！？　……いや、そんなことあるわけがない）」

「はやてちゃんどうしたの？」

険しい表情したはやてを心配しなのはが声を掛ける。

「えっ？　ああ、いや、なんでもあらへんよ」

はやては笑ってごまかす。

「新しい預言はともかく、問題は前半の預言のことです」

「ゲイズ中将は預言そのものを信用しておられない。特別な対策は採らないそうだ。
それに無理に介入すれば、内政干渉や強制介入とされていさかいの種になってしまう」

「だから裏技気味でも地上で自由に動かせる部隊が必要やった。レリック事件で事が済めば良し。大きな事態に繋がっていくようら最前線で事態の推移を見守る」

クロノやはやての説明により、六課設立の理由が徐々に明らかになってゆく。

「そして地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで前線で頑張る、だね」

なのはも段々情況が理解できたようである。

「それが六課の意義や」

「あらためて、聖王教会教会騎士団の騎士、カリム・グラシアがお願いいたします。
　華々しくはなく危険も伴う任務ですが、協力をしていただけますか？」

カリムがなのはとフェイトに頭を下げて頼む。

「非才の身ですが、全力にて」

「承ります」

なのはとフェイトは強い決意をした目でカリムの頼みに応えた。

「ありがとうございます！」

カリムは再び二人に頭を下げた。

……ちょうどその時、開いた部屋の窓から何かが跳び出していったことには誰も気付かなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ふ～ん、なるほど。そんな裏があったとはな」

私は自室で八神達の話を聞いていた。……どうやって、だと？　盗聴に決まっているだろう。

《相変わらずイイ性格をしているな、お前は》

「褒めても何も出ないぞ」

《褒めてない》

そんな他愛もないことを言いながら、私は手に持っていたバッタの形をした通信機を投げ上げる。

……盗聴器は持ってないんだ。だがこちらから声を出さなければ盗

聴など通信機で充分だ。
通信機は空中で空き缶の形に変形し私の手の平に落ちてきた。

コンコン！

落ちてきた缶を仕舞うと、軽く窓を叩く音が聞こえた。私は窓を開けて窓を叩いたものを部屋の中に入れる。
それは赤と銀色で鷹の形をした小さなロボットだった。背中には私が今仕舞ったバッタ型通信機が乗っている。

「ご苦労さん。戻っていいぞ」

鷹型ロボットは私の言葉に頷くと、バッタ型通信機と共に缶の形になって手の平に落ちてきた。

……ん？　そのロボット達は何だ、だと？　この間のバイク同様、グリモワールを開いた途端に出てきた物だ。
……ホント最近は何かといろいろな物が出てくる。一体どうなってるんだが。戦闘中に出てきたらどうするんだ。

まあ、それはさておき。

「さて今聞いた預言とやらだが、リインフォースお前はどう思う？」

脳内会話ではなく直接リインフォースに話し掛ける。部屋には盗聴防止の結界を張ってあるから問題ない。

《珍しいな。お前、占いとか信じるような奴だったか？》

「別に。だが、あの預言が現実になれば利用価値があるかもしれんからな」

管理局を潰すために、敢えて預言が成就するように行動するとか、な。

《そうか。……騎士カリムとやらの訳が正しいのなら、預言の解釈は間違っているとは言えないな》

さすが古代ベルカ生まれ。歳のｋ――

《蒼、今何か思わなかったか？》

「うんにゃ。何も」

察しの良い奴め。危ないなおい。

「まあ、ってことは、地上本部が襲撃され管理局が崩壊する可能性がある、と。なら新たな預言とやらは？」

《不確かなキーワードが多すぎる。『死神』はお前の思っていることと同じ可能性が高いがな》

「……石凪か」

紅月の映像記録に映っていたあの巨大な大鎌（デスサイズ）、石凪に間違いない。だが何故奴がこの世界にいる？　私と兄さ……いや、私とお兄ちゃん以外の“暴力の世界”の人間が。

《奴がこの世界にいるのは私達と同じなんじゃないか？》

「私達と……と言うとあの光のことか？」

私達がこの世界に来たのは、あの不思議な光に飲み込まれたからだが、あの光が石凪もこの世界に送ったというのか？

《ああ。これはあくまで私の推測でしかないが、誰かがあの光を操っているのかもしれない》

「そんな何度も人を平行世界に移動させるような方法があるのか？　パラレルゲートなら平行世界に行くことは可能だがあれは行き先がランダムだし、この世界の技術じゃ平行世界への移動は不可能だろう」

ここで説明するが、グリモワールの技の一つであるパラレルゲート

を使った場合の行き先は完全にランダムだ。どんな世界に転移してどんな場所に出るのか全てだ。ただ、一度行った異世界の座標を記録していれば再びその異世界に行くことはできる。でなければ元の世界に戻ることもできないからな。

閑話休題。

《ロストロギアならどうだ？》

「えっ？」

《もしも次元の扉を自由に操ることができるロストロギアが存在すれば？
　次元の海には無数の世界が存在する。無いと断定することはできない》

「……ふむ、確かに」

しかし、もしそうだったとしてもわからない。私達や石凪をこの世界に送る理由が。

誰かが裏で手を引いているとしても、一体全体何が目的だ？　何の意味がある？　何のメリットがある？

……考えてもわからないものはわからないか。

「ま、今は深いところまで考えるのは止そう。いろいろと調べたり

してて頭が疲れてきてるんだ」

そう言って、私はベットにゴロンと横になる。

《寝るのか？》

「まあな。起こすなよ」

わかった。と言ってリインフォースは黙った。

さて、ぐっすり眠るとするか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ＰＭ１８：００

１０８部隊隊長室

「現場検証も合わせてあらためて六課からデータを頂きました」

現場検証から戻ってきた烈、ギンガ、エイジス、マリエルはゲンヤに報告していた。
電気を消した暗い部屋のモニターにはディエチ、クアットロ、セイン、トーレの写真が映し出されている。

「この魔法陣状のテンプレート、使ってる動力反応、これまでのものとは桁違いに高精度です」

「間違いなさそうだな」

「はい。この娘達全員、最新技術で創りだされた戦闘機人です」

マリエルの言葉にゲンヤは考え込むように黙り込む。

「それと3番の戦闘機人ですが、以前違法研究所で交戦した相手でした」

「確認された４人の番号は3番、４番、６番、１０番。最低でも戦闘機人は１０人はいるみたいです」

「そうか……」

ギンガの隣にいた烈と烈の肩に座ったエイジスが説明を付け加える。

「マリーさんの解析データを六課とすり合わせないといけないのですが」

ゲンヤが黙ってしまったので四人とも困ってしまったが、沈黙を続ける訳にもいかないのでギンガが話を進める。

「通信で済ます話じゃねぇな。俺が出向くとすらぁ」

「はい」

ギンガは頷いてモニターを消し明かりを就ける。

「八神二佐が戻られるのは8時過ぎだそうです」

「マリエル技官はお忙しいかい？」

「私もご一緒します。最近スバルの顔も見てないですし」

「ありがとよ。じゃあギンガとエイジス、マリエル技官は時間まで適当にやっててくれ」

ゲンヤは時間を潰すようにというが、ギンガとマリエルは烈の名前が挙がらないことに疑問を抱く。

「あの、ナカジマ三佐。烈君は？」

「ああ、烈には話さなきゃならないことがあるからな。それが終わってからだ」

烈はゲンヤの言った言葉の意味がわかったらしく、そうですと言って頷く。

マリエルは半場納得いかなかったが、渋々引き下がろうとする。

しかし――――

「……話って、母さんについてですか？」

「「「ッ！？」」」

「　？　」

ギンガが話につかみ掛かった。図星を突かれたゲンヤと烈は僅かながらも動揺してしまう。エイジスだけは話がわからないようで首を傾げていたが。

「ギンガ、それってどういうこと？」

「昨日の子、ルーテシアって子はお母さんが生きているって言ってました」

「ええっ！！？」

ギンガの言葉にマリエルは驚きを隠せずに思わず声を上げる。

「しかも、烈はそのことを前から知っているみたいでした」

ギンガは烈の方を向くが、烈は気まずそうにギンガから目を逸らそうとする。

「父さん、烈。二人で何か隠していませんか？」

ギンガは真剣な目付きでゲンヤと烈を見る。
数秒間沈黙が続くが、ゲンヤがハァと諦めたかのようにため息をつく。

「烈、ギンガにはバレないようにしとけつったろ」

「……すみません」

「やっぱり何か隠し事をしていたんですね」

「……ああ。クイントについてな」

ゲンヤは腕を組んで真剣な表情で答える。

「……教えて、父さん。母さんは生きてるの？　どうしているの！？」

ギンガは感情が高まりゲンヤに詰め寄ろうとするが、烈が立ち塞がってそれを抑える。

「……烈」

「ギンガ……後悔しない？」

「えっ？」

「知ったら後悔するかもしれない。ショックを受けるかもしれない。それでも聞きたい？」

烈はさっきのように気まずそうにはせず、しっかりとギンガの目を見つめている。

ギンガは烈が真剣だということに気付くが、真実を知りたい気持ちは強くギンガは力強よく頷く。

「知りたい。だから、教えて！」

「……わかった。ゲンヤさんいいですか？」

「……仕方ねぇな。マリエル技官も聞いてくれてかまわねぇが、二人共誰にも言うんじゃねぇぞ」

「「は、はい！」」

「エイもうっかりアリスに話したりしないようにね」

「ひゃ、ひゃい！　わ、わかりまみた！！」

噛んでしまうエイジスにこの場にいる全員がクスッと笑ってしまう。

「さて、話そうか。ゲンヤさんと俺がこの2年と半年で調べたことを」

そう言って、烈は語り始めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

烈と父さんの話を聞いた後、私達は車で六課に向かっていた。
私はミニサイズのエイと一緒に助手席に座っていて、烈は運転している。後部座席には父さんとマリーさんが座っている。

……烈と父さんの話の内容は信じられなかった。
母さんは生きている。……人造魔導師の研究素体として。
それを聞いて母さんが生きていたことの嬉しさと、母さんをそんな風にしたスカリェッティに怒りが込み上げてきた。

烈が言うには母さんだけでなく、母さんの同僚のメガーヌさんも同じように研究素体の扱いを受けているかもしれないみたい。

そして多分、スカリェッティはお母さんとメガーヌさんを人質に捕って、母さんの隊のゼスト隊長と昨日のルーテシアって子を利用してる。

許せない。あんな小さな子まで利用するなんて。

……絶対に母さん助ける。そしてスカリェッティは絶対逮捕する。

そう私は決意するのだった。

第４４話　預言（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

烈（通常）
「今回の預言のキーワードが誰や何を指すのかわかった方はいるでしょうか？」

リインフォース
「わかっても作者は答えないだろうがな」

蒼
「今回はバルディッシュ様より、ライオンのコアメダルを頂いた。今回使ったタカカンドロイドとバッタカンドロイドも、以前バルディッシュ様から頂いたものだ」

アリステラ
「盗聴に使うのは通信機の使い方として間違ってますけどね」

リインフォース
「確かにな。もっとマシな方法はなかったのか？」

蒼
「ん？　あるぞ。コピーしたティアナのオプティックハイドを使って姿を消すなり、アリスの『雪星の鏡』で光を屈折させたりして姿を隠すとかな」

烈（通常）
「じゃあなんでそうしなかったの？」

蒼
「移動するのが面倒だった」

烈／リイン／アリス
「「それだけッ！？Σ（ー□ー；）！？」」

蒼
「ああ。それだけだ」

リインフォース
「ニートかお前は」

蒼
「戦闘分野の仕事はしているからニートではない。ま、書類仕事は契約外だからやっていないがな」

烈（通常）
「…ならいいけどね。さて、次回は俺とギンガが六課に出向。模擬戦で暴力幼女を叩き潰すつもりです」

アリステラ
「兄様笑顔なのに言ってることが物騒です！！」

リインフォース
「（……烈の奴、ストレスでも溜まっているのか？）」

烈（通常？）
「それでは次回もよろしくお願いします」

アリステラ
「だからその笑顔止めて下さい！　恐いです！！（涙目）」

第４５話　出向、機動六課。暴力幼女をブッ潰せ！！（前書き）

つくづく思う、私は話の前置きが長いなぁと。

血液型はＯ型なのに、Ａ型みたいな正確なんで、細かい部分書いたり説明したりしないといけない気がするんです。

だから文章が長くなって更新が遅いってのもあるんですが。

それでは今回は烈ＶＳヴィータです。どうぞ！

第４５話　出向、機動六課。暴力幼女をブッ潰せ！！

「さて、今日の朝練の前に一つ連絡事項です」

この間の地下水路での戦闘から数日後、俺とエイとギンガは今六課に来ていた。

「陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹と草薙烈陸曹長。そして草薙曹長のユニゾンデバイス、エイジス二等陸士が今日からしばらく六課へ出向となります」

その訳は今のなのはさんの説明のように、俺達が六課に出向になったからだ。戦闘機人に関する事件の協力という形で。

はやてさんは１０８部隊が六課に全面協力してほしいと言ってきたけれど、ゲンヤさんははやてさんを甘やかすつもりはなく俺達３人だけの出向となった。

しかも戦闘機人関連の内容だけの協力だから、基本的に向こうが狙っている可能性が高いレリックを除くロストロギア回収任務に協力する必要は無く、デスクワークも１０８部隊から送られてくる物以外は処理する必要は無いことになってる。

ちなみにこのことが決まった時、はやてさんやロウラン准尉は涙目でした。新設部隊は書類仕事が大変だから少しでも自分の負担を減らしたかったんだと思う。

……多分、蒼がこのことを聞いていたら「狸ザマァｗｗｗ」とか言うんだろうなぁ。

閑話休題。

「１０８部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします！」

『よろしくお願いします！』

ギンガが敬礼して挨拶するのに対し、六課のＦＷ達は元気よく返事をする。蒼とアリスは何故いない。

っと、考えてばっかりじゃなくて俺も挨拶しないとね。

「同じく１０８部隊所属、草薙烈陸曹長です。妹達がお世話にになっています。よろしくお願いします！」

『よろしくお願いします！』

再びＦＷ達が返事をする。スバルやティアナは嬉しそうに、エリオとキャロは戸惑いながらだけどね。

あと挨拶しなきゃいけないのは……

「エイ、君もちゃんと挨拶しないと」

「ひゃ、ひゃい！！　え、えと、マイロードのユニゾンデバイスの、

エ、エイジスでしゅ！！
　よ、よろしくお願いしま……（ガリッ！）……あぅぅ、舌噛んじゃいまみた。痛いですぅ」

「「「萌えーーー！！」」」

エイが舌を噛んじゃって涙目だ。相変わらずよく噛むなぁ。まあそこが可愛いんだけどね。
あえてティアナ、マリーさん、なのはさんの反応は無視しよう。シグナム二尉とヴィータ三尉がドン引きしてるし。

「…か、かわいい」

「……エリオ君（怒）？」

ちびっ子ズも何か言ってるけど聞こえないことにしよう。話が進まないし。ゴホン、と俺がわざと咳ばらいをするとみんなハッとなって落ち着く。

「えっと、それからもう一人」

「どうもー」

気を取り直して、フェイトさんがマリーさんの紹介に入る。

「十年前からウチの隊長陣のデバイスを診てきてくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです」

「地上でのご用事があるとのことで、しばらく六課に滞在していただくことになった」

シグナム二尉が説明を付け加える。マリーさんの用事ってのは戦闘機人の調査だけでなく、スバルやギンガの検査や俺の義手の検査等も含まれている。

「気軽に声を掛けてね」

『はい！』

これで紹介は終わったね。

「おーしっ、じゃ紹介が済んだところで早速今日も朝練いっとくか！！」

『はい！！』

返事をしたＦＷ達は３つに別れた。エリオとキャロはフェイトさん

のところに、ティアナはヴィータ三尉のところ。スバルは一人でストレッチを始めていた。俺とギンガもスバルに加わってストレッチを始める。

「ギンガ、ちょっとスバルのできを見てもらっていいかな？」

「え、あ、はい」

ストレッチの最中になのはさんが話し掛けてきた。

「えっ…」

「1対1で軽い模擬戦。スバルの成長、確かめてみて」

「はい！」

ギンガは力強く返事をする。スバルの方を見てみるとやる気のある目付きだった。多分、今の実力でどこまでギンガに届くのか試したいんだろう。

俺も気になるな。以前のガジェット戦はそこそこよかったけど、対人戦はどうかな？

まだギンガには勝てないだろうけど、どれくらい成長したのか見せてもらうとしようかな。

◇◇◇◇◇

数分後、俺とエイ、六課隊長陣とスバルを除くＦＷ達はギンガとスバルの模擬戦を見ていた。

現在の情況はギンガが攻めていてスバルはギンガの攻撃を避け続けているというものだった。

『Ｓｔｏｒｍ　Ｓｈｏｏｔ』

回避を続けるスバルに対し、ギンガはリボルバーナックルに魔力を篭めた攻撃、ストームシュートを繰り出した。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

スバルはプロテクションを張って防ぐけれど、次第に防御壁に皹が入り砕けてしまう。

「セイッ！！」

プロテクションを砕いたギンガは直ぐさまアッパーで攻撃。だけど・・・防がれたね。

「なるほど、悪くない」

「はい」

「ああ」

上から順にシグナム二尉、なのはさん、ヴィータ三尉。六課の隊長達も今の出来事が見えているみたいだ。

「二人共なかなかだ」

ヴィータ三尉の見つめる先には、ギンガの拳を左手の小さな障壁で防ぐスバルがいた。

前まではギンガの攻撃を防げなかったのに。スバル、成長しているみたいだね。

「リボルバー……」

攻撃を防いだスバルは反撃に出る。

『Ｄｅｆｅｎｒｅｒ』

「キャノン！！」

ギンガは咄嗟にシールドを張って防ぐけれど、シールドはスバルの攻撃によってあっさり砕かれる。シールドを砕いてもスバルの攻撃は衰えず、そのままギンガを吹き飛ばす。

「パワーなら、スバルの方がギンガより上かな」

「だが、スバルは突撃思考だからな。パワーはあるが技術面ではギンガに劣るだろう」

「うんうん……って、蒼！？　いつの間に！？」

「むう。兄様、私もいますよ」

「あ、お姉ちゃん」

俺の隣にはいつの間にか蒼とアリスが立っていた。……アリスはもうフルサイズ姿がデフォルトになったなぁ。

「ああ、そうそう。俺とエイは……」

「六課に出向になったんだろ。戦闘機人関連の事件に協力ってことで」

言おうとしたのに俺がいる理由知ってるよ。

ん？　さっきの紹介の時に戦闘機人については言ってなかったけど……まさか。

「まさか、ウチの隊とはやてさんの話を盗み聞きしてた？」

「ザッツライ。八神ザマァｗｗｗ」

……やっぱり。盗み聞きしてたことを怒るべきか、俺の想像通りの反応を示してくれたことを喜ぶべきか。正直、微妙なとこだ。

「あ」

と、そこでのフェイトさんの呟く声が聞こえたのでがフェイトさんが見ている方を向くと、いつの間にか空中をウイングロードで駆け巡っていたスバルとギンガの模擬戦の決着がつくところだった。

結果はギンガの勝ち。リボルバーナックルをスバルに突き付けていた。

「はい！　そこまでーー！」

なのはさんが試合終了を告げる。

「ああ～」

「スバルさん、惜しい」

キャロとエリオが残念そうに呟く。ま、スバルがギンガに勝つにはまだまだ無理かな。

さて、戻ってくる2人に労いの言葉でも言ってあげようかな。

もちろん、スバルはまだまだだって厳しいことも言うけどね。

『マイスターのように、相手を精神的に叩き潰すようなことを言ってはダメですよ』

「いや、スバルにそんな酷いことしないから」

紅月、さすがに“身内”にそんなことはしないよ。可愛い妹にぼろくそ酷いことを言うとでも？

あ、2人共降りてきた。行くとしようか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「じゃ、みんな集合～！」

『はい！』

スバルとギンガの模擬戦から数分後、なのはさんが全員に集合をかけた。

ちなみにスバルにはもっと相手の攻撃を先読みできるように、と言っておいた。

格闘や剣術等のクロスレンジに於ける戦闘では、相手の先を読むことも重要だからね。

閑話休題。

「せっかだから烈君とギンガも入れたチーム戦、やってみようか？」

なのはさんが笑顔で告げる。……何故笑顔？

「フォワードチーム６人対……前線隊長４人チーム」

……鬼畜だ。オーバーＳ二人にニアＳ二人。一般世間ではこれを虐めという。

『＜主、そう言う割にはランクが高い相手でも勝てるじゃないですか＞』

正確に言うなら、“『海』の魔導師”のニアＳくらいの相手までならね。しかも１対１が前提。尚且つ、地形も俺に有利なものならね。

「……え？」

ギンガも目を丸くしてるし。

「いや、あのねギン姉、烈兄。これ時々やるの」

「隊長達、かなり本気で潰しにきますので」

「先ずは地形や幻術を駆使して何とか逃げ回って」

「どんな手を使っても決まった攻撃を入れることができれば撃墜に

なります」

「キュクー」

ＦＷ四人が説明してくれる。……みんな苦労してるんだ。

「なんて言ってはいるが、実際は隊長達が自分の優位性を示す為にＦＷ達に実力差を見せ付けているだけだ。
今のＦＷ達じゃ勝てる訳がないからな。実際はチーム戦という名の隊長達のストレス発散だ」

「アオちゃん負け無しですもんね」

蒼とアリスもすかさず付け加える。それを聞いて俺とギンガはなのはさん達を白い目で見る。

「テメェ！　喧嘩売ってんのか！！」

蒼の言葉に暴力幼女（ヴィータ三尉）がキレた。

「事実だろ？　お前達が４人掛かりでも私に勝てなくて面子が立たないから、ＦＷ達に同じことやって実力差を示そうとしているんだろ？」

それを聞いた隊長達は「うっ！」とうろたえる。……うわっ、最低だこの人達。スバルとティアナも冷たい視線を隊長達に向けてるし。

……あ、そうだ。いいこと考えた。

「いいですよ。そのチーム戦」

「烈！？」

「……兄さん？」

ギンガと蒼が驚く。

「ランクが高いからって調子に乗ってる人に負ける訳ないですからね」

あえて挑発する。『海』の魔導師の自尊心を叩き壊してやりたいという気持ちは、地上の魔導師なら誰でも持っているからね。ここは一つ、隊長の誰かの自信でも叩き壊してみよう。

『＜……主は身内以外には容赦ないんですね＞』

＜当然。仲間にも甘いけど＞

念話で紅月と話す。六課の人の中で、蒼とアリス、スバルとティアナ以外は知り合い程度でしかないから、別に甘くする必要なんかない。

「この間の時といい、今回といい、テメェはあたし等をナメてんのか？」

暴力幼女が挑発に掛かってきた。予想はしてたけど、やっぱこの人が一番挑発に乗りそうだよね。
ちなみに乗らない可能性が高いのはフェイトさん。ただしスカリエッティに関連するものを除いて。

「違いますね。貴女みたいな魔導師をナメてるんですよ」

カッチーン、という音が聞こえた気がした。

「おい、なのは。コイツはアタシが殺る」

「えっ？　あの、ヴィータちゃん？」

「……徹底的に潰してやる。さっさと防護服着やがれ！！」

そう言った暴力幼女は既にデバイスをセットアップし、騎士甲冑を

装着していた。

「え、えっと、じゃあギンガはスバルと同じデバイス攻撃で左ナックルと蹴り。烈君はバインドと篭手で撃墜判定ね」

「さっさと始めろ、なのは！！」

暴力幼女に言われて、参加する全員がバリアジャケットを展開する。

「じゃあ……始め！！」

開始宣言をした途端、暴力幼女が突撃してきた。他のみんなは巻き込まれたくないようで、全員散っていった。

ま、その方がやりやすいからいいけどね。

さて、叩き潰させてもらいましょうか！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「クソッ！　このッ！！」

「攻撃が単調過ぎますね。掠りもしませんよ」

「くっそがぁぁぁ！！」

ヴィータはグラーフアイゼンを縦や横に振るが、ハンマーという武器は重くて攻撃の軌道が限られるため攻撃の先読みがしやすいく、さらにヴィータは怒りで冷静さを失っていて攻撃が単調になっているため、冷静な烈には掠りもしない。
そして攻撃が当たらないことが更にヴィータを苛立たせ、冷静さを失わせる。

「アイゼンッ！！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！　Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ！』

カートリッジをロードして、ヴィータはアイゼンのハンマーヘッドを巨大化させる。
どうやらヴィータの頭には烈を潰す（物理的に）ことしかないようである。

「ギガントハンマー！！」

ヴィータは烈の脳天目掛けて力いっぱいハンマーを振り下ろすが

「紅華緑葉」

烈は足に炎を纏って脚力を強化し、後ろへ跳んで森の中へと逃げる。

「逃げてんじゃねぇ！！」

ヴィータは烈の逃げた方向に４つの鉄球、シュワルベフリーゲンをアイゼンで打ちこむが、烈に鉄球は当たらず草を掻き分けるような音がするだけだった。

「隠れてんじゃねぇぞコラァ！！」

ヴィータは得意な近接戦で攻撃が当たらないことで、苛々だけが増しているので苛立ちは一向に治まる様子がない。

「俺が貴女の有利な距離で戦う必要はありませんからね。それに俺は突撃思考しかない頭の硬い騎士ではありませんし」

突然、ヴィータの“背後”から烈の声が響いた。直ぐさまヴィータは振り返りシュワルベフリーゲンを打つが、振り返った先に烈はお

らず鉄球は空を切り森の中へ消えてしまう。
そしてその直後、今度はヴィータの“右側”から真紅の魔力刀が５本飛んできた。

「んなっ！？」

ヴィータは驚くが直ぐに反応し、アイゼンを振り回しやすい初期形態のハンマーフォルムに変形させて魔力刀を全て叩き落とす。

「そこかぁ！！」

ヴィータは魔力刀の飛来してきた方向に向かおうとしたが

ヒュン！　ヒュヒュヒュン！！

今度はヴィータの左右と後方から魔力刀が飛んできた。それぞれ７本ずつ。計２１本。

「嘘だろ！？　どうなってやがる！？」

ヴィータは声のした方向とは別の方向から攻撃が来て、更にその後また別の方向、しかも3方向から攻撃がくるなんて信じられなかった。
ありえない筈の攻撃に困惑するが、直撃を避けるためにヴィータは空へ飛び上がる。

「ハァ、ハァ、ハァ。これなら、アイツも、あんな攻撃、できねぇはず」

烈は陸戦魔導師だから、空中に逃げればなんとかなると思ったのだろう。
ヴィータは深呼吸をして自身を落ち着かせようとする。

「（落ち着け、あたし。空中にいれば地上からのアイツの攻撃は射撃魔法に限られる。アイツは炎の翼で飛べたけど、空戦ならあたしの方が上。負ける筈がねぇ！）」

ヴィータは呼吸を調えて、烈のアクションを待つ。

数秒後、森の中から“右目に”眼帯を付けた烈が炎の翼を広げて飛び上がってきた。

「アイゼン！　フォルムツヴァイ！！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！　Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ！！』

ヴィータはカートリッジをロードしアイゼンのハンマーヘッドの片方にブースターを、もう片方に三角柱状の突起物を装備したラケーテンフォームへと変形させる。

「ラケーテーン…ハンマーーー！！」

そしてブースターからの推進力と重力落下速度を利用して加速しながら烈を迎え撃つ。

「『紅鏡の核＜ソレイユ・コア＞』」

烈は翼の炎を『紅鏡の核』で吸収し、炎のエネルギー球を“左手”で作り上げる。
翼はなくなったが、勢いのついた烈の動きは止まらない。

アイゼンと炎球が衝突した瞬間――

ガシャアアアアアン！！！

――――烈が砕けた。

「んなっ！　か、鏡！？」

「正解です」

ハッ！　っとヴィータは振り返るが、目の前には既に炎球を“右手”に構え“左目”に眼帯を付けた烈がいた。

ヴィータが見ていたのは烈が森の中から飛び上がってきた姿ではなく、空から降下してくる烈を写していた鏡だったのだ。

「灼熱剛球！　フレアキャノン！！」

烈はがら空きのヴィータの腹に集束した炎球を叩き込んだ。

ドゴォォォォォン！！

「うわぁぁぁぁあ！？」

防御魔法を展開できず、炎球の爆発を零距離で喰らったヴィータは重力に従い落下してゆく。ヴィータは空中で体制を立て直そうとしたが

「蒼紅・・・」

烈はそれを許さない。烈は炎と冷気を纏った右足を振り上げる。

「・・・破天蹴撃！！」

重力を加えて勢いがつくことで威力の上がった踵落としを、ヴィータの腹部に叩き落とした。

「がぁぁあぁあぁぁぁ！！」

この攻撃も防御できずに直撃を喰らったヴィータは猛スピードで落下し、地面に大きなキスをして気を失った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「はい、じゃあ、今日はここまで！」

なのはさんが訓練終了を告げる声が響く。

『お疲れ様でしたー！』

ＦＷチームは元気に返事を返す。

チーム戦の結果？　もちろん、ＦＷチームが勝ったよ。

「まさか、ヴィータが本当に負けるとは」

「冷静になってたら勝てた筈なのにね」

シグナム二尉とフェイトさんが感想を述べる。

俺はヴィータ三尉を倒した後、ギンガ達の援護に回った。
ギンガ、スバル、ティアナの三人でなのはさんとシグナム二尉の二人と戦っていたから、なのはさんに背後からの奇襲で一瞬の間にバインドを掛けて撃墜。それに動揺したシグナム二尉をギンガとスバルのコンビネーションで決定打を入れて撃墜。
その後はみんなで残ったフェイトさんを集中攻撃。キャロとスバルが撃墜させられたけど、ティアナの狙撃でフェイトさんを撃墜。FWチームの勝利となった。

ちなみにヴィータ三尉はあれからずっと気絶している。魔力糸です巻きにされた状態で。

「よ、容赦ないですね、兄様」

「あわわわわ！」

FWチーム全員でクールダウンのためにストレッチをやっていると、妹達がやってきた。

「見てたの？」

「はい、バッチリ」

アリスの言葉にＦＷのみんなは首を傾げる。まあ子供は見ない方がいいかな？

「ククク……クフフフ……いやー笑った笑った。おもしろかったぞ兄さん」

蒼も腹を押さえて笑いながらやってくる。そんなにおもしろかった？

「魔力刀は設置してから攻撃していたのか？」

「うん。そう」

蒼の予想通り、ヴィータ三尉の左右や背後から放った魔力刀、あれは全部設置して攻撃したものだった。

背後に跳んで森の中に下がって魔力刀を設置。糸を木の枝の間に張り巡らして、綱渡りの要領で左回りでヴィータ三尉の背後に移動。その間にヴィータ三尉の右側に魔力刀を設置するのも忘れない。そして声を掛けてヴィータ三尉が振り返った瞬間に、再び魔力刀を設置して三尉の右側に移動。そしてフォトンブレイドを撃って、叩き落とされた瞬間に設置した魔力刀を撃ち出した。というわけ。

詳しくは下の図で。

●：設置した魔力刀
○：暴力幼女（ヴィータ三尉）
◇：俺
†：木
線：俺の移動経路
≪：攻撃方向

「鏡は私の技と同じですね」

「そ。冷静さを失ったヴィータ三尉なら騙されるんじゃないかってね」

アリスの言う通り、使った鏡はアリスと同じで氷で作り出したもの。
アリスの技を真似ただけなんだけどね。
ただ、これで俺を写すと眼帯が逆に写るから普通なら偽物だってバレてしまうんだけど、今回は相手が頭に血が昇っていたのでバレなかった。

「フムフムなるほど。ああ、兄さん。紅月メンテするから後で渡してくれ（ククククク……）」

「（なんか今笑い声が…まあいいや）わかった。後でね」

と言ったところでなのはさんが集合を掛けてきたので、俺やギンガ達はクールダウンを終えてなのはさんのところに集まっていった。

余談だけど、俺とヴィータ三尉の戦闘の映像。
あれ、ミッドのある動画サイトにアップされていた。

タイトルは【『陸』の魔導師ＶＳ『海』の騎士】。
投稿されてから3日でサイト側が削除したらしいけれど、動画のコメントには「ＧＪ！！」や「『海』ザマァｗｗｗ」等の地上部隊の人々のコメントがかなり多く書き込まれていたという。

犯人、絶対に蒼だよね。

第４５話　出向、機動六課。暴力幼女をブッ潰せ！！（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

リインフォース
「……なんとまあ容赦無いことだ」

アリステラ
「ですね。しかも動画サイトにアップって、最近の映像流出じゃないんですから」

エイジス
「し、島の方はどうなるんだろうね。今回はＫｙｏ様より幼児化する薬（セレナ製）を。バルディッシュ様よりブレイバックル、ブレイラウザー、ラウズアブソーバー×２、ギャレンバックル、ギャレンラウザー、カリスラウザー、カリスアロー、レンゲルバックル、レンゲルラウザー、ラウズカード全種類を頂きまみた！」

アリステラ
「調べたところバルディッシュ様から贈られてきた物は仮面ライダー剣（ブレイド）のようですね。
以前も言いましたが、ウチの作者は仮面ライダーネタは最近のものしか知らないので剣ネタは使えませんよ」

エイジス
「幼児化する薬……またマイロードがかわいい姿に！？」

リインフォース
「残念だが、烈には毒や薬が効きにくいという裏設定がある。烈が

飲んでも効果が薄い、若しくは無いだろう」

エイジス
「じゃあマイロードの幼児化は無しですか！？」

リインフォース
「せっかく貰った物だから使いたいとは言ってたが……セレナ製だから烈にも有効ってことになるかもな」

アリステラ
「かもしれませんね。あ、今後の話の予定ですが、原作１６話の『その日、機動六課』にはまだ進みません。最低でも９話は番外編等になります」

リインフォース
「海人様からのコラボ依頼、アプロディーテ様からのリクエスト、烈と蒼のアリスとの出会いの話、蒼のティアナの特訓等々と書かなければならない話が多くあるらしい」

アリステラ
「更に、センター模試まであと２ヶ月ということなので更新速度が落ちます。本格的に話が進むのは４月以降になるそうです」

エイジス
「こんな作者の書く作品ですが、これからもよろしくお願いします！！」

アリステラ
「さて、しばらく続く番外編、最初は海人様とのコラボです」

リインフォース
「……ウチの作者はディケイドや剣はムリじゃなかったのか？」

アリステラ
「“最近”のライダーなら知識はあるんですよ」

リインフォース
「そうか。なら大丈夫……なのか？」

エイジス
「多分、大丈夫？」

アリステラ
「それはどうでしょうね。次回もよろしくお願いします」

読者の皆様に質問したいこと

本編更新でなくて申し訳ありません。m（＿）m

活動報告だと読んでくれる人が少ないと思うので、こっちに載せました。

で、その内容ですがこの作品について、特に戯言ファンの方々にお尋ねしたいことがあります。

その尋ねたいことですが、原作に『戯言シリーズ』とあるのに、これっぽっちも戯言っぽく無くて正直不愉快になったりしていませんか？　ってことです。

感想の書き込みで、「戯言じゃなくて普通にオリキャラじゃないんでしょうか？」ってのがありまして。

……実質、否定できないんですよね。ほとんど戯言要素がありませんし、あっても戯言っぽくないみたいな。

それに、今後登場予定の戯言キャラは、全員烈や蒼と同じ類の能力持ちになる予定なんです。原作キャラ、オリキャラ構わずに。

こうなると、原作ファンの方々は嫌悪感を抱いてしまうんじゃないだろうかと思ってしまいまして。

それに、投稿済みの話を読み直したり今後の展開のプロットを読み直してみたんですけど、「わざわざ烈と蒼を『殺し名』の設定にしたりする必要もなかったんじゃね？」って思ってしまって。

……正直、どうしたらいいでしょうかね？

次の中から答えてほしいです。

？：設定変更せずに続行
？：設定変更
？：作品の削除

？は、まだ本格的に戯言勢のキャラが登場しておらず、作品を全体的に修正することができるためです。（石凪は登場しましたが、修正が可能です）
その場合、烈と蒼の２人が『殺し名』であるという設定を変更します。
さすがに『生まれた世界』の設定を変えると修正量が半端じゃないので、生まれそのものだけの変更になりますが。

……寧ろその方が出生のつじつまを合わせやすいかもしれませんが。

という訳で、読者の皆様（特に戯言ファンの方々）の率直な意見を聞かせていただきたいです。

どうかよろしくお願いします。

読者の皆様に質問したいこと（後書き）

……ちなみに？の場合、別の話を書こうかと思っています。

とはいえ、？でも？でも3月以降になりますが。

本当に意見を聞かせてください。

よろしくお願いします。

第４５．５話　六課の訓練場で「変身！」と叫ぶ（前書き）

ライ様、バルディッシュ様、海人様、零様、トリハピ様、ヴィーアス様、ｘ－ｂｉｔ様、ご意見ありがとうございました！！

結果、？でいこうかと思います。あとまたこのようなことを言われないように、あらすじにて注意を呼び掛けるようにします。

これからもこの作品をよろしくお願いします！！

今回は海人様とのコラボです。

やはり口調が合っているか不安。

何か問題がありましたら遠慮なく言って下さい。

それではどうぞ。

第４５．５話　六課の訓練場で「変身！」と叫ぶ

烈達が六課に出向してから3日後のこと。

ただ今の時刻は午前１０時。午前練真っ最中の時間帯である。

ＦＷのが汗を掻きながら訓練をしている一方、六課のデバイスルームでは。

「凄いですね～。中がかなり細かくできてて、指先で精密動作もできる。凄いですよマリーさん、アオ！！」

「私も義手のメンテナンスは何回もやってたけど、作ったのは初めてだったんだよ。設計とか基礎フレームを作ったのは全部蒼なんだよ」

「その分私はマリエルに触覚センサープログラムの作成を頼んだからな」

マリエルとシャーリーが烈を取り囲んで語り合っていた。蒼はその近くで何やらコンソールを叩いて、ベルトのような形の機械にデータを組み込んでいる。

「あ、あの、マリーさん。義手のメンテだったんじゃ……」

「メンテは後でもできるから、もっと見せて下さい！　草薙曹長！！」

これまでに至った経緯を説明すると、マリエルと蒼が作った義手をシャーリーが見たいと言いだしたので、マリエルは烈に義手のメンテナンスをすると言って烈を呼び出したのである。
そして現在、烈の義手はシャーリーによっていじくられているという訳である。

「……そ～う～」

「兄さん……頑張れ」

「見捨てられた！？」

ガビーンッ！　と擬音が背後に現れそうなリアクションをとったが、諦めたのか烈はシャーリーにされるがままにされていた。

「フムフム成る程。取り外しができないのは神経に直接繋がってるからなんだ～」

「ちょ、フィニーノ二士！　そこくすぐったいです！！」

「良いではないか～良いではないか～～」

「良くないですって……ヒャンっ！」

烈がこそばゆさで思わず女の子みたいな声をあげる。
シャーリーが悪代官に見えるのを気にしてはいけない。
マリエルはそんな2人を苦笑しながら眺めていると。

「……えっ？」

突如デバイスルームに灰色のオーロラが現れた。

「まさか……この義手にオーロラを創り出す力があったなんて！！」

「「「いや、無いから」」」

テンションの上がっているシャーリーの発言を、3人揃って否定する。

「じゃあ、アオが何かしたとか……」

「私はデータの打ち込みをしていただけだ。何もしてはいない（……まぁ、このオーロラの正体は知っているが）」

《ディケイドのオーロラだな。仮面ライダーでも現れるのか？》

あんた達、いつ仮面ライダーディケイドを知ったんだというツッコ

ミは無しでお願いします。
蒼を除く3人がオーロラを警戒しながら見ていると……

『まてこの猫！』

『ニャニャニャニャ～～ン！』

オーロラの中から声が聞こえてきた。
聞こえた声にしばらく首を傾げていると、オーロラの中からシアン色の大型拳銃をくわえた一匹の黒猫と、赤髪蒼眼の青年が飛び出してきた。

「ったく。この悪戯猫め」

「ニャ～ン」

青年は猫を捕まえて抱き抱え、大型拳銃 ― ディエンドライバーを取り上げた。

「……誰？」

「まさか……不審者？」

「えっ！？　あ、いや、俺は……（ヤバッ！　どうすれば……）」

シャーリーが青年の登場に非常用スイッチを押そうとし、マリエルが連絡しょう通信モニターを開き、烈が紅月をセットアップしようとした。

……が

「なんだ。お前か」

「「「「へ？」」」」

「ニャ～？」

蒼だけ反応が違った。

「えっと…蒼、知り合い？」

「ん？　まあな」

マリエルの問いに蒼は頷く。

「え、あ？」

＜話を合わせておけ。面倒事はいやだろう？＞

＜ああ……わかった＞

青年は戸惑うが念話で蒼の言葉に頷く。

＜兄さんも話を合わせてくれ＞

＜……ハァ。わかったよ＞

ため息をつくが、烈も念話で頷いた。

「ひ、久しぶりだな。蒼」

「ああ。以前会ったのは何時だったけな？」

「2ヶ月くらい前じゃなかったっけ？」

3人はこの場をしのぐ為に、知り合いの振りをする。

「あれ？　草薙曹長もお知り合い、ですか？　でもさっきデバイスをセットアップしようとしてたような……」

「あ、あれはいきなり現れたから驚いただけです」

烈の言い訳に「そうですか」と言ってシャーリーやマリエルは納得する。

3人が内心ホッとした時、黒猫が青年の腕から飛び下りた。

「ニャ～～オ」

「あ、可愛い～。こっちおいで」

マリエルはしゃがんで黒猫を抱き抱えて背中を撫でてやる。

それを見て青年は何か思い付いたのかマリエルに話し掛ける。

「すまないが、2人と話したいから席を外してくれるか？」

「え？　うん、いいよ。この猫は？」

「しばらく預かってもらえるか？」

「わかった。シャーリー、行こう」

「え、は、はい」

そう言ってマリエルは黒猫を連れてシャーリーと共にデバイスルームから出て行った。

「「……ハァ。何とかなった」」

烈と青年はホッと息を着く。

「で、君は誰？」

「俺の名は不破飛翔。通りｓ…　「通りすがりの仮面ライダーってか？」　…台詞取られたｏｒｚ」

蒼に台詞を取られて凹む飛翔。

「……あ、こっちの自己紹介がまだだったね。俺は草薙　烈。こっちは俺の妹の草薙　蒼」

「蒼だ。よろしく。ところで飛翔、どうしてお前は突然現れた？」

「あ～それはな、たいしたことじゃないんだが……」

飛翔はそう言ってここに現れたいきさつを話し始めた。

～～回想～～

飛翔の自宅にて。

「よし、これで終わりと」

俺は持っていた工具と机の上に置きっぱなしになっていたを片付ける。

机には工具の他に白いバックル　―　ディケイドライバーと、シアン色の大型拳銃　―　ディエンドライバーが置いてある。

俺は自分の部屋で鈴音（りんね）のディケイドライバーと、アリシアのディエ

ントライバーのメンテナンスをしていたところだ。
2つともカードを使うタイプのドライバーだからな。戦闘中にカードが詰まったり、認識されなかったりしたら大変なんだ。

「さて、アリシアと鈴音に持っていくとするか」

そう言って2つのドライバーと取ろうとした時

「ニャ～ン」

額に十字の傷みたいなのがある黒い猫が目の前の窓からピョンっと部屋に入ってきて机に乗っかった。
野良猫か？　と思っていると、黒猫は前足でディエンドライバーに触っていた。

「コラ。危ないから触るな」

俺は猫からディエンドライバーを取り上げようとしたが

「ニャン！」

「あ、コラ！」

猫はディエンドライバーをくわえて逃げ出そうとした。
その時、ちょうど猫の目の前に灰色のオーロラが現れる。
このオーロラは異世界同士を繋ぐものだ。このまま猫が入ったらディエンドライバーが！

「待て！」

「ニャン♪」

咄嗟に俺は猫に飛び掛かったが、猫は俺を躱してそのままオーロラに入って行ってしまった。
オーロラは今にも消えそうになっている。

「しかたがない、かっ！」

俺は猫を追い掛ける為にオーロラに飛び込んだ。

～～回想終わり～～

「せめてディケイドライバーを持ってから飛び込めよ」

話を聞き終えた蒼からの痛烈な一言。

「うっ！」

「まあまあ。ドライバーは取り返したんだし、帰れるんだからよかったじゃん」

烈がフォローを入れてくれる。

「…ありがとな、烈」

「別にいいよ」

「しかし、仮面ライダー……！　そうだ！　飛翔、今直ぐ帰る必要はないよな？」

「ん？　ああ、大丈夫だが」

飛翔は首を傾げ烈の方を見る。が、烈もよくわかっていないようである。

「ならちょうどいい。疑似的な仮面ライダーのドライバーを作ったんだ。テストしてみてくれ」

「ドライバー？　どんなライダーだ？」

「それはな……」

それから蒼は烈と飛翔にドライバーの説明を始めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

２０分後、烈、蒼、飛翔の３人は六課の訓練スペースでフェイト、エリオ、キャロと対峙していた。

３人は訓練スペースに来た後、ＦＷ達＋なのは＆フェイトに飛翔のことを説明（さすがに異世界から来たということは省いたが）してから３人でテストを行おうとした。

だが、蒼がデバイスを使わないことを知った途端、フェイトが相手

をすると申し出てきた。……恐らく、デバイスを使わない蒼になら勝てると思ったのであろう。
しかしそうなると、飛翔に渡した方のテストができない。という訳でエリオとキャロにも参加してもらった。
人数も3対3であり、今回は烈も蒼も魔法を使わない（飛翔はデバイスを持ってない）ので調度良いだろうとなのはが判断したのである。

「じゃ、始めるとするか」

そう言って、蒼は2本のUSBスロットのあるU字型の赤い機械と黒いUSBメモリを取り出す。
機械を下腹部にあてると、機械の側面からベルトが延び自動的に装着される。

「ベルト？」

「あのメモリ何に使うんだろ？」

「あのメモリをはめ込む、とか？」

外野のギンガ、スバル、ティアナが蒼の取り出したベルトを見て首を傾げる。

「兄さん」

「りょーかい」

蒼に言われ、烈も蒼のものと同じ機械を取り出しベルトを装着する。
そして緑色のＵＳＢメモリを取り出して、メモリのスイッチを押す。

『Ｃｙｃｌｏｎｅ！』

スイッチを押したメモリから野太い男性の電子音声が響く。
それに続き蒼も黒いＵＳＢメモリのスイッチを押す。

『Ｊｏｋｅｒ！』

再びメモリから電子音声が響く。
そして２人はお互い頷き合い、同時に叫んだ。

「「変身！」」

烈が機械のスロットにメモリをはめ込むと、メモリは消え、蒼の方のスロットに現れる。
蒼はそれを押し込み、空いているもう片方のスロットに自身のメモリを差し込んだ。

そして蒼はベルト　―　ダブルドライバーのスロットを左右に展開する。

『Ｃｙｃｌｏｎｅ！　Ｊｏｋｅｒ！』

電子音声が響くと、烈は意識を失って倒れ、蒼を中心に竜巻が発生した。
竜巻が収まった場所には、Ｗの形の触角に赤い昆虫のような複眼、体の中央にあるラインを境に左半身が黒く右半身が緑色の鎧に白いマフラーを着けている。
２人で１人の戦士、仮面ライダーＷ（ダブル）・サイクロンジョーカーが存在していた。

「「「「へ、変身したぁぁぁ！？」」」」

「「「「カッコイイ（です）！！」」」」

ダブルの登場に、なのは、フェイト、ティアナ、キャロ、ギンガは驚きの声を上げる。
ちなみにキラキラとした目でダブルを見ているのはスバル、エリオ、エイジスだ。
アリステラがいない……と思いきや、アリステラは烈の体を移動させてひざ枕している。

「さあ、お前の罪を数えろ」

ダブルとなった蒼は左手をフェイトに向けて言い放つ。

「……実はそれを言いたかっただけだったりしてな」

『飛翔の言う通りかもね』

飛翔の言葉にダブルの右目の複眼が光り、烈の声が響く。
烈の意識が体から離れ、蒼と一つになることでダブルになっているのだ。
図星を突かれたのか、蒼は「うっ！」と小声で言っていた。

「そ、そんなことより飛翔、お前も変身しろ」

「（……図星なのか。まあいいか）わかった」

言われて飛翔はメダルスロットが3つある白い長方形型の機械―オーズドライバーを取り出して装着する。
更に3枚のメダルを取り出して、飛翔から見て右端のスロットに赤のメダル、左端に緑のメダルをセットし、最後に真ん中に黄色のメダルをセットする。
そして3枚のメダルがはまったスロットを傾け、ベルトの右側に装着された黒い円形のスキャナーでベルトをスキャンした。

ティン！　ティン！　ティン！！

スキャナーがメダルを通過する毎に軽やかな音が響く。

「変身！」

飛翔が叫びスキャナーを胸の前に持ってゆくと、周辺に赤、青、緑、黄、白のメダルの紋章エフェクトが複数現れ飛翔の周りを覆うように回転する。

『タカ・トラ・バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ・タ・ト・バ！！』

軽い男性の電子音声が響き、紋章エフェクトが消えると飛翔も別の姿へと変わっていた。

全身は黒を基調とし、頭部は赤、上半身は黄色、下半身は緑色のラインが入ったアーマースーツ。

頭部は鷹の翼のような赤い触角と緑色の複眼、胸に描かれた大きな円形プレートの中には上から赤い鷹、黄色い虎、緑色のバッタの紋章が描かれ、両腕には折りたたまれた３本爪の黄色い鉤爪が装備されている。

メダルの力で変身する戦士、仮面ライダー０００（オーズ）・タトバコンボが存在していた。

「「「こっちもおぉぉっ！！？」」」

「「「おぉ～！！」」」

再び驚愕と歓喜の声が上がる。
ちなみにアリステラは意識が一つになっていて、現在意識が離れている烈の頭を撫でていた。
……ギンガとティアナが見たらどんな反応をすることやら。

「……俺が知らない仮面ライダーだ」

「3ヶ月くらい前に放送が始まったやつだからな」

『蒼、メタな発言は止めなさい』

今まで見たこともない仮面ライダーに変身飛翔は体を軽く動かしてみたりしている。

「えっと、じゃあ、準備もできたみたいだし、始めようか？」

驚愕から我に返ったなのはは審判を勤めるために、ライトニングとライダーズの間に立つ。

「試合形式は3対3。烈君達のチームは魔法使用禁止。ライトニングチームは特に制限は無し。どちらも決定打が入ったら撃墜。質問はあるかな？」

「無いよ（……絶対に勝つ！）」

「「ありません！」」

「問題無い」

「『以下同文」』

全員の返答を聞きなのはは頷くと右手を上げる。

「じゃあ……始め！」

なのはが手を振り下ろすと同時に、ダブル、オーズ、フェイト、エリオは駆け出した。

◇◇◇◇◇

駆け出した蒼&烈（ダブル）はフェイトに、飛翔（オーズ）はエリオに向かって行った。

「ハアァァア！」

「ヤアァァァア！」

フェイトとエリオは己の得物を各々の相手に振り下ろすが。

「『ハッ！」』

ダブルは真剣白刃取りでバルディッシュの刃を防ぎ、

「甘いッ！」

キィィィン！！

オーズは両腕の鉤爪　―　トラクローを展開してストラーダを防いだ。

飛翔はそのままストラーダごとエリオ押し返そうとするが

「錬鉄召喚！　アルケミックチェーン！！」

「ッツ！？」

後方で控えていたキャロがエリオを援護してきた。飛翔の足元に現れた桃色の魔法陣から鎖が伸び、飛翔を捕縛しようとするが

『飛翔、跳んで！』

「わかった！」

飛翔は烈の言葉に反応し、直ぐさまその場から高く跳び上がる。オーズのバッタレッグはその名の通りバッタの力をもっている為、通常の跳躍よりも高く跳び上がることができるのである。だが、垂直に跳び上がった為、鎖は飛翔を追い掛けて伸びてくる。

「うらッ！」

「わっ！？」

その間に蒼が左足でフェイトを蹴り飛ばし、烈が右手で黄色いメモリを取り出してサイクロンのメモリと入れ替える。

『Ｒｕｎａ！　Ｊｏｋｅｒ！』

電子音声が響くと、ダブルの右半身は色が緑から黄になってマフラ

ーが消え、ダブル・ルナジョーカーへと姿を変える。

「色が変わった!?」

吹き飛ばされながらフェイトは驚くが、烈はそれを無視して右腕を文字通り“伸ばす”。
某悪魔の実を食べた海賊王を目指すゴム人間のように、右腕はビヨ～～ンと伸びて空中の飛翔を掴んで引き寄せた。

「すまない、烈」

『気にしないで』

「フム。やはり仮面ライダーは空中戦ができない分不利か」

そう烈達が話しているうちに、フェイト達は一カ所に集まっていた。

「ツインブースト！　スラッシュ&ストライク！！」

キャロのブースト魔法により、ストラーダの刃に桃色の魔力が付加され、斬撃と貫通の能力が上昇する。

「作戦タイムは与えてくれないか……飛翔、これを使え」

そう言って、蒼はどこからともなくのレモンイエローのメダルと、刀身の腹の空洞に3枚の銀色のメダルが入った青い刃の片刃剣　―メダジャリバーを取り出して飛翔に渡す。

「剣にセルメダルは入ってる。スキャンして使え。メダルはバッタと切り換えろ」

「ああ、わかった。俺は接近戦だと剣をよく使うから助かる」

飛翔は礼を言ってからバッタメダルを抜き、新たなメダルを差し込んでドライバーをスキャンする。

『タカ・トラ・チーター！』

スキャンすると脚のラインと装甲の色が緑から黄色に変化し、亜種形態、タトラーターとなる。

『トリプル！　スキャニングチャージ！』

さらにメダジャリバーの刀身もスキャンすることで、刃に青いエネルギーが纏われる。

『Ｒｕｎａ！　Ｔｒｉｇｇｅｒ！』

その間に蒼もメモリをジョーカーから青いメモリに入れ換える。ダブルの左半身が青色になって左胸に同じ色の銃　―　トリガーマグナムが装着され、ダブル・ルナトリガーとなる。

「エリオ！」

「はい！　フェイトさん！！」

「飛翔、援護するから突っ込め」

「任せろ」

両チームお互いに声を掛け合うと、飛翔は猛スピードで走り出し、エリオはストラーダの穂から魔力をロケットのように噴射して、お互い突撃する。

キャロのブーストに加え魔力噴射で上がったエリオのスピードと、チーターのメダルの力で上がった飛翔のスピードは互角だった。

「一閃必中ッ！！」

「させるか！」

エリオの突撃を妨害する為に、蒼はトリガーマグナムの銃爪を弾いて黄色い誘導弾を連射するが

「フォトンランサー、ファイヤ！！」

後方からのフェイトの援護射撃により全て弾かれてしまう。
烈がメモリを切り換えようとするが間に合わない。

『飛翔！？』

「もらった！！」

ストラーダの切っ先が飛翔の胸に直撃する――

――――筈だった。

「甘い！！」

ギャギャギャキャギャギャン！！！

飛翔はスレスレでストラーダの刃を躱し、エネルギーを纏ったメダジャリバーをストラーダの刃の真下で走らせていた。
エリオはそれに気付くが、スピードが上がり過ぎているため躱すことができない。

「セイヤァァァア！！！」

飛翔はメダジャリバーでおもいっきりエリオを切り裂いた。
斬られたエリオは空間ごと切断されたかのように体がズレたが、一瞬にして直ぐさまに元に戻り爆発を起こした。

「うわぁぁぁぁぁあ！！」

「「エリオ（君）！！」」

エリオは爆発でそのまま遠くへ吹き飛ばされる。

「『よそ見している暇があるのか（あるんですか）？」』

「ッ！？」

吹き飛ばされたエリオに意識が向いてしまったフェイトに、背後の上空から2人の声が届く。

『Ｊｏｋｅｒ！　Ｍａｘｉｍｕｍｄｒｉｖｅ！！』

フェイトが振り返ると、いつのまにかサイクロンジョーカーに戻ったダブルが竜巻で宙に浮かび上がっていた。
そしてダブルは両足を向けて、高速でフェイトに急降下する。

フェイトは撃ち落とそうとしてフォトンランサーを撃つも、全てダブルを覆う竜巻に弾かれてしまう。

「『ジョーカーエクストリーム！！」』

必殺技を叫んだダブルは体の中心から縦真っ二つに分かれ、両半身それぞれが連続してフェイト飛び蹴りを放った。

ドオォォォォォォォン！！

「キャアァァァァァ！！」

「フェイトさん！？」

フェイトはダブルの必殺技による衝撃に耐えられず、断末魔のような叫び声をあげて気絶した。

そしてキャロはいつの間にか飛翔にメダジャリバーを突き付けられていた。

「1人でもやるか？」

「……降参します」

成す術が無くなったキャロは降参せざるを得ないのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「まがい物って言ってた割には凄いパワーだったな」

「まあ、作ったのが蒼だしね」

「兄様の言葉、否定できませんね」

模擬戦を終えた後、烈と飛翔は木陰で休んでいた。ちなみに烈はひざ枕されたままだ。飛翔は胡座をかいて座っている。

蒼は今ダブルドライバーをスバルとギンガに渡して試させている。

「すいませ～ん！」

と3人のところへエリオがやってきた。エリオは飛翔に切られて10分程気絶していたが目を覚ましたようだ。

「エリオ君、どうしたんですか？」

「アオさんがそっちの人に渡したのを持って来てって言われたんです」

エリオは飛翔に軽く目を向けながら言う。逆に飛翔はエリオをじっ

と見つめていた。

「あ、あの、僕の顔に何かついてます？」

飛翔の視線に気付いたのかエリオは飛翔に尋ねる。

「お前は……何で戦っている」

「えっ？」

「その歳で…子供なのに何で戦うんだと聞いている」

飛翔は若干エリオを睨みながら問い掛ける。
エリオは飛翔の睨みで少し怯えたがはっきりと答えた。

「フェイトさんの力になる為です」

「何故だ？」

「フェイトさんは僕を救ってくれた。だからその恩返しがしたいんです！」

エリオは力強く叫ぶ。が、飛翔の表情は変わらない。

「それは戦う事でしか返せないものなのか？」

「別の方法もあったのかもしれません。でも、これが一番フェイトさんの力になれる方法だったんです！！」

エリオはさっきよりも力強く叫ぶ。自分の意志を飛翔に見せ付けるように。

飛翔はそれを聞いても「ふうん」としか言わなかった。

「じゃあもう一つ聞くぞ。戦うというのなら、戦う相手を殺す覚悟や相手に殺される覚悟はあるのか？」

「殺す覚悟！？　貴方は何を言ってるんですか！？」

エリオは何を馬鹿なことを言っているんだと怒りながら叫ぶ。

「飛翔の言うことは間違っていない」

「兄様？」

「烈さん！？」

「じゃあ聞くけど、エリオ、君は誰かと戦う時絶対に死なないって思ってるの？

どんな凶悪な犯罪者を相手したとしても、絶対に殺されることな

んかないって思ってるの？」

「そ、それは……」

烈の発言にエリオは言葉が詰まってしまう。

「子供だから許されるなんて思うな。女だろうが子供だろうが、戦うのなら殺す覚悟と殺される覚悟を持つ必要があるんだ」

「その点で言ったら、非殺傷設定の存在もどうかと思うんだよね。非殺傷設定って本当に非殺傷じゃないし」

「……」

飛翔と烈の言葉にエリオは本当に言葉を返せなくなる。

「……それでも」

エリオは拳を力強く握りしめて必死に言葉を搾り出す。

「それでも僕は人を殺したくなんかありません！！　どんな相手であっても絶対に！！」

エリオの必死の叫びに、飛翔は呆れたかのようにため息をついた。

「わかった。もういい」

そしてオーズドライバーをエリオに投げる。エリオはそれを受け取った後、一旦飛翔を睨んでからスバル達のところへ走って行った。

「あ、あの、飛翔さん。何故エリオ君にあんなことを?」

エリオが去った直後、アリステラが飛翔に尋ねる。

「いや……ちょっと、昔を思い出してな」

「　?　」

飛翔の言った言葉の意味がわからず、アリステラは首を捻る。

「……ま、誰かの為に戦うってのは間違ってないと思うけどね。俺もゲンヤさんの為に管理局に入ったんだし」

「烈は……どう思ってるんだ」

何を？　とは聞かない。

「俺は自分が生きる為……大切な人達を護る為なら相手を殺すことを厭わない」

「そうか。……この世界の俺（エリオ）もせめてそうであってほしいんだがな」

「ん？　何か言った？」

飛翔の呟きは小さく、烈には聞こえなかったようである。

「いや、何でもない。……昼寝でもしないか？　少し疲れた」

「そうだね。アリス、えっと……」

「このままでいいですよ、兄様」

そ。と烈は言って、寝転がった飛翔と共に眠るのであった。

第４５．５話　六課の訓練場で「変身！」と叫ぶ（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

リインフォース
「今回は海人様の作品『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｓｗｅａｔ　Ｓｏｎｇｓ　Ｆｏｒｅｖｅｒ～』とのコラボだ」

蒼
「今回の貰い物はバルディッシュ様より、トラカンドロイドを頂いた。メダジャリバーもバルディッシュ様からの貰い物だ」

烈（黒）
「ゲストは異世界のエリオ・モンディアルこと不破飛翔だ」

飛翔
「どうも。不破飛翔だ」

蒼
「実は私と兄さんはライ様の１００万記念の時に飛翔と会っている」

リインフォース
「今回の話では初対面ということになっているがな」

烈（黒）
「それはさておき飛翔、オーズに変身したのはどうだった？」

飛翔
「メダルでの変身とは思わなかったな。俺はたいてい剣（ブレイド）のようなカ

ード型を使うし。だけど悪くはなかった」

蒼
「そんな飛翔にプレゼントだ」

（＾・ω・）つ　偽オーズドライバー／偽ダブルドライバー

飛翔／烈（黒）
「……偽？」

リインフォース
「偽物だからか？」

蒼
「そうだ。本物のドライバーよりも全体的な能力は低いし、オーズの方はガタキリバやラトラーター、サゴーゾ等のタトバ以外へのコンボチェンジはできない。ダブルの方はファングジョーカーやエクストリームにはなれないという難点がある」

飛翔
「あれで本物よりも低いのかよ」

烈（黒）
「凄いと思うべきか呆れるべきか」

リインフォース
「蒼のやることだからな。気にしたら負けだ」

飛翔
「なるほど。……じゃそろそろ帰るな」

烈（黒）
「ああ。またな」

蒼
「黒猫も連れて帰れよ」

飛翔
「わかってる。じゃあな」

飛翔がログアウトしました。

リインフォース
「さて、今回も終わるとするか」

烈（黒）
「次回はアプロディーテ様からのリクエストだ」

蒼
「では、次回もよろしく頼む」

第４６話　草薙兄妹の外出（前書き）

約１ヶ月ぶりの更新という……

今回はアプロディーテ様からのリクエストです。

出来栄えは……ちょっと微妙です。

ではどうぞ！

第４６話　草薙兄妹の外出

俺は今、妹達と一緒にクラナガンの町を歩いている。

そういえばこの世界に来てから兄妹だけで過ごしてないなぁ。と思ったので、皆で出掛けることにしたんだ。別の理由もあるけど。

……え、仕事は？　だって？

えっとね、俺とエイとギンガの１０８部隊の３人は六課出向扱いとはなっているものの、出向とは名前だけみたいなもので、なのはさんやはやてさん達は俺達に対して戦闘機人及びレリック以外の案件に対する指揮・命令権限を持っていないんだ。

元々そういう条件での出向なのだから。

前にも述べたように、戦闘機人が関わらない案件に協力する必要は無いし、本来なら訓練に参加する必要すらない。

また、書類処理はゲンヤさんから送られてくるもの（集中すれば１時間程度で終わる量）だけ処理すればいい。

ちなみに送られてきた書類データの中に、はやてさんが一度こっそり六課の書類データを混ぜたことがあったけど即行で突き返したよ。

新設部隊は書類仕事が多いから俺達にやらせて楽したいと思っていたようだけど、なんでも自分の思い通りになるほど甘くはないんだよね。

まあ何がいいたいのかと言うと、俺達は六課では殆ど縛られないし自由な時間も多いんだってこと。

実際に俺は時々訓練には参加するけど、基本的には妹達と一緒にい

ることが多いし。
ただ俺は捜査指揮や戦闘指揮を行うのが多いから、自分で言うのも何だけど１０８部隊ではけっこう重要な役割を担ってるだ。だから時たまゲンヤさんに呼び戻されることもあるんだ。

まあ長々と説明したけど、仕事が少なくてフリーな時間が多いからこうやって外出できるってわけ。
ゲンヤさんには軽い休みだと思えって言われたよ。
他にも「あのチビ狸に都合良くギンガや烈を利用されてたまるか！」、とも言ってたけどね。

さてそれはさておき、外出と言えばこの間のリハビリ明けの時以来だね。

この間のエイとの外出は、地下水路での戦闘に協力したから中途半端なものになっちゃったしね。
そういえば……あの時の外出はエイとの約束も兼ねていたわけなんだけど、エイだけじゃなくアリスやギンガとも外出（デート）の約束もしちゃったんだよね。
アリスとエイについてはデートと思っている訳じゃないけど、ギンガは……俺に恋愛感情を持っているのは知ってるけど、別に俺もギンガのこと嫌いって訳じゃ……って！　そういうことじゃなくて！！

……ゴホン。とまぁそういう訳なんで、今回の４人てのお出かけはアリスと、中途半端になったエイのお願いも兼ねてるんだ。だけど……

「わざわざ腕を組む必要はないんじゃない？」

と俺の両隣にいる2人に尋ねる。

「別にいいじゃないですか」

俺の右腕と腕を組んでいるアリスが答えて更に腕に力を篭め

「寧ろ周りの奴等に見せつけてやればいいだろ？」

左腕と腕を組んでいる蒼も答え、アリス同様に更に腕に力を篭める。美少女2人（妹だけど）と腕を組んでいるため、周りを歩く人々（特に男性）から嫉妬と殺気の篭った目で見られている。

「……いいなぁ、お姉ちゃんに蒼さん」

そう呟くエイは羨ましそうな目でアリスと蒼をチラチラ見ながらアリスの隣を歩いている。

ちなみにみんなの服装だけど、俺は右脇腹の部分で交差する2本の白い十字架が描かれた黒いシャツにジーンズ。ちなみに髪は解いている。

蒼は髪をポニーテールにまとめ、上は黒いシャツに白く薄い半袖の

上着。下は大きめの茶色いベルトを着けた短パンジーンズに黒いブーツ。
アリスは髪はそのままで、上は星の模様が描かれた白いシャツに淡い水色の長袖の上着。下は藍色のミニスカートでソックスは白。
エイは前回と同じで黒のワンピースに稲妻のペンダント。ただ髪型だけ何時もと違って、ポニーじゃなくて三つ編みになってる。

（※言っておきますが作者はファッションに詳しくないです）

なんか変な声が……まあいいか。読者の皆様が妹達の服装が似合ってると思っていてくれてるかはさておき。

「さて、みんなどこか行きたいとこはある？」

出かけたはいいものの、どこに行くかは全く考えていなかったのでみんなに聞く。

「私はどこでも構わないぞ」

「私もマイロードが行きたいところで！」

むう。２人はそう言うかぁ。

「アリスは？」

「えっと、じゃあ、服とか見に行きたいです」

「服、ね。蒼とエイもそれでいい？」

「はい」

「ああ」

2人も問題ないって言ってることだし、まずは服屋に行きますか。

◇◇◇◇◇

ということで、クラナガンで人気の洋服屋に来た訳なんだけど

「……どうしてこうなった」

「ククク……似合ってるじゃないか兄さん」

「流石お姉ちゃん！」

「これは……萌えですね！」

妹達の台詞でわかったと思う。……女装させられてるんだ。ちなみに今の服装は、ＺＡＦＴ歌姫の服って言ったらわかるだろうか？

……というか何で売ってるの？

「兄様って女の子っぽい顔付きだからどうかな～～。って思ったのですが、まさかこれほどなんて」

「わかった。わかったから写真撮らないで！　恥ずかしいから！！」

今軽くデジャブ感じています。

「あ！　そういえば、前にギンガがマイロードの女装した写真見てたよ？」

「……見たいな」

「……アオちゃんに賛成です！　帰ったらギンガさんに見せてもらいましょう！！」

何か聞き捨てならないこと言ってるんだけど……帰ったらギンガに詳しく話を聞かないとね。

「それはそうと兄さん、次はこれを着てくれ」

そう言って蒼が持って来たのは、肩と胸元の部分が少し露出していて、下が袴じゃなくて黄色いリボンの付いたミニスカになっている赤紫色の着物。

「作者が『ＳＴＡＲ　ＤＲＩＶＥＲ　輝きのタクト』にハマってるからな。仮面と鉄扇もあるぞ？」

「メタ発言控えて！　って言うか次って何！？」

「何って、兄様の着せ替えショーをするんですよ」

「ワクワク、ワクワク！」

そう言いながら、アリスもエイも別の服を持っている。……しかも女物。

「……拒否権は？」

「「「ない（です）！」」」

ですよねー。……訓練校の時（５０万記念）に比べたらマシと思うべきなのかな？

「ってことで、どんどん逝ってみよーー！」

「「おおーー！！」」

「字が違うよ！？　って、うわあぁぁぁぁ！！」

……今回は手遅れだけど、今後は気をつけよう。

……もう女装は勘弁してほしい。

ちなみに

ガタンッ！！

「どうしたのツバキ～？　いきなり立ち上がって～？」

「……今何かいいものを見逃したような気がするわ」

「？」

ということが陸士３２９部隊にてあったとか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「いやー、眼福だった」

「ホントですねー」

「……ハフゥ（顔を赤らめる）」

「つ、疲れた（精神的に）……」

約１時間後、服屋を後にした俺達は、クラナガンの中央公園でクレープを食べながら一休みしていた。

あれから蒼の渡した和服に続いて、初代炎髪灼眼の討ち手の服、方

天画戟を奮う三国最強の武将の服（武将が全員女性のやつ）、腹ペコ騎士王の服（というか甲冑）、颯爽登場する銀河美少年の服ｅｔｃ……。約１０着ものコスプレをさせられた。カツラまで被せられて。

そこ、男物の服あったからよかったじゃんとか言わない。

ちなみに俺が着させられた服の内、２～３着ほど蒼が買っていた。

……また俺に着せるなんてことはないよね（汗）？

「……ふぁ」

「エイ？」

エイが眠たそうに軽く欠伸をする。どうしたんだろ？

「あー、多分昨日遅くまで私と話してたからですね」

「楽しかったからつい……ふぁ」

「喋るのは構わないが、あまり遅くまで起きているものじゃないぞ」

「「蒼が（アオちゃんが）言っても説得力ない（です）」」

曰く、夜遅くまで起きてパソコンを使って何かやっているらしい。

……また動画？　なのはさん達が為す術なく１対多で負けるやつ。

1回目と2回目両方とも削除されたから、次をアップしてもまた消されるだろうけど。
（2回目はライ様の作品の外伝その２０にて）

「まあそれはいいとして、エイ、眠いなら寝てもいいよ。膝くらい貸してあげるから」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

そう言ってエイは横になって、ポスッと頭を俺の膝に乗せる。
頭を撫でてあげるとゴロゴロと猫のような声を挙げて、すやすやと眠りだした。

「……Ｚｚｚ」

「アリスは眠くない？　膝はエイが使ってるから肩なら貸してあげれるよ」

「ん～あまり眠くはありませんが、せっかくですので私もお言葉に甘えて」

アリスは俺の体に体重を預け、右肩に頭を乗せる。
言い忘れてたけどベンチに座ってる順番は左からエイ、俺、アリス、蒼だ。
アリスの頭も撫でてあげる。右手でしてあげたいんだけど、右腕が塞がってるから左手だ。

「～～～♪」

「そして周囲の男の嫉妬を買う兄さんであった」

「今更でしょ。それに見せつけてやれって言ったのは誰だったっけ？」

「まあ私だな」

そう言って蒼は立ち上がる。

「どうしたの？」

「いやなに。ゴミを捨ててくるだけさ」

「そ。じゃ、これもよろしく」

俺は蒼に3人分のクレープの包みを渡す。

「ついでに何か飲み物でも買ってきてやろうか？」

「あ、私はおしるこで」

「アリスはおしるこっと……って、季節を考えろ。今夏だぞ（現

実じゃ冬だけど）」

「俺は……ポーションで」

「はいはい兄さんはポーションな……って、ＲＰＧ!?　兄さん体力減ってないだろ!?」

「突っ込むとこそこなんだ。じゃあ……日差しが暑いからクーラードリンクで」

「今度はモンハン!?　３ｒｄ好評発売中（作者は持ってない）！！　……って、なんで私がツッコミせにゃならんのだ!!」

「「いつもと違う蒼を（アオちゃんを）見てみたいと思ったから」」

「そんな理由で!?」

いつもずっとクールビューティーだからね。
たまには良いんじゃない。こういうのも。
というか、さりげなくノリツッコミだったし。

《お前が弄られるのも珍しいな》

《クソっ！　今度高町達にＳＬＢ連射して八つ当たりしてやる！》

《ＳＬＢは撃てても連射は不可能だ》

この時六課隊長、特にフェイトは身の危険を察知したとかしなかったとか。

閑話休題。

「まあ冗談はこれくらいで、飲み物は何でもいいですよ」

「さすがに売ってないだろうしね」

「あーはいはい、わかった。わかりましたよ。5分程度で戻る」

蒼は軽くふて腐れながらもちゃんと4人分のゴミを持っていった。

拗ねたような顔がかわいらしいと思ったのは別の話。

◇◇◇◇◇

アオちゃんが戻ってくるまでの間、かるーく暇なので兄様と他愛もない話をしていた時でした。

「おい」

突然呼び掛けられたので声のした方に顔を向けると、厳つい顔で黒い服に灰色のズボンを穿いた２０代後半の男性が私達の前に立っていました。
兄様はその男性を見た途端、目を細めて相手を睨むような目つきになりました。明らかに相手に敵意を向けています。どうしたんでしょう？

「貴様、管理局の草薙　烈だな」

「……聖王教会の人間が俺に何の用だ」

明らかに不機嫌ですと表情だけでなく声でも示すように、兄様は口調を変えて言葉を返します。

聖王教会って確かこの間のおばｓａ…んん〝っ！　少将の人が所属しているところでしたっけ？
それに聖王ってあのオリヴィエ・ゼーゲブレヒト王女のことでしょうか？
だとしたら、教会というくらいですし、恐らく聖王教会というのはゼーゲブレヒト王女を崇める宗教組織ということでしょう……多分。

まあ詳しいことは後で兄様に聞くとして、何故兄様は突然不機嫌に？　一瞬で雰囲気変わっちゃいましたよ。

私の疑問の答えは直ぐに相手の方から返ってきました。

「何の用だ、だと？　決まっている。貴様の持つ電気の変換資質をもっている古代ベルカの融合騎を我に差し出せ」

「はあっ！？」

「……」

「……Ｚｚｚ」

男性のとんでもない発言に対し私は驚き、兄様は無言でさっきよりも強い殺意を向け、エイは寝たままです。

「貴方、何ふざけたことを言ってるんですか！！」

私は立ち上がって男性に怒鳴った。いきなり現れたと思ったらエイを寄越せ？　しかも物扱い！？　冗談じゃない！！

「黙れ小娘！　古代ベルカの遺物を管理するのが我ら聖王教会の役目！　貴様のようなガキがその融合騎を持っていることがふざけているわ！！

そしてその融合騎は我と同じ電気の変換資質を持っている。そいつは聖王教会第二騎士団隊隊長の我にこそ相応しいのだ！！」

……キレてもいいですよね？　私、キレてもいいですよね！？
兄様が不機嫌になった理由がわかりました。聖王教会ってエイを狙うような最低な組織なんですね！！

「貴方のような粗暴な人が騎士？　ハッ！　ベルカの騎士の質は古代からとんでもないレベルで堕ちたようですね！！」

「小娘風情が！　誇りある騎士を愚弄するか！！」

「誇り？　小さな女の子を掠おうとするののどこが騎士の誇りか！！　そんなものゴミ溜めにでも捨ててしまえ！！！」

あまりにも怒った所為か、いつのまにか私も口調が変わってしまいました。ですがたいしたことではありません。

「小娘……騎士の誇りを侮辱したな！！」

相手の男性も頭にキタようで、首から下げていたデバイスに手を掛ける。
さすがにマズイと判断したのか、直ぐに反応できるように兄様も紅月に手を掛けます。

「万死に値すｒ……　「おぉーっと手が滑ったあぁ！」　……な？
ゴフッ！？」

当然アオちゃんの叫び声が聞こえたと思ったら、声のした方から缶が飛んできて男性の顔面に直撃しました。男性は鼻が折れたらしく鼻血を出しています。
ちなみにおしるこの缶でした。ってか売ってたんですか。……なんでしょう、アオちゃんの登場で怒りが冷めてしまいました。

「き、貴ｓ…　「あー、こんどは足が滑ったー（棒読み）」　…グ◇＃ｐｋｔる$☆ｆｇこ※@%♂！？」

男性が振り返った途端、アオちゃんは男性の股を蹴り上げました。ええ、それはもうおもいっきり。男性は奇声を挙げて悶絶し、そのまま倒れて気絶しました。アオちゃんグッジョブです！

「突然デバイスを取り出したから潰したが……誰だこのオッサンは？」

「エイを連れていこうとした自己中教会の狂信者」

「……ああ、なるほど。
（聖王教会ってやつか。信仰心の高い宗教組織と言えば聞こえがいいが、武装戦力を保有してるし本局との強い癒着ももっている。あの年増を少将にするくらいだしな。
　さらに回収する物が古代ベルカ関連というだけで、実際は管理局がロストロギアを他の世界から無理矢理回収してることと変わらない。まともな組織じゃないな）」

アオちゃんは兄様の単純な説明で理解したようです。双子だからですかね？

「……ん、んみゅう？」

あ、エイが起きちゃいました。

「あ、起きちゃった？　あーあー、蒼が騒ぐから」

「私の所為か！？　こいつの叫び声だろ！　こいつのピーーー！を潰した時の！」

「女の子がピーーー！とか言わない！！」

そうですよアオちゃん！　女の子なんですから！！　胸がな1……いえ、何でもありません。言ったら殺されます。

「え、えぇっと、私が寝てる間に何かあったんですか？」

「ん？　何もなかったよ。それよりもエイの寝顔は可愛かったなぁ」

「はうッ！！」

さっきまでの殺気（※シャレじゃないですよ）が嘘のように兄様は笑います。
ちなみにエイが赤面している間に、アオちゃんがエイに気付かれないように男性を茂みの中にポイ捨てしていました。
ダメですよアオちゃん。ポイ捨てなんかしちゃ。ちゃんと粗大ごみに出さないと。

ちなみにその時

《粗大ごみより燃えるごみとして棄てたいな》

《……焼き払うか？》

《めずらしく物騒なことを言うな、リインフォース》

《今回はさすがに私も腹が立ったからな》

《だったらいっそのこと拷問でも……》

などという物騒な脳内会話があったとか。

「んー、エイも起きちゃったことだし移動しようか（あの男が目を覚ましたら面倒だしね）」

「そうだな（……永遠に目を覚まさないようにするという手もある

が）」

「あ、はい！　わかりました！（寝るの迷惑だったかなぁ）」

そう言いながら兄様とエイはベンチから立ち上がります。
あの男性が目を覚ます前に移動しようってことですね。確かにその方がいいですね。

「じゃあ何処行きましょうか？」

「そうだねえ……」

私がそう言って私達は目的地も決めずに歩き出しました。

ちなみにアオちゃんはおしるこだけじゃなく、クーラードリンクも買ってきていました。……何で売ってたんでしょう？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「そこのお兄さんとお嬢さん達、ちょっと見ていかないかい？」

あのキチガイを放置してから４人で公園の中をしばらく歩いていると、声を掛けられてた。

声を掛けたのはカラフルで派手なアロハシャツを着て、丸目のサングラスを掛けた陽気な３０代の男性。

どうやら何か売ってるらしい。どうしようか悩んでいると、エイが行ってみたいと言ったので行ってみることにした。

「お！　ホントに見に来てくれるとは思わなかったよ！」

「……アクセサリー、ですか」

男性は路上でアクセサリーを売っていた。敷いたシートの上に置いた台や布の上に様々なアクセサリーが並んでいる。

リング、ペンダント、ブレスレット、チェーン、イヤリング、ピアス、髪留め等が太陽の光に反射して輝いている。

エイとアリス、めずらしく蒼もアクセサリーに魅入っている。

「そ。でもあんまりお客が来なくてなかなか売れなくてねぇ。お兄さん、何か買っていかない？　安くしとくよ。彼女達も喜ぶだろうし。てゆーか三つ又？」

「そうそう、私が彼女1号で」

「私は2号でーす」

「あわわ！　わ、私が3号でしゅ！」

「全　員　妹です！　3人共悪ノリしない！！」

蒼はともかく、エイがノッたのは思いもしなかった。恥ずかしかったのか顔が真っ赤だけど。

「「ええーーー」」

「はいそこ、残念そうにしない！」

「ハハハ！　おもしろい妹さん達だね！！」

こっちは恥ずかしいですよ。

まあ、慕われてるからいいけど。

「それにしても、綺麗ですね」

俺は並べられている星型のペンダントを手に取ってみて素直な感想を言う。

「そう言ってくれると嬉しいね。でも、なかなか売れないんだよね。やっぱ路上で売ってるのじゃ信用できないのかねぇ」

ハァ、とため息をつく男性。
売れないんだ。出来はいいのにね。
と思った時、服の裾を引っ張られた。引っ張ったのはエイだ。

「どうしたの、エイ？」

「えぇっと、その……」

しどろもどろと話すエイ。よく見てみると、裾を掴んでいる手とは逆の手に髪留めをもっていた。
その髪留めは、黒いヘアゴムに簡単な銀のチェーンみたいなものがゴムの回りを包むように装飾されたものだった。
並べられている品物を見てみると、同じ髪留めでヘアゴムが白でチェーンが金色のものもあった。

「……それ、欲しいの？」

「は、はい！」

髪留めかぁ。……そういえば俺の髪留めもずっと同じもの使ってるなぁ。それに……ちょうどいいかな。

「すみません。この髪留め、黒2つと白2つお願いします」

「ありがとねお兄さん、まいど」

「いえ。はい、エイ」

「ありがとうです、マイロード！」

エイは喜んで受け取って直ぐさま着ける。

「に、似合ってますか？」

「なかなか良いじゃないか」

「かわいいよ、エイ♪」

「そう言う蒼とアリスにも」

エイを褒めた2人に俺は一緒に買った白い髪留めを渡す。
いきなり渡されて2人は戸惑っている。

「えっと、兄様。いいんですか？」

「いいんだよ。せっかくだから記念に兄妹でお揃いのものでも買ってみようかな、って思ってみただけだし」

「なるほど、な。ま、せっかくの兄さんからのプレゼントだ。有り難く貰っておこう」

そうですね。とアリスも納得したようで、素直に受け取った。

「さてと。それじゃそろそろ帰ろうか？」

「はいです♪」

「帰ったらはやてさんが愚痴ってきそうですね」

「安心しろ。そうなったら潰してチビ狸から豆狸にしてやる」

蒼の言葉に皆アハハと笑いながら、俺達はゆっくり帰路に就くのだった。

第４６話　草薙兄妹の外出（後書き）

今回はあとがきコーナーではなく、今回の話のＱ＆Ａです。

他の作者様でＱ＆Ａ方式をやっていたのを見たのでやってみたくなったからです。

……あと説明不足な部分もあったので、補足説明ということで。

Ｑ：嫉妬した野郎どもとアクセサリーを売っていた男性は、何故髪を解いた烈が男だとわかった？

Ａ：前者は蒼とアリステラと腕を組んでいたから。後者は服装と雰囲気です。

Ｑ：烈がコスプレした服装の元ネタは？

Ａ：順番に、《ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ》、《ＳＴＡＲ　ＤＲＩＶＥＲ　輝きのタクト》、《灼眼のシャナ》、《真・恋姫†無双》、《Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ》、最後に再びスタドラです。

Ｑ：蒼がちゃっかりコスプレの服を買ってたけど着るの？

Ａ：一着は着る予定。残りは未定。

Ｑ：聖王教会第二騎士団って？

Ａ：教会騎士団というのが存在するらしいのですが、詳しい説明か

ないので勝手に考えたました。

Q：エイジスが狙われた回数は？
A：2年の間で数回。全員信仰深い過激派の人間です。しかしそいつ等がエイジスに接触する前に烈が潰しているので、エイジスは狙われていることを知りません。というか不安にさせたくないので教えません。
　こういう訳で烈は聖王教会が嫌いです。ちなみにアリステラの存在は聖王教会に知られていません。

Q：最後に買った髪留め。烈とエイジスはともかく、髪型がストレートの蒼とアリスは使うの？
A：2人は基本使わずに、ミサンガのように手首に着けています。
……これ以上ポニーテールを増やす訳にもいきませんから。

Q：今回の貰い物は？
A：バルディッシュ様より、サイ、ゴリラ、ゾウ、ウナギ、タコのコアメダルを。ライ様より、【EX版フルサイズ用のプログラム（小人サイズ、子供サイズ、大人サイズの三つのモードに変化するモノ）】を頂きました。ネタになりそうな貰い物ですｗｗｗ

他にも疑問に思ったこと等がありましたら気軽に質問して下さい。

次回の更新は……わかりませんね。受験が終わるまでできないかもしれません。
遅くても受験が終わった3月中旬ですかね。それからは普通に再開

できるかと。

余談ですが、最近新しい小説のネタ（リリなの）が浮かんできたのですが、無印を見直さなければいけませんし、プロットもほとんど考えてないので書くかどうかは未定です。何でこんな時期にネタが浮かぶんでしょうね。

ではでは次回もよろしくお願いします！

新☆春　～草薙一家座談会～

蒼
「というわけで始まったぞ、草薙一家座談会」

烈／アリス／エイ／リイン
「「「「「どういうわけで！？」」」」」

蒼
「（無視）そして読者の皆様、あけましておめでとう」

烈／アリス／エイ／リイン
「「「「「（無視したよコイツ）あけましておめでとう（ございます）！！」」」」」

蒼
「場所はミッドチルダのマンションにある草薙宅。全員、炬燵（こたつ）の中からお送りするぞ」

アリステラ
「暖か～い」

エイジス
「ポカポカです～」

リインフォース
「草薙宅って……いつの間に」

烈（黒）

「この部屋については、ウチの話のＳｔｒｉｋｅｒＳ原作終了後の設定だと。で、この座談会の意味は？」

蒼
「作者がクリスマス特別編とかできなかったからやっておこう、だと。ちなみに、入試的にバレンタインデー特別編も書けないと言っていたな。
どうでもいいが、作者は週始め数年振りに風邪を引いて発熱・頭痛・下痢の３コンボ。今でも腹の調子が悪いらしい。今年のノロウィルスは強力らしいから読者の皆様も気をつけるように」

アリステラ
「インフルエンザにも気をつけて下さいね～～。はむ」

エイジス
「ですよ～～。んぐんぐ」

リインフォース
「２人共、炬燵が気に入ったようだな」

烈（黒）
「蜜柑も食べてるしな」

蒼
「炬燵は良いものだ（コイツも蜜柑を食べながら）」

リインフォース
「確かにそうだが……蒼、婆臭いぞ」

蒼

「だ・れ・が・バ・バ・ア・だ（怒）」

アリステラ
「アオちゃんでしょ。モデルになったアニメのキャラ的に」

烈（黒）
「ヴァイスも蒼のことを何百年も生きた魔女って言いかけたくらいだしな」

蒼
「うん。ちょっとお前等黙れ。それ言ったら古代ベルカの時代から生きてる、アリスとエイジスとリインフォースの方が婆だろうが！！」

アリステラ
「問題無いですもーん。ライ様からの貰い物のお陰で２０歳くらいの姿になれますし」

エイジス
「というか、私達デバイスだし」

リインフォース
「私も元々プログラムだからな。あまり気にしていない」

蒼
「なん……だと……？」

烈（黒）
「……ドンマイ」

アリステラ
「それはさておき、去年はいろいろとありましたねー」

エイジス
「マイロードがフラグ立てたり、マイロードが何回も倒れたり、マイロードが女装したり、マイロードが女装したり……」

烈（黒）
「女装って2回も言わなかったか!?」

エイジス
「大事なことなので。てへ♪」

リインフォース
「それを言ったら、蒼が高町をフルボッコにしたり、蒼がテスタロッサをフルボッコにしたり、蒼がシグナムをフルボッコにしたり……」

蒼
「私のはフルボッコばっかりか!!　いや、事実だけどさあ!!」

アリステラ
「じゃあ後は、異世界に行ったり。ですね」

烈（黒）
「その所為か、コラボの話を書く時に蒼がメインになってしまうことの方が多いと作者が言っていたな。……一応主人公は俺なんだがな」

エイジス

「人気投票でも……あ、これを言ったらお姉ちゃんが怒る」
（※アリステラは第1回人気投票で草薙家唯一のランク外）

リインフォース
「凍付けにされるな」

蒼
「だろうな。リアルの話だと、中国漁船衝突事件。賭博の問題。アニメや出版社、漫画家や読者様（＋作者）達に喧嘩を売った規制法等があったな」

烈（黒）
「あの規制法は赦せん」

リインフォース
「同じく」

アリス／エイ
「「以下同文です」」

蒼
「今年はいいことがあればいいのだが……どうなることやら」

烈（黒）
「なんとも言えんさ。さてこの座談会もそろそろ終わりに……」

蒼
「ところがぎっちょん！！」

烈／エイ／リイン

「「「　？　」」」

アリステラ
「ガンダムと言えば００の映画もありましたし、２月にＧジェネが発売されますね」

蒼
「いや、それはどうでもよくて。読者の皆様にお知らせだ」

リインフォース
「何だ？　連載については前回説明しただろ？」

蒼
「それもあるが今は置いといて。この作品、実はそろそろ１周年なんだよな」

アリステラ
「そういえばそうですね。当初は私の名前決まってなかったんですよね。さらに本来はリインフォースさんの登場予定が無かったとか」

リインフォース
「なん……だと……？」

蒼
「それは私がやった。んで、確かに１周年なんだが記念話を書く暇がない。でも何かしたい。というわけであるものが浮かんだ」

エイジス
「あるもの？」

蒼
「それは……

第2回キャラクター人気投票だ！！」

烈／エイ／リイン
「「「な、何だってーーー！！」」」

アリステラ
「……アオちゃん。ちょっと凍付けにしていいですか？」

蒼

「私が前回1位で、お前がランク外だからって僻(ひが)むな。今回はランクインするかもしれんぞ？」

アリステラ
「……むぅ」

蒼
「本来はＳｔｒｉｋｅｒＳ原作終了時にやろうと思っていたらしいが、２０話以上先になるだろうし、前回から半年過ぎてるから調度いいだろうということらしい」

烈（黒）
「まあ確かに、『その日、機動六課』まですら7～8話くらいある予定だからな」

蒼
「そういうわけだ。では、今回の人気投票のルール説明だ」

【投票についてのルール】

1：投票対象について
・この作品で登場したオリジナルキャラクター全て（ルノーダ・イムラーや謎の女性含む）
・これまでに登場した原作キャラクター全て。
・１０８部隊にて登場したガンダムネタのキャラクター達は対象外とします。

2：票について
・読者1人につき3票までとします。
・1～3位まで選び、1位のキャラから3点、2点、1点としてカウントします。
・1人しかキャラを選ばなかった場合は1点としてカウントします。
・また、何故そのキャラなのか理由もお願いします。

3：投票方法について
・ユーザーIDをお持ちの方、できるだけメッセージでお願いします。
・ユーザーIDをお持ちでない方は感想板で投票して構いません。
・何故メッセージなのかという理由は、感想板だと読んで結果がわかってしまうからです。

4：無効投票について
・次の投票は残念ながら無効とさせていただきます。

『嫁投票』
『矛盾投票』

嫁投票は前回の結果からです。ただ、嫁ということ以外の理由があれば問題ありません。
矛盾投票については特に原作キャラに当て嵌まります。
例えばなのはが「母性あふれる女性」だとか、ヴィータが「面倒見がある」だとか、全くそんな描写が無いのに上記のような理由であったりする場合、無効とさせていただきます。

エイジス
「以上、ルール説明でした」

烈（黒）
「感想板で書くとバレるってのは、前回やった後に気付いたらしいが」

リインフォース
「嫁投票無効は……私の所為か？」

蒼
「有りだったら必ず上位にランクインするし、作者までもがリインフォースに入れてしまうからだと。ギンガとティアナにもな」
（※ちなみに作者に投票権はありません。例え話です）

エイジス
「あ、あの！　質問です！」

蒼
「何だ？」

エイジス
「前回はありませんでしたが、1位になったら特典とかないんでしゅか？　……あぅ／／」

蒼
「作者曰く、未定とのこと。ただ1位のキャラの特別編をやってもいいとは言っている」
（いっそのこと、読者様に決めてもらいますかね？　投票と一緒にやってほしい話を書いてもらうとか）

烈（黒）
「（さっきから変な声が聞こえる気がするんだが……）」

リインフォース
「（烈、それは多分、気の所為じゃない）」

アリステラ
「（今度こそ……今度こそランクインしてみせます！！）」
（※ツバキとエルフィもランク外だったんですが……）

蒼
「とまあ、そういうことで。多くの読者様からの投票を待っている。ちなみに、投票締め切りは今のところ1月いっぱいだ」

エイジス
「長いですねー」

蒼
「あくまで予定だ。変更等があれば活動報告で告知する」

リインフォース
「だ、そうだ。では、そろそろ終わるか」

烈（黒）

「ああ。毎回読んでくれる読者の皆様、本当にありがとうございます」

アリステラ
「これからも、よろしくお願いしますね」

エイジス
「そ、それでは！」

全員
「「「「「また次回！！」」」」」

新☆春　～草薙一家座談会～（後書き）

あらためまして、あけましておめでとうございます。作者のKの2乗です。

去年はマテコラとか言いたくなるような出来事がありましたが（漁船とか規制法とか）、今年は良い年であるといいですね。

で、人気投票についてですが前回の内容を変えてみた結果、座談会にて説明したようになりました。
無効投票については、前回の結果とウチの原作キャラの一部がウザいキャラになってしまった為です（↑つまり私の所為です）
メッセージで投票するのは些か面倒かと思われますが、どうか投票よろしくお願いします。

それでは皆様、今年もこの作品をよろしくお願いいたします。

第2回人気投票結果発表（前書き）

昨日に間に合わなかった。実際は昨日で1周年でした。

面倒くさがりの自分がよく続いたものです。

投票してくれた読者の皆様、ありがとうございました。

これからもこの作品をよろしくお願いします。

第2回人気投票結果発表

ツバキ／エルフィ
「「第2回人気投票結果発表～～～！！」」

ツバキ
「こんにちは。今回の司会を務める、ツバキ・ヒメミヤよ」

エルフィ
「同じく司会のエルフォニア・ツェンベルグだよ～！　長いからエルフィって読んでね～♪」

ツバキ
「何で今回の司会が私達なのかって？　前回司会だった八神二佐が『あんな怖い思いしとおない』と言ったからよ。何があったのかしら？」

エルフィ
「ジュレスが聞いた話だと～、何でも烈と高町一尉にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩされたらしいよ～」
（※蒼にもされています。零距離ＳＬＢというＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩを）

ツバキ
「……烈って怒ると怖いわよね」

エルフィ
「……そうだね」
2人

「「……」」

ツバキ
「き、気を取り直して！　結果発表を始めるわ！」

エルフィ
「票が入ったのは全部で7人。誰かな～～？」

ツバキ
「それを今から発表するのよ。じゃあ、最初は第7位の発表よ」

エルフィ
「得点は1ポイント～。投票者数は1人だよ～ん」

ツバキ
「第7位は……」

ダララララララララ……

デデン！

ツバキ
「この作品のヒロインにして私の恋敵！　ギンガ・ナカジマさんよ！」

ギンガ
「前回よりも……下がっちゃった？」

エルフィ
「ランクインしたんだから素直に喜ぼうよ～」

ツバキ
「……第１回に続き票無しの私達に喧嘩売ってるんですか？」
（※ツバキ、エルフィ共に０票）

ギンガ
「そんなつもりじゃないけど……正ヒロインなのに……」

ツバキ
「（イラッ☆）そんなギンガさんの投票理由は－－－

・“最近影が薄いけど”ヒロインだから頑張ってほしい（ツバキにより一部改変）

だそうですよ」

ギンガ
「……今“影が薄い”って強調しなかった？」

ツバキ
「まっさか～～（棒読み）」

ギンガ
「……（＃＾ω＾）ピキピキ」

ツバキ
「……（＃＾ω＾）ピキピキ」

エルフィ（狂）
「テメェ等……話が進まねぇだろうが。それとも……一辺アタシに叩き潰されてみてぇか？」

ツバキ／ギンガ
「「ご、ごめんなさい！（戦闘モードのエルフィも怖かった！）」」

エルフィ
「ったく……。さて、次は第5位～♪　2人が同得点でランクイン～。得点は2ポイントだよ～」

ギンガ

「（キャラの切り替え速ッ！？）」

ツバキ
「第５位は……」

ダララララララララ……

デデン！

エルフィ
「謎の死神、石凪魂断（いしなぎたまだち）！
エターナルロリータ、ヴィータ三尉だよ～♪」

ヴィータ
「あ、あたし!?」

石凪魂断【本名初登場】
「……俺か?」

ギンガ
「予想外過ぎる2人ね」

ツバキ
「得点は同じだけど、ヴィータ三尉は1票。石凪は2票よ」

ヴィータ
「なんであたしなんだ!? あたしってこの作品じゃ嫌われ役だろ!?」

エルフィ
「ヴィータ三尉の投票理由は～

・烈や蒼にどんなに責められても自我が崩壊しない強靭な精神に感動。
彼らの正論を武器にするアンチ管理局に対して感情をむき出しにしているところが彼女らしくて良いと思いました。

だってさ～」

ヴィータ

「う／／／　……投票してくれた人、……その……ありがと／／／」

ギンガ
「普段から素直だったら烈や蒼と口論になったりしないと思うんだけど……」

ツバキ
「作者がさせないでしょうね。少なくともＳｔＳ終了までは」

魂断
「で、俺の方はどうなんだ。さっさと終わらせろ」

４人
「「「「（感じ悪ッ！）」」」」

魂断
「さっさと言え、女」

エルフィ（狂）
「……コイツ、殺っていいか？」

ジャギ！（白虎を構える）

魂断
「フン。《死神》を殺せるとでも思っているのか？」

ブウン！（デスサイズを振る）

ツバキ
「止めなさいアンタ達！　さっさと言えばいいんでしょ。石凪の理由は――

・烈や蒼を狙う理由が凄く気になるから
・烈との戦闘で物凄く強そうだと思いましたし、預言に関係してきそうで今後どのように介入してくるのか楽しみだから

だ、そうよ」

魂断
「フン。素直に最初からそう言えばいいものの。
これで俺の出番は済んだな。なら帰る」

エルフィ（狂）
「さっさと帰れ！」

魂断
「言われなくとも」

石凪がログアウトしました。

ツバキ
「……はぁ。疲れたわ」

ギンガ
「そうだね。でも、黒化した烈がいなかった分マシかも」

ヴィータ
「いたら直ぐ殺し合いになってたんじゃねぇか？」

ツバキ
「どうかしらね。にしても、烈を狙う理由って一体なんなのかしら？」

エルフィ
「さあね～。でも、烈なら絶対負けないと思うよ～」

ヴィータ
「……切り替え速いな、お前」

エルフィ
「暗～い雰囲気を長く続ける訳にもいかないからね～」

ギンガ
「ある意味うらやましい性格かも」

ツバキ
「んじゃ、次いきましょう。次は第3位！　また2人!?」

エルフィ
「得点は4ポイント～。第3位は～」

ダララララララララ……

デデン！

ツバキ
「融合騎３姉妹の長女、妹に優しいお姉ちゃん、氷結の鏡、アリステラ！
融合騎３姉妹の次女、１０８部隊の人々の癒し、雷霆の宝玉、エイジスよ！」

アリステラ

「どうもーーー！」

エイジス
「え、えっと、こんばんは」

ヴィータ
「アリスの奴、テンション高いな」

アリステラ
「だって前回と違って3位ですし、エイと一緒なんですよ！
これでテンション上がらなくてどうするんですか！！」

エイジス
「どうせならアギトも一緒がよかったんですど……流石に無理でした」

ギンガ
「まあ、それはしかたないよ」

エルフィ
「ちなみに、アリステラは2票。エイジスは3票だよ～」

ヴィータ
「んで、理由はどうなってんだ？」

ツバキ
「えっとエイジスは－－－

・和ませてくれる感じとかが有るけど、一番の理由は座談会での

「特典とかないんでしゅか？　……あぅ／／」に不覚にも萌えてしまった
・やはり噛んでしまって、恥ずかしがっている仕草が可愛いです
・可愛いから

だ、そうよ」

ギンガ
「流石家の部隊の癒し兼萌えキャラ。可愛いところとか、とか恥ずかしがるところが人気みたい」

エイジス
「ふぇっ！／／　えっと……私に投票してくれたみなさん、ありがとうございまみた！　……あぅ／／／」

４人
「「「「（ああ、癒されるなぁ～）」」」」

ヴィータ
「（六課の癒しって言えば……ヴィヴィオくらいか？）」

エルフィ
「じゃあ、次はアリステラだね～。理由は～～～

・訓練の時に凄い動きをしたり、戦闘も強いからです。他にも３姉妹の中でも長女という事もあり、しっかりしていますが、烈の前では甘えてしまうというのが可愛いです
・『氷結の鏡』という名も良いですし、妹で「兄様」と読んでい

るのに不思議ですが、烈と接している時、恋人の様に見える時があるからです。アリスは、女性陣の中で一番好きなキャラですよ。

だってさ～～」

ギンガ／ツバキ
「「……恋人みたい？　どういうこと（かな）？」」

アリステラ
「どういうことでしょうね～。ウフフ～♪」

ヴィータ
「なぁ、気の所為か？　あたしにはギンガとツバキの背後にオーラみたいなものが見えるんだけど（汗）」

エイジス
「気の所為じゃないと思みましゅ！（汗）」

エルフィ
「ちなみに～、エイジスだと妹の様に～、蒼はエイと同様に妹、又はからかっている様に見えるらしいよ～～」

アリステラ
「アオちゃんは実の妹ですけどね。それじゃあ次にいきましょーー」

ギンガ／ツバキ
「「まだどういうことか説明してもらってない（わよ）！！」」

エルフィ

「これが終わった後にゆっくりお話してね～。さて、残るは1位と2位～」

エイジス
「まだ出てない人を考えると……」

アリステラ
「大形予想ができますね」
エルフィ
「残りの2人も同時に発表するよ～～。ツバキ、よろしく～～」

ツバキ
「仕方ないわね。第2位と第1位は――」

ダララララララララ……

デデン！

ツバキ
「第２位、得点１５ポイント、票獲得数７票、１０８部隊のエース！　オールラウンダーの万能型！　紅闇の少年こと草薙烈（墓森験）！！！

第１位、得点１７ポイント、票獲得数８票、数多の技の遣い手！　毒舌は右に出る者無し！　蒼き魔女こと草薙蒼（墓森研）よ！！！」

アリステラ
「私達よりも……」

ヴィータ
「３倍以上の得点…だって！？」

ツバキ
「それでは登場してもらいましょう！　烈と蒼の登場よ！！」

烈（黒）
「久しぶりだな、ツバキ、エルフィ」

エルフィ

「おひさ〜〜」

ギンガ／ツバキ
「「（クールな烈……カッコイイ／／／／）」」

蒼
「まさかトップ3が全員草薙一家とはな」

ギンガ
「あ、蒼」

アリステラ
「アオちゃんはまさかの2冠ですね」

エルフィ
「途中までは五分五分だったらしいよ〜〜。投票してくれた読者様は〜、必ず2人の内どっちかには投票してたし〜〜」

ツバキ
「……そうね（烈が1位になっていれば……クッ！）
それじゃあ烈から理由を発表するわね。烈の理由は――

・未だに女装やらフラグやらで弄られる彼の幸の薄さに同情を覚えますｗｗｗ
　でもカッコイイ部分もあり、とても素敵なキャラクターだといつも思っていますよ。
・身内に優しい性格と、何と言うか心なしか漂ってる気がする苦労人オーラ（主に女装とか？）。でも黒モードのカッコイイ性格も好きです。

・理由は妹想いで優しいからです。最近、黒モードになるのは戦闘機人に会う時ですが、他作品では、蒼のために怒ってなるのがあり、妹想いは変わらないなと、その事でも良いなと思っています。
・やっぱ、主人公だから！！　もあるけど・・・1位になってコスプレライブ・・・２８２８２８２
・その戦闘スタイルが好きな事と唯一、蒼に勝った人物だからです。
・ヴィータを蹴散らしたのを見てカッコいいと思ったから。
・理由は黒モードで、戦闘を行っている時が格好良いからです。

という内容よ」

ギンガ
「やっぱり優しくて妹思いってところか～」

蒼／アリス／エイ
「「「だから好きなんだがな（ですけどね）」」」

ツバキ
「他には戦闘スタイル、黒化時の性格が挙げられるわね」

ヴィータ
「アイツの戦闘スタイルで考えたら、アイツが六課の中で苦戦する相手はフェイトぐらいなんだよなー」
（※エイジス無しの場合、烈じゃフェイトのスピードに追い付けないからです）

エルフィ
「格闘、遊撃、射撃、援護、補助、捕縛、指揮、何でもできるもん

ね～」

烈（黒）
「何でもはできない。できることだけしかできないさ」

アリステラ
「それ、どこの委員長さんですか？」

ギンガ
「でも残念……烈が1位だったら女装ライブができたのに！」

烈（黒）
「女装はいい加減勘弁してくれ！！」

ヴィータ以外の女性
『似合うのに！！』

烈（黒）
「ｏｒｚ」

ヴィータ
「はやてがいない分、マシだと思うぞ」

烈（黒）
「……確かにな」

ツバキ
「さて、烈の女装が似合うことについては半日くらい語りたいけど」

烈／ヴィータ

「「長ッ！！」」

エルフィ

「蒼の理由の発表にいこ～。蒼の理由は――

・なんと言っても毒舌。そして徹底されたアンチ管理局。ぺったんと言われ続け怒る彼女も可愛いです。
・主人公の烈よりチートな所とニ〇動にアップをする腹黒さ（笑）
・あの容赦のなさが、好きだからです。
・純粋にオリキャラの中で好きなキャラの一人。モデルがあの魔女だけあってこっちは２８２８できたり面白いキャラだから
・理由は「兄さん」でも「お兄ちゃん」でも、烈を受け入れていて、烈のことが大切だと、感じていることが分かるからです。
・行動力の高さと能力が好きだからです
・唯我独尊な所と言いたいことをはっきりと口に出して言えるから。
・こんな友人が居たら楽しそうだから。・・・同時に疲れそうだけど。

という内容になってるよ～」

ツバキ

「毒舌、腹黒、容赦無し、唯我独尊。この単語だけ聞けばかなり嫌なキャラに聞こえるけど」

アリステラ

「アオちゃんはそのマイナス的要素が逆にプラスになっていますね」

エイジス
「〇コ動に投稿……確か中国漁船衝突事件の影響だったね」

烈（黒）
「次は一体何をやらかすのやら」

ヴィータ
「はやてと一緒に悪巧みすることはねぇから安心だけどな」

ギンガ
「八神二佐と蒼が手を組む……最悪の組み合わせのような気がする」

蒼
「誰があんな狸と手を組むか」

ツバキ
「まあ、長々と続いたけどそういう訳で、第2回人気投票の優勝者は、前回に引き続き蒼の優勝よ」

蒼
「投票してくれた読者の方々、礼を言うぞ」

烈（黒）
「同じく、な。まさかこれほどの点数とは思わなかった」

エルフィ
「だね～～。でも～、1つ問題が残ってるんだよね～～」

全員

『？』

エルフィ
「ほら～、優勝者には特別番外編を書くって予定だったよね～。あれ、まだ内容決まってないんだ～」

ギンガ
「リクエストはなかったの？」

エルフィ
「あったけど、石凪が登場するのは無理～ってことになってて～、他に蒼の話の案は無いんだよね～。烈の話はあるんだけど」

蒼
「フム。……なら、私が内容を決めても……」

烈（黒）
「優勝権限で蒼の話じゃなく、俺の女装話とか言うなよ」

蒼
「……ちっ」

ヴィータ
「言う気満々だったのかよ」

ツバキ
「じゃあ、読者の皆様に決めてもらいましょ」

エルフィ
「次の中から選んでね～～」

？：蒼が烈に甘える話
？：蒼が模擬戦で暴れる話（コラボ可）
？：烈の女装話（ニヤニヤ
？：別作品案のお試し編
？：その他希望があれば

ギンガ／ツバキ
「「1番は却下」」

烈（黒）
「3番も却下だ。というか、お前の特典話じゃなくなってるだろ」

蒼
「私の目の保養になるという特典がある」

ヴィータ
「ズルぃな」

蒼
「何とでも言え。決めるのは読者様だ。却下する権利はないぞ（ニヤニヤ」

アリステラ
「4番って何ですか？」

エルフィ
「作者が新しい話を思い付いたらしいよ～。ちなみに無印からの話で～、無印とA'ｓを見直す暇がないから大まかな設定しか考えてないってさ～～」

エイジス
「へーー」

蒼
「という訳で読者様の方々、この5つの中から1つ選んでくれ。5番の場合はその内容も頼む」

ギンガ／ツバキ
「「（3番はいいけど…1番だけはッ！）」」

烈（黒）
「（……3番にならないことを祈るしかないか）」

エルフィ
「それじゃあ今回はこれまで～～」

アリステラ
「それでは皆さん」

全員
『次回もよろしくお願いします！』

第2回人気投票結果発表（後書き）

第2回人気投票最終結果

1位：草薙蒼　17P（8）
2位：草薙烈　15P（7）
3位：アリステラ　4P（2）
　エイジス　4P（3）
5位：ヴィータ　2P（1）
　石凪魂断　2P（2）
7位：ギンガ　1P（1）

無効票
　リインフォース　3P（1）
　ティアナ　2P（1）

（）内は投票者数を指しています。
リインフォースとティアナは理由が不十分であったため、残念ながら無効票扱いとなりました。

次回更新は……早くて来月末。国公立前期入試終了後だと思って下さい。感想を書きにいくことはできますが。

ちなみに私は現時点でE判定。

あと1ヶ月でがんばりたいと思っています。

それでは！

第４７話　「六課最強？　言うでもないと思うんだけど」ｂｙ　ティアナ（前書き）

どうも皆様、お久しぶりです。Ｋの２乗です。更新が遅れて申し訳ありませんでした。
後期入試や予備校の事とかありましてなかなか執筆に時間が取れなかったのです。

そしてそろそろ発生から３週間が経過していようとしている、東日本で起きた大地震。
陳腐な言い方しかできませんが、被災された方々のご無事や被災地の復興を祈っています。

……祈るくらいなら募金なり救援物資を送るなりしろよですよね。

最後にたいしたことではないですが修正点を一つ。

１０８部隊の一般隊員のキャラはガンダムネタについてです。
ハイネとアスランだけ名前が違ったのですが、実際のアニメでの名前に変えました。

それでは始まります。

第４７話　「六課最強？　言うでもないと思うんだけど」ｂｙ　ティアナ

「じゃあ午前の訓練はここまで。お昼休みにしよう」

「「「「ありがとうございました！」」」」

いつもの午前の訓練が終わり、ＦＷのみんなで挨拶をする。今日の訓練もキツかったな～。

「午後はみんなは１０８部隊に出向研修だから、それまでは隊舎内で自由に待機してて」

「「「「はいっ！！」」」」

さっきの挨拶でギン姉と烈兄がいなかったのは、今なのはさんが言った出向研修の件でお父さんから部隊の方に呼び戻されたから。基本、ギン姉は毎回訓練に参加していて、烈兄はアオ達と一緒にいたり部隊の事情でお父さんに呼び戻されることもあるから、参加してないのは週５回くらいかな？　午前と午後の訓練全体でだよ。

アオは基本的になのはさんの教導には参加しないで、遠くの芝生で寝そべって見てるか、さっきも言ったように烈兄達と一緒にいる。けど、たま～に参加してなのはさんや副隊長達を叩きのめすことがあるんだ。

その後で普段よりもキツイ訓練を受ける羽目になるあたし達の目にもなって欲しいんだけど……無理だよね、アオだし。

今日は朝から見かけないけど、何処にいるんだろ？　またどこか変なところに行ってるのかな？

「じゃ、お昼にしようか？」

「「「「はい！」」」」

ま、アオのことだからいっか。
それよりもご飯だ～～♪♪♪

◇◇◇◇◇

午前の訓練を終えて六課の寮に戻ると……

「むうぅーーー！　またやられたぁーーー！！」

「ヴィヴィオには難しすぎますよ」

金髪で碧と紅の虹彩異色（オッドアイ）の幼女、この間の戦闘機人と召喚師との戦闘の時に保護したヴィヴィオとアリスがいた。見たところゲームでもやっていたの？

「ヴィヴィオー」

「あ、ママ！」

なのはさんが声を掛けると、ヴィヴィオはなのはさんに気付いて直ぐにこっちに走ってきた。

「もうお昼休み？」

「うん。お昼ごはん一緒に食べようね」

ヴィヴィオ、なのはさんに懐いているわね。
ちなみになのはさんがヴィヴィオの保護責任者で、フェイトさんが後見人になっていて、ヴィヴィオは2人のことをママって呼んでる。

「皆さんお疲れ様です」

「ヴィヴィオの面倒見てくれてありがとね、アリス」

「いえいえ。兄様もアオちゃんもエイもいないので暇でしたし」

そう言ってアリスはにこやかにほほ笑む。

「そういえば、ヴィヴィオは何をやってたの？」

「ああ、それは……」

エリオに聞かれてアリスはテーブルの上で映しっぱなしになっているディスプレイを指差す。

みんなでそれを覗き込んだ先には……小さくデフォルメされたなのはさんが砲撃を撃っている姿が。

……なのはさんの表情が苦々しい。まあ気持ちはわからなくもないんだけどね。

「これって……」

「アオさんが作ったゲームですよね」

「ヴィヴィオがやりたいって言ったんですよ」

アオが作ったゲーム、タイトルは確か……『魔導桜花録』。これ、遠回しになのはさんのこと指してるわよね。

内容は縦スクロール型弾幕シューティングゲームで、プレイヤーが一般の魔導師、雑魚敵がガジェット、ボスキャラが六課の隊長陣と

いうアオが嫌がらせで作った“はず”のゲーム。とある東の方のゲームに似てるけど突っ込んじゃダメよ。

何故“はず”なのかと言うと……意外と好評だったのよ。八神部隊長とメカニック陣に（特にヴァイス陸曹）。

部隊長達の予想外の反応に、アオが「なん……だと？」って驚いていたのを思い出すわ。

ちなみに、最初から最終ステージまで全部クリアできた人はいない。1番上手かった八神部隊長でさえ、「何回やっても、何回やっても、なのはちゃんが倒せへーーーん！！」とエ○ーマンが倒せないみたいに叫んでたわ。

閑話休題。

「ねーねー、なのはママ」

「うん？　何、ヴィヴィオ？」

「なのはママとフェイトママ、どっちがつよいの？」

ヴィヴィオ、いきなりとんでもない事を聞くわね。どうしたのかしら？

「……さっきフェイトさんのステージとなのはさんのステージやってましたから、多分それが原因かと」

「説明ありがとう。でも心を読まないで」

読心術ってやつ？　使えたら便利そうよね。尋問とかに。

……ダメよあたし。今の考えはアオっぽい考え方だったわ。

「うーん？　どうだろうねぇ。比べたりしないからわかんないなぁ」

「そっかーーー」

「ごめんね～。それよりお昼食べに行こうか」

「うん！」

あたしが思考の海に沈んでいる間にいつの間にか話は終わっていた。

午後は１０８部隊との合同訓練だから、しっかり食べて休んでおこう。

◇◇◇◇◇

「やっぱなのはさんじゃない？　航空戦技教導隊の教導官で、負傷ブランクがあったとはいえ１０年飛び続けた歴戦の勇士なんだし、エースオブエースは伊達じゃないだろうしね」

「でもフェイトさんだって事件の現場に向かい続けて、手荒な現場でも陣頭に立って解決してきた一線級の魔導師ですよ！」

「空戦ランクはなのはさんもフェイトさんも同じＳ＋ですし」

あれから約１時間。昼食も終えて、今はお昼休みでＦＷのみんなとお茶を飲みながら休憩中です。
何の話をしているのかといいますと、さっきヴィヴィオが言ったなのはさんとフェイトさんのどっちが強いのか、ということについてスバルさんとエリオ君とキャロが討論しているんです。
私とティアナさんは聞いてるだけで参加はしていません。

「いや、やっぱなのはさんでしょー」

「フェイトさんも負けてないと思いますっ」

アオちゃんのお陰（いや所為でしょうか？）でちょっと不満は抱いているものの、スバルさんのなのはさんに対する憧れは変わらないみたいですね。

「ティアさんとアリスさんはどっちだと思いますか？」

なんて考えているとキャロに話を振られました。スバルさんもエリオ君もこっちを見ています。

「なのはさんだよね、ティア、アリス！」

「いやいや、フェイトさんですよね！」

「あんた達ねぇ……」

ティアナさんもため息を吐いています。

「あんた達、一つ忘れてない？」

「……何を？」

キョトンと首を傾げるスバルさん。他の2人も頭に？マークが浮かんでます。

「今日は見当たりませんけど、なのはさんとフェイトさんを同時に相手しても倒せる人がいるじゃないですか」

「「「……あ」」」

3人共ようやく気付いたみたいです。ぶっちゃけなのはさん達よりもアオちゃんの方が強いんですよね。
ちなみにそのアオちゃんは「私よりも実力が上の奴はいるさ。異常（アブノーマル）じゃチートやバグ相手は厳しいんだ」なんて言ってたことがありましたね。
でもチートやバグって誰のことでしょう？　違いもよくわからないのですが。というか他の人がそれを聞いたらアオちゃんも十分チートだって言う気がするんですが。

「それは、えっと……アオ以外で！！」

「そ、そうです！　アオさんは例外です！」

あらら。アオちゃんは例外にカウントされてしまいました。
……でもアオちゃんだから仕方ないって納得してしまいます。

「アオ以外ねぇ……ってかそれだったら六課で一番強いのって誰なのかしらね。八神部隊長や副隊長達もかなりのもんなんだし。……ヴィータ副隊長は烈に負けたけど」

「「「あーー……」」」

みなさんそういえばって顔してますね。ま、誰が強くても私には関係ないですけど。

このお茶おいしいですね。もう一杯いただきましょう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、１０８部隊。

「みんなお疲れーー。各自道具を片付けたら昼食摂って、合同訓練の間まで休憩に入って」

「「「おぉー……」」」

朝から訓練場の整備をしていたんだけど、思ったよりも時間が掛かった。
せめてもう少し人数回してくれて欲しかった。たった１０人は流石にキツイ。

「お、烈か。朝からお疲れ様だったな」

食堂に向かっている途中、カルタス二尉にばったり出会った。

「カルタス二尉。男１０人じゃ大変でしたよ」

「バサロフ陸曹やナンダー曹長も回したんだかなぁ」

「あのお二方は力持ちでしたから機材を運ぶ時は有り難かったですよ。でもやっぱりあと１０人は欲しかったです」

俺はカルタス二尉の隣に並んで歩く。

「スマンな。合同訓練用のデバイス整備と警邏に多く回さなきゃならなかったんでな。

しかし、ナンダー曹長がいるんだからヤコップ二士とブルーノ二士は回せばよかったな」

「あの二人はナンダー曹長に逆らえないみたいな感じですからねぇ」

若干苦笑しながら言葉を返す。ウチの隊はホントいろんな人がいるよね。と気楽なことを考えていると……

ピピピ！

警邏隊用の連絡アラートが鳴った。

「ん、アラート？」

カルタス二尉が通信を開いて小さなモニターを写しだす。

『こちら、サードアベニュー警邏隊。近隣の武装捜査員、応答願います』

全体通信か。嫌な予感がするんだけど。

『Ｅ３７地下道に不審な反応を発見しました。識別コード未確認（アンノウン）！確認処理をお願いします』

嫌な予感的中。未確認（アンノウン）って、恐らくガジェットかな？

「……だそうだ。疲れているところスマンが昼飯は後になりそうだな」

「そうみたいですね。警戒体制に入ります」

「頼む。いつものメンバーを連れて周囲の警戒に当たってくれ。未確認（アンノウン）には機動六課のＦＷが向かうそうだ」

「了解しました」

返事をしてその場でUターン。俺は通信でハイネやアスラン達に連絡を入れるのだった。

◇◆◇◆◇◆

『烈、探査の方はどうなってるんだ？』

「今のところは指示を出しているような不審人物は見つからない。あ、それともしガジェットが逃走するようなことになったらハイネ達に追撃に出てもらうことになるから」

烈は通信してきたハイネの問いにコンソールを叩く手を止めずに答える。

『了解了解っと。しっかし、六課のＦＷ達は凄まじいね。半年前まではＢランクなりの新人だったよなあ』

向こうの方でもＦＷの戦闘映像を見ているのか、ハイネはそんな感想を呟く。

「どこぞやの白い悪魔さんの教導のお陰じゃない？」

『マ、マイロード、本人がいないからってそういうのは言っちゃダメですよ。バレたら後々大変ですし』

あせあせと慌てて烈を咎めるエイジスの姿に烈とハイネ、２人の会話を聞いていた他の待機中のメンバーも苦笑する。１０８部隊の癒しキャラは伊達じゃない！！　ちなみに部隊外から来る大きなお友

達の接近は排除しています。全力で。

「そうだね。エイの言う通りだね」

『それにしても、相手側の目的は何々でしょう?』

イザークの小隊メンバーである、シホ・ハーネンフースが話題を変えてくる。

何もすることがないとはいえ戦闘待機中で談笑などをしていい訳ではないのだが、内容が戦闘に関わるものなので烈は気にしないことにした。

「現れているのは?型の改良型みたいだから性能テストだと思う。ほかに挙げるとすれば……」

『六課の戦闘データの収集か?　ハッ!　狡いマネをするもんだ』

「まあ狡いといえば狡いけど、情報ってのは何事に措いても重要だからね。それに相手が正々堂々正面から戦ってくれるわけでもない。それは解ってるよね、イザーク?」

『それくらい解っている!!』

『怒鳴りすぎると皺が増えるぜイザーク』

『ディアッカ貴様…!　どういうことだそれは!!』

また始まったとばかりに全員ため息を吐く。この2人のやり取りは108部隊では当たり前になっている。だが実際は2人共仲がいいので「喧嘩するほど仲がいい」というものであろう。

「はいはい。イザークもディアッカもそれまで。今は一応戦闘待機中なんだから気を引き締める」

『……ック！』

『オーケーオーケー』

渋々と悔しそうにするイザークと気の抜けた感じのディアッカ。ディアッカの態度でイザークがまた突っかかりそうだ。

「はぁ…。ゴメン、シホ。後はお願い」

『いえ、大丈夫です』

烈はイザークのフォローをシホに頼んでから通信を切る。

「さて…と、エイ。索敵範囲広げるからサポートよろしく（とはいえ見つけたとしても、恐らく相手側には物質透過能力持ちの娘がいるだろうから捕まえるのは難しいだろうね）」

『了解です！』

逃げられるだろうとは思っていてもやらない訳にはいかず、烈はサーチャーによる索敵範囲を広げるのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あれから約６時間。ＦＷの戦闘において突然ガジェットが爆発するということがあったものの、ＦＷ達は現れた全てのガジェットを殲滅した。

相手の指揮官はサーチャーでも見つからなかった。ただ「Ｂｙｅ－Ｂｙｅ　Ｓｅｅ　ｙｏｕ」という書き置きが見つかったので、指揮官には逃げられたということになる。

今はようやく現場検証が終わって、警戒態勢が解除されたところ。

それにしても――――――

グギュルル～～～～！

「……お腹空いた」

「ま、マイロード、大丈夫ですか？」

朝から動きっぱなしで、昼から何も食べてなかったからなぁ。さすがにちょっとフラつくよ。

弁当が支給されるみたいだし、俺も貰ってこよう。

「烈兄～～～♪」

と歩きながら考えていたところで、左側からスバルの声が聞こえた。

振り向くとＦＷ４人とギンガが一緒になって弁当を食べていた……姿を見て溜息が出た。スバルやギンガ、エリオの側に大量の弁当の空箱が山積みになっていたんだ。……見慣れているとはいえ、さすがにあの弁当箱の多さは見ただけでお腹一杯になりそうだ。

そんなことを思いながらも、足の向きを変えてみんなのところへ歩いて行く。

「みんな戦闘お疲れ様。あと3人とも、ゴミはちゃんと纏める」

指摘されて気付いたのか、ギンガ達は慌てて空になった弁当を纏め始める。ちゃんと中のプラスチックと外箱を分けて。

「烈もさっきまで現場検証してたんでしょ？　お疲れ。はい、お水とお弁当」

「うん。ありがとうティアナ」

そういってティアナから差し出された弁当とペットボトルの水を受け取る。

ギンガが「しまった！」とか言ったのが聞こえたような気がするけど気にしない。

ティアナが「勝った！」って顔をしているのも気にしない。

というか空腹で気にしていられない。

エイにおかずを分けながら、俺自身もゆっくり噛みながら弁当を食べる。がっついて食べるのはよくないからね。

「……で、『自分より強い相手に勝つためには、相手よりも自分のほうが強くないといけない』だっけ？」

「そうなんだよーー。なのはさんが出してくれた問題でさ、その言葉の矛盾と意味をよく考えて答えなさいって」

「そっかーー……」

いつの間にか弁当の空箱を片付け終えたギンガ達がしゃべりながら再び食事を再開していた。

……これ全部隊費で落ちるからいいけど、その分ゲンヤさんが予算の報告書とにらめっこすることになるってわかってる？

「スバル、何の話なの？」

「えっと、実はね……」

スバルからの説明を要約すると……

ヴィヴィオの何気ない一言で六課の中で誰が一番強いか（蒼は除く）ということになって、メカニック達と一緒に議論していた。その後、直接隊長達に「強さ」について聞いてみたりしていたところ、さっきの質問をなのはさんにされたとのこと。

自分より強い相手に勝つためには、相手よりも自分のほうが強くないといけない、ねぇ。

「その問題の答えはわからないけど、私としてはそれは否定するべき言葉だと思うなぁ」

数秒間考えていると、ギンガが答え始めた。

「母さんが言ってた。刹那の隙に必殺の一撃を叩き込んで終わらせるのが打撃型のスタイル」

ギンガは自身の左拳を見ながら思い出すように呟く。

「出力がどうとか、射程や速度や防御能力がどうとか、自分と相手のどちらが強かろうが、そんなの全部関係ない」

そこまで言うと一瞬で目つきが変わり、目にも留まらないような速さでスバルの首筋に手刀を繰り出し、当たる直前で寸止めする。

「相手の急所に正確な一撃。狙うのはただそれだけ。私はそう思ってる」

「うん……」

ギンガは手刀を下ろし、すぐにいつもの表情に戻る。
強さの問答ね……。蒼なら「くだらない」って言うんだろうけど。

「烈はどう思うの？」

側で聞いていたティアナが俺に尋ねてくる。

「俺はその問答に興味はないよ。事件で起こる戦闘は1対1の決闘とかじゃないんだ。勝つとか負けるとかで判断するようなことじゃないんだよ」

蒼だけじゃなくて俺もなんだよね。武装犯罪者組織を相手する時と

か1対1なんてありえない。考えることは勝ち負けじゃなくて、どう効率良く相手の戦闘能力を無効化できるか。そしてどれだけ味方に被害がでないようにできるか。

「戦いってのはね、訓練や遊びなんかじゃない。命が掛かるんだ。勝つとか負けるとか、そんなことをか考える暇があったら相手を倒す。そうしないとこっちが死ぬことだってありえる訳なんだから」

「そう……」

ティアナはどこか納得したような表情をしていた。

人それぞれ考え方は違うだろうけど、これが俺なりの考えかな。

ただ一一一一一一

――――――記憶を失った後の“草薙烈”のだけどね。

夜、突然降り出した雨の中、あたし達は六課に帰ってきた。
命が掛かってる、か。烈にしては意外な気がするわ。
さて、今日の分の報告書を書かないといけないわねー。

と、思いながら隊舎に入ると、今日1日見あたらなかったアオの姿が目に入った。
スバルがそれを見た途端、アオを大声で呼びかける。
振り返ったアオはすっごく不機嫌そうだった。

「……なんだ、スバル」

あたしの思った通り、アオはかなり不機嫌だった。
無言で寄って来るなって言ってるかのように。

「えっ！　え～っと、今日は見当たらなかったけど、どこ行ってたのかなって」

「そんなのお前には関係ないだろ」

目つきまで悪くなってるわ。エリオとキャロが怯えてるわよ。

「えっとじゃあさ、『自分より強い相手に勝つためには、相手よりも自分のほうが強くないといけない』ってどう……」

「くだらないな」

スバルがいい終える前にアオは言葉を遮った。

「“殺し合い”にそんなものは関係無い。殺すか、殺されるか、そのどっちかだ」

“殺し合い”。その言葉に反応してみんなが驚愕の表情を浮かべる。

「くだらない質問は終わりか？　なら、部屋に戻らせてもらう」

そう言ってアオはあたしの隣を通り過ぎていった。その時あたしは見逃さなかった。

――――――――――アオから血の臭いがしたことを。

第４７話　「六課最強？　言うでもないと思うんだけど」ｂｙ　ティアナ（後書き）

～～草薙一家の団欒～～

アリステラ
「どうも皆様、お久しぶりです！」

リインフォース
「本当に久しぶりだな。特に本編の内容が」

烈（通常）
「痛いとこ突いてくるよね」

リインフォース
「１月の投稿は雑談だけだったからな。あと作者のクラスメイトから『番外編が多い』という意見も来ている（※マジです）」

エイジス
「作者さんの自業自得ですよね」

アリステラ
「その話は置いといて、今回の贈り物です」

リインフォース
「バルディッシュ様よりバースドライバー、バースバスター、ゴリラカンドロイド×１００、コンドルのコアメダル、セルメダル×１０００を。
　ライ様よりマナケミア２から《炎武の闘衣》、ＩＳ（インフィニット・ストラトス）より、《ブルー・ティアーズ》を頂いた」

エイジス
「オーズは映画で新コンボ（？）が出るみたいですね～」

リインフォース
「ＩＳなら身近に適任者がいるな」

アリステラ
「えっ？　誰ですか？」

リインフォース
「やってもらえば解る。という訳で、頼むぞ２人とも」

～～～

ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

なのは（ウサ耳装備）
「もすもすひねもす～～♪　ハァ～イ、みんなのアイドル、篠ノ之束だよ♪」

～～～～～～～～～～～～

リインフォース
「ということで中の人が同じ2人にやってもらった」

エイジス
「なのはさん……」

アリステラ
「エイ、言っちゃダメ」

リインフォース
「作者曰く、初めてブルー・ティアーズを見た時は、ジムスナイパー?とストライクフリーダムを足して割ったＭＳっ娘かと思ったらしいぞ」

烈（通常）
「ジムスナイパー?なんてまた懐かしいな機体を……。

ところでよく蒼がやってくれたよね。本編でスッゴク不機嫌だったじゃん」

アリステラ
「そうですよね。なんで不機嫌だったんですか」

リインフォース
「それは次回のお楽しみということだ。エイジス、次回予告を」

エイジス
「は、はい！　次回、『第４８話　少女の怒り。拷掠の十字架』！　ふぇ！？　怒り？」

烈（通常）
「黒化の俺ならぬ、蒼の黒化とか？」

アリステラ
「まさか。アオちゃんに限ってそれはないですよ」

リインフォース
「では今回はこれまでだ。次回もよろしく頼むぞ」

第４８話　少女の怒り。拷掠の十字架（前書き）

今回遅れた理由は下の通りです。

？後半の蒼を書くのが難産だった。

？このまま書くとＳｔＳ終了後の予定に大きな矛盾が発生する部分があった。

？は今まで１回も書いたことない蒼を書く必要があったんです。…すっごく書きにくかった。でもあれが蒼本来の性格なんですよね（汗）

？はＳｔＳ後に蒼を弱化（強化？）する為。そしてとあるキャラの為に必要なことだったのです。

追記：とある私の元クラスメイトへ。

作者の個人情報を活動報告に書いたりしないで下さい。

第４８話　少女の怒り。拷掠の十字架

烈が警戒体勢を執り始めた頃、ミッドチルダから北西に数１００ｋｍ離れた山岳地帯。
その地帯の谷になっている場所に、山岳地帯には不釣り合いと言っていい研究所のような建物がひっそりと建っていた。
建物は谷底にあって人目に付きにくく、壁も周囲の風景に合わせてあって、巧妙に隠している。

そんな建物を崖の上から見下ろす一つの人影。

人影は研究所を見てひそかにクスッと笑うと、崖の上から研究所へと飛び降りた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

研究所内部の通路。

先程飛び降りた人影は、通路に置されている監視カメラに映らないように　――――　されど堂々と　――――　薄暗い通路を歩いていた。

その人物は女性だった。少し濃い桃色の長髪で、出ているところが出ているのでプロポーションは良い。
服装は紺色の浴衣なのだが、上部分は羽織りのような姿で横肩や胸の谷間が露出している。また下部分はミニスカートになっていて、浴衣にしては軽い感じの服装になっている。
どこぞやの眼帯少年が以前妹に無理矢理着させられた服にそっくりだ。

しかし、一番目立つのはプロポーションでも服装でもなく、顔の上半分を隠してしまっている中央が青色で左右が金色の仮面である。お祭りでもない限り、市街地でこんな仮面を着けていたら職務質問なり通報なりされるだろう。

一体この女性は何者なん――――――

「監視カメラもたいしたことないわね～。阿呆らしくて欠伸がでるじゃな～い。そう思わな～い？」

《……口調どころか体型まで変身魔法で変えるお前が阿呆らしいと思うがな》

「へ、変装するんだから全く別の人に成り切る為よ…」

《というのは建前で、ボンッキュッボンの体型になってみたかっただけと……》

「よし、表に出ろ。叩き潰すから」

だと思う必要はなかったですね。ペッタン……「あぁん！？」……いつもはスレンダーな体型の蒼です。どうやら今は変身魔法を使って別人に成り切っているようです。バニシングエイジの代表代理の人に。

《というかその変装はなんだ？　「綺羅星！」とでも言うつもりか？》

「綺羅星！」

蒼は右手の薬指と小指を曲げ親指から中指までを伸ばして、人差し指と中指の間に右目が入るようなポーズをとる。

《本当にやるな……》

「なら『颯爽登場！　銀河美少年！　タウ・バーーンッ！！』とでも叫べばよかったか？」

『マスター。先程から何独り言を言っているのですか？』

忘れているかもしれないが、リインフォースの声は蒼にしか聞こえない。それゆえ八雲にはさっきから蒼が独り言で勝手にボケているように聞こえるのである。

ちなみに八雲はいつものように首からぶら下げられてはおらず、ポケットの中に入っている。

「独り言だ。気にするな八雲」

『……了解しました。ですがマスター。回りの人から見たら変な人にしか思えませんよ』

「……お前も言うようになったな」

『先週、“ＳＴＡＲ　ＤＲＩＶＥＲ”は最終回でした。最近滅多に見られない王道なアニメでしたね』

「お前見てたのか！？」

八雲の返事にツッコミを入れながらも、蒼は監視カメラを避けながら歩き続ける。

《で、ここは何の研究所なんだ？》

リインフォースは阿呆な話ばかりしていられないと思い、話題を変えて蒼に問い掛ける。

《さあな。ただハッキングで調べたところ、管理局……いや、本局上層部の一部が資金や物資を提供していることは確かだ》

蒼は八雲に言われたこともあり、仮面で隠れているものの表情を真剣なものに変え、口には出さず脳内会話でリインフォースと話す。

《管理局が企業と契約しているなら資金提供は変な話ではないんじゃないか？》

《この研究所の存在はデータベースに登録されていなかった。それに、管理局が契約しているのはデバイス関連の企業が数社程度だ。関わってるのは上層部の一部って言っただろ》

正確に言うと他にも契約している企業はあるのだが、それは制服や事務用品関連といったものなので、研究所とは全く関係ないのである。

《なら何らかの違法研究所かもしれないということか？》

《流石にそこまではわからなかった。だから直接確認しに来たというわけだ》

シャラン、と蒼は広い袖の中から鉄扇を取り出し、口元を隠すように鉄扇を開く。

《変身魔法を使ってまで…か？》

《私の正体がバレて兄さんに迷惑掛けるわけにもいかないだろう?》

《ブラコンだな》

《否定はしない》

蒼はついニヤリと笑ってしまう。そのちょっと気を抜いた時。

ガコン！

何か妙な音と通路が沈む感触がした。

《《　？　》》

疑問に思って蒼が足元を見ると　――――――　通路のタイルの1枚が沈んでいた。

そして同時に周囲の明かりが真っ赤に染まり、通路全体に警報が鳴り響く。

『侵入者発見、侵入者発見、直チニ排除シマス』

《……見つかったな》

「床にスイッチがあるなんて普通気付くか……ッ！！」

ズガガガガガガガガ！！！

暢気に話す余裕など無く、通路の天井から機関銃が数台現れ、蒼に段幕の嵐を浴びせる。
蒼は鉛玉の段幕を躱しながら通路を駆け抜けるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

《……やはり誘導されている、か》

《そうみたいだな…っと》

警報が鳴り始めてからおよそ5分。未だに警報は鳴り響き、機関銃による攻撃を止むことはない。
止むことのない攻撃だが、蒼に弾丸は掠りもしていない。相手が人間ではない為、プロのプレイヤーの必須スキルである“弾丸避け”は使えないが、蒼は自身の反射神経で難無く攻撃を躱し、時には鉄扇で鉛玉を弾いている。
途中で面倒になって、袖の中から恐竜が描かれた3枚の紫色のメダ

ルや、ガチャポンのカプセルが付いたベルトを取り出しかけたが、いろいろと問題があるので諦めた。
その時リインフォースと八雲が「「お前の（マスターの）袖は四次元ポケットか（ですか）！？」」とツッコミを入れたのは余計な話。

《さっきから別れ道に来る度に、片方からだけ追加の機関銃が現れる》

「誘導するってことは向こう側にも何等かの意図があるんだろうよ。目的はわからないがな」

《罠だったらどうする？》

「打ち破る」

蒼の即答に、リインフォースは「お前らしいな」と言ってクスクスと笑う。

そんなこんなしている間に広い部屋に出ていた。いつの間にか機関銃による攻撃も止まっている。

辺りを見回していると、ガシャーン！と甲高い音が鳴り、部屋に入って来た入口が塞がれた。

《閉じ込められたな》

「……そうみたいだな」

誘い込まれた部屋は窓が一切無く四方が壁で囲まれた部屋だった。
壁の色は元々真っ白だったのだろう。だが、今は血の跡のようなもので所々が赤色に染まっている。

険しい表情で血の跡を見つめていると、突然正面と左右の壁の扉―　扉というよりシャッターに近いが　―　開いた。
扉の中は真っ暗闇で先が全く見えない。が、ただ足音だけが響いてくる。

……ドシィーン　…ドシィーン！　ドシィーン！！

《……足音が大きくなってるな》

「……来るぞ」

蒼が呟いた瞬間、足音が3つの扉からそれぞれ異なる生物が現れた。

「「「■■■■■■■■■ーーーーーッッ！！！」」」

部屋に入ると同時に、3つの生物は吠える。
蒼は現れた生物に驚きを隠せなかった。

正面の扉から現れたのは、獅子の頭に山羊の胴体、尻尾が3匹の蛇

である四足歩行型の合成獣（キメラ）。
右の扉から現れたのは、獅子の胴体に頭部と下半身が鷲で、背に一対の白い翼を持った四足歩行型の合成獣。
そして左の扉から現れたのは、全身は獅子の体だが背はに蝙蝠の翼、尾に蠍の尻尾を持った二足歩行型の合成獣だった。

《キマイラにグリフォン、それにマンティコア……神話上の生物？…ッまさか合成獣か！？》

リインフォースも現れた合成獣に動揺していた。それに対し、蒼の表情はいつの間にか別のものへと変わっていた。
怒りが込み上げているかのようで、されど合成獣を見る目付きには哀愁が漂っていた。

「……研究者の欲望の犠牲者達……か。……私と同じだな」

そして段々何かを思い出すかのように呟き始める。

「昔ならともかく、“今の私”にとっては怒りと憎しみしか込み上げてこない」

『……Ｍａｓｔｅｒ？』

「……何度も体を弄くられ、何度も薬を投与され、何度も苦痛を味わって。そして実験（ため）しては再び体を弄られる。その繰り返し」

《ッ、蒼!?》

「……私は研究体で“お兄ちゃん”は実験体。だけどあの頃はそれが当たり前で、何も疑問に思わなかった」

彼女の脳裏に浮かぶのは過去の自分と過去の兄。
“殺し名”序列第五位の名前だった時の出来事。

「何度も何度も、殺して、壊して、狂って、解(バラ)して、折って、砕いて、潰して、ちぎって、刳(えぐ)って……」

《思い出すな！　思い出すな……研ッ!!》

「……フフフ。……アハ♪　アハハハ♪」

リインフォースは蒼　――――　いや、研の独白を止めようとするが、彼女は止める事なく言葉を紡ぎ続け、次第に笑い始める。
どうにか止める方法はないかと考えていると、突然初老の男性が映し出されたモニターが合成獣達の上に現れた。

『フフフフ……驚きを通り越して笑いしか出てこないかね侵入者君?』

部屋に響いた声に気付き、蒼はモニターに映る老人を見上げる。
もし、その老人を烈かアリステラが見ていたら激怒していただろう。
なぜなら、その人物は　――――――　ルノーダ・イムラーだったのだから。
だが蒼はイムラーの名前こそ烈から聞いていたものの、顔までは知らない。

『君の目的は何かわからないが、君には感謝しているよ。なにせ君のお陰で私の合成獣達のデータが撮れるのだからね！』

「「「■■■ッ！！」」」

合成獣達は今にも蒼に襲い掛かりそうな表情であるが、イムラーの命令を待っているのか、未だ動くことはせずに唸っている。
『それではさようなら、侵入者君。せいぜいあがいてくれたまえよ』

「「「■■■■■ーーーッ！！！」」」

その言葉と同時に、合成獣達は一斉に蒼に飛び掛かった。

そして――――――

「――――アハ♪」

無邪気な子供のような小さな笑い声が、全員の耳にはっきりと聞こえた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――5分後

「ば、バカな……」

イムラーは監視カメラから映し出された映像を未だに信ることができなかった。
それは、無惨にも赤黒い血を撒き散らして肉塊へと成り果てた合成獣達。

「素手で……しかも魔力も使わずに一体どうやって!?」

映像の中で行われていた戦闘は激しいものではなかった。
ただ蒼が合成獣の攻撃を躱し、軽く頭や胴体、脚へと正拳や手刀、

足斧で反撃しただけ。

ただそれだけ。本来なら合成獣にはダメージすら与えられないような攻撃。しかしそれだけで決着はついた。

合成獣達はまるで膨らまし過ぎた風船が破裂するかのように、攻撃された部位が破裂したのだ。

頭や胴体が破裂したキマイラやグリフォンは即死。マンティコアも両足が吹き飛び、その後に手刀で首を落とされた。

たった3分の間での出来事。

既にモニターに蒼の姿は無い。間もなくここに来るかもしれないというのに、イムラーは怒りが込み上げていてそのことに気付いてはいなかった。

「合成獣達には“こいつ”を組み込んだというのに……クソッ！！」

ダンッ、と怒りにまかせて机を叩く。それと同時に彼の右手から黒い宝玉がポロっと落ちた。

しかしそのことにイムラーは気付かない。

そして――――――彼女がすぐ側までに近付いていることも。

バコンッ！！！

突然何かが壊される音がイムラーの背後から響く。
イムラーが驚いて振り返ったその先には――――

「見つけた♪」

固く閉じていたはずの鋼鉄の扉を蹴り破り、赤い浴衣が合成獣の反り血によって更に赤く染まった蒼だった。

「ヒ、ヒイィィィ！！」

イムラーは蒼の姿に恐怖を抱き拳銃を取り出して連射するが、恐怖で手が震え狙いが全く定まっていない。

弾丸を躱す必要もない蒼はゆっくりとイムラーに向かって歩きながら、魔導書（グリモワール）の鍵を開く。

そして魔法陣ではなく、“五角形のテンプレート”を足元に展開し呪文を呟き始める。

「来るな！　来るなぁぁ！！」

イムラー謎の五角形のテンプレートを気にする余裕もなく、弾切れになっていることにも気付ずに、何度も何度も引き金を弾き続ける。

そして――――

「第7章……『拷掠の十字架』」

彼女が技の名を唱えた直後、イムラーは床から現れた黒い十字架に拘束された。

両手を、脚を、まるで罪人を張り付けるかのように、イムラーは十字架に縛られる。

「な、何を……何をするつもりだ！　は、放せ！　今すぐ放せ！！」

「ん～～？　いーーや」

蒼は無邪気な笑みを浮かべながら張り付けられたイムラーに歩み寄る。

背後に先端が鋭利に尖った黒い十字架を大量に浮かべて。

「さて。いっぱい聞きたいことがあるから、ぜ～んぶ話してもらうね？　話さないと……痛いよ？」

彼女がイムラーの体に十字架を突き刺すとともに、イムラーの絶叫が部屋全体に響いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うんうん成る程。本局上層部に最高評議会かぁ」

蒼はくるくると指先で十字架を回しながら呟く。

「じゃあ、これは？」

蒼が指差したのは黒い宝玉。ホテルアグスタの時に手に入れた物と同じ宝玉のことについて尋ねるが――

「……」

針山のように全身の至る所に十字架が突き刺ささったイムラーは、意識がなく答えない。

「だんまりはダメだなぁ～」

「ギアァァァァァ！！！」

彼女が背後に浮かぶ十字架を1つ取って腕に突き刺すと、イムラーは激痛の叫び声を上げて再び目を覚ます。

この数分間幾度も繰り返されている光景。彼女が十字架を刺し、イムラーが痛みの叫びを上げる。

いっそのこと死んでしまいたいと思ってしまう苦痛。だが、イムラーは死ねない。

彼女は墓森。拷問を生業とする《虐殺師》。殺さない程度に相手を苦しめ、苦痛を与える方法など熟知している。

「なんなのかな？　かな～～？」

ぐりぐりと刺した十字架で腕の肉をえぐる。

「ヒギゥッ！　あ、あの女から、あの女と取引して手に入れたんだ

！」

「あの女って誰～？」

「な、名前は知らない！　その特殊な魔力の塊の宝玉と私の研究の一部とを交換しないかと！！　う、嘘じゃない！！」

「ふ～ん、そう。じゃあ終わり」

そう言って蒼は指を鳴らして、イムラーを拘束していた十字架を消す。

――――　助かった。

イムラーは思った。やっとこの苦痛が終わった。自分は助かるのだと。

しかし、彼女は彼を生かすほど甘くなかった。

「じゃあ、バイバイ」

「……えっ？」

彼女が再び指を鳴らすと、彼の背後の闇から何かが現れる。

「『地獄の処女＜・・・＞……

彼は背後の闇に吸い込まれて絶命し、最後まで彼女の声を聞くことはできなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――――1時間後

研究所から炎が上がっていた。
燃え上がる炎が研究機材を、イムラーを、そして研究の犠牲となった合成獣達を燃やしてゆく。
蒼はその光景を高台から見下ろしていた。

《……研》

《……蒼でいい。……大丈夫だ。もう落ち着いた》

大丈夫と言ってはいるものの、彼女の顔は今にでも吐き出してしまいそうな様子で良いとは言えない。

《……合成獣と自分を重ねてしまったのか？》

リインフォースの問いに蒼は黙ってコクリと頷く。

《私も合成獣達（あいつら）と同じ研究体だったから……薬と人体改造で

戦闘に特化された強化人間》

《……》

《だから、名前は研。研究体で研》

《蒼、お前は……っ》

リインフォースは何かを言葉を掛けようとするが、何と言えばいいかわからず口ごもってしまう。

《無理に何かを言わなくていい。今は……一人にしてくれ》

《……わかった。だが蒼、これだけは知っててくれ。私はちゃんと“お前”のことを見ているぞ》

《……ああ。ありがとう、リインフォース》

そしてリインフォースは黙り、蒼はしばらく炎を見つめた後、六課へと戻ってゆくのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

夜、六課の寮の屋上。

ＦＷ達と別れた後、蒼は雨で体か濡れるのにも関わらず、ぼーっと空を見上げていた。

まるで今日の出来事の記憶を雨で流そうとしているかのように。

「……私は……」

何か呟やこうとするも、歯の奥で引っ掛かっているかのように言葉が出てこない。

そして蒼は黙ってずっと空を見上げて続けた。

第４８話　少女の怒り。拷掠の十字架（後書き）

正直、研の性格に読者の皆様からのどんな反応が来るか怖かったりします。

こんなの蒼じゃねー、って言われそうです。次に本来の性格に戻るのは地上本部襲撃後かと。

では、今回の技の紹介です。

『拷掠の十字架』＜ごうりゃくのじゅうじか＞
使用者：墓森研
初　出：４８話
内　容：対象を拘束する大きな十字架と拷問用の小さな十字架を呼び出す。小さな十字架はカオスヘッドのものをイメージしていただければ結構です。

『地獄の処女』＜？？？？＞
使用者：墓森研
初　出：４８話
項　目：第７章
内　容：現時点では全く内容が不明の技。しかし予言にあった内容と同じ名前である。一応『拷掠の十字架』と同じで、何かを呼び出す技。勘のいい方は気付くかも。

ついでに蒼がチートかどうかって前回書いてて、そういえば蒼の魔導師ランク書いてないなぁと気付いたのでここで書きます。

蒼の魔導師ランク
◇魔力ランク　ＡＡＡ＋
（氣力保有量　　Ｓ）
◇近接技能　　ＳＳ＋
◇中距離技能　　Ｓ＋
◇遠距離技能　　ＡＡ＋
◇補助技能　　ＡＡＡ
◇希少技能　『魔導書の鍵』
（??技能）

◇単体戦技能　　ＳＳ＋
◇広域戦技能　　ＡＡＡ＋
◇集団戦技能　　Ａ
（烈とのタッグ　ＡＡＡ＋）
◇対軍戦技能　　Ｓ
◇陸戦技能　　Ｓ＋
◇空戦技能　　Ｃ
（技使用時　　ＡＡＡ）
◇総合　　Ｓ

実は魔力量はＳを越えていません。
彼女は魔力運用の方が得意なので、少ない魔力で強力な技を使おうとします。

最後に今回の頂き物はバルディッシュ様から、シャチ・コア、クジャク・コア、クジャクカンドロイド×１００、電気ウナギカンドロイド×１００、ミニ八卦炉、楼観剣・白楼剣、バスタードチルノソード、陰陽玉です。

ちなみに今回出てきた紫のメダルは昨日のオーズで出た物。先々週くらいから知ってたんですけどね。

そして次回ですが皆さん忘れるかもしれませんが、人気投票の１位特典話です。

内容はアンケートで決まりましたが、どんな話かはお楽しみに。

それでは！

第４９話　「風邪には気をつけましょうね」ｂｙ　アリステラ（前書き）

久しぶりの更新になります。

また更新が遅れて申し訳ありません。ｍ（＿）ｍ

最近スランプ気味でマジで文章が浮かばないんです。

……また予定変更すべきかなぁ。

定期更新している作者様方は凄いです。

久しぶりで上手くできた自信がありませんが、楽しんでもらえれば幸いです。

では、どうぞ。

（※前話同様、蒼のキャラ崩壊に注意）

第４９話　「風邪には気をつけましょうね」ｂｙ　アリステラ

烈やＦＷ達が改良型ガジェットとの戦闘を行い、蒼が研究所を破壊した日の翌日のこと。

ＦＷ達は午前中を昨日の戦闘の報告書を纏める為に使い、隊長陣も事務仕事に勤しんでいる。

そして昨日感情を爆発させ、一時的に昔の人格へと戻ってしまった蒼はというと……

「ゴホッ！　ゴホッ！　う～～……」

「まったく。雨に濡れて風邪引くなんて」

「……頭がガンガンする～」

風邪を引いて寝込んでいた。ベッドの横に椅子を立てて座ってる烈も呆れている。

「で、何でずぶ濡れになったりなんかしたの？」

烈がアリステラから話を聞いたところ、昨日の夜、蒼は全身ずぶ濡れになって帰ってきた。
どうしてずぶ濡れになったのか、一日中どこに行っていたのかと聞いてもだんまりだったらしい。
帰って来てシャワーは浴びたものの、今朝起きたら風邪を引いていたとのこと。

それを聞いた烈は呆れながらも、昨日の報告書なり提出書類をあっという間にゲンヤに提出し、六課へ戻ってきた訳である。
なんだかんだ言って烈もシスコンなのだ。カルタスやハイネ、ミゲル辺りがニヤニヤと笑っていたが、烈は全てスルーした。

「……（ぷい）」

「そ～う～～？」

「……答えたくない」

蒼は拗ねた子供のように顔を反らし、ガバッと掛け布団をを被る。

ため息を着きたくなると同時に、らしくない蒼の行動に烈は笑ってしまいそうになる。

「……ハッキングしたり、時々いなくなったりして、何か変なことをやってるってのはアリスから聞いてる」

「（…アリスの奴め兄さんにバラしたな）」

多分アリスの奴めって考えているんだろうなーと、蒼の思考を読み取りながら、烈は右手を布団に隠れている蒼の頭へと延ばし、布団越しにゆっくりと撫でる。

「……」

「でも、ま、俺はそれを何かと言うつもりはない。蒼がやりたいようにすればいい」

「……え？」

兄のとんでもない発言に蒼は耳を疑い、ガバッと起き上がった。

蒼自身、自分のやっていることは犯罪であると自覚はしている。罪の意識は全く感じていないが。

というよりも彼女は元々裏側の住人なのだ。法律を犯したからといっていちいち罪の意識なんて感じない。

墓森から逃げた後だって、戸籍さえ存在しない彼女達は何でも屋紛

いのことをしていた。さすがに殺しの依頼を受けるようなことはなかったが、それらの請けた仕事には法律に引っ掛かるようなことも当然あった。

だがそれは元の世界での話であって、今現在の烈は管理局員である。管理局は警察と軍隊が合わさったような組織。局員は公務員のようなものだ。

だから思ってしまう。兄は自分の立場を自覚しているのか？　仮にも法律に従って動く組織に所属しているというのに、身内の犯罪行為を見逃すのか？

それは保護してくれたナカジマ家に迷惑を掛ける行為ではないのか、と。

「――――だって蒼に何言っても無駄になっちゃいそうだし♪」

ズコーーーーッ!!!

ずっこけた。蒼は盛大にずっこけた。ベットの上でずっこけるとは器用な奴だ。

「そ、そんな理由で!?　に、兄さんはっ、私がどんな奴だと思っているんだ!!」

と一瞬頭痛も忘れてつい叫んでしまう。しかし叫び声が頭に響いてしまって、すぐに頭を押さえた。

「どんなって…んーっと、自由奔放で、唯我独尊で、ドSで、容赦なくて、バグキャラで、マッドで、つるぺたで…ｅｔｃ」

烈は丁寧に指を1本ずつ折り曲げながら数えていく。その意外と容赦ない烈の言葉に、蒼には心の矢がグサグサ刺さってゆく。

《止めて！　私のライフはもう零よ！！》

《うっさい！！》

蒼の中でニヤニヤと笑いながらリインフォースがボケる。残念だがＨＡ★ＮＡ★ＳＥ！と言ってくれる王様はいない。

《王だけに、はやてがいたらツッコミを入れてくれたかもな》

《弄られるわ！　既にお前に弄られてるけどな！！》

ボケとツッコミが繰り広げられているが、蒼とリインフォースの脳内会話に烈が気付くはずもない。

「…とまあこんな感じかな。自分の妹のことは分かってるつもりだよ」

「うぅぅ……兄さんがいじめる」

「事実でしょ。でも、今はそんな風じゃない」

「……」

いきなり雰囲気を変え、じっと目を見つめた烈に、蒼は黙ってしま

う。

「いつも自身満々で、堂々とものを言って、実力的にも精神的にも強い。だけど今はそれがない。弱ってしまってる」

見透かされるような目で見られ、蒼は思わず目を反らしたくなる。が、そうはさせないと烈は近づいて顔をこちらへと向けさせる。

「何があったのか話せとは言わない。無理に相談しろとも言わない。でもね――」

そう言って烈は蒼を抱き寄せて、左腕で抱きしめ右手で頭を撫でる。

「少しでも辛さを和らげてあげることぐらいはできるよ」

「……」

優しく自分を包んでくれる温もりに、蒼はしばらく甘えていた。そして2、3分くらい経つとゆっくり顔を上げた。

「……ねぇ、兄さん」

「……何？」

「今日だけ……。今日だけでいいから、弱い私でもいい？　ずっと甘えてていい？」

蒼は上目遣いで烈を見る。その様子は、いつものクールで堂々としたものではなく、まるで小動物のようで弱々しかった。

「ん」

烈がそう頷くと、蒼は力強く烈に抱き着いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それから数分後、２人はどうなったのかというと……

「りんご剥けたよー」

「じゃあ食べさせて。あーんって♪」

「はい、あーん……」

「あーーーん……」

「美味しい？」

「うん♪」

いちゃついて、ストロベリっていた。

というか蒼のキャラが完全に崩壊していた。

それはもう「この人だれ？」って勢いで、クールなキャラから甘えん坊の妹キャラへと変貌していた。

唯一の救いはノクタで書かなければならなくなるような展開にはなっていないことか。

なったら近親相姦というエロゲや官能小説でしか存在しないようなタグが付いてしまう。

≪エロゲなんてやったことないだろう≫

地の文にツッコミを入れない。……運命の夜とか１１の目とかやってみたいなぁ。ストーリー的な意味で。

≪Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの知識は漫画（ギルガメッシュが出た最新巻まで）と、このサイトの小説で得た知識。１１ｅｙｅ

sはニコ動の信長の野望改造プレイ動画で得た知識しかなかった作者であった≫

アニメを見る余裕やＰＳ２版、ＰＳＰ版を買う余裕は無いです。

閑話休題

さて、メタな話から元に戻して２人に視点を変えるとしましょう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「うきゅ～～～」

蒼がまるで犬のように俺の胸元でほお擦りしてくる。
最初はこの変化に戸惑った。もはや別人だったんだから。
溜まってたストレスやら鬱憤やらが爆発してしまったのか、普段の性格を微塵も感じさせずにべったり甘えてくる。

別人のようにしか思えないけど、不愉快に感じたりはしない。寧ろ懐かしく感じてしまう。

――何でだろう？　蒼のこんな姿を見るのは初めてのはずのに……懐かしく感じる。

「……暑い」

「え？」

と考えたところで蒼の呟きが聞こえ、なんかもぞもぞと動いている感じが……

「……って、蒼！　何で服脱ぎかけてるの！！」

下に目を向けると蒼がパジャマのボタンを下から外しかけてて、綺麗な肌のおへそが見えて……って違う！！

「ん～？　暑くてから汗掻いたからお兄ちゃんに汗拭いてもらおうかなって」

「（お兄ちゃん？）いやいや！　それはマズイって言うか……」

「……ダメ？」

「はぅッ！（う、上目遣いっ！？）」

≪こうかはばつぐんだー≫

……今なんか変な声が。というか作者はデジモン派じゃなかったっけ？

それよりも、まさか蒼が上目遣いを使うなんて……。スバルにアイス買ってってねだられた時にされたこともあるけど、その時と違ってかわいらしいというかギャップがというか……って、俺は何考えてるさ！！

≪れつはこんらんしている≫

また変な声が。ポケモンはもういいから！！

って、蒼がじ～～っと潤んだ目で見てるし！！

「わ、わかった。わかったから、後ろ向いて！」

「うん！」

俺が折れて了承すると、蒼は満面の笑顔をむけてから後ろを向いた。

その笑みに思わずまた見とれてしまうけど、なんとか持ち直してタオルを取りに洗面所へと向かう。

そこで一旦深呼吸をして自分を落ち着かせてからタオルを濡らして戻る。

落ち着いて冷静になれたから大丈夫。と思いきや……

「タオル持ってきたよ……って！！」

「ん～？」

戻って目に入ったのは、パジャマの上着を脱ぎ、スポーツブラまで外した蒼の姿。

つまり上半身裸ということに気付き、直ぐさまバッと目を逸らした。

頬が熱くなり顔が赤くなってるのがわかる。

「な、な、何で上全部……ッ！？」

「えっと、ブラまで汗で濡れてて気持ち悪かったから」

「だ、だからって……ああ、もう！」

一旦洗面所に戻って新しいタオルを取り、それを蒼に投げ渡す。

「せめて前ぐらい隠す！！」

「……ごめんなさい」

・・・

ううう、そんなしゅんって顔しないで！　良心が削られる…ッ
もうさっさと終わらせよう。うん、そうしよう！！

≪初心な烈の悩みは続く。続くったら続く≫

ポケモンネタはいい加減にしろーーッ！！！

ハァ、ハァ……はぁ。よし落ち着いた。

再び呼吸を整えてからベットに座り、濡れタオルを蒼の背中に当てる。

「…ひぁっ！」

「ご、ゴメン！！」

「だ、大丈夫。ちょっと冷たかっただけだから」

「そ、そう？　なら続けるよ？」

「うん」

俺は再びタオルを当ててゆっくりと蒼の背中を拭いてゆく。
蒼もさっきのように叫んだりしないので、お互い無言のままで俺の

手だけが動いている。

……女の子の肌って、けっこう柔らかいな……ってまた俺は何を考えてるんだ!!!

「あ、あの、お兄ちゃん？」

考えてることを気付かれたかと思い、思わず身構えてしまう。

「え、えっと、何？」

「その、前は自分でやるからタオル貸して」

「あ、うん。わかった」

俺は頷くと右手に持ったタオルを差し出し、蒼もそれを受け取ろうと左手で持ったタオルで前を隠したまま右手を延ばしてくる。

そして蒼がタオルを受け取った時、あるものが目に入った。

「蒼、それ……何？」

「えっ？」

俺が指差したのは蒼の右肩。右肩だけ若干周りと肌の色が違……ッ！　傷痕!?

「どうしたのその傷!?」

「ッ!!」

蒼は何を指されたのか理解したのか、直ぐさま右肩をタオルで隠した。

「こ、これは……何でもない！　何でもないの!!」

「何でもないわけないでしょ!!」

一体いつそんな傷を！　それを問いただそうとした俺は蒼の両肩をガッと掴んだ。

「きゃっ！」

しかし急に蒼に迫って肩を掴んだせいか、蒼を押し倒すような形になってしまった。

……あれ？　これっていろいろとまずくない？

何も知らない人からこの状況を見れば、半裸の妹に襲い掛かっている兄という状態にしか見えない。

しかも最悪なことに――――

「何しているんですか兄様？」

その何も知らない人が現れた。

ギギギと顔を向けた部屋の入口には、目が単色になったアリスとギンガ、顔を真っ赤にしたエイの姿が。

「はわっ！　はわわわっ！」

「ウフフフ。兄様ぁ、何していらっしゃるんですかぁ？」

「お見舞いに来たっていうのに……烈、何してるのかな？　かなぁ？」

二人共笑顔だけど目が笑ってない。ていうかギンガ、それはティアナの台詞だと思うんだけど……

「こ、これには訳が……」

「「烈（兄様）！！」」

「はいすみませんっ！！！」

言い逃れできませんでした！！

この後2時間程説教を喰らったのは別の話である。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

今私の目の前では兄さんがアリスとギンガに説教されている。
誤解だと説明すべきなんだが、いかんせん二人の殺気が強すぎて割り込めない。

≪あれはしかたないだろうよ。それにしても烈に傷のことを問いただされなくてよかったな≫

≪まあ、な≫

言える訳がない。“この傷はお兄ちゃんにつけられた”だなんて。

“お兄ちゃん”の姿と“兄さん”の姿とはまったく似ても似つかない。

似てなくて当然だ。私が“兄さん”をつくったのだから

墓森だった過去を思い出させないために。

例えそれが、“お兄ちゃん”の存在をなかったことにしようとしたことでも。

愛おしいから、愛しているから、お兄ちゃんを傷つけたくなかったから、もう苦しい目に逢ってほしくなかったから。

≪……研≫

≪何だ、リインフォース≫

≪烈はああ言ったが、これからお前はどうするつもりだ？≫

何を？　というのは、ハッキングや違法施設の破壊のことだろう。

今さっきまでは悩んでいた。迷っていた。だが、今は違う。

≪また弱くなったとしても、兄さんは受け止めてくれるから≫

≪そうか。なら――――≫

≪ああ≫

≪腐った研究者、そしてそれに関わる管理局上層部。徹底的に潰してやる！≫

既に迷いはない。

私は私の思う道を突き進む。

第４９話　「風邪には気をつけましょうね」ｂｙ　アリステラ（後書き）

今回もあとがきは無しで前回の用語解説になります。

【墓森研（はかもり　けん）】

草薙蒼の本来の人格。性格は子供っぽい故に無邪気で、残酷かつ無慈悲な狂戦士（バーサーカー）。……ヤンデレ？

体術による攻撃で相手を内側から破壊、または強力な≪技≫で一気に殺すことを好む。

また今の蒼の人格よりも重度のブラコンであり、幼少時はよく験に後ろから抱き着いたりしていた。

しかしブラコンとはいっても、蒼（研）は烈（験）を恋愛対象として見ているわけではない。

【強化人間《戦闘特化型》】

薬物投与や外科手術による肉体改造を受け、戦闘用兵器として造られた存在。

この作品においては墓森研こと草薙蒼がこれに該当する。

【強化人間《耐性特化型》】

非戦闘集団である“呪い名”との戦闘を想定されているという、あまりにも異常な考えから造られた存在。

特に《操想術師》の時宮、《病毒遣い》の奇野との戦闘を想定されており、精神干渉への耐性や毒への抵抗力が非常に強い。ただし、従来の医薬品も効果が薄いという難点もある。

この作品においては墓森験こと草薙烈が該当する。

以前の番外編でのベルフェモンの咆哮で、烈が気絶しなかったのはこのためです。

【墓森流体術】

拷問を得意とする故に体構造を熟知していることから、それらと医療技術の知識を利用して生み出された体術。

針治療を利用し人体の壷を攻撃して相手の動きを鈍らせたり、体の特定部位に氣を用いて衝撃を与え、人体を内部から破壊することができる。

研がキメラとの戦闘で行ったのは後者の方法を応用して、衝撃を内部から外部へと拡散させたものである。

わかりやすく例えれば、北斗神拳とＮＡＲＵＴＯの柔拳の両方を兼ね備えた体術。殺傷能力はかなり高い。

【五角形のテンプレート】

蒼（研）がグリモワールを使った時に現れたテンプレート。詳細不明。

リリカルなのはでテンプレートといえばナンバーズのＩＳではあるが……？

【右肩の傷】

蒼いわく、“験（お兄ちゃん）に付けられた”傷。過去に何があったのかは明かされぬまま。

【呪い名】

戦闘集団である“殺し名”と対極に位置する非戦闘集団。戦闘ス

キリは有さず、非戦闘スキルを有す。戦わずに殺す。
　たった一人いるだけでも敵味方合わせて総数以上の損害を与え、しかもたった一つの利益も生み出さないと言われる。
　強化人間の項で前述したように、洗脳や催眠術に秀でた時宮、毒遣いの奇野、武器職人の罪口などで、零崎に対する名前以外の全６名存在する。

以上、用語説明でした。

余談ですけど、作中で言ったプレイ動画のタイトルは『鍵山雛の野望』。
改造ツールを使って武将に東方やリリなのＡｓ、恋姫、１１ｅｙｅｓ、ギアス、大番長のキャラ等を登録している信長の野望のプレイ動画。所属は徳川家康で初期メンツが家康、雛、レティの３人。
一定条件を満たすと武将がパワーアップするルールが製作主の手動じゃなくて自動で発動するという謎。
高２の時はこういったプレイ動画をニコ動で見ることが多かった（中華武将祭とか軟国志とか）

次回ですが、どうしようか迷ってます。

当初の予定ではリクエストされた話を含めて８話書いてから、『その日、機動六課』編に入ろうと思っていたのですが……今のような更新速度だと、いつＳｔＳ編が終わるかわかりません。

私は浪人生ですので、１１～１２月辺りになると更新できなくなるでしょうし。

プロット自体は最終章序盤の最後までできているんですけどね。

いっそのこと2~3話に減らしてさっさと進めてしまおうかとも考えています。

皆様の意見をお聞きしたいです。

では次回、第５０話　「好評、酷評。どっちだと思う?」ｂｙ　蒼駄目な作者ですが、これからもよろしくお願いします。

第５０話　「好評、酷評。どっちだと思う？」ｂｙ　蒼（前書き）

約２ヶ月半ぶりの更新……

ホントに申し訳ございません。

第５０話　「好評、酷評。どっちだと思う？」ｂｙ　蒼

――ＰＭ　９：３０

勤務時間も過ぎ、仕事を終え、風呂に入るなりシャワーを浴びるなりして１日の汗を洗い流しているような頃。

蒼とティアナは女子寮外れの森の中でお互いナイフを持って戦っていた。

キィィィン！！

刃は落としてあるものの本物のナイフであるが故に、金属同士が打ち合った高い音が夜の森の中に響き渡る。

「ほら、まだまだいくぞ」

蒼は右手に持ったナイフを投げ上げ、一瞬で逆手に持ち替えてナイフを下から高速で振り上げる。

「くッ！！」

ティアナはかろうじて身を引いて攻撃を避ける。そして直後に、負けじと自身の持つナイフを蒼に向け突き出すが……

「遅い！」

ガキィィィィン！！！

蒼はティアナのナイフの腹に自身の刃を強く当て、ティアナのナイフを弾き飛ばした。
弾かれたナイフは回転しながら飛び、近くの木に深く刺さる。

「しまっ……！！」

ティアナが一瞬注意を逸らしたことを蒼は逃さなかった。蒼は一瞬でティアナの懐に入って胸倉を掴み、足払いを食らわせてバランスを崩し地面に叩き伏せた。

「いっッ！」

「チェックメイトだ」

蒼は馬乗りになって両足でティアナの腕を押さえ付け、ナイフを首筋に突き付ける。

「はぁ、またあたしの負けか」

ティアナはため息をついてあっさりと負けを認めた。

「当たり前だ。たかが2週間程度で私を越えれる訳がないだろう」

「それでも悔しいわよ」

「悔しめ悔しめ。悔しいから、頑張って、努力して、そして強くなればいい。お前はそれができる」

フッと笑ってそう言った蒼はナイフを仕舞って立ち上がる。

「才能に溺れ、魔法の力を過信し、自分の力に慢心している高町達なんかよりも、お前は強くなれる」

「それなのはさん達に直接……言ってはないけど、実力の差を見せつけてたわね」

「あいつ等は慢心していることに気付いていないからな。気付かせるには直接口で言うよりも、圧倒的な実力差で叩き潰してプライドをへし折ってやるのが効果的だ」

蒼はツカツカとナイフが飛ばされた方へ歩いてゆき、木に突き刺ったナイフを引き抜いて、刃の腹を指でなぞってからさっきと同じ腰のホルスターへと仕舞う。

「あいつ等の戦い方ってのはな、圧倒的な魔力で相手を一方的に蹂躙することだ。

まるで子供がゲームの中で高性能の武器を使って雑魚を何千と倒して、強くなった気になるみたいにな。

最近のゲームは難易度が低い物が多いからな……っと、話が逸れた。

まあ、何が言いたいのかというと、餓鬼みたいな戦いしかできない奴に負ける私じゃないんだよ」

「あんたのそれこそ慢心っていうんじゃないの？」

「私の力は絶対じゃない。確かにアレ（グリモワール）は規格外だ。だが、アレは何でもできるわけじゃない。副作用もあるし、不可能なことだってある」

「（……副作用？）」

立ち上がって背中の草を払っているティアナの隣を通り過ぎ、蒼は寮の方へと向かって歩いてゆく。

「私は異常だが無敵でも最強でもない。身体能力は高いが魔力は多い訳じゃない。私は自分の力がどれくらいのものか理解して、状況に合わせて最適な戦い方をしているだけだ」

「自分の力を理解し、状況に最適な戦いをする、か。……そうすればあたしもあんたに勝てるのかしら？」

「それはお前の努力次第だ。なんならモチベーションを上げる為に賭けでもするか？
そうだな……お前が私に勝てたら何か好きなことを1つだけ聞いてやる」

「へぇ、それは面白そうね。じゃあ、あたしが勝ったら烈を貰おうかしら？　あんたみたいなのが妹なのは御免だけど」

「私もお前みたいなのが姉になるのは御免だよ」

お互い軽口を言いながら寮へと歩いてゆく。
蒼によるティアナの戦闘訓練。これが先々週の撃墜事件が起こった日以降の夜の出来事である。

◇◆◇◆◇◆◇

・・・

ティアナのしごきを終え、軽くシャワーを浴びてから私達は寮の休

憩室へと向かっていた。
ああ、ティアナに肩の傷痕は見られてないぞ？

「……で、どんな感じなの？」

「ど、どんなって……」

ん？　何か話し声が聞こえるな。スバル達でもいるのか？
そんなことを思いつつ休憩室に入る。そこにいたメンバーはナカジマ姉妹にマリエル、あとロングアーチのアルトの４人。アルトがギンガに詰め寄っているような状態だった。

「あ、ティアー、アオー」

スバルがこちらに気付いたのか手を振っている。
相変わらず犬みたいなやつだな。手を振るほどのことじゃないだろうに。

「おーー。話題の人物の妹の登場だーー」

アルトもこちらに気付いて何か言ってくる。
話題の人物の妹……兄さんの話でもしていたのか？　そう疑問を抱きながら、軽く手を振り返して自販機でスポーツ飲料のボタンを押す。

「アルトさん、烈の話でもしてたんですか？」

「そうそう」

ティアナはギンガの左隣に座って話に交じる。ちなみにU字型のソファーで、右からマリエル、アルト、スバル、ギンガの順で座っているぞ。

「草薙曹長ってけっこう有名なんだよねー」

「そうなのか？」

3分の1ほどペットボトルの中身を飲んだところで聞こえてきた意外な言葉に、思わず私は聞き返してしまった。

「武装隊とか本局からもよくスカウトが来てるみたい」

「地上の方では108部隊のエースって言われてて有名だよ」

兄さんってそんなに有名だったのか？　その割りには階級が低い気もするが……いや、自衛隊だったら17で曹長とかエリートってレベルじゃないだろうし。（※詳しくは知りませんが、20代後半ぐらいで軍曹ならエリートだとか）

１９の八神や高町が二佐や一尉ってくらいだからな。世界観や価値観の違いが原因か。

「それにーー……」

そう言ったアルトがとある雑誌をティアナに渡した。タイトルは…月刊管理局？

私とティアナは互いに顔を見合わせて首を傾げるが、とりあえず雑誌をめくってみる。

ティアナがページをめくっているのを後ろから覗き込んでいると、あるページでめくる動きが止まった。

そのページの名前は――

「「人気男性局員ランキング？」」

「そ。実力良し、顔良し、性格良しの優良物件ってことで女性局員からの人気が高いんだよ」

グシャッ、とティアナが雑誌を強く握った音がしたような気がする。

というより兄さんモテるのか。大半の奴なら眼帯でビビるんだがなぁ。

しかし優良物件……言われる方からすれば物扱いされてるようで不

愉快にしか感じないな。

えーなにに。ランクインしてる局員の名前は　――――　トレーズ・クシュリナーダ、ハイネ・ヴェステンフルス、アスラン・ザラ……ん？　クロノ・ハラオウン？　クロノ……誰だっけ？　異星人や妖怪と戦う、実写映画化した某黒い玉の主人公か？　なんでもかんでも実写化すればいいと思っているのかねぇ。宇宙戦艦ヤマトの実写版はいろいろとごっちゃになってたしな。

っと話題が逸れたな。そんな括弧つければ顔文字になりそうな奴の名前はどうでもよくて、兄さんの名前は……あった。フムフム。

第７位：草薙　烈
階級：陸曹長
所属：陸士１０８部隊

理由）

・人当たりがよくて、しっかりしてて頼りになる。
・訓練校での事件の時のことが忘れられない。
・可愛い顔に眼帯っていうギャップに萌える！！
・男の娘キタ――――（ ゜∀ ゜）――――！！！

後半の理由がちょっとアレだが……ものすごく同意する。ギャップ萌え……だと？　私は何故今まで気付かなかったんだ！！　……済まない。暴走した。しかしよく見てみると。

「１０８部隊所属が３人もいるんだな」

ＴＯＰ１０の中で１０８所属は兄さん、ヴェステンフルス、ザラの３人。これは多過ぎないか？

「１０８部隊は別名『地上のイケメン部隊』って呼ばれるくらいだからね」

それはたまたまなのか？　それとも広告塔として仕組まれた部隊なのか？

「なのはちゃん達の出身世界で行われる、バレンタインってイベントが知れ渡った時が大変だったなぁ……」

「あははは……」

マリエルとギンガが遠い目をしている。一体何があったというんだ。

「一昨年の話なんだけど、女の子がそのバレンタインって日に押しかけ来て、その日の業務がぜんぜんできなかったってお父さんが言ってた」

「だから去年のその日は隊舎から男性局員がいなくなるようにしたらしいわ」

スバルにティアナ、解説ご苦労。
スバギン姉妹の父親も大変ってことか。
某怪盗を追い掛けるインターポールの警部よりはマシだが。

――待てぇ～～～い、ル○～～～ン！！

――あばよとっつあ～～ん！

……なんか変な電波を受信した。

「で、そんな草薙曹長といつも一緒にいて他の女性局員から嫉妬を買っているギンガさんは、一体どんな関係なのか！　ってことを聞いてたの」

「アルトさんって……噂好き？」

「だろうな。こいつが兄さんに気があるようには思えないし」

「あ、うん。草薙曹長が好きとかそういうのはないからその点は大丈夫」

今「ホッ」って声が聞こえたな……。アルトの方に顔を向けると、あいつも安堵のため息が聞こえていたのが、私を見てニヤリとしている。私はその意味を察してニヤリと頷いて――

「「で、兄さん（草薙曹長）に惚れてるギンガ（さん）。質問の答えは？」」

「うえぅっ！？」

私とアルトの連携プレーに顔を真っ赤にして奇声をあげるギンガ。

「ついでにティアも言ったらー？　ティアも烈兄のこと好きだし」

「ちょっ！　スバル！？」

同じく顔を赤く染めて叫ぶティアナ。ナイスだスバル。

「おやおや？　さっき兄さんを貰うとかほざいたのはどこの誰だったかな～？」

「ッ！　ア～～オ～～～～～ッ！！」

私の追撃でまるでリンゴのように赤くなるティアナ。

後ろからグッジョブとアルトの声が聞こえたので私もサムズアップしておいた。

マリエルがクスクスと笑っていたのはご愛郷である。

◇　◇　◇　◇　◇

「烈のことは……その、好きですよ。……優しいですし」

あれから数分。ギンガとティアナが落ち着いたので、今はギンガの話を聞いている。
他人の恋バナが気になるというやつなのか、他のみんなはしっかりと耳を傾けている。
私と同じ年頃で身近にいる異性は兄さんだけからな。恋とかよくわからん。

「よく笑ってて、隊のみんなとも仲がよくて。八方美人ってわけじゃないんですけど」

「ギン姉の言う通りかな。ヴィータ副隊長とは反りが合ってないみたいだけど」

「ヴィータ副隊長だけじゃないよスバル。エイちゃんに目をつけてる聖王教会の人相手とか、私やなのはちゃん達以外の本局の人には

けっこう冷たいし」

冷たい兄さん……男の娘の兄さんが冷たい目付きで相手を蔑んでそれに悶えたM気質持ちの相手はハァハァと息を荒く……済まない、また暴走した。

「う～ん……噂じゃ『どんな相手でも常に笑顔で紳士的』って言われてるんだけど、やっぱ噂と現実は違うってことかぁ」

「あながち間違ってるとは言えないですけど、烈にも嫌いな相手がいますし、逆に烈を嫌う人もいない訳じゃないですし、誰にでもそんな態度はとれないですよ。さすがに初対面の相手は丁寧に対応するでしょうけど」

兄さんを嫌う人ねぇ。兄さんの実力やモテることに嫉妬する奴や、マリエルの言った聖王教会の奴――特に狂信者――とか辺りか。

「そっかー……それはさておきギンガさん！　肝心な草薙曹長を好きになった理由はズバリ何!?」

ビシッ！という擬音が背景に現れそうな勢いでアルトが尋ねる。最初に会った時から兄さんに惚れてるのはわかってたが、確かに理由は気になるな。

「えっと……その……最初はちょっと気になるなぁ、ってくらいだったんです」

語り始めたギンガの言葉を聞き漏らさぬように、アルト達は黙って話を聞く。

「４年前の空港火災の時に会って、いろいろあって一緒に住むことになって」

空港火災？　何の事だかさっぱりわからんな。今度調べてみるか。

「一緒に魔法について勉強したり、料理したり、格闘技の練習にも付き合ってくれて」

スバルが懐かしいなー、と言って頷いている。

「自覚はなかったんだけど、意識し始めたのは烈とスバルが訓練校に入って、一緒にいる時間が少なくなってからかな？」

お！っというアルトの期待の篭った声が聞こえる。

「訓練校の篭城事件の時、烈が人が変わったようになって、犯罪者

グループを1人で全滅させた後に急に倒れて、凄く不安になっちゃったりもしました」

「3年前の篭城事件って、あの？　しかも1人で全滅させたって……ええ！？」

曲絃術は屋内のような閉鎖された空間でその力を最大限に発揮できるからな。

逆に草原や荒野のような周囲に何もない、つまり糸を引っ掛けるものがない場所では空間的な攻撃ができないからあまり役に立たないんだがな。

だが、誘導弾と同じような術式を魔力絃に組込めば、何もない場所でも空間的な攻撃ができるかもしれないな。兄さんがそれをやってるのかは知らないが。

それはさておき、兄さんが人が変わったようになった？　……まさかな。

「そーいえば、ティアが烈兄にデレたのもその時だったよねーー？」

「ほうほう。ちなみにどんな風に？」

「ティアはずっと烈兄にランスターさんってしか呼ばせなかったんだけど、あの日から名前で呼んでいいって言っｔ……「すぅばぁルぅぅう！？」……痛い痛い！！　ティアごめんなさーい！！」

ティアナが拳でスバルの頭を挟んでぐりぐりと。

「つまりその時に草薙曹長はティアナにフラグを立てたと」

「ティアナだけじゃなくて他にも数人烈君に惚れた子がいたらしいよ。全員フラれたらしいけど」

「そして兄さんがそいつ等をフッた前例があるから、好意を抱きつつも、フラれる又は現在の関係が壊れるのが怖いからなかなか告白できずにいて、だけど何もしないまま関係が進展しないのは嫌だから、今は地道に好感度を稼ごうとしている。ってことかギンガ？」

「うぅ……その通りです……」

エイジスから聞いた話だとティアナも地道な好感度稼ぎをしてるらしいな。私がこの間いなかった時、ギンガが弁当食いまくってる隙に、兄さんに弁当渡してたとか。

「ところで蒼。その、何とも思わないの？」

「何がだ？」

マリエルの質問の意図がわからず、私は首を傾げる。

「烈君のことを好きだって思ってる子がいて、妹として何とも思わないのかなって」

「……ああ、そういうこと」

アルトに悪ノリして話を聞いていたが、本音を言えば……認めない。
私がブラコンだからとかいうことは関係ない。
初めてギンガに会った時にも思ったが、ギンガは“兄さん”である“表”の部分しか見ていない。“裏”の“お兄ちゃん”の部分は――――見ていない。
記憶を失ってるから“お兄ちゃん”を知ることができないとしても、“お兄ちゃん”の記憶が元に戻ればギンガが“お兄ちゃん”を拒絶するのは目に見えている。

戦いの中に身を置きながら、人一人殺すこともできない。
そんな奴が『殺し名』を受け入れるわけがない。
だから、認めない。

「兄さんとの関係を認めてほしいのなら、まずは私を倒すことだな」

だが、そんなことを言えるはずもない。
私は“草薙蒼”らしい反応をするだけ。

「それってどっちかって言うと、妹に恋人ができた時の兄の反応みたいな……」

「蒼はやっぱりブラコンだねぇ」

「蒼に勝つ……う～ん」

「ティア、アオ相手に勝てる？」

「今のあたしじゃ無理ね」

みんなそれぞれ反応しているが私の耳には入ってこない。

私はただ、無感情だけれども時折優しさを見せる“お兄ちゃん”の姿を思い出していた。

第５０話　「好評、酷評。どっちだと思う？」ｂｙ　蒼（後書き）

今回は前半が前々から言ってたティアナの訓練、後半が烈の評価という話でした。

ティアナは地道に着々と蒼によって魔改ｚ……鍛えられています。
描写はありませんでしたが近接戦闘以外には、体力強化、反射神経の強化、殺気に慣れる等の訓練をしています。
射撃や幻術については全く訓練していません。だって蒼が教えられませんから。蒼は近接型なので、射撃や幻術には詳しくありません。とりあえずニアＳランクで異名が付けられるくらいまで強化しようかと考えています。

で、後半は烈の評価のお話。
最初はエリキャロに融合機姉妹も出そうとしてましたが止めました。理由は人数が多過ぎてグダグタになりそうだったからです。
最後の部分、次回過去編っぽい雰囲気で終わりましたが、過去編はＳｔＳ終了後です。

ところで今回の男性局員ランキング、にじファン内の2～3作品で3位がユーノ、2位がクロノってのを見かけたことがあるんですけど、それって公式設定なんですかね？

ドラマＣＤの内容だったら持っていないのでわからないんです。
……まぁ、公式だとしても気にしない方向でお願いいたします。

烈以外は適当ですし、他に誰がランクインしているとか決めておりませんので、誰が何位かとかはご想像にお任せいたします。

次回はタイトルは未定ですが、内容はアリスとの出会いを予定しております。

亀更新ですがこれからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5053j/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜紅闇の少年と機人の少女〜

2011年11月16日21時17分発行